昭和十年一月十五日印刷
昭和十年一月二十日發行

國譯一切經　釋經論部　一

編輯兼發行者　岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者　長尾文雄
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所　日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所　大東出版社
東京市芝區芝公園地七號地十番
振替東京一九四七一番
電話芝（三二）一一一六番
　　　（三〇）四〇〇番

製本所　兩角製本所

是の比丘は驚き怖れ、坐を起ちて內に自ら思惟し、中夜に復た睡る。是の神は復た現じて、十頭の口中より火を出し、牙爪は劍の如く、眼は赤くして炎の如し。顧みて語り、將さに從りて此懈怠の比丘を捉へんとし「此處にて懈怠すべからず、何を以ての故に爾るや」と、時に比丘は大に怖れ、卽ち起つて思惟し、專精に法を念じて、阿羅漢道を得たり。是を自ら精進、不放逸の力を强めば能く道果を得と名く。

復次に、是の精進は自ら身を惜まずして果報を惜み、身の四儀たる坐・臥・行・住に於て常に精進を懃め、寧ろ自ら身を失ふとも道業を廢せず。譬へば火を失せるに瓶水を以て之に投ぐるは、唯だ火を滅するに存して、瓶を惜まざるが如し。仙人師、弟子に敎へて偈を說いて言へるが如し。

『決定して心悅豫すること、大果報を獲たるが如く、

願ふ事を得る時の如くなれば、乃ち此の最妙なるを知る。』

是の如き種種の因緣(により)精進の利を觀じて、能く精進を增益せしむ。

復次に、菩薩は諸の苦行を修す。若し人有つて、來つて頭・目・髓腦を求索すれば、盡く能く之を與へ、而して自ら念じて言く「我は忍辱・精進・智慧・方便の力あるも、之を受くること尙苦し、何に況んや、愚騃なる三塗の衆生をや。我當に此衆生の爲の故に、勤修精進して早く佛道を成じて、之を度脫せん」と。

ば、事として得ざる無く、佛道に至ることを得て、終に虚しからざるなり」と。是の如きの種種の因緣によりて、精進の利を觀じて、增益することを得。是の如きの精進を、佛は、有時には說いて欲と爲し、或時には精進と說き、有時には不放逸と說きたまへり。譬へば人の遠く行かんと欲するに、初めて去らんと欲する時は、是を名けて欲と爲し、行を發して住まらざる、是を精進と爲し、能く自ら勸勵して、行事を稽留せしめざる、是を不放逸と爲すが如し。是を以ての故に知りぬ、欲は精進を生じ、精進生ずるが故に不放逸なり。不放逸の故に能く諸法を生じ、乃至佛道を成ずるを得るを。

復次に、菩薩は生老病死を脫せんと欲し、亦た衆生を度脫せんと欲して、常に應に精進して、一心に不放逸なるべし。人が油鉢を擎げて、大衆の中を行くが如く、現前一心に、不放逸なるが故に、大に名利を得。又、偏閣・嶮道にて、若くは繩に懸り、若くは山羊に乘るが如し。此の諸の惡道にては、一心不放逸なるを以ての故に、身安隱なることを得。今世にては大に名利を得るなり。道を求めて精進なるも、亦復是の如し。若し一心に不放逸なれば、願ふ所皆得らる。

復次に、譬へば水流能く大石を決するが如し。不放逸の心も亦復た是の如く、專ら方便を修して常に行じて廢せざれば、能く煩惱・諸結使の山を破る。

復次に、菩薩は三種の思惟あり、「若し我、作さずんば果報を得ず。若し我自ら作さずんば他より來らず。若し我作さば終に失はず」と。是の如く思惟して、當に必ず精進すべし。佛道の爲の故に勤修專精して、放逸ならざれ。一の小なる阿蘭若[一]の如きは、獨り林中に在つて坐禪して而も懈怠を生ぜり。林中に神あり、是れ佛弟子なり、一つ死屍の骨の中に入つて、歌儛して來つて、此偈を說いて言く、

『林中の小比丘、何を以てか懈廢を生ずる。［われ］晝來るを若し畏れずんば、夜も復た是の如くして來らん。』

【一】阿蘭若。既註の如く寺院の事なれども、阿蘭若迦 Araṇyaka と云ふ時には、その住人となれば、恐らくそれならん。

これ上智の棄てゝ遠ざかる所、中人は時として復た近づき、下愚は之が爲に沒すること、猪の樂んで溷に在るが如し。

若し世中の人と爲つては、三事皆廢失す。(すなはち)欲樂及び財利、福德は亦復た沒す。若し出家の人と爲つては、則ち二事を得ず、生天及び涅槃これなり、名と譽との二も俱に失す。是の如き諸の廢失の、其の所由を知らんと欲せば、一切の諸の賊の中にて、懈怠の賊に過ぎたるは無し。是の衆くの罪を以ての故に、懶心を作すべからず。馬井二比丘[九]の如きは、懈怠にして惡道に墜ち、佛を見、法を聞くと雖も、猶亦た自ら免れず。』

是の如き等の種種の懈怠の罪を觀じて、精進し增長す。

復次に、精進の益を觀ずるに、今世・後世の佛道・涅槃の利は、皆精進に由る。

復次に、菩薩は、一切の諸法は、皆空にして、所有なきことを知れども、而も涅槃を證せず、衆生を憐愍して諸の善法を集む、是れ精進波羅蜜の力なり。

復次に、菩薩は一人にして、獨り等侶なし。精進の福德力を以ての故に、能く魔軍及び結使の賊を破り、佛道を成ずることを得。既に佛道を得れば、一切諸法に於ては、一相無相にして、其の實は皆空なれども。而も衆生の爲に、諸法の種種の名字、種種の方便を說いて、衆生の生老病死の苦を度脫し。將に滅度せんとする時は、法身を以て、彌勒菩薩・摩訶迦葉・阿難等に與え、然して後、金剛三昧に入つて、自ら身骨を碎いて芥子の如くならしめ、以て衆生を度して精進力を捨てず。

復次に、阿難が諸の比丘の爲に、七覺意[一〇]を說いて、精進覺意に至れるが如し。佛、阿難に問ひたまはく、「汝、精進覺意を說くやと」。阿難言さく、「精進覺意を說く」と是の如く。三たび問ひたまふに、三たび答ふ。佛、卽ち坐より起つて、阿難に告げたまはく、「人能く修行を愛樂して精進すれ

【九】馬井二比丘。馬は六群の惡比丘中の一人たる馬師即ち Aśvaka 阿說迦ならん。

【一〇】七覺意。又は七菩提分、七覺支と云ふ。七科道品の第六。修道に於て思惑を斷ずるはこの力による。定慧均等ならしむる方法なり。(一)擇法(二)精進、(三)喜(四)輕安、(五)念、(六)定(七)行捨の七覺支なり。

して有らざるなし。既に衆法を總べて、別に自ら門あり。譬へば無明使は一切諸使の中に遍在するも、而も別して不共の無明あるが如し。

問うて曰く、菩薩は一切の佛法を得んと欲し、一切の衆生を度せんと欲し、一切の煩惱を滅せんと欲するに、皆意の如くなることを得。云何なれば、精進を增益して、而して能く佛を得ること。譬へば、小火は大林を燒くこと能はず、火勢增益すれば能く一切を燒くが如くなるや。

答へて曰く、菩薩は初發心より「當に一切衆生をして歡樂を得せしむべし」との誓願を作し、常に一切の爲に自ら身を惜まず。若し身を惜まば、諸の善法に於て成辦すること能はず、是の故に精進を增益す。

復次に、菩薩は種種の因緣を以て懈怠の心を呵し、精進に樂著せしむ。懈怠の黑雲は、諸の明慧を覆ひ功德を呑滅し、不善を增長す。懈怠の人は、初は小しく樂むと雖も、後は則ち大いに苦む。譬へば毒食の如し。初め香味なりと雖も、久しければ則ち人を殺す。懈怠の心は諸の功德を燒く。譬へば大火の諸の林野を燒くが如し。懈怠の人は諸の功德を失ふ。譬へば賊を被つて復た遺餘なきが如し。偈に說くが如し。

『應に得べくして而も得ず、已に得たるも復た失ふ。
旣に自ら其の身を輕んずれば、衆人も亦た敬せず。
常に大闇の中に處して、諸の威德と尊貴の智慧の法あること無く、此の事永く以て失す。
諸の妙道の法を聞くも、以て身を益すること能はず、是の如きの過失は皆な懈怠の心に由る。
增益の法を聞くと雖も、上に及ぶを得ること能はず、
是の如きの過罪は、皆な懈怠の心に由る。
業を生じ、理を修めず、道法に入らず、是の如きの過失は皆な懈怠の心に由る。

亦た遠路を渉るに、懃むれば、則ち必ず能く達するが如し。
若しくは、天上に生ずるを得ると、及び涅槃の樂を得ると、是の如きの因緣は、皆な精進力に由る。天(の力)に非ず、因無きに非ず、自ら作すが故に自ら得。
誰か智慧ある人にして、自ら勉勵せざらんや。
三界の法の熾然なること、譬へば大炎火の如し、有智決斷の人は、乃ち能く免れ離るること得。
是を以ての故に、佛阿難に告げたまはく、
正しく精進して、是の如く懈怠せざれば、直ちに佛道に至る、勉強し懃修して地を穿てば、能く泉に通ず、精進も亦是の如し、求めて而も得ざること無し。
能く行道の法の如く、精進して懈らずんば、
無量の果は必ず得られ、此の報は終に失せざらむ。』

復次に、精進の法は、是れ一切の諸の善法の根本にして、能く一切諸の道法、乃至阿耨多羅三藐三菩提を出生す、何に況んや小利に於てをや。毘尼の中に說くが如し。「一切諸の善法、乃至阿耨多羅三藐三菩提は、皆精進にして放逸ならざるより生ず」と。　復次に、精進は能く先世の福德を動發す。雨が種を潤して能く必ず生ぜしむるが如し。此も亦是の如し。先世の福德の因緣ありと雖も、若し精進なくんば則ち生ずること能はず、乃至、今世の利すら尙ほ得ること能はず、何に況んや佛道をや。　復次に、諸の大菩薩は、衆生を荷負して一切の苦、乃至、阿鼻泥犁[七]の中の苦を受くとも、心亦た懈らず、是を精進と爲す。　復次に、一切の衆事は、若し精進なければ、則ち成ずること能はず。譬へば下藥は巴豆を以て主と爲すが如し。若し巴豆を除けば、則ち下力なし。是の如く[八]意止・神足・根力・覺・道は、必ず精進を待つ。若し精進なければ則ち衆事辦ぜず。戒の如きは、唯だ八道に在つて餘處に在らず。信は根力に在つて、餘處には則ち無く。精進の如きは、處と

【七】阿鼻泥犁。阿鼻地獄(Avici-Naraka)。

【八】意止。神足・根。意止は亂心を止むる意味にて四念處のこと。神足は四如意足。

の如くんば乃ち能く禪定と智慧とを得、是の二事を得れば、則ち衆事皆な辦ぜん」と。是を以ての故に精進は第四なり、名けて禪定と實智慧との根と爲す。上の三の中には精進ありと雖も、少なきが故に說かず。

問うて曰く、有人の言く、但だ布施・持戒・忍辱のみを行ずるが故に大福德を得、福德力の故に願ふところ皆な得、禪定・智慧は自然にして至る、復た何ぞ精進波羅蜜を用ひんや」と。

答へて曰く、佛道は甚深にして得難し。布施・持戒・忍辱の力ありと雖も、要らず精進を須ひて、甚深の禪定・實智慧・及び無量の諸佛の法を得。若し精進を行ぜずんば則ち禪定を生ぜず、禪定生ぜざれば、則ち梵天王の處にすら生ずるを得ず、何に況んや佛道を求めんと欲するをや。

復次に、人あり、[四]民大居士等の如きは、無量の寶物を得んと欲すれば、則ち意に應じて皆な得。[五]頂生王の如きは、四天下に王たり。天は七寶及び、須ゆるところの物を雨らし、釋提婆那民は座を分ちて與に坐せり。是福ありと雖も、然も得道すること能はず。[六]羅頻珠比丘の如きは、阿羅漢道を得と雖も、乞食すること七日にして得ず、空鉢にして還り、後禪定の火を以て、自ら其の身を燒いて般涅槃せり。是れを以ての故に知りぬ、但だ福德力のみの故に道を得るに非ず。佛道を成ぜんと欲せば、要らず須らく勤めて大に精進すべきを。

問うて曰く、菩薩は精進に、何の利益あるを觀じて、而く勤修して懈らざるや。

答へて曰く、一切の今世・後世の道德利益は皆な精進に由つて得らる。　復次に、若し人自ら身を度せんと欲せば、尚當に懃め急に精進すべし。何に況んや、菩薩は誓願して一切を度せんと欲するをや。精進を讃ずる偈の中に說くが如し。

『人あり身を惜まず、智慧の心決定し、法の如く精進を行ぜば、求むる所、事として難きは無し。
農夫が懃めて修むれば、收むる所、必ず豐實なるが如く、

【四】民大居士(Meṇḍaka)鴦伽國の長者、五大福德者の一、昔、毘婆尸佛に七寶の象屋を献ぜし功德にて、倉庫、空しき事なし。
【五】頂生王(Māndhātṛ)。
【六】羅頻珠(Losaka-tiṣya)。前生の惡業のため憍薩羅の漁夫の子に生れ、幼少にして、父母に捨てられ、出家せるも、舍利弗に拾はれ、常に充分の食を得る能はず。

有人は、持戒の因緣の故に、生老病死を離るることを得と聞いて、此中に心を生じ、口に、「我、今日より復た殺生せず」と言ふ。是の如き等は卽ち是れ戒なれども、豈に精進波羅蜜を須ゐて、而も能く行ぜんや。忍辱の中の如きは、若くは罵り、若くは打ち、若くは殺すに、或は畏るるが故に報ぜず、或は力少なく、或は罪を畏れて、或は善人の法を修して、或は道を求むるが爲の故に、默然として報ぜず、これ皆必ずしも精進波羅蜜を須ひずして、乃ち能く忍ぶなり。今諸法の實相を知ることを得んと欲して、般若波羅蜜を行ずるが故に禪定を修行す。禪定は是れ智慧の門なり。是の中に應に懃修精進して一心に禪を行ずべし。

　復次に、布施・持戒・忍辱は是れ大なる福德にして、安隱快樂なり、好き名譽ありて、欲する所の者を得。既に此の福利の味を知ることを得ば、今增進して更に妙勝なる禪定と智慧とを得んと欲す。譬へば井を穿つに、已に濕泥を見れば轉た增進を加へて、必ず水を得んと望むが如し。又火を鑽つて已に煙を見ることを得れば、倍〻復た力を勵まし、必ず火を得んと望むが如し。佛道を成ぜんと欲するに、凡そ二門あり。一は福德、二は智慧なり。施と戒と忍とを行ずる、是を福德門と爲し。一切諸法の實相、摩訶般若波羅蜜を知る、是を智慧門と爲す。菩薩は福德門に入つて一切の罪を除き、願ふ所皆得。願を得ざる者は、罪垢が遮るを以ての故なり。智慧門に入れば、則ち生死を厭はず、涅槃を樂はず、二事は一なるが故なり。今摩訶般若波羅蜜を出生せんと欲す。般若波羅蜜は、要らず禪定門に因る、禪定門は必ず大精進力を須ゆ。何となれば、散亂心は諸法の實相を見るを得ること能はざること、譬へば風中の然燈は物を照すこと能はず、燈、密室に在れば、明かにして必ず能く照すが如し。是の禪定智慧は、福を以て願求すべからず、亦た麁觀の能く得るところに非ず。要らず須らく身心精懃にして、急に著して懈らざるべし、爾れば乃ち成辦す。佛の說きたまふ所の如し。「血・肉・脂・髓は皆竭き盡くすとも、但だ皮・骨・筋あらば、精進を捨てさらしめよ。是

『諸法の性は常に空なり、心亦空に著せず、是の如く法を能く忍す、是れ佛道の初相なり。』是の如き等、種種に、智慧門に入り、諸法の實相を觀じ、心退かず、悔いず、諸觀に隨はず、亦た憂ふる所なく、能く自利利他を得。是を法忍と名く。是の法忍に三種あり、行、清淨にして、忍辱の法を見ず、己身を見ず、罵辱する人を見ず、諸法に戯れず、是の時を清淨の法忍と名く。是事を以ての故に、菩薩は般若波羅蜜の中に住して、能く羼提波羅蜜を具足すと說く。(そは)不動不退なるを以てなり。云何なるを不動不退と名くるや。瞋恚を生ぜず、惡言を出さず、身に惡を加へず、心に疑ふ所なし。菩薩は般若波羅蜜の實相を知つて、諸法を見ず。心に著する所なきが故に、若くは人來つて罵り、若くは楚毒殺害を加ふるも、一切能く忍ぶ。是故に般若波羅蜜の中に住して、能く羼提波羅蜜を具足すと說く。

初品第二十六……毘梨耶波羅蜜義

【經】身心精進にして、懈息せざるが故に、應に毘梨耶波羅蜜を具足すべし。

【論】毘梨耶[三]

問うて曰く、精進の如きは、是れ一切善法の本にして、應に最も初に在るべし、今何を以ての故に第四なるや。

答へて曰く、布施・持戒・忍辱は世間に常に有り。客主の義の如きは、法として應に供給すべし、乃至畜生も亦布施を知る。或は人あり、種種の因緣の故に能く布施す。若くは今世の爲め、若くは後世の爲め、若くは道の爲の故に布施するも、精進を須ゐず。持戒の如きは、惡を爲す人を、王法が罪を治むれば、便ち自ら畏懼し、敢へて非を爲さざるを見る。或は性善にして諸惡を作さざるあり。有人は、今世に惡を作せば、後世に罪を受くと聞いて、怖畏するを以ての故に、能く戒を持つ。

【三】毘梨耶 Virya 割註あり（秦に精進と云ふ」とあり。

實には無なるを、而も顚倒して見るを以ての故なり。若し此の有無の見に墮せずんば、中道實相を得ん。云何にして實を知るか。過去の恒河沙等の諸佛菩薩の知りたまふ所、說きたまふ所、未來の恒河沙等の諸佛菩薩の知りたまふ所、說きたまふ所、現在の恒河沙等の諸佛菩薩の知りたまふ所、說きたまふ所の如し。信心大なるが故に、疑はず、悔いず、信力大なるが故に、能く保ち、能く受く、是を法忍と名く。

復次に、禪定力の故に、心柔軟淸淨なれば、諸法の實相を聞いて、心に應じて與に會し、信著深く入つて、疑なく悔なし。所以いかんとなれば、疑悔は是れ欲界繫の法にして麁惡なるが故に、柔軟の心の中に入らざるを以てなり。是を法忍と名く。

復次に、智慧力の故に、一切諸法の中に於て種種に觀ずるに、一法として得べき者あること無し。是の法を能く忍じ、能く受けて、疑はず悔いざる、是を法忍と名く。

復次に、菩薩は思惟すらく、「凡夫人は、無明の毒を以ての故に、一切諸法の中に於て轉相を作し、非常に常想を作し、苦に樂想を作し、無我に我想あり、空を實ありと謂ひ、非有を有と爲し、有を非有と爲す。是の如き等、種種の法の中に轉相を作す。」と。聖實の智慧を得、無明の毒を破り、諸法の實相を知り、無常・苦・空・無我の智慧を得、棄捨して著せず、是の法を能く忍ぶ、是を法忍と名く。

復次に、一切諸法を觀ずるに、本より已來、常に空にして、今世も亦た空なり。是の法を能く信じ、能く受くる。是を法忍と爲す。

問うて曰く、若し本より已來、常に空にして、今世も亦空なりとする、是を惡邪と爲す。云何なれば法忍と言ふや。

答へて曰く、若し諸法の畢竟空を觀じて、相を取り心に著すれば、是を惡邪見と爲す。若し空を觀じて著せず、邪見を生ぜざれば、是を法忍と爲す。偈に說くが如し、

是れ則ち無生なり。若し生なくんば、則ち住滅なく、若し生住滅なければ、則ち心數法なく、心數法なければ、則ち心不相應なし。諸行に色も無色法もなきが故に、無爲法も亦無し。何となれば有爲に因るが故に無爲あり、若し有爲なくんば、則ち亦た無爲も無ければなり。

復次に、「作法が無常なるを見るが故に、不作法は常なることを知る」と。若し然りとせば、今作法は是れ有法なりと見れば、不作法は應に是れ無法なるべし、是を以ての故に常法は不可得なり。

復次に、外道及び佛弟子が常法を說くに、同あり異あり。同とは虛空と涅槃となり。外道は「神・時・方・微塵[一]・冥初[二]あり」と言ふ。是の如き等を名けて異と爲す。又佛弟子は「非數緣の滅は是れ常なり」と說き、又復た、「因緣を滅する法は常なり、因緣生の法は無常なり」と言ふ。摩訶衍の中にては常法は法性・如・眞際なり。是の如きの種種を名けて、常法は虛空・涅槃なりと爲す。先の讃菩薩品の中に說くが如し。神及び時・方・微塵も亦上に說くが如し。是れを以ての故に諸法は有なりと言ふべからず。若しくは諸法の無に二種あり、一には常無と、二には斷滅の故に無なるとなり。若くは先有今無、若くは今有後無ならば、是れ則ち斷滅なり。若し然れば、則ち因緣なし、因緣なければ、應に一物の中より一切の物を出すべく、亦應に一切の物中に、都て所出なかるべし。後世の中も亦是の如し。若し罪福の因緣を斷ずれば、則ち貧富貴賤の異、及び惡道畜生の中に墮すること有るべからず。若し常無なりと言はば、則ち苦集滅道なし。若し四諦なければ、則ち法寶なく、則ち八賢聖道なし。若し法寶・僧寶なければ、則ち佛寶なし。若し是の如くんば則ち三寶を破る。

復次に、若し一切の法は實に空ならば、則ち罪福なく、亦た父母なく、亦た世間の禮法なく、亦善なく惡なけん。然れば則ち善惡は同門、是非は一貫にして、一切の物は盡く無なること、夢中に見る所の如くならん。若し實に無なりと言はば、是の如きの失あり。此の言、誰か當に信ずべき者ぞ。若し顚倒の故に有と見ると言はば、一人を見る時に當り、何を以てか、二三を見ざるや。其の

【一】微塵。萬有を構成する原子。
【二】冥初、萬有の始原。

も亦た爾なり。水の如きは濕相と爲り、寒ければ則ち轉じて堅相と爲る。是の如き等の種種、悉く皆な相を捨つ。　復次に、諸の論議師の輩は、有を能く無ならしめ、無を能く有ならしむ。諸の賢聖の人、坐禪の人は、能く地を水と作し、水を地と作らしむ。是の如き等の諸法は皆な轉ずべし、十一切入の中に說くが如し。

復次に、是の有見は貪欲・瞋恚・愚癡・結縛・鬪諍の爲の故に生ず。若し此の欲恚等の生ずる處あらば、是れ佛法に非ず。何となれば佛法の相は善淨なるが故なり。是を以ての故に實に非ず。

復次に、一切の法に二種あり、色法と無色法となり、色法は分析して乃ち微塵に至れば、散滅して餘すところ無し。檀波羅蜜品の破施物の中に說くが如し。無色法は五情の知らざる所なるが故に、意情の生住滅する時に觀ずるが故に、心に分あることを知る。分あるが故に無常なり、無常なるが故に空なり、空の故に有に非ず。彈指の頃に六十時あり、一一の時の中に、心に生滅あり。相續して生ずるが故に、是れは貪心、是れは瞋心、是れは癡心、是れは信心・淸淨の智慧禪定心なりと知る。行者は心の生滅を觀ずること流水燈焰の如し。此を空智門に入ると名く。何となれば、若し一時に生じ餘時の中に滅するならば、此の心は應に常なるべし。何となれば、此の極少時の中には滅なきが故なり。若し一時の中に滅なくんば、終始、滅なかるべし。

復次に、佛說きたまはく、「有爲法は皆三相有り」と。若し極少時の中に生じて而も滅なしとせば、是れ有爲法に非ざらん。若し極少時の中に心、生・住・滅するならば、何を以てか但だ先に生じて後に滅し、先に滅して後に生ぜざる。

復次に、若し先に心あつて、後に生ずる有らば、則ち心は生ずるを待たず。何となれば先に已に心あるが故なり。若し先に生有らば、則ち生の生ずる所なし。又生滅の性は相違す。生には則ち滅あるべからず、滅する時には生あるべからず。是の故に一時も不可得なり。異(時)も亦た不可得なり、

なり。佛法は則ち然らず、因縁の故に非有非無と說くと雖も、著を生ぜず。著を生ぜざれば則ち壞す可からず、破す可からず。諸法は若くは有邊、若くは無邊、若くは有無邊、若くは非有無邊、若くは死後有去、若くは死後無去、若くは死後有去無去、若くは死後非有去非無去なり。「是の身は是れ神」、「身は異なり神も異なる」(など)も亦是の如く、皆實ならず。六十二見の中に於て諸法を觀るは、亦た皆な實ならず。是の如きの一切を除却して、佛法の淸淨不壞相を信じ、心に悔いず轉ぜざる、是を法忍と名く。

復次に、有無の二邊もて諸法の生時と住時とを觀ずれば、則ち有見の相と爲り、諸法の老時と壞時とを觀ずれば、則ち無見の相と爲る。三界の衆生は多く此の二見の相に著す。是の二種の法は虛誑にして實ならず、若し實に有相なれば則ち無となるべからず、何となれば今無にして先有ならば則ち斷の中に墮するを以てなり。若し斷なれば是れ則ち然らず。　復次に、一切の諸法は、名字和合する故に、之を謂つて有と爲す。是の故に名字和合して、生ずる所の法は不可得なり。

問うて曰く、名字より生ずる所の法は不可得なりと雖も、則ち名字の和合あり。

答へて曰く、若し無法ならば、名字は誰が爲にか和合せん、是れ則ち名字なきなり。

復次に、若し諸法は實有ならば、心識を以ての故に(その)有を知るべからず。若し心識を以ての故に有を知るならば、是れは則ち有に非ず。地の堅相の如きは、身根を以て身識が知るが故に有。若し身根なくして身識のみが知れば則ち堅相なし。

問うて曰く、身根と身識とが若くは知り、若くは知らざるも、而も地は常に是れ堅相なり。

答へて曰く、若くは先に自ら堅相あるを知り、若くは他より聞いて、則ち堅相あることを知る、若し先に知らず聞かざれば、則ち堅相なし。　復次に、地、若し常に是れ堅相ならば、其の相を捨つべからず。凝酥・蠟蜜・樹膠の如きは、融くれば則ち其の堅相を捨てて濕相の中に墮す。金銀銅鐵等

諸法は無常なるべからず。

問うて曰く、汝は佛法の中にては、常も亦た實ならず、無常も亦た實ならずと言ふも、是の事は然らず。何となれば、佛法の中には常も亦た實、無常も亦た實なり。常とは數緣盡き、非數緣盡けるものなり。虛空は生ぜず住せず滅せざるが故に、是れ常相なり。無常相とは、五衆は生、住、滅する故に無常相なり。汝は何を以てか、常、無常は皆な實ならずと言ふや。

答へて曰く、聖人に二種の語あり。一は方便語、二は直語なり。方便語とは人の爲に因緣と爲るが故なり。人の爲とは、衆生の爲に、是れは常、是れは無常と說くなり。對治悉檀の中に說くが如し。「若し無常と說かば、(これ)衆生が三界に樂に著するを拔かんと欲して、佛は、「何を以てか衆生をして、欲を離るゝことを得せしめん」と。思惟したまひ、是の故に無常法を說くなり。偈の如し。

『若し無生法を觀ずれば、生法に於て離るゝことを得、若し無爲法を觀ずれば、有爲に於て離るゝことを得。』

云何なれば生生を因緣和合と名くるや。無常にして自在ならず、因緣に屬して、老病死の相、欺誑の相、破壞の相ある、是を生生と名く。則ち是れ有爲法なり。對治悉檀に說くが如し。常・無常は實相に非ず、二は俱に過なるが故なり。若し諸法は有常に非ず、無常に非ずとせば、是を愚癡論となす。所以いかんとなれば、若し有に非ずとせば則ち無を破し、若し無に非ずとせば則ち有を破し、若し此の二事を破すれば、更に何法の說く可きか有らん。

問うて曰く、佛法は常に空相の中にては、有に非ず無に非ず。空は有を除くを以て空なり。空は無をも遮る、是を非有・非無と爲す。何を以て愚癡論と言ふや。

答へて曰く、佛法の實相は受けず著せず。汝の非有非無は受け著するが故に、是を癡論と爲す。若し非有・非無なりと言はゞ、是は則ち說く可く、破す可し。是れ心の生處にして、是れ鬪諍の處

く、諸法は空なりと雖も、亦た斷ぜず、亦た滅せず、諸法は因縁相續して生じて、亦た常に非ず。諸法には神なしと雖も、亦た罪福を失せず。心一念の頃に、身の諸法・諸根・諸慧は轉滅して停まらず、後念に至らず、新新に生滅して、亦た無量世の中の因緣業を失せず。諸の衆・界・入の中は、皆な空にして神なし。而も衆生は五道の中に輪轉して生死を受く。是の如き等の種種の甚深微妙の法は、未だ佛道を得ずと雖も、能く信受して疑はず悔いざる。是を法忍と爲す。

復次に、阿羅漢辟支佛は生死を畏れ惡んで、早く涅槃に入らんことを求む。菩薩は未だ佛と成ることを得ざれども、而も一切智を求めんことを欲し、衆生を憐愍し、了了に分別して、諸法の實相を知らんと欲し、是の中に能く忍ぶ。是を法忍と名く。

問うて曰く、云何に諸法を觀じて實相を得るや。

答へて曰く、諸法を觀知すれば、瑕隙あること無し、破す可からず、壞すべからず、是を實相と爲す。

問うて曰く、一切の語は皆答ふ可く、破すべく、壞すべし。云何んぞ破壞す可からざるもの、是を實法と爲すと言ふや。

答へて曰く、諸法は破す可からざるを以ての故に、佛法の中には一切の言語の道を過ぎ心行の處滅し、常に不生不滅にして、涅槃の相の如し。何となれば、若し諸法の相は實有なれば、後に無となるべからず。若し諸法は先に有りて、今無くんば、卽ち是れ斷滅なるが故なり。復次に、諸法は是れ常なるべからず、何となれば、若し常ならば、卽ち、罪なく・福なく傷殺せらるゝこと無し。亦た施命もなく、亦た修行の利益もなく、亦た縛もなく、解もなく、世間は則ち是れ涅槃ならん。是の如き等の因緣の故に、諸法は常なるべからず。若し諸法は無常ならば、則ち是れ斷滅にして、亦た罪なく、福なく、亦た增損なく、功德業の因緣、果報も亦た失せん。是の如き等の因緣の故に

我は當に更に餘道を求むべし」と。佛、癡人に告げたまはく、『汝は本と我と共に要誓して、「若し十四の難に答へなば、汝は我が弟子と爲る」とせしや』。比丘の言さく、「不なり」。佛の言はく「汝は癡人なり。今何を以てか、若し答へずんば、我が弟子と作らずと言ふや。我は老病死の人の爲に法を説いて濟度す。此の十四難は、是れ鬪諍の法なり。法に於て益なく、但だ是れ戲論なり。何ぞ問を爲すことを用ひん、若し汝が爲に答ふとも、汝が心に了ぜず、死に至るまで解けず、生老病死を脫するを得ること能はざらん。譬へば人あり、身に毒箭を被るが如し、親屬は醫を呼んで、爲に箭を出して藥を塗らんと欲するに、(醫は)便ち言く、「未だ箭を出す可からず、我先づ當に汝が姓字・親里・父母年歲を知り、次に箭は何れの山より出在し、何の木、何の羽を以て箭を作り、鏃は是れ何人か爲り(つく)是れ何等の鐵なるかを知らんと欲す。復た弓は何の山の木、何の蟲角なるかを知らんと欲す。復た藥は是れ何れの處に生じ、是れ何の種名なるかを知らんと欲す。是の如き等の事を、盡く了了に之を知つて、然る後に汝が箭を出し、藥を塗ることを聽(ゆる)さん」と。佛、比丘に問ひたまはく、「此の人は此の衆事を知ることを得て、然して後に箭を出す可きや不や」と。比丘の言さく、「知ることを得べからず。若し盡く知ることを待たば、此は則ち已に死せん」と。佛の言はく「汝も亦た是の如し、邪見の箭に愛の毒塗られて、已に汝が心に入れり、此の箭を拔かんと欲して我が弟子と作れり。而るを箭を出すことを欲せず、方に世間の常・無常、邊・無邊等を求め盡さんと欲す。之を求めて未だ得ざるに、則ち慧命を失して、畜生と同じく死して、自ら黑暗に投ぜんとす」と。比丘は慚愧して深く佛語を識り、卽ち阿羅漢道を得たり。　復次に、菩薩は一切智人と作(な)らんと欲せば、應に一切の法を推求して、其の實相を知るべし。十四難の中に於て滯らず、礙らず。其れ是は心の重病なりと知つて、能く出で能く忍ぶ、是を法忍と名く。　復次に、佛法は甚深にして清淨微妙なり。種種無量の法門を演暢すと、能く一心に信受して、疑はず悔いざる、是を法忍と名く。佛の言ふ所の如

を緣じ、法を緣じ意識を緣ず。一切の法は可緣の相の故に一と言ふ。　復次に、有人言く、一切の法は、各皆一なり。一に復た一あるを名けて二と爲し、三の一を名けて三と爲す。是の如く乃至千萬、皆是れ一なり、而も假名して千萬と爲す。　復次に、一切の法中には相あるが故に一と言ひ、一の相なるが故に名けて一と爲す。一切の物は名けて法と爲し、法の相なるが故に名けて一と爲す。是の如き等の無量の一の門は、異相を破して、一に著せざる、是を法忍と名く。

復次に、菩薩は一切法を觀じて二と爲す。何等か二なる。二は内・外の相に名く、内外の相の故に、内は外相に非ず、外は内外に非ず。　復次に、一切の法は有・無の相なるが故に二と爲す。空と不空、常と非常、我と非我、色と非色、可見と不可見、有對と非有對、有漏と無漏、有爲と無爲、心法と非心法、心數法と非心數法、心相應法と非心相應法。是の如きの無量の二門。一を破して、二に著せざる、是を名けて法忍と爲す。

復次に、菩薩は一切法を觀じて三と爲す。何等をか三と爲す。下と中と上と、善と不善と無記と有と無と非有非無と、見諦斷と思惟斷と無斷と、學と無學と非學非無學と、報と非報と非報非有報となり。是の如きの無量の三門。一を破して異に著せざる、是を名けて法忍と爲す。　復次に、菩薩は未だ無漏道を得ず、結使未だ斷ぜずと雖も、能く無漏の聖法、及び三種の法印を信ず。一には一切有爲の生法は無常等の印、二には一切の法は無我の印、三には涅槃實法の印なり。得道の賢聖の人は、自ら得、自ら知る。菩薩は未だ得道せずと雖も、能く信じ能く受く、是を法忍と名く。

復次に、十四難の不答の法中に於て、有常・無常等の礙なく、中道を失せざるを觀察し、是の法を能く忍ず。是を法忍と爲す。一比丘の如きは、此の十四難に於て、思惟觀察すれども通達すること能はず、心に忍ずること能はず、衣鉢を持して佛の所に至り、佛に白して言さく、「佛よ、能く我が爲に十四の難を解いて、我が意をして了ぜしめば、當に弟子と作るべし。若し解くこと能はずんば、

活き、小兵に値遇すれば則ち死するが如し。　復次に、菩薩の智慧力は、瞋恚に種種の諸悪あることを觀じ、忍辱に種種の功德あることを觀ず。是の故に能く結使を忍ぶ。　復次に、菩薩は心に智力あつて能く結使を斷ずれども、衆生の爲の故に久しく世間に住し、結使は是れ賊なりと知る、是の故に忍んで隨はず。菩薩は此の結の賊を繫いで、縱逸ならしめずして而も功德を行ず。譬へば賊あるも、因緣を以ての故に殺さず、堅く一處に閉ぢて、而して自らは事業を修するが如し。　復次に菩薩は實に諸の法相を知るが故に、諸の結使を以て惡と爲さず、功德を以て妙と爲さず。是の故に結に於て瞋らず、功德を愛せず、此の智力を以ての故に、能く忍辱を修す。偈に說くが如し。

『菩薩は諸の不善を斷除して、乃至、極微をも滅して餘すこと無し。大いなる功德の福は量あること無く、造るところの事業にして辨ぜざるは無し。

菩薩は大智慧力の故に、諸の結使に於て能く惱まされず、是の故に能く諸の法相を知り、生死と涅槃と一にして二なき〔を知る〕。』

是の如きの種種の因緣もて、未だ得道せずと雖も、諸の煩惱法の中に於て能く忍ぶ、是を法忍と名く。

復次に、菩薩は一切の法に於て、一相にして無二なることを知る。一切の法は、可識の相の法なるが故に一と言ふ、眼識は色を識り、乃至、意識は法を識る。是れ可識の相の法なり、故に一と言ふ。　復次に、一切の法は可知の相なるが故に一と言ふ、苦法智・苦比智は苦諦を知り、集法智・集比智は集諦を知り、滅法智・滅比智は滅諦を知り、道法智・道比智は道諦、及び善世智を知り、亦た苦集滅道と虛空は、智の緣の滅に非ざるを知る。是れ可知の相の法なり、故に一と言ふ。　復次に、一切の法は可緣の相なるが故に一と言ふ。眼識及び眼識相應の法は色を緣じ、耳識・鼻識・舌識・身識も亦是の如し。意識及び意識相應の法は亦た眼を緣じ、亦た色を緣じ、亦た眼識を緣じ、乃至意

是の如き等の軍衆は、出家の人を厭沒す。
我は禪の智力を以て、汝が此の諸軍を破り、佛道を成ずるを得已つて、
能く一切の人を度脫せん。』

菩薩は此に於て、諸軍を未だ能く破らずと雖も、忍辱の鎧を著て、智慧の劍を捉り、禪定の盾を執つて、諸の煩惱の箭を遮る。是を內忍と名く。復次に、菩薩は諸の煩惱の中に於て、應當に忍を修して、應に結を斷ずべからず。何となれば若し結を斷ずれば、失ふ所甚だ多く、阿羅漢道の中に墮し、根の敗せると異なること無ければなり。是の故に遮して而も斷ぜず、以て忍辱を修して結使に隨はず。

問うて曰く、云何にして結使を未だ斷ぜずして、而も(之に)隨はざること能ふや。

答へて曰く、正思惟の故に、煩惱ありと雖も、而も能く隨はざるなり。復次に、思惟して、空と無常との相を觀ずるが故に、妙好の五欲ありと雖も諸結を生ぜず。譬へば國王に一大臣あり、自ら罪を覆藏して、人の知らざる所なるが如し。王言く、「脂なき肥羊を取り來れ、汝若し得ずんば當に汝に罪を與ふべし」と。大臣は智ありて、一の大なる羊を繫ぎ、草穀を以て好く養ひ、日に三度狼を以て之を畏怖す。羊は養を得て肥ゆと雖も、而も脂なし、羊を牽いて王に與ふ。王は人を遣はして之を殺すに、肥えて而も脂なし。王問ふ、「云何にして爾るを得しや」と。答ふるに上の事を以てす。菩薩も亦是の無く、無常・苦・空の狼を見て、諸の善使の脂を消し、諸の功德の肉を肥えしむ。

復次に、菩薩は功德福報無量なるが故に、其の心柔軟にして、諸の結使薄く、忍辱を修し易し。譬へば師子王の林中に在つて吼ゆるに、人あり、之を見て、頭を叩いて哀を求むれば、則ち放ち去らしむるも、虎豹の小物は爾ること能はざるが如し。何となれば師子王は貴獸にして、智ありて分別すれども、虎豺は賤蟲にして、分別を知らざるが故なり。又壞軍は、大將に値ふことを得れば則ち

次に、菩薩は思惟すらく、「一切世間は皆苦なり、我當に云何んぞ中に於いて、樂を求めんと欲すべき」と。 復次に、菩薩は思惟すらく、「我は無量劫の中に於いて、常に衆苦を受けて利益する所なく、未だ曾つて法の爲にせざりき。今日は衆生の爲に、佛道を求む。(されば)此の苦を受くと雖も當に大利を得べし。是の故に外・內の諸の苦は、悉く當に忍んで受くべし」と。 復次に、菩薩は大心に誓願す、「阿鼻泥梨の苦の若きも、我は當に之を忍ぶべし。何に況んや小苦にして、而も忍ぶ能はざらんや。若し小を忍ばずして、何ぞ能く大を忍ばん」と。是の如く、種種の外法の中に忍ぶを名けて法忍と曰ふ。

問うて曰く、云何に內、心法の中に能く忍ぶや。

答へて曰く、菩薩は思惟すらく、「我未だ得道せず、諸結未だ斷ぜずと雖も、若し當に忍ばずんば、凡人と異ならず、菩薩たるに非ざるべし」と。復自ら思惟すらく、「若し我、得道して、諸の結使を斷ぜば、則ち法として忍ぶ可き無からん」と。 復次に、飢渴寒熱は是れ外の魔軍なり、結使煩惱は是れ內の魔賊なり。我は當に此の二軍を破つて、以て佛道を成ずべし。若し爾らずんば佛道は成ぜず。說くが如くんば、佛苦行すること六年、魔王來つて言く、「刹利の貴人よ、汝は千分生の中に正しく一分の活あるのみ、速に起つて國に還り、布施し福を修して、今世・後世の、人中・天上の樂道を得べし。汝唐しく勤苦することを得べからず。汝若し軟言を受けず、迷を守つて起たずんば、我當に大軍衆を將ゐ來つて、汝を擊破すべし」と。菩薩言く、「我は今當に汝が大力の內軍を破るべし、何に況んや外軍をや」と。魔言く、「何等か是れ我が內軍なる」答へて曰く、

『欲は是れ汝が初軍にして、憂愁を第二と爲し、飢渴は第三軍、渴愛を第四と爲す。
睡眠は第五軍にして、怖畏を第六と爲し、疑悔は第七軍、瞋恚を第八と爲す。
利養虛稱を九となし、自ら高うして人を蔑しむを十となす。

答へて曰く、增損なしと雖も、而も自ら惱亂憂苦を生じ、菩薩の道を害す。是の故に應當に忍ぶべし。　復次に、但だ衆生を殺惱するが故に罪を得るのみに非ず、惡心の爲に因緣と作るが故に罪あり。所以いかんとなれば衆生を殺すと雖も、無記心なれば是れ便ち罪なし。衆生を慈念すれば、與ふる所なしと雖も大に福を得。寒熱風雨は增損すること無しと雖も、然も能く惡意を生ずるを以ての故に罪を得。是を以ての故に應當に忍ぶべし。　復次に、菩薩は自ら宿罪の因緣によりて此の苦處に生ずることを知る。「此は我れ自ら作る、我、應に自ら受くべし」と。是の如く思惟し、是の故に能く忍ぶ。　復次に、菩薩は思惟すらく、「國土に二種あり、淨あり、不淨あり。菩薩は若し不淨の國の中に生ずれば、此の辛苦飢寒の衆惱を受け自ら淨願を發さん。「我が成佛する時、國中に此の衆苦なけん。」と。此れは不淨なりと雖も、乃ち是れ我が利なり」と。　復次に、菩薩は思惟すらく、「世間の八法は、賢聖も免る能はざる所なり、何ぞ況んや我に於てをや」と。是故に應當に忍ぶべし。　復次に、菩薩は思惟すらく、「此人身は、牢なく强なく、老・病・死の爲に逐はるることを知る。復た天身は淸淨にして、老なく病なしと雖も、天樂に耽著し、譬へば醉人の如し。道福を修行し、出家して欲を離るることを得ず。是の故に此の人身に於て、自ら忍んで福を修し、衆生を利益せん」と。　復次に、菩薩は思惟すらく、「我は此四大五衆の身を受けて、應に種種の苦分あるべし。身を受けて苦ならざる者あること無く、富・貴、貧・賤、出家・在家、愚・智、明・闇も免るるを得る者なし。何となれば、富貴の人は常に畏怖あつて財物を守護す。譬へば肥羊は早く屠机に就くが如く、烏が肉を銜めば、衆烏、之を逐ふが如し。貧賤の人には飢寒の苦あり。出家の人は今世に苦なりと雖も、後世に福を受けて道を得。在家の人は今世に樂むと雖も、後世に苦を受く。愚人は先づ今世の樂を求め、無常、對至れば、後則ち苦を受く。智人は先づ無常の苦を思惟し、後則ち樂を受く。是の如き等、身を受くる人にして、苦あらざるは無し。是の故に菩薩は應當に忍を行ずべし。　復

巻の第十五

初品第二十五……羼提波羅蜜法忍義

云何なるを法忍と名くるや。諸の恭敬・供養の衆生、及び諸の瞋惱・婬欲の人に忍ぶ、是を生忍と名け。其の供養・恭敬の法、及び瞋惱・婬欲の法を忍ぶ、是を法忍と爲す。

復次に、法忍とは、內の六情に於て著せず、外の六塵に於て受けず、能く此の二に於いて分別を作さず。何となれば、內相は外の如く、外相は內の如く、二相は俱に不可得なる故に、一相なるが故に、因緣合するが故に、其の實は空なるが故に、一切の法相は常に淸淨なるが故に、如・眞際・法性なるが故に、不二入なるが故に、二無しと雖も亦た一ならざるなり。是の如く諸法を觀じて、心信轉ぜざる、是を法忍と名く。毘摩羅詰經の中の如し、法住菩薩は、「生滅を二と爲す、不生不滅は是れ不二入法門なり」と說き。乃至、文殊尸利は、「聞くなく見るなく、一切の心滅して、說かず語らず、是れ不二入法門なり」と說けるに、毘摩羅詰は默然として言無し。(此に於て)諸の菩薩は讃じて言く、「善い哉、善い哉、是れ眞の不二入法門なり」と。

復次に、一切の法に二種あり、一には衆生、二には諸法なり。菩薩の衆生の中に於いて忍ぶことは、先に說くが如し、今は法中に忍ぶことを說く。法に二種あり、心法と非心法となり。非心法の中に內あり外あり、外には寒熱風雨等あり、內には飢渴老病死等あり。是の如き等の種種を名けて非心法と爲す。心法の中に二種あり、一には瞋恚・憂愁・疑等にして、二には婬欲・憍慢等なり。是の二を名けて心法と爲す。菩薩は此の二法に於て、忍んで動ぜざる、是を法忍と名く。

問うて曰く、衆生の中に於て、若し瞋惱して命を害すれば罪を得、憐愍すれば福を得れども、寒熱風雨には增損あること無し、云何にして忍ばん。

と能はずんば、菩薩と名けず、名けて惡人と爲す」と。　復次に、菩薩は思惟すらく、「世に二種あり、一は衆生數、二は非衆生數なり。我は初め發心して、誓って一切衆生の爲にす。若し非衆生數たる、山石・樹木・風寒・冷熱・水雨有りて、侵害すとも、但之を衞ぐことを求めて、初より瞋恚せず。今此の衆生は、是れ我が爲る所にして、惡を我に加ふるも、我は當に之を受くべし、云何んぞ瞋らんや」と。　復次に、菩薩は、久遠より已來、因緣和合して假に名けて人と爲し、實の人の法なきことを知る、誰か瞋る可き者ぞ。是の中に但だ骨、血、皮、肉のみ有り。譬へば累墼の如く、又、木人機關の動作して去るあり來るあるが如し。其れ此の如しと知らば、瞋ること有るべからず。若し我瞋るとせば、是れ則ち愚癡にして、自ら罪苦を受く。是を以ての故に、應に忍辱を修すべし。　復次に、菩薩は思惟すらく、「過去の無量にして恒河沙に等しきの諸佛は、本と菩薩の道を行ずる時、皆先づ生忍を行じて、然る後、法忍を修行す。我今佛道を學ぶを求むるに、當に諸佛の法の如くなるべし。瞋恚を起して、魔界の法の如くなるべからず」と。是を以ての故に應に忍辱すべし。是の如き等の種種無量の因緣の故に能く忍ぶ、是を生忍と名く。

是れを以ての故に當に忍辱を修すべし。　復次に、忍辱の人は、布施・禪定を行ぜずと雖も、常に微妙の功德を得て、天上・人中に生じ、後には佛道を得。何となれば、心柔軟なるを以ての故なり。

復次に、菩薩は思惟すらく、「若し人、今世に我を惱まし、毀辱し、利を奪ひ、輕んじ罵り、繫縛すとも、且く當に忍を含むべし。若し我、忍ばずんば、當に地獄に墮し、鐵垣・熱地に無量の苦を受くべく、燒・炙・燔・煮、具さに說くべからず」と。是を以ての故に知んぬ。小人が無智にして輕んずと雖も而も貴く、忍ばずして威を用ゆれば、快なりと雖も而も賤し。是の故に菩薩は應當に忍辱すべし。　復次に、菩薩は思惟すらく、「我は初めて發心して、衆生の爲に其心病を治せんことを誓ふ。今此の衆生は、瞋・恚の結使の爲に病むところたり。我は當に之を治すべし。云何んぞ復之を以て自ら病まんや。應當に忍辱すべし」と。譬へば藥師が衆病を療治するが如し。若し鬼狂を病むもの刀を拔き、罵詈して好醜を識らざるも、醫は鬼病なるを知れば、但だ爲めに之を治して瞋恚せざるなり。菩薩は若し衆生の爲に瞋惱罵詈せられんに、其は瞋恚なるものは煩惱の病むところにして、狂心の使ふところたるを知り、方便もて之を治して、嫌責する所なきも、亦復是の如し。　復次に、菩薩は一切を育養し、之を愛すること子の如し。若し衆生、菩薩を瞋惱するも、菩薩は之を愍んで、瞋らず責めず。譬へば慈父の子孫を撫育するが如し。子孫は幼稚なれば未だ識る所あらず、或時は罵詈し打擲し、敬せず畏れざれども、其父は其愚小を愍んで、之を愛すること愈至り、過罪ありと雖も瞋らず恚らざるなり。菩薩の忍辱も亦復た是の如し。　復次に、菩薩は思惟すらく、「若し衆生が瞋惱を我に加ふとも、我は當に忍辱すべし。若し我忍ばずんば、今世には心に悔い、後には地獄に入つて苦を受くること無量ならん。若し畜生に在つては毒龍・惡蛇・師子・虎狼と作り、若し餓鬼と爲つては、火、口より出でん。譬へば人の火燒を被るに、燒く時は痛み輕うして、後痛み轉た重きが如し」と。

復次に、菩薩は思惟すらく、「我、菩薩と爲つて、衆生の爲に益利せんと欲す。若し我忍辱するこ

惡瘡の如く發し易く、壞し易し。瞋恚の人は、譬へば毒蛇の如く、人は見ることを喜ばず。瞋を積むの人は、惡心漸やく大にして、至る可らざることに至り、父を殺し、君を殺し、惡意もて佛に向ふ。拘睒彌國の比丘(等)の如きは、小因緣を以て瞋心轉た大にして、分れて二部と爲る。若し斷ぜんと欲すれば、終に三月を竟るも猶了る可らざるべし。佛、來つて衆「中」に在し相輪の手を擧げて遮つて告げて言はく、

『汝、諸の比丘、鬪諍を起すこと勿れ、惡心相續すれば、苦報甚だ重し。

汝は涅槃を求めて世の利を棄捨し、善法の中に在り、云何なれば瞋り諍ふ。

世人の忿諍は是れ猶ほ恕す可し、出家の人は何ぞ諍鬪す可けん。

出家は心中に毒を懷けば自ら害すること、冷雲の中より火出でて身を燒くが如し。』

諸の比丘、佛に白して言さく、「佛は法王たり、願はくは小(しば)らく默然したまへ。是の輩、我を侵す、答へざる可らず」と。佛念じたまはく、「是の人は度す可らざるなり」と。衆僧の中に於て、虛を淩いで去り、林樹の間にて寂然として三昧に入りたまへり。瞋の罪は是の如く、乃ち佛語をも受けざるに至る。是を以ての故に。應當に瞋を除いて、忍辱を修行すべし。復次に、能く忍辱を修すれば慈悲は得易し、慈悲を得れば則ち佛道に至る。

問うて曰く、「忍辱の法は皆好し。而れども一事の不可なるあり。小人は輕慢して、謂つて「怖畏す」と爲す、是を以ての故に皆は忍ぶべからず。

答へて曰く、若し小人が輕慢して、謂つて「怖畏す」と爲すを以て、忍ばざらんとすとせば、不忍の罪は此よりも甚だし。何となれば、不忍の人は賢聖善人に輕賤せられ、忍辱の人は小人の爲に慢らる。(この)二輕の中にては、寧ろ無智の慢る所たるも、賢聖の賤しむところたらされ。何となれば、無智の人は輕んずべからざる所を輕んじ、賢聖の人は賤しむ可き所を賤しむを以てなり。

切を毒害す。我當に云何んぞ此の重罪を行ずべき。若し瞋恚あれば、自ら樂利を失す、云何にして能く衆生をして樂を得せしめん」と。　復次に、諸佛菩薩は大悲を以て本と爲す。悲より瞋を出さば、悲を滅するの毒と爲る、特に相ひ宜しからず。若し悲の本を壞せば、何ぞ菩薩と名けん、菩薩は何に從つてか出でん。是を以ての故に、應に忍辱を修すべし。若し衆生、諸の瞋惱を加へなば、當に其の功德を念ずべし。「今此の衆生は一罪ありと雖も、更に自ら別に諸の妙功德あり、其の功德を以ての故に之を瞋るべからず」と。　復次に、「此の人、若くは罵り、若くは打つとも、是れ我を治むることを爲す。譬へば金師の金を錬るに、垢は火に隨つて去り、眞金獨り在るが如く、此も亦是の如し。若し我に罪あらば、是れ先世の因緣による。今當に之を償ふべし。瞋るべからず、當に忍辱を修すべし」と。　復次に、菩薩は衆生を慈念すること、猶ほ赤子の如くす。「閻浮提の人は諸の憂愁多く、歡日あること少し。若くは來つて罵詈し、或は讒賊を加へて心に歡樂を得るならば、此の樂は得難し、恣ままに汝は之を罵れ。何となれば、我は本と發心して、衆生をして歡喜を得せしめんと欲すればなり」と。　復次に、「世間の衆生は常に衆病の爲に惱され、又は死賊の爲に常に隨つて之を伺はる。譬へば怨家の恒に人の便(たより)を伺ふが如し。云何んぞ善人にして而も慈愍せざらんや。」と。復た「苦を加へんと欲すれば、苦未だ彼に及ばざるに、先づ自ら害を受く」と。是の如く思惟して、彼を瞋るべからず、當に忍辱を修すべし。　復次に、當に觀ずべし。瞋恚は其の咎最も深く、三毒の中に此より重き者無く。九十八使の中、此を最も堅しと爲す。諸の心病の中に第一にして治し難し。瞋恚の人は善を知らず、非善を知らず、罪福を觀ぜず、利害を知らず、自ら憶念せず、當に惡道に墮して善言を忘失し、名稱を惜まず、他の惱みを知らず、亦た自ら身心の疲惱を計らず、瞋は慧眼を覆ひ、專ら他を惱ますことを行ず。一の五通の仙人の如きは、瞋恚を以ての故に淨行を修すと雖も、一國を殺害すること旃陀羅の如し。　復次に、瞋恚の人は、譬へば虎狼の如く、共に止る可きこと難し。又

し、泥洹道に入るべし。一切の凡人は、侵至れば則ち瞋り、益至れば則ち喜び、怖處には則ち畏る。我は菩薩たり、彼が如くなる可らず、未だ結を斷ぜずと雖も、當に自ら抑制して忍辱を修行し、惱害をも瞋らず、敬養をも喜ばず、衆苦艱難を怖畏すべからず、當に衆生の爲に大悲心を與すべし」と。　復次に、菩薩は若し衆生の來つて惱亂を爲すことを見れば、當に自ら念じて言く、「是れ我が親厚たり、亦是れ我が師なり、益親愛敬心を加へて之を待たん」と。何となれば、彼もし衆惱を加へて我を惱まさずんば、則ち我は忍辱を成ぜざればなり。是を以ての故に、「是れ我が親厚なり、亦た是れ我が師なり」と言ふ。　復次に、菩薩は心に知ること、佛の說きたまふ所の如く、「衆生は始なく、世界は際なし、五道に往來して輪轉すること無量なり。我亦た曾つて衆生の爲に、父母兄弟たり、衆生も亦皆な曾つて我が父母兄弟たり、當來も亦爾らん。是を以て之を推すに、惡心にして瞋害を懷くべからず」と。　復次に、思惟すらく、「衆生の中には佛種甚だ多し、若し我瞋意もて之に向はば、則ち佛を瞋ると爲す、若し我、佛を瞋らば、則ち已に了なん。說くが如くんば、鴿鳥も當に佛と作ることを得べし、今は是れ鳥なりと雖も輕ず可らざるなり」と。　復次に、諸の煩惱の中に瞋を最も重しと爲す、不善の報の中、瞋の報は最も大なり。餘の結には此の重罪なし。釋提婆那民の佛に問へる偈に言ふが如し、

『何物か殺して安隱なるや、何物か殺して悔いざるや、何物か毒の根にして、一切の善を呑滅するや、何物か殺して讚ぜらるや、何物か殺して憂ひ無きや。』

佛答へ言はく、

『瞋る心を殺せば安隱なり、瞋る心を殺せば悔いず、瞋は毒の根なり、瞋は一切の善を滅す、瞋を殺せば諸佛讚じ、瞋を殺せば則ち憂なし』と。

菩薩思惟すらく、「我今悲を行じて、衆生をして樂を得せしめんと欲す。瞋は諸善を呑滅して、一

復次に、行者は常に慈心を行じ、惱亂身に逼るありと雖も、必ず能く忍受すべし。譬へば羼提仙人の如きは、大林の中に在つて忍を修し慈を行ず。時に迦利王は諸の婇女を將ゐて林に入つて遊戲す、飮食既に訖つて、王は小しく睡息す。諸の婇女の輩は、花林の間を遊んで、此の仙人を見、敬を加へて禮拜し一面に在つて立つ。仙人は爾の時、諸の婇女の爲に慈忍を讃說す。其の言葉美妙にして、聽く者厭くこと無く、久うして去らず。迦利王は覺めて婇女を見ず、劍を拔いて蹤を追ひ、見るに仙人の前に在つて立てり。憍妬、隆盛して、目を瞋らし劍を奮つて、而して仙人に問ふ、「汝は何物をか作す」と。仙人答へて言く、「我いま此に在つて、忍を修し慈を行ず」と。王言く、「我今汝を試みん、當に利劍を以て汝が耳鼻を截り、汝が手足を斬らんに、若し瞋らずんば、汝が忍を修することを知るべし」と。仙人言く、「意に任す」と。王卽ち劍を拔いて、其耳鼻を截り、其の手足を截つて之に問ふ、「汝が心動ずるや不や」と。答へて言く、「我は慈忍を修す、心動ぜざるなり」と。王言く、「汝が一身は此に在つて、勢力あること無し。口に動ぜずと言ふと雖も、誰か當に信ずべき者あらん」と。是時に仙人は卽ち誓を作して言く、「若し我實に慈忍を修せば、血は當に乳と爲るべし」と。卽時に血は變じて乳と爲る。王大に驚喜し、諸の婇女を將ゐて去る。是の時林中の龍神、此の仙人の爲に雷電霹靂し、王は毒害を被つて沒して宮に還らざりき。是を以ての故に「惱亂の中に於て能く忍辱を行ず」と言ふ。

復次に、菩薩は慈心を修行す。一切衆生は常に衆の苦あり、胎に處しては迫隘して諸の苦痛を受け、生るる時は迫迮して骨肉破るるが如く、冷風、身に觸れて劍戟よりも甚し。是の故に佛の言はく、「一切の苦の中にて生苦は最も重し」と。是の如く老病死の苦、種種の困厄あり、云何んぞ行人は復其苦を加へん。是を瘡中、復た刀を以て破ると爲す。　復次に、菩薩は自ら念ずらく、「我應に諸の餘人の常に生死の水に隨ふて流るるが如くなるべからず、我は當に流に逆ふて以て求めて源を盡

はず、若し意の如くならずんば、活ること能はざるなり」と。母は子の爲の故に、王の宮中に入り、常に肥魚の美肉を送り、以て王女に遺つて價を取らず。王女怪んで之に問ふ「何の願をか求めんと欲する」と。母、王女に白さく、「願はくは左右を却けたまへ、當に情を以て告ぐべし。我に唯一子あり、王女を敬慕し、情結んで病と成り、命云に遠からず、願はくは愍念を垂れて、其の生命を賜へ」と。王女言く、「汝去れ、月の十五日に、某甲の天祠の中に於て、天像の後に住せん」と。母還つて子に語るらく、「汝が願、已に得たり」と。之に告ぐるに上の如くす、沐浴し、新衣にして天像の後に在つて住す。王女は時至つて其の父王の向さく、「我に不吉あり、須らく天祠に至つて以て吉福を求むべし」と。王言く「大に善し」と。即ち車五百乘を嚴り、出でて天祠に至る。既にして到り、諸の從者に勅して、門を齊つて止め、獨り天祠に入る。天神思惟すらく、「此は爾るべからず、王は世主たり、此の小人に王女を毀辱せしむ可らず」と。即ち此の人を厭ひて睡つて覺めざらしむ。王女は既に入つて其の睡れるを見て、重く之を推せども悟らず。即ち瓔珞の値十萬兩金なるを以て之に遺して去る。去つて後、此人覺むることを得て、見るに瓔珞あり。又衆人に問うて、王女の來れることを知り。情願を遂げずして、憂恨懊惱し、婬火內より發し、自ら燒けて而して死せり。是の證を以ての故に知る、女人の心は貴賤を擇ばず、唯だ欲に是れ從ふことを。　復次に昔國王の女あり、旃陀羅に逐はれて共に不淨を爲す。又仙人の女あり、師子に隨逐す。是の如き等に種種、女人の心は選擇する所なし。是の種種の因緣を以て、女人の中に於て情欲を除去し、忍んで愛著せされ。

云何にして瞋惱の人の中にて忍辱を得ん。當に自ら思惟すべし、「一切衆生は罪の因緣ありて、更に相侵害す、我今惱を受くるも亦た本行の因緣なり、今世の作るところに非ずと雖も、是れ我が先世の惡報なり。我今之を償つて、應當に甘受すべし、何ぞ逆ふべけんや。譬へば負債の如し、債主之を索むれば、應當に歡喜して債を償ふべし、瞋る可らず」と。

行歩妖穢にして、以て人を惑はす、婬の[一]羅彌網には、人皆な身を沒す。
坐・臥・行・立に、眄を廻らし、媚を巧みにす、薄智の愚人は、之が爲に心醉ふ。
劍を執つて敵に向へば、是れ猶勝つ可し、女賊が人を害するは、是れ禁ず可らず。
蚖蛇の毒を含むは猶手にて捉ふ可し、女情の人を惑はすは、是れ觸る可らず。
有智の人の視るべからざる所、若し之を觀んと欲せば、當に母・姉の如くすべし。
諦視して之を觀ずれば、不淨塡積す、婬火を除かざれば、之が爲に燒滅せられん。』

復次に、女人の相は、若し敬待を得れば、則ち夫の心をして高からしむ。若し敬待の情を捨つれば、則ち夫の心をして怖れしむ。女人は是の如く、恒に煩惱・憂怖を以て人に與ふ、云何ぞ近づくべけんや。親好を乖離するは女人の罪なり、巧に人の惡を察するは女人の智なり。大火の人を燒くは是れ猶近づく可く、淸風の形なきは、是れ亦た捉ふ可く、蚖蛇の毒を含むは猶亦觸る可けれども、女人の心は實を得べからず。何となれば女人の相は、富貴・端正・名聞・智德・族姓・技藝・辯言・親厚・愛重を觀ぜず、都て心に在らずして、唯だ欲のみ是れ視る。譬へば蛟龍は好醜を擇ばずして、唯だ人を殺さんと欲するが如し。又復た女人は憂苦憔悴を瞻視せず。給養敬待すれば、憍奢制し叵し。

復次に、若し善人の中に在れば、則ち自ら畜まゝに心高ぶり、無智の人の中にては之を視ること怨の如く、富貴の人の中にては、之を追ふて敬愛し、貧賤の人の中にては、之を視ること狗の如く、常に欲心に隨つて功德に隨はざるなり。說くが如くんば、國王の女あり、名けて[二]拘牟頭と曰ふ。捕魚師あり、述婆伽と名く。道に隨つて行き、遙に王女の高樓の上に在るを見る。窻の中に面を見、想像して染著し、心暫らくも捨てず、彌日月を歷るも飮食すること能はず。母、其の故を問へば、情を以て母に答ふ、「我、王女を見て、心に忘るること能はず」と。母兒を諭して言く、「汝は是れ小人なり、王女は尊貴なり。得べからざるなり」と。兒言く、「我、心に願樂して、暫らくも忘るること能

【一】羅彌網。別本には「羅細網」とあり。

【二】拘牟陀(Kumuda)。譯して地喜花、又は未だ開かざる蓮華。
迦利王(Kali)。

は是の時、卽ち偈を說いて言く、

『是の身は穢れたる藪なり、不淨物、腐れ積めり。是は實に行廁たり。何ぞ以て意を樂ますに足らんや。』

女は此の偈を聞いて自ら念ずらく、「此の人は、我等の淸淨なる天身を知らずして、而も此の偈を說く」と。卽ち自ら身を變じて、還つて本形に復し、光耀昱爍として林樹の間を照し、天の伎樂を作し、菩薩に語つて曰く、「我が身是の如し、何の呵す可きことか有る」と。菩薩答へて言く、「時至れば自ら知るべし」と。問うて曰く、「此の言は何の謂ぞ」と。偈を以て答へ言く、

『諸天の園林の中、七寶の蓮華の池に、天人相娛樂するも、失ふ時あり。汝自ら知るべし。是の時無常を見し、天上の樂は皆苦となる。汝當に欲樂を厭ひ、正眞の道を愛樂すべし』と。

女は偈を聞き已つて心に念ずらく、「此の人は大智無量なり、天樂の淸淨なるすら、猶ほ其の惡を知る、當る可らざるなり」と。卽時に滅し去る。菩薩は是の如く、婬欲の樂を觀じて、能く自ら心を制して、忍んで傾動したまはず。

復次に、菩薩は欲の種種の不淨を觀ずるに、諸衰の中に於て、女衰は最も重し。刀・火・雷電・霹靂・怨家・毒蛇の屬は、猶暫らく近づく可し。女人の慳妬・瞋諂・妖穢・鬪諍・貪嫉は親近す可らず。何となれば女子は小人にして、心淺く、智薄く、唯だ欲のみ是れ視て、富貴・智德・名聞を觀ず、專ら欲惡を行じ、人の善根を破る。桎梏・枷鎖して囹圄に閉繫するは、解き難しといふと雖も、是は猶ほ解き易し、女の鎖の人を繫ぐは染固く、根深く、無智なるものは之に沒して脫するを得べきこと難し。衆病の中に女病は最も重し。佛の偈に言ふが如し。

『寧ろ赤鐵を以て眼中に宛轉すとも、散心を以て邪に女色を視されれ。

笑を含み、姿を作り、憍慢して羞耻し、面を廻らして眼を攝め、美言を以て妬瞋す。

得と雖も、心亦た著せず。又麞鹿が虎の爲に搏たれ、之を逐追して捨てざれば、好草美水を得て飲食すと雖も、心に染著なきが如し。行者も亦爾なり、「常に無常の虎の爲に逐はれて、須臾も捨てず」と思惟し、厭患すれば美味を得と雖も亦た染著せず、是の故に行者は供養人の中に於て、心自ら忍ぶことを得。

復次に、若し女人あり來つて娛樂せんと欲して、菩薩を誑惑すれば、菩薩は是の時、當に自ら心を伏し、忍んで(欲情を)起らしめざるべし。釋迦文尼佛の如きは、菩提樹下に在せしとき、魔王憂愁して三王女を遣はす。一を樂見と名け、二を悅彼と名け、三を渇愛と名く。來つて其の身を現じ、種種の姿態を作して菩薩を壞らんと欲す。菩薩は是の時、心傾動せず、目に暫らくも視たまはざりき。三女念じて言く、「人心は同じからず、好愛は各異なる、或は少きを好むあり、或は中年を愛し、或は長を好み、短を好み、白を好み、黑を好む、是の如く衆好は、各愛する所あり」と。是の時三女は各各化して五百の美女と作り、一一の化女は、無量の變態を作して林中より出づ。譬へば黑雲電光の暫らく現るるが如く、或は揚眉し、頓睫し、嫈嫇し、細視し、衆の伎樂、種種の姿媚を作して、來つて菩薩に近づき、態身を以て菩薩に觸れ逼らんと欲す。爾の時、密迹金剛力士、目を瞋らして之を叱す、「此は是れ何人ぞ、汝、妖媚、敢へて來り觸れ嬈すや」と。爾の時、密迹は偈を說いて之を呵す、

『汝知らずや、[九]天帝は好を失して黃髯となり、大海の水は淸美なりしが、今日は盡く苦鹹なり。
汝知らずや、日滅じて[一〇]婆藪の諸天墮ち、火は本と、天の口なりしが、今一切を噉ふことを。』

汝此の事を知らずして、敢へて此の聖人を輕んず」と。是の時衆女は逡巡して小しく退き、菩薩に語つて言く、「今、此の衆女は、端嚴にして無比なり、自ら意を娛しましむ可し、端坐して何をか爲さん」と。菩薩言く、「汝等は不淨にして臭穢なり、惡み去るべし。妄に談ずること勿れ」と。菩薩

【九】天帝。別本には「天命」とあり、さらば、「汝天命を知らずや」なり。
【一〇】婆藪(Vāsu)。

の功德の故に供養を得ば、當に自ら思惟すべし、「我は智慧を以て、若しくは諸法の實相を知り、若しくは能く結を斷ず。此の功德を以ての故に、是の人供養す、我に於て事なし」と。是の如く思惟し已つて、自ら其の心を伏すれば、自ら憍り高らず、此れ實に功德を愛樂して、我を愛せざるなり。譬へば罽賓の三藏比丘の如きは、阿蘭若の法を行じ、一の王寺に至るに、寺に大會を設く。門を守るの人、其衣服の麁弊なるを見て、門を遮つて前ましめず、是の如きこと數數なり。衣服の弊なるを以ての故に、每に前むことを得ず。便ち方便を作して假りに好衣を借りて而して來る。門家は之を見て前むを聽して禁ぜず。既に會に至つて坐し、種種の好き食を得たるに先づ以て衣に與へたり。衆人問うて言く、「何を以てか爾るや」と。答へて言く、「我、比數來るに、每に入ることを得ず。今、衣を以ての故に此座に在ることを得て、種種の好食を得たり。實には是れ衣の故に之を得るなり、故に以て衣に與ふ」と。行者は修行の功德、持戒・智慧を以ての故に、而も供養を得。自ら念ぜよ、「此れは功德の爲にして我が爲に非ざるなり」と。是の如く思惟して能く自ら心を伏す、是を名けて忍と爲す。若し虛妄欺僞にして供養を得ば、是れ自らを害すと爲す、近づく可らざるなり。當に自ら思惟すべし、「若し我、此の虛妄を以て供養を得ば、惡賊・劫盜が食を得ると異なること無し、是を欺妄の罪に墮すと爲す」と。是の如く[八]三種の供養の人の中に於て、愛著せず亦た自ら高うせざる、是を生忍と名く。

問うて曰く、人未だ道を得ずして、衣食を急と爲さば、云何に方便して、能く忍んで心、給施の人に著せず、愛せざるを得るや。

答へて曰く、智慧力を以て、無常相・苦相・無我相を觀じ、心に常に厭患す。譬へば罪人が當に劉を受くべきに臨んでは、復た美味前に在り、家室勸喩すと雖も、死を憂ふるを以ての故に、餚饍を飲食すと雖も、滋味を覺えざるが如し。行者も亦た爾なり。常に無常相と苦相を觀ずれば、供養を

【八】三種供養。衣食住を供養す。既註。

を立て、四種の供養、並に種種の雜供、物として備らざるは無く、以て提婆達多に給し、日日に諸大臣を率ゐて、自ら爲に五百釜の羹飯を送れり。提婆達多は大に供養を得たれども、而も徒衆尠少なり、自ら念ずらく、「我に三十相あり、佛に減ずること未だ幾ばくならず、直弟子未だ集まらざるを以てす、若し大衆圍遶せば、佛と何ぞ異ならん」と。是の如く思惟し已つて心を生じ、僧を破りて、五百の弟子を得たるも、舍利弗・目犍連、(これを)説法教化したれば、僧は還つて和合せり。爾の時に提婆達多は便ち惡心を生じ、山を推して佛を壓す。金剛力士、金剛杵を以て遙に之に擲ちたれば、碎石迸り來つて佛の足指を傷けたり。華色比丘尼之を訶すれば、復た拳を以て尼を打ち、尼は卽時に眼出でて死せり。三逆罪を作り、惡邪の師[七]富蘭那外道等と親厚を爲し、諸の善根を斷じて心に愧悔なし。復た惡毒を以て、指爪の中に著け、佛を禮するに因みて、以て佛を中傷せんと欲す。去らんと欲して未だ王舍城の中に到らざるに、地自然に破裂し、火車來り迎へて、生きながら地獄に入れり。提婆達多は身に三十相あつて、而も其の心を忍伏すること能はず、供養の利の爲の故に、而も大罪を作り、生きながら地獄に入る。是を以ての故に、「利養の瘡は深く皮を破つて髓に至る」と言ふ。當に供養の人を愛するの心を除却すべし。是を菩薩は忍心にして、供養恭敬の人に愛著せずと爲す。

　復次に供養に三種あり。一には先世の因緣福德の故に、二には今世の功德にして、戒・禪定・智慧を修するが故に、人に敬養せらる。三には虛妄欺惑にして、內に實德なけれども、外は淸白の如くにして、以て時人を誑して而して供養を得。此の三種の供養の中に於て、心に自ら思惟すらく、「若し先世の因緣にて、福德を勤修して、今(世)に供養を得るは、是れ懃身を爲して、之を作りて、自ら得るのみ。何爲ぞ此に於て貢高を生ぜん。譬へば春に種ゑ、秋に穫るが如し、自ら力を以て得るのみ、何ぞ自ら憍るに足らんや」と。是の如く思惟し已つて、其の心を忍伏すれば、著せず憍らざるなり。若し今世

【七】富蘭那外道(Pūrāṇa)。六師外道の一、空見に執す。

の如くんば、「利養の瘡深きこと、譬へば皮を斷じて肉に至り、肉を斷じて骨に至り、骨を斷じて髓に至るが如し。人利養に著すれば則ち持戒の皮を破り、禪定の肉を斷じ、智慧の骨を破り、微妙の善心の髓を失ふ」と。佛初め[六]迦毘羅婆國に遊びたまふときの如きは、千二百五十の比丘と倶なりき。悉く是れ梵志の身にして、火を供養するが故に形容憔悴し、食を絶して苦行するが故に膚體瘦せて黑し。淨飯王は心に念じて言く、「我が子の侍從は、復た心清く清潔なりと雖も並に容貌なし、我當に累重く子孫多き者を擇び取つて、家より一人を出して佛弟子と爲すべし」と。是の如く思惟し已つて、勅を國中に下し、「諸釋の貴戚の子弟を簡擇し、應に之を書して、身皆出家せしむべし」と。是の時に斛飯王の子、提婆達多は、出家學道して六萬の法聚を誦し、精進修行して十二年に滿つ。其の後供養の利の爲の故に、佛の所に來至し、神通を學ばんことを求む。佛、憍曇に告げたまはく、「汝五陰の無常を觀ずれば、以て道を得べく、亦た神通を得べし」と。而も爲に通を取るの法を說きたまはず。出でて舍利弗・目揵連・乃至五百の阿羅漢に求むれども、皆爲に說かずして言く、「汝當に五陰の無常を觀ずれば、以て道を得べく、以て通を得べし」と。求むる所を得ざれば、涕泣して樂しまず。阿難の所に到つて神通を學ばんことを求む。是の時に阿難は未だ他心智を得ず、其の兄を敬ふが故に、佛の言ふ所の如く、以て提婆達多に授く。通の法を受學し、山に入つて久しからずして便ち五神通を得、五神通を得已つて自ら念ずらく、「誰か當に我が與めに、檀越と作るべき者ぞ」と。王子阿闍世の如きは大王の相あり、與に親厚を爲さんと欲す」と。天上に到つて天の食を取り、還つて欝旦羅越に到つて自然の粳米を取り、閻浮林の中に至つて閻浮果を取り、王子阿闍世に與ふ。或時は自ら其の身を變じて象寶・馬寶と作り、以て其の心を惑はし、或は嬰孩と作つて其の膝の上に坐す。王子之を抱いて嗚唼して唾を與ふれば、時時、自ら己が名を說いて太子をして之を知らしめ、種種に變態して、以て其の心を動かす。王子は意に惑ひ、奈園の中に於て大いに精舍

【六】迦毘羅婆國(Kapilava=stu)。佛の生國。

答へて曰く、羼提は秦に忍辱と言ふ。忍辱に二種あり、生忍と法忍となり。菩薩は生忍を行じて無量の福德を得、法忍を行じて無量の智慧を得、福德と智慧との二事を具足するが故に、願ふ所の如くなることを得。譬へば人の目あり足あれば、意に隨つて能く到るが如し。菩薩は、若くは惡口罵詈に遇ひ、若くは刀杖を加へらるれども、思惟して罪福の業の因緣を知り、諸法は內も外も畢竟空にして、我なく我所なしとし、三法印[四]を以て諸法を印するが故に、力(それに)報ひ能ふと雖も、惡心を生ぜず、惡口の業を起さず。爾の時に[五]心數法、生ずるを名けて忍を爲す。是の忍の法を得るが故に、忍の智も牢固なり。譬へば畫彩は膠を得れば、則ち堅著するが如し。有人の言く、「善心に二種あり、麁あり細あり、麁を忍辱と名け、細を禪定と名く。未だ禪定を得ずして、心に樂んで能く衆惡を遮る、是を忍辱と名け、心に禪定を得て、樂(ねが)うて衆惡を爲さざる、是を禪定と名く。是の忍は是れ心數法にして心と相應し、心行に隨ひ、業に非ず業報に非ず、業行に隨ふ」と。有人の言く、「二界繫なり」と。有人の言く、「但だ欲界繫なり、或は不繫なり。色界には外惡の忍ぶ可きもの無きが故なり」と、「亦は有漏亦は無漏なり。凡夫・聖人倶に得るが故に」「己心・他心の不善法を障ふるが故に、名けて善と爲す。善の故に或は思惟斷、或は不斷なり。」是の如き等の種種は阿毘曇に廣く分別せり。

問うて曰く、云何なるを名けて生忍と爲すや。

答へて曰く、二種の衆生あり、來つて菩薩に向ひ、一は恭敬供養し、二は瞋り罵り打ち害す。爾の時に菩薩は、其の心能く忍び、敬養する衆生を愛せず、惡を加ふる衆生を瞋らず、是を生忍と名く。

問うて曰く、云何なれば恭敬、供養をも之を名けて忍と爲すや。

答へて曰く、二種の結使あり。一は愛に屬する結使、二は恚に屬する結使なり。恭敬供養は恚を生ぜずと雖も、心をして愛著せしむ。是を軟賊と名く。是の故に此に於て應當に自ら忍んで、著せず愛せざるべし。云何にして能く忍ぶや。其の無常を觀じて、是れ結使の生處なりとす。佛の所說

【四】三法印。佛敎の三大原理、諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜。
【五】心數法。心の有するものゝ意味、心所法。

に於て被・枕を安施し、師在(いま)すが如く、其の狀、臥するが如くならしむ。人、來つて疾を問ひて、「師は何許に在りや」と。諸の弟子の言く、「汝、牀上の被枕を見ずや」と。愚者は之を審察せずして、「師は病臥す」と謂つて、大に供養を送つて去る。是の如くする一(ひとたび)に非ず。復た智人あり、來つて之を問へるに、諸の弟子亦た是の如く答ふ。智人言く、「我は被・枕・床・褥を問はず、我は自ら人を求む」と被を發(あば)いて之を求むるに、竟に人の得べき無かりき。[二]六事の相を除いて更に我人なく、知者、見者も、亦復た是の如し。　復次に、若し衆生は五衆の因緣に於て有りとせば、五衆無常なれば、衆生も亦無常なるべし、何となれば因果は相似るが故なり。若し衆生無常なれば、則ち後世に至らず。

復次に、若し汝の言ふが如くんば、衆生は本より已來常に有ならん。若し爾りとせば、衆生は應に五衆を生ずべく、五衆は衆生を生ずべからず。今五衆の因緣より衆生の名字を生ず、無智の人は名を逐うて實を求む。是を以ての故に衆生は實に無なり。若し衆生なくんば亦殺罪もなし、殺罪なきが故に亦持戒もなし。　復次に、是の五衆に深く入つて之を觀じ、分別して空なるを知れば、夢の所見の如く、鏡中の像の如し。若し夢中の所見、及び鏡中の像を殺すならば、殺罪あることなく、五陰の空相たる衆生を殺すも亦復た、是の如し。　復次に、若し人、罪を樂(ねが)はず無罪を貪著すれば、是の人は破戒の罪人を見れば則ち輕慢し、持戒の善人を見れば則ち愛敬す。是の如き持戒は則ち是れ罪を起すの因緣なり。是を以ての故に、罪不罪は不可得なりと言ふ、故に應に尸羅波羅蜜を具足すべし。

初品第二十四……羼提波羅蜜義

〔經〕心、動ぜざるが故に、應に羼提波羅蜜を具足すべし。

〔論〕問うて曰く、云何なるを[三]羼提と名くるや。

【二】六事の相。眼耳鼻舌身意の六根。

【三】羼提。忍辱と譯す、既註。

らば是れは五衆なりや、五衆を離るるや。若し是れ五衆ならば、五衆は五あり、衆生は一たり。是の如くんば、五は一となす可く、一は五と爲す可し。譬へば市に物を易ふるが如し。直五疋なるを一疋を以て之を取らば、則ち得可らず。何となれば一は五と作すを得ざるが故なり。是を以ての故に、五衆は一衆生と作るを得ざることを知る。　復次に、五衆は生滅して常相なし。衆生の法は先世より來つて後世に至り、罪福を三界に受く。若し五衆は是れ衆生ならば、譬へば草木の自ら生じ、自ら滅するが如し。是の如きは則ち罪縛なく亦た解脫もなし。是を以ての故に、五衆は是れ衆生に非ることを知る。若し五衆を離れて衆生あらば、先に說ける、「神は常にして遍ず」の中に已に破するが如し。　復次に、五衆を離るれば則ち我見の心生ぜず、若し五衆を離れて衆生あらば、是れ常に墮すと爲す。若し常に墮せば、是れ則ち生なく死なし。何となれば、生は「先に無くして今ある」に名け、死は「已に生じて便ち滅する」に名くればなり。若し衆生は常ならば、應に五道の中に遍滿すべし。先に已に常有ならば、云何んぞ今復た來り生ぜん、若し生あらずんば則ち死あることも無し。

問うて曰く、定んで衆生あり、何を以ての故に無しと言ふや。五衆の因緣によりて衆生の法あること、譬へば五指の因緣によりて拳の法が生ずるが如し。

答へて曰く、此の言は非なり。若し五衆の因緣によりて衆生の法ありとせば、五衆を除きて則ち別に衆生の法あるべし。然れども得べからざるなり。眼に自ら色を見、耳に自ら聲を聞き、鼻に香を嗅ぎ、舌に味を知り、身に觸を知り、意に法を知る、空にして我の法なく、此の六事を離れて更に衆生なし。諸の外道の輩は、倒見の故に、「眼に能く色を見る。是を衆生と爲し、乃至、意に能く法を知る、是を衆生と爲す。又能く憶念し、能く苦樂を知る、是を衆生と爲す」と言ひ。但だ是の見を作して衆生の實を知らず。譬へば一の長老比丘の如きは、人、是を阿羅漢と謂つて、多く供養を致す。其の後病死す、諸の弟子は供養を失はんことを懼るるが故に、夜、之を盜み出し、其の臥處

心に自ら思惟すらく、「若し我れ持、戒は貴きを以て取る可く、破戒は賤しければ捨つ可しとせば、若し此の心あらば、般若に應ぜず。智を以て籌量して、心、戒に著せず、取るも無く捨つるも無き、是を持戒は般若波羅蜜を生ずと爲す」と。　復次に、戒を持たざる人は、利智ありと雖も、世務を營むを以て、種種に生業の事を求めんと欲し、慧根漸く鈍ること、譬へば利刀を以て泥土を割けば、遂に鈍器と成るが如し。若し出家して戒を持ち、世業を營まず、常に諸の實相の無相なることを觀ずれば、先には鈍根なりと雖も、以て漸く轉た利ならん。是の如き等の種種の因緣を名けて、持戒は般若波羅蜜を生ずと爲し、是の如き等を名けて、尸羅波羅蜜は六波羅蜜を生ずと爲す。

復次に、菩薩は戒を持ちて、以て畏れざるが故に亦た愚癡に非ず、疑に非ず、惑に非ず。亦た自ら涅槃の爲にせざるが故に、持戒は但だ一切衆生の爲の故なり、佛道を得んが爲の故なり、一切の佛法を得んが爲の故なり、是の如き相を名けて、尸羅波羅蜜と爲す。　復次に、菩薩の若きは罪と不罪とに於て不可得なるが故に。是時を名けて尸羅波羅蜜と爲す。

問うて曰く、若し惡を捨てて善を行ずるは、是を持戒と爲すとせば、云何なれば罪と不罪とは不可得なりと言ふや。

答へて曰く、邪見・麁心を[一]謂つて不可得なりと言ふに非ず。若し深く諸の法相に入つて空三昧を行ぜば、慧眼もて觀ずるが故に、罪は不可得なり。罪、無なきが故に、不罪も亦た不可得なり。　復次に、衆生は不可得なるが故に、殺罪も亦た不可得なり。罪は不可得なるが故に、戒も亦た不可得なり。何となれば殺罪あるを以ての故に則ち戒あり。若し殺罪なければ、則ち亦た戒なければなり。

問うて曰く、今、衆生は現に有り、云何なれば衆生は不可得なりと云ふや。

答へて曰く、肉眼の見る所は、是を見に非ずと爲す。若し慧眼を以て觀ずれば則ち衆生を得ず。上の檀の中に說くが如し。施者なく受者なく、財物なし。此も亦た是の如し。　復次に、若し衆生あ

【一】謂。別本にては「爲」に作る。

を持戒は能く諸根を護ると爲す。諸根を守れば則ち禪定を生じ、禪定を生ずれば則ち智慧を生じ、智慧を生ずれば佛道に至ることを得。是を持戒は毘棃耶波羅蜜を生ずと爲す。

云何にして持戒は禪を生ずるや。人に三業あり、諸善を作す。若し身口の業、善なれば、意業も自然に善に入る。譬へば曲草の麻中に生ずるに、扶けざれども自ら直きが如し。持戒の力は能く諸の結使を羸らす。云何に能く羸らすや。若し戒を持たざれば、瞋恚の事來れば殺心則ち生じ、若し欲事至れば婬心卽ち成ず。若し戒を持つ者は、微瞋ありと雖も殺心を生ぜず、婬念ありと雖も婬事を成さず、是を持戒は能く諸の結使をして羸らしむと爲す。諸の結使羸るるが故に、禪定を得易し。譬へば老病力を失へば、死事得易きが如く、結使羸るるが故に禪定得易し。　復次に、人心は未だ息まず、常に逸樂を求む。行者は戒を持ちて世の福を棄捨し、心放逸ならず、是の故に禪定を得ること易し。　復次に持戒の人は人中に生ずることを得。次に六欲天の上に生じ、次に色界に至り、若し色相を破らば無色界に生ず。持戒淸淨にして諸の結使を斷ずれば阿羅漢道を得、大心をもて戒を持ち衆生を慇念す、是を菩薩と爲す。　復次に、戒を麁を檢すと爲し、禪を細を攝すと爲す。復次に、戒は身口を攝し、禪は亂心を止む。人が屋に上るに、梯に非ざれば昇れざるが如く、戒の梯を得ざれば禪も亦た立たず。　復次に、破戒の人は、結使の風強くして、其の心を散亂す。其の心散亂すれば則ち禪は得べからず。持戒の人は煩惱の風軟にして、心大に散ぜず、禪定は得易し。是の如き等の種種の因緣、是を持戒は禪波羅蜜を生ずと爲す。

云何にして持戒は能く智慧を生ずるや。持戒の人は、此の戒相は何に從つて有るやを觀じ、衆罪に從つて生ずることを知る。若し衆罪なければ則ち亦た戒なし。戒相は是の如く因緣に從つて有り。何が故に著を生ずるや。譬へば蓮華は汚泥より出で、色は鮮好なりと雖も、出處は、不淨なるが如し。是を以て心を悟り、著を生ぜしめざる、是を持戒は般若波羅蜜を生ずと爲す。　復次に、持戒の人は

ひ、世間の樂を捨てて善道に入り、涅槃を志求し、以て一切を度し、大心にして懈らず、佛を求むるを以て本と爲す。是を持戒は能く精進を生ずと爲す。　復次に、持戒の人は世の苦と老病死の患とを疲厭して、心に精進を生じ、必ず自ら脫せんことを求め、亦以て人を度す。譬へば野干が林樹の間に在りて、師子及び諸の虎豹に依隨して、其の殘肉を求め、以て自ら存らへ活るが如し。有時は空乏して、夜半に城を踰え、深く人舍に入りて、肉を求むれども得ず、避處に睡り息ひ、覺めざるに夜竟り、惶怖すること計り無し。走れば則ち自ら免れざるを慮り、住まれば則ち死痛を懼畏す。便ち自ら心を定めて、詐り死して地に在り、衆人來り見る。一人有りて言く「我は野干の耳を須ゐん」と、即便ち截り取る。野干は自ら念ずらく、「耳を截らるるは痛しと雖も、但だ身をして在らしめん」と。次に一人有りて言く、「我は野干の尾を須ゐん」と便ち復截り去る。野干復た念ずらく、「尾を截らるるは痛しと雖も、猶是れ小事なり」と。次に一人有りて言く、「我は野干の牙を須ゐん」と。野干は心に念ずらく、「取る者は轉多し、儻し我が頭を取らば則ち活路なけん」と。即ち地より起つて、其の智力を奮ひ、間關の徑を絕踊し、自ら濟ふことを得たり。行者の心、苦難を脫せんことを求むるも、亦復た是の如し。若し老至る時は、猶ほ故に自ら寬にして、慇懃に決斷し精進すること能はず、病も亦た是の如く差ゆる期あるを以て、未だ決計すること能はず、死の至らんとする時、自ら冀なきことを知り、便ち能く自ら勉めて果敢にして、慇懃に大に精進を修し、死地の中より涅槃に至ることを得るなり。　復次に、持戒の法は、譬へば人の射るに、先づ平地を得、地平なれば然る後には心は安し、心安ければ然る後には挽き滿ち、挽き滿つれば然る後に陷いること深きが如し。戒を平地と爲し、定意を弓と爲し、挽き滿つるを精進と爲し、箭を智慧と爲す。賊は是れ無明なり。若し能く是の如く力を展べて精進すれば、必ず大道に至り、以て衆生を度せん。　復次に、持戒の人は能く精進を以て自ら五情を制し、五欲を受けず。若し心已に去れば、能く攝して還らしむ。是

べし。」然して後、佛樹の下に坐して魔王を降伏し、諸の魔軍を破り、無上道を成じ、諸の衆生の爲に清淨の法を說き、無量の衆生をして老病死の海を度らしむべし。是を持戒の因緣に檀波羅蜜を生ずと爲す。

云何にして持戒は忍辱を生ずるや。持戒の人は心に自ら念じて言く、「我、今戒を持つは心を治めんが爲の故なり。若し戒を持つて忍ぶこと無くんば、當に地獄に墮すべし。戒を破らずと雖も、忍ぶこと無きを以ての故に、惡道を免れず、何ぞ縱ままに恣つて自ら心を制せざる可んや。但だ心を以ての故に三惡趣に入る。是故に應當に好んで、自ら勉め、强いて勤めて、忍辱を修すべし」と。

復次に、行者は戒德を堅强ならしめんと欲せば、當に忍辱を修すべし。所以いかんとなれば忍は大力なり、能く戒を牢固にし、動搖せざらしむるを以てなり。復た自ら思惟すらく、「我れいま出家して形は俗と別なり、豈に心を縱まゝにして世人の法の如くなる可んや。宜しく自ら勉勵して、忍を以て心を調へ、身口に忍ぶを以て、心にも亦た忍を得べし。若し心に忍ばざれば、身口も亦爾なり。」と、是の故に行者は當に身と口と心とに忍びて、諸の恚根を絕たしむべし。　復次に、是の戒は略して說けば則ち八萬あり、廣く說けば則ち無量なり。我當に云何にして能く具さに、是無量の戒法を持たんや。唯當に忍辱ならば衆戒自ら得べし。譬へば人あり、罪を王に得るに、王は罪人を以て之を刀車に載す。六邊の利刄の間は、間を容れず、奔逸し、馳走して、行つて路を擇ばざるが如し。若し能く身を持たば、刀の爲に傷けられず。是れ則ち殺せども死せざるなり。持戒の人も亦復た是の如く戒を利刀と爲し、忍を持身と爲す。若し忍心固からざれば、戒も亦た人を傷つく。又復た譬へば老人の夜行くに、杖なければ則ち蹶くが如し。忍を戒の杖と爲せば、人を扶けて道に至り、福樂の因緣は動搖すること能はず。是の如きの種種を、名けて持戒は羼提波羅蜜を生ずと爲す。

云何にして持戒は精進を生ずるや。持戒の人は放逸を除去し、自ら力めて懃修し、無上の法を習

初めて法輪を轉じたまへる、八萬の諸天の得道せる者是なり。菩薩は戒を護つて身命を惜まず、決定して悔いず、其の事是の如し。是を尸羅波羅蜜と名く。　復次に、菩薩は戒を持ち、佛道の爲の故に大要誓を作さく、「必ず衆生を度し、今世・後世の樂を求めず、名聞・虚譽の法の爲にせざるが故に、亦た自ら早く涅槃を求むることを爲さず、但だ衆生が長流に沒在し、恩愛に欺かれ、愚惑に誤らるるが爲に、我當に之を渡して彼岸に到らしむべし」と。一心に持戒して善處に生じ、善處に生ずるが故に善人を見る。善人を見るが故に智慧を生じ、智慧を生ずるが故に六波羅蜜を行ずることを得、六波羅蜜を行ずるが故に佛道を得。是の如きの持戒を名けて、尸羅波羅蜜と爲す。

復次に、菩薩は戒を持つに、心に善と樂しんで清淨なり。惡道を畏るゝが爲にせず、亦た天に生ずるが爲にせず、但だ善淨を求めて戒を以て心に熏じ、心をして樂善ならしむ、是を尸羅波羅蜜と爲す。　復次に、菩薩は大悲心を以て戒を持ち、佛道に至ることを得、是を尸羅波羅蜜と名く。

復次に、菩薩は戒を持ちて、能く六波羅蜜を生ず、是を則ち名けて尸羅波羅蜜と爲す。

云何なれば持戒は能く戒を生ずるの因となるや。五戒は沙彌戒を得、沙彌戒に因つて律儀戒を得、律儀戒に因つて禪定戒を得、禪定戒に因つて無漏戒を得。是を戒は戒を生ずと爲す。

云何にして持戒は能く檀を生ずるや。檀に三種あり、一には財施、二には法施、三には無畏施なり。戒を持ち、自ら檢めて、一切衆生の財物を侵さゞる、是れを財施と名く。衆生の見る者、其の所行を慕ひ。又爲に法を説いて、其をして開悟せしむ。又自ら思惟すらく、「我、當に堅く淨戒を持ちて、一切衆生の與めに供養の福田と作り、諸の衆生をして無量の福を得せしむべし」と。是の如きの種種を名けて法施と爲す。一切衆生は皆死を畏る、戒を持つて害せず、是れ則ち無畏施なり。　復次に、菩薩は自ら念ずらく、「我、當に戒を持ち、此の戒の報を以て、諸の衆生の爲に轉輪聖王と作り、或は閻浮提王と作り、若くは天王と作り、諸の衆生をして財に滿足し、乏短する所なからしむ

巻の第十四

初品第二十三……讃尸羅波羅蜜義の餘

問うて曰く、已に尸羅の相を知る、云何なるを尸羅波羅蜜と爲すや。

答へて曰く、有人は言ふ、「菩薩は戒を持つに、寧ろ自ら身を失ふとも小戒をも毀らず、是を尸羅波羅蜜と爲す」と。上の蘇陀蘇摩王經の中に說くが如くんば、身命を惜まずして以て禁戒を全うす。菩薩の本身、曾つて大力の毒龍と作るが如し。若し衆生前に在らば、身力弱き者は、眼に視て便ち死し、身力强き者は、氣往いて而して死す。是の龍は一日戒を受け、出家して靜を求め、林樹の間に入つて思惟し、坐すること久うして、疲懈して睡る。龍の法は、睡る時形狀蛇の如し、身に文章あり七寶の色を雜ゆ。獵者之を見て驚喜し言つて曰く、「此の希有にして得難きの皮を以て、國王に獻上し、以て服飾と爲さば、亦宜しからずや」と。便ち杖を以て其の頭を按じ、刀を以て其の皮を剝ぐ。龍は自ら念言すらく、「我が力は如意の如し。此の國の傾け覆すこと其れ掌を反すが如し。此の人は小物なり、豈能く我を困めんや。我戒を持つを以ての故に、此の身を計らずして、當に佛語に從ふべし」と。是に於て自ら忍び、目を眠つて視ず、氣を閉ぢて息せず、此の人を憐愍す。持戒の爲の故に一心にして、剝ぐことを受くれども、悔ゆる意を生ぜず。旣にして皮を失ひ、赤肉地に在り。時に日大に熱し、土中を宛轉して大水に趣かんと欲す。諸の小蟲の來つて其身を食するを見れども、持戒の爲の故に、復た敢へて動かず。自ら思惟して言く、「いま我が此身を以て諸の蟲に施すは、佛道の爲の故なり。今肉を以て施して、以て其身を充たし、後、佛と成るの時、當に法施を以て、以て其の心を益すべし」と。是の如く誓ひ已つて、身乾れ命絕え、卽ち第二忉利天上に生ぜり。爾の時の毒龍は釋迦文佛是なり。是時の獵師は提婆達等の六師是なり。諸の小蟲の輩は、釋迦文佛の

那は[三八]六法を受くること二歳なり。

問うて曰く、沙彌は十戒にして便ち具足戒を受くるなり。比丘尼の法の中に、何を以てか式叉摩那あつて、然る後に具足戒を受くることを得るや。

答へて曰く、佛、世に在す時、一の長者の婦あり。懷姙を覺らずして出家し、具足戒を受け、其の後、身大なること轉た現はる。諸の長者、比丘を譏り嫌へり。此に因つて二歳、戒を學び六法を受くること有りて、然る後に具足戒を受く。

問うて曰く、若し譏嫌の爲ならば、式叉摩那も豈に譏を致さゞらんや。

答へて曰く、式叉摩那は未だ具足戒を受けず、譬へば小兒の如く、亦た給使の如し。罪穢ありと雖も、人譏嫌せず。是を式叉摩那、六法を受くと名く。是の式叉摩那に二種あり、一に十八歳の童女は、六法を受け、二に夫家は十歳にして六法を受くることを得。若し具足戒を受けんと欲すれば、二部の僧の中に應じて[三九]五衣鉢盂を用ひ、比丘尼を和上及び敎師と爲し。比丘を戒師と爲す。餘は受戒の法の如し。略說すれば則ち五百戒、廣說すれば則ち八萬の戒あり。第三羯磨訖つて、卽ち無量の律儀を得て比丘尼を成就す。比丘は則ち三衣、鉢盂[四〇]三師、十僧あり。受戒の法の如し。略說すれば二百五十、廣說すれば則ち八萬なり。[四一]第三羯磨訖つて、卽ち無量の律儀の法を得、是を總じて名けて戒と爲し、是を尸羅と爲す。

【三八】六法。染心相觸、盜人四錢、斷畜生命、小妄語、非時食、飮酒。

【三九】五衣。一、僧伽梨 Saṃ=ghāṭ(ī)衆聚時衣、二、欝多僧伽、(Uttarāsaṅga)上衣三、安陀會(Antarvāsaka)中著衣。以上を三衣と云ひ、比丘の所用なり。比丘尼には、更に四、祇支(Saṃkakṣikā)袈裟の下掛、五、覆肩を加へ、以上を以て五衣とす。

【四〇】三師十僧。比丘が具足戒を受くるに、要する者、三師とは、(一)、戒和尙、授戒師である。(二)、羯磨師、表白、宣告等を讀む者、(三)敎授師、威儀作法を敎ゆるもの。これに七僧の列席證明者を要す、合せて十僧となる。

【四一】第三羯磨。授戒式中の宣告の一部。

宿命を憶念するに、時に戲女と作り、種種の衣服を著て舊語を說く。或る時は比丘尼の衣を著て、以て戲笑を爲す。是の因緣を以ての故に、迦葉佛の時、比丘尼と作り、自ら貴姓・端正なるを恃んで心に憍慢を生じ、禁戒を破す。戒を破するの罪の故に、地獄に墮して種種の罪を受く。罪を受け畢竟りて、釋迦牟尼佛に値ひたてまつり、出家して、六神通の阿羅漢道を得たり。是を以ての故に知る、出家して戒を受くれば、復た破戒すと雖も、戒の因緣を以ての故に阿羅漢道を得ることを。若し但だ惡を作るのみにして戒の因緣なければ道を得ざるなり。我乃ち昔時世世に地獄に墮し、地獄より出でて惡人と爲り、惡人死して還つて地獄に入り、都て所得なし。今此を以て證知するに、出家して戒を受くれば、復た戒を破ると雖も、是の因緣を以て道果を得べし」と。　復次に、佛、祇洹に在せしとき、一の醉へる婆羅門あり。來つて佛の所に到り、比丘と作らんことを求む。佛、阿難に勅して、與めに剃頭して法衣を著せしむ。醉酒既に醒め、己の身の忽ちに比丘と爲れることを驚き怪しみ、即便ち走り去る。諸の比丘、佛に問ふ、「何を以てか、此の醉へる婆羅門に比丘と作ることを聽したまひしや」と。佛の言はく、「此の婆羅門は無量劫の中に、初より出家の心なし。今醉に因るが故に、暫らく微心を發す、是の因緣を以ての故に、後に當に出家得道すべし。是の如き種種の因緣により、出家の利・功德は無量なり。是を以ての故に白衣は五戒ありと雖も、出家に如かず。

是の出家の律儀に四種あり。沙彌・沙彌尼と式叉摩那と比丘尼と比丘となり。云何なるが沙彌と沙彌尼の受戒の法なるや。白衣來つて出家せんことを求めんと欲せば、應に二師を求むべし。一の[三六]和上と一の[三七]阿闍梨となり。和尚は父の如く、阿闍梨は母の如し。本生の父母を棄つるを以て、當に出家の父母を求むべし。袈裟を著し、鬚髮を剃除し、兩手を以て和尚の兩足を捉ふべし。何を以てか足を捉ふるや。天竺の法は、足を捉ふるを以て第一の恭敬供養と爲す。阿闍梨は應に十戒を敎ふること、受戒の法の如くなるべし。沙彌尼も亦是の如し。唯比丘尼を以て和上と爲す。式叉摩

【三六】和上。和尚とも書く、梵語では（Upadhyāya）。
【三七】阿闍梨。Ācārya 教師又は戒師と譯す。

『林樹の間に閑坐し、寂然として衆悪を滅し、恬澹として一心なるを得、斯の樂は天の樂に非ず。人は富・貴・利・名・衣・好牀蓐を求む。斯の樂は安隱にあらず、利を求めて厭足すること無ければなり。

納衣にして乞食を行ずるものは、動くも止るも心常に一なり、自ら智慧の眼を以て、諸法の實を觀知し、種種の法門の中に皆以て等しく觀入し、解慧の心寂然として三界に能く及ぶもの無し。』

是を以ての故に知る。出家は、戒を修し道を行ずるは易しと爲すことを。　復次に、出家は戒を修して無量の善律儀に得、一切を具足し滿たす。是れを以ての故に、白衣等は應に出家して具足戒を受くべし。　復次に、佛法の中にて、出家の法は第一にして、修し難し。[三四]閻浮呿提梵志、舍利弗に問ふ、「佛法の中に於て、何か最も難きや。」舍利弗、答へて曰く、「出家を難しと爲す。」又問ふ、「出家に何等の難かある。」答へて曰く、「出家して法を樂しむを難しと爲す。」「既に法を樂しむを得れば、復た何をか難しと爲す。」「諸の善法を修すること難し。」是を以ての故に應に出家すべし。復次に、若し人出家する時は、魔王は驚き愁えて言く、「此の人は諸の結使を薄からしめんと欲す、必ず涅槃を得て、僧寶の數の中に墮せん」と。　復次に、佛法の中にて出家の人は破戒して罪に墮すと雖も、罪畢れば解脱することを得。[三五]優鉢羅華比丘尼本生經の中に說くが如くんば、佛の世に在す時、此の比丘尼は六神通の阿羅漢を得、貴人の舍に入りて常に出家の法を讃す。諸の貴人の婦女に語つて言く、「姉妹よ出家すべし。」諸の貴婦女言く「我等は少壯にして容色盛美なり。戒を持つこと難しと爲す、或は當に戒を破るべし。」比丘尼言く、「但だ出家せよ、戒を破らば便ち破れ。」問うて言く、「破戒は當に地獄に墮すべし、云何んぞ破る可き。」答へて言く、「地獄に墮せば便ち墮せよ。」諸の貴婦女は皆之を笑つて言く、「地獄は罪を受く、云何んぞ墮す可き。」比丘尼言く、「我、自ら本の

【三四】閻浮呿提（Jambukha=daka）。遊行僧にして閻浮樹(Jambu)の果を食ふ者の意味、Nālaka 聚落に住す。

【三五】優鉢羅比丘尼。蓮華色比丘尼、既註。

問うて曰く、八正道の如きは、正語・正業は中に在り、正見・正行は初に在り、今何を以てか戒を八正道の初門と爲すと言ふや。

答へて曰く、數を以て之を言へば、大なる者を始と爲す、正見は最大なり、是の故に初に在り。復次に、行道の故に見を以て先と爲す。諸法の次第の故に、戒は前に在り。譬へば屋を作るに棟梁は大なりと雖も、地を以て先と爲すが如し。

上上の人の持戒は、衆生を憐愍し、佛道の爲の故なり。諸法を知り實相を求むるを以ての故なり。惡道を畏れず、樂を求めざるが故なり。是の如きの種種は、是れ上上の人の持戒なり。是の四は總じて優婆塞の戒と名く。

出家の戒にも亦四種あり。一には[三一]沙彌、[三二]沙彌尼戒、二には[三三]式叉摩那戒、三には比丘尼戒、四には比丘僧戒なり。

問うて曰く、若し居家の戒は天上に生ずることを得、菩薩の道を得、亦た涅槃に至ることを得ば、復た何ぞ出家の戒を用ひん。

答へて曰く、倶に得度すと雖も、然も難易あり。居家は生業の種種の事務あり。若し心を道法を專らにせんと欲せば家業則ち廢れ。若し專ら家業を修めんと欲せば、道事則ち廢る。取らず捨てずして乃ち行法すべし、是を名けて難と爲す。若し出家せば俗を離れ諸の紛亂を絕ち、一向專心なれば、道を行ずること易しと爲す。復次に、居家は憒鬧にして事多く務多く、結使の根、衆惡の府なり。是を甚だ難しと爲す。若し出家すれば、譬へば人あり、出でて空野無人の處に在るが如し、其の心を一にし、思なく慮なく、內想旣に除き、外事亦去る。偈に說くが如し、

【三一】沙彌(Śrāmaṇera)。男子の出家して十戒を受けしもの。大僧に策勵せらるゝより、勤策男など譯す。沙彌戒とは十戒を指す。

【三二】沙彌尼(Śrāmaṇerikā)。女人の沙彌。

【三三】式叉摩那(Śikṣamāṇā)。學法女、正學女など譯す。沙彌尼にして具足戒を受けんと欲する者、滿二ケ年間、別に六法を學ばしめ、胎の有無と行の眞固を驗するのである。これは女子が姙娠しながら出家して後に却て、敎團の惡評を招いたから特に女子の出家に際して制したのである。

法の中の如きは、日に好惡なし。世の惡日の因緣に隨ふが故に、齋を持ち、戒を受くることを敎ゆるのみ。

問うて曰く、五戒と一日戒とは何れをか勝れたりと爲すや。

答へて曰く、因緣あるが故に、二戒倶に等し。但だ五戒は身を終るまで持ち、八戒は一日持つのみ。又、五戒は常に持てども、時は多くして戒は少なし、一日戒は時は、少なくして戒は多し。　復次に、若し大心なければ、復た身を終るまで戒を持つと雖も、大心ある人の、一日戒を持つには如かず。譬へば軟夫を將と爲せば、復た兵を持つこと終身なりと雖も、智勇足らずして、卒に功名なきが如く、若し、英雄奮發すれば、禍亂立ちどころに定まり、一日の勳功、天下を蓋ふが如し。

是の二種の戒を居家の優婆塞の法と名く。居家の持戒に凡そ四種あり。下・中・上あり、上上あり。下の人の持戒は今世の樂の爲の故なり。或は稱譽名聞を怖畏する爲の故なり。或は家法の爲に曲げて他意に隨ふが故なり。或は苦役を避けて厄難を離れんことを求むるが故なり。是の如きの種種は是れ下人の持戒なり。中の人の持戒は、人中の富貴・歡娯・適意が爲の故なり。或は後世の福樂を期し、已に剋ち自ら勉めて苦を爲す。日は少なけれども得る所は甚だ多し。是の如く思惟堅固にして戒を持てば、譬へば商人の遠く出で深く入れば、利を得ること必ず多きが如く、持戒の福が、人をして後世の福樂を受けしむるも亦復是の如し。上の人の持戒は涅槃の爲の故なり。諸法は一切無常なりと知るが故なり。苦を離れ常に無爲を樂しむことを求めんと欲するが故なり。　復次に、持戒の人は其の心悔いず、心に悔いざるが故に喜樂を得。喜樂を得るが故に一心を得。一心を得るが故に實智を得。實智を得るが故に厭心を得。厭心を得るが故に離欲を得。離欲を得るが故に解脫を得。解脫を得るが故に涅槃を得。是の如く、持戒を諸の善法の根本と爲す。

復次に、持戒は八正道の初門たり、入道の初門は必ず涅槃に至る。

縁を以て、悪鬼遠く去つて、住處安隱なり。是を以ての故に六日、齋を持ち、戒を受くれば、福を得ること增多し。

問うて曰く、何を以ての故に、諸の惡鬼の輩は此の六日を以て、人を惱し害するや。

答へて曰く、天地本起經に說く、劫の初めて成りし時、異れる梵天王の子あり、諸の鬼神の父たり。梵志の苦行を修して、天上の十二歲に滿つ、此の六日に於て、肉を割き血を出し、以て火中に著く。是を以ての故に諸の惡鬼神は、此の六日に於て輙ち勢力あり。

問うて曰く、諸の鬼神の父は、何を以てか、此の六日に於いて身の肉血を割いて以て、火中に著けしや。

答へて曰く、諸神の中[三〇]摩醯首羅神は、最大にして第一なり。諸神には皆な日の分あり、摩醯首羅は一月に四日の分あり、八日と二十三日と十四日と二十九日となり。餘の神は一月に二日の分あり。月の一日と十六日と、月の二日と十七日となり。其の十五日と三十日とは一切の神に屬す。摩醯首羅は諸神の主たり。又、日多きことを得るが故に、其の四日を數へて齋と爲す。二日は是れ一切諸神の日にして、亦數へて以て齋と爲す。是の故に諸の鬼神は、此の六日に於て輙ち力勢あり。

復次に、諸の鬼神の父は、此の六日に於て肉を割き、血を出し、以て火中に著け、十二歲を過ぎ已つて、天王來り下つて、其の子に語つて言く、「汝、何の願をか求む」と。答へて言く、「我、子あらんことを求む」と。天王言く、「仙人の供養の法は、燒香・甘果と諸の淸淨の事を以てす。汝云何なれば血肉を以て火中に著け、罪惡の法の如くし、汝善法を破つて樂しんで惡事を爲すや。汝をして惡子を生み、肉を噉ひ血を飲ましめん」と。說くに當り、是の時、火中より八大鬼あつて出づ。身の黑きこと墨の如く、髮は黃に、眼は赤くして、大なる光明あり、一切の鬼神は皆此の八鬼より生ず。是を以ての故に、此の六日に於て、身の肉血を割いて、以て火の中に著くれば勢力を得。佛

【三〇】摩醯首羅(Maheśvara)。大自在神。

の中に壽を盡くすまで飲酒すべからず。是の事、若し能ふならば、當に諾すと言ふべし。是の優婆塞の五戒は、壽を盡くすまで受持して、當に三寶たる、佛寶・法寶・比丘僧寶に供養し、福業を勤修して、以て佛道を求むべし。」

問うて曰く、何を以ての故に[二八]六齋日に八戒を受け、福德を修するや。

答へて曰く、是の日は、惡鬼、人を逐うて人命を奪はんと欲し、疾病凶衰、人をして不吉ならしむ。是の故に劫初の聖人は、人をして齋を持し、善を修し福を作すを教へて、以て凶衰を避けしむ。是の時の齋法は八戒を受けず、直に一日食せざるを以て齋と爲す。後に佛出世して、教へて之に語つて言はく、「汝當に一日一夜、諸佛の如く八戒を持し、(日)中を過ぎて食せざるべし」と。是の功德は人を將ゐて涅槃に至らしむ。四天王經の中に佛の說きたまふが如くんば、月の六齋日には、使者、太子及び四天王は、自ら下つて、衆生の布施し、持戒し、父母に孝順することを觀察し、少なければ便ち忉利に上つて、以て帝釋に啓す。帝釋諸天は、心に皆悅ばずして言く「阿修羅の種は多く、諸天の種は少なし」と。若し布施し、持戒し、父母に孝順すること多ければ、諸天帝釋は心に皆歡喜して、說いて言く、「天の衆を增益し、阿修羅を減損す」と。是の時に釋提婆那民は諸天の歡喜するを見て、此の偈を說いて言く、

『六日と神足の月に、清淨戒を受持すれば、是の人は壽終つて後、功德必らず我が如くならん。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、「釋提桓因は是の如きの偈を說くべからず、所以いかんとなれば、釋提桓因は三衰三毒未だ除かず、云何にして妄りに一日の戒を持てば、功德福報必らず我が如くなるを得んと言はん」と。若し此の戒を受持すれば、心は應に佛の如くなるべし、是れ則ち實說なり。諸大尊天は歡喜する因緣の故に、福增多きことを得るなり。　復次に、此の六齋日には惡鬼人を害し、一切を惱亂す。若し所在の丘聚・郡縣・國邑に、齋を持ち戒を受け善を行ずる人あれば、此の因

【二八】　六齋日。每月の八、十四、十五、廿三、廿九、三十、の六日なり。この六齋日は古來印度では四天王が人の善惡を伺ふ日、又は惡鬼が人を伺ふ日なりとせられ、諸事を愼み、特に正午を過ぎて一切の食物を絕つ故に齋日と云ふ。佛陀はこの習慣を持戒に轉用されたのである。

【二九】　神足月。また神變月と云ふ。正、五、九の三長齋月の異名、この月は諸天、神足を以て四天下を巡行する故に神足月と云ふ。この三ケ月は、每日正午を過ぎて食を取らず故に長齋月と云ふ。

花の瓔珞を著けず、香を身に塗らず、香熏の衣を著けざるも亦是の如し。諸佛の壽を盡くすまで、自ら歌舞し樂を作したまはず、往つて觀聽したまはざりしが如く、我某甲、一日一夜自ら歌舞し、樂を作さず、往つて觀聽せざるも亦是の如し、已に八戒を受けたり。諸佛の壽を盡くすまで[二六]中を過ぎて食したまはざりしが如く、我某甲、一日一夜、中を過ぎて食せざることも亦是の如し、我某甲、八戒を受行し、隨つて諸佛の法を學するを名けて布薩と爲す。願くは是の布薩を持つて福に報ひられ、願はくは生生に三惡八難に墮せざらん。我も亦た轉輪聖王、梵釋天王の世界の樂を求めず、願はくは諸の煩惱を盡くし、[二七]薩婆若を逮得して佛道を成就せん」と。

問うて曰く、云何に五戒を受くるや。

答へて曰く、五戒の法を受くるには、長跪し合掌して言く、「我某甲、佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依す」と。是の如く二たびし、是の如く三たびす。「我某甲、佛に歸依し竟り、法に歸依し竟り、僧に歸依し竟んぬ」と。是の如く二たびし、是の如く三たびす。「我は是れ釋迦牟尼佛の優婆塞なり。我を證知したまへ、我某甲、今日より壽を盡くすまで歸依す。」と。戒師は應に言ふべし、「汝、優婆塞よ聽け、是の多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀は、人を知り人を見たまひ、優婆塞の爲に五戒を說きたまふこと是の如し。是を汝壽を盡くすまで持てよ。何等か五なる。壽を盡くすまで殺生せず、是れ優婆塞の戒なり、是の中に壽を盡くすまで故らに殺生すべからず。是の事、若し能ふならば、當に諾すと言ふべし。壽を盡くすまで盜まず、是優婆塞の戒なり。是の中に壽を盡くすまで盜すべからず。是の事、若し能ふならば、當に諾すと言ふべし。壽を盡くすまで邪婬せず、是れ優婆塞の戒なり。是の中に壽を盡くすまで邪婬すべからず、是事若し能ふならば當に諾すと言ふべし。壽を盡くすまで妄語せず、是れ優婆塞の戒なり。是の中に壽を盡くすまで妄語すべからず。是の事、若し能ふならば、當に諾すと言ふべし。壽を盡くすまで飲酒せず、是れ優婆塞の戒なり。是

【二六】「中を過ぎて」、午後。

【二七】薩婆若。一切智なり。既註。

を最と爲すを以て、若し天上の種種の快樂を聞かば、便ち能く尸羅を受け行ひ、後に天上の無常なるを聞いて、厭患の心を生じ、能く解脱を求め、更に佛の無量の功德を聞いて、若し慈悲心生ずれば、尸羅波羅蜜に依つて、佛道に至ることを得。是を以ての故に、尸羅の報を說くと雖も咎なし。

問うて曰く、白衣の居家は、唯だ此の五戒のみなりや、更に餘の法ありや。

答へて曰く、有り。一日戒と六齋日を持てば功德無量なり。若し十二月一日より十五日に至るまで、此の戒を受持すれば、其の福甚だ多し。

問うて曰く、云何に一日戒を受くるや。

答へて曰く、一日戒の法を受くるには、長跪し合掌して、應に是の如く言ふべし。「我某甲、今一日一夜、佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依す」と。是の如く二たびし、是の如く三たび歸依す。「我某甲、佛に歸依し竟り、僧に歸依し竟る」と。是の如く二たびし、是の如く三たび歸依し竟る。「我某甲、若しくは身業不善、若くは口業不善、若くは意業不善にして、貪欲・瞋恚・愚癡の故に、若くは今世に、若くは過世に、是の如きの罪あり。今日誠心に懺悔す、身淸淨に、口淸淨に、心淸淨ならん。八戒を受行するは是れ則ち[三五]布薩なり。諸佛の壽を盡くすまで殺生したまはざりしが如く。我某甲、一日一夜、生を殺さゞるも亦是の如し。諸佛の壽を盡くすまで盜みたまはざりしが如く、我某甲、一日一夜、盜まざるも亦是の如し。諸佛の壽を盡くすまで婬したまはざりしが如く、我某甲、一日一夜婬せざるも亦是の如し。諸佛の壽を盡くすまで妄語したまはざりしが如く、我某甲、一日一夜妄語せざるも亦是の如し。諸佛の壽を盡くすまで飮酒したまはざりしが如く、我某甲、一日一夜飮酒せざるも亦た是の如し。諸佛の壽の盡くすまで高大なる床の上に坐したまはざりしが如く、我某甲、一日一夜高大なる床の上に坐せざるも亦是の如し。諸佛の壽を盡くすまで、花の瓔珞を著けたまはず、香を身に塗りたまはず、香熏の衣を著けたまはざりしが如く、我某甲、一日一夜

【三五】布薩。割註あり「秦に共住と云ふ」旣註。

天樹は自然に生じ、花鬘及び瓔珞あり、丹葩は燈の照すが如く、衆色相、間錯せり。
天衣は無央數にして、其の色は若干種。鮮白は天日に映じて、輕密にして間[二二]壟なく。
金色は繡文に映え、斐亹として雲氣の如し、是の如きの上妙の服、悉く天樹より出づ。
明珠は天耳の[二三]璫、寶礫は手足に曜き、心の好愛する所に隨つて、亦た天樹より出づ。
金の華、瑠璃の莖、金剛を華の鬚と爲し、柔軟の香は芬熏として悉く寶池より出づ。
琴瑟・箏・箜・篌は、七寶を校飾と爲し、器妙なる故に、音清し。皆な亦た樹より出づ。
[二四]波絲質姤樹は天上の樹中の王なり、彼の歡喜園に在つて、一切比するもの有ること無し。
持戒を耕田と爲し、天樹は中より出づ、天厨の甘露味は、飲食すれば飢渴を除き、天女には監礙無く、亦た妊身の難無し。
嬉怡して縱まゝに逸樂し、食すれども便利の患なく、戒を持つて常に心に攝し、生を自恣の地に得て、無事にして亦無難なり、常に樂志を肆まゝにすることを得。
諸天は自在を得て、憂苦復た生ぜず、欲する所念に應じて至り、身光は幽冥を照す。是の如きの種種の樂は、皆な施と戒とに由る。若し此の報を得んと欲せば、當に勤めて自ら勉勵すべし。』

問うて曰く、いま尸羅波羅蜜は、當に以て成佛すべしと說けるに、何を以てか乃ち天福を讚するや。

答へて曰く、佛の言はく、「三事は必ず報果を得ること虛しからず、布施は大富を得、持戒は好處に生じ、修定は解脫を得。若し單に尸羅を行ぜば、好處に生ずることを得、若し修定と智慧と慈悲と和合すれば三乘道を得」と。今は但だ持戒を讚す。現世の功德は、名聞安樂にして、後世の得報は、偈に讚する所の如し。譬へば小兒は蜜を苦藥に塗れば、然る後には能く服するが如し。今先きに戒の福を讚すれば、然る後には人は能く戒を持ち、能く戒を持ち已りて、大誓願を立て、佛道に至ることを得。是を尸羅は尸羅波羅蜜を生ずと爲す。又一切の人は皆な樂に著し、世間の樂は天上

【二二】 壟。小高きところ。うね。
【二三】 璫。耳飾。
【二四】 波絲質姤樹 (Pārijātaka)。晝度と譯す。忉利天の第一の樹、圍七由旬、高百由旬、枝葉四布五十由旬。

無く、諸の善功德を奪ふ。愧を知る者は飲まず。』

是の如きの四罪を作さゞるは、是れ身の善律儀にして、妄語を作さゞるは、是れ口の善律儀なり、名けて優婆塞の五戒律儀と爲す。

問うて曰く、若し八種の律儀及び淨命は、是を名けて戒と爲さば、何を以ての故に、優婆塞は口律儀の中に於て[二〇]三律儀及び淨命なきや。

答へて曰く、白衣の居家は、世間の樂を受けて、兼ねて福德を修す。盡く戒法を行ずること能はず、是の故に佛は五戒を持たしめたまふ。 復次に、四種の口業の中に、妄語は最も重し。 復次に、妄語は心に生じて故らに作す。餘は或は故らに作し、或は故らに作さず。 復次に、但だ妄語を說けば、已に三事を攝す。 復次に、諸の善法の中に、實を最大と爲す。若し實語を說けば、[二一]四種の正語は皆已に攝するを得。 復次に、白衣は世に處して當に官理し、家業を務め使を作すべし、是の故に惡口ならざるの法を持ち難し。妄語を故らに作すは事重し、故に作すべからず。

是の五戒に五種の受(け方)あり、五種の優婆塞と名く。一には一分を行ふ優婆塞、二には少分を行ふ優婆塞、三には多分を行ふ優婆塞、四には滿行の優婆塞、五には婬を斷ずる優婆塞なり。一分を行ふとは、五戒の中に於て、一戒を受けて四戒を受持すること能はず。少分を行ふとは、若くは二戒を受け、若くは三戒を受く。多分を行ふとは、四戒を受く。滿行とは、盡く五戒を持つ。婬を斷ずとは、五戒を受け已つて、師の前にて更に自ら誓言を作して言く、「我は自らの婦に於ても、復た婬を行ぜず」と。是を五戒と名く。佛の偈もて說きたまへるが如し。

『殺さず亦た盜まず、亦邪婬すること有らず、實語し飲酒せず、正命にして淨心を以てす。

若し能く此を行ぜば、二世の憂畏を除き、戒福、恒に身に隨ひ、常に天人と俱ならん。

世間、六時の華は、榮曄、色相發す、此の一歲の華を以て、天上にては一日に具はる。

[二〇] 三律儀。不惡口と不兩舌と不綺語とを指す。八種律儀は殺生、不與取、非梵行、虛誑語、飲諸酒、塗飾香鬘舞歌觀聽、眠座高廣嚴麗床上、食非時食。

[二一] 四種正語は、さきの三律儀に不誑語を加ふ。

ば、酒に三十五の失あり。何等か三十五なる。一には現世に財物、虚竭す。何となれば人酒を飲んで醉へば、心に節限なく、用を費すこと度なきを以ての故なり。二には衆病の門なり。三には闘諍の本なり。四には裸露にして恥なし。五には醜名惡聲にして、人の敬はざる所なり。六には智慧を覆ひ沒す。七には應に得らるべき物を得ず、已に得る所の物は散失す。八には伏匿の事を、盡く人に向つて說く。九には種種の事業廢して成辦せず。十には醉は愁の本と爲る。何となれば、醉の中には失すること多く、醒め已つて慚愧憂愁すればなり。十一には身力轉た少し。十二には身色壞る。十三には父を敬ふことを知らず。十四には母を敬ふことを知らず。十五には沙門を敬はず。十六には婆羅門を敬はず。十七には伯叔及び尊長を敬はず。何となれば醉悶恍惚として別つ所なきを以てなり。十八には佛を尊敬せず。十九には法を敬はず。二十には僧を敬はず。二十一には惡人と朋黨す。二十二には賢善を疎遠す。二十三には破戒の人と作る。二十四には無慚無愧なり。二十五には六情を守らず。二十六には色を縱まゝにして放逸なり。二十七には人の憎惡する所にして、之を見ることを喜ばず。二十八には貴重の親屬及び諸の智識の共に擯棄する所なり。二十九には不善の法を行ず。三十には善法を棄捨す。三十一には明人・智士の信用せざる所なり。何となれば酒は放逸なるを以てなり。三十二には涅槃を遠離す。三十三には狂癡の因緣を種ゆ。三十四には身壞れ、命終つて惡道泥犂の中に墮つ。三十五には若し人と爲ることを得ては、所生の處常に當に狂騃なるべし。是の如き等の種種の過失あり、是の故に飲まず。偈に說くが如し。

『酒は覺知の相を失ふ、身色濁つて惡しく、智心動じて亂る、慚愧已に劫かされ、念を失して瞋心を增し、歡を失ひて宗族を毀る。

是の如きを飲と名くと雖も、實に死毒を飲むなり。瞋るべからずして瞋り、笑ふべからずして笑ひ、哭すべからずして哭し、打つべからずして打ち、語るべからずして語り、狂人と異なる

や不や」と問へば、詭つて「在さず」と言ふ。若し在さゞる時、人、羅睺羅に、「世尊、在すや不や」と問へば、詭つて、「佛、在す」と言ふ。有人(之を)佛に語ぐ、佛、羅睺羅に語げたまはく、「澡盤に水を取つて、吾がために足を洗へ」と。足を洗ひ已るや、羅睺羅に語げたまはく、「此の澡盤を覆せ」と。勅の如く即ち覆す。佛の言はく、「水を以て之に注げ」と。注ぎ已れば、問うて言はく、「水は中に入るや不や」と。答へて言く、「入らず」と。佛、羅睺羅に告げたまはく、「無慚愧の人、妄語して心を覆へば、道法の入らざること、亦復た是の如し」と。

佛の說きたまふが如く、妄語に十罪あり。何等をか十と爲す。一には口氣臭し。二には善神之を遠かり、非人便を得。三には實語ありと雖も、人信受せず。四には智人語議すれども常に參豫せず。五には常に誹謗せられ、醜惡の聲周ねく天下に聞ゆ。六には人の敬せざる所にして、敎勅ありと雖も人(これを)承用せず。七には常に憂愁多し。八には誹謗の業因緣を種ゆ。九には身壞し、命終つて、當に地獄に墮すべし。十には若し出でゝ人と爲つては、常に誹謗せらる。是の如きの種種を作さゞる、是を不妄語と爲し、口の善律儀と名く。

不飮酒とは、酒に三種あり。一には穀酒、二には果酒、三には藥草酒なり。果酒とは、蒲桃、阿[一九]梨咤樹果、是の如き等の種種を名けて果酒と爲す。藥草酒とは、種種の藥草を、米麴・甘蔗の汁の中に合和すれば、能く變じて酒と成ること。蹄畜乳酒に同じ、一切の乳熱すれば、中は酒と作るべし。略說すれば若くば乾、若くは濕、若くは淸、若くは濁なり、是の如き等は、能く人の心を動かし、放逸ならしむ。是を名けて酒と爲す。一切飮むべからず。是を不飮酒と名く。

問うて曰く、酒は能く冷を破り、身を益し、心をして歡喜せしむ。何を以ての故に飮まさるや。

答へて曰く、身を益すること甚だ少くして、損する所甚だ多し。是の故に飮むべからず。譬へば美飮の、其中に毒を雜ふるが如し。是れ何等の毒なるか。佛が難提迦優婆塞に語りたまふが如くん

【一九】阿梨陀樹(Ariṣṭaka)。無環と譯す。木槵子のこと。

が如く、叫喚啼哭して、其の夜即ち死し、大蓮華地獄に入れり。一の梵天あり、夜來つて佛に白す、「俱伽離は已に死せり」と。復た一の梵天あり言く、[一八]「大蓮華地獄に墮す」と。其夜過ぎ已つて佛は僧の集るを命じ、之に告げて言はく、「汝等は、俱伽離の墮する所の地獄の壽命の長短を知らんと欲するや不や」と。諸の比丘の言く、「願樂くは聞かんことを欲す」と。佛の言はく、「六十斛の胡麻あり、人あり、百歲にして一の胡麻を取る。是の如くして盡すに至らんに、阿浮陀地獄の中の壽は故らに未だ盡きず。二十の阿浮陀地獄の中の壽を、一の尼羅浮陀地獄の中の壽と爲し、二十の尼羅浮陀地獄の中の壽の如きを、一の阿羅邏地獄の中の壽と爲し、二十の阿羅邏地獄の中の壽を、一の呵婆婆地獄の中の壽と爲し、二十の阿婆婆地獄の中の壽を、一の休休地獄の中の壽と爲し、二十の休休地獄の中の壽を、一の漚波羅地獄の中の壽と爲し、二十の漚波羅地獄の中の壽を、一の分陀梨迦地獄の中の壽と爲し、二十の分陀梨迦地獄の中の壽を、一の摩呵波頭摩地獄の中の壽と爲す。俱伽離は是の摩呵波頭摩地獄の中に墮し、其の大舌を出して、五百の釘を以て之に釘ち、五百の具犂もて之を耕す。爾の時に、世尊は此の偈を說き言はく、

『夫れ士の生るゝや、斧、口の中に在り、身を斬る所以は、其の惡言に由る。呵すべきを讚じ、
讚ずべきを呵し、口に諸惡を集めて、終に樂を見ず。』

『心口の業、惡を生ぜば、尼羅浮獄に墮して、具さに百千世に滿ちて、諸毒の苦痛を受く。若くは阿浮陀に生じては、具さに三十六〔世〕を滿たし、別に更に五世あつて、皆諸の苦毒を受く。』

『心、邪見に依つて、賢聖の語を破るは、竹の實を生じて、自ら其の形を毀つが如し。』

是の如く等の心に疑謗を生じ、遂に決定するに至るも、亦是れ妄語なり。妄語の人は、乃ち佛語すら信受せざるに至る。罪を受くること是の如し、是を以ての故に妄語すべからず。復次に、佛の子、羅睺羅の如きは、其の年幼稚にして未だ口を愼むことを知らず、人來つて之に「世尊、在す

【一八】大蓮華地獄。以下諸地獄に關しては論第十六に說明あり。參照。

たまへり。諸の比丘衆も亦各房を閉ぢて三昧し、皆な覺す可らず。卽ち自ら思惟すらく、「我、故らに來つて佛に見ゆるに、佛は三昧に入りたまふ、且らく還り去らんと欲す」と。卽ち復た念じて言く、「佛の定より起ちたまはんこと、亦た將に久しからじ」と。是に於て小らく住り、倶伽離の房の前に到り、其の戸を扣き、倶伽離に言く、「倶伽離よ、舍利弗・目犍連は、心淨くして柔軟なり、汝之を謗つて、長夜に苦を受くること莫れ」と。倶伽離問うて言く、「汝は是れ何人ぞ」と。答へて言く、「我は是れ梵天王なり」と。問うて言く、「佛は汝が阿那含道を得たりと說きたまへり、汝何を以ての故に來るや」と。梵王は心に念じて、偈を說いて言く、

『無量の法を量らんと欲すれば、應に相を以て取るべからず。無量の法を量らんと欲するも、是の野人は覆沒す。』

是の偈を說き已つて、佛の所に到り、具に其の事を說く。佛の言はく、「善い哉、善い哉、快く此の偈を說けり」と。爾の時に、世尊は復た此の偈を說きたまふ。

『無量の法を量らんと欲すれば、應に相を以て取るべからず。無量の法を量らんと欲するも、是の野人は覆沒す。』

梵天王は、佛說を聽き已つて、忽然として現ぜず、卽ち天上に還る。爾の時に倶伽離は、佛の所に到つて頭面に佛の足を禮し、却いて一面に住す。佛、倶伽離に告げたまはく、「舍利弗と目犍連とは、心淨くして柔軟なり、汝之を謗つて、長夜に苦を受くること莫れ」と。倶伽離、佛に白して言さく、「我は佛語に於て敢へて信ぜざるにはあらざれども、但だ自ら目に見ること了了なり、定んで二人の實に不淨を行へることを知る」と。佛、是の如く、三たび訶したまふに、倶伽離は三たび受けず。卽ち座より起ちて去り、其の房中に還るに、身を擧げて瘡を生ず。始は芥子の如く、漸く大にして豆の如く、棗の如く、㮈の如く、轉た大にして瓜の如く、翕然として爛壞して、大火の燒く

語の人は心に慚愧なく、天道・涅槃の門を閉塞す。此罪を觀知す、是故に作さゞるなり。復次に、實語を觀知すれば、其利甚だ廣し、實語の利は、自ら已より出でゝ、甚だ得易しと爲す、是を一切出家の人の力と爲す。是の如きの功德は、居家・出家の人、共に此の利あり、善人の相なり。復次に、實語の人は、其の心端直にして、苦を免ることを得易し、譬へば稠林に木を曳くに、直きものは出し易きが如し。

問うて曰く、若し妄語に是の如きの罪あらば、人は何を以ての故に妄語するや。

答へて曰く、有る人は愚癡少智にして、事の苦厄に遭へば、妄語して脫せんことを求め、事の發するを知らず、今世に罪を得て、後世に大罪報あることを知らざるなり。復た有る人は、妄語の罪を知ると雖も、慳貪・瞋恚・愚癡多きが故に、而も妄語を作す。復た有る人は、貪・恚ならずと雖も、而も妄りに人の罪を證し、心に實に爾なりと謂ふ。死して地獄に墮つ。提婆達多の弟子、俱伽離の如きは、常に舍利弗と目犍連との過失を求む、是の時二人は、夏安居竟つて諸國に遊行し、天の大雨に値つて陶作の家に到り陶器を盛るの舍に宿す。此舍の中に先より一女人あり、闇中に在つて宿せしが、二人は知らざりき。此の女は、其の夜、夢に不淨を失し、晨朝、水に趣いて澡洗す。是の時、俱伽離は偶行つて之を見る。俱伽離は能く人の交會する情狀を相知すれども、而も夢みると夢みざるとを知らず。是の時に俱伽離は、顧みて弟子に語るらく、「此の女人は昨夜人と情を通ず」と。卽ち女人に問ふ、「汝、何の處に在つて臥すや」と。答へて言く、「我、陶師の屋中に在つて寄宿す」と。又問ふ「誰と共なりしや」と。答へて言く「二比丘」と。是の時、二人は屋中より出づ。俱伽離は見已つて、又以て之を相驗し、意に謂へらく、「二人は必ず不淨をなせり」と。先づ嫉妬を懷き、既に此の事を見て、遍ねく諸の城邑聚落に之を告げ、次に祇桓に到つて此の惡聲を唱ふ。此の中間に於いて、梵天王來つて、佛に見えたてまつらんことを欲す。佛は靜室に入つて寂念として三昧し

人に隨逐して[一六]今世後世の樂を破失することを爲さんや。」と。　復次に、己を易へ處を迴して、以て自ら心を制せよ。若し彼、我が妻を侵さば、我、則ち忿怒せん。我若し、彼を侵さば、彼も亦何ぞ異らん。己を恕して自ら制するが故に、應に作さざるべし。　復次に、佛の說きたまふが如くんば、邪婬の人は、後、[一七]劍樹地獄に墮して、衆苦備に受け、出でゝ人と爲ることを得ては、家道穆じからず、常に婬婦に値ひて、邪僻・殘賊・邪婬、患を爲すこと、譬へば蝮蛇の如く、亦た大火の如く、急に之に避けずんば、禍害將に及ばんとす。　佛の說きたまふが如く、邪婬に十罪あり。　一には常に婬せらるゝ所の夫主は之を危害せんと欲す。二には夫婦穆じからず、常に共に鬪諍す。三には諸の不善法日日に增長し、諸諸の善法に於て日日に損減す。四には身を守護せず、妻子孤寡なり。五には財產日に耗し。六には諸の惡事あつて常に人の爲に疑はる。七には親屬知識の愛喜せざる所なり。八には怨家の業因緣を種ゆ。九には身壞れ、命終り、死して地獄に入る。十には若し出でゝ女人と爲つては、多人共に夫と爲り、若し男子と爲つては、婦貞潔ならず。是の如き等の種種の因緣を作らざる、是を不邪婬と名く。

妄語とは、不淨心をもて、他を誑かさんと欲し、實を覆ひ隱して異語を出す口業を生ず。是を妄語と名く。妄語の罪は言聲を相解するより生ず。若し相解せざれば、實語ならずと雖も妄語の罪なし。是の妄語は、知るを知らずと言ひ、知らざるを知ると言ひ、見るを見ずと言ひ、見ざるを見ると言ひ、聞くを聞かずと言ひ、聞かざるを聞くと言ふ、是を妄語と名く。若し作さゞれば是を不妄語と名く。

問うて曰く、妄語に何等の罪ありや。

答へて曰く、妄語の人は先づ自ら身を誑かして、然して後人を誑かす。實を以て虛と爲し、虛を以て實と爲し、虛實顚倒して善法を受けず。譬へば瓶を覆せば水を入るゝことを得ざるが如し。妄

【一六】制註あり「好名、善譽、身心の安樂は今世の得なり。生天・得道・涅槃の利は後世の得なり。」

【一七】劍樹地獄。十六小地獄の一、地獄の說明は論第十六に出づ、參照。

是を邪婬と名く。若し守護せずと雖も、法を以て守と爲す有り。何をか法守と云ふ。一切の出家の女人と、在家にして一日戒を受くると、是を法守と名く。若くは力を以てし、若しくは財を以てし、若しくは誑き誘ひ、若しくは自ら妻有るも（或は）戒を受け、（或は）娠有り、（或は）兒に乳するを（或はその）非道を、是の如きを犯すものは、名けて邪婬と爲す。是の如く種種乃至華鬘を以て婬女に與へて要を爲し、是の如くして犯す者を名けて邪婬となし。是の如きの種種を作さゞるを名けて不邪婬と爲す。

問うて曰く、人守（を犯せば）人瞋り、法守（を犯せば）法を破る。應に邪婬と名くべし。人自ら妻あるは、何を以て邪と爲すや。

答へて曰く、既に一日戒を聽受して、法の中に墮つれば、本は是れ婦なりと雖も、今は自在ならず、受戒の時過ぐれば則ち法守に非ず。娠有る婦人は、其身重きを以て、本と習ふ所を厭ひ、又娠を傷むと爲す。兒に乳する時其母を婬すれば、乳則ち竭く。又心婬欲に著して復た兒を護らざるを以てなり。非道の處は則ち女根に非ず、女は心に樂はざるに強ひて非理を以てするが故に邪婬と名く。是の事を作さゞるを名けて不邪婬と爲す。

問うて曰く、若し夫主知らず見ずして、他を惱さゞれば、何の罪かあらんや。

答へて曰く、其の邪なるを以ての故に、既に名けて邪と爲し、是を不正と爲す。是の故に罪あり。復次に、此に種種の罪過あり。夫妻の情は異身同體なり、他の愛する所を奪つて、其の本心を破る、是を名けて賊と爲す。復た重罪あり。惡名・醜聲ありて、人の爲に憎まれ、樂は少くして畏るゝこと多く、或は刑戮を畏れ、又夫主・傍人に知られんことを畏れ、多く妄語を懷く。（これ）聖人の訶する所にして、[一五]罪中の罪なり。復次に、婬妷の人は當に自ら思惟すべし、「我が婦も他の妻と同じく女人たり、骨肉情態は彼此異なること無し。而るに我何ぞ横まゝに惑心を生じ、邪意邪婬の

【一五】割註あり「丹註に云ふ。婬罪、邪婬、破戒の故に罪中の罪と名く。」

『飢餓して身、羸瘦し、罪を受けて大苦、劇しくとも、他の物に觸る可らざること、譬へば大火聚の如くなれ。若し他の物を盜取せば、其の主泣き懊惱し、假使ひ天王等にしても、猶亦以て苦と爲す。』殺生の人の罪は重しと雖も、然も殺さるゝ者に於ては是れ賊なり。偸盜の人は一切の有物人中に於ける賊なり、若し餘の戒を犯すも、異國の中に於ては、以て罪と爲さゞる者あり。(然し)若し偸盜する人は、一切の諸國にて罪を治めざる無し。

問うて曰く、劫奪の人は、今世にては、人、其の健なるを讃美する有り。此の劫奪に於て、何を以てか作さゞる[一二]や。

答へて曰く、與へざるを而も盜むは、是れ不善の相なり。劫盜の中には差降ありと雖も、倶に不善と爲す。譬へば美食に毒を雜へ、惡食に毒を雜ふるに、美と惡とは殊なると雖も、毒を雜ふることは異ならざるが如し。亦明と闇とに、火を踏むに、晝と夜とは異なりと雖も、足を燒くことは一なるが如し。今世の愚人は、罪福の二世の果報を識らず、仁慈の心なくして、人の能く力を以て相侵し、他の財を强奪するを見て、讃じて以て强と爲す。諸佛賢聖は、一切を慈愍し、三世の殃禍の朽ちざるものなるを了達して、稱譽したまはざる所なり。是を以ての故に、劫盜の罪は、倶に不善たり、善人行者の爲さゞる所なるを知る。佛の說きたまふが如く、與へざるを取るに十罪あり。何等をか十と爲す。一には物の主、常に瞋る、二には[一三]重く疑ふ。三には[一四]非時に行じて籌量せず。四には惡人に朋黨して賢善を遠離す。五には善相を破る。六には罪を官に得。七には財物沒入す。八には貧窮の業因緣を種ゆ。九には死して地獄に入る。十には若し出でて人と爲りては勤苦して財を求めて、五家の共にする所を、若しくは王、若しくは賊、若しくは火、若しくは水、若しくは愛せざる子に用ひられ、乃至、藏埋して亦た失す。

邪婬とは、若し女人の父母・兄弟・姉妹・夫主・兒子・世間の法・王法に守護せらるゝを、若し犯せば

【一二】「作さゞる」別本には「放捨」とあり。

【一三】重疑。割註あり「丹註に云ふ「重罪は人疑ふ。」」

【一四】大正本「非行時」なれども、別本に「非時行」によりて譯す。

是を盜と名く。若し作さざれば是を不盜と名く。其の餘の方便と計校と、乃至手に捉りて未だ地を離れざるとは、是を助盜の法と名く。財物に二種あり、他に屬するあり、他に屬せざる有り。他に屬する物を取るは、是れを盜罪と爲す。他に屬する物にも亦二種あり。一は聚落の中、二は空地なり。此の二種の物を盜心もて取れば、盜罪を得。若し物、空地に有らば、當に檢校して、是の物の誰の國に近きかを知るべし。是物、應當に屬有らば取るべからず。毘尼の中に種種の不盜を說くが如し、是を不盜の相と名く。

問うて曰く、不盜には何等の利あるや。

答へて曰く、人の命に二種あり、一には內、二には外。若し財物を奪はゞ、是を外の命を奪ふと爲す。何となれば、命は飲食・衣被等に依るが故に活くるを以てなり。若くは劫め、若くは奪はば、是を外の命を奪ふと名く、偈に說くが如し。

『一切の衆生は、衣食を以て自ら活く。若くは奪ひ、若くは劫取せば、是を命を劫奪すと名く。』

是の事を以ての故に、智あるの人は劫奪すべからず。復次に、當に自ら思惟すべし、「劫奪して物を得、以て自ら供養せば、身は充足すと雖も、會ず亦た當に死すべし。死して地獄に入り、家室親屬は共に樂を受くと雖も、獨り自らは罪を受けて、亦救ふこと能はず」と。已に此の觀を得ば應當に盜まざるべし。復次に、是の「與へざるを取る」に二種あり。一には偷、二には劫なり。此二は共に「與へざるを取る」と名く。與へざるを取る中に於て、盜を最も重しと爲す。何となれば、一切の人は、財を以て自ら活くるを以ての故なり。而るを或は穿窬して盜み取らば、是れ最も不淨なり。何となれば、力の勝れたる人は、死を畏るゝこと無くして、盜み取るを以てなり。故に劫奪の中にて盜を罪重しと爲す。偈に說くが如し。

を行じ、不殺戒を持つて、自ら佛を得ることを致し、亦弟子に此の慈愍を行ずることを敎ゆ。行者は大人の法を學せんと欲するが故に、亦當に殺さざるべし。

問うて曰く、我を侵さざれば、殺す心を息む可し。若し侵害、强奪、逼迫を爲さば、是れ當に云何がすべきや。

答へて曰く、應當に其の輕重を量るべし。若し人已を殺さば先づ自ら思惟せよ。「戒を全うするの利重きか、身を全うするを重しとなすか、戒を破るを失とせんか、身を喪ふを失とせんか」と。是の如く思惟し已りて、戒を持するを重しと爲し、身を全うするを輕しと爲すことを知る。若し苟も免れて身を全うすとも、身に何の得る所かある。是の身は名けて老病死の藪と爲す。必ず當に壞敗すべし。若し持戒の爲に身を失はば、其の利は甚だ重し。又復た思惟せよ、「我、前後に身を失すること、世世無數なり、或は惡賊禽獸の身と作り、但だ財利の爲に諸の不善事あり。今は乃ち淨戒を持することを得るが故に、此の身を惜まず、命を捨てて戒を持つことは、禁を毀つて身を全うするに勝れたること、百千萬倍にして喩と爲す可らず」と。是の如く心を定めて、應當に身を捨て、以て淨戒を護るべし。一の須陀洹の人の如きは、屠殺の家に生れ、年尙しうして人と成り、應當に其家業を修すべくして、而も殺生を肯んぜず、父母は刀と幷に一口の羊を與へて、屋中に閉著し、之に語つて言く、「若し羊を殺さずんば、汝をして出でて日月を見、生活の飮食を得せしめざらん」と。兒は自ら思惟して言く、「我、若し此の一羊を殺さば、便ち終に此業を爲せりとすべし、豈に身を以ての故に、此の大罪を爲さんや」と。便ち刀を以て自殺す。父母は戸を開いて見るに、羊は一面に在つて立ち、兒は已に命絕え、自殺の時に當つて卽ち天上に生ぜり。若し是の如き者は、是れ壽命を惜まず、全く淨戒を護れるなり。是の如き等の義を是を不殺生戒と名く。

「與へざるを取る」とは、他の物と知り、盜心を生じて物を取り、去つて本處を離れ、物を我に屬す。

り、人は命の爲の故に財を求む、財の爲の故に命を求めず」と。是を以ての故に佛は說きたまはく、「十不善道の中に、殺罪は最も初に有り、五戒の中にも亦た最も初に在り。若し人、種種に諸の福德を修するも、不殺生戒なければ則ち益する所なし。何を以ての故に、富貴の處に在つて生じ、勢力豪强なりと雖も、而も壽命なくんば、誰か此の樂を受けんや。是を以ての故に知る、諸餘の罪の中にて殺罪は最も重く、諸の功德の中にて、不殺は第一なることを。世間の中にて、命を惜むを第一となす。何を以てか之を知るや。一切の世人は、甘んじて刑罰・刑殘・拷掠を受くるも、壽命を護るを以てなり。　復次に、若し人あり、受戒し、心に生じて[一〇]〔口に言く〕「今日より、一切の衆生を殺さず」と(誓はゞ)是れ無量の衆生の中に於て、己が愛し重んずる所の物を以て施與するにして、得る所の功德も亦復た無量なり。佛の說きたまふが如く、「五大施あり。何等か五なる。一には不殺生、是を最大施と爲す。不盜、不邪婬、不妄語、不飮酒も亦復た是の如し。　復次に、慈三昧を行ずれば、其福無量にして、水火も害せず、刀兵も傷けず、一切の惡毒も中(あた)る能はざる所なり。五大施を以ての故に得る所是の如し。　復次に、三世十方の中に、佛を尊ぶを第一と爲す。佛、[一一]難提迦優婆塞に語りたまふが如く、殺生に十罪あり。何等をか十と爲す。一には心に常に毒を懷いて、世世に絕えず。二には衆生憎惡して、眼に見ることを喜ばず。三には常に惡念を懷いて惡事を思惟す。四には衆生之を畏るること蛇虎を見るが如し。五には睡る時、心怖れ覺めて亦安んぜず、六には常に惡夢あり。七には命終の時、狂れ怖れて惡死す。八には短命の業因緣を種ゆ。九には身壞れ、命終つて、泥犁の中に墮す。十には若し出でて人と爲りても、常に當に短命なるべし。　復次に、行者、心に念ぜよ。一切の命あるものは乃ち昆蟲に至るも、皆身を惜しむ、云何ぞ衣服・飮食を以て自らの身の爲にする故に衆生を殺さん。　復次に、行者は當に大人の法を學すべし。一切の大人の中には、佛を最大と爲す。何となれば、一切の智慧成就して、十力具足し、能く衆生を度し、常に慈愍

【一〇】「口に言く」別本にのみあり。

【一一】難提迦(Nandika)。

問うて曰く、人は能く力を以て、人並に國に勝つて怨を殺し、或は田獵の皮肉は、濟ふところ大なり。不殺生ならしめて何等の利を得るや。

答へて曰く、無所畏を得、安樂にして怖無きなり。我、彼を害する無きを以ての故に、彼も亦我を害すること無し。是れを以ての故に、怖無く、畏無し。殺を好める人は、復た位、人王を極むと雖も、亦自ら安んぜず、持戒の人の如きは、單り行き獨り遊ぶも、畏れ難る所なし。　復次に、殺を好める人は、命あるの屬は、皆(その人を)見ることを喜ばず。若し殺を好まざれば、一切衆生皆樂んで依附す。　復次に、持戒の人は、命終らんと欲する時、其心安樂にして、疑なく悔なく、若しくは天上に生じ、若しくは人中に在つて常に長壽を得、是を得道の因緣と爲す。乃至佛を得て、住する壽は無量ならん。　復次に、殺生の人は、今世・後世、種種の身心の苦痛を受く、不殺の人には、此の衆難なし、是を大利と爲す。　復次に、行者思惟すらく、「我は自ら命を惜み、身を愛す、彼も亦是の如し、我と何ぞ異ならん」と。是を以ての故に、殺生すべからず。　復次に、若し人、殺生せば、善人の爲には訶せられ、怨家には嫉まれ、他の命を負ふが故に、常に怖畏あり。彼が爲に憎まれ、死する時は、心悔いて當に地獄若しくは畜生の中に墮すべし。若し出でて人と爲るも、常に短命なるべし。　復次に、假令、後世に罪なく、善人の爲に訶せられ怨家に嫉まるゝことなくとも、尙ほ故らに他の命を奪ふべからず。何となれば、善相の人の行ずべからざる所なればなり。何に況んや兩世に罪ありて、弊惡の果報あるをや。　復次に、殺を罪中の重と爲す。何となれば、人は死の急なるあれば、重寶を惜まず、但だ活命を以て先と爲せばなり。譬へば賈客の海に入つて寶を採るに、大海を出づるに垂んとして、其の船卒に壞れ珍寶を失ひ盡したるに、而も自ら喜慶して手を擧げて「幾くの大寶をか失す」と言ふ。衆人怪んで言く、「汝は財物を失し、躶形にして脫することを得たるに、云何なれば喜んで幾の大寶をか失すと言ふや」と。答へて言く、「一切の寶の中にて人命は第一な

殺戒の中に、或は無記あるを知る。 復次に、有人は師に從つて戒を受けず、而も但だ心に自ら誓を生じて、「我今日より殺生せず」と。是の如く、不殺は或時は無記なり。

問うて曰く、是の不殺戒は何界の繫なりや。

答へて曰く、迦旃延子の阿毘曇の中に言ふが如くんば、一切の受戒律儀は皆な欲界の繫なり。餘の阿毘曇の中には言く、或は欲界の繫、或は不繫なりと。實を以て之を言へば應に三種あるべし、或は欲界繫、或は色界繫、或は無漏なり。殺生の法は欲界なりと雖も、不殺戒は應に殺に隨はば欲界に在るべし。但だ色界の不殺と、無漏の不殺とは、遠く遮するが故に是れ眞の不殺戒なり。

復次に、人有り、戒を受けざれども、而も生れてより已來、殺生を好まず、或は善、或は無記なり。是を無記と名く。是の不殺生の法は、心に非ず、心數法に非ず、亦心相應に非ず。或は心と共に生じ、或は心と共に生ぜず。迦旃延子の阿毘曇の中に言く、不殺生は是れ身口の業なり。或は[五]作色、或は無作色、或は[六]隨心行、或は不隨心行にして、先世の業報に非ず。[七]二種の修は應に修すべく、二種の證は應に證すべし。思惟斷は、一切欲界の最後に、見を斷ずるを得る時に斷ず。凡夫聖人の得る所は是れ色法なり。或は可見、或は不可見法、或は有對法、或は無對法、有報法、有果法、有漏法、有爲法、[八]有上法にして、相應因に非ず。是の如き等に分別して、是を不殺戒と名く。

問うて曰く、八直道の中の戒も亦不殺生なり。何を以てか獨り不殺生戒は有報・有漏と言ふや。

答へて曰く、此中には、但受戒律儀法を說いて、無漏の戒律儀を說かず。

復次に、餘の阿毘曇の中に言く、不殺の法は、常に心を逐うて行ぜず、身口業に非ず、心業行に隨はず、或は報あり、或は報なし。心相應法に非ず、或は有漏、或は無漏、是を異法と爲す、餘は皆同じ。

復た有は言く、諸佛・賢聖は諸法を[九]戲論せず、現前の衆生は各各命を惜む。是の故に佛の言はく「他の命を奪ふこと莫れ、他の命を奪はゞ、世世に諸の苦痛を受けん」と。衆生の有無は後に當に說くべし

【五】作色・無作色。受戒の時、受者の身口の相を以て受戒の相を外に表すが如きは、作色。外相には現はれざれど、受戒と共に身の四大が一種の色體を作り、それが、防非止惡の力あるを無作色と云ふ。新譯には、表色・無表色と云ふ。

【六】隨心行・不隨心行。割註あり「丹註に云ふ。隨心行は定共戒にして、不隨心は心意の五戒なり。」と。

【七】二種の證。割註あり、「丹註に云ふ。身證の慧證となり」。

【八】有上法。割註あり「丹註に云ふ。極に非ざるが故に同有上なり」。

【九】諸法を戲論せず、割註あり「丹註に云ふ。種々の異說を名けて戲と爲す也。」

欲し、而して其の命を奪ふ、身業を生ずる有作の色、是を殺生の罪と名く。其の餘の繫閉・鞭打等は、是れ殺を助くるの法なり。　復次に、他を殺せば殺罪を得。自ら身を殺すに非ざるも、心に衆生なりと知つて而して殺すは是れ殺罪なり。夜中に人を見て、謂つて杌樹と爲して殺す者の如きならず、故らに生を殺せば殺罪を得、故(意)にあらざるに非ざればなり。快心にして生を殺せば殺罪を得。狂癡に非ずして命根を斷ずるは、是れ殺罪なり。瘡を作すに非ざるの身業は是れ殺罪、但だ口に敎勅し、口に敎ゆるのみに非ざるは是れ殺罪。但だ心に惡を生ずるのみに非ざる、是の如き等を殺罪の相と名く。是の罪を作さざるを名けて戒と爲す。若し人、戒を受けて心に生じ、口に、「我れ今日より復た殺生せず」と言ひ、若くは身を動かさず、口に言はざるも、而も獨り心に生じて、自ら「我れ今日より復た殺生せず」と誓はば、是を不殺生戒と名く。有人の言く、「是の不殺生戒は、或は善、或は無記なり」と。

問うて曰く、阿毘曇の中に說くが如くんば、「一切の戒律儀は、皆な善なり」と、今何を以てか無記なりと言ふや。

答へて曰く、迦旃延子の阿毘曇の中に言ふが如きは、「一切善なり」。餘の阿毘曇の中に言ふが如きは、「不殺戒は、或は善、或は無記なり」。何となれば、若し不殺戒、常に善なりとせば、此の戒を持てる人は、應に得道の人の如く、常に惡道に墮せざるべければなり。是れを以ての故に或時は應に無記なるべし。無記は果報無きが故に、天上・人中に生ぜず。

問うて曰く、戒は無記なるを以ての故に地獄に墮せずとせば、更に惡心の生ずる有るが故に地獄に墮するや。

答へて曰く、不殺生は無量の善法を得、作・無作の福、常に日夜に生ずるが故なり。若し少罪を作らば、限あり量あり、何となれば、有量に隨つて無量に隨はざるを以てなり。是れを以ての故に不

惡馬の善馬の群に在るが如し。破戒の人が善人と異なるは、驢の牛の群に在るが如し。破戒の人が精進衆に在るは、譬へば儜兒の健人の中に在るが如し。破戒の人は、比丘に似たりと雖も、譬へば死屍の、眠れる人の中に在るが如し。破戒の人は、譬へば僞珠の眞珠の中に在るが如し。破戒の人は、譬へば伊蘭の旃檀林の中に在るが如し。破戒の人は、形は善人に似たりと雖も、內に善法なく、復た剃頭・染衣して、次第に籌を捉き、名けて比丘と爲すと雖も、實には比丘に非ず。破戒の人の法衣を著くれば、則ち是れ熱銅・鐵鍱を以て其の身を纏ふが若し。鉢盂を持すれば、則ち是れ洋銅を盛る器の如く、噉食するところは、則ち是れ燒けたる鐵丸を呑み、熱せる洋銅を飮むが若し。人の供養供給を受くれば、則ち是れ地獄の獄鬼の之を守るが若く、精舍に入れば、則ち是れ大地獄に入るが若く。衆僧の床榻に坐すれば、是れを熱鐵の床上に坐を爲すが若し。　復次に、破戒の人は、常に怖懔を懷くこと、重病の人の常に死の至らんを畏るるが如く。亦五逆の罪人の心に常に自ら、我は佛の賊たりと念ひ、藏覆し、避隈するが如く。賊の人を畏れて、歲月日過ぐれども、常に安隱ならざるが如し。破戒の人は、供養利樂を得と雖も、是の樂は不淨なり。譬へば愚人が死屍を供養し莊嚴するが如く、智者は之を聞き、惡んで見ることを欲せず。是の如く、種種無量にして、破戒の罪は稱說すべからず。行者は應當に一心に戒を持つべし。

初品第二十二……戒相義

問うて曰く、已に是の如きの種種の功德・果報を知る。云何なるを名けて戒相と爲すや。

答へて曰く、惡を止めて更に作さず。（是を名けて戒と爲す。）若しくは心に生じ、若しくは口に言ひ、若しくは他より受けて、身と口との惡を息むる、是を戒の相と爲す。

云何なるを名けて惡と爲すや。若し實に是の衆生をば、是れ衆生なりと知り、發心して殺さんと

括弧內は別本になし。

而して解脱を得。唯だ種種の邪見にして、持戒するものは後に得る所なし。復次に、若し人出家せずと雖も、但だ能く戒法を修行せば、亦天に生ずることを得。若し人・戒を持つこと清淨にして、禪の智慧を行じ、老・病・死の苦を度脱するを求めんと欲せば、此の願は必ず得らる。持戒の人は兵仗なしと雖も、衆惡加はらず、持戒のものの財は、能く奪ふ者なく。持戒のものの親は、親死すと雖も離れず。持戒の莊嚴は、七寶に勝れたり。是を以ての故に、當に戒を護ること、身命を護るが如く、寶物を愛するが如くすべし。破戒の人は苦を受くること萬端なり、向に貧人の瓶を破つて物を失ふが如し。[三]是れを以ての故に應に淨戒を持つべし。 復次に、持戒の人は、破戒の人の罪を觀て、應に自ら勉勵して一心に戒を持つべし。

云何なるを名けて破戒の人の罪と爲すや。破戒の人は人の敬せざる所にして、其の家は塚の如く、人の到らざる所なり。破戒の人は諸の功德を失す。譬へば枯樹の如く、人は愛樂せず。破戒の人は霜げたる蓮花の如く、人は見ることを喜ばず。破戒の人の惡心畏るべきは、譬へば羅刹の如し。破戒の人には人の歸向せざること、譬へば渇きたる人の枯井に向はざるが如し。破戒の人は心常に疑悔すること、譬へば犯事の人、常に罪の至るを畏るゝが如し。破戒の人は、田の雹を被れるが如し。依仰す可らず、破戒の人は、譬へば苦苽の形は甘種に似たりと雖も、食ふ可らざるが如し。破戒の人は、賊の聚落の如し。依止す可らず。破戒の人は、譬へば大病人の如し、近づくことを欲せず。破戒の人は苦を免るることを得ず、譬へば惡道は過ぐるを得べきこと難きが如し。破戒の人は、共に止る可らざること、譬へば惡賊の親近す可きこと難きが如し。破戒の人は、譬へば[四]火坑の如く、行く者之を避く。破戒の人は共に住す可からざること、譬へば毒蛇の如し。破戒の人は、近づき觸る可らざること、譬へば大火の如し。破戒の人は、譬へば、破船の乘つて渡る可らざるが如し。破戒の人は、譬へば、吐きたる食の更に噉ふ可らざるが如し。破戒の人が好衆の中に在るは、譬へば

【三】〔是を以ての故に應に淨戒を持つべし〕を別本には缺く。

【四】火坑。別本には「大坑」とす。

清淨なることを知つて、心に怖畏せざるなり。偈に說くが如し、

『大惡病の中にては、戒を良藥と爲し、大怖畏の中にては戒を守護と爲し、死の闇冥の中にては戒を明燈と爲し、惡道の中に於ては、戒を橋梁と爲し、死の海水中にては、戒を大船と爲す。』

復次に、持戒の人は、常に今世の人に敬養せらるゝを得、心に樂しんで悔ひず、衣食乏しきこと無く、死して天に生ずることを得て、後、佛道を得るなり。持戒の人は事として得ざる無く、破戒の人は一切皆失す。譬へば人ありき、常に天を供養す。其の人貧窮なるも、一心に供養して十二歲に滿ちて、富貴を求索す。天は此の人を愍んで、自ら其の身を現じ、之に問うて曰く、「汝、何等をか求むるや」と。答へて言く『我富貴を求めて心の願ふ所をして、一切皆得せしめんと欲す」と。天は一器を與ふ、名けて德瓶と曰ふ。而して之に語りて言く、「須ゐる所の物は、此の瓶より出づ」と。其の人は得已つて、意の欲する所に應じて得ざる所なく、意の如くなることを得已つて、具に好舍・象馬・車乘を作り、七寶具足し、賓客に供給するに、事事、乏しきこと無し。客之に問うて曰く、「汝は先に貧窮なりき、今日何に由つてか是の如きの富を得るや」と。答へて言く、「我天瓶を得たり。瓶は能く此の種種の衆物を出すが故に、富めること是の如し」と。客言く、「瓶を出し、幷に出す所の物を示されよ」と。卽ち爲に瓶を出し、瓶中より種種の衆物を引き出す。其の人、憍泆して、瓶の上に立つて舞ふに、瓶は卽ち破壞し、一切の衆物も亦一時に滅せり。持戒の人も亦復是の如く、種種の妙樂は願つて得ざること無けれども、若し人戒を破り、憍泆にして自ら恣ならば、亦彼の人、瓶を破つて物を失するが如くならん。　復次に、持戒の人の名稱の香は、今世・後世、周ねく天下に滿ち、及び人中に在り。　復次に、持戒の人は、人の樂しむ所を施して財物を惜まず、世利を修せざれども、而も乏しき所なく、天上に生ずることを得、十方の佛の前にて三乘道に入り、

し。或は人あり、但だ水のみを服するを戒と爲し、或は乳を服し、或は氣を服し、或は剃髮し、或は長髮し、或は頂上に少許の髮を留め、或は袈裟を著け、或は白衣を著け、或は草衣、或は木皮衣を著け、或は冬水に入り、或は夏火に炙り、若くは自ら高巖より墜ち、若くは恒河の中に於て、洗ひ、若くは日に三たび浴し、再び火を供養し、種種の祠祀、種種の呪願、行を受けて苦行するも、此戒なきを以て空うして得る所なし。若し人あり、高堂大殿に處し、好衣美食すと雖も、而も能く此の戒を行ずれば、好處に生ずることを得、及び道果を得ん。若くは貴きも、若くは賤しきも、若くは小なるも、若くは大なるも、能く此淨戒を行ぜば、皆大利を得ん。若し此戒を破らば、貴と無く、賤と無く、大と無く、小と無く、皆な意に隨つて、善處に生ずることを得ず。　復次に、破戒の人は、譬へば清涼の池なれども、而も毒蛇あり、中に澡浴すべからざるが如く、亦好き華果の樹なれども、而も逆刺多きが如し。若し人貴家に在つて生れ、身體端正にして、廣學多聞なりと雖も、持戒を樂まず、慈悲心なくんば亦復是の如し。偈に說くが如し。

『貴くして而も智なければ則ち衰を爲し、智なれど而も憍慢なれば亦た衰を爲す。持戒の人にして戒を毀たば、今世・後世一切衰へん。』

人は貧賤なりと雖も、而も能く戒を持てば富貴に勝る。而して破戒の者の華香・木香は、遠く聞ゆること能はざれども、持戒のものの香は周ねく十方に遍ず。持戒の人は、安樂を具足し、名聲遠く聞え、天・人・敬愛し、現世には常に種種の快樂を得、若し天上・人中に、富貴長壽たらんと欲すれば、之を取るに難からず。持戒して清淨なれば、願ふ所皆得らる。　復次に、持戒の人は、破戒の人の刑獄に拷掠され、種種に苦惱するを見て、自ら永く此事より離るゝを知りて、以て欣慶と爲す。若し持戒する人は、善人が譽を得て、名聞え、快樂なるを見て、自ら念じて言く、「彼の譽を得るが如く、我も亦た（その）分あり」と。持戒の人は、壽終るの時、刀風身を解き、筋脈斷絕すれども、自ら持戒

巻の第十三

初品第二十一……尸羅波羅蜜義

【經】罪と不罪とは不可得の故に、應に尸羅波羅蜜を具足すべし。

【論】[一]尸羅とは、好んで善道を行じ、自ら放逸ならざる、是を尸羅と名く、或は戒を受けて善を行ひ、或は戒を受けずして善を行ふも皆な尸羅と名く。尸羅とは、略說すれば身と口との律儀にして八種あり。惱害せざること、劫盜せざること、邪婬せざること、妄語せざること、兩舌せざること、惡口せざること、綺語せざること、飮酒せざること、及び[二]淨命なること、是を戒の相と名け、若し護らずして放捨するは、是を破戒と名く。此の戒を破る者は三惡道の中に墮ち、若し下の持戒せば人中に生じ。中の持戒すれば六欲天の中に生じ。上の持戒し、又四禪・四空定を行ずれば、色・無色界の清淨天の中に生ず。上の持戒に三種あり。下の清淨なる持戒は、阿羅漢を得、中の清淨なる持戒は、辟支佛を得、上の清淨なる持戒は、佛道を得。著せず、倚らず、破らず、缺かざるは、聖の讃愛する所なり。是の如きを名けて、上の清淨なる持戒と爲す。若し衆生を慈愍するが故に、衆生を度するが爲の故に、亦戒の實相を知るが故に、心、猗著せず、此の如く戒を持てば、將來人をして佛道に至らしむ。是の如きを名けて、無上の佛道の戒を得と爲す。若し人、大なる善利を求めなば、當に堅く戒を持つこと、重寶を惜むが如く、身命を護るが如くすべし。何となれば譬へば大地の一切の萬物、有形の類の如きは、皆な地に依つて住す。戒も亦是の如し。戒を一切の善き法の住處と爲せばなり。　復次に、譬へば足なくして行かんと欲し、翅なくして飛ばんと欲し、船なくして度らんと欲するが如きは、是れ得べからず。若し戒なくして好果を得んと欲するも、亦復た是の如し。若し人の此戒を棄捨せば、山居して苦行し、果を食し藥を服すと雖も、禽獸と異なること無

【一】尸羅。割註して「秦に性善と言ふ。」とあり。

【二】淨命。淸淨なる生活。

知るを、是を布施は般若波羅蜜を生ずと爲す。　復次に、一切の智慧・功德の因緣は皆布施に由る。千佛の始めて意を發したまふ時の如きは、種種の財物を諸佛に布施したまふ。或は華香を以て、或は衣服を以て、或は楊枝を以て布施して、以て意を發す。是の如き等の種種の布施、是を菩薩の布施は般若波羅蜜多を生ずと爲す。

中に墮して、[三五]鳩槃荼鬼と作り、能く種種に五塵を變化して自ら娯しむことを。又知る、多瞋佷戻(こうるい)にして酒肉を嗜好するの人にして、而も布施を行へば、[三六]地行の夜叉鬼の中に墮ち、常に種種の歡樂・音樂・飲食を得ることを。又知る、人あり、剛愎强梁なるも、而も能く車馬を布施し、代つて歩せしめば、虛空の夜叉の中に墮ち、而して大力あつて至るところ風の如くなることを。又知る、人あり、妬心にして諍を好めども、而も能く好き房舍・臥具・衣服・飲食を以て布施するが故に、宮觀飛行の夜叉の中に生じ、種種の娯樂便身の物あることを。是の如く種種に布施する時に當りて、能く分別して知るべし。是を菩薩の布施は般若を生ずと爲す。

復次に、飲食を布施すれば、力・色・命・樂に贍(ゆたか)なることを得。若し衣服を布施せば、生を得て慚愧を知り、威德端正にして、身心安樂なり。若し房舍を施せば、則ち種種の七寶を得、宮觀自然にして五欲を自ら娯むあり。若し井池・泉水・種種の好漿を施せば、生ずる所、則ち飢なく渴なきことを得、五欲備はりて有り。若し橋船及び諸の履屐を施せば、生れて種種の車馬を有し具足す。若し園林を施せば、則ち豪尊なることを得て、一切の依止と爲り、身を受くること端正に、心樂んで憂なし。是の如き等の種種の、人中の因緣は、布施の得る所なり。若し人布施して福德を修作し、有爲の作業・生活を好まざれば、則ち四天王の處に生ずることを得。若し人布施し、加ふるに父母及び諸の伯叔兄姉を供養するを以てし、無瞋無恨にして諍訟を好まず、又喜んで諍訟を見ざるの人は、忉利天上・焰摩・兜率・化自在・他化自在に生ずることを得、是の如く種種に分別して布施する、是を菩薩の布施は般若を生ずと爲す。爲し人布施して心に染著せず、世間を厭患して、涅槃の樂を求めば、是を阿羅漢・辟支佛の布施と爲す。若し人布施するに佛道の爲め、衆生の爲めの故ならば、是を菩薩の布施と爲す。是の如き等の種種の布施の中に分別して知る、是を布施は般若波羅蜜を生ずと爲す。復次に、菩薩の布施する時は、三事の實相を思惟すること上に說くが如し。是の如く能く

【三五】鳩槃荼(Kumbhāṇḍa)。冬瓜鬼と云ふ。人の精氣を喰ふ。
【三六】地行。別本「行」を脫す。

へて來つて問訊したてまつる」と。王「諸妹に告ぐ、汝等各當に端心なるべし、當に[三三]我が爲に知識となり、我が怨と爲ること勿るべし」と。玉女寶后涙を垂れて言く、「大王、何爲ぞ我を謂つて妹と爲す、必ず異心あらん、願くは其意を聞かん。如何なれば當に知識と爲り、我が怨と爲ること勿るべしと勅せらるるや」と。王之に告げて言く、「汝若し我を以て世の因緣の爲に共に欲事を行じ、以て歡樂を爲さば、是を我が怨と爲す。若し能く常にあらざることを覺悟し、身の幻の如くなるを知り、福を修し善を行じ、欲情を絕去せば是を知識と爲す」と。諸の玉女言さく、「敬んで王の勅の如くせん」と。此語を說き已つて、各遣はして還らしむ。諸女出で已れば、王は金殿に登り、銀床に坐して[三四]慈三昧を行じ、銀樓に登り、金牀に坐して、悲三昧を行じ、毘瑠璃樓に登り、頗梨床に坐して喜三昧を行じ、頗梨寶樓に登り、毘瑠璃床に坐して、捨三昧を行ず。是を菩薩の布施は禪波羅蜜を生ずと爲す。

云何にして菩薩の布施は、般若波羅蜜を生ずるや。菩薩布施する時は、此布施は必ず果報ありと知つて、而も疑惑せず、能く邪見・無明を破る。是を布施は般若波羅蜜を生ずと爲す。

復次に、菩薩布施する時は、能く分別して知る。持戒せざる人、若し鞭打し拷掠し閉繫し、法を枉げ財を得て、而して布施を作せば、象・馬・牛の中に生れ、畜生の形を受けて、重を負ひ、鞭策せられ羈靽せられ乘騎せらると雖も、而も常に好屋好食を得、人の爲に重んぜられ、以て人(彼に)供給することを。又知る、惡人、多く瞋恚を懷き、心曲つて端しからざるも、而も布施を行ぜば、當に龍の中に墮して、七寶の宮殿・妙食・好色を得べきことを。又知る、憍人多慢、瞋心なるも布施すれば、金翅鳥の中に墮して、常に自在を得、如意寶珠あり、以て瓔珞と爲し、種種の須ゆる所、皆自ら恣なることを得て、意の如くならざる無く、變化・萬端・事として辦ぜざるなきことを。又知る、宰官の人、枉げて人民を濫り、治法に順ぜざるも、而も財物を取つて以て布施に用ふれば、鬼神の

【三三】別本「我」を脫す。

【三四】慈三昧。以下、悲・喜・捨を合して菩薩の四三昧なり。慈は衆生に樂を與ふ、悲は衆生の苦を拔く。喜は衆生の離苦得樂を悅ぶ、捨は更に上の三心を捨てゝ怨親平等。

云何にして菩薩の布施は、禪波羅蜜を生ずるや。菩薩布施する時には、能く慳貪を除く。慳貪を除き已りて、此の布施に因りて、行ずること一心なれば、漸く[三一]五蓋を除く、能く五蓋を除けば、是を名けて禪と爲す。　復次に、心は布施に依つて、初禪乃至滅定禪に入る。云何なれば(布施に)依ると爲す。若し、禪を行ずる人に施す時には、心に自ら念じて言く、「我は此の人の禪定を行ずるを以ての故に、淨心に供養す、我今何ぞ自ら禪より替ることを爲さん」と。即ち自ら心を斂めて、思惟し禪を行ず。若し貧人に施しては此の(貧人)の宿命を念じて、「諸の不善を作し、心を一に求めず、福業を修せざれば今世貧窮なり」と。是を以て自ら勉めて善を修し、心を一にして以て禪定に入る。說くが如くんば、喜見轉輪聖王には八萬四千の小王來朝し、皆七寶の妙物を持ち來つて獻ず。王言く、「我は須ゐざるなり、汝等各自ら以て福を修す可し」と。諸王自ら念ずらく、「大王は肯へて取らずと雖も、我等も亦復自ら用ゆるは宜しからず」と。即ち共に造工して七寶の殿を立て、[三二]七寶の行樹を植ゑ、七寶の浴池を作り、大殿の中に於て八萬四千の七寶の樓を造り、樓中に皆七寶の床座あり、雜色の被・枕を床の兩頭に置き、繒の旛蓋を懸け、香薫を地に塗り、衆事備はり已つて、大王に白して言さく、「願はくは法殿・寶樹・浴池を受けたまへ」と。王は默然として之を受け、而して自ら念じて言く、「我は今先づ新殿に處して、以て自ら娛樂すべからず、當に善人、諸の沙門、婆羅門等を求めて、先づ入れて供養し、然して後に我之に處るべし」と。即ち善人を集めて先づ寶殿に入れ、種種に供養し、微妙に具足せり。諸人出で已りて、王は寶殿に入り、金樓に登り、銀床に坐し、布施を念じて五蓋を除き、五情を攝し、六塵を却け、喜樂を受け、初禪に入る。次に銀樓に登り、金床に坐して、二禪に入る。次に毘瑠璃樓に登り、頗梨の寶床に坐して三禪に入る。次に頗梨寶樓に登り、毘瑠璃床に坐して四禪に入る。獨り坐して思惟して、終に三月を竟る。玉女・寶后は八萬四千の諸の侍女と倶に、皆白珠・名寶を以て其身を瓔珞し、來つて大王に白す、「久しく親覲に違ふ、敢

【三一】五蓋。貪欲、瞋恚、睡眠、掉悔、疑。この五は心性を覆ふて善法を生ぜざらしむ故に蓋と云ふ。

【三二】七寶。論巻十に出づ、參照。

し、汝當に報へて言ふべし、其の餘の雜寶は我須ゐず、唯だ大王の頭上の寶珠のみを欲す。若し憐愍せば願くは以て我に與へたまへと。此の如くせば得べし」と。卽ち往いて父に見ゆ。父大に悲喜して欣慶すること無量なり、其の子をして遠く涉つて艱難し、乃ち此に來至するを愍み、妙寶を指示して、「意に隨つて汝に與ふ。須ゆるものは之を取れ」と。菩薩言く、「我は遠くより來りて願ふらくは、大王に見えて、王の頭上の如意寶珠を求む。若し憐愍せば、當に以て我に與ふべし、若し與へられずんば、餘の物を須ゐず」と。龍王報へて言く、「我は唯この一珠のみ有つて、常に首飾と爲す。閻浮提の人は、薄福下賤にして見るべからざるなり」と。菩薩白して言さく、「我は此を以ての故に、遠く艱難を涉り、死を冒して遠く來れり。閻浮提の人は薄福貧賤なるが爲に、如意寶珠を以て其の願ふ所を濟ひ、然して後に、佛道の因緣を以て之を敎化せんと欲す」と。龍王は珠を與へて之に要して言く、「今、此珠を以て汝に與へん、汝旣に世を去らば、當に以て我に還すべし」と。答へて言く、「敬んで、王の言の如くせん」と。菩薩は珠を得て虛空に飛騰し、臂を屈申するが如き頃にして、閻浮提に至る。人王の父母は、兒の吉く還るを見て、歡悅踊躍し、抱いて問うて言く、「汝何物を得るや」と。答へて言く、「如意寶珠を得」と。問うて言く、「今、何許に在るや」と。白して言さく、「此衣の角裏の中に在り」と。父母の言く、「何ぞ其れ泰だ小なる」と。白して言く、「其は神德にあり、大なるに在らざるなり」と。父母に白して言さく、「當に城中の內外に勅して掃き灑ぎ、香を燒き、繒・旛蓋を懸け、持齋受戒すべし」と。明日淸旦に長木を以て表と爲し、珠を以て上に著く、菩薩は是時、自ら誓願を立つ。「若し我れ當に佛道を成じ、一切を度脫すべくんば、當に我が意の願の如く、一切の寶物を出し、人の須ふる所に隨つて盡く皆備ふること有るべし」と。是の時陰雲普遍し、種種の寶物・衣服・飮食・臥具・湯藥を雨ふらし、人の須ゐる所、一切具足し、其命の盡くるに至るまで、常に爾くして絕えざりき。是の如き等を名けて、菩薩の布施は精進波羅蜜を生ずと爲す。

崖に棗林あるべし、枝は水を覆ひ、大風は船を吹いて、船は當に摧け覆るべし。汝は當に仰いで棗枝を攀ち、以て自ら濟ふべし。我が身は目無し、此に於て當に死すべし。此の臨岸を過ぎて、當に金沙洲あるべし。我が身を以て此の沙の中に置くべし。金沙は清淨なり。是れ我が願なり」と。即ち其の言の如くす。風至つて去り、既に絶崖に至るに、陀舍の語の如し。菩薩は仰いで棗枝に攀ぢ、以て自ら免るることを得、陀舍の屍を置いて金地に安厝す。是に於て獨り去るに、其の先の教の如し。深水の中に浮くこと七日、咽に〔三〇〕齊しき水中を行くこと七日、腰に齊しき水中を行くこと七日、膝に齊しき水中を行くこと七日、泥中を行くこと七日、好蓮華の鮮潔柔軟なるを見て、自ら思惟して言く、「此の華は軟かにして跪し。當に虛空三昧に入るべし」と。自ら其の身を輕くして、蓮華の上を行くこと七日、諸の毒蛇を見て念じて言く、「毒を含むの蟲は甚だ畏る可きなり」と。即ち慈心三昧に入つて、毒蛇の頭上を行くこと七日、蛇は皆頭を擎げて菩薩に授與し、上を蹈んで過さしむ。此の難を過ぎ已つて、七重の寶城あるを見る。七重の塹あり、塹の中に皆毒蛇を滿たし、三大龍あつて門を守る。龍は、菩薩の形容端正に、相好嚴儀にして、能く衆の難を度つて、來りて此に至ることを得たるを見て、念じて言く、「此れ凡夫に非ず、必ず是れ菩薩大功德の人ならん」と。即ち聽して逕を前んで宮に入ることを得せしむ。龍王夫婦は兒を喪つて未だ久しからず、猶故に哀泣せり。菩薩の來るを見て、龍王の婦は神通あり、是れ其子なるを知り、兩乳汁を流出し、之に命じて坐せしめ、而して之に問うて言く、「汝は是れ我が子なり、我を捨てて命終し、生れて何の處に在るや」と。菩薩も亦た自ら宿命を識り、是れ父母なるを知り、母に答へて言く、「我は閻浮提の上に生れ、大國王の太子と爲れり。貧人の飢寒勤苦して自在を得ざるを憐愍するが故に、此に來り至つて如意寶珠を求めんと欲す」と。母の言く、「汝が父の頭上に此寶珠あり、以て首飾と爲す、得べきこと難し、必ず當に汝を將ゐて諸の寶藏に入り、汝が欲する所に隨つて、必ず汝に與へんとすべ

【三〇】齊。別本には「坐」とあり。

去ることを須ゐず。我今、藏の中に、猶亦た物あり、當に以て汝に給すべし」と。兒言く、「藏中は限あり、我が意は無量なり。我は財を以て、一切に充滿し、乏短無からしめんと欲す、願くば聽許せられよ。本心を遂ぐることを得て、閻浮提の人をして、一切充足ならしめん」と。父母は其の志の大なることを知つて、敢へて之を制せず、遂に放つて去らしむ。是の時に五百の賈客は、其の福德の大なるを以て、人皆隨從せんことを樂ひ、其の行く日を知つて、海道の口に集る。菩薩は先づ婆伽陀龍王の頭上に、如意寶珠あると聞いて、衆人に問うて言く、「誰か水道を知つて、彼の龍宮に至らん」と。一の盲人あり、陀舍と名く、曾て七反大海の中に入つて具に海道を知れり。菩薩は即ち共に行かんことを命ず。答へて言く、「我は年既に老い、兩目明を失し、曾て數入ると雖も、今は去ること能はず」と。菩薩語つて言く、「我の今の此の行は、自身の爲ならず、普ねく一切の爲に如意寶珠を求め、衆生に給足して、身をして乏しきこと無からしめ、次に道法の因縁を以て、而も之を敎化せんと欲するなり。汝は是れ智人なり、何ぞ辭することを得んや。我が願を成ずることを得るは、豈に汝が力に非ずや」と。陀舍は其の要言を聞き、欣然として懷を同うし、菩薩に語げて言く、「我今汝と共に、倶に大海に入らば、我は必ず全からず。汝當に我が尸骸を安んじて、大海の中の金沙の洲の上に著くべし」と。行事都て集り、第七繩を斷ずれば、船は去ること駝の如く、衆の寶渚に到る。衆賈、競うて七寶を取り、各各已に足りぬ。菩薩に語つて言く、「何を以て取らざるや」と。菩薩報へて言く、「我が求むる所は如意寶珠なり。此の盡くること有る物は、我は須ゐざるなり。汝等は各各當に足ることを知り、量を知るべし。船をして重からしむること無くんば、自ら免れざるなり」と。是の時に衆賈は、菩薩に白して言さく、「大德、我が爲に呪願し、安隱なることを得せしめたまへ」と。是に於て辭し去る。陀舍は是の時、菩薩に語つて言く、「別に艇舟を留めて、當に是の別道に隨つて去るべし。風を待つこと七日、海の南岸に轉じて一の險處に至らば、當に絕

菩薩の初めて發心する時は、功德未だ大ならず。爾の時に、二施を行じて一切衆生の願を充滿せんと欲し、物足らざるを以ての故に、懃めて財法を求めて以て之を給足すればなり。釋迦文尼佛の本身の如きは、大醫王と作り、一切の病を療じて名利を求めず、衆生を憐愍するが爲の故なり。病者、甚だ多くして力周く救はず、一切を憂念するも而も心に從はず、懊惱して、死して卽ち忉利天上に生ぜり。自ら思惟して言く、「我いま天に生じて但だ福報をのみ食するも、長く益する所なし」と。卽ち自ら方便して、[二五]自ら滅身を取り、此の天壽を捨てゝ、[二六]娑伽陀龍王の宮中に生じて、龍の太子と爲る。其の身長大にして、父母愛重す。自ら死を取らんと欲して金翅鳥王に就く。鳥は卽ち此の龍子を取り、[二七]舍摩利樹の上に於て之を呑む。父母は[二八]嘷咷啼哭して懊惱す。龍子は旣に死して閻浮提の中に生じ、大國王の太子と爲り、名けて能施と曰ふ。生れて能く言ひ、諸の左右に問ふ。「今、此の國中、何等の物かある、盡く皆持ち來つて以て布施に用ひよ」と。衆人は怪しみ畏れて皆之を捨てゝ走る。其の母は、憐愛して獨り自ら之を守る。其の母に語つて言く、「我は羅刹に非ず、衆人は何を以ての故に走るや。我が本の宿命は常に布施を好む、我は一切の人の[二九]檀越と爲らん」と。母は其の言を聞いて以て衆人に告ぐれば、衆人卽ち還る。母は好く養育すれば、年長大なるに及んで自身の所有、盡く以て施し盡し、父王の所に至つて物を索めて布施す。父、其の分を與ふれば、復以て施し盡す。閻浮提の人の貧窮にして辛苦するを見て、給施せんことを思惟するに、而も財物足らず、便ち自ら啼泣し、諸人に問うて言く、「何の方便を作してか、當に一切をして財に滿足せしむべきか」と。諸の宿人の言く、「我等曾て聞くに、如意寶珠あり、若し此の珠を得ば、則ち能く心の索むる所に隨つて、必ず得ずといふこと無し」と。菩薩は是の語を聞き已つて、其の父母に白す、「大海に入つて龍王の頭上の如意寶珠を求めんと欲す」と。父母報へて言く、「我は唯汝一兒あるのみ、若し大海に入らば衆難度り難し。一旦汝を失はば、我等も亦た當に何を用てか活くべき、爲に

【二五】自殺。
【二六】娑伽羅龍王(Sāgara)。娑竭王とも云ふ。大海と譯す。
【二七】舍摩利樹(Sābari)。
【二八】嘷咷。叫び泣く形容。
【二九】檀越(Danapati)。施主。

師利の如きは、在昔過去久遠劫の時、曾て比丘と爲り、城に入つて乞食し、鉢に百味の歡喜丸を滿たすことを得たり。城中の一の小兒、追ひて從ひ乞ひしも、卽ち之を與へずして、乃ち佛圖に至り、手づから二丸を捉へて、之(この)(小兒)を要して言く、「汝若し能く自ら一丸を食し、一丸を以て衆僧に施さば、當に以て汝に施すべし」と。卽ち相ひ然可し、一の歡喜丸を以て衆僧に施し、然して後に文殊師利の許に於て戒を受け、發心して、佛と作れり。是の如く、布施は能く戒を受け、發心して佛と作らしむ。是を、「布施は尸羅波羅蜜を生ず」と爲す。　復次に、布施の報は、四事の供養を得、好國の善師は、乏少する所なし、故に能く戒を持す。又布施の報は其の心を調柔ならしむ。心調柔なるが故に能く持戒を生じ、能く持戒を生ずるが故に、不善法の中より能く自ら心を制す。是の如き種種の因緣により、布施より尸羅波羅蜜を生ず。

云何にして、布施は羼提波羅蜜を生ずるや。菩薩の布施する時、受者逆に罵り、若しくは大に求索し、若しくは不時に索め、或は索むべからざるを而も索む。是の時、菩薩は自ら思惟して言く、「我いま布施して、佛道を求めんと欲す。亦た人ありて、我をして布施せしむること無きも、我は自らの爲めの故に、云何んぞ瞋を生ずべき」と。是の如く思惟し已つて忍辱を行ず。是を「布施は、羼提波羅蜜を生ず」と爲す。　復次に、菩薩は布施する時、若し受者瞋り惱ませば便ち自ら思惟すらく、「我は今、內外の財物を布施し、捨て難きを能く捨てたり。何に況んや空なる聲にして、而も忍ぶこと能はざらんや。若し我忍ばずんば、布施す可きところのものは、則ち不淨と爲らん。譬へば白象の池に入つて澡浴し、出で已つて還つて復た土を以て身に坌するが如し。布施して忍ばざるも亦復是の如し」と。是の如く思惟し已つて忍辱を行ず。是の如き等の種種の布施の因緣により、羼提波羅蜜を生ず。

云何にして布施して毘梨耶波羅蜜を生ずるや。菩薩の布施する時は常に精進を行ず。何となれば、

施心轉た增して能く身肉を以て之に與へ。先に種種の好漿を以て布施し、後に心轉た增して能く身血を以て之に與へ。先きに紙墨經書を以て布施し、及び衣服飲食なぞ、四種の供養を以て法師を供養し、後に法身を得て、無量の衆生の爲に種種の法を說いて法施を爲す。是の如き等、種種に、檀波羅蜜の中より檀波羅蜜を生ず。

云何にして菩薩の布施は、尸羅波羅蜜を生ずるや。菩薩思惟すらく、「衆生は布施せざるが故に、後世貧窮なり。貧窮を以ての故に劫盜の心生じ。劫盜を以ての故に而も殺害あり。貧窮を以ての故に色に於て足らず。色足らざるが故に邪婬を行ず。又貧窮を以ての故に人の下賤となり、下賤なれば怖畏して妄語を生ず。是の如き等の貧窮の因緣の故に[二三]十の不善道を行ず。若し布施を行ずれば生れて財物あり、財物あるが故に非法を爲さず。何となれば[二四]五欲充足して、乏短する所なければなり。提婆達の如きは、本生に曾つて一の蛇と爲り、一蝦蟇・一龜と與に一池の中に在りて、共に親交を結べり。其後、池の水渴き盡きて、飢ゑ窮まり、困乏すれども控告する所なし。時に蛇は龜を遣はして以て蝦蟇を呼ぶ、蝦蟇は偈を說き、以て龜に遣はして言く、

『若し貧窮に遭へば本心を失し、本義を惟はずして食を先と爲す。

汝、我が聲を持して以て蛇に語れ、蝦蟇は終に汝が邊に到らずと』。

若し布施を修すれば、後生に福あり、短乏する所なければ、則ち能く戒を持つて此の衆惡なし。是を「布施は能く尸羅波羅蜜を生ず」と爲す。　復次に、布施する時は、能く破戒(及び)諸の結使をして薄からしめ、益持戒の心堅固なるを得せしむ。是を布施の因緣は戒を增益すと爲す。　復次に菩薩の布施は、常に受者に於て慈悲心を生じ、財に著せず、自物を惜まず、何に況んや劫盜せんや。受者を慈悲するに、何ぞ殺意あらんや。是の如き等、能く破戒を遮す。是を布施は戒を生ずと爲す。若し能く布施すれば、以て慳心を破り、然して後持戒忍辱等を行ずることを得べきこと易し。文殊

【二三】十不善道。十惡なり。殺生、偸盜、邪淫、妄語、兩舌、惡口、綺語、貪欲、瞋恚、邪見。

【二四】五欲。別本には「五塵」とある。

んと欲したまふ。實の果報とは則ち是れ佛道なり。佛は妄見を破らんが爲の故に、三事は不可得にして、實に所破なしと言ふ。何となれば諸法は本より已來、畢竟空なるが故なり。是の如き等の種種の無量の因緣は不可得なり。故に名けて、「檀波羅蜜を具足し滿ず」と名く。

復次に、若し菩薩、檀波羅蜜を行じて、能く六波羅蜜を生ぜば、是の時を名けて、「檀波羅蜜を具足し滿ず」と名く。

云何にして布施は檀波羅蜜を生ずるや。檀に下中上あり、下より中を生じ、中より上を生ず。若し飮食、麁物を以て、軟心に布施せば、是を名けて下と爲す。施を習ひ轉た增して、能く衣服寶物を以て布施せば、是を下より中を生ずと爲す。施の心轉た增して、愛惜する所なく、能く頭・目・血・肉・國・財・妻・子を以て、盡く用ひて布施する、是を中より上を生ずと爲す。釋迦牟尼佛の如きは、初め發心せる時は大國王と作り、名けて光明と曰へり。佛道を求索して、少多布施し、轉じて後身を受けて陶師と作り、能く澡浴の具及び石蜜の漿を以て、異なれる釋迦牟尼佛及び比丘僧に供養す。其の後、轉じて大長者の女と作り、燈を以て、憍陳若佛に供養す。是の如き等の種種を名けて、菩薩の下の布施と爲す。釋迦文尼佛の本身の如きは、長者の子と作りたまひ、衣を以て、大音聲佛に布施し、佛滅度の後、九十の塔を起つ。後更に身を轉じて大國王と爲り、七寶蓋を以て、師子佛に供養す。後復た身を受けて大長者と作り、妙目佛に上好の房舍、及び七寶の妙華を供養す。是の如き等の種種を名けて菩薩の中の布施と爲す。釋迦文尼佛の本身の如きは、仙人と作り、憍陳若佛の端正殊妙なるを見て、便ち高山の上より自ら佛前に投ぜるも、其の身安隱にして一面に在つて立てり。又、衆生喜見菩薩の如きは、身を以て燈と爲し、日月光德佛を供養す、是の如き等に種種、身命を惜まずして諸佛を供養する、是を菩薩の上の布施と爲す。是を菩薩の三種の布施と名く。若しくは、初めて佛心を發してより、衆生に布施する有るも亦復是の如く、初めに飮食を以て布施し、

使あり、〔この〕三事の故に後身生ず。是の中、身業の因緣は、斷ず可らず、破すべからず、但だ諸の結使のみ斷ずべし。結使斷ずる時は殘れる身・殘れる業ありと雖も解脫するを得べし。穀子あり地あれども、水なきが故に生ぜざるが如し。是の如く、身あり業ありと雖も、愛結の水潤ほすこと無ければ則ち生ぜず、是を名けて、「神なしと雖も亦た解脫を得」と名く。無明の故に縛し、智慧の故に解く、則ち神は用ふるところなきなり。

復次に、是の名色の和合を假に名けて人と爲す、是の人は諸の結の爲に繫がるれども、無漏の智慧の爪を得て、此の諸の結を解く。是の時、「人は解脫を得」と名く。繩を結び、繩を解くが如し。繩は卽ち是れ結なり。結に異法なく、世界の中に繩を結び、繩を解くことを說くのみ。名色も亦是の如し。名色の二法和合するを假に名けて人と爲す。是の結使は名色と異ならず、但だ名けて、「名色結び、名色解く」と爲す。罪福を受くるも亦是の如し。一法も人たるの實なしと雖も、名色の故に罪福の果を受け、而も人の名を得。譬へば車の物を載するが如し、一一之を推すに竟に車の實なし。然も車は物を載するの名を受く。人の罪福を受くるも亦是の如く、名色が罪福を受けて、而も人が其名を受く、苦樂を受くるも亦是の如し。是の如き種種の因緣により、神は不可得なり。神は卽ち是れ施者、受者なりとするも亦是の如し。汝は神を以て人と爲す、是を以ての故に施人も不可得なり、受人も不可得なること亦た是の如し。是の如きの種種の因緣により、是を「財物・施人・受人は不可得なり」と名く。

問うて曰く、若し[二二]諸佛は、但だ如實の法相を說き、諸法に於て所破なく、所滅なく、所生なく、所作なくんば、何を以ての故に[二三]三事を破析して、不可得なりと言ふや。

答へて曰く、凡夫人の如きは施者を見、受者を見、財物を見る、是を顚倒の妄見と爲す。世間に生じて樂を受け、福盡くれば轉じ還る。是の故に佛は菩薩をして實道を行じ、實の果報を得せしめ

【二二】「諸佛は但だ如實の法相を說き、諸法に於て」は、大正本にては「施は諸法に於て是れ如實の相にして」とあり。又別本には「施は諸法に於て」とあり。結局の意味は同一事に歸すれど最も一般的にして理解し易き點より前者を取れり。

【二三】三事。施者、受者、財物を指す。

くは細、皆悉く無常なり。汝が神の微細なる色も、亦應に無常にして斷滅すべし」と。是の如き等の種種の因縁により、色相に非ざることを知るべし。神は無色相にも非ずとは、無色とは、[一八]四衆及び無爲なり。四衆は無常なるが故に、自在ならざるが故に、因縁に屬するが故に、是れ神なるべからず。[一九]三無爲の中は神あることを許せず、受くる所なきが故なり。是の如き等の種種の因縁により、神は無色相に非ることを知る。是の如く天地の間、若くは內に、若くは外に、三世十方に神を求むるも不可得なり。但だ十二入、和合して六識を生じ、[二〇]三事和合するを觸と名く。觸は受・想・思等の心數法を生ず。是の法の中に、無明の力の故に身見を生じ、身見生ずるが故に神ありと謂ふ。是の身見は、苦諦の苦法智及び苦比智を見れば則ち斷ず、斷ずる時は則ち神あるを見ず。汝は先に「若し內に神の色なしとせば、識は念念に生滅す、云何にして分別して色の青黃赤白を知らん」と言へり。汝、「若し神あるも亦た獨り知ること能はず、要ず眼識に依るが故に能く知る」(といふも)若し爾りとせば神は無用なり。眼識は色を知り、色の生滅は生に相似し滅に相似す。然して後に心中に法ありて生ずるを名けて念と爲す。是の念の相は有爲法にして、滅して過去すと雖も是の念は能く知る。聖人の智慧力の如きは、能く未來世の事を知る。念念も亦是の如く、能く過去の法を知る。若し前の眼識滅し、後の眼識生ぜば、後の眼識は轉た利にして力あり。色は暫有にして住せずと雖も、念の力利なるを以ての故に能く知る。是事を以ての故に、念念生滅して無常なりと雖も、能く分別して色を知るなり。又汝は言ふ「いま現在の人の識は新新の生滅し、身命斷ずる時は亦盡くとせば、諸行の罪福は誰に隨ひ、誰か受けん。誰か苦樂を受け、誰が解脫する者ぞ」と。今當に答ふべし。汝は今未だ實道を得ず。是の人は諸の煩惱、心を覆ひ、因縁の業を作り生じ。死する時、此れに從て五陰は相續して、五陰を生ず。譬へば一燈を以て更に一燈を然すが如し。又穀子の生ずるが如きは、三因縁あり、地と水と種子となり。後世の身の生ずるも亦た是の如し。身あり、有漏の業あり、結

【一八】四衆。既註、四蘊。
【一九】三無爲。擇滅、非擇滅、虛空。
【二〇】三事。根と境と識。

答へて曰く、有人の言く、「神は心中に在つて、微細なること芥子の如くして、清淨なれば、名けて淨色身と爲す」と。更に有人の言く、「麥の如し」と。有が言く、「豆の如し」と。有が言く、「半寸」と、有が言く、「一寸にして、初めて身を受くる時、最も前に在つて受く。譬へば像の骨の如し、其身を成すに及んでは、像は已に莊なるが如し」と。有が言く、「大小は人身に隨ふ、死し壞する時、此も亦た前に出づ」と。此の如き事は皆爾らざるなり。何となれば、一切の色は、[一六]四大の所造にして、因緣より生ずるが故に、無常なるを以てなり。若し神は是れ色なりとせば、色は無常なるを以て、神も亦無常なり。若し無常なりとせば上に說く所の如し。

問うて曰く、身に二種あり、麁身及び細身なり。麁身は無常なれども、細身は是れ神にして、世世、常にして去つて五道の中に入る。

答へて曰く、此の細身は不可得なり、若し細身あらば、應に處の得べき所あるべし。五藏四體の如き、一一の處の中に求むれども皆不可得なり。

問うて曰く、此の細身は微細にして、初め死する時は已に去り、若し活くる時は則ち求むることを得可からず、汝云何んぞ能く見んや。又此の細身は、五情の能く見、能く知るところに非ず、唯、神通の聖人あつて、乃ち能く見ることを得。

答へて曰く、若し爾りとせば、無と異なること無し。人の死する時の如きは、此の生陰を捨てて[一七]中陰の中に入る。是の時今世の身滅して、中陰の身を受く。此に前後なく、滅する時、卽ち生ず。譬へば臘印を泥に印するに、泥中に印を受くるや、印は卽時に壞するが如し。成と壞とは一時にして亦前後なし。是時、中陰中に有を受け、此中陰を捨てて生陰の有を受く。汝が言ふ細身とは卽ち此の中陰なり、中陰の身は出なく入なし。譬へば燈を然すに、生滅相續して、常ならず、斷ならざるが如し。佛の言はく、「一切の色衆は、若くは過去・未來・現在、若くは內、若くは外、若くは麁、若

【一六】四大。地水火風の四原素。

【一七】中陰。此に死して彼に生を受くる間の中間に於て受くる陰形。陰は五蘊の蘊である。

能はざるべし。亦た今世も後世もなく、若し神、常なりとせば後世の生、今世の死あるべからず。若し神常なりとせば、則ち常に我見あつて涅槃を得べからず。若し神常なりとせば、則ち起ること無く、滅すること無く、妄失すること有るべからず。其れ神なく、識は無常なるを以ての故に、忘あり失あり。是の故に神は常に非ざるなり。是の如き等の種種の因緣により、神は常相に非ること を知るべし。若し神は無常の相ならば、亦罪なく福なし。若し身無常ならば神も亦無常なり、二事倶に滅すれば則ち、斷滅の邊に墮す。斷滅に墮すれば、則ち後世に到つて罪福を受くる者なし。若し斷滅して則ち涅槃を得ば、結を斷ずるを須ゐず、亦た後世の罪福の因緣を用ゐず。是の如き等の種種の因緣により、神は無常に非ることを知るべし。若し神は、自在の相、作の相ならば、則ち應に得んと欲する所に隨つて皆得べし。今欲する所更に得ず、欲する所に非ずして更に得。若し神自在ならば、亦た惡行を作して、畜生惡道の中に墮すること有るべからず。　復次に、一切衆生は皆苦を樂はず、誰か當に樂を好んで而して更に苦を得べけんや。是を以ての故に神は自在ならず、亦自作ならざることを知る。又人の罪を畏るるが故に、自ら强いて善を行ずるが如し。若し自在ならば何を以てか罪を畏れて、自ら强いて福を修せんや。又諸の衆生は意の如くすることを得ず、常に煩惱・愛縛の爲に牽かる。是の如き等の種種の因緣により、神は自在ならず、自作ならざることを知る。若し神自在ならず自作ならずんば、是れ神の相なしと爲す。汝が言ふ我は卽ち是れ六識にして、更に異事なし」　復次に、若し不作なりとせば、云何んぞ閻羅王は罪人にむかひ、「誰か汝をして此の罪を作さしむる者ぞ」と問へるに、罪人答へて、「是れ我が自ら作せるなり」と言はんや。是を以ての故に不自作に非ることを知る。若し神は色相ならば是の事は然らず、何となれば一切の色は無常なるを以てなり。

問うて曰く、人は云何なれば、「色は是れ我の相」なりと言ふや。

無しと爲んや」と問ふ。諸の比丘は問ふ、「汝は是れ何人ぞや」と。答へて言く、「我も亦自ら是れ人なるか、人に非るかを知らず」と。卽ち、衆僧の爲に廣く上の事を說く。諸の比丘の言く、「此の人は自ら無我なることを知る、得度すべきこと易し」と。之に語つて言く、「汝が身は、本より已來、恒に自ら無我なり、適ま今(無我)なるに非ざるなり。但だ四大和合するを以ての故に、計して我が身と爲す、汝が本身の如きは今と異なること無し」と。諸の比丘は之を度し、道を爲し諸の煩惱を斷じ、卽ち阿羅漢を得たり。是を有と爲す時は、他身も亦計して我と爲す。彼此あるを以ての故に我ありと謂ふ可らず。復次に、是の我の實性は決定して不可得なり。若くは常相・非常相・自在相・不自在相・作相・不作相・色相・非色相、是の如き等の種種は皆不可得なり。若し相有れば則ち法有り、相なければ則ち法なし。我はいま相なければ則ち我なきことを知る。若し我は是れ常ならば、殺す罪あるべからず。何となれば、身は殺す可くんば常に非らざるが故に、我は殺すべからずんば、常なるが故なり。

問うて曰く、我は常なるが故に殺す可らずと雖も、但だ身を殺せば則ち殺罪あり。

答へて曰く、若し身を殺して殺罪ありとせば、毘尼の中に言く、「自殺には殺罪なし、罪と福とは他を惱し、他を益するより生ず」と。自ら身を供養し、自ら身を殺すが故に、罪あり福あるには非ず。是を以ての故に、毘尼の中には、「自ら身を殺すに殺罪はなく、愚癡・貪欲・瞋恚の咎あり」と言ふ。若し神常なりとせば、死すべからず、生ずべからず。何となれば汝等が法によれば、神は常にして、一切五道の中に遍滿せり。云何にして死生あらん。死を「此の處を失す」と名け、生を「彼の處に出づ」と名く。是を以ての故に「神は常なり」と言ふことを得ず。若し神常なりとせば、亦應に苦樂を受くべからず。何となれば、苦來れば則ち憂ひ、樂至れば則ち喜ぶ。若し憂喜の爲に變ぜらるれば則ち常に非ず。若し常ならば應に虛空の如くして、雨も濕ほすこと能はず、熱も乾かすこと

ほ、人の兎角を問ふに、馬の角に似たりと答ふるが如し。馬の角、若し實に有らば、以て兎角を證すべし、馬の角すら猶尚未だ了ぜずして、以て兎角を證せんと欲す。　復次に、自ら身に於て、我を生ずるが故に、便ち自ら神ありと謂ふ。汝「神は遍し」と言はば、應に他身を計して我と爲すべし。是を以ての故に、「自身の中には、我の心を生計すれども、他身に於ては生ぜざるが故に、神あることを知る」と言ふべからず。　復次に、有人は、他物の中に於いて我心を生ず。外道の坐禪人の如きは、[一五]地一切入觀を用ふる時、地を見れば則ち是れ我、我は則ち是れ地とす、水火風空も亦是の如し。顚倒の故に他身に於ても亦我を計す。　復次に、有時は、他身に於て我を生ず。有る一人の如きは、使を受けて遠く行き、獨り空舍に宿するに、夜中に鬼あり、一の死人を擔ぎ來つて、其の前に著く。復た一鬼あり、逐ひ來つて前の鬼を瞋り罵る、「是死人は是れ我が物なり、汝何を以てか擔ぎ來る」と。先の鬼の言く、「是は我が物なり、我自ら持ち來れり」と。後の鬼の言く、「是死人は實に我れ擔ぎ來れり」と。二鬼各一手を捉へて是を爭ふ。前の鬼の言く、「此中に人あり、問ふべし」と。後の鬼は卽ち問ふ、「是死人は誰か擔ぎ來れるや」と。是人思惟すらく、「此二鬼は力大なり。若し實語するも、亦た當に死すべく、若し妄語するも、亦た當に死すべし。俱に死を免れず、何ぞ妄語を爲さんや」と。語りて言く、「前の鬼擔ぎ來れり」と。後の鬼は大に瞋り、人の手を捉へて、拔出して地に著き、前の鬼は死人の一臂を取り、之を拊でて卽ち著く。是の如く、兩臂・兩脚・頭・脅・身を擧げて皆易ゆ。是に於て、二鬼は共に易ゆる所の人身を食し、口を拭いて去る。其人思惟すらく、「我が父母の生ずる身は、眼のあたり二鬼食ひ盡くせり。今我が此の身は、盡く是れ他の肉なり。我は今定んで身ありと爲んや、身なしと爲んや。若し以て有りと爲ば、盡く是れ他の身なり。若し以て無しと爲ば、今現に身あり」と。是の如く思惟し、其の心迷悶すること、譬へば狂人の如し。明朝、路を尋ねて去り、前の國土に到る。佛塔に衆僧あるを見て、餘事を論ぜず、但「己の身は有りと爲んや、

【一五】地一切入。一切入は、萬有を總合して一對象として觀ずる方法。十種あり。地、水、火、風、青、黃、赤、白、空、識。これを十一切入と云ふ地一切入はその初めに當る。

答へて曰く、因緣和合の故に名字あり、屋の如く、車の如く實法は不可得なり。

問うて曰く、云何なれば我は不可得なるや。

答へて曰く、上に「我聞けり、一時」の中に、已に說くが如し。今當に更に說くべし。佛は六識を說きたまふ。眼識及び眼識相應の法は、共に色を緣じて、屋・舍・城・廓・種種の諸名を緣ぜず、耳鼻舌身識も亦是の如し。意識及び意識相應の法は、眼を知り、色を知り、眼識を知り、乃至意を知り、法を知り、意識を知る。是識の緣ずる所の法は、皆空にして無我なり。そは生滅するを以てなり、自在ならざるを以てなり、無爲法の中にては亦我を計せず、苦樂を受けざるを以てなり。是中に若し強いて我の法あらば、應當に第七識ありて我を識るべし。而るに今は爾らず、是を以ての故に無我なることを知る。

問うて曰く、何を以てか無我なることを識るや、一切の人は、各各自身の中に我を生計し、他身の中に我を生ぜず。若し自身の中に我なきに、而も妄見して我と爲すとせば、他身の中の我無きものも、亦應に他身に於いて、妄見して我と爲すべし。　復次に、若し內に我なくして、色と識とは念念に生滅すとせば、云何にして分別して、是の色の青黃赤白を知らん。　復次に、若し我なくんば、今現在の人の識は、漸漸に生滅し、身命の斷ずる時は亦盡く。諸行の罪福は誰にか隨ひ、誰か受けん、誰か苦樂を受け、誰か解脫する者ぞ。是の如き種種の因緣の故に、我有ることを知る。

答へて曰く、此は俱に難あり。若し他身に於て我を生計すとせば、復當に言ふべし、「何を以てか自身の中に我を生計せざるや」と。　復次に、「五衆の因緣より生ずるが故に、空にして我なし。無明の因緣より[一四]二十の身見を生ず、是の我見は、自ら五陰に於て、相續して生ず。此の五衆より緣生するを以ての故に、卽ち此の五衆を計して我と爲す、他身に在らず、其の習を以ての故なり。　復次に、若し神ありとせば彼の我ある可し。汝は未だ神の有無を了ぜずして、彼の我を問ふ。其は猶

【一四】二十身見。(一)色これ我なり、主の如し。(二)我に色あり、莊嚴の如し。(三)色はこれ我が所有、僮僕の如し。(四)我は色の中にあり、器の如し。(五)我はこれ感覺なり。(六)我に感覺あり、(七)感覺は我が所有なり。(八)感覺は我が所有、(九)知覺は是れ我。(十)我は知覺を有す。(十一)知覺は我が所有、(十二)我は知覺の中にあり、(十三)意志性向はこれ我。(十四)我は意志性向を有す。(十五)意志性向は我が所有、(十六)我は意志性向の中にあり。(十七)認識はこれ我。(十八)我は認識を有す。(十九)認識は我が所有。(二十)我は認識の中にあり。

とし、或は黄とし、或は白とし、或は赤とし、或は都て空とす。十一切入の觀の如し。佛、耆闍崛山の中に在せしが、比丘僧と倶に王舍城に入り、道中に、大水を見る。佛、水上に於て、[一三]尼師壇を敷いて坐し、諸の比丘に告げたまはく、「若し比丘、禪に入れば心自在を得て、能く大水をして地と作らしめ、卽ち實の地と成す。何となれば、是水の中には、地の分あるを以ての故なり。是の如く、水・火・風・金・銀、種種の寶物をも卽ち皆な實に（それと）成さん。何となれば是の水中に皆其の分あればなり」と。　復次に、一の美色の如し。婬人は之を見て以て淨妙と爲し、心に染著を生ず。不淨觀の人之を視れば、種種の惡、露はれ、一の淨處もなし。等しく婦なるは、之を見て妒、瞋つて憎惡し、目に見んと欲せず、以て不淨と爲す。婬人は之を觀て樂と爲し、妬人は之を觀て苦と爲し、行人は之を觀て得道し、無豫の人は之を觀て適莫する所なく、土木を見るが如し。若し此の美色實に淨ならば、四種の人の觀は皆應に淨を見るべく、若し實に不淨ならば、四種の人の觀は皆應に不淨なるべし。是を以ての故に好醜は心に在つて、外に定まれること無きを知る。空を觀ずるも亦是の如し。

復次に、是氈の中に十八空の相あり、故に之を觀ずれば便ち空なり。空なるが故に不可得なり。是の如く、種種の因緣により、財物は空にして決定して不可得なり。

云何にして施人は不可得なりや。氈の如きは、因緣和合の故に有り、分分に之を推すに氈は不可得なり。施者も亦是の如く、四大が、虛空を圍むを名けて身と爲し、是の身識の動作し、來往し、坐起するを、假に名けて人と爲す、分分に之を求むるに亦不可得なり。　復次に、一切の、衆界・入の中に、我は不可得なり。我、不可得なるが故に、施人も不可得なり。何となれば、我に種種の名字あり、人天・男女・施人・受人・苦を受くる人・樂を受くる人・畜生等なり。是は但だ名のみ有つて實法は不可得なり。

問うて曰く、若し施者不可得ならば、云何にして菩薩ありて、檀波羅蜜を行ずるや。

【一三】尼師壇（Nisidana）。坐具。坐臥の時、地に敷いて身を護る。

物未だ異らずして、而も東西の別あり。此れ皆名あつて實なきなり。是の如き等を名けて相待有と爲す。是の中に實法なし、色・香・味・觸等の如くならず。假名有とは、酪の如きは、色・香・味・觸の四事あり、因縁合するが故に、假に名けて酪と爲す。有なりと雖も因縁法の有ると同じからず。無なりと雖も、亦た兎角・龜毛の無なるが如くならず。但因縁合するを以ての故に假に有と名く、酪・氀も亦た是の如し。　復次に、極微の色・香・味・觸あるが、故に毛分はあり。毛分の因縁の故に毛あり、毛の因縁の故に毳あり、毳の因縁の故に縷あり、縷の因縁の故に氀あり、氀の因縁の故に衣あり。若し極微の色・香・味・觸の因縁なくんば亦た毛分なし、毛分なきが故に亦た毛なく、毛なきが故に亦た毳なく、毳なきが故に亦た縷なく、縷なきが故に亦氀なく、氀なきが故に亦た衣なし。

問うて曰く、亦た必ずしも一切の物は、皆因縁の和合によるが故に有るにあらず。微塵の如きは至細なるが故に分なし、分なきが故に和合なし。氀は麁なるが故に破すべきも、微塵の中には分なし、云何んぞ破す可んや。

答へて曰く、至微にして實なきに、强ひて之が名と爲す。何となれば、麁と細とは相待なり、麁に因るが故に細あり、是の細にも亦應に細あるべければなり。　復次に、若し極微の色あれば則ち十方の分あり。若し十方の分あれば、是を名けて極微と爲さず。若し十方の分なければ、卽ち名けて色と爲さず。　復次に、若し極微あれば、則ち應に虛空の分齊あるべく、若し分ありとせば則ち極微と名けず。　復次に、若し極微あれば是中に色・香・味・觸ありて分を作す。色・香・味・觸、分を作さば、是を極微と名づけず。是を以て微塵を推求するに則ち不可得なり。經に言へるが如し、「色の若くは麁、若くは細、若くは內、若くは外なるを、總じて之を觀ずるに、無常にして無我なり。微塵ありと言はず」と。是を分破の空と名づく。復た空を觀ずること有り、是の氀は心に隨ふて有り。坐禪人の如きは、氀を觀じて或は地と作し、或は水と作し、或は火と作し、或は風と作し、或は青

縷あるを因を爲し、織る具を緣と爲す。是の因緣、和合するが故に㲲と爲る。人の功を作と爲し、人の毀すを破と爲し、寒暑を禦ぎ、身體を蔽ふを果報と名く。人之を得れば大に喜び、之を失へば大に憂ふ。之を以て施すが故に、福を得て道を助く。若くは盜み、若くは劫め、之を都市に戮せば、死して地獄に入る。是の如き等の種種の因緣あるが故に、此の㲲あることを知る、是を㲲の法と名く。云何なれば「施物は不可得なり」と言ふや。

答へて曰く、汝は「名あるが故に是の事あり」と言ふも、然らず。何を以てか之を知るや。名に二種あり。實あり、不實あり。不實の名は、一草あり、[二]朱利と名くるが如し。草は亦盜みもせず、劫めもせず、實に賊に非ず、而も名けて賊と爲す。又兎角・龜毛の如し、亦た但だ名のみあつて實なし。㲲は兎角・龜毛の如くに無ならずと雖も、然も因緣の會するが故に有り、因緣散ずるが故に無し。林の如き、軍の如きは是れ皆名あつて而も實なし。譬へば木人は名ありと雖も、其人の法は求むべからざるが如し。㲲の中に名ありと雖も、亦㲲の眞實を求むべからず。㲲は能く人の心念の因緣を生じ、之を得れば便ち喜び、之を失へば便ち憂ふ。是を念の因緣と爲す。心の生ずるには二の因緣あり、實より生ずる有り、不實より生ずる有り。夢中に見るところの如き、水中の月の如き、夜、[三]杌樹を見て、謂つて人と爲すが如き、是の如きは「不實の中より能く心をして生ぜしむ」と名く。是の緣は不定なり、心に生じて有るが故に、便ち是ありと言ふべからず。若し心に生ずる因緣の故に有り、更に實有を求むべからずとせば、眼に水中の月を見て、心に生じて是を月と謂ふが如し。若し心に從つて便ち是の月を生ぜば、則ち復た眞の月なきなり。　復次に、有に三種あり、一には相待有、二には假名有、三には法有なり。相待とは、長短・彼此と等の如し。實には長短なく、亦た彼此もなし。相待を以ての故に名のみ有り。長は短に因つて有り、短は亦た長に因る。彼は亦た此に因り、此は亦た彼に因る。若し物東に在れば、則ち以て西と爲し、西に在れば則ち以て東と爲す。一

【二】朱利 (Cauri)。割註あり「朱利、秦に賊と言ふなり。」

【三】杌樹。枝なき樹。

上るが如し。 復次に、物施の中に一の女人の如きは、酒に醉ひ沒心して、七寶の瓔珞を以て、迦葉佛の塔に布施したるに、福德を以ての故に三十三天に生れたり。是の如きの種種を名けて物施と爲す。

問うて曰く、檀を捨財と名く。何を以てか「無所捨の法を具足す」と言ふや。

答へて曰く、檀に二種あり、一には出世間、二には不出世間なり。今は出世間の檀の無相なることを說く。無相の故に捨つる所なし、是の故に「無所捨の法を具足す」と言ふ。 復次に、財物は不可得の故に、名けて「無所捨」と爲す。是の物の未來と過去とは空なり、現在の分別に一の定法なし。是を以ての故に「無所捨」と言ふ。 復次に、行者財を捨つる時、心に「此の施は大に功德あり」と念ずるを以て、是に倚つて、憍慢、愛結等を生ず。是を以ての故に「無所捨」と言ふ。無所捨なるを以ての故に憍慢なく、憍慢なきが故に愛結等生ぜず。 復次に、施者に二種あり、一には世間の人、二には出世間の人なり。世間の人は能く財を捨つれども、施を捨つること能はず。出世間の人は、能く財を捨て、施を捨つ。何となれば財物も施心も倶に不可得なるが故なり。 是を以ての故に「無所捨の法を具足す」と言ふ。

復次に、檀波羅蜜の中には、「財と施と受者との三事は不可得なり」と言ふ。

問うて曰く、三事和合するが故に名けて檀と爲す。今三事は不可得なりと言ふ、云何にして「檀波羅蜜を具足し滿つ」と名くるや。今は財あり、施あり、受者あり。云何にして三事は不可得なるや。施すところの氈の實有なるが如し。何となれば氈には名あれば則ち氈の法あり、氈の法なくんば亦氈の名なし。名あるを以ての故に應に實に氈あるべし。 復た次に、氈に長あり、短あり、麁・細・白・黑・黃・赤あり。因あり、緣あり、作あり、破あり、果報あり、法に隨つて心を生ず。十尺を長と爲し、五尺を短と爲し、縷の大なるを麁となし、縷の小なるを細と爲す。染むるに隨つて色あり、

ひ、獼猴は鳥を戴き、敬を行じ、物を化し、物は皆な善を修するを見(傳へて國人に告ぐ。人各慶して曰く、「時將に太平ならんとす」。鳥獸にして而も仁あり」と。人も亦之に効うて、皆禮敬を行じ、古より今に及で化は萬世に流る。當に知るべし、是を法身の菩薩と爲す。復次に、法身の菩薩は一時の頃に、化して無央數の身と作り、十方の諸佛を供養し、一時に能く無量の財寶を化して衆生に給足し、能く一切の上中下の聲に隨つて、一時の頃に普ねく爲に法を說き、乃至佛樹下に坐す。是の如き等の種種を名けて、法身の菩薩の、檀波羅蜜の滿を行ずと爲す。

復次に、檀に三種あり、一には物施、二には供養恭敬の施、三には法施なり。云何なるが物施なるや。珍寶・衣食・頭・目・髓・腦、是の如き等の內外の所有、盡く以て布施する、是を物施と名く。恭敬施とは、信心清淨にして、恭敬し禮拜し將送し迎逆し讚遶し供養する、是の如き等の種種を名けて恭敬施と爲す。法施とは、道德の爲の故に語言し、論議し、誦讀し、講說して疑を除き、問に答へ、人に五戒を授く。是の如き等の種種を佛道の爲の故に施す、是を法施と名く。是の三種の施滿つるを、是を檀波羅蜜の滿と名く。

復次に、三事の因緣は檀を生ず。一には信心清淨、二には財物、三には福田なり。心に三種あり、若くは憐愍、若くは恭敬、若くば憐愍恭敬なり。貧窮下賤及び諸の畜生に施す、是を憐愍施と爲し、佛及び諸の法身の菩薩等に施す、是を恭敬施と爲し、諸の老病貧乏なる阿羅漢と辟支佛とに施す、是を恭敬憐愍施と爲す。施物清淨にして、盜めるに非ず、劫めるに非ず、時を以て施して、名譽を求めず、利養を求めず、或時は心に從つて大に福德を得、或は福田に從つて大に功德を得、或は妙物に從つて大に功德を得。第一の心に從ふは、四等心[九]・念佛三昧の如く、身を以て虎に施す。是の如きを「心に從つて大功德を得」と名く。福田に二種あり。一には憐愍福田、二には恭敬福田なり。憐愍福田は能く憐愍の心を生じ、恭敬福田は能く恭敬の心を生ず。阿輸伽王[一〇]が土を以て佛に

【九】四等心。慈悲喜捨の四無量心。
【一〇】阿輸伽王、割註して「秦に無憂と言ふ」とある。

云何に法身の菩薩は檀波羅蜜を行ずるや。菩薩は末後の肉身に無生法忍を得、肉身を捨てて法身を得。十方の六道の中に於て身に變じ、適應して以て衆生を化し、種種の珍寶・衣服・飲食を一切に給施し、又た頭・目・髓・腦・國財・妻子・內外の所有を以て盡く以つて布施す。譬へば釋迦文佛の如きは、曾て六牙の白象と爲る。獵者便(たより)を伺ひて、毒箭を以て之を射る。諸象競ひ至り、來つて獵者を踏み殺さんと欲す。白象は身を以て之を捍(まも)り、其の人を擁護し、之を愍むこと子の如し。諭して群象を遣り、徐ろに獵人に問ふ、「何故に我を射るや」と。答へて曰く、「我れ汝が牙を須む」と。即時に六牙を以て、石孔の中に內(い)るに、血肉俱に出づ、鼻を以て牙を擧げて、獵者に授與す。象の身と曰ふと雖も、心を用ゆること是の如し。當に知るべし、此の象は畜生行の報に非ることを。阿羅漢の法の中には都て此心なし、當に此は法身の菩薩たることを知るべし。　ある時、閻浮提の人は、耆舊・有德を禮敬するを知らず、言を以て之を化するに未だ得度すべからず。是時、菩薩は自ら其身を變じて、[七]迦頻闍羅鳥と作る。是鳥に二の親友あり。一は大象、二は獼猴にして、共に[八]必鉢羅樹の下に在つて住せり。自ら相問うて言く、「我等は知らず、誰をか大と爲すべきや」と。象の言く、「我れ昔、此の樹の我が腹の下に在るを見たり。今大なること是の如し。此を以て之を推すに、我は應に長たるべし」と。獼猴言はく、「我曾て地に蹲まり手を以て樹頭を挽けり。此を以て之を推すに、我應に長たるべし」と。鳥言はく、「我必鉢羅の林中に於て、此の樹の果を食したるに、(種)子は糞に隨つて出で、此の樹生ずることを得たり。是を以て之を推すに、我應に最も大なるべし」と。鳥は復た說いて言く、「先生の宿舊を禮して、應に供養すべし」と。即時に、大象は背に獼猴を負ひ、鳥は猴の上に在つて周遊して行く、一切の禽獸は見て之に問ふ、「何を以て此の如くなるか」と。答へて曰く、「此を以て長老を恭敬し、供養するなり」と。禽獸は化を受け、皆禮敬を行ひて民田を侵さず、物の命を害せず。衆人は一切の禽獸の復た害を爲さざるを疑怪み、獵者林に入るに、象は獼猴を負

【七】迦頻闍羅鳥(Kapiñjala=da)。鳩鳥と譯せり。
【八】必鉢羅樹(Pippala)。菩提樹。

羅蜜を具足し滿つ」と名く。

復次に、菩薩に二種の身あり、一には結業生身[三]、二には法身なり。是の二種の身中に檀波羅蜜を滿す。是を「檀波羅蜜を具足す」と名づく。

問うて曰く、云何なるを「結業生身もて檀波羅蜜を滿す」と名くるや。

答へて曰く、未だ法身を得ず、結使未だ盡きされども、能く一切の寶物、頭・目・髓・腦・國財・妻子・內外の所有を以て、盡く以て布施し、心に動轉せず。[四]須提拏太子の如きは、其二子を以て婆羅門に布施し、次に妻を以て施して、其心轉せざりき。又[五]薩婆達王の如きは、敵國の爲に滅され、身を窮林に竄するに、遠國の婆羅門あり、來つて、已より乞はんとす。自らは國破れ、家亡び、一身藏竄すれども、其の辛苦を愍れむを以ての故に、遠くより來つて、而も得るところなきを見て、婆羅門に語げて「我は是れ薩婆達王なり、新王、人を募つて我を求むること甚だ重し」と言ひ、即時に自ら縛して、身を以て之に施し、（婆羅門は）新王に送與して、大いに財物を得たり。亦た[六]月光太子の如きは、出で行きて遊觀するに、癩人之を見て、車を要して白して言さく、「我が身は重病にして辛苦し懊惱す、太子は嬉遊して獨り自ら歡ぶや。大慈愍念して、願くは救療せられよ」と。太子は之を聞き、以て諸醫に問ふに、醫の言はく、「當に須らく生れてより長大にして、瞋ること無かりし人の血髓を須ゐて塗り、而して之を飲ましむべし、是の如くせば愈ゆべし」と。太子念じて言はく、「設ひ此の人ありとも、生を貪り壽を惜まん、何ぞ得べけんや。自ら我が身を除いて得べき處なし」と。即ち旃陀羅に命じて、身の肉を除き、骨を破つて髓を出し、以て病人に塗り、血を以て之に飲ましむ。是の如き等の種種に、身及び妻子を施して、而も惜むことなきこと、草木を棄つるが如し。施す所の物を觀て、（それが）緣に從つて有り、其の實を推求するに、都て得る所なく、一切清淨にして涅槃の相の如くなるを知り、乃ち無生法忍を得るに至る。是を結業生身に檀波羅蜜を行ずと爲す。

【三】結業生身。善惡の業によりて生じたる身。

【四】須提拏太子(Sudāna)。正しくは Viśvantara 釋尊の前生。尸毘國の王子。布施を好み、常に大施をなす。國の功德象を與えて。民衆の怒に觸れ、山に入るや、更に、二愛兒・愛妃をも乞はれて與ふ。かくて布施波羅蜜を成滿し、二兒は遂に祖國に歸り天子も迎へられて王となる。所謂、布施太子なり。●●割註あり「秦に好愛と言ふ。」

【五】薩婆達王(Sabbadatta)。●●割註あり「秦に一切施と言ふ。」と。西域記に、摩訶訶伐那迦藍をその遺跡となせり。

【六】月光(Candraprabha)。

ざる人には與ふべからず、人には與ふべく、禽獸には與ふべからず」と。一切衆生に於て、平等の心もて施し、施して報を求めず、又實相を施すことを得。是を「具足して滿つ」と名く。亦時を觀ぜず、晝となく、夜となく、冬となく、夏となく、吉となく、衰となく、一切時に常に等しく施して心に悔い惜むこと無く、乃至頭・目・髓・腦を施して而も悋むこと無し。是を「具足して滿つ」と爲す。

復次に、有人の言く、「菩薩は初發心より、乃至、菩薩樹下の三十四心まで、是中間に於けるを名けて布施を具足して滿つと爲す」と。 復次に、七住の菩薩は、一切諸法の實相の智慧を得、是の時、佛土を莊嚴し、衆生を敎化し、諸佛を供養して、大神通を得、能く一身を分つて無數の身と作し、一一の身より皆七寶の華・香・旛・蓋を雨らし、大燈を化作すること須彌山の如く、十方の佛及び菩薩僧を供養す。復た妙音を以て佛德を讃頌し、禮拜し、供養、恭敬して將に迎へんとす。 復次に、是の菩薩は、一切十方無量の餓鬼國の中に於て、種種の飲食、衣被を雨らし、其をして充滿せしめ滿足を得已つて、皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。復た畜生道の中に至り、其をして自ら善く相害するの意なからしめ、其の畏怖を除き、其の須ふる所に隨つて各充足せしめ、滿足を得已つて、皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。地獄の無量の苦の中に於ては、能く地獄の火を滅し、湯を冷かならしめ、罪息み、心善にして、其飢渴を除き、天上・人中に生ずることを得せしむ。此因緣を以ての故に、皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。若し十方の人の貧窮なる者には、之に給するに財を以てし、富貴なる者には、施すに異味・異色を以てし、其をして歡喜せしむ。此因緣を以ての故に皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。若し欲天の中に至つては、其をして天上の欲樂を除却せしめ、施すに妙寶・法樂を以てし、其をして歡喜せしむ。此の因緣を以ての故に、皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。若し色天の中に至つては、其の樂に著するを除き、菩薩の禪法を以て娛樂せしむ。此の因緣を以ての故に、皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。是の如くにして乃ち十住に至る。是を「檀波

に波羅蜜と名く。

問うて曰く、阿羅漢・辟支佛も亦能く彼岸に至る、何を以てか波羅蜜と名けざるや。

答へて曰く、阿羅漢・辟支佛の彼岸に度ると、佛の彼岸に度るとは、名は同じくして實は異なれり。彼は生死を以て此の岸と爲し、涅槃を彼岸と爲す。而して檀の彼岸に度ること能はず。何となれば、一切の物、一切の時、一切の種を以て布施すること能はず。設ひ能く布施するも亦た大心なく、或は無記心を以てし、或は有漏の善心、或は無漏心の施にして、大悲心なく、能く一切衆生の爲に施すこと能はざるなり。菩薩の施は、布施の不生・不滅にして無漏・無爲なること涅槃の相の如くなるを知り、一切衆生の爲の故に施す、是を檀波羅蜜と名く。　復次に、有人の言く、「一切の物、一切の種、內外の物、盡く以て布施して果報を求めず、是の如き布施を檀波羅蜜と名く」と。　復次に、盡す可らざるが故に、檀波羅蜜と名く。何となれば施す所の物は、畢竟空にして涅槃の相の如しと知り、是の心を以て衆生に施せばなり。是の故に施の報も盡す可らず（これを）檀波羅蜜と名く。五通仙人の如きは、好き寶物を以て藏して石中に著け、此の寶を護らんと欲して、金剛を磨いて之に塗り、破る可らざらしむ。菩薩の布施も亦復是の如く、涅槃實相の智慧を以て布施を磨き塗り、盡す可らざらしむ。　復次に、菩薩は一切衆生の爲の故に布施す、衆生の數は盡す可らざるが故に、布施も亦盡く可らず。　復次に、菩薩は佛法の爲の故に布施す、佛法は無量無邊なれば、布施も亦無量無邊なり。是を以ての故に阿羅漢・辟支佛は、彼岸に到ると雖も、波羅蜜と名けず。

問うて曰く、云何なるを「具足し滿つ」と名くるや。

答へて曰く、先に說けるが如く、菩薩は能く一切に布施し、內・外、大・小、多・少、麁・細、著・不著、用・不用、是の如き等の種種の物を、一切能く捨て、心に惜む所なく、等しく一切衆生に與へて是觀を作さず。（卽ち）「大人には與ふべく、小人には與ふべからず、出家人には與ふべく、出家せ

魔の檀、二には佛の檀なり。若し結使の賊の爲に奪はれ、憂惱し怖畏するは、是を魔の檀と爲し、名けて此岸と曰ふ。若し清淨に布施することあつて、結使の賊なく、怖畏する所なく、佛道に至ることを得るは、是を佛の檀と爲し、名けて彼岸に到ると曰ふ。是を波羅蜜と爲す。佛、毒蛇喩經の中に說きたまふ如くんば、人あり、罪を王に得たり。王は一の篋を掌護せしむ。篋の中に四毒蛇あり、王は罪人に勅して看視し養育せしむ。此の人思惟すらく、「四蛇は近き難し、近けば則ち人を害す、一すら猶養ひ叵し、而も況んや四に於てをや」と。便ち篋を棄てて走れば、王五人をして、刀を拔いて之を追はしむ。復た一人あり、口には附順すと言ひつゝ、心には中傷を欲せり。而も之に語つて言はく、「之を養ふに理を以てせば、此れも亦た苦なし」と、其の人は之を覺り、馳走して命を逃れ、一空聚に至る。一の善人あり、方便して之に語る。「此の聚は空なりと雖も、是れ賊の止まる處なり。汝今此に住せば、必ず賊の爲に害せられん、愼んで住すること勿れ」と。是に於て復た去つて一大河に至る。河の彼岸は卽ち是れ異國なり。其の國は安樂坦然、清淨にして、諸の患難なし。是に於て衆の草木を集め、縛して以て栰と爲して進み、手足を以て力を竭し、渡らんことを求む。既に彼の岸に到れば安樂にして患なかりき。王とは魔王、篋とは人身、四の毒蛇とは四大、五の拔刀の賊とは五衆、一人の口善にして心惡なるものは是れ染著、空聚は是れ六情なり。賊は是れ六塵、一人愍んで之に語るものは是を善師と爲す、大河は是れ愛、栰は是れ八正道、手足もて懃めて渡るは是れ精進、此岸は是れ世間、彼の岸は是れ涅槃、度る者は漏の盡きたる阿羅漢なり。菩薩の法の中も亦是の如し。若し施に三の礙(卽ち)我と、彼の施す所を受くる者と、財とあらば、是を魔の境界に墮し、未だ衆難を離れずと爲す。菩薩の如きは、布施するに三種、清淨にして此の三礙なく、彼岸に到るを得て、諸佛の爲に讃ぜらる。是を檀波羅蜜と名く。是を以ての故に「彼岸に到る」と名く。此の六波羅蜜は、能く人をして慳貪等の煩惱に、染著せる大海を渡り、彼の岸に到らしむ。是の故

卷の第十二

初品第二十……檀波羅蜜法施の餘

問うて曰く、云何なるを檀波羅蜜の滿と名くるや。

答へて曰く、檀の義は上に說くが如し。[一]波羅蜜は、是れ「布施の河を渡りて、彼岸に到るを得る」に名く。

問うて曰く、云何なるを「彼岸に到らず」と名くるや。

答へて曰く、譬へば河を渡るに、未だ到らずして還るが如きを名けて、「彼岸に到らず」と爲す。舍利弗の如きは、六十劫の中に於て、菩薩の道を行じ、布施の河を渡らんと欲す、時に乞人あり來つて其の眼を乞ふ。舍利弗言く、「眼は任すべき所ならず、何を以てか之を索むるや。若し我が身及び財物を須ひなば、當に以て相與ふべし」と。答へて曰く、「汝が身及び財物を以て須ひず、唯だ眼を得んと欲す。若し汝實に檀を行ずるならば、眼を以て與へよ」と。爾の時、舍利弗は、一眼を出して之を與ふ。乞者は眼を得て、舍利弗の前に於て之を嗅ぎ、臭を嫌つて唾して地に棄て、叉脚を以て蹹む。舍利弗思惟して言く、「此の如きの弊人等は、度す可きこと難し、眼は實に用無きも、而も强いて之を索め、既に得れば而も棄て、叉脚を以て蹹む。何ぞ弊なるの甚しきや。此の如きの人輩は度す可らず、自ら調へて、早く生死を脫せんには如かず」と。是く思惟し已つて、菩薩の道より退き、小乘に廻向せり。是を「彼岸に到らず」と名く。若し能く直に進んで退かず、佛道を成辦せば、「彼岸に到る」と名く。　復次に、事に於て成辦するを亦「彼岸に到る」と名く。[二]　復次に、此岸を慳貪と名け、檀を河中と名け、彼岸を佛道と名く。　復次に、有無の見を此岸と名け、有無の見を破する智慧を彼岸と名け、懃めて布施修するを、是を河中と名く。　復次に、檀に二種あり、一には

【一】割註あり。波羅の下に「秦に彼岸と言ふ。」蜜の下に「秦に到と言ふ。」

【二】割註あり「天竺の俗法にては凡て造事して成辦するを皆な到彼岸と言ふ。」

の根・力・覺・道をして具足せしむ。　復次に、財施の法は、佛あるも、佛なきも、世間に、常にあり。法施の如きは、唯佛ある世にのみ、乃ち當に有るべし。是の故に、當に知るべし、法施の甚だ難きことを。云何に難しと爲すや。乃ち有相の辟支佛に至るも、說法すること能はず、直ちに乞食を行じ、飛騰・變化して、以て人を度するのみ。　復次に、法施の中より能く財施を出生し、諸の聲聞・辟支佛・菩薩に及び、(又)佛に及ぶ。　復次に、法施は、能く諸法の有漏と、無漏法、色法と無色法、有爲と無爲法、善と不善と無記法、常法と無常法、有法と無法とを分別し、一切諸法は實相清淨にして、破す可からず、壞す可からざる(を分別す。)是の如き等、法は略說すれば則ち八萬四千の法藏にして、廣說すれば則ち無量なり。是の如き等の種種は、皆法施に從つて分別し了知す。是を以ての故に法施を勝れたりと爲す。

是の二施の和合を名けて之を檀と爲す。是の二施を行じて、佛と作らんと願求すれば、則ち能く人をして佛道に至らしむ。何に況んや其の餘をや。

問うて曰く、四種の捨を名けて檀となす。所謂、財捨と、法捨と、無畏捨と、煩惱捨となり。此の中に何を以てか二種の捨を說かざるや。

答へて曰く、無畏捨は尸羅と別なきが故に說かず、般若有るが故に煩惱捨を說かず、若し六波羅蜜を說かざれば、則ち應に具さに四捨を說くべし。

巧言もて、佛德の無量にして、窮り已ること無きを讃ず、此の功德を以ての故に、辯才は盡く可からず。

佛の諸の妙法には、一切過ぐる者あることなきを讃す、此の功德を以ての故に、大智慧、清淨なり。

佛の功德を讃ずる時、人の煩惱をして薄からしむ、此の功德を以ての故に、結盡きて、諸の垢滅す。

二種の結の盡くるが故に、涅槃の身を已に證すること、譬へば大雨を澍げば、火盡きて餘熱なきが如し。』

重ねて王に告げて言く、「若し未だ悟らざることあらば、今は是れ問ふべき時なり。當に智の箭を以て、汝が疑軍を破るべし」と。王白さく、「法師よ、我は心に悅び、悟つて疑ふ所なし。大德福の人は、善く佛を讃じ能ふ。」と、是の如き等の種種の因緣もて、法を說いて人を度するを、名けて法施と爲す。

問うて曰く、財施と法施とは、何者か勝れたりと爲すや。

答へて曰く、佛の言ふ所の如く、二施の中、法施を勝たりと爲す。何となれば、財施の果報は、欲界の中に在れども、法施の果報は、或は三界に在り、或は三界を出づるを以てなり。[四一]復次に、口に說くこと清淨にして深く理中るを得れば、心も亦た之を得るが故に三界を出づ。復次に、財施は量あれども、法施は無量なり。財施は盡くることあれども、法施は盡くることなし。譬へば、薪を以て火に益せば、其の明轉た多きが如し。復次に、財施の報は、淨少くして垢多く、法施の報は、垢少くして淨多し。復次に、若し大施を作さんには、必ず衆力を待てども、法施は心より出でて、他を待たざるなり。復次に、財施は能く四大・諸根をして增長せしめ、法施は能く無漏

【四一】「復次に」より「三界を出づ」まで別本に缺く。

此の偈を說く、

『草木の諸の華香を、此の香氣は超絶して、能く一切の心を悅ばしめ、世世に常に滅せず。』

時に國王は、愧と喜と交集り、比丘に白して言く、「未曾有なり、說法の功德の大果乃ち爾なり」と。比丘言く、「此を名けて華と爲す、未だ是れ果にあらず」と。王言く、「其の果は云何、願くは爲に演說したまへ」と。答へて言く、「果は略して說くに十あり、王よ、諦に之を聽きたまへ」と。卽ち爲に偈を說いて言く、

『大いに名聞ゆると、端正なると、樂を得ると、及び恭敬せらるゝと、威光、日月の如くなると、一切に愛せらるゝ所たると、辯才あると、大智あると、能く一切の結を盡すと、苦滅して涅槃を得ると、是の如きを名けて十と爲す。』

王言く、「大德よ、佛の功德を讚ずれば、云何にして是の如きの果報を得るや」と。爾の時、比丘は偈を以て答へて曰く、

『佛の諸の功德を讚じて、一切をして普ねく聞かしむ、此の果報を以ての故に、而して大なる名譽を得るなり。

佛の實の功德を讚じて、一切をして歡喜せしむ。此の功德を以ての故に、世世常に端正なり。

人の爲に罪福を說いて、安樂の所を得せしむ、此の功德を以て、樂を受け、常に歡豫す。

佛の功德力を讚じて、一切の心をして伏せしむ。此の功德を以ての故に、常に恭敬の報を獲るなり。

說法の燈を顯現して、照して諸の衆生を悟らしむ、此の功德を以ての故に、威光は日の曜くが如し。

種種に佛の德を讚じて、能く一切を悅ばしむ、此の功德を以ての故に、常に人の爲に愛せらる。

復次に、但だ言說のみを名けて、法施と爲すには非ず、常に淨心・善思を以て一切に敎ふ、是を法施と名く。譬へば財施の如きは、善心を以てせざれば、福德と名けず、法施も亦爾なり。淨心・善思を以てせざれば、則ち法施に非ず。　復次に、說法する者は能く淨心・善思を以て三寶を讚歎し、罪福の門を開き、四眞諦を示し、衆生を敎化して佛道に入らしむ、是を眞淨の法施と爲す。

復次に、略して說くに二種あり。一には衆生を惱まさず、善心にて慈愍す、是を佛道の因緣と爲す。二には諸法の眞空を觀知す、是を涅槃道の因緣と爲す。大衆の中に在つて慈愍の心を興し、此の二法を說き、名聞利養の恭敬の爲にせざる、是を淸淨なる佛道の法施と爲す。說くが如くんば阿輸伽王は一日に八萬の佛圖を作り、未だ道を見ずと雖も、佛法の中に於て少しく信樂あり。日日に諸の比丘を請じ、宮に入れて供養し、日日次第に法師を留めて法を說かしむ。一の三藏あり、年少の法師にして聰明端正なり。次に應に說法すべく、王の邊の坐にあり。口に異香あり、王甚だ疑怪しみ謂へらく、「爲れ端しからず、香氣を以て王宮の人を動かさんと欲す」と。比丘に語りて言く、「口中に何等のものかある、口を開き、之を看せしめよ」と。卽ち爲に口を開くに、了に有るところなし。水を與へて漱がしむるに、香氣は故の如し。王問ふ、「大德、新に此の香あるや、舊より之あるや」と、比丘答へて言く、「此の如きは久しく有り、適今あるに非ず」と。又問ふ、「此あること久しきや」と。偈を以て答へて言く、

『迦葉佛の時に、此の香法を集む、此の如くして久久、常に新に出だすが如し。」

王の言く、「大德よ、略說にては未だ解せず、我が爲に廣く演べたまへ」と。答へて曰く、『王よ、當に一心に、善く我が說くを聽くべし。我昔し迦葉佛の法中に於て、說法の比丘と作り、常に大衆の中に在りて、歡喜して演說し、迦葉世尊の無量の功德、諸法の實相、無量の法門を慇懃に讚歎して、一切の敎誨せり。是より以來、常に妙香あつて口中より出で、世世に絕へず、恒に今日の如し」と。

羅門は王に）一偈を與へたり。　又復た釋迦文佛は、本、一の鴿と作つて雪山の中に在したまへり。時に大雨雪あり、一の人ありて道を失ひ、窮厄し辛苦し、飢寒并に至り、命須臾に在り。鴿は此の人を見て、卽ち飛んで火を求め、其が爲に薪を聚めて之を燃やし、又復た身を以て火に投じて、此の飢人に施す。是の如き等、頭目髓腦を衆生に給施せる種種の本生因緣經は此の中に應に廣く說くべし。是の如き等の種種は、是を內の布施と名く。是の如く、內外の布施は無量なり。是を檀相と名く。

初品第二十……檀波羅蜜法施義

問うて曰く、云何なるを法の布施と名くるや。

答へて曰く、有人の言く、「常に好語を以て、利益する所ある、是を法施と爲す」と。　復次に、有人の言く、「諸の佛語、妙善の法を以て、人の爲に演說する、是を法施と爲す」と。　復次に、有人は言ふ、「三種の法を以て人に敎ふ。一には修妬路、二に毘尼、三には阿毘曇、是を法施と爲す」と。

復次に、有人は言ふ。「四種の法藏を以て人に敎ふ。一には修妬路藏、二には毘尼藏、三には阿毘曇藏、四には雜藏、是を法施と爲す」と。　復次に、有人は言ふ、「略して說くに二種の法を以て人に敎ふ。一には聲聞法、二には摩訶衍法、是を法施と爲す」と。

問うて曰く、提婆達・呵多[四〇]等の如きも、亦三藏・四藏・聲聞法・摩訶衍法を以て人に敎へたるに、而も身は地獄に入れり、是の事は云何。

答へて曰く、提婆達は邪見の罪多く呵多は妄語の罪多し。是れ道の爲に淸淨なる法施に非ず、但だ名利と恭敬と供養とを求むるのみ。惡心の罪の故に、提婆達は生きながら地獄に入り、呵多は死して惡道に墮ちたるなり。

【四〇】呵多(Hastaka)。性多辯にて、外道と語りて否定しては肯定し、肯定しては否定す。外道怒りて非難す。佛はこれに依て九十二波逸提の第一妄語を制し玉ふ。

し。』

是の時に瓶水は、涌いて虛空に在り、上より來下して、其の左手に灌ぐ。是の時に婆羅婆王は、是の感應を見て、心に恭敬を生じ、偈を說いて言く、

『大婆羅門主よ、淸き琉璃色の水、上より流注して下り、來つて汝が手中に墮つ。』

是の時に大婆羅門衆は、恭敬の心を生じ、手を合せ禮を作し、菩薩に歸命す。菩薩は是の時、此の偈を說いて言く、

『今我が布施する所は、三界の福を求めず、諸の衆生の爲の故に、以用て佛道を求む。』

此の偈を說き已れば、一切の大地山川樹木は皆六返震動せり。韋羅摩は本と、「此の衆は應に供養を受くべきが故に與ふ」と謂へるが、既に此衆に受くるに堪ゆる者なきことを知り、今は憐愍を以ての故に、受くるところの物を以て之に施す。是の如く、種種の檀の本生の因緣は是の中に應に廣く說くべし。是を外の布施と爲す。

云何なるを內の布施と名くるや。身命を惜まず、諸の衆生に施す。本生の因緣に說くが如し。釋迦文佛、本と、菩薩と爲り、大國の王と爲りたまひし時、世に佛なく、法なく、比丘僧なかりき、是の王は四(方)に出でて、佛法を求索すれども、了に得ること能はず。時に一の婆羅門ありて、言く、「我は佛の偈を知れり、我を供養せば、當に以て汝に與ふべし」と、王即ち問うて言く、「何等の供養を索むるや」と。答へて曰く、「汝、能く汝が身上に就いて、肉を破りて燈炷となし、我を供養せば、當に以て汝に與ふべし」と。王心に念じて言く、「今我が此の身は、危く、脆く、不淨にして、世世苦を受くること復た數ふ可からざるも、未だ曾つて法の爲にせず、今始めて用ゆることを得るに、甚だ惜まざるなり」と。是の如く念じ已つて、旃陀羅を喚び、遍ねく身上を割いて以て燈炷を作り、而して白氎を以て肉に纒ひ、酥油を之に灌いで、一時に遍ねく燒き、身を擧げて火燃ゆ。乃ち（婆

若し三惡道と人中に無量の苦あらしむとも、一心に佛道を求めて、終に此が爲に轉ぜざらん。』化の婆羅門の言く、「布施主よ、善い哉、善い哉、佛を求むること是の如きは」と。便ち讃ずる偈に言く、

『汝は精進の力大にして、一切を慈愍し、智慧に罣礙なし。佛と成ること久しからざるに在り。』

是の時、天は衆の華を雨らして、菩薩を供養す、諸の淨居天の瓶水を閉づる者は、即ち隱れて現はれず。菩薩は是の時、婆羅門上座の前に至り、金瓶を以て水を行れども、水は閉ぢて下らず、衆人疑ひ怪しむらく、「此種種なる大施[三八]は一切具足せり、布施の主人の功德亦た大なり。今何を以ての故に瓶水下らざるや」と。菩薩自ら念ずらく、「此れ他事に非ず、將に我が心の、不清淨なること無かりしか、施物の具足せざること無きを得しか、何を以てか此を致す」と。自ら祠經十六種の書を觀ずるに、清淨にして瑕なし、是の時に諸天は、菩薩に語げて言く、「汝、疑悔すること莫れ、汝に辦ぜざること無し。是の諸の婆羅門が、惡邪にして不淨なるが故なり。」即ち偈を說いて言く、

『是の人の邪見の網と惱煩とは正智を破り、諸の淸淨戒を離れて、唐しく苦しんで異道[三九]に墮す。』

「是を以ての故に水閉ぢて下らず」と。是の如く語り已つて、忽然として現ぜず。爾の時に六欲天は、種種の光明を放ちて諸の衆會を照し、菩薩に語りて、偈を說いて言く、

『邪惡海中に行きて、汝の正道に順ぜず、諸の施を受くる人の中に、汝の如き者あること無し。』

是の語を說き已つて、忽然として現ぜず。此の時に菩薩は、此の偈を說くを聞いて、自ら念ずらく、「會中には實に自ら我と等しき者あること無し、水閉ぢて下らざるは、其れ將た此が爲ならんか」と。即ち偈を說いて言はく、

『若し十方天地の中に、諸有の好人、淸淨なる者あらば、我今歸命して、稽首し禮したてまつる。』

右手に瓶を執り左手を灌いで、而して自ら願を立つ、我一人、應に是の如き大布施を受くべ

【三八】「明藏の註に曰く、「大」は南藏にては「布」と作す」。

【三九】明註に曰く、「異」は南藏にては「惡」に作る」。

爾の時に、淨居の諸天は身を現じて、讃じて此の偈を說いて言く、

『門を開いて大に布施す、汝が爲す所は是なり。衆生を憐愍するが故に、之を爲して佛道を求む。』

是時に諸天は、是の思惟を作さく、「我當に其金瓶を閉ぢて、水をして下らさらしむべし。所以いかんとなれば施す者あつて、福田なきが故なり」と。是時に魔王は、淨居天に語るらく、「此の諸の婆羅門は、皆出家し、戒を持し、淸淨にして道に入る。何を以てか乃ち福田あること無しと言ふや」と。淨居天の言く、「是の菩薩は佛道の爲の故に布施す。今此の諸人は皆是れ邪見なり。是の故に我は福田あること無しと言ふ」と。魔王、天に語つて言く、「云何にして是の人は佛道の爲の故に布施するなるを知るや」。是の時に、淨居天は化して婆羅門の身と作り、金瓶を持し、金杖を執つて、韋羅摩菩薩の所に至り語つて言く、「汝は大に布施し、捨て難きを能く捨てゝ、何等をか求めんと欲するや。轉輪聖王、七寶の千子と作りて、四天下に王たらんと欲するや」と。菩薩は答へて言く、「此事を求めず」と。「汝は釋提婆那民を求めて、八千那由他の天女の主たらんと爲るや」と。答へて言く、「不なり。」「汝は六欲天主を求むるや」と、答へて言く、「不なり。」「汝は梵天王の二千大千世界に主として、衆生の祖父たることを求むるや」と。答へて言く、「不なり。」汝は何の求むる所をか欲するや」と。是の時に菩薩は、此の偈を說いて言く、

『我は無欲の處を求め、生老病死を離れて、諸の衆生を度せんと欲す、是の如き佛道を求む。』

化の婆羅門言く、「布施主よ、佛道は得難し、當に大に辛苦すべし、汝は心軟にして樂に串れたり、必ず此の道を成辦せんことを求むること能はず。我、先に語るが如く、轉輪聖王・釋提婆那民・六欲天王・梵天王は、是れ得べきこと易し、此を求むるに如かず」と。菩薩答へて言く、「汝、我が一心の誓を聽け」と。

『假令熱せる鐵輪、我が頭上に在つて轉ずるとも、一心に佛道を求めて、終に悔恨を懷かず。

み、無量の珍寶具足せり。是の思惟を作すらく「人は我を謂つて、貴人にして財富無量にして、衆生を饒益すと爲す。今正に是れ時なり、應當に大に施すべし。富貴は樂しと雖も一切無常なり。五家の共にする所は、人をして心散じ、輕泆にして不定ならしむ。譬へば獼猴の暫らくも住まること能はざるが如し。人命の逝くことは、電の滅するよりも速疾なり。人身は無常にして、衆苦の藪なり、是を以ての故に應に布施を行ずべし」と。是の如く思惟し已つて自ら手疏を作り、普ねく閻浮提の諸の婆羅門、及び一切の出家人に告げたり。「願くは各德を屈して、來つて我が舍に集りたまへ、大施を設けて十二歲に滿たさんと欲す」と。飯汁には船を行り、酪を以て池と爲し、米麪を山と爲し、蘇油を渠と爲し、衣服・飲食・臥具・湯藥は皆妙を極めしめ、十二歲を過ぎて布施せんと欲す。八萬四千の白象には犀甲・金飾して珞るに名寶を以てし。大金幢を建てゝ、四寶をもて莊嚴し。八萬四千の馬にも、亦た犀甲・金飾を以てし、四寶を交絡し、八萬四千の車は、皆金銀・琉璃・頗梨の寶を以て飾り、覆ふに師子虎豹の皮を以てし、若しくは白劍、[三七]婆羅の寶幰、雜飾を以て莊嚴を爲す。八萬四千の四寶床は、雜色䘿綖として、種種の茵蓐は柔軟細滑にして以て校飾をなし、丹枕錦被を床の兩頭に置き、妙衣盛服は皆亦た備りて有り、八萬四千の金鉢には、銀の粟を盛り滿て、銀鉢には金の粟を盛り、琉璃の鉢には頗梨の粟を盛り、頗梨の鉢には琉璃の粟を盛り、八萬四千の乳牛は、牛は、乳一斛を出し、金を以て其の䟠角を飾り、衣するに白氎を以てす。八萬四千の美女は、端正福德にして、皆白珠、名寶を以て其の身を瓔珞す。略して其の要を擧ぐること是の如し、種種勝げて記す可からず。爾の時、婆羅婆王、及び八萬四千の諸の小國の王、并に諸の臣民・豪傑・長者は、各十萬の舊金錢を以て贈遺して勸助す、此の法祠を設けて具足して施し已れり。釋提婆那民は來つて韋羅摩菩薩に語り、此の偈を說いて言く、

『天地に得難き物は、能く一切を喜悅す、汝今皆得たるを以て、佛道の爲に布施せり。』

【三七】婆羅（Valahaka）、轉輪王七寶の一たる馬寶。

の檀と爲し、此の二種の結使なきを、是を出世間の檀と爲す。若しくは三の礙、心を繫けば、是を世間の檀と爲す。何となれば、因緣の諸法は實に吾我なし、而るに「我與へ、彼取る」と言ふ。是の故に世間の檀と名く。復次に、我には定處なし、我は以て彼と爲せば、彼は以て非と爲し、彼は以て我と爲せば、我は以て非と爲す。是く不定なるを以ての故に、實我なきなり。施すところの財は因緣の和合するに從つて有り、一法として獨り得べきものあること無し。絹の如く布の如く、衆緣合するが故に成り。絲を除き縷を除けば、則ち絹布なし。諸法も亦是の如く、一相として相なく、相は常に自ら空なり。人は想念を作して計して以て有と爲す。顚倒にして實ならず、是を世間の檀と爲す。心に三の礙なく、實に法相を知り、心顚倒せざれば、是を出世間の檀と爲す。出世間の檀は聖人の爲に稱譽せられ、世間の檀は聖人の稱譽せざる所なり。復次に、清淨の檀は結の垢を雜へず、諸法の實相の如し、是聖人の稱譽する所なり。不淸淨(の檀)は結使・顚倒・心の著を雜ふ、是聖人の稱譽せざる所なり。復次に、實相の智慧和合せる布施、是れ聖人の稱譽する所、若し爾らざれば聖人の稱譽せざる所なり。

復次に、衆生の爲ならず、亦た諸法の實相を知らんが爲の故に施すにあらず、但だ生老病死を脫せんことを求むるもの、是を聲聞の檀と爲し、一切衆生の爲の故に施し、亦た諸法の實相を知らんが爲の故に施す。是を諸佛菩薩の檀と爲す。諸の功德に於て具足すること能はず、但少許の分を得んと欲す、是を聲聞の檀と爲し、一切の諸の功德を具足し滿たさんと欲す、是を諸佛菩薩の檀と爲す。老病死を畏るゝが故に施す、是を聲聞の檀と爲し、佛道を助けんが爲に、衆生を化さんが爲に、また老病死を畏れざる、是を諸佛菩薩の檀と爲す。是の中に應に菩薩本生經を說くべし。

阿婆陀那經の中に說くが如く、昔閻浮提の中に王あり、婆羅婆と名く。爾の時に、婆羅門の菩薩あり、韋羅摩と名く。是は國王の師にして、王に敎へて、轉輪聖王の法を作さしむ。韋羅摩は財富

くて曰く、「十二年の作は何等の物を得たるか」と。答へて言く、「我、三十兩の金を得たり」と。即ち問ふ、「三十兩の金は今何所にか在る」と。答へて言く、「已に福田の中に在つて種ゑたり」と。婦の言く、「何等の福田ぞや」と。答へて言く、「衆僧に施與せり」と。婦便ち夫を縛して官に送り、罪を治め、事を斷ず。大官問ふ、「何事を以ての故ぞ」と。婦の言く、「我が夫は狂癡なり。十二年、客となりて作り得たる三十兩金を、婦兒を憐愍せずして、盡く以て他人に與へたり。依つて官制の如く、輙ち縛して送り來れり」と。大官其夫に問ふ、「汝は何を以てか婦兒に供給せずして、乃ち以て他に與ふるや」と。答へて言く、「我は先世に功德を行ぜざりしより、今世は貧窮にして諸の辛苦を受く、今世に福田に遭遇せり。若し福を種ゑずんば、後世復た貧ならん。貧と貧と相續して脫することを得る時なし。我今頓に貧窮を捨てんと欲す、是を以ての故に、盡く金を以て衆僧に施せり」と。大官は是れ優婆塞にして、佛を信ずること清淨なり。是語を聞き已つて、讃じて言く、「是は甚だ難しと爲す、懃苦して此少物を得たるに、盡く以て僧に施す、汝は是れ善人なり」と。即ち身の瓔珞を脫し、及び乘る所の馬並に一聚落を以て貧人に施し、之に語つて言く、「汝始めて衆僧に施すに、衆僧未だ食せず。是れ穀子未だ種ゑずして、芽已に生ずることを得たりと爲す。大果方に後身に在るべし」と。是を以ての故に言ふ。「得難き物を盡く用ひて布施すれば、其の福最も多し」と。

復次に、世間の檀あり、出世間の檀あり、聖人の稱譽するところの檀あり、聖人の稱譽せざるところ檀あり。佛菩薩の檀あり、聲聞の檀あり。何等か世間の檀なるや、凡夫人の布施、亦た聖人の有漏心もて作せる布施、是を世間の檀と名く。復次に、有人の言く、「凡夫人の布施は、是を世間の檀と爲す、聖人は有漏心にて布施すと雖も、結使斷ずるを以ての故に、出世間の檀と名く。何となれば、是の聖人は無作三昧を得るが故なり」と。復次に、世間の檀は不淨にして、出世間の檀は清淨なり。二種の結使は、一種は愛に屬し、一種は見に屬す。二種の結使の爲に使はる、是を世間

與へて虛しからざるが故に、廣長舌の相と梵音聲の相と如迦陵毘伽鳥聲の相とを得。施す時は如實の語、利益の語なるが故に師子頰の相を得。施す時受者を供養して心清淨なるが故に牙白齒齊の相を得。施す時、實語、和合語なるが故に齒密の相と四十齒の相とを得。施す時瞋らず、著せず、等心にて彼を視るが故に青眼の相と眼睫如牛王の相とを得。是を三十二相の因緣を種ゆと爲す。

復次に、七寶・人民・車乘・金銀・燈燭・房舍・香華を布施するを以ての故に、轉輪王と作つて七寶具足することを得。

復次に、施すに時を得るが故に、報も亦增多し。佛の說きたまふ如きは、遠く行くの人、遠くより來る人、病人、看病人に施し、風寒、衆難の時に施すは是を時施と爲す。　復次に、布施の時、土地に隨つて須ふる所を施すが故に、報を得ること增多し。復次に、曠路の中にして施すが故に、福を得ること增多し。常に施して廢せざるが故に、報を得ること增多し。求むる者の欲するところを施すが故に、福を得ること增多し。物の重きを施すが故に、福を得ること增多し。精舍・園林・浴地等を以て、若しくは善人に施すが故に、報を得ること增多し。若しくは僧に施すが故に、報を得ること增多し。若しくは施者と受者と、倶に德あるが故に[三五]、報を得ること增多し。種種に將迎して、受者を恭敬するが故に、福を得ること增多し。得難き物を施すが故に、福を得ること增多し。所有する物に隨つて、盡く能く布施するが故に、福を得ること增多し。譬へば大月氏の弗迦羅城中に、一畫師あるが如きは、千那と名け、東方の多利陀羅國に到り、客として畫くこと十二年にして、三十兩の金を得、持て本國に還る。弗迦羅城の中に於て、鼓を打ちて大會を作す聲を聞き、往つて衆僧を見、信心清淨にして卽ち[三六]維那に問ふ、「此の衆中にて、幾許の物か一日の食と作すことを得るや」と。維那は答へて曰く、「三十兩金にして、一日の食を得るに足る」と。卽ち有する所の三十兩の金を以て維那に付し、「我が爲に一日の食を作れ、我は明日當に來るべし」と空手にして歸る。其婦問

【三五】●● 割註あり「丹註に云ふ。菩薩及び佛の如き慈心もて布施すれば、是を施者と爲す、若し佛、及び菩薩、阿羅漢辟支佛に施せば、是を受者と爲す故に」。

【三六】維那（Karmadāna）。羯磨陀那。寺中の寺務を司る役。

には六根は清淨にして、善欲の心生じ。善欲の心生ずるが故に內心は清淨なり。果報の功德を觀ずるが故に信心生じ、身心柔軟の故に喜樂生じ、喜樂生ずるが故に心を一にすることを得。心を一にすることを得るが故に實智慧生ず。是の如き等の諸の善法を悉く皆得るなり。

　復次に、布施する時は心中に相似の八正道を生ず(卽ち)布施の果を信ずるが故に正見を得、正見の中に思惟して亂れざるが故に正思惟を得、清淨に說くが故に正語を得、淨き身行の故に正業を得、報を求めざるが故に正命を得、懃心にして施すが故に正方便を得、施を念じて廢せざるが故に正念を得、心住して散ぜざるが故に正定を得。是の如き等の相似の三十七品の善法、心中に生ず。

　復次に、有人は言ふ、布施は是れ三十二相の因緣を得。所以いかんとなれば、施す時心堅固なる與めに、足下安立の相を得。布施する時は、五事受者を圍遶す、是眷屬の業因緣の故に、足下輪の相を得。大勇猛力にして施すが故に、足跟廣平の相を得。施は人を攝するが故に、手足縵網の相を得。美味の飮食を施すが故に、手足柔軟にして、七處滿ずるの相を得。施は命を益するを以ての故に、長指身不曲大直の相を得。施す時我當に相與ふべしと言つて、施心轉た增すが故に、足趺高毛上向の相を得。施す時に受者之を求むるに一心に好く聽き、慇懃に約勅して、必ず疾く得せしむるが故に伊泥延膊の相を得。求むる者を瞋らず、輕んぜざるが故に、臂長過膝の相を得。求むる者の意の如く施して、言を待たざるが故に、陰藏の相を得。好き衣服・臥具・金銀・珍寶を施すが故に金色身の相と薄皮の相とを得。布施するに[三三]受者をして、獨り自在に用ふるを得せしむるが故に、一孔一毛生と眉間白毫の相とを得。求むる者之を求むれば卽ち、「當に與ふべし」と言ふ。是業を以ての故に上身如師子肩圓の相を得。病者には藥を施し、飢渴者には飮食を與ふるが故に、[三四]兩腋下滿の相と最上味の相とを得。施す時は人に勸めて施を行じ、之を安慰し、布施の道を開くが故に肉髻の相と身圓如尼拘盧の相とを得。乞ひ求むる者あれば、意に與へんと欲する時柔軟實語にして、必ず

【三三】別本には「受者をして獨り自在に用ふるを得せしむるが故に」は「適、前人の意に自在の業因緣を起す可きが故に」とあり。

【三四】別本には、ここに「少病の業因緣を起すが故に」の文句挿入さる。

施し、或は妬瞋の故に施し、或は憍慢にして自ら高うするが故に施し、或は名譽の爲の故に施し、或は呪願の爲の故に施し、或は衰を解除して吉を求むるが故に施し、或は衆を聚めんが爲の故に施し、或は賤しきを輕んじ敬はずして施す。是の如き等の種種を名けて、不淨施と爲す。

淨施とは、上と相違せるを名けて淨施と爲す。　復次に、道の爲の故に施す。清淨の心生じて、諸の結使なく、今世・後世の報を求めず、(たゞ)恭敬し、憐愍するが故なり。是を淨施と爲す。淨施は是れ涅槃の道に趣くの資糧なり。是の故に、「道の爲の故に施す」と言ふ。若し未だ涅槃を得ざる時の施は、是れ人天報樂の因なり。淨施は華の瓔珞の初て成り未だ壞せずして香潔、鮮明なるが如し、涅槃の爲に淨施し、果報の香を得るも亦復是の如し。佛の說きたまふ如くんば、世に二人ありて、得難しと爲す、一は出家の中の[三]非時解脫の比丘、二は在家の白衣の能く清淨に布施するものなり。是の淨施の相は、乃ち無量世に至るも世世に失せず。譬へば、券の要らず終に失ふ時なきが如し。是の布施の果は、因緣和合する時は便ち有り。譬へば樹は時節の會することを得れば、便ち華・葉・果實あり、若し時節未だ至らざれば、因あるも果なきが如し。是布施の法は、若し以て道を求むれば、能く人に道を與ふ。何となれば、結使滅するを涅槃と名くればなり。布施する時に當りては、諸の煩惱は薄らぐが故に能く涅槃を助く。施すところの物の中に於て、惜まざるが故に慳を除き、受くる者を敬念するが故に嫉妬を除き、直心に布施するが故に諂曲を除き、一心に施すが故に掉を除き、深く思惟して施すが故に悔を除き、受者の功德を觀ずるが故に不恭敬を除き、自ら心を攝するが故に不慚を除き、人の好き功德を知るが故に不愧を除き、財物に著せざるが故に愛を除き、受者を慈愍するが故に瞋を除き、受者を恭敬するが故に憍慢を除き、善法を行ずることを知るが故に無明を除き、果報あることを信ずるが故に邪見を除き、決定して報あることを知るが故に疑を除く。是の如き等の種種の不善、諸の煩惱は、布施する時悉く皆薄らぎ、種種の善法は悉く皆得。布施する時

【三】非時解說。卷三の註參照。

なく、涅槃の道を得。布施の福は是れ涅槃の道の資糧なり。施を念ずる故に歡喜す。歡喜するが故に心を一にし、一心に生滅無常を觀じ、生滅無常を觀ずるが故に道を得。人の蔭を求むるが故に樹を種ゑ、或は華を求め、或は果を求むるが故に樹を種ゆるが如く、布施の報を求むるも亦復是の如し。今世・後世の樂は、蔭を求むるが如く、聲聞・辟支佛の道は、華の如く、佛と成るは果の如し、是を檀の種種の功德と爲す。

初品第十九……檀相義

問うて曰く、云何なるを檀と名くるや。

答へて曰く、檀を布施と名く、心相應の善思、是を名けて檀と爲す。有人の言く、「善思より起す身口の業をも亦名けて檀と爲す」と。有人の言く、「信あり、福田あり、財物あり、（この）三事和合する時、心に捨法を生じ、能く慳貪を破す、是を名けて檀と爲す。譬へば慈法の如し、衆生を觀じ、樂んで心に慈を生ず。布施の心數法も亦復是の如し。三事和合して、心に捨法を生じ、能く慳貪を破す」と。檀に三種あり。或は欲界繫、或は色界繫、或は[三〇]不繫なり。心相應法は心行に隨つて心と共に生ず、色法が能く緣を作すに非ず、業に非ず。業相應は業行に隨つて業と共に生ず、先世の業報の生に非ず。二種の修あり。行修と得修。二種の證あり。身證と慧證。若しくは思惟斷、若しくは不斷の二見斷、有覺、有觀法は凡夫聖人共に行ず、是の如き等は阿毘曇の中に廣く分別して說けり。

復次に、施に二種あり、淨あり不淨あり。不淨の施とは、[三一]直ちに施して爲す所無き。或は爲す有りて財を求むるが故に施し、或は人に愧づるが故に施し、或は嫌責せらるゝ爲の故に施し、或は畏懼するが故に施し、或は他の意を取らんと欲するが故に施し、或は死を畏るるが故に施し、或は人を誑はして喜ばしめんが故に施し、或は自ら富貴を以ての故に施に應じ、或は諍ひて勝たんが故に

【三〇】割註あり「丹本に註し云く、聖人、施を行ずるが故に不繫と名く。」と。

【三一】別本には「直ちに施して、爲す所無き」は「愚癡の施にして分別する所なし」とあり。

物を出し、舍は燒け盡すと雖も、財物は悉く在つて更に室宅を修す。好く施す人も亦復是の如く、身の危く脆く、財物の無常なることを知つて福を修す。時に及んで火中より物を出すが如く、後世に樂を受け、亦た彼の人の更に宅業を修するが如く、福慶にして自ら慰む。愚惑の人は、但だ屋を惜むことを知つて、忽忽として救はんことを營み、狂愚にして智を失ひ、火勢を量らざれば、猛風・絕焰に、土石も爲に燋かれ、翕響の間に蕩然として夷ぎ滅し、屋既に救はず、財物も亦盡き、飢寒凍餓し、憂ひ苦んで世を畢ふ。慳惜の人も亦復是の如し。身命は無常にして、須臾も保ち叵きことを知らず。而し更に聚斂し、守護し愛惜すれども、死の至るや期なく、忽焉として逝沒し、形は土木と同じく流れ、財は委物と倶に棄つ。亦、愚人の憂苦して計を失するが如し。　復次に、大慧の人、心あるの士は、乃ち能く覺悟して、身は幻の如く、財は保つ可らず。萬物は無常にして、唯福のみ恃む可く、人を將ゐて苦津より出し、大道に通ずることを知る。　復次に、大人・大心は能く大に布施し、能く自ら己を利す。小人・小心は他を益すること能はず、亦自らを厚うせず。　復次に、譬へば勇士は敵を見て、必ず呑滅せんことを期するが如く、智人は、慧心深く理を悟ることを得て、慳の賊は强なりと雖も、亦能く之を挫き、必ず意の如くならしめ、良き福田に遇ひ、好き時節に[二九]値へば、事を覺り、心に應じて能く大に布施す。　復次に、好く施す人は、人の爲に敬はるること、月の初めて出づるや、愛せざる者なきが如し。好名・善譽は周ねく天下に聞え、人に歸仰せられ、一切皆信ず。好く施す人は、貴人に念ぜられ、賤人に敬はれ、命終らんとする時、其の心は怖れず。是の如きの果報は今世に得る所なり。譬へば樹の華の大なれば果は無重なるが如く、後世は福なり。生死に輪轉し、五道を往來するに、親として恃む可き無く、唯布施のみ有り。若し天上、人中に生じ、淸淨の果を得るは皆布施に由る。象・馬・畜生の好き摠養を得るも亦是れ布施の所得なり。布施の德は富貴歡樂なり。持戒の人は、天上に生ずることを得、禪智は心淨ふして染著する所

【二九】割註あり「時とは施すべきの時なり。遇ふて而して施さざる是を時を失ふと名く。」とあり。

問うて曰く、若し般若波羅蜜の相を取らず、心に著する所なしとせば、佛の言ふ所の如く、一切の諸法は欲を其本と爲す。若し取らずとせば、云何にして六波羅蜜を具足することを得るや。

答へて曰く、菩薩は衆生を憐愍するが故に先づ誓を立つ、「我、必ず當に一切衆生を度脱すべし」と。精進波羅蜜の力を以ての故に、諸法は生ぜず滅せず、涅槃の相の如しと知ると雖も、復た諸の功徳を行じて六波羅蜜を具足す。所以いかんとなれば、不住法を以て、般若波羅蜜の中に住するが故なり。是を「不住法をもて般若波羅蜜に住す」と名く。

初品第十八……讃檀波羅蜜義

問うて曰く、檀に何等の利益あるが故に、菩薩は般若波羅蜜の中に住して、檀波羅蜜を具足し滿ずるや。

答へて曰く、檀に種種の利益あり。檀を寶藏と爲す、常に人に隨逐す。檀を「苦を破る」と爲す、能く人に樂を與ふ。檀を善御と爲す、天道を開示す。檀を善符と爲す、諸の善人を攝す。[二八] 檀を安隱と爲す、命終の時に臨んで心怖畏せず。檀を慈相と爲す、能く一切を濟ふ。檀を「樂を集む」と爲す、能く苦の賊を破る。檀を大將と爲す、能く慳の敵を伏す。檀を妙果と爲す、天人の愛する所なり。檀を淨道と爲す、賢聖の遊ぶ所なり。檀を積善と爲す、福德の門なり。檀を立事と爲す、衆の緣を聚む。檀を善行と爲す、愛すべき果の種なり。檀を福業と爲す、善人の相なり。檀は貧窮を破し、三惡道を斷ず。檀は能く全く福樂の果を護る。檀は涅槃の初緣と爲す、善人の聚中に入るの要法、稱譽讃歎の淵府、衆に入つて無難なる功德、心悔恨せざるの窟宅、善法道行の根本、種種の歡樂の林藪、富貴安隱の福田、得道涅槃の津梁、聖人大士智者の行ずる所、餘人の儉德寡識の效ふ所なり。

復次に、譬へば失火の家の如し。黠慧の人は明かに形勢を識り、火未だ至らざるに及んで急に財

【二八】割註あり「施は善人を攝し、與へて因緣を爲す、故に攝と言ふ。」

に非ず、非法に非ず、取る無く、捨つる無く、生ぜず滅せず、有無の四句を出でて適に著する所なし。譬へば火焰の如し。その四邊に、觸る可らず。手を燒くを以ての故なり。般若波羅蜜の相も亦是の如く、觸る可らず、邪見の火、燒くを以ての故なり。

問うて曰く、上に種種の人、般若波羅蜜を說く。何れを實と爲すや。

答へて曰く、有人の言く「各各理あり、皆是れ實なり」と。經に說くが如し。五百の比丘、各各、二邊及び中道の義を說くに、佛の言はく「皆道理あり」と。有人の言く「末後に答へたる者を實と爲す。所以いかんとなれば、破す可らず壞すべからざるが故なり」と。若し法にして、毫氂許りの如き有あるならば、皆過失あり。破す可し、若し無と言ふも亦た破す可し。此般若の中には有も亦無く、無も亦無く、非有非無も亦なく、是の如き言說すら亦なし、是を寂滅・無量・無戲論の法と名く。是故に破すべからず、壞す可らず。是を眞實の般若波羅蜜と名く、最勝にして過る者なし。轉輪聖王の諸の敵を降伏して、而して自ら高うせざるが如し。般若波羅蜜も亦是の如く、能く一切の語言戲論を破して、亦た所破は有らず。　復次に、此より已後の品品の中の、種種の義門に、般若波羅蜜を說くも、皆是れ實相なり。

「不住の法を以て、般若波羅蜜の中に住すれば能く六波羅蜜を具足す」とは。

問うて曰く、云何なれば、不住の法をもて、般若波羅蜜の中に住すれば、能く六波羅蜜を具足すと名くるや。

答へて曰く、是の如く、菩薩は、一切の法は常に非ず無常に非ず、苦に非ず樂に非ず、空に非ず實に非ず、我に非ず無我に非ず、生滅に非ず不生滅に非ずと觀じ、是の如く甚深なる般若波羅蜜の中に住し、般若波羅蜜の相に於ても亦取らず。是を不住法に住すと名く。若し般若波羅蜜の相を取らば、是を住法に住すと爲す。

去れ」と。是の時、天女は卽ち滅して現ぜず、天の福報の形すら猶尙ほ是の如し、何に況んや、菩薩の無量の功德果報の五欲をや、又甄陀羅王の如きは、八萬四千の甄陀羅と與に、來つて佛の所に到り、琴を彈じ、頌を歌ひ、以て佛を供養したてまつる。爾の時に、須彌山王及び諸山・樹木・人民・禽獸・一切皆舞ひ、佛の邊の大衆、乃至大迦葉も、皆座上に於て自ら安んずること能はざりき。是時、天鬚菩薩は、長老大迦葉に問ふ、「耆年舊宿は十二頭陀法の第一を行ぜり、何を以てか座に在つて、自ら安んずること能はざりしや」と。大迦葉の言く、「三界の五欲は我を動ずること能はざれども、是れは菩薩の神通の功德、果報の力なるが故に、我をして是の如くならしむ。我、心あつて自ら安んずること能はざりしには非るなり。譬へば須彌山は四邊の風起れども、動ぜしむること能はず、大劫盡くる時に至つて、毘藍風起れば、爛草を吹くが如し」と。是の事を以ての故に知る。二種の結の中、一種を未だ斷ぜざれば、是の如きの菩薩等は應に般若波羅蜜を行ずべしと。是れ阿毘曇の中の說なり。　復た有人の言く、般若波羅蜜は是れ有漏の慧なり、何となれば、菩薩は道樹の下に至つて、乃ち結を斷ず。先に大智慧あり無量の功德ありと雖も、而も諸の煩惱は未だ斷ぜざればなり。是の故に言く、菩薩の般若波羅蜜は是れ有漏の智慧なり」と。　復有人の言く、「初發意より乃ち道樹の下に至る其中間に於て、有するところの智慧は、是を般若波羅蜜と名く。佛に成るの時は是の般若波羅蜜は轉じて[二七]薩婆若と名く」と。復た有人の言く、「菩薩の有漏・無漏の智慧は總じて般若波羅蜜と名く。何となれば菩薩は涅槃を觀じ、佛道を行ずればなり。是事を以ての故に菩薩の智慧は、應に是れ無漏なるべし。未だ結使を斷ぜず、事未だ成辨せざるを以ての故に應に有漏と名く」と。　復た有人の言く、「菩薩の般若波羅蜜は、無漏・無爲・不可見・無對なり」と。　復た有人の言く、「是般若波羅蜜は不可得の相なり。若くは有、若くは無、若くは常、若くは無常、若くは空、若くは實なり。是の般若波羅蜜は、陰・界・入の攝する所に非ず、有爲に非ず、無爲に非ず、法

【二七】薩婆若(Sarvajña)。一切智。

【經】佛、舍利弗に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は不住法を以て、般若波羅蜜の中に住し、無所捨の法を以て、檀波羅蜜を具足すべし、施者受者及び財物は不可得の故なり」と。

【論】問うて曰く、般若波羅蜜は是れ何等の法なりや。

答へて曰く、有人は言く、「無漏の慧根は是れ般若波羅蜜の相なり。何となれば、一切の慧の中の第一の慧は、是を般若波羅蜜と名く、無漏の慧根は是れ第一なり、是を以ての故に、無漏の慧根を般若波羅蜜と名く」と。

問うて曰く、若し菩薩は未だ結を斷ぜずんば、云何にして無漏の慧を行ずるを得ん。

答へて曰く、菩薩は未だ結を斷ぜずと雖も、行相は無漏の般若波羅蜜に似たり、是の故に「無漏の般若波羅蜜を行ず」と名くることを得。譬へば聲聞の人の暖法、頂法、忍法、世間第一法を行ずるに、先づ相似の無漏法を行ずれば、後に易く苦法智忍を生ずることを得るが如し。　復た有人の言く、「菩薩に二種あり。結使を斷じて清淨なるあり、未だ結使を斷ぜずして清淨ならざる有り。結を斷じて清淨なる菩薩は、能く無漏の般若波羅蜜を行ず。

問うて曰く、若し菩薩は結を斷じて清淨ならば、復た何を以てか、般若波羅蜜を行ずるや。

答へて曰く、結使を斷ずと雖も、十地は未だ滿たず、未だ佛土を莊嚴せず、未だ衆生を教化せず、是の故に般若波羅蜜を行ず。　復次に、結を斷ずるに二種あり。一には三毒を斷じて、心を人天の中の五欲に著せず、二には人天の中の五欲に著せずと雖も、菩薩の功德の果報の五欲に於ては、未だ捨離すること能はず、是の如きの菩薩は、應に般若波羅蜜を行ずべし。譬へば、長老阿泥盧豆の如きは、林中に在つて坐禪する時、淨愛天女等、淨妙の身を以て、來つて阿泥盧豆を試む。阿泥盧豆の言く、「諸姉よ、青色を作し來れ、雜色を用ゐず」と。不淨を觀んと欲して、觀ることを得ること能はず、黃赤白色も亦復是の如し。　時に阿泥盧豆は目を閉ぢて視ず、語つて言く、「諸姉よ、遠く

中より來り、是の如く、一・二・三世、乃至八萬大劫に、常に鴿の身と作れり、然して是を過ぎて已往は復た見ること能はず。舍利弗、三昧より起つて、佛に白して言さく、「是鴿は八萬大劫の中に、常に鴿の身と作る。是を過ぎて已前は、復た知ること能はず」と。佛の言はく、「汝若し盡く過去世を知ること能はずんば、試に未來世を觀よ。此の鴿は何の時か當に脫すべき」と。舍利弗は卽ち願智三昧に入つて、此の鴿を觀見するに、一・二・三世、乃至八萬大劫にも、未だ鴿の身を脫せず、是を過ぎて已往は、亦知ること能はず。三昧より起つて佛に白して言さく、「我、此の鴿を見るに、一世・二世より、乃至八萬大劫にも、未だ鴿の身を免れず、此を過ぎて已往は復た知ること能はず。我は過去未來の齊限を知らざれども不審し、此の鴿は何の時か當に脫すべき」と。佛、舍利弗に告げたまはく「此の鴿は諸の聲聞、辟支佛の知る所の齊限を除いて、復た恒河沙等の大劫の中に於いて、常に鴿の身と作り、罪訖り出づることを得て、五道の中に輪轉し、後、人と爲ることを得、五百世の中を經て乃ち利根を得。是の時に佛あり、無量阿僧祇の衆生を度し、然る後に無餘涅槃に入りたまふ。遺法世に在り。是の人は五戒の優婆塞と作り、比丘に從つて佛を讃ずるの功德を聞き、是に於て初めて發心し、願つて佛と作らんと欲し、然る後、三阿僧祇劫に於て、六波羅蜜を行じ、十地を具足して佛と作ることを得、無量の衆生を度し已つて、而して涅槃に入らん」と。是時舍利弗は、佛に向つて懺悔し、佛に白して言さく、「我は一鳥に於ても、尙其の本末を知ること能はず、何に況んや諸法をや。我若し佛の智慧の是の如くなるを知らば、佛の智慧の爲の故に、寧ろ阿鼻地獄に入つて、無量劫の苦を受くるとも、以て難しと爲さず」と。是の如き等、諸法の中に於いて了せざるが故に、問ひたてまつるなり。

初品第十七……「檀波羅蜜」義

（又）大神力なくんば、則ち知ること能はざるが如し。若し神通力大なれば則ち三千大千世界の地の邊際を知る。今此の大地は金剛の上に在り、三千大千世界の四邊は則ち虚空なり。是を地の邊際を知ると名く。須彌山を稱らんと欲するも亦是の如し。虚空を量らんと欲するも、量る能はざるには非ず、虚空は無法なるが故に量るべからざるなり。

【經】　舍利弗、佛に白して言さく、「世尊、菩薩摩訶薩は、云何なれば一切種を以て、一切法を知らんと欲せは、當に般若波羅蜜を習行すべきや」と。

【論】　問うて曰く佛は般若波羅蜜を說かんと欲するが故に、種種に神變を現ぜり。現じ已らば應に便ち說くべし。何を以ての故に舍利弗をして問はしめて、而して後に說きたまふや。

答へて曰く、問うて而して後に說くことは、佛の法として應に爾るべし。復次に、舍利弗は、般若波羅蜜は甚深微妙なる無相の法にして、解し難く、知り難きを知り、自ら智力を以て種種に思惟すらく、「若し諸法の無常を觀ずるは、是れ般若波羅蜜なりや、是ならざるや」と。自ら了ずること能はず、是を以ての故に問へり。復次に、舍利弗は一切智に非ず、佛の智慧の中に於ては、譬へば小兒の如し。阿婆檀那經の中に說くが如し。佛、祇桓に在つて住し、晡時に經行したまひしに、舍利弗も佛に從つて經行せり。是時に、鷹あり鴿を逐ふ、鴿は飛び來つて佛の邊に住す、佛經行したまふて之を過ぐるに、影鴿の上を覆へり。鴿の身は安隱にして、怖畏卽ち除き、復た聲を作さず、後舍利弗の影、鴿に到れば、便ち聲を作して戰き怖るること初の如し。舍利弗、佛に白して言さく、「佛及び我身は倶に三毒なし、何の因緣を以て、佛の影、鴿を覆へば、鴿便ち聲なく、復た恐怖せず、我が影上を覆へば、鴿便ち聲を作して、戰慄すること故(もと)の如くなるや」と。佛の言はく、「汝は三毒の習氣未だ盡きず、是を以ての故に、汝が影覆ふ時は恐怖除かず。汝は此の鴿の宿世の因緣を觀ぜよ、幾世か鴿と作れるや」と。舍利弗は卽時に宿命智三昧に入りて觀見するに、此の鴿は、鴿の

修行位では聲聞は預流向、菩薩は初地の入心で斷ず。

【一三】　思惟斷。修道に於て斷ずるもの、八十一品の修惑卽ち思惑及び色等の有漏法。修行位では聲聞は預流一來不還の三果、菩薩は初地以上第十地。

【一四】　不斷。一切の無漏法。

【一五】　更に解字すれば、恐らく、緣に緣ずる法。不緣に緣ずる法。緣と不緣に緣ずる法。緣に緣ずるにもあらず、不緣に緣ずるにも非ざる法。となるであらう。

【一六】　見苦斷法。四諦の中、苦諦の理を見て斷ずる法、以下集、滅、道は、餘の三諦を見て斷ず、以上の四は前の見諦斷に當り、思惟斷、不斷は上記の如し。

界繫法と不繫法。因の善なる法と、因の不善なる法と、因の無記なる法と、因の善にも不善にも無記にも非ざる法。[二五]緣緣法と緣不緣法と緣緣不緣法と非緣緣非緣不緣法。是の如き等の四種の法に一切の法を攝す。

五種の法あり。色・心・心相應・心不相應・無爲法なり。是の如き等の種種の五法に一切法を攝す。

六種の法あり。[二六]見苦斷法、見集と(見)盡と(見)道との斷法、思惟斷法、不斷法なり。是の如き等の種種の六法、乃至無量の法に一切の法を攝す。是を一切法と爲す。

問うて曰く諸法は甚深微妙にして思議すべからず、若し一切衆生すら尚知ることを得ること能はずとせば、何に況んや一人にして盡く一切法を知らんとするをや。譬へば人あり大地を量り、及び大海の水渧を數へんと欲し、須彌山を稱らんと欲し、虛空の邊際を知らんと欲するが如し。是の如き等の事は皆知るべからず、云何にして一切種を以て、一切法を知らんと欲するや。

答へて曰く、愚癡の闇蔽へば甚だ大に苦なり、智慧の光明らかなるを最も樂と爲す。一切衆生は皆苦を用ゐず、但だ樂を求めんと欲す。是故に菩薩は、一切第一の大智慧を求め、一切種を觀じて、一切法を知らんと欲す。是の菩薩は大心を發して、普ねく一切衆生の爲に大智慧を求む。是故に一切種一切法を以てせんと欲す。醫は一人二人の爲には、一種二種の藥を用ゆれば則ち足れども、若し一切衆生の病を治せんと欲せば、當に一切種の藥を須ゆべきが如し。菩薩も亦是の如く、一切衆生を度せんと欲するが故に、一切種一切法を知らんと欲す。諸法甚深微妙にして無量なるが如く、菩薩の智慧も亦甚深微妙にして無量なり。先の答に一切智人を破する中に已に廣く說けり。函大なれば、蓋も亦大なるが如し。　復次に、理を以てせずして一切法を求むれば則ち得べからず。若し理を以て之を求むれば、則ち得ざること無し、譬へば火を鑽るに、木を以てすれば則ち火を得べく、薪を析いて火を求むるも火は得べからざるが如く。大地は邊際あれども、自ら一切智人に非ず、

られるもの、「見られざるもの。

【一七】有對法・無對法。對は對象の意味で、その有無によりて二法が分れる。有對に三ある。(一)障礙有對。手を伸した時石に礙えられる如き、二物同時に同一空間を占める能はざるを云ふ。五根、五境の色法。(二)境界有對。新取の對象に拘束されて他に於て起る事が出來ぬもの、たとへば六根、六識と心所、(三)所緣有對。六識と心所が各の所緣の法に依て拘束されるを云ふ。

【一八】心相應・心不相應、心王と心所が相應することとせざると。

【一九】業相應・業不相應、善惡の業因に相應して善惡の果を生ずると、業因に相應せざると。

【三〇】●●割註あり「丹註に云ふ。心法中にて思を除いて餘は盡く業に相應す。即ち是の思の故に除く。」

【三一】●●割註あり「丹註に云ふ。現在及び無爲は是れを近法と名け、未來と過去は是れを遠法と名く。」とあり。但し、この註は本文では「一切法を攝す」の下に附せるも、「近法遠法」の下に附すべきである。

【三二】見諦斷。見道に於て斷ずるもの、八十八使の見惑。

と四種、（即ち）道・正・行・跡なり。出入の息の中に復た十六行あり。一には入る息を觀じ、二には出づる息を觀じ、三には、息の長きと、息の短きとを觀じ、四には息の身に遍ねきを觀じ、五には諸の身の行を除き、六には喜を受け、七には樂を受け、八には諸の心の行を受け、九には喜を作すこと無く、十には心に攝を作し、十一には心解脫を作し、十二には無常を觀じ、十三には散壞を觀じ、十四には離欲を觀じ、十五には滅を觀じ、十六には棄捨を觀ず。復た六種の念あり。念佛とは、佛は是れ多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀、是の如き等の十號なり。五念は、後に說くが如し。世智・出世智・阿羅漢・辟支佛・菩薩・佛智、是の如き等の智慧もて、諸法を知るを名けて、一切種と爲す。

一切法とは、識の緣ずる所の法は是れ一切法なり。所謂、眼識は色を緣じ、耳識は聲を緣じ、鼻識は香を緣じ、舌識は味を緣じ、身識は觸を緣じ、意識は法を緣ず。眼を緣じ、色を緣じ、眼識を緣じ、耳・聲、鼻・香、舌・味、身・觸、も亦た是の如く、乃至意を緣じ、法を緣じ、意識を緣ず、是を一切法と名け、是を識の緣ずる所の法と爲す。

復次に、智の緣ずる所の法は是れ一切法なり。所謂、苦智は苦を知り、集智は集を知り、盡智は盡を知り、道智は道を知り、世智は苦・集・盡・道・及び虛空・[14]非數緣の滅を知る。是を智の緣ずる所の法と爲す。

復次に、二法に一切法を攝す。[15]色法と無色法、[16]可見法と不可見法、[17]有對法と無對法有漏と無漏、有爲と無爲、[18]心相應と心不相應、[19]業相應と業不相應、[20]近法と遠法等、[21]是の如き種種の二法に一切法を攝す。

復次に、三種の法に一切法を攝す。善と不善と無記、學と無學と非學非無學、[22]見諦斷と[23]思惟斷と[24]不斷となり。復三種の法あり。五衆、十二入、十八界なり。是の如き等の種種の三法を持つて盡く一切の法を攝す。

復た四種の法あり、過去と未來と現在の法と過去未來現在に非さる法。欲界繫法と色界繫法と無色

【一四】非數緣滅。數とは新譯の心所法なり。善惡の心所法は其數多ければ數法と云ふ。智慧の數法によりて煩惱を斷じて得るところの盡滅を數緣滅と云ふ。これは無上法にして涅槃である。智慧の數法によらずたゞ能生の緣を見るによりて諸法の盡滅に歸するを非數緣滅と云ふ。是れは有上法である。

【一五】色法・無色法。物質と非物質。

【一六】可見法・不可見法、見

如かず、姉の懷む所の子は必ず大智慧なるを知り、未だ生ぜずして是の如し、何に況んや出生せるをやと。即ち家を捨てて學問し、南天竺に至る、指爪を剪らず、十八種の經書を讀みて皆通利ならしむ。是の故に時人名けて長爪梵志と爲す。姉の子既に生れて七日の後、裹むに白氈を以てし、以て其の父に示す。其父思惟すらく、「我を提舍と名く、我が名字を逐ひて字けて[二]憂波提舍と爲ん」と。是れを「父母字を作る」と爲す。衆人は其の舍利の生む所なるを以て、皆共に之に名けて[三]舍利弗と爲す。復次に、舍利弗の世世の本願は、釋迦牟尼佛の所に於て、智慧第一の弟子と作り、舍利弗と字く(るにあり)、是を本願の因緣の名字と爲す。是を以ての故に舍利弗と名く。

問うて曰く、若し爾りとせば何を以てか、憂波提舍と言はずして、而も但だ舍利弗と言ふや。

答へて曰く、時人其の母を貴び重んず、衆の女人の中に於て、聰明なること第一なり、是の因緣を以ての故に舍利弗と稱す。

【經】菩薩摩訶薩、一切種を以て一切法を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべし。

【論】菩薩摩訶薩の義は、先の讚菩薩品の中に說くが如し。

問うて曰く、云何なるを一切種と名け、云何なるを一切法と名くるや。

答へて曰く、智慧門を名けて種と爲す。有人は、一智慧門を以て觀じ、有は、二三十百千萬、乃至恒河沙等の阿僧祇の智慧門を以て諸法を觀ず。今一切智慧門を以て、一切種に入り、一切法を觀ず、是を一切種と名く。凡夫人の如きは、三種の觀にて、欲を離れ、色を離れんと欲するが故に、欲色界の麁惡・誑惑・濁重を觀ず。佛弟子には八種の觀あり。無常・苦・空・無我にして病の如く、癰の如く、箭の體に入つて惱患するが如く(觀ず。)是の八種の觀は、四聖諦の中に入つて、十六行の四と爲る。十六とは苦を觀じて四種とす。(即ち)、無常と苦と空と無我となり。苦の因を觀ずること四種、(即ち)集・因・緣・生なり。苦の盡くるを觀ずること四種、(即ち)盡・滅・妙・出なり。道を觀ずること

【二】憂波提舍(Upadeśa)。割註して「憂波は秦に逐と言ふ。」提舍は星の名なり。

【三】舍利弗。割註して「弗は秦に子と言ふ。」即ち舍利の子の意味。

「是れ何人ぞ」と。衆臣答へて言く、「南天竺に一婆羅門あり、提舍大論師と名く。論處を求めんと欲するが故に、論鼓を打つ」と。王大に歡喜し、卽ち衆人を集めて之に告げて曰く、「能く難ずる者あらば之と論義せよ」と。摩陀羅之を聞いて自ら疑ふらく、「我は廢忘し、又業新たならざるを以て、知らず、我今能く與に論ぜんや不や」と、僶俛として來る。道中に於て、二の犢牛の方に相觝觸するを見、心中に想を作さく、「此牛は是れ我、彼の牛は是れ彼なり。此を以て占を爲さば、誰か勝つを得るかを知るべし」と。(然るに)此の牛如かず。便ち大に愁憂して自ら念じて言く、「此相の如くんば、我將に如かず」と。衆に入らんと欲する時、見るに母人の、一の瓶水を挾んで正しく其の前に在るあり、地に躓いて瓶を破る。復た是念を作さく、「是れ亦不吉なり」と、甚だ大に樂しまず。既に衆中に入り彼の論師を見るに、顏貌・意色に勝相を具足せり。自ら如かざることを知れども、事已むを獲ず、與共に論議す。論議既に交はりて便ち負處に墮せり。王大に歡喜すらく、「大智明の人、遠く我が國に入る、復た之が爲に一聚落を封ぜんと欲す」と。諸臣、議して言く、「一聰明の人來れば便ち一邑を封じ、功臣を賞せず、但だ語論のみを寵す。恐らくは、國を安んじ家を全うするの道に非ず。今摩陀羅は論議如かず、應に其の封を奪つて、以て勝者に與ふべし。若し更に勝つ人あらば、復た以て之に與へたまへ」と。王、其の言を用ゐ、卽ち奪つて後の人に與ふ。是の時、摩陀羅、提舍に語つて言く、「汝は是れ聰明の人なり、我女を以て汝に妻さん。男兒を相累して今遠く他國に出で、以て本志を求めんと欲す」と。提舍其の女を納れて婦と爲す。其の婦懷妊し、夢に、一人の身に甲冑を被、手に金剛を執つて、諸山を摧破し、大山の邊に在つて立つるを見る。覺め已つて其夫に白して言く、「我夢みること是の如し」と。提舍言く、「汝當に男を生むべし、一切の諸の論議師を摧伏すれども、唯一人には勝たず。當與に弟子と作るべし」と。舍利は懷妊するや、其子を以ての故に、母も亦聰明にして、大に能く論議す。其の弟の拘郗羅は、姉と談論する每に屈して

【一】僶俛、心に進まざる處に首を垂れて來る形容。

爲すに非ざるなり」と。是を以ての故に、須菩提は常に空三昧を行じて般若波羅蜜の空の相と相應すと言ふ。是の故に佛は命じて般若波羅蜜を說かしめたまふ。　復次に、衆生は阿羅漢が諸漏已に盡きたるを信じ敬ふを以て、之に命じて爲に說かしめたまふ、衆が淨信を得るが故なり。諸の菩薩は漏未だ盡きず、若し以て證と爲さば、諸人は信ぜず、是を以ての故に舍利弗と須菩提とに共に、般若波羅蜜を說きたまふ。

問うて曰く、何を以てか舍利弗と名くるや。是れ父母が字を作る所とせんや、是れ功德を行ふに依つて名を立つとせんや。

答へて曰く、是れ父母の作る所の名字なり。閻浮提の中に於て、第一に安樂なるに摩伽陀國あり。是の中に大城あり、王舍と名け、王を頻婆娑羅と名く。婆羅門の論議師あり、[八]摩陀羅と名く。王は其の人の善く論を能くするを以ての故に、封じて一邑を賜ふ。城を去ること遠からず。是の摩陀羅、遂に居家にあり。婦、一女を生む。眼、舍利鳥の眼に似たり。卽ち是の女を名けて舍利と爲す。次に一男を生む、膝の骨麁大なり、[九]拘郗羅と名く。是の婆羅門は既に居家に有つて男女を畜養す。學ぶ所の經書は、皆已に廢忘して、又た業新たならず。是の時、南天竺に一の婆羅門の大論議師あり、[一〇]提舍と字す。十八種の大經に於て、皆悉く通利せり。是の人王舍城に入り、頭上に火を戴き、銅を以て腹に鍱す、人其故を問へば、便ち言く、「我が學ぶ所の經書甚だ多く、腹の破裂せんことを恐る、是の故に之に鍱す」と。又問ふ、「頭上何を以てか火を戴くや」と。答へて言く、「大闇を以ての故に」と。衆人言く、「日出でゝ照明なり、何を以てか闇しと言ふや」と。答へて曰く、「闇に二種あり、一には曰く日光照さず、二には愚癡の闇蔽ふ。今は日の明ありと雖も、而も愚癡は猶黑し」と。衆人言く、「汝は但だ未だ婆羅門摩陀羅を見ざるのみ、汝若し見れば腹は當に縮まるべく、明は當に闇となるべし」と。是の婆羅門は逕（たゞち）に鼓の邊に至つて、論議の鼓を打てり。國王之を聞いて問ふ、

【八】摩陀羅(Māṭhara) 舍利弗の祖父。

【九】拘郗羅(Mahākauṣṭhila)。割註して「秦に大膝と言ふなり。」とあり。

【一〇】提舍(Tiṣya)。舍利弗の父。

弗の爲に說きたまへり。

問うて曰く、若し爾らば何を以てか、初め少しく舍利弗の爲に說き、後多く須菩提の爲に說くや。若し智慧第一を以ての故ならば、應に爲に多く說くべし。復た何を以てか、須菩提の爲に說くや。

答へて曰く、舍利弗は佛弟子の中にて、智慧第一にして、須菩提は弟子の中に於て[五]無諍三昧を得ること最も第一なり。無諍三昧の相は常に衆生を觀じて心を惱まさしめず、多く憐愍を行ず、諸の菩薩は弘大誓願、以て衆生を度す。憐愍の相同じ、是故に命じて說かしめたまふ。復次に是の須菩提は好んで空三昧を行ず。佛、忉利天に在して、夏安居し、受歲し已つて、還つて閻浮提に下りたまふときの如きは、爾の時、須菩提は石窟の中に於て住し、自ら思惟すらく、「佛は忉利天より來り下りたまふ。我當に佛の所に到るべきや、佛の所に到らざるべきや」と。又念じて言く、「佛は常に說きたまふ。若し人智慧の眼を以て佛の法身を觀れば、卽ち見佛の中の最なるものなり」と。是の時、佛は忉利天より下りたまふを以ての故に、閻浮提の中の[六]四部衆集りて、諸天は人を見、人は亦た天を見る。坐中に佛及び轉輪聖王と諸天と大衆とあり、衆會の莊嚴なること、先に未だ曾つて有らず。須菩提は心に念ずらく、「今此大衆は復た殊特なりと雖も、勢久しく停らず、磨滅の法にして皆無常に歸す」と、此の無常觀の初門に因つて、悉く諸法は空にして實あること無きを知る。是の觀を作すとき、卽ち道證を得たり。爾の時、一切の衆人は、皆先づ佛を見んことを求めて、禮敬し供養せんとを欲す、[七]華色比丘尼あり、女名の惡しきを除かんと欲して、便ち化して轉輪聖王及び七寶の千子と爲る。衆人之を見て皆坐を避けて起ち去る。化王、佛の所に到り已つて、還つて本身に復して比丘尼と爲り、最初に佛を禮す。是の時、佛、比丘尼に告げたまはく、「汝初めて禮するには非ず、須菩提は最初に我を禮せり、所以となれば、須菩提は諸法の空を觀ぜり、是れを佛の法身を見たてまつると爲す。眞の供養を得たり。供養の中の最なるものなり。生身に敬を致すを以て供養と

【五】無諍三昧。空理に安住して他と爭はざる三昧。

【六】四部衆。比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷。

【七】華色比丘尼。蓮華色比丘、既註。

の苦を厭ひ、出家して道を學び、阿耨多羅三藐三菩提を得たり、是れ我が師なり」と。舍利弗言く、「汝が師の教へ授くるところを我が爲に之を說け」と、即ち答の偈に曰く、

『我年既に幼稚にして、學ぶの日また初めにして淺し、豈に至眞を演べ、廣く如來の義を說かんや。』

舍利弗言く、「略して其要を說け」と。爾の時に阿說示比丘は此の偈を說いて言く、

『諸法は因緣より生ず、是の法の因緣と、是の法の因緣の盡くることを說く、大師は是の如く說きたまへり。』

舍利弗は此偈を聞き已つて、即ち初道を得、還つて目連に報ず。目連は、其顏色の和悅せるを見て、迎えて之に謂つて言く、「汝甘露味を得たるや、我が爲に之を說け」と。舍利弗は即ち其の爲に向に聞く所の偈を說く。目連言く、「更に爲に重ねて說け」と、即ち復た爲に說くに、亦た初道を得たり。二師は二百五十の弟子と倶に佛の所に到る。佛は、遙に二人、弟子と倶に來るを見たまひ、諸の比丘に告げたまはく、「汝等は此二人、諸の梵志の前に在る者を見るや、不や」と。諸の比丘言く、「已に見たり」と。佛の言はく、「是二人は是れ我が弟子の中にて智慧第一、神足第一の弟子なり」と。大衆と倶に來り、以て漸やく佛に近づき、既に到つて稽首して、一面に在つて立ち、倶に佛に白して言さく、「世尊よ、我等、佛法の中に於て出家し、受戒せんと欲す」と。佛の言はく、「善く來れり、比丘よ」と、即時に鬚髮自ら落ち、法服身に著き、衣鉢具足して、成就戒を受く、半月を過ぎて後、佛、長爪梵志の爲に法を說きたまふ時、舍利弗は阿羅漢道を得たり。半月の後、道を得る所以のものは、是人は當に佛を逐うて、轉法輪の師と作るべく、應に學地に在つて、現前に自ら諸法に入り、種種に具に知るべければなり。是故に半月の後に阿羅漢道を得たり。是の如き等の種種の功德甚だ多し。是故に舍利弗は是れ阿羅漢なりと雖も、佛は是の般若波羅蜜の甚深の法を以て、舍利

辭理超絕せり。時の諸論師は未曾有なりと歎じ、愚・智・大・小、一切皆な伏せり。王大に歡喜し、即ち有司に命じて一聚落を封じ、常に以て之に給す。王は象輿に乘り鈴を振り、吉を告げ、一切を十六大國六大城の中に宣示するに、慶悅せざるもの無し。是時の告占師の子を拘律陀と名く、姓は大目犍連、舍利弗の友にして之に親しむ。舍利弗は才明かにして、見重く、目犍連は豪爽にして最も貴し。此二人の者は才智相比び、德行互に同じく、行けば即ち俱に遊び、住まれば即ち同じく止まる。少長繾綣として、結要終始せり。後に俱に世を厭ひ出家して道を學び、梵志の弟子と作り。情に道門を求むること、久しけれども徵なし。以て師に問ふ。師を[三]刪闍耶と名く。而して之に答へて言く、「我道を求めて自り、彌年歲を歷たれども、道果は有りと爲んか無しと爲んか、はた我は其人に非ざるかを知らず、而も亦得ず」と。他日其師疾に寢ねたり。舍利弗は頭の邊に在つて立ち、大目犍連は足の邊に在つて立てり。喘喘然として、其の命將に終らんとし、乃ち愍爾んで而して笑ふ。二人心を同うして俱にその笑意を問ふ。師之に答へて曰く、「世俗は眼なくして恩愛の爲に侵さる。我は、金地國の王死して、其大夫人が、自ら火積に投じて、同一の處(に生ずる)を求むるに、而も此の二人の行報は各各異たり、生るる處は殊絕せるを見る」と。是の時、二人は師の語を筆受し、以て其の虛實を驗さんと欲す。後、金地の商人あり、遠く摩伽陀國に來る。二人は疏を以て之を驗するに、果して師の語の如し。乃ち憮然として歎じて曰く、「我等其の人に非ざるか、是れ師の我に隱せりと爲すか」と。二人は相與に誓つて曰く、「若し先づ甘露を得ば、要畢ず味を同うせん」と。是の時、佛は迦葉の兄弟千人を度し、次いで諸國に遊び、王舍城に到り、竹園に頓止りたまふ。二の梵志師は佛の出世を聞いて俱に王舍城に入り、消息を知らんと欲す。爾の時に、一比丘あり[四]阿說示と名く。衣を著け鉢を持し城に入つて乞食す。舍利弗は其の儀服の異容にして、諸根の靜默なるを見て、就いて問うて言く、「汝は誰の弟子にして師は是れ何人ぞや」と。答へて言く、「釋種の太子、老・病・死

【三】刪闍耶(Sañjayin Vai=radiputra)。六師外道の一。

【四】阿說示(Aśvajit)。馬勝と譯す。佛陀初轉法輪の對衆、五比丘の一人。本文割註あり「五人の一」と。その意なり。

卷の第十一

初品第十六……「舍利弗因緣」

【經】 佛、舍利弗に告げたまはく。

【論】 問うて曰く般若波羅蜜は、是れ菩薩・摩訶薩の法なり。佛は、何を以ての故に、舍利弗に告げて、而も菩薩に告げたまはざるや。

答へて曰く、舍利弗は一切の弟子の中に於て、智慧最も第一なり。佛の偈に說きたまへるが如し。

『一切衆生の智は唯だ佛世尊を除いて、舍利弗の智慧及び多聞に比せんとするに、十六分の中に於て、猶ほ一にも及ばず。』

復次に、舍利弗は、智慧あり多聞にして、大功德あり。年始めて八歲にして、十八部の經を誦し、一切の經書の義理を通解す。是の時、摩伽陀國に龍王の兄弟あり、一を[一]姞利と名け、二を[二]阿伽羅と名く。雨を降らすに時を以てし、國に荒年なし。人民之を感じ、常に仲春の月を以て、一切、大いに集まり、龍の住處に至つて、爲に大會を設け、樂を作し義を談じて、此の一日を終ふ。古より今に及んで、斯の集、未だ替らず、遂に龍の名を以て此の會に名く。此の日は常法として四の高座を敷く。一は國王の爲め、二は太子の爲め、三は大臣の爲め、四は論士の爲めなり。爾の時に舍利弗は八歲の身を以て、衆人に問うて言く、「此の四の高座は誰が爲に之を敷くや」と。衆人答へて曰く。「國王・太子・大臣・論士の爲なり」と。是の時、舍利弗は時人・婆羅門等を觀察して、神情を瞻向するに、已に勝る者なし。便ち論床に昇つて結跏趺坐す。衆人疑ひ怪んで、或は「愚小にして無知なり」と謂ふ。或は「智量人に過ぐ」と謂ふ。復た其の神異を嘉(よみ)すと雖も、而も猶ほ各自ら矜を懷き、其の年小を恥ぢて、自ら與に語らず、皆な年少の弟子を遣はして、傳言して之に問ふに、其の答酬の旨趣、

【一】 姞利(Krmi)。蟲行龍王と云ふ。
【二】 阿伽羅(Agrla)。無頸と譯す。

を得ること能はずと言ふや。

問うて曰く、[四一]五道の衆生の中に於て、佛は是れ人天の師にして、[四二]三惡道には說きたまはざりき。其の無福なるを以て道を受くる分なきが故なり。是の諸の龍鬼は皆な惡道の中に墮せり。

答へて曰く、佛は亦た分明に五道を說きたまはず、五道を說くは是れ一切有部の僧の所說なり。[四三]婆蹉弗妬路部の僧の說には六道あり。復次に、應に[四四]六道あるべし。何となれば、三惡道は一向に是れ罪の處にして、若し福多く罪少なければ、是を阿修羅・揵闥婆等と名く、生處は別なるべし。是を以ての故に應に六道を言ふべし。復次に、三惡道にも亦道を受くるものあれども、福少なきが故に無しと言ふ。

「及び諸の菩薩尊位を紹ぐ者」は先に說くが如し。

【四一】五道。地獄、餓鬼、畜生、人、天。

【四二】三惡道。地獄、餓鬼、畜生。

【四三】婆蹉弗妬路部(Vatsīputriyā)。犢子部である。

【四四】六道。五道に阿修羅を加ふ。

り。』

問うて曰く、何を以てか地獄・畜生・餓鬼を說かざるや。

答へて曰く、地獄は大苦にして心亂れ、法を受くること能はず。畜生は愚癡心を覆ひ、化を受くること能はず。餓鬼は飢渴の火の爲に身を燒くが故に、法を受くることを得ず。復次に、畜生餓鬼の中より、少多來つて法を聽く者あれども、福德の心を生ずるのみにして、道を受くるに堪へず、是の故に說かず。

問うて曰く、若し爾らば犍闥婆・阿修羅にも亦說くべからず。何となれば鬼神道の中に已に攝するが故なり。

答へて曰く、佛は攝すと說きたまはず、今何を以てか攝すと言ふや。此れ迦旃延子等の說なり。阿脩羅の如きは、力、天と等しく、或時は戰鬪して天に勝つ。犍闥婆は是れ諸天の伎にして、天と同じく福樂を受け、智慧あつて能く好醜を別つ。何を以てか道法を受くることを得ざらんや。雜阿含天品の中に說くが如く、[三七]富那婆藪鬼神の母は、佛遊行して、其處に宿せるに、爾の時、世尊は上妙の法甘露を說きたまひしに女男二人啼泣せり。母爲に偈を說いて之を止めき。

『汝、[三八]鬱怛羅よ、聲を作すこと勿れ、富那婆藪も亦た啼くこと莫れ、我は今法を聞いて道證を得たり、汝も亦當に得て、必ず我が如くならん。』

是の事を以ての故に、鬼神の中に、道を得る者あることを知る。復次に、摩訶衍の中の[三九]密迹金剛力士は諸の菩薩の中に於て勝れたり。何に況んや餘人をや。[四〇]屯崙摩甄陀羅王・犍闥婆王の如きは、佛の所に至り、琴を彈じて佛を讚じ、三千世界皆爲に震動し、乃ち摩訶迦葉も其座に安ぜざりき。此の如きの人等は、云何なれば道を得ること能はざる。諸の阿脩羅王と龍王の如きは、皆佛の所に到り、佛の深法を問ひたてまつるに、佛は其の問に隨つて深義を答へたまへり。何を以てか道

【三七】富那婆藪(Punarvasu)。女夜叉の子、鬱怛羅の兄。
【三八】鬱怛羅(Uttara)。富那婆藪の妹。
【三九】密迹金剛力士(Guhyapāda)。手に金剛の武器を執り佛を警護する夜叉。
【四〇】屯崙摩(Druma)。

に在り。有時は天上にて諸天の爲に樂を作す。此の二種は、常番に上下に休す。人は四天下に在つて生ず。生に四種あり。極めて長壽なるは乃ち無量歳に至り、極めて短壽なるは乃ち十歳に至る。阿脩羅は惡心にして鬪諍すれども、而も戒を破らず。大に施福を脩し、生じて大海の邊に在つて住し、亦城郭宮殿にあり。是の阿脩羅王を[三四]毘摩質多、[三五]婆梨、[三六]羅睺羅と名け、是の如き等の阿脩羅王と名く。說くが如くんば、一時、羅睺羅阿脩羅王は、月を噉はんと欲す、月の天子は怖れて、疾かに佛の所に到つて、偈を說けり。

『大智成就の佛世尊、我今歸命して稽首し禮したてまつる。是の羅睺羅は我を惱亂す、願くは佛憐愍し救護を見したまへ。』

佛、羅睺羅の與めに偈を說いて言はく、

『月は能く闇を照して淸涼なり、是れ虛空の中の大燈明なり。其の色は白く淨くして千光あり。汝、月を呑むこと莫れ、疾かに放ち去れ。』

是の時、羅睺羅は怖懍して汗を流し、卽ち疾かに月を放てり、婆梨阿脩羅王は、羅睺羅が惶怖して月を放つを見て、偈を說いて問うて曰く、

『羅睺羅よ、汝は何を以ての故に惶怖戰慄して、疾かに月を放ち、汝が身より汗を流すこと病人の如く、心怖れて安んぜざること、乃ち是の如くなるや。』

爾の時に羅睺羅、偈を說いて答へて曰く、

『世尊は偈を以て我に勅したまへり、「我月を放たずんば、頭を七分せん、設ひ生活するを得とも安隱ならじ」と。故を以て我は今此の月を放てり。』

[三七]婆梨阿脩羅王は、此の偈を說いて言く、

『諸佛は甚だ値ひ難し。久遠にして乃ち出世し、此淸淨の偈を說きたまへば、羅睺は卽ち月を放て

[三四] 毘摩質多(Vepacitti)。紋身と譯す。
[三五] 婆梨(Bali)。羅睺羅の兄弟。
[三六] 羅睺羅(Rahu)。

生ぜり」と。諸天は此の時、亦各自に念ずらく、「我は梵王に從つて生ず。梵王は是れ我が父なり」と。是を以ての故に但だ梵の世界のみを說くなり。　復次に、二禪・三禪・四禪の天は、欲界に於て佛を見、法を聽き、若くは菩薩を勸助し、眼識・耳識・身識を皆梵の世界の中に在りて取る。是を以ての故に別して梵の世界を說くなり。

問うて曰く、何を以ての故に獨り諸の沙門・婆羅門を說いて、國王・及び長者と諸の餘の人衆を說かざるや。

答へて曰く、智慧の人に二分あり、沙門と婆羅門となり。出家を沙門と名け、在家を婆羅門と名く。餘人の心は世樂に存す、是の故に說かず。婆羅門は多學にして智慧ありて福を求め、出家の人は一切道を求む。是の故に但だ沙門・婆羅門を說く。在家の中にて七世清淨にして、生れて六歲に滿つれば、皆戒を受けて婆羅門と名く。是の沙門と婆羅門の中には道德・智慧あり、是を以ての故に說く。

問うて曰く、先に已に天の世界を說く、今何を以てか復た天を說くや。

答へて曰く、天の世界は是れ四天王・忉利天、魔は是れ他化自在天、梵は是れ色界なり。今說く天は是れ欲界の中の、夜摩と兜率陀と化樂と愛身天等なり。愛身は六天の上に在りて、形色絕妙なるが故に愛身と言ふ。

問うて曰く、何を以てか但だ、揵闥婆を說いて、諸餘の鬼神及び龍王を說かざるや。

答へて曰く、是の揵闥婆は是れ諸天の伎人にして、諸天に隨逐す。其の心は柔輭に、福德力は小にして、諸天諸鬼神に減れり。鬼神道の中に龍王を攝し、畜生道の中に甄陀羅を攝す。亦是れ天の伎にして、皆天に屬し、天と同じく住し、共に坐して飮食し、伎樂は皆天と同じ。是の揵闥婆王を[三三]童籠磨と名く。是の揵闥婆と甄陀羅とは恒に二處に在つて住す。常に居止する所は十寶山の間

【三三】童籠磨（Druma）。割註あり「秦に樹と言ふ」。

是の故に應に天人と言ふべきのみ。

答へて曰く、諸天には天眼・天耳あり、利根にして智慧多く自ら知つて來る。是を以ての故に天人と言ふべきのみ。

問うて曰く、若し天の世界ならば已に魔と梵とを攝す。何を以てか別して、「若くは魔、若くは梵」と說くや。

答へて曰く、天の中に三大主あり、釋提婆那民は二處の天主、魔王は六欲天の主、梵世界の中には大梵天王を主と爲す。

問うて曰く、夜摩天・兜率陀天・化樂天の如きは、皆主あり、何を以てか但だ三主のみあるや。

答へて曰く、釋提婆那民は地に依つて住す、佛も亦地に依つて住したまふ。常に佛の所に來り、大に名稱あつて、人多く識るが故なり。魔王は常に來つて佛を嬈す、又是れ一切欲界の主なり。夜摩天、兜率陀天、化樂天は皆魔王に屬す。復次に、天の世界には、則ち三界の天、皆是の天の中に攝す。一切の欲界は魔を主と爲す。是の故に別に說けり。復次に、魔は常に佛を嬈すに、今は來つて般若波羅蜜を聽く、餘人の信を增益するが故なり。

問うて曰く、色界の中に大に天あり、何を以てか、但だ「梵の世界、集まる」と言ふや。

答へて曰く、上の諸の天は覺觀なく、散心を喜ばず、又聞くこと難きが故なり。梵の世界には四識あつて聞き易きが故なり。又梵の世界は近きが故なり。復次に、梵を離欲清浄と名く、今梵の世界を言へば、已に總じて色界の諸天を說くなり。復次に、餘の天には未だ人民あらず、劫の初めに生ずる時、梵天王、獨り梵宮に在り、寂莫として人なく、其の心悅ばず。而して自ら念を生ずらく、「此間に何を以てか人民を生ぜざる」と。是の時、光音天の命盡くる者、念に應じて來り生ず。梵王便ち念を生ずらく、「此諸の天は先に無かりき。我が念に隨ふが故に生ぜり。我は能く此諸天を

【論】問うて曰く、佛の神力は無量なり、一切の十方の衆生、若し盡く來つて會に在らば、一切の世界は應に空なるべし。若し來らずんば、佛の無量の神力に、能はざる所あらん。

答へて曰く、盡く來るべからず。何となれば、諸佛の世界は無邊無量なり。若し盡く來らば、便ち有邊と爲らん。又復た、十方に各各佛あつて、亦た般若波羅蜜を說きたまふ。彼の般若波羅蜜四十三品の中の如きは、「十の方面に各千佛現れて、皆般若波羅蜜を說きたまふ」と。是を以ての故に盡く來るべからず。

問うて曰く、若し十方の諸佛、皆な般若波羅蜜を說きたまふならば、十方の諸の菩薩は何を以ての故に來るや。

答へて曰く、普明菩薩來るの章の中に、已に說けるが如く、釋迦牟尼佛と因緣あるが故に來るなり。復次に、是の諸の菩薩の本願の故なり。「若し般若波羅蜜を說く處あらば、我當に聽受し、供養すべし」とあり。是を以て遠く來りて身力を以て、功德を積まんと欲するが故なり。亦以て諸の衆生に「我、遠くより來つて法を供養するに、云何んぞ汝は此の世界に在つて供養せざるや」と示すなり。

問うて曰く、佛は法に於て著したまはず、何を以ての故に、七たび神力を現じて、衆生をして大集せしむるや。

答へて曰く、是の般若波羅蜜は、甚深にして知り難く、解し難く、思議すべからず。是の故に廣く諸の大菩薩を集め、新發意の者をして、心に信樂を得せしむ。譬へば小人の語る所は人に信を爲さず、貴重の大人ならば人必ず信受するが如し。

問うて曰く、何を以ての故に、「若くは天の世界、若くは魔の世界、若くは梵の世界」と言ふや。但だ應に天の世界・人の世界と言はゞ、則ち足るべし。何となれば佛の十號の中に天人師と言へり、

答へて曰く、彼の世界には常に淨き華あり。此の世界は一時に變化するが故、に以て喩ふるなり。譬喩の法は小を以て大に喩ふ。人の面の好きを、譬へて滿月の如しとするが如し。

問うて曰く、更に十方の諸の清淨世界あり、阿彌陀佛の安樂世界等の如し。何が故に、但だ普華世界のみを以て喩と爲すや。

答へて曰く、阿彌陀佛の世界は、華積世界に如かず。何となれば法積比丘は佛は將いて十方に至り、清淨の世界を觀すと雖も、功德力薄くして、上妙の清淨世界を見ることを得る能はざりき。是を以ての故に(阿彌陀佛の)世界は如かず。　復次に、當佛の此の世界を變化したまふ時、正しく華積世界と相似たり。是を以ての故に「譬へば華積世界の如し」と言ふ。

問うて曰く、更に餘の大菩薩あり。毘摩羅詰・觀世音・遍吉菩薩等の如し。何を以てか、此の諸の菩薩の彼に在つて住することを言はずして、但だ文殊・師利善住意菩薩のみを言ふや。

答へて曰く、是の遍吉菩薩は一一の毛孔より、常に諸の佛の世界及び諸の佛・菩薩を出して、遍ねく十方に滿たし、以て衆生を化し、適住する處なし。文殊尸利の分身は變化して五道の中に入り、或は聲聞と作り、或は緣覺と作り、或は佛身と作る。首楞嚴三昧經の中に說くが如きは、文殊師利菩薩は、過去世に龍種尊佛と作り、七十二億世に辟支迦佛と作る。是れ言ふ可く說く可し。遍吉菩薩は量る可らず、說く可らず、住處を知る可らず。若し住せば、應に一切世界の中に在つて住すべし。是の故に說かず。復次に、及び諸の大威神の菩薩とは、亦應に總じて遍吉等の諸の大菩薩を說く。

【經】爾の時に、佛、一切の世界の、若くは天の世界、若くは魔の世界、若くは梵の世界、若くは沙門・婆羅門、若くは天、若くは揵闥婆・人・阿修羅等・及び諸の菩薩摩訶薩、尊位を紹ぐ者、皆集まれるを知りたまふ。

き、亦飢渴・寒熱・種種の苦事を除く。天寶は亦た大にてもあり、亦た勝れたるものにてもあり、常に天身に隨逐し、使は令すべく、共に語る可く、輕くして重からず。菩薩寶は天寶よりも勝れ、能く人寶、天寶の事を兼ね有てり。又能く一切衆生をして、此に死し彼に生ずる因緣の本末を知らしむること。譬へば明鏡にむかて、其面像を見るが如し。　復次に、菩薩寶は勝れて能く種種の法音を出す。若し首飾・寶冠と爲れば、則ち十方の無量の世界の諸佛の上に、幢旛・華蓋・種種の供養の具を雨ふらして以て佛に供養し、又衣被・臥具・生活の物を雨らし、種種の衆事衆生の須ゆる所に隨つて、皆悉く之を雨らして衆生に給施す。是の如き等の種種の衆寶ありて以て衆生の貧窮苦厄を除く。

問うて曰く、是の諸の珍寶は何處より出るや。

答へて曰く、金は山の石沙・赤銅の中より出で、眞珠は魚の腹中、竹の中、蛇の腦の中より出で、龍珠は龍の腦中より出で、珊瑚は海中の石樹より出で、玉貝は蟲甲の中より出で、銀は燒石より出で、餘の琉璃・頗梨等は皆山窟の中より出で、如意珠は佛の舍利より出づ。若し法沒し盡くるの時は、諸の舍利は皆變じて如意珠と爲る。譬へば、千歲を過ぐれば、氷は化して、頗梨珠と爲るが如し。　是の如き等の諸の寶は、是の人中の常の寶なり。佛の莊嚴したまふ所(の寶)は、一切の世界にて是れを最も殊勝とす。諸天の得る能はざる所なり。何となれば是は大功德より生ずる所なればなり。

種種の華旛は先に說くが如し。　香樹は　[二八]阿伽樓・[二九]多伽樓・旃檀と名く。是の如き等の種種の香樹あり。　華樹は　[三〇]占匐、[三一]阿輸迦、[三二]婆呵迦羅と名く。是の如き等の種種の華樹あり。

【經】譬へば華積世界、普華世界の如し、妙德菩薩、善住意菩薩及び餘の大威神の諸の菩薩、皆彼に在つて住す。

【論】問うて曰く、何を以てか、譬へば華積世界の如しと言ふや。

【二八】阿伽樓(Agaru)。沈香　割註して「蜜香樹。」

【二九】多伽樓(Tagara)、格香。割註して「木香樹。」

【三〇】占匐(Campaka)。黄白の花咲く。割註して「黄華樹。」

【三一】阿輸迦(Aśoka)。割註して「無憂花樹」

【三二】婆呵迦羅。割註して「赤華樹」

常の故に是れ遍からず。是を以ての故に方は但だ名のみ有つて實なし。

【經】爾の時に、是の三千大千世界は、皆變成して寶華と爲り、遍ねく地を覆ひ、繒旛蓋を懸け香樹・華樹・皆悉く莊嚴す。

【論】問うて曰く、此れは誰の神力が、地をして寶と爲らしむるや。

答へて曰く、是れ佛の無量の神力變化の所爲なり。人の呪術・幻法・及び諸の鬼神・龍王・諸天等は能く少物を變化すること有れども、三千大千世界をして皆珍寶と爲らしむることは、餘人及び梵天王の皆能はざる所なり。佛は四禪の中の[一八]十四變化心に入り、能く三千大千世界の華香・樹木・一切の土地をして皆悉く莊嚴ならしめたまひ、一切衆生は、皆な悉く和同し心轉じて善を爲す。

何を以ての故に、此の世界を莊嚴するや。般若波羅蜜を說かんが爲の故に、亦た十方の諸の菩薩の客來ると、及び諸天と世人との爲の故に莊嚴す。人の貴客を請するときの如し。若し一家が請ずれば則ち一家を莊嚴し、一國の主は則ち一國を莊嚴し、轉輪聖王は則ち四天下を莊嚴し、梵天王は三千大千世界を莊嚴す。佛は十方無量恒河沙等の諸の世界中の主たり。是の諸の他方の菩薩及び諸天、世人が客來するが爲の故になり。亦た此と彼の衆人の爲に此の變化の莊嚴を見せ(しめ)ば、則ち大心を生じ、清淨なる歡喜心を生じ、大心に從て大業を發し、大業に從て大報を得。大報を受くる時、更に大心を生じ、是の如く展轉增益して、阿耨多羅三藐三菩提を生ずることを得。是を以ての故に此の世界を變じて皆悉く寶と爲す。

云何なるを寶と名くるや。寶に四種あり。金と銀と[一九]毘琉璃と[二〇]頗梨となり。更に七種の寶あり。金・銀・毘琉璃・頗梨・車渠・馬瑙・[二一]赤眞珠なり。更に復た寶あり、[二二]摩羅伽陀、[二三]因陀尼羅、[二四]摩訶尼囉、[二五]鉢摩羅伽、[二六]越闍、龍珠、[二七]如意珠、玉貝、珊瑚、琥珀等の種種を名けて寶と爲す。是の寶に三種あり、人寶と天寶と菩薩寶となり。人寶は力少なく、唯清淨なる光色ありて、毒を除き鬼を除き、闇を除

【一八】十四變化心。論第六の「化の如し」の項に說明あり。
【一九】毘琉璃(Vaiḍūrya)。
【二〇】頗梨。水晶。
【二一】赤眞珠。割註あり「此珠は極めて貴し。是れの珊瑚に非ず。」
【二二】摩羅伽陀(Mārakata)。綠色寶と云ふ。本文に割註あり「此の珠は、金翅鳥の口邊より出づ、綠色にして能く一切の毒を辟く」。
【二三】因陀羅尼(Indranīla-mukta)。帝釋靑と云ふ割註あり「天の靑珠。」
【二四】摩訶尼囉(Mahānīla)。帝釋の寶珠。本文に割註あり「大靑珠。」
【二五】鉢摩羅伽(Padmarāga)。割註あり「赤光珠。」
【二六】越闍(Vajra)割註あり「金剛。」
【二七】如意珠(Cintāmaṇi)。この珠より種種の品を求むるままに出す故に如意珠と云ふ。

法の因縁は求むれども亦得べからざればなり。今何を以ての故に此の中に、「十方の諸佛・十方の菩薩來りたまふ」と說くや。

答へて曰く、世俗の法の傳ふる所に隨ふが故に方を說く、方を求むるに實には得べからず。

問うて曰く、何を以てか方なしと言ふや。汝は四法藏の中に說かずとも、我は[一六]六法藏の中に說く。汝は衆・入・界の中に攝せずとも、我は[一七]陀羅驃の中に攝す。是の方の法は常の相なるが故に、有の相なるが故に、亦た有、亦た常なり。經の中に說くが如く、日の出づる處は是れ東方、日の沒する處は是れ西方、日の行く處は是れ南方、日の行かざる處は是れ北方なり。日に三分の合あり。若くは前合、若くは今合、若くは後合なり。方に隨つて日を分てり、初合は是れ東方なり、南方・西方も亦是の如し、日の行かざる處は是れを分つこと無し。彼は此を間(へだ)て、彼を間(へだ)てゝ此あり、是れ方の相なり。若し方なくんば、彼此なし、彼此は是れ方相にして方に非ず。

答へて曰く、然らず、須彌山は四域の中に在り、日は須彌を遶つて四天下を照す。鬱怛羅越の日中は是れ弗婆提の日出にして、弗婆提の人に於ては是れ東方なり。弗婆提の日中は是れ閻浮提の日出にして、閻浮提の人に於ては是れ東方なり。是れ實には初なし。何となれば一切の方は皆東方、皆南方、皆西方、皆北方なればなり。汝は「日の出づる處は是れ東方、日の行く處は是れ南方、日の沒する處は是れ西方、日の行かざる處は是れ北方なり」と言ふも、是の事は然らず。

復次に、有る處にては日は合せず、是は方に非ずと爲す、方の相なきが故なり。

問うて曰く、我は一國の中の方相を說けるに、汝は四國を以て難を爲す。是を以ての故に東方は初なきに非ず。

答へて曰く、若し一國の中にて日と東方と合すとせば、是は有邊たり。有邊の故に無常なり、無

【一五】四法藏。苦集滅道の四諦。

【一六】六法藏。後の「陀羅驃」より察すれば勝論派の六句義なるべし。六句義は實Dravya德Guṇa業Karman同Sāmānya異Viśeṣa和合Samavāyaなり。然らばこの問ひは勝論の立場より發せられたるものなり。

【一七】陀羅驃。前註六句義の一、Dravya 實句義と譯す。地水火風空時方神意の九を指す。卽ち勝論にては、此等を實在とするなり。この邊は勝論經の所述に相應す。

微妙の三明を得て、清淨の行も亦た具はれり。是の故に世尊を鞞闍遮羅那と號したてまつる。
一切の法を解知して、自ら妙道を得て去り、或時は方便して說く、一切を愍念したまふが故に、
老病死を滅除し、安隱の處に到らしめたまふ。是を以ての故に佛と名けて、以て修伽陀と爲す。
世の從り來るところを知り、亦た世の滅する道を知りたまふ。是を以ての故に佛と名けて、路迦鞞陀と爲す。
禪・戒・智等の眼、及ぶもの無し、況んや上に出づるものをや。是を以ての故に佛と名けて、阿耨多羅と爲す。
大悲にして衆生を度し、軟善にして教へ調御したまふ、是を以ての故に佛を富樓沙曇藐と名けたてまつる。
智慧あつて煩惱なく、最上の解脫を說きたまふ。是を以ての故に佛を提婆魔菟舍と名けたてまつる。
三世の動・不動、盡及び不盡の法は[一四]道樹の下にて悉く知りたまふ。是の故に名けて佛と爲す。

【經】南方の恒河沙等の如き諸佛の世界を度り、其の土の最も邊に在る、世界を離一切憂と名け、佛を無憂德と號し、菩薩を離憂と名けたてまつる。西方の恒河沙等の如き諸佛の世界を度り、其の世界の最も邊に在る世界の滅惡と名け、佛を寶山と號し、菩薩を義意と名けたてまつる。北方の恒河沙等の如き諸佛の世界を度り、其の世界の最も邊に在る世界を勝と名け、佛を勝王と號し、菩薩を得勝と名けたてまつる。下方の恒河沙等の如き諸佛の世界を度り、其世界の最も邊に在る世界を善と名け、佛を善德と號し、菩薩を華上と名けたてまつる。上方の恒河沙等の如き諸佛の世界を度り、其の世界の最も邊に在る世界を喜と名け、佛を喜德と號し、菩薩を德喜と名けたてまつる。是の如く一切は皆東方の如し。

【論】問うて曰く、佛法の中の如きは、實は諸方の名なし。何となれば(方の名は)諸の五衆・十

【一四】道樹。菩提樹。

【論】問うて曰く、上には佛は舌相の光明を以て、千葉の寶華を化作し、一一の華の上に皆坐せる佛有りき。今何を以ての故に、一一の華の上に皆坐せる菩薩あるや。

答へて曰く、上には是れ佛の化したまふ所の華なるが故に、坐したまふ佛有り、此は是れ普明菩薩の供養する所の華なり、是の故に坐せる菩薩有り。　復次に、上の諸の衆生は、應に坐せる佛を見たてまつりて度を得べく、今の此の衆生は應に坐せる菩薩を見て度を得べし。「結跏趺坐して六波羅蜜を説き、此の法を聞く者は、畢ず阿耨多羅三藐三菩提に至る」は、先に説くが如し。

【經】諸の出家・在家の菩薩及び諸の童男・童女は、頭面に釋迦牟尼佛の足を禮し、各供養の具を以て、釋迦牟尼佛を供養し、恭敬し尊重し讃歎したてまつる。是の諸の出家・在家の菩薩及び諸の童男・童女は、各各善根福德の力を以ての故に、釋迦牟尼佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀を供養したてまつることを得たり。

【論】偈に説くが如し。

『諸聖の來るところの道を、佛も亦た是の如く來りたまふ。實相及び去るところは、佛も亦爾り、異なること無し。

諸聖は實の如くに語り、佛も亦た實の如くに説きたまふ。是を以ての故に、佛を[一三]多陀阿伽度と名けたてまつる。

忍の鎧の心は堅固に、精進の弓は力強く、智慧の箭は勁利にして、憍と慢と諸の賊とを破し、應に天と世人と一切の諸の供養を受くべし。是故に佛と名けて、以て阿羅訶と爲す。

正しく苦の實相を知り、亦た實に苦の集を知り、苦の滅せる實相を知り、亦た苦を滅する道を知り、眞に正しく四諦を解し、定んで實にして變ずべからず、是の故に十方の中に、三藐三佛と號したまふ。

【一三】偈の中の佛名は、論卷二に説明ありき。同註參照。

答へて曰く、是の福は人の受くる者無しと雖も、其相は自ら大なり。若し人の受くる者あらば、其報は無量ならん。諸の聖人は、有爲の法は皆無常にして空なることを知りたまふが故に、捨てて涅槃に入り、是福も亦捨てたまふ。譬へば燒ける金丸の如し。眼に其の好きを見ると雖も、手を以て觸る可らず、人の手を燒くが故なり。　復次に、人の瘡あれば則ち藥を須ゐて塗るも、若し瘡なき者には藥は施す所なきが如し。人に身有るも亦是の如く、常に飢渴寒熱の爲に逼まらるること、亦瘡の發するが如く、衣被・飮食・溫煖を以て適はしむるは、藥を瘡に塗るが如し。愚癡の人の如きは、藥を貪るが爲の故に、用ひて瘡を除かず。若し其の瘡なければ藥は亦用なし。諸佛は身を以て瘡と爲し、身瘡を捨放したまふが故に、亦報藥を受けず、是を以ての故に大福ありと雖も、亦報を受けざるなり。

【經】散ずる所の蓮華は、東方の恒河沙等の如き諸佛の世界に滿てり。

【論】問うて曰く、華は少くして、世界は多し、云何にして滿つや。

答へて曰く、佛は神通力の故に、上の八種の如きは、自ら恣まゝに變化したまふ。法の大なるを能く小ならしめ、小なるを能く大ならしめ、輕きを能く重からしめ、重きを能く輕からしめ、自在にして礙なく、意に隨つて到る所、能く大地を動かし、願ふ所を能く辦ず。諸の大聖人は、皆是の八種の自在を得たまふ。是の故に佛は能く小なる華を以て、東方の恒河沙等の如きの世界に滿たし、又復以て衆生に、未來の福報は、此の少華もて東方世界に滿たすが如くなるを示したまふ。又東方の菩薩に勸めて言はく、「福を佛田の中に植ゑて、得る所の果報も亦此の華の無量の土に彌滿するが如し。汝遠く來ると雖も、應當に歡喜すべし。此の大福田に遇うて果報無量なり」と。

【經】一一の華の上に、皆菩薩あり、結跏趺坐して六波羅蜜を說きたまふ。此法を聞く者は、畢ず阿耨多羅三藐三菩提に至る。

汝當に諸の功德を集めて衆生を敎化し、共に涅槃に入るべし。汝は未だ金色の身・三十二相・八十種の隨形好・無量の光明・三十二業を得ず。汝今始めて一の無生の法門を得たるのみ、便ち大喜すること莫れ」と。是の時に、菩薩、諸佛の敎誨を聞いて、還つて本心を生じ、六波羅蜜を行じ、以て衆生を度す。是の如き等、初めて佛道を得たる時、是の佐助を得るなり。　又佛初めて道を得たまふ時、心に自ら思惟したまはく、「是の法は甚深なり、衆生は愚蒙にして福薄し、我も亦五惡世に生す、今當に云何かすべき」と。念じ已つて、「我當に一法の中に於て、三分と作し、分つて三乘と作して、以て衆生を度せん」と、是の思惟を作す。時、十方の諸佛は皆光明を現はして、讃じて言く、「善い哉、善い哉、我等も亦五惡世の中に在りて、一法を分つて三分と作し、以て衆生を度せり」と。是の時、佛は十方の諸佛の語聲を聞きて、即ち大に歡喜し稱へて、「南無佛」と言へり。是の如く、十方の佛は處處に勸助し、爲に大利を作したまふ。恩の重きことを知りたまふが故に、華を以て十方の佛を供養したまへり。最上の福德にして、此の德に過ぎたるは無し。何となれば是の華は、寶積佛の功德力が生じたる所のものにして、是れ水に生じたる華に非ず、普明は是れ十住法身の菩薩にして、此の華を送り來つて、釋迦牟尼佛に上つる。釋迦牟尼佛は、十方の佛は是れ第一の福田なることを知りたまふが故に、以て供養したまふ、是の福は倍多せり。何となれば佛自ら佛に供養したまふが故なり。佛法の中に、四種の布施あり。一に施者は清淨にして、受者は不淨なるもの、二に施者は不淨にして、受者は清淨なるもの、三に施者も清淨、受者も亦淨なるもの、四に施者も不淨、受者も不淨なるものなり。今東方の諸佛に施したまふは、是れ二つながら倶に清淨にして、是の福は最も大なり、是を以ての故に佛は自ら十方の佛を供養したまふ。

問うて曰く、一切の聖人は、報果を受けず、後、更に生ぜず。云何なれば「是の施福は最も大なり」と言ふや。

答へて曰く、佛は無上にして、三世の十方の天地の中に、佛に過ぐる者なしと雖も、而も供養を行ひたまふ。供養に上中下あり。己より下なる者に、而も之に供養するは、是れ下の供養なり。己に勝れたるを供養するは、是れ上の供養なり。己と等しき者を供養するは、是れ中の供養なり。諸佛の供養は是れ中の供養なり。[一]大愛道比丘尼の如きは、五百の阿羅漢の比丘尼と與に、一日中に、一時に涅槃に入れり。是の時、諸の三道を得たる優婆塞は五百の床を擧げ、四天王は佛の乳母たる、大愛道の床を擧げ、佛自らは前に在つて香鑪を擎げ、香を燒いて供養したまへり。佛、比丘に語りたまはく、「汝等は我を助けて乳母の身を供養せよ」と。爾の時に諸の阿羅漢、比丘は各各神足の力を以て、摩梨山の上に到り、牛頭栴檀香の薪を取り、佛を助けて積と作す、是を下の供養と爲す。是を以ての故に果を求めずと雖も、而も等しき供養を行ひたまふ。

復次に、唯佛のみ應に佛を供養すべし、餘人は佛の德を知らず、偈に說くが如し。

『智人は能く智を敬ふ、智、論ずれば則ち智、喜ぶ、智人は能く智を知る、蛇の蛇足を知るが如し。』

是を以ての故に諸佛一切智は、能く一切智を供養したまふ。

復次に、是の十方の佛は、世世に、釋迦牟尼佛を勸助したまへり。[二]七住の菩薩の如きは、諸法は空にして、所有無く、不生不滅なりと觀ず。是の如く觀じ已つて、一切世界の中に於いて、心著せず、六波羅蜜を放捨して、涅槃に入らんと欲す。譬へば人の夢の中に、筏を作つて、大河の水を渡るに、手足疲勞して患厭の想を生じ、中流の中に在りて夢は覺め已り、自ら念じて言く、「何許の河かありて而も渡る可き者かある」と。是時に勤むる心を都て放つが如し、菩薩も亦是の如く、七住の中に立ちて、無生法忍を得、心行皆止みて、涅槃に入らんと欲す。爾時に、十方の諸佛は皆光明を放ちて菩薩の身を照し、右手を以て其の頭を摩で語りて言はく、「善男子よ、此心を生ずること勿れ、汝、當に汝が本願を念じて、衆生を度せんと欲すべし。汝は空を知ると雖も、衆生は解せず。

【一】大愛道比丘尼。瞿曇彌。或は摩訶波闍波提・の譯名なり。佛の養母。第二卷註參照。

【二】七住。菩薩五十二位の中、十住の中、不退位と名く。

ず。若し是の如くならば何ぞ問訊を用ひん。

答へて曰く、世界の法に隨ふが故に、人の法の問訊を受く、遣はして問訊するにも、亦た人の法を以てす。

【經】千葉の金色の蓮華は上に說くが如し。

爾の時に釋迦牟尼佛は是の千葉の金色の蓮華を受け已つて、東方の恒河の沙の如き等の諸の世界の中に佛に散じたまふ。

【論】問うて曰く、佛には勝るもの無し。今の如きは何を以ての故に、東方の諸佛に向つて、華を散じて供養するや。佛初めて道を得たまふ時の如きは、自ら念じたまはく、「人、尊ぶ所なければ則ち事業成らず。今十方の天地に、誰か尊び事ふ可き者ぞ。我、師として之に事へんと欲す」と。此の時に梵天王等の諸天、佛に白さく、「佛は無上なり、佛に過ぐる者なし」と。佛も亦自ら天眼を以て、三世十方の天地の中を觀じたまふに、佛に勝るゝ者なし。心に自ら念じて言はく、「我は摩訶般若波羅蜜を行じて、今自ら佛と作ることを致す。是れ我が尊ぶ所にして、卽ち是れ我が師なり。我當に是の法を恭敬し供養し尊び事ふべし」と。譬へば、樹あり、名けて好堅と爲すもの ゝ如し。是の樹は地中に在ること百歲にして、枝葉具足し、一日に出生し、高さ百丈なり。是の樹出で已つて、大樹を求めて、以て其の身を蔭らさんと欲す。是の時林中に神あり、好堅樹に語つて言はく、「世の中に汝より大なる者なし。諸樹は皆當に汝が蔭の中に在るべし」と。佛も亦是の如く、無量阿僧祇劫、菩薩地の中に在り、生れて一日、菩提樹の下の金剛坐處に於て坐し、實に一切諸法の相を知り、佛道を成ずることを得たまふ。是の時に自ら念じたまはく、「誰か尊び事へ、以て師と爲す可き者ぞ、我れ當に承事し恭敬し供養すべし」と。時に梵天王等の諸天は、佛に白して言さく、「佛は無上なり、佛に過ぐる者なし」と。いま何を以ての故に、復た東方の諸佛を供養したまふや。

答へて曰く、人は病は差ゆと雖も、未だ平復することを得ず。是を以ての故に「興居輕利なりや」と問ふ。

問うて曰く、何を以ての故に、「氣力あり安樂なるや不や」と言ふや。

答へて曰く、人の病差ゆる有つて、能く行歩し、坐し、起つと雖も、氣力未だ足らざれば、造事し、施爲し、輕きを携へ、重きを擧ぐること能はざるが故に、氣力を問ふなり。人の病は差ゆること有りて、能く重きを擧げ輕きを携ふと雖も、而も未だ安樂を受けざるあり。是の故に「安樂なりや」不やを問ふなり。

問うて曰く、病なく力あるに、何を以てか未だ安樂を受けざるや。

答へて曰く、人の貧窮し恐怖し、憂愁する有れば、安樂を得ず。是を以ての故に「安樂なりや不」やを問ふ。

復次に、二種の門訊の法あり。身を問訊すると、心を問訊するなり。若し「少惱・少患・興居輕利にして氣力ありや」と言はゞ、是れ身を問訊し、若し「安樂なりや不や」と言へば、是れ心を問訊するなり。種種内外の諸病を名けて身病と爲し、婬欲・瞋恚・嫉妬・慳貪・憂愁・怖畏等の種種の煩惱・九十八結・五百纏・種種の欲願等を名けて心病と爲す。是の一一の病を問訊するが故に、「少惱・少病・興居輕利にして氣力あり安樂なりや不や」と言ふなり。

問うて曰く、人の問訊するは則ち爾るべし、諸天すら尙ほ此の如くには問訊すべからず、何に況んや佛に於てをや。

答へて曰く、佛身に二種あり。一には神通變化身、二には父母生身なり。父母生身は人の法を受くるが故に天に如かず、是の故に應に人の法の如く問訊すべし。

問うて曰く、一切の賢聖は心に著する所なく、身を貪らず、壽を惜まず、死を惡まず、生を悦ば

たまひ、世人問訊すれば佛も亦問訊したまふ。佛は人中に生れては、人の法を受け、寒熱生死は人と等し、問訊の法も亦應に等しかるべし。復次に、世界の中の、大貴と大賤とは應に相ひ問訊すべからず、佛の力は等しきが故に、應に相ひ問訊すべし。復次に、是の多寶世界は淸淨に莊嚴し、佛身の色像・光明も亦大なり。若し問訊せずんば、人は輕慢なりと謂はん。又復た佛の世界の身色光明は種種勝れたりと雖も、智慧・神力は倶に等しくして異なること無きことを示さんと欲す。是の故に問訊す。

問うて曰く、何を以てか「少惱・少患なりや不や。」と問ひたまふや。

答へて曰く、二種の病あり。一には外の因緣の病、二には內の因緣の病なり。外とは、寒熱・飢渴・兵刄・刀杖・墜落・𡍩壓なり。是の如き等の種種の外患を名けて惱と爲す、內とは、飮食を節せず、臥起の常なきの四百四病なり。是の如き等の種種を名けて內病と爲す。此の如きの二病は、身に有れば皆苦なり。是の故に「少惱・少患なりや、不や。」と問ひたまふ。

問うて曰く、何を以てか「惱無く、病無きや」と問はずして、「惱少なく、患少なきや」と問ふや。

答へて曰く、聖人は實に、身は苦の本にして、病まざる時なきことを知りたまふ。何となれば是は四大合して身と爲る、地水火風の性は相宜しからず、各各相害すること、譬へば疽瘡の痛まざる時なく、若し藥を以て塗れば、少しく差やすことを得べきも、而も愈やすべからざるが如し。人身も亦是の如く、常に病みて、常に治す。治するが故に活きることを得、治せざれば則ち死す。是を以ての故に「惱なく、病なきや」と問ふことを得ず、外患には常に風雨・寒熱あつて惱を爲すが故なり、復た身に威四儀なる、坐・臥・行・住あり。久しく坐すれば極めて惱み、久しく臥し、久しく住し、久しく行くも皆惱む。是を以ての故に「惱少なく、患少なきや」と問ふなり。

問うて曰く、少惱少患なりやを問へば則ち足れり、何を以てか復「興居輕利なりや」と言ふや。

一面に立つや。

答へて曰く、來る爲の故には行くべからず、恭敬供養の爲の故には臥すべからず、此の事は明め易し、何ぞ問ふに足らんや。問ふべきときには或は坐し、或は立つ。坐することは供養に於ては重んぜず、立つは恭敬供養するの法なり。　復次に、佛法の中にては諸の外道の出家、及び一切の白衣は來つて佛の所に到るや皆坐せり。外道は他方にして、佛を輕んずるが故に坐し、白衣は客の如し、是の故に坐せり。一切の五衆は身心、佛に屬す、是の故に立つなり。若し道を得たる諸の阿難漢、舍利弗・目連・須菩提等の如きは所作已に辦ぜり、是の故に坐することを聽す。餘は、三道を得と雖も、亦坐することを聽さず。大事未だ辦ぜず、結の賊未だ破せざるが故なり。譬へば王臣の大に功勳あるが故に、坐することを得るが如し。是の諸の菩薩の中に、白衣ありと雖も、遠くより來つて、佛を供養したてまつるを以ての故に立つ。

【經】佛に白して言さく、「寶積如來、問を致す、世尊、少惱・少患・興居輕利にして氣力あり、安樂なりや不や。又、此の千葉の金色の蓮華を以て、世尊に供養す」と。

【論】問うて曰く、寶積佛は一切智なり、何を以てか方に釋迦牟尼佛に、「少惱・少患・興居輕利に氣力あり、安樂なるや不や」と問訊するや。

答へて曰く、諸佛の法は爾なり、知つて故らに問ひたまふ。毘尼の中にあるが如し。[一〇]達貳迦比丘、赤色の瓦窟を作れり。佛見已つて、知つて故らに阿難に問ひたまはく、「此を作れるは何物ぞや」と。阿難、佛に白さく、「是は陶家の子なり、出家して達貳迦と字く、小なる草舍を作るに、常に放牛の人の爲に壞らる。三たび作つて三たび破る。是故に此の瓦舍を作る」と。佛阿難に語げたまはく、「此の瓦窟を破れ。何となれば、外道の輩當に言ふべし。佛大師在す時、漏處の法を出す」と。是の如き等、(佛は)處處に知つて故らに問ひたまへり。復次に、佛は一切智なりと雖も世界の法に隨ひ

【一〇】達貳伽(Dhaniya)。

養す。法華經の中の藥王菩薩の如きは、佛に從つて一切に變現する色身三昧を得て、是の思惟を作さく、「我、當に云何に佛及び法華三昧を供養すべきか」と。即時に飛んで天上に到り、三昧の力を以て、七寶の華・香・旛・蓋を雨らし、佛を供養したてまつる。三昧より出で已つて、意に猶足らず、千二百歲に於いて衆香を服食し、諸の香油を飲み、然る後に天の白氎を以て、身に纏ひ而して燒き、自ら誓を作して言く、「我が身の光明をして、八十恒沙等の佛の世界を照さしめよ」と。是の八十恒河沙等の世界の中の諸佛讃して言く、「善い哉、善い哉、善男子よ、身を以て供養す。是を第一の勝と爲す。國城妻子を以て、供養するに百千萬倍す、譬喩を以て比と爲す可らず、千二百歲に於て身を然すとも滅せず」と。復次に、是の佛を供養したてまつれば、無量の名聞・福德・利益を得、諸の不善の事は、皆悉く滅除し、諸の善根は增長することを得、今世、後世、常に供養の報を得、久しくして後、佛と作ることを得。是の如く佛を供養したてまつれば、種種の無量の利を得るなり、是を以ての故に諸の菩薩は佛を供養したてまつる。

【經】諸の華香・瓔珞・末香・澤香・燒香・塗香・衣服・旛蓋を持して、釋迦牟尼佛の所に向ひ、到り已つて、頭面に佛の足を禮し、一面に立てり。

【論】問うて曰く、應に禮すと言ふべし。何を以てか「頭面に足を禮す」と名くるや。

答へて曰く、人身の中、第一に貴き者は頭とす。五情の著く所にして最も上に在るが故なり。足は第一に賤し。不淨の處を履み、最も下に在るが故なり。是の故に貴き所を以て、賤しき所を禮するは、貴び重んじ供養するが故なり。復次に、上中下の禮あり。下は揖し、中は跪き、上は稽首す。頭面に足を禮するは、是れ上の供養なり。是を以ての故に、佛は毘尼の中に、「下座の比丘は、兩手もて、上座の兩足を捉へ、頭面を以て禮せよ」と。

問うて曰く、四種の身儀は若くは坐し、若くは立ち、若くは行き、若くは臥す。何を以ての故に

問うて曰く、大なる者は應に行くべし、小なる者は何を以てか能く來るや。

答へて曰く、功德に在つて大小に在らず。若し功德の利を失して、不善の法を行はゞ、老たりと雖も而も小なり。若し功德の利ありて、善法を行はゞ小なりと雖も而も大なり。　復次に、此の小なる者遠く來れば、人見て則ち歎ずらく、「小にして能く爾も法の爲に遠く來る」と。　亦佛法は小大皆、奉行することを得ることを顯はす。外道の法の中には、婆羅門は其の法を行ずることを得るも、婆羅門に非ざれば行ずることを得ず。佛法には大もなく小もなく、內もなく、外もなく、一切皆修行することを得。譬へば藥を服するは、病を除くを以て主と爲し、貴賤大小を擇ばざるが如し。

【經】皆東方の諸佛を供養し、恭敬し、尊重し、讃歎す。

【論】問うて曰く、若し皆東方の諸佛を供養せば、諸佛は甚だ多し。何の時か當に(供養を)訖つて、此の間に來ることを得べきや。

答へて曰く、是の諸の菩薩は、人天の法による供養を作すに非ず、自ら菩薩の供養の法を行ず。菩薩の供養の法は、身、禪定に入つて、其の身を直進し、其の身邊より無量の身を出し、種種の供養の身を化作して、諸佛の世界に滿たすなり。譬へば龍王の行く時は、身より水を出し、普ねく天下に雨らすが如し。

問うて曰く、此の諸の菩薩は釋迦牟尼佛に詣らんと欲す、何を以てか中道にして諸佛を供養するや。

答へて曰く、諸佛は第一の福田なり。若し供養すれば大なる果報を得。譬へば人の廣く田の業を修するは多く、穀を得る爲の故なるが如し。諸の菩薩、諸佛を見て供養すれば、佛たる果報を得、是の故に供養するなり。　復次に、菩薩は常に佛を敬ひ重んずること、人の父母を敬ひ重ずるが如し。諸の菩薩は佛の說法を蒙り、種種の三昧、種種の陀羅尼、種種の神力を得。恩を知るが故に廣く供

【論】問うて曰く、是の普明菩薩は大力神通の故に、應に來り能ふべし。是の出家、在家の菩薩、及び童男・童女は云何にして自ら致すや。多寶世界は最も東邊に在りて、道理は悠遠なり。是れ自ら力を用ゐて行くや、これ寶積佛の力となすや。是れ普明菩薩の力なりや。これ釋迦牟尼佛の力なりや。

答へて曰く、盡く是れ四種の人の力なり。是の出家・居家の菩薩は、或は、是れ不退にして五通を成就せる菩薩なり、四如意足あつて、好く先世に釋迦牟尼佛の因緣を修め、亦た自ら己が力を用ゆ。亦是れ普明菩薩の力なり。何となれば是の中の力勢薄き者は、是の普明菩薩の力の故に、來るを得るを以てなり。轉輪聖王が飛んで天に上る時には、四種の兵及び諸の宮觀・畜獸一切皆飛ぶが如し。轉輪聖王は功德大なるが故に、能く一切をして隨つて飛び從はしむるなり。此も亦是の如く、力勢薄き者は普明菩薩の力を以ての故に、皆亦來ることを得るなり。　亦是れ寶積佛の力、及び釋迦牟尼の光明、之を照す「に依る」。若し自ら力なきも、但だ釋迦牟尼佛の光明、之を照せば亦應に能く來り能ふべし。何に況んや三あるをや。

問うて曰く、是の普明菩薩は何ぞ獨り來らずして、多く衆人を將ゆるや。

答へて曰く、翼從するは宜しきところなるが故なり。譬へば國王の出づる時は、必ず營從あるが如し。復次に、是の普明菩薩及び釋迦牟尼佛は、因緣ある人なるが故なり。所以いかんとなれば彼の大衆の中、二衆は共に來るを以てなり。是の故に知る。因緣ある者は來り、因緣なき者は住まることを。

問うて曰く。是菩薩は、何を以ての故に、諸の在家、出家、童男、童女と倶に來るや。

答へて曰く、佛弟子の七衆は、比丘と比丘尼と學戒尼と沙彌と沙彌尼と優婆塞と優婆夷となり。優婆塞と優婆夷は是れ居家、餘の五衆は是れ出家なり。出家と在家との中に、更に二種あり。若くは大、若くは小なり。小なるものは童男童女にして、餘の者は大となす。

婆世界の中の菩薩は近づき難し」と言ふや。

答へて曰く、實に言ふ所の如し。但だ多寶世界の中の菩薩は、遠く來つて、此の世界を見るに、石沙は穢惡にして如かず、菩薩の身は小にして、一切の衆事も皆亦如かざるを以て、必ず輕慢を生ぜん。是の故に佛は、「一心に敬愼せよ、彼の諸の菩薩は近づき難し」と言ふ。　復次に、樂處に生ずる人は、多く勇猛ならず、聰明ならず、智慧少なし。鬱怛羅衞の人は、大樂なるを以ての故に、出家する無く戒を受くるなきが如し。諸天の中も亦爾なり。是の娑婆世界の中は、是れ樂の因緣少なく、三惡道老病死あり、土地は自活の法難し。是を以ての故に厭心を得ること易く、老病死を見ては至心に大に厭患し、貧窮の人を見ては先世の因緣の致す所を知りて心に大厭を生ず。是を以ての故に智慧ありて根利なり。彼の間の菩薩の七寶の世界には、種種の寶樹あり、心に飲食を念ずれば、意に應じて卽ち得。是の如きは厭心を生ずること難し。是故に智慧は大いに利なること能はず。譬へば利刀を好き飲食の中に著けんに、刀は便ち垢を生ず。飲食は好しと雖も、而も刀の與めに相宜しからず。若し石を以て之を磨き、脂灰をもて瑩治すれば、垢は除いて、刀は利となるが如し。是の菩薩も亦是の如く、雜世界の中に生ずれば、利智にして近づき難し。人は少小より勤苦すれば、多く能くする所あり、亦多く堪ふ所ある如し。又馬を養うて乘らざれば、則ち任ふる所なきが如し。　復次に、是の娑婆世界の中の菩薩は、方便多きが故に近づき難し、餘處は爾らず。佛說きたまふが如く、「我自ら宿世を憶念するに、一日に人に千の命を施し、衆生を度するが故に、諸の功德、六波羅蜜、一切の佛事、具足すと雖も、而も佛と作らず、恒に方便を以て衆生を度脫す」と。是の事を以ての故に、是の娑婆世界の中の菩薩には近づき難し。

【經】爾の時に普明菩薩は、寶積佛より、千葉の金色の蓮花を受け、無數の出家・在家の菩薩及び諸の童男童女と倶共に發引す。

提の大導師と爲れり。彼の時に一比丘尼あり、年百二十歳なり、此の比丘尼は年少の時、佛を見たてまつれり。優波毱來つて其舍に入り、佛の容儀を問はんと欲し、先づ弟子を遣はす。弟子、比丘尼に語るらく、「我が大師、優波毱來つて汝に見え、佛の容儀を問はんと欲す」と。是の時比丘尼は、鉢を以て麻油を盛り滿て、戶扇の下に著け、之を試みて其の威儀の詳審なるや不やを知らんとす。優波毱入りて徐ろに戶扇を排するに麻油少しく棄ぼる。坐し已つて比丘尼に問ふ、「汝は佛を見たてまつるや不や。容儀は何に似たまひしや。我が爲に之を說け」と。比丘尼答ふらく、「我は爾の時、年少にして、佛の來つて聚落に入りたまふを見る。衆人言く、佛來りたまふと。我も亦た衆人に隨つて、出でて光明を見、便ち禮するとき、頭上の金釵地に墮ちて、大闇林の下に在り、佛の光明之を照して、幽隱皆見え、卽時に釵を得たり。我是より後、乃ち比丘尼と作れり」と。優波毱更に問ふ、「佛の世に在したまふ時の比丘の威儀禮法は何如」と。　答へて曰く、「佛の在せし時、[九]六群の比丘は、無羞無耻にして最も弊惡なれども、威儀法則は汝に勝れたり。今日何を以てか之を知る。六群の比丘は、戶に入るに油をして棄ぼれしめず、此の弊惡なりと雖も、比丘の儀法を知り、行住坐臥法則を失はず。汝は是れ六神通の阿羅漢なりと雖も、彼に如かざるなり」と。優波毱は是の語を聞いて、大に自ら慚愧す。是を以ての故に、「一心に敬愼せよ」と言ふ。一心に敬愼するは善人の相なり。

復次に、何を以ての故に、「一心に敬愼せよ、是の菩薩は、勝り難く、及び難く、破り難く、近づき難し」と言ふや。譬へば大師子王の、勝ち難く破り難きが如く、亦た白象王及び龍王の如く、大火炎の如く、皆近づく可きこと難し。是の菩薩は大福德智慧力の故に、若し人勝たんと欲し、破らんと欲するも、是れ得べからず、正に自ら破る可し。是の故に「近づき難し」と言ふなり。

問うて曰く、一切の大菩薩は皆大功德・智慧・利根にして、一切近づき難し、何を以てか獨り、「婆

【九】六群比丘。佛在世に六人の惡比丘あり。多く非威儀をなす。
Nanda 喜
Upananda 近喜
Punarvasu 滿宿
Chanda 樂欲
Aśvaka 馬師
Udāyi 出現

復次に、蓮華に三種あり、一には人華、二には天華、三には菩薩華なり。人華は、大蓮華にして、十餘葉なり。天華は百葉、菩薩華は千葉なり。彼の世界の中に、多く金色の光明の千葉の蓮華あり。娑婆世界の中にも、化華は千葉ありと雖も、水に生ずる者なし。是を以ての故に、是の蓮華の千葉にして金色なるを遣はすこと、上の舌相の中に說くが如し。

問うて曰く、佛は何を以てか普明をして、華を以て佛の上に散ぜしめたまふや。

答へて曰く、供養の法として、華香旛蓋は、旛蓋は上ぐべく、乾香は燒くべく、濕香は地に塗るべく、末香及び華は散ずべし。

問うて曰く、何を以てか供へ奉つるのみならずして、而も自ら上に散ずるや。

答へて曰く、手づから自ら供養するは是れ身業なり。軟言にて問訊するは是れ口業なり。能く身口の業を起すは是れ意業なり。是の三業に功德を得ること牢固なれば、佛道の與めに因緣と作る。

問うて曰く、何を以てか「汝當に一心に敬愼すべし、娑婆世界の中の諸の菩薩は及び難く勝り難し」と言ふや。

答へて曰く、佛・辟支佛・阿羅漢・一切の諸の賢聖は、皆一心に敬愼す。魔若くは魔民、及び內身の結使、種種の先世の罪報は皆是れ賊なり。此の諸の賊に近づくが故に、應に一心に敬愼すべし。譬へば賊の中に入り行くに、自ら愼み護らざれば、賊の爲に得らるゝが如し。是を以ての故に、「一心に敬愼し、以て彼の界に遊べ」と言ふ。

復次に、人の心は多く散ずるを以て、狂へるが如く、醉へるが如し。一心に敬愼するは、則ち是れ諸の功德の初門なり。心を攝し禪を得れば便ち實智慧を得。實智慧を得れば便ち解脫を得、解脫を得れば便ち苦を盡すことを得。是の如き事は皆一心より得るなり。佛の般涅槃の後一百歲にして一比丘あり、優波毱と名くるものゝ如きは、六神通を得たる阿羅漢にして、爾の時世に當つて閻浮

【八】優波毱（Upagupta）。一般に優波鞠多とす。阿育王の師。無相佛と稱せらる。

ことを得て、肉眼も更に明となりき。　復次に、佛は功德已に滿ち、更に須ゐる所なしと雖も、弟子も教化する爲の故に、之に語りて言はく、「我も尙ほ功德を作す、汝云何んぞ作さざるや」と。伎家の百歲の老翁にして舞ふが如し。有る人之を呵して言く、「老翁年已に百歲なり、何ぞ是の舞を用ふるや」と。翁答へて、「我は舞を須ゐず、但だ子孫に敎へんと欲するが故のみ」と。佛も亦た是の如く、功德滿つとも雖も、弟子に功德を作すことを敎へんが爲の故に、供養を作したまふなり。

問うて曰く、若し爾りとせば佛は何を以てか自ら遙に釋迦牟尼佛の上に(華を)散ずることなくして、而も人を遣はして供養したまふや。

答へて曰く、此の間の諸の菩薩は、普明を信ずるが爲の故なり。　復次に、佛の遣はしたまふ所の使は。水火兵毒百千種の害も終に傷ふこと能はず。道里懸に遠し、安隱ならしめんと欲するが故なり。

問うて曰く、何故に好寶・深經、若くは佛・菩薩の　寶[七]を以て信と爲さずして、蓮華を以てするや。蓮華は小物なり、何ぞ信と爲すに足らんや。

答へて曰く、佛は物を須ゐたまはず。佛寶・天寶すら尙亦た須ゐず、何に況んや人寶をや。須ゐざるを以ての故に遣はさず、亦佛は、自ら等しく有したまふを以ての故に遣はさず、深經も亦爾なり。　復次に、諸經は佛に於ては、則ち甚深なること無し。甚深の稱は凡人より出づ。凡人の疑ふ所は佛に於て礙ふること無く、凡人の難しとする所は佛は皆之を易しとしたまふなり。　復次に、華香は清妙にして供養を爲すに宜し。人の獻贈には、必ず異物を以てするが如し。

問うて曰く、何の故に正に蓮華を以てし餘物を以てせざるや。

答へて曰く、供養には唯だ華・香・旛・蓋を以てす。華に二事あり、色あり、香あり。

問うて曰く、餘の華も亦た香あり色あり、何の故に唯だ蓮華を以て供養するや。

答へて曰く、華手經の中に說くが如し、「十方の佛は皆華を以て、釋迦文佛を供養したまふ」と。

【七】 割註あり。「言く。此寶は諸天の見ざる所にして、能く種種の妙物を出すこと。摩尼珠寶の如くなる故に、佛寶と名く。」とあり。

問うて曰く、諸佛は、力等しく、更に福を求めず、何故に華を以て信と爲すや。

答へて曰く、世間の法に隨つて行ふが故なり。二國の王の力勢同じと雖も、亦た相贈遺するが如し。復次に、善歡の心を示すが故に華を以て信と爲す。世間の法の中にては、使の遠くより來るには、必ず應に信あるべし。佛は世法に隨ひたまふ、是の故に信を致す。復次に、諸佛は法を恭敬するが故に、法に供養し、法を以て師と爲したまふ。何となれば三世の諸佛は、皆な諸法の實相を以て師と爲したまふを以ての故なり。

問うて曰く、何を以てか自ら身中の法を供養せずして他法を供養するや。

答へて曰く、世間の法に隨へばなり。比丘が法寶に供養せんと欲するとき自ら身中の法を供養せずして、餘の法を持ち、法を知り、法を解する者を供養するが如し、佛も亦是の如く、身中に法ありと雖も、餘佛の法を供養したまふ。

問うて曰く、佛の如きは福德を求めず、何を以ての故に供養したまふや。

答へて曰く、佛は無量阿僧祇劫の中より諸の功德を修し、常に諸善を行じたまふ。但だ報を求めずして、功德を敬ふが故に供養を作す。佛在す時の如き、一の盲比丘あり、眼に見る所なし。而して手を以て衣を縫ふ時、針は袵脫せり。便ち言はく、「誰か福德を愛し、我が爲に針を袵するや」と。是の時に佛は其の所に到りて、比丘に語りたまはく、「我は是れ福德を愛するの人なり、汝が爲に針を袵じに來れり」と。是の比丘は佛の聲を識り、疾く起ちて衣を著け、佛の足を禮して、佛に白して言さく、「佛は、功德已に滿ちたまふ、云何なれば福德を愛すと言ひたまふや。」佛、報へて言はく、「我は功德已に滿つと雖も、我は深く功德の恩、功德の果報、功德の力を知る。我れをして一切衆生の中に於て、最第一なるを得せしむるものは、此の功德に由る。是の故に我は愛す」と。佛は、此の比丘の爲に功德を讃え已りて、次に爲に意に隨つて法を說きたまふに、是の比丘は法眼の淨き

【經】佛、普明に告げたまはく、「往かんと欲せば、意に隨へ、宜しく是時を知るべし」と。爾の時に、寶積佛は千葉の金色の蓮華を以て、普明菩薩に與へて之に告げて曰く、「善男子よ、汝此の華を以て釋迦牟尼佛の上に散ぜよ。彼の娑婆世界に生ぜる諸の菩薩には勝り難く及び難し。汝當に一心に彼の世界に遊ぶべし」と。

【論】問うて曰く、佛は何を以てか「往かんと欲せば、意に隨へ、宜しく是の時を知るべし」と言ひたまふや。

答へて曰く、佛は弟子に於ける愛を斷ずるが故なり。弟子の中に於て、心著せざるが故なり。復次に、是菩薩は未だ一切智を得ず、未だ佛眼を得ざるが故に、心中少多の疑ひあり、謂へらく、「釋迦牟尼佛は、功德大にして、益するところ或は勝らん」と。是の故に語りて、「往かんと欲せば意に隨へ」と言へり。　復次に、是の菩薩は遙に釋迦牟尼佛の身の小なるを見たてまつりて、心に小(すこ)しく慢を生じて言はん、「彼の佛は[六]是に如かず」と。故に佛語りたまはく、「汝往いて佛身を觀ること莫れ、世界を念ふこと勿れ、但だ佛の說法を聽け」と。　復次に、是の世界は娑婆世界を離るること極めて遠く、最も東邊に在り、是の菩薩は釋迦牟尼佛の說きたまふ所の諸法の相と、寶積佛の說きたまふ諸法の相と、正に同じきことを聞いて、便ち「世界は遠しと雖も、法相は異ならず」と言つて、大信を增益し、心轉た堅固ならん。　復次に、先世の因緣の故に遠き處に生ると雖も、應に來つて法を聽くべし。譬へば、繩を雀の脚に繫(つな)ぐに、復たび遠く飛ぶと雖も、之を攝むれば則ち還るが如し。　復次に、是の娑婆世界の中の菩薩は、普明が遠く來つて法を聽くを見て、便ち是の念を作さん、「彼は遠くより來れり、況んや我は此の世界の中に生じて、而も法を聽かざらんや」と。是の如きの種種の因緣あり、是の故に佛は、「往かんと欲せば、意に隨へ、宜しく是の時を知るべし」と言へり。

【六】是。寶積佛を指す。

問うて曰く、佛、一人の如きは、一切の三昧の中に自在を得たまふ。何を以てか「菩薩も亦た一切の三昧の中に自在を得」と言ふや。

答へて曰く、二種の三昧あり、一には佛の三昧、二には菩薩の三昧なり、是の諸の菩薩は、菩薩の三昧の中に於て自在を得るも、佛の三昧の中には非ず。諸佛要集經の中に說くが如し。文殊尸利、佛の集りを見たてまつらんと欲せども、到ることを得る能はず、諸佛は各各本處に還りたまひき、文殊尸利、諸佛の集まりたまひたる處に到るに、一の女人あり、彼の佛座に近づいて、三昧に入れり。文殊尸利入りて佛足を禮し已りて、佛に白して言さく、「云何なれば此の女人は佛座に近づくことを得て、而も我は得ざるや」と。佛、文殊尸利に告げたまはく、「汝、此の女人を覺して三昧より起たしめて、汝自ら之に問へ」と。文殊尸利即ち彈指して、之を覺せども而も覺す可らず、大聲を以て喚べども亦覺す可らず。手を捉つて牽けども亦覺す可らず。又神足を以て三千大千世界を動かせども猶亦覺めず、文殊尸利、佛に白して言さく、「世尊よ、我は覺めしむること能はず」と。是の時に、佛、大光明を放ちて、下方の世界を照したまふ。是の中に一菩薩あり、棄諸蓋と名く。即時に下方より出で來りて、佛の所に到り、頭面に佛の足を禮して一面に立てり。佛、棄諸蓋菩薩に告げたまはく、「汝、此の女人を覺ませ」と。即時に彈指するに、此の女は三昧より起てり、文殊尸利、佛に白さく、「何の因緣を以てか、我、三千大千世界を動かせども、此の女をして起たしむること能はざるに、棄諸蓋菩薩は一彈指にして、便ち三昧より起たすや」と。佛、文殊尸利に告げたまはく、「汝は此の女人に因つて、初めて阿耨多羅三藐三菩提の意を發し、是女人は棄諸蓋菩薩に因つて、初めて阿耨多羅三藐三菩提の意を發せり。此を以ての故に汝は覺めしむること能はず。汝は諸佛の三昧の中に於て、功德未だ滿たず。是の棄諸蓋菩薩は三昧の中に自在を得れども、佛の三昧の中には少多は入るも、而も未だ自在を得ざるが故のみ。

我が作なり」と。是の如く、天は因緣の法相を破すること有り。諸佛の實語は因緣の法相を破せざるが故に、「是れ彼の佛の神力なり」と言ふ。

【經】是の時、普明菩薩は寶積佛に白して言さく、「世尊よ、我いま當に往いて、釋迦牟尼佛を見たてまつりて、禮拜し供養し、及び彼の諸の菩薩摩訶薩、尊位を紹ぐ者、皆陀羅尼及び諸の三昧を得て、諸の三昧の中に於て自在を得るを見るべし」と。

【論】問うて曰く、若し諸佛は持戒・禪定・智慧(及び)人を度することみな等しくんば、是の普明菩薩は何を以てか來つて釋迦牟尼佛を見んと欲するや。

答へて曰く、諸の菩薩は、常に佛を見て厭き足るなく、法を聽いて厭き足るなく、諸の菩薩僧を見て厭き足ること無からんことを欲す。諸の菩薩は世間の法に於ては、皆以て厭患し、上の三事に於て、心に厭き足ること無し。[五]手居士の如きは淨居天より來つて、佛を見んと欲し、其の身微細にして沒失すること、譬へば消蘇の如く、地に立つことを得ず。佛、手居士に語りたまはく、「汝麁身を化作して、此の地相を觀よ」と。居士は卽ち佛の言の如く、麁身を化作して、地相を觀念し、頭面に佛足を禮して一面に立てり。佛、居士に問ひたまはく、「汝は幾つの事をか厭ふこと無くして、淨居天に生ぜしや」と。答へて言く、「我は三事を厭ふこと無くして淨居天に生ぜり。一には佛を見たてまつり供養して厭ふこと無く、二には法を聽いて厭ふこと無く、三には僧に供給して厭ふこと無し。佛、閻浮提に在せば四部の衆、常に佛に隨逐して、法を聽き法を問ふが如く、是の我が淨居の諸天も亦常に我に從つて法を聽き法を問ふ」と。聲聞すら猶法を聽いて厭き足ること無し。何に況んや法性身の菩薩をや。是を以ての故に普明菩薩は來つて釋迦牟尼佛を見、及び此の間の諸の菩薩摩訶薩尊位を紹ぐ者、皆な陀羅尼及び諸の三昧を得るを見るなり。先の讚菩薩品の中に說くが如し。

「諸の三昧に於て自在を得」とは、

【五】手居士(Hatthaka)。

中に遍しと見る。是の如き等を身密と名く。語密とは、有人は佛の聲を一里と聞き、有は十里・百千萬億・無數無量にして虛空の中に遍しと聞く。一會の中に或は布施を說きたまふと聞くあり、或は持戒を說きたまふと聞くあり、或は忍辱・精進・禪定・智慧を說きたまふと聞く。是の如く乃至十二部經、八萬の法聚は各各心の聞く所に隨ふ。是を語密と名く。是の時、目連は心に念ずらく、「佛の聲の近遠を知らんと欲す」と。卽時に己が神足の力を以て、無量千萬億佛の世界に至つて而して息ひ、佛の音聲を聞くに、近きが如くして異ならず。息ふ所の世界の其の佛は、大衆と方に食したまふ。彼の土の人は大にして、目連は其の鉢の緣に立てり。彼の佛の弟子、其の佛に問うて言く、「此の人頭の蟲は何所より來り、沙門の被服に著して行くや」と。其の佛報へて言はく、「此人を輕んずること勿れ。此は是の東方の無量の佛界を過ぎて、佛あり釋迦牟尼と名く。此は是れ彼の佛の神足の弟子なり」と。彼の佛、[三]目度伽略子に問ひたまはく、「汝何を以て、此に來るや」と。目連答へて言く、「我は佛の音聲を尋ぬるが故に來つて此に至れり」と。彼の佛、目連に告げたまはく、「汝佛の聲を尋ねて、無量億劫を過ぐとも、其の邊際を得ること能はず」と。復次に、佛は世に出でゝ、衆生の疑を斷ぜんが爲の故に、爲に說法したまふ。此れ難ずべからず。日は何を以てか闇を除くやと問ふべからざるが如し。佛も亦是の如く、佛は何を以ての故に答へたまふやと問ふべからず。

問うて曰く、諸佛は等しきが故に等覺と爲す。今何を以てか稱して、「是れ彼の神力なり」と言ふや。

答へて曰く、吾我・彼・此なく嫉・慢を滅せるを示すが故なり。復次に、世界に天あり、常に尊勝憍慢の法を求むるが故に自ら「天・地・人・物は、是れ我が化作なり」と言ふ。梵天王の如きは諸の梵に謂つて言く、「我汝等を作る」と。[四]毘紐天の言く、「世間に大富貴・名聞の人あるは、皆是れ我が身の威德力の分なり。我は能く世間を成就し、亦能く世間を破壞す。世間の成ると壞るとは、皆是れ

【三】目度迦略子(Maudgal=yāyanaputra)。目連。

【四】毘紐(Viṣṇu)。既註。韋紐と同じ。

卷の第十

初品第十五……「十方菩薩來」釋論の餘

【經】寶積佛、普明に報(こたへ)て言く、「善男子よ、西方の恒河の沙の如き等の世界を度りて、世界あり娑婆と名く。是の中に佛あり、釋迦牟尼と號す。今現在して諸の菩薩摩訶薩の爲に般若波羅蜜を說かんと欲す、是れ其の神力なり」と。

【論】問うて曰く、佛は譬へば、須彌山が大海水の波の爲に、動かされざるが如し。今何を以てか普明に答へたまふや。是れは則ち動相なり。攝心なれば則ち語なし、散心なれば則ち說あり。說法は[一]覺・觀より生ず、覺・觀は麁事なり。佛に此の麁事あるべからず。

答へて曰く、佛は深く禪定に入つて、世事の爲に動かされずと雖も、今大慈悲心を以て、衆生を憐愍し、之が爲に法を說いて疑を斷じたまふ。須彌山王は小風なれば則ち動かすこと能はざれども、若し[二]隨藍風至るときは則ち大に動散するが如し。佛も亦是の如く、大慈悲の風來れば、憐愍の心動き、身を散じて無數として五道に入り、衆生を教化し、或は天身乃至畜生と作りたまふ。復次に、佛は實には動ぜずして常に禪定に入りたまふ。先世の福德の因緣の故に、身邊に聲を出し、物に應ずること響の如く、天の伎樂の自然に聲を發するが如く、又摩尼珠の人の欲する所に隨つて、種種に之を與へ、若し衣被・飲食・醫藥を欲すれば、自ら須(もち)ゆる所を恣にし、自然に皆得るが如し。佛も亦是の如く、其の身邊の諸の毛孔の中より、自然に聲ありて、心に隨つて說法す。是の中にて佛には憶想もなく、亦分別もなし。密迹金剛經の中に說くが如く、佛には三密あり、身密と語密と意密となり。一切の諸の天人は、皆な解せず知らず。一會の衆生あり、或は佛身を、黃金色・白銀色・諸の雜寶色と見る。人あり、佛身を一丈六尺と見、或は一里・十里・百千萬億・乃至無邊無量にして、虛空の

【一】覺・觀、何れも事理を尋求する作用にして覺は麁性にして觀は細性。

【二】隨藍風(Vairambhaka)。劫災時の大猛風。この風によりて萬物破壞す。迅猛風と譯す。

【論】地の動くと、佛身の光明とは、先に說くが如し。

問うて曰く、是の普明菩薩は諸の菩薩の中に於て、最も尊くして第一なり、應に自らその因緣を知るべし。何を以てか佛に問ひたてまつるや。

答へて曰く、是の普明菩薩は大なりと雖も、諸佛の智慧神力を知ること能はず。譬へば月の光は大なりと雖も、日出づれば則ち滅するが如し。是を以ての故に佛に問ひたてまつるなり。　復次に菩薩は常に佛を見たてまつらんと欲して、心に厭き足ること無し。因緣なきすら、尙ほ佛を見たてまつらんと欲す、何に況んや大因緣あるをや。　復次に、是の事は疑ふべからず。譬へば犢子の母に隨ふに未だ恡しむに足らざるが如し。又小王の大王に朝宗するは、法の應に爾るべきが如し。故に諸の大菩薩も亦是の如く、利を得ること大なるが故に、常に佛に隨はんと欲す。是の菩薩は是の事を見て、心に卽ち覺知して、「是れは大事なり、無數無量の世界を見るに、みな相見ることを得ればなり」と。是を以ての故に問ふなり。　復次に、有人の言く、是の菩薩は、自ら神力ありて能く知るも、亦是の釋迦牟尼佛の力にて以て知らしめたまへり。但だ諸の小菩薩は知らざるが爲の故に、佛に問ひたてまつるなり。諸の小菩薩は怖難未だ除かず、佛に問ひたてまつること能はず、是の故に之が爲に問を發せり。是の普明菩薩の(問を)發せるは、其の世界にて諸の小男子小女人と倶にあり。是を以て「小菩薩は」佛に問ひたてまつること能はざることを知りたるが故なり。譬へば大象が能く大樹を剪き、諸の小象をして枝葉を食ふことを得せしむるが如し。是故に佛に、「大德よ、何の因、何の緣ありてか、此の大光明あり、大地震動し、また佛身を見たてまつるや」と問ひたてまつるなり。

たり。病卽ち除愈す。　復た一國の中に一の[26]阿蘭若の比丘あり、大に摩訶衍を讀む。其の國王は常に髮を布き上を蹈んで過さしむ。比丘あり王に語つて言く、「此人は[27]摩訶羅にして多く經を讀まず、何を以てか大に供養すること、是の如くなるや」と。王言く、「我、一日夜半に此の比丘を見んと欲し、卽ち往いて其の住處に到り此の比丘を見るに、窟中に在つて法華經を讀む。一の金色光明の人、白象に騎つて、手を合せ供養するを見る。我轉た近づけば便ち滅す。我卽ち問ふ、大德よ、我來るを以ての故に金色光明の人滅すと。比丘言く、此れは則ち遍吉菩薩なり。遍吉菩薩自ら言く、若し人あり法華經を讀誦せば、我當に白象に乘り來つて之を敎導すべしと。我法華經を誦するが故に[28]遍吉自ら來れり」と。　復た一國あり、一の比丘あり。阿彌陀佛經及び、摩訶般若波羅蜜を誦す。是の人死せんと欲する時、弟子に語つて言く、「阿彌陀佛は彼大衆と倶に來れり」と。卽時に身を動かして自ら歸し、須臾にして命終る。命終の後弟子薪を積んで之を燒き、明日灰の中を見るに舌は燒けず。阿彌陀佛經を誦するが故に佛自ら來りたまふことを見、般若波羅蜜を誦するが故に舌燒く可らず、此は皆今世の現事なり。經中に說くが如くんば、諸佛菩薩の來る者甚だ多し。是の如く處處に、人ありて、罪垢の結薄く、一心に佛を念じ、信淨くして疑はざれば、必ず佛を見たてまつることを得て、終に虛しからざるなり。是の諸の因緣を以ての故に、實に十方に佛あることを知る。

【經】爾の時に、彼の世界に菩薩あり、名けて普明と曰ふ。

【論】菩薩の義は、讚菩薩品の中に已に說くが如し。

問うて曰く、云何なれば普明と名くるや。

答へて曰く、其の明は常に一切世界を照す。是の故に普明と名く。

【經】此の大光を見、地大に動くを見、また佛身を見たてまつりて、寶積佛の所に到り、佛に白して言さく、「世尊、今何の因緣ありてか、此の光明あり世間を照し、地大に震動し、また佛身を見たてまつるや」と。

【二六】阿蘭若（Āranya）。比丘の住處。寺院。
【二七】摩訶羅（Mahallaka）。無知または老と譯す。
【二八】割註あり。「遍吉とは、法華經に名けて普賢と爲す。」とある。

したまふ。仙人の言く、「我は此の中に住することを樂しむ、願くは佛、我に佛髮と佛爪とを與へたまへ。塔を起して供養せん」と。塔は今に現存せり。[二五]人は佛と國を同うして生じてすら、猶遍ねく見たてまつらず、何に況んや異處をや。是の故に十方の佛を見ざるを以て而も無し言ふ可らず。　復次に彌勒菩薩は大慈悲あるも、天宮に在りて此の間に來らず、來らざるを以ての故に、便ち彌勒なしと謂ふ可けんや。彌勒は近くして來らざるすら以て怪しと爲さず、十方の佛は遠し、何ぞ怪しむに足らん。　復次に、十方の佛來りたまはざるは、衆生は罪垢深重にして、見佛の功德を種ゑざるを以てなり、是の故に來りたまはず。　復次に、佛は一切衆生の善根熟し、結使薄らぐを知つて、然して後に來して度したまふ。說くが如し。

『諸佛は、先づ觀じて、人に、一切の方便も度す可らざる有り、或は度し難きあり、或は化し易き(あり)、或は復た遲きあり、或は疾きあるを知りたまひ、或は光明を以てし、或は神足(を以てし)、種種の因緣を以て衆生を度したまふ。逆らひを作さんと欲するもの有れば、佛は愍んで除きたまひ、或は逆らひを作さんと欲するも、佛は遮りたまはず。
剛強にして化し難きには、麁なる言を用ゐ、心柔かくしと度し易きには、軟き言を用ゐたまふ。
慈悲平等の心ありと雖も、時を知て智慧もて方便を用ゐたまふ。』

是を以ての故に、十方の佛は來りたまはずと雖も、無しとは言ふべからず。　復次に、佛の智慧力の方便と神通とは舍利弗等の大阿羅漢、大菩薩の彌勒等すら尙ほ知ること能はず、何に況んや凡人をや。　復次に、諸佛・大菩薩は、時ありて衆生の急難を恐懼して一心に念ずれば、或時には來つて之を度したまふ。大月氏の西、佛の肉髻を住むる處の國の如きは、一佛圖の中に人の癩病を病めるもの有り、遍吉菩薩の像の邊に來り至りて、一心に自ら歸し、遍吉菩薩の功德を念じて、「願くは此病を除きたまへ」と。是の時、遍吉菩薩の像は、即ち右手の寶渠の光明を以て、其の身を摩し

【二五】割註あり。「此の山の下に離越寺あり。離越は隷跋陀と云ふべし。」とある。

味力の如きは、一切衆生を觀じて、皆樂を受くることを見る。實益なしと雖も、慈觀を以ての故に、是の人は無量の福を得。十方佛を想ふことも亦復是の如し。若し實に十方に佛あるを而も「無し」と言はば、十方の佛を破り、無量の重罪を得ん。何となれば實事を破るが故なり。肉眼の人は倶に知らずと雖も、但だ心に信じて「有り」と言はば、其の福は無量なり。若し實に有るを、而も意に「無し」と謂はば、其罪甚だ重し。人は自ら用心して、尙ほ有ることを信ずべし、何に況んや、佛自ら摩訶衍の中に說いて、「實に十方の佛あり、信ぜざらんや」と言ふをや。

問うて曰く、若し十方に無量の諸佛及び諸の菩薩あらば、いま此衆生は多く三惡道の中に墮せり。何を以てか來たりたまはざるや。

答へて曰く、衆生は罪重きが故に、諸佛菩薩は來りたまふと雖も見ず。又法身の佛は、常に光明を放ちて、常に法を說きたまふも、而も罪を以ての故に見ず聞かず。譬へば日出づれども盲者は見ず、雷霆地に振へども聾者は聞かざるが如し。是の如く、法身は常に光明を放ち、常に法を說きたまへども、衆生にして無量劫の罪垢、厚重なるものあれば、見ず聞かざるなり。明鏡・淨水に面を照せば則ち見るに、垢翳不淨なれば則ち見る所なきが如し。是の如く、衆生の心清淨なれば則ち佛を見、若し心不淨なれば則ち佛を見ず。いま實に十方の佛及び諸の菩薩ありて、來りて衆生を度したまふと雖も、而も見たてまつることを得ざるなり。　復次に、釋迦牟尼佛の如きは、閻浮提の中に在りて生れ、迦毘羅國に在したまひ、多く東天竺の六大城に遊行し、有時には飛んで南天竺の[二二]億耳居士の舍に到りて供養を受け、有時には暫らく北天竺の月氏國に來りて[二三]阿波羅羅龍王を降し、又月氏國の西に至つて、女羅刹を降したまへり。佛、彼の石窟の中に在して、一宿したまへるより今に佛影猶在り。人あり中に就いて之を看れば則ち見えず、孔を出づれば、遙に光明相を見る。佛、有る時の如きは、暫らく飛んで罽賓の[二四]隷跋陀仙人の山上に至り、虛空の中に住して此の仙人を降

【二二】億耳(Śroṇa-Koṭikoṭikarṇa)。倶胝と音譯す。
【二三】阿波羅羅龍王(Apalāla)。
【二四】隷跋陀(Revata)。

つ」と言ふも、此れ亦然らず。是を以ての故に應に更に十方の佛あるべし。

復次に、長阿含の中の有經に言く、「鬼神の王あり、北方を守る。衆多の百千萬の鬼神と、後夜に佛所に到り、頭面に佛足を禮し、一面に住し、清淨の光を放つて普ねく祇洹を照し、皆大に明かならしめ、合掌して佛を讃し、此の二偈を說けり。

『大精進の人よ、我歸命したてまつる。佛は二足の中にて尊きこと最上なり、智慧の眼の人にして能く知見したまふ、諸天も此の慧事を解せず。

過去・未來・今の諸佛、一切我皆稽首し禮したてまつる、是の如く我今佛に歸命することは、亦三世の尊を恭敬したてまつるが如し。』

と。是の如く、偈の中に十方の佛あり、鬼神王は三世の佛に稽首し、然る後に別して釋迦文尼佛に歸命す。若し十方に現在の佛なくんば、當に但だ釋迦文尼佛のみに歸命すべく、過去・未來・現在の諸佛と言ふべからず。是故に十方に佛あることを知る。

復次に過去世に無量の佛あり、未來世にも亦無量の佛あり、是れを以ての故に現在にも亦應に無量の佛あるべし。

復次に、若し佛、聲聞法の中に於て、「十方に無數無量の佛あり」と言はば、衆生は當に「佛には遇ふ可きこと易し」と言つて、勤めて〔解〕脫を求めず、「若し此の佛に値はずんば彼の佛に遇ふべし」と。是の如く懈怠して、勤めて度を求めざらん。譬へば鹿の未だ箭を被らざる時は怖畏することを知らず、既に箭を被り已れば、圍を踔えて出づるが如し。人も亦是の如く、老病死の苦あり。唯だ一佛のみありて甚だ遇ふ可きこと難きを聞けば、心便ち怖畏し勤行し精進して、疾かに苦を度することを得ん。是を以ての故に佛は聲聞法の中に於ては、十方に佛ありと言はず、亦無しとも言はず。若し十方に佛あるを、汝「無し」と言はば、無限の罪を得ん。若し十方に佛なくとも、我は「有り」と言ふならば、無量の佛想を生じ、恭敬の福を得ん。何となれば善心の因緣には、福德の力大なるが故なり。譬へば慈心三

以て眼を覆ひ、背て佛を視ず。佛、阿難に語りたまはく、「復た何の因緣をか作さんと欲せんや」と。是の如きの人あり、度する因緣なく、佛を見たてまつることを得ず。是を以ての故に、佛、言はく、「佛に値ふを得ること難きこと、優曇波羅樹の華の如し。譬へば水雨は多くして、處處に得易しと雖も、餓鬼は常に渇して飮むを得ること能はざるが如し」と。汝が言へる、「九十一劫に三劫のみ佛あり」とは、一佛世界の爲の故にして、一切の餘の諸の世界の爲にあらず。「是の處の劫は空にして、佛の出でたまふこと有ること無く、甚だ憐愍す可し」とは、亦是れ此の間の一佛世界にして、一切の餘の諸の世界の爲には非ざるなり。是を以ての故に十方に佛あることを知る。

復次に、聲聞法の中に十方の佛あり、汝自ら解せず。雜阿含經の中に說くが如きは、譬へば大雨連りに注ぐに、渧渧は間無くして數を知るべからざるが如く、諸の世界も亦是の如し。我東方の無量の世界を見るに、成あり、住あり、壞あり、其の數甚だ多くして分別す可らず。是の如くして乃ち十方に至る。是の十方世界の中の無量の衆生に、三種の身苦、老・病・死、三種の心苦、婬・瞋・癡、三種の後世の苦、地獄・餓鬼・畜生あり。一切世界に皆三種の人あり、下と中と上となり。下人は現世の樂に著し、中人は後世の樂を求め、上人は道を求め、慈悲心ありて衆生を憐愍す。(かゝる)因緣ありて、云何ぞ果報なからん。佛の言はく、「若し老・病・死なくんば、佛は世に出でたまはず」と。是人は老病死の苦惱の衆生を見て、心中に願を作さく、「我當に佛と作り、以て之を度脫し、其の心病を拔き、後世の苦を濟ふべしと」と。是の如く、十方の世界に、皆佛の出でたまふ因緣あり。何を以ての故に獨り此間にのみ佛あつて、餘所には無しと言ふや。譬へば人ありて、「木あつて火なし、濕地あつて水なし」と言ふが如し。佛は此の三苦を斷じて、三乘を得せしめんが爲の故に出世し給ふ。一切世界の中に皆此の苦あり、云何んぞ佛なからんや。復次に、「盲人は無量なり、唯だ一醫のみを須

無し」と言ふと雖も、一切十方の世界とは言はず。「世に二の轉輪聖王無し」と言ふと雖も、亦一切の三千大千世界に無しとは言はず、但だ「四天下の世界の中に、二の轉輪聖王なし」と言ふのみ。福を作して、清淨なるが故に、獨り一世に王として諸の怨敵なし。若し二王あらば清淨と名けざるなり。佛に嫉妬心なしと雖も、然も行業は世世に清淨なるを以ての故に、亦一世界に二佛出づること有らず。百億の須彌山、百億の日月を名けて、三千大千世界と爲す。是の如きの十方恒河沙の三千大世界、是を名けて一佛世界と爲す。是中に更に餘佛なし。實に一の釋迦牟尼佛のみなり。是一佛世界の中に常に諸佛の種種の法門、種種の身、種種の因緣、種種の方便を化作し、以て衆生を度したまふ。是を以ての故に多持經の中には「一時に一世界に二佛なし」と(言ひ)十方に佛なしとは言はず。

復次に、汝が言ふが如きは「佛は一事を言ふ、是の佛世尊に値ふこと難し」と、又言はく、九十一劫に、三劫のみ佛あり、餘劫は皆空にして佛なく、甚だ憐愍す可し。佛は此の重罪にして、見佛の善根を種ゑざる人の爲に說いて言く、「佛世には値ひ難し、優曇波羅樹の華の、時時に一たび有るが如し」と。是の如きの罪人は三惡道に輪轉し、或は人天の中に在りて、佛の世に出でまふ時も其の人は見ず。說くが如くんば、舍衛城の中に九億の家あり、三億の家は眼に佛を見、三億の家は耳に佛有りと聞くも而し眼に見ず。三億の家は聞かず見ずと。佛、舍衛に在すこと二十五年、而も此の衆生は聞かず見ず、何に況んや遠き者をや。復次に、佛、阿難とともに舍衛城に入りて乞食したまひき。是の時に一の貧しき老母あり、立つて道頭に在り。阿難、佛に白さく、「此の人は愍むべし、佛應に度したまふべし」と。佛、阿難に語りたまはく、「是人には因緣なし」と。阿難言さく、「佛往いて之に近づきたまはば、此人は佛の相好光明を見て歡喜の心を發し、爲に因緣を作さん」と。佛、往いて之に近づきたまふに、身を廻して佛を背にす。佛、四邊より往けば、便ち四(方)に向つて佛に背き、面を仰げば上に向ひ、佛、上より來りたまへば頭を低くして下に向ひ、佛、地より出でたまへば兩手を

し。

復次に、汝は言ふ、「佛自ら說きたまはく、女人は五事を作すことを得ず、二の轉輪聖王は同時に世に出づることを得ず、佛も亦是の如く、同時に一世に亦二佛なし」と。汝は此の義を解せず、佛經に二義あり、了(解)し易きの義あり、深遠にして解し難きの義あり。佛涅槃に入りたまはんと欲する時、諸の比丘に語りたまふ如く、「今日より應に法に依りて人に依らざるべし、應に義に依りて、語に依らざるべし。應に智に依りて、識に依らざるべし。應に了義經に依りて、未了義經に依らざるべし」と。「法に依る」とは、法に十二部あり、應に此の法に隨ふべく人に隨ふべからず。「義に依る」とは、義の中には好惡・罪福・虛實を諍ふこと無きが故に語は以て義を得べく、義は語に非ざるなり。人、指を以て月を指し、以て惑へる者に示すが如し。惑へる者は、指を視て而して月を視ず。人之に語つて言く、「我指を以て月を指し、汝に之を知らしむ。汝何ぞ指を看て月を視ざる」と。此も亦是の如し。語は義を指さすが爲にして、語は義には非ざるなり。是を以ての故に、語に依るべからず。「智に依る」とは、智は能く籌量して善惡を分別し、識は常に樂を求めて正要に入らず、是の故に識に依るべからずと言ふなり。「了義經に依る」とは、一切智人あるも佛は第一なり。一切の諸の經書の中にて佛法は第一なり。一切衆の中にて比丘僧は第一なり。布施は大富を得、持戒は天に生ずることを得。是の如き等は是れ了義經なり。說法の師の如きは、說法に五種の利あり、一には大富、二には人に愛せられ、三には端正なり、四には名聲あり、五には後に涅槃を得。是を未了義と爲す。云何なれば未了なるや。「施は大富を得」、是を了了にして解く可しと爲せども、說法には財施なし、而も富を得と言ふ。富を得とは、說法の人、種種に施を讚して人の慳心を破り、亦自ら慳を除く。是因緣を以て富を得るなり、是の故に未了と言ふ。

是れは多持經の方便の說にして實義に非ざるなり。是の經の中に佛は、「世に二佛倶に出づること

或は三惡趣・氷・闇・火の地獄に到り、和氣もて寒氷を濟ひ、光明もて闇獄を照し、熱處には涼風を施し、事に隨つて其の苦を救ひ、之を安んじて以て患なからしめ、之を度するに法樂を以てす。』

是の如く種種に方便して、一時に頓に能く十方無量の衆生を度し、衆生を度し已つて、還つて本處に入り、佛の臍の中に住す。爾の時、世尊は日出三昧より起つて、阿難に問ひて言はく、「汝此の三昧の神通力を見るや不や」と。阿難、佛に白さく「唯然なり、已に見たてまつる」と。重ねて佛に白して言さく「若し佛、世に住(いま)さば、一日の中に度したまふ所の弟子は虚空に滿つべし、何に況んや在世八十年をや」と。是を以ての故に、「一佛の功德神力は、無量に現化して十方に異なる佛無し」と言ふなり。　復次に、佛の言ふ所の如くんば「女人は轉輪聖王と作るを得ず、天帝釋・魔天王・梵天王と作るを得ず、佛と作るを得ず、轉輪聖王は一處に並んで治むることを得ず。十力の世尊も亦一世に二佛なし」と。　又佛說いて言はく、「佛の言は虚しからず、世に二佛なし。一法にして値ひ難し。是の佛は世尊なり、無量億劫に時時に一たび有るのみ。是の九十一劫の中、三劫に佛ありき、賢劫の前の九十一劫の初に佛あり、[一七]鞞婆尸と名く。第三十一劫の中に二佛あり、一を[一八]尸棄と名け二を[一九]鞞恕婆附と名く。是の賢劫の中に四佛あり。一を[二〇]迦羅鳩飡陀と名け、二を[二一]迦那伽牟尼と名け、三を迦葉と名け、四を釋迦牟尼と名く。此を除いて餘の劫は皆空にして佛無し、甚だ憐愍すべし」と。　若し十方の佛ありとせば、何を以の故に、餘劫には佛無し、甚だ憐愍す可しと言ふや。

答へて曰く、釋迦文尼佛には無量の神力ありて、能く變化して佛と作り、十方に在して法を說き、光明を放ちて衆生を度したまふと雖も、亦盡く一切衆生を度すること能はず、(そは)有邊に墮するが故なり。則ち未來世には佛なきが故に、然も衆生は盡きず、是を以ての故に應に更に餘佛あるべ

【一七】鞞婆尸。割註ありて、「秦に種種見と言ふ。」とあり。以下、卷四註、鞞婆尸の下の過去七佛を參照せよ。

【一八】尸棄。割註あり。「秦に火と言ふ。」

【一九】鞞恕婆附。割註あり。「秦に一切勝と言ふ。」毘舍浮 Viśvabhu と同じ。

【二〇】迦羅鳩飡陀 (Kraku=cchanda 拘留孫佛と同じ。

【二一】迦那伽牟尼。割註して「秦に金仙人と言ふ。」拘那含牟尼佛 Kanakamuni に同じ。以上に次記の迦葉、釋迦を加えて過去七佛と云ふ。

明滿ち已れば四天下を照し、四天下を照して滿ち已れば、三千大千世界を照し、三千大千世界を照して滿ち已れば十方無量の世界を照す。爾の時に、世尊は臍の邊より諸の寶蓮華を出したまふ。偈に說くが如し。

『靑き光の琉璃の莖、千の葉は黃金色、金剛を華の臺と爲し、琥珀を華の飾と爲す。
莖は軟くして龜曲ならず、其の高さ十餘丈あり。眞靑の琉璃の莖、佛の臍中に在つて立てり。
其の葉は廣くして長く、白光にして妙色を間さみ、無量の寶もて莊嚴せり、其の華に千の葉あり。妙なる華の色は是の如く、佛の臍の中より出でたり。
是の四の華臺の上の、寶座は天日に曜き、座にはおの〳〵坐せる佛ありて、金の山の如く四首の光耀は等しくして一の如し。
四の佛の臍中より、各妙なる寶華出で、華の上には寶座あり、その座におの〳〵佛ありて、
この佛の臍中より展轉して寶華出づ、華と華とに皆座あり、座と座とにおの〳〵佛あり。
是の如く展轉して化して乃ち淨居天に至る。
若し(淨居天までの)近遠を知らんと欲せば、當に譬喩を以て說くべし。
一の大いなる方石あり、縱廣、大山の如し。それを上より放つて下らしむれば、直に過ぎて礙る所なきに、萬八千三百八十有三歲。是の如きの年歲を數へて、爾してすなはち地に到ることを得。是の(如く廣く離れたる)兩(世界)の中間に於て、化佛其の中に滿つ。
其の光の、大いに盛明なること、火と日月とに踰えたり。
有る佛は身より水を出し、亦有る(佛)は身より火を出し、或は復た現に經行し、有は時に靜かに默坐せり。
有る佛は乞食を行じて、此を以て衆生を福とし、或は復た經法を說き、有は時に光明を放ち、

問うて曰く、「世界を多寶と名く」と。寶に二種あり、財寶と法寶となり。何等の寶多ければ、名けて多寶世界と爲すや。

答へて曰く、二種皆有り。又多くの菩薩が、法性等の[一五]諸の寶を照らすこと多きが故に名けて多寶と爲す。是の中に佛あり、寶積と名く。無漏の根・力・覺道等の法寶を集むるを以ての故に名けて寶積と爲す。

問うて曰く、若し爾りとせば一切の佛は皆應に寶積と號すべし。何を以てか獨り彼の佛を稱して寶積と爲すや。

答へて曰く、一切の諸佛は皆此の寶を有すと雖も、但だ彼の佛のみ卽ち此の寶を以て名と爲す。彌勒を名けて慈氏と爲すが如し。諸佛は皆慈ありと雖も、但だ彌勒のみ卽ち慈を以て名と爲す。復次に、寶華佛の如きは生れたまふ時、一切の身邊に、種種の華色の光明ありしが故に、寶華太子と名く。燃燈佛の如きは生れたまふ時、一切の身邊、燈の如くなりしが故に、燃燈太子と名け、佛と作つても亦[一六]燃燈と名けたてまつる。寶積佛も亦是の如く、應に初生の時に當つて、亦諸の寶物生じ、或は地より生じ、或は天より種種の寶の集を雨ふらすが故に、名けて寶積と爲す。

問うて曰く、唯だ釋迦牟尼一佛のみ有り、十方の佛なし。何となれば是の釋迦牟尼佛は、無量の威力、無量の神通あつて、能く一切衆生を度したまひ、更に餘佛なければなり。說くが如くんば、阿難は一心に思惟すらく、「過去の諸佛・寶華・燃燈等は、皆好世に生れたまひ、壽命は極めて長く、能く一切衆生を度したまへり。今釋迦牟尼佛は惡世に生れたまひ、壽命は短し、將に一切の弟子を度すこと能はざる無からんとするや」と。是の如く心に疑へり。佛時に卽ち阿難の心の念ずる所を知りたまひ、卽ち日の出づる時を以て、日出三昧に入りたまふ。爾の時に佛身の一切の毛孔より諸の光明を出すこと、亦た日の邊より諸の光明を出すが如く、其の光は遍ねく閻浮提の內を照し、其の

【一五】割註あり「言く。此寶は大菩薩の有するところ、以て寶冠と爲す。寶冠の中に皆な諸佛を見る。又一切諸法の性を了達す。」

【一六】燃燈。割註あり「丹註に云ふ。晉(錄)にては定光佛と名くるなり」。

此の方を見るは、是れ誰の力なりや。

答へて曰く、是れ釋迦牟尼佛の力なり。彼をして此の間の三千大千世界を見、及び釋迦牟尼佛、並に一切の衆會を見ることを得せしめたまふ。南西北方四維上下も亦復た是の如し。

初品第十五……「十方諸菩薩來」釋論

【經】是の時、東方の恒河沙の如き等の諸佛の世界を過ぎて、其の世界の最も邊に在る世界を多寶と名け、佛を寶積と號したてまつる。今現に在して諸の菩薩摩訶薩の爲に、般若波羅蜜を說きたまふ。

【論】問うて曰く、佛の說きたまふが如くんば、一切の世界は無量無邊なり。云何なれば其の世界の最も邊に在りと言ふや。「最も邊に在り」とは是れ有邊の相に墮す。若し世界に邊有るならば、衆生は盡くべし。何となれば無量の諸佛の一一の佛、無量阿僧祇の衆生を度して、無餘涅槃に入らしめたまはゞ、更に新しき衆生なく故き者は盡くべきが故なり。

答へて曰く、佛經に世界は無量なりと言ふと雖も、此れ方便の說にして、是れ實の敎に非ず。實には[三]神なけれども、方便の故に說いて神ありと言ふが如し。是れ十四の難なり。世界の[四]有邊と無邊とは倶に邪見と爲す。若し無邊ならば、佛に一切智あるべからず。何となれば、智慧普く知つて物として盡さゞる無き、是を一切智と名く。若し世界無邊ならば、是れ盡さゞる所あらん。若し有邊ならば先に說く咎の如し。此の二は倶に邪見なり。何となれば無邊に依つて、以て有邊を破るを以てなり。是の多寶世界は一切世界の邊には非ず。是れ釋迦牟尼佛に因緣ある衆生の應に度す可き者の最も邊に在るなり。譬へば一國の中に最も邊に在るものは、一閻浮提の最も邊に在りとは言はざるが如し。若し無邊ならば、佛は一切智者なるべからず。上の佛の義の中に答ふるが如し。佛の智は無量なりとは、故に當に知るべし。譬へば函大なるが故に、蓋亦大なるが如し。

【三】神。靈魂。
【四】有邊、無邊。限界の有無。

の光を以ての故に、此の間の三千大千世界中の衆生は、皆東方の恒河沙等の如き、諸佛及び僧を見たてまつるなり。彼の間の恒河沙の如き等の世界中の衆生は、皆此の間の三千大千世界中の釋迦牟尼佛、及び諸大衆を見たてまつるなり。南西北方、四維上下も亦復是の如し。

【論】問うて曰く、佛は上に已に多く光明を放ちたまへり。今何を以ての故に復た斯の光を放ちたまふや。

答へて曰く、先に光明を放つには各各事あり。先に說くが如し。今は彼と此との衆會、兩ながら未だ相見ざるを以ての故に、光明神力を以て、彼此の世界の一切の大會をして、兩ながら相見ることを得せしめたまふなり。

問うて曰く、弟子の中の、天眼第一の大阿羅漢なる長老阿泥盧豆の如きは、暫く小千世界を觀見し、諦かに二千世界を觀見す。大辟支佛は暫く二千世界を觀見し、諦かに三千大千世界を觀見す。今一切の人は、云何にして能く東方の恒河沙等の諸佛の世界を見能ふや。

答へて曰く、是れ佛の神力が彼をして見ることを得せしむるなり。衆生の力には非ざるなり。設ひ阿羅漢及び辟支佛等すらも、亦佛の力を以ての故に、見る所限無し。譬へば轉輪聖王、飛行すれば、一切の營從及び諸の象・馬・衆畜は皆隨ひて去るが如し。いま佛の神力の故に、衆生は遠處に在りと雖も、亦相見ることを得るなり。又般舟三昧の力の故に、天眼を得ずと雖も、而も十方を見るが如し。佛の眼耳は無礙なり。亦劫盡き燒くる時、一切衆生は自然に皆禪定を得、天眼天耳を得るが如し。佛の神力を以ての故に、一切衆生をして皆遠く見ることを得せしめたまふも、亦復是の如し。「爾の時に世尊師子座に在して笑ひたまふ。」笑ふことは先に說くが如し、餘の未だ說かざる者を今當に說くべし。

問うて曰く、此の間の衆生の遠く彼の方を見るは、是れ佛の神力なりとせば、彼の間の衆生も亦

千大千世界に滿つ。

【論】問うて曰く、若し佛自ら神力あらば、何を以てか散ずる所の華に因つて變じて臺と爲すや。

答へて曰く、人をして心信して淸淨ならしめんと欲するが故なり。是の人は供養する所のもの、變じて此の臺と成るを見て、大に歡喜す。歡喜に因つての故に、大に福德を得るなり。

【經】是の華蓋瓔珞を以て嚴飾するが故に、此の三千大千世界は皆金色と作り、及び十方の恒河沙等の如き諸佛の世界も、皆亦是の如し。

【論】有人の言く、「轉輪聖王は四世界の主、梵天王は千世界の主、佛は三千大千世界の主なり」と。是の語は實に非ず。是を以ての故に佛の變化したまふ所は、乃ち十方の恒河沙等の諸佛の世界に至る、

【經】爾の時に、三千大千世界及び十方の衆生は、各各自ら念ずらく、「佛は獨り我が爲に法を說きたまひ、餘人の爲にはあらず」と。

【論】問うて曰く、佛は一身を以て、三千大千世界及び十方に示したまふ。今諸の衆生は何を以てか各各に佛は(彼等の)前に在して法を說きたまふを見るや。

答へて曰く、佛に二種の神力あり。一には一處に坐して法を說きたまへども、諸の衆生をして遠處にても皆見、遠處にしても皆聞かしめたまふ。二には佛は一處に在つて法を說きたまふも、能く一一の衆生をして、各自に佛、前に在して法を說きたまふを見せしめたまふ。譬へば日出でて影衆水に現ずるが如し。復次に、衆生は同じからず。有人は佛身の三千大千世界に遍ずるを見て而して淨信を得、有人は各各、佛、前に在して法を說きたまふを見て、心淸淨なることを得て信樂し歡喜す。是を以ての故に、佛は今各各、前に在して爲に法を說きたまふ。

【經】爾の時に世尊は師子座に在して、熙怡して笑ひたまふに、光口より出で遍ねく三千大千世界を照す。此

那陀金を葉と爲し柔軟にして且つ香れり。並に天の樹葉の香を持して佛の所に詣る。

問うて曰く、若し諸天の供養には天華を持つべしとせば、人及び非人は云何にして天華を得ん。

答へて曰く、佛は神足を以て大光明を放ちたまひ、地は六種に震動し、諸天は種種の妙華を雨して三千大千世界に滿ち、以て佛に供養したてまつる。是の人・非人は、或は此の華を取つて以て供養す。　復次に、天竺國の法に諸の好き物を名けて皆な天物と名く。是の人の華・非人の華は天上の華に非ずと雖も、其の妙好なるを以ての故に、名けて天華と爲す。是の故に「人も非人も諸の天華を持す」と言ふ。是れ則ち咎なし。

【經】是の諸の天華、乃至天樹の葉香を以て佛の上に散ず。

【論】問うて曰く、何を以て華を以て佛の身の上に散ずるや。

答へて曰く、恭敬し供養するが故なり。　又佛の光、照したまへば、皆遙かに佛を見たてまつり、心大に歡喜し、佛を供養したてまつるが故に皆諸の華を以て佛の上に散ず。　復次に、佛は三界に於て第一の福田なり、是を以ての故に華を佛の上に散ず。

【經】散ずる所の寶華は、此の三千大千世界の上に於て、虛空の中に在りて、化して大なる臺と成る。

【論】問うて曰く、何を以てか此の臺を化作して、虛空の中に在るや。

答へて曰く、散ずる所の華は少なけれども、而も化して大なる臺となし、以て衆生の因は少なけれども果は多きことを示す。

問うて曰く、何を以ての故に臺は虛空の中に在りて住して、墮落せざるや。

答へて曰く、佛は神力を以て衆生に示して、佛は福田たり、報を得れば失はず、乃至成佛するまで其の福は滅せざることを知らしめんと欲したまへばなり。

【經】是の華臺の邊には、諸の瓔珞、雜色の花蓋を垂れ、五色に繽紛たり。是の諸の華蓋瓔珞は、遍ねく三

淨居天は常に衆生を憐愍して、常に佛を勸請するを以ての故なり。 復次に、佛の法を說きたまふ聲は梵天に至り、佛の道を得たまふ時には、諸天は展轉して唱へ告げて、乃ち淨居天に至る。是を以ての故に初と後とを說いて中を說かざるなり。 復次に、梵天は欲界に近きが故に聞くべく、淨居天は是れ色界の主なり、是の故に應に聞くべし。譬へば門を守る人は客を識り、客其の主に至れば主は則ち之を識るが如く、中間は無事なるが故に說かざるなり。 復次に、二禪は大喜、三禪は大樂にして喜樂放逸なり、是の故に說かず。

問うて曰く、何を以てか「他化自在」と名くるや。

答へて曰く、此の天は他の化する所を奪つて而して自ら娛樂するが故に他化自在と言ふ。

「化自樂」とは、自ら五塵を化して、自ら娛樂するが故に化自樂と言ふ。「兜率」を知足天と名け、「夜摩」を善分天と名け、第二を「三十三天」と名く。最下の天は是れ「四天王」の諸天なり。須彌山の高さは八萬四千由旬にして、上に三十三天の城あり。須彌山の邊に山あり、[10]由犍陀羅と名く。高さ四萬二千由旬なり。此の山に四頭あり。頭に各城あり。四天王各一城に居せり。夜摩等の諸天は七寶の地にして虛空の中に在り。風あり之を持して住せしむ。乃至淨居も亦復是の如し。

是の如きの諸天は佛身の清淨なる大光明を見て、諸の供具・水陸の諸の華を淨持せり。陸地に生ずる華は[11]須漫提を第一と爲し、水中に生ずる華は、青蓮華を第一となす。若しくは樹生の華、若しくは蔓生の華、是の諸の名華は種種の異色種種の香熏あり、各天華を持して佛の所に來詣す。此の諸の華は、色好く香多く、柔軟細滑なり。是の故に此を以て供養の具と爲す。云何なるを天華と爲すや。天華は芬熏して、香氣風に逆ひ、諸天の瓔珞は懸つて佛の上に在り、天の澤香は以て佛の地を塗り、天の末香は以て佛の上に散ず。天の蓮華は青赤紅白なり。何を以て黃無きや。黃は火に屬す。火は水華の宜しき所に非ざるが故なり。天の寶蓮華は瑠璃を莖と爲し、金剛を臺と爲し、[12]閻浮

【一〇】由犍陀羅(Yugandhara)。雙持と譯す。須彌山をめぐる八山の一。

【一一】須漫提(Sumanā)。

【一二】閻浮那陀金(Jambunadasuvarna)。閻浮檀金なり。赤黃色にして紫焰色を帶ぶ。

威德巍巍たり。此神力を以て衆生を感動し、其の信ある者は皆阿耨多羅三藐三菩提に至る。其の中の疑ふ者には常身を示したまへば、便ち信じ解することを得て、各各說いて言く、「今見る所のものは、是れ佛の眞身なり。佛力を以ての故に、此の三千大千世界の中の人は佛の常身を見るに、遠近、礙ること無し」と。是時に三千大千世界の衆生は、皆大に歡喜して言く、「此は眞に是れ佛身なり、佛初めて生れたまふの時、初めて佛と成りたまふの時、初めて法輪を轉じたまふの時は、皆此の身を以て是の如く思惟したまふ。此は眞に是れ佛身なり」と。

問うて曰く、何を以ての故に名けて、「淨居天」、「梵世天」と爲すや。

答へて曰く、第四禪に八種あり、五種は是れ阿那含の住處、是を淨居と名く。三種は凡人と聖人、共に住す。是の八處を過ぐれば、十住の菩薩の住處あり。亦た淨居と名け、大自在天王と號す。梵世天は生處に三種あり。一は梵衆天にして諸の小梵の生ずる處、二は梵輔天にして貴梵の生ずる處、三は大梵天にして之を中間禪定の生處と名く。

問うて曰く、欲を離るゝこと是れ同じ、何を以ての故に貴賤異る處あるや。

答へて曰く、初禪に三種あり。下と中と上となり。若し下禪を修せば梵衆に生じ、若し中禪を修せば梵輔に生じ、若し上禪を修せば大梵に生ず。慈行も亦是の如し。妙眼師の如きは念言すらく、「我衆人の爲に法を說けるに、皆梵天の中に生ぜり。我今弟子と同處なるべからず、當に上慈を修すべし」と。上慈を修するが故に大梵天の中に生じたり。

問うて曰く、何を以ての故に四禪の中に於て、但だ初と後とを說いて中間を說かざるや。

答へて曰く、初門は欲を離るゝこと難きが故に、最後は微妙にして得難きが故に、中間は入り易きが故に說かざるなり。復次に、梵世を言へば已に色界に攝す。第四禪は第一に妙なるを以ての故に別に說くなり。復次に、人は多く梵天を識りて餘天を識らず、是の故に但だ梵天のみを說く。

はん、「汝自ら疾んで救ふこと能はず、安んぞ能く餘人を救はん」と。諸の比丘は言はん、「我等が大師すら猶尚ほ病あり、況んや我等が身は艸芥の如し、能く病さらんや」と。是事を以ての故に、諸の白衣等は、諸の湯藥を以て比丘に供給し、安隱に坐禪し道を行ずることを得せしむ。外道の仙人すら能く藥艸咒術を以て他人の病を除くこと有り、何に況んや如來は一切の智德あり、自身病ひ有つて而も除くこと能はざらんや。汝且く(しばら)默然として鉢を持して乳を取り、餘人・異學をして聞き知るを得せしむること勿れ」と。是を以ての故に佛(の病)は方便の爲にして實の病に非ざることを知る。諸罪の因緣も皆亦是の如し。是を以ての故に「佛は其德特に尊くして、光明色像威德巍巍たり」と言ふ。

【經】爾の時に世尊は常身を以て、此の三千大千世界の一切の衆生に示したまふ。是の時に、首陀會天・梵衆天・他化自在天・化自樂天・兜率陀天・夜摩天・三十三天・四天王天、及び三千大千世界の人は、非人と與に、諸の天華、天の瓔珞、天の澤香、天の末香、天の靑蓮華・赤蓮華・白蓮華・紅蓮華、天の樹葉香を以て持して佛の所に詣れり。

【論】問うて曰く、佛は何を以ての故に、常身を以て此三千大千世界の中の、一切の衆生に示したまふや。

答へて曰く、佛は摩訶般若波羅蜜を說かんと欲し、三昧王三昧に入り、足下の相輪の光明より、上肉髻の光焰に至るまで、大に明かなること、譬へば劫盡きて燒くる時、諸の須彌山王の次に隨つて燃え盡くるが如し。是の光明は遍ねく三千大千世界、乃至十方の恒河の沙等の如き、諸佛の世界に滿ち、皆悉く大に明かなり。衆生の見る者は、畢に阿耨多羅三藐三菩提に至る。時に佛は般若波羅蜜を說かんと欲したまひ、初には神力あり、第二には一切の毛孔皆悉く微笑し、第三には常光明を放ち、面各一丈なり。第四には舌相遍ねく三千大千世界を覆うて笑ひ、第五には師子遊戲三昧に入り、三千大千世界は六反び震動す。第六には佛師子座に坐したまひ、最勝の身光明の色像を現じ、

へるに、而も食を乞ふて得ず、空鉢にして還りたまはんや。是の事を以ての故に知る、佛は方便して、衆生を度せんが爲の故に、此の諸の罪を受けたまひしことを、云何にして方便して憐愍したまふや。未來世の五衆の佛弟子、施福薄きが故に、種種の自活の具を乞うて得ること能はず。諸の白衣の言く、「汝衣食は得ること能はず、病あれども除くこと能はず、何ぞ能く道を得、以て人を益せんや」と。是の五衆は當に答ふべし、「我等は身を活すの小事はなしと雖も、道を行じて福德あり、我等の今日の衆苦は是れ先身の罪報なり、今の功德の利は將來に在り、我等が大師たる佛すら、婆羅門の聚落に入つて食を乞へるに、尙又得ずして空鉢にして還りたまへり。佛には亦諸の病もありき、[七]釋子畢罪の時、佛も亦頭痛したまへり。何に況んや我等薄福の下人をや」と。諸の白衣は、聞き已つて瞋心則ち息み、便ち[八]四種の供養を以て、比丘に供給し、身安隱なるを得て、坐禪して道を得。是を方便と爲す。故に實に罪を受くるに非ず。[九]毘摩羅詰經の中に說くが如くんば、佛毘耶離國に在せり。是時佛、阿難に語りたまはく、「我が身中に熱風の氣發れり、當に牛乳を用ゆべし。汝我が鉢を持して牛乳を乞ひ來れ」と。阿難は佛鉢を持して、晨朝に毘耶離に入り、一の居士の門に至りて立てり。是の時に毘摩羅詰は是の中に在り、行きて阿難が鉢を持して立つを見て、阿難に問ふ、「汝何を以てか晨朝鉢を持して此に立つや」。阿難答へて曰く、「佛は身に小疾あり、當に牛乳を用ゆべきが故に、我此に到る」と。毘摩羅詰の言く、「止みね、止みね、阿難よ、如來を謗ること勿れ。佛は世尊なり、已に一切諸の不善法を過ぐ、當に何の病かあるべき。外道をして此の麁語を聞かしむること勿れ。彼當に佛を輕んじて、便ち言ふべし、佛は自ら疾んで救ふこと能はず、安んぞ能く人を救はん」と、阿難言はく、「此は我が意に非ず、面たり佛勅を受けたり、「當に牛乳を須ゆべし」と」。毘摩羅詰言く、「此は佛勅なりと雖も、是れ方便の爲なり。今は五惡の世なるを以ての故に是の像を以て一切を度脫したまふ。若し未來世に諸の病比丘あらば、當に白衣より諸の湯藥を求むべし。白衣は言

【七】釋子畢罪。前記、毘樓離王の劫略を指す。
【八】四種供養。四事供養とも云ふ。飲食。衣服、臥具、湯藥の四なり。
【九】毘摩羅詰經。維摩經。

痛したまふ。六には[五]阿耆達多婆羅門の請を受けて馬麥を食したまふ、七には冷風動ずるが故に脊痛みたまふ。八には六年苦行したまふ。九には婆羅門の聚落に入り、食を乞ふて得ず、空鉢にして還りたまふ。復た冬至の前後の八夜、寒風竹を破り、三衣を索めて寒を禦ぎたまひしこと有り。又復た熱を患ひ、阿難は後に在つて佛を扇ぎたてまつれり。是の如き等の世界の小事、佛は皆之を受けたまへり。若し佛は神力無量にして、三千大千世界乃至東方の恒河沙等の如き諸の世界の南西北方四維上下に、光明・色像・威德巍巍たるならば、何を以ての故に諸の罪報を受くるや。

答へて曰く、佛は人中に在りて人の父母より生れ、人身の力を受くるに、一指節の力、千萬億那由他の白象の力に勝り、神通力は無量無數にして思議すべからず、是の淨飯王の子、老病死の苦を厭ひ、出家して佛道を得。是の人、豈に罪報を受けて、寒熱等の爲に困しめられんや。佛の神力の如きは不可思議なり。不可思議の法の中に何ぞ寒熱の諸の患ひあらんや。

復次に、佛には二種の身あり。一に法性身と、二に父母生身となり。是の法性身は十方虛空に滿ちて無量無邊なり。色像・端正にして相好莊嚴し無量の光明、無量の音聲あり。法を聽くの衆も亦た[六]虛空に滿てり。常に種種の身、種種の名號、種種の生處、種種の方便を出して、衆生を度し。常に一切を度して、須臾も息む時なし。是の如きは法性身の佛なり。能く十方の衆生の諸の罪報を受くる者を度するは生身佛なり。生身佛の次第、說法は、人の法の如し。二種の佛あるを以ての故に諸の罪を受くるも咎なし。　復次に、佛は卽ち道を得たまふ時、一切の不善法を盡く斷じ、一切の善法を皆成就したまふ。云何ぞいま實に不善法の報の受く可きあらんや。但だ未來世の衆生を憐愍したまふが故に方便を現じて此の諸の罪を受けたまふのみ。

復次に、阿泥盧豆の如きは、一の辟支佛に食を與へたる故に、無量の世、樂を受け、心に飮食を念ずれば意に應じて卽ち得たり。何に況んや佛は世世に肉を割き髓を出して、以て衆生に施したま

【五】阿耆達多(Agnidatta)。憍薩羅國、隨蘭然邑の婆羅門。祇園精舍にて佛に見え、佛をその鄉里に招く。佛至るに之を忘れて門を閉づ。偶々その地飢ゆるにより、佛は爲に三月馬麥を喰し給ふ。

【六】割註して「此衆も亦た是れ法性身にして生死の人の見るを得る所に非ざる也。」とある。

卷の第九

初品第十四……「放光」釋論の餘

【經】爾の時に世尊、師子座の上に在して坐したまふに、三千大千世界の中に於いて、其の德は特に尊く、光明・色像・威德は巍巍として、遍ねく十方の恒河の沙等の如き、諸佛の世界に至る。譬へば須彌山王の光色の殊特にして、衆山の能く及ぶ者なきが如し。

【論】問うて曰く、佛は何の力を以ての故に、一切の衆生の中に於て其德特に尊く、光明・威德巍巍たること、乃ち是の如くなるや。轉輪聖王・諸天・聖人の如きも亦た大力・光明・威德あり。何を以てか獨り佛の德のみ特に尊しと言ふや。

答へて曰く、此の諸の賢聖は、光明威德ありと雖も、量あり限あり。譬へば衆星は日光既に出づれば則ち沒して現れざるが如し。佛は無量阿僧祇劫より、大功德を集め、一切を具足したまひ。因緣大なるが故に果報も亦大なり。餘人には此なし。復次に、佛は世世に諸の苦行を修したまふこと無量無數なり。頭目髓腦は、常に衆生に施したまふ。豈に唯だ國・財・妻子のみならんや。一切の種種の戒、種種の忍、種種の精進、種種の禪定、及び、無比淸淨にして壞す可らず盡す可らざるの智慧を世世に修行して已に具足し滿たせり。此の果力の故に稱量す可らざるの殊特の威神を得たまへり。是を以ての故に「因緣大なるが故に果報も亦大なり」と言ふ。

問うて曰く、若し佛の神力無量にして、威德の巍巍たること稱說すべからずとせば、何を以ての故に九の罪報を受けたまふや。一には梵志の女、[一]孫陀利は(佛を)謗り、五百の阿羅漢も亦謗らる。二には[二]旃遮、婆羅門女、木盂を繫けて腹を作り佛を謗る。三には提婆達、山を推して佛を壓し、足の大指を傷く。四には[三]迸木脚を刺す。五には[四]毘樓璃王、兵を興し、諸の釋子を殺す、佛は時に頭

【一】孫陀利(Sundarī)。外道の美女にして、舍衞城に於て佛の名聲擧るや外道にそゝのかされ佛と關係ありと云ひ觸らし、後更に外道に謀殺され祇園精舍の塵場に埋められ、それを佛徒の所爲として更に宣傳され、佛に對する非難起りしが、謀計遂に露はれて、外道は刑に處せらる。

【二】旃遮(Ciñcā)。外道の女。謗佛の謀計は論記事の如し。是を見て帝釋は四天王に命じて、その謀計を暴露せしむ。無間地獄に陷る。

【三】迸木、奔れる木材。

【四】毘樓璃王(Viḍūḍabha)。はじめ波斯匿王、その妃を迦維羅衞城に求むるや、種族の血を誇る釋迦族は僞りて下賤の女を送る。王と其女の間に生ぜしが毘樓離なり。後に至り此事に依て釋迦族に恥しめらるるや、大に怒り、後、王となるや、伽維羅衞城を劫略して大いに釋迦族を殺害す。釋迦族は之を以て亡ぶ。

ず、賊あれども繋くこと能はず、惡人を治むること能はず、罪あれども、以て肅むること無く、患を却け難を救ふこと能はざるは、默然として益なし。何ぞ此を用ゐることを爲さん」と。是の如きを衆生を嬈さざるを好むもの呵すと爲す。偈に說くが如し。

『人にして勇健なること無くんば、何ぞ世間に生ることを用ゐん、親、離ずれども而も救はざるは、木人の地に在るが如し。』

是の如き等の種種の不善語を名けて、「衆生を嬈さざるものを呵す」と爲す。是の諸の天人は皆好慧を得、戒を持して自ら守り、衆生を嬈さざるなり、是の善法を行ずれば身心安隱にして畏れ難る所なく熱なく惱なく、好名善譽あつて、人に愛敬せらる、是を涅槃門に向ふと爲す。命終らんと欲する時、福を見、心喜んで、憂なく悔なし。若し未だ涅槃を得ざれば諸佛の世界に乘じ、若くは天上に生ず。是を以ての故に「好慧を得、戒を持して自ら守り、衆生を嬈さず」と言ふ。

問うて曰く、何を以ての故に樂に次いで、後「皆な好慧を得」と言ふや。

答へて曰く、人は未だ樂を得されば能く功德を作し、既に樂を得已れば、心、樂に著すること多きが故に功德を作さず、是の故に樂の後に次第に心に好慧を得とす。好慧とは、戒を持して自ら守り、衆生を嬈さざるなり。

問うて曰く「持戒」は、是を「自ら守る」と名け、亦「衆生を嬈さず」と名く。何を以ての故に復た「自ら守り、衆生を嬈さず」と言ふや。

答へて曰く、身口の善は是を「持戒」と名け、心を撿して善に就くは、是を「自ら守る」と名け、亦「衆生を嬈さず」と名く。一切の諸の功德は、皆な戒身・定身・慧身の攝する所なり。言く、持戒を好むは、是れ戒身に攝し。「自ら守る」を好むは是れ定身に攝し。「衆生を嬈さず」、禪中の慈等の諸の功德は、是れ慧身に攝す。

問うて曰く、亦た人の「戒を持つことを好まず」と言ふ者あることなし、今何を以てか「戒を持つを好む」と言ふや。

答へて曰く、婆羅門の如き、世界の法に著する者あり。言く、「家を捨て、好んで戒を持するは、是を種を斷ずるの人と爲す。また自力を以て財を得て、廣く功德を作す。是の如きには福あり。出家は食を乞ひて自身に給せず、何ぞ能く諸の功德を作さん」と、是の如きは持戒を好むものを呵すると爲す。亦世界の治法の道に著するの人にして、自ら守るを好むものを呵せる者あり。言く、「人は當に法を以て世を治め善を賞し惡を罰すべし。法を犯すべからず、尊親を捨つべからず、法を立て世を濟はば益する所の者大なり。何ぞ獨り其の身を善くして、自ら守り無事なるを用ひ、世の亂るるも而も理めず、人急なれども、而も救はざるや」と。是の如きを名けて、自ら守るを好むものを呵すと爲す。亦た人、衆生を嬈さざるを好むを呵する者あり。言く、「怨あれども報ずること能は

答へて曰く、是の樂は欲界の繫にして亦不繫なり、色(界)・無色界の繫には非ず。今言く、「譬へば比丘の第三禪に入るが如し」と。若し是れ色界の繫ならば「譬へば比丘の第三禪を得るが如し」と言ふべからず。是の事を以ての故に色界の繫に非さることを知る。此は欲界の心に喜樂を生じ、一切身に滿ること、譬へば煖蘇に身を漬くれば、柔輭にして和樂なるが如し。不繫とは、般若波羅蜜の相を觀ずることを得れば、諸法は不生不滅にして、實智慧を得、心に著する所なく、無相の樂なり。是を「不繫」と爲す。

問うて曰く、佛の言はく、「涅槃は第一の樂なり」と。何を以てか第三禪の樂と言ふや。

答へて曰く、二種の樂あり、有受樂と有受盡樂となり。受盡樂とは一切の五陰盡きて更に生ぜず、是れ無餘涅槃の樂なり。能く憂愁・煩惱を除き、心中歡喜す、是を樂受と名く。是の如き樂受は滿足して第三禪の中に在り。是を以ての故に「譬へば第三禪の樂の如し」と言ふ。

問うて曰く、初禪二禪にも亦た樂受あり、何を以ての故に但だ第三禪と言ふや。

答へて曰く、樂に上中下あり。下は初禪、中は二禪、上は三禪なり。初禪に二種あり、樂根と喜根となり。五識に相應するは樂根、意識に相應するは喜根なり。二禪の中の意識に相應するは喜根にして、三禪の意識は相應するは樂根なり。一切の三界の中、三禪を除いては、更に意識に相應する樂根なし。是れ五識は分別すること能はず、名字の相を知らず、眼識の生ずるは彈指の頃の如くなるも、意識は已に生ぜり。是を以ての故に五識に相應する樂根は樂を滿足すること能はず、意識に相應する樂根は能く樂を滿足す。是を以ての故に三禪の中には諸の功德少く、樂多きが故に、背捨・勝處・一切入なし。是の三禪を過ぎては更に樂なきなり。是を以ての故に「譬へば比丘の第三禪に入るが如し」と言ふ、

「一切衆生、皆好慧を得、戒を持して自ら守り、衆生を嬈さず」とは、

「是の時に衆生等しく、十善業道を行ず」とは、身業道に三種あり。不殺と不盜と不邪婬となり。口業道に四種あり。不妄語と不兩舌と不惡口と不綺語となり。意業道に三種あり。不貪と不惱害と不邪見となり。自ら殺生せず、他を敎へて殺さしめず、殺さざる者を讚じ、人の殺さざるを見れば共に代りて歡喜す。乃至邪見にも亦四種あり。

問うて曰く、後の三業道は業に非ず、前の七業道は亦た業なり、云何なれば十善業道と言ふや。

答へて曰く、少きを沒して多きに從ふが故に通じて業道と名く。後の三は業に非ずと雖も能く業を起す、又復た業の爲の故に生ず、是の故に總じて業道と名く。

「梵行を淨修し、諸の瑕穢なし」とは、

問うて曰く、上に十善業道を行ずることを說き、此の理已に足れり。今何を以てか復た梵行を淨修すと言ふや。

答へて曰く、有人は十善業道を行ずれども婬を斷ぜず、今更に此に梵天の行を行ずるを讚ずるは、婬欲を斷除するなり、故に「梵行を淨修す」と言ふ。

「諸の瑕穢なし」とは、婬を行ずる人は身惡にして名臭る、是を以ての故に婬を斷ずる人を讚じて、「諸の瑕穢なし」と言ふ。

「惔然として快樂す」とは、

問うて曰く、此は何等の樂なりや。

答へて曰く、是樂に二種あり。內樂と涅槃の樂となり。是の樂は五塵より生ぜず。譬へば石泉の水は中より出で外より來らざるが如し。心の樂も亦是の如く、等心を行じ、梵行を修し、十善業道を得て、淸淨にして穢なき、是を內樂と名く。

問うて曰く、此の樂は何界の繫なりや、欲界繫なりや、色界繫なりや、無色界繫なりや。

亦親親及び善知識の如くす。是の時衆生は、等しく十善業道を行じ、梵行を淨修し、諸の瑕穢なく、惔然として快樂す。譬へば比丘の第三禪に入つて、皆好慧を得、戒を持し、自ら守り、衆生を嬈さざるが如し。

【論】問うて曰く、是の諸の衆生は、未だ欲を離れず、禪定なく四無量心を得ず、云何にして等心を得るや。

答へて曰く、是の「等」は禪中の「等」には非ず、是れは一切衆生の中に於て、怨まず恚らざるなり。此の等を以ての故に、善心を以て相視るなり。　復次に、等心とは經の中に言へるあり、「云何なるが等心なるや。相視ること、父の如く、母の如き、是を等心と名く」と。

問うて曰く、一切衆生は便ち是れ父母・兄弟・姉妹なりと視るや不や。

答へて曰く、不なり、老者を見れば父母の如く、長者は兄の如く、少者は弟の如くす。姉妹も亦爾なり。等心の力の故に皆な親親の如し。

問うて曰く、云何なれば父母に非るを父母と言ひ、乃至、親親に非るを親親と言ひて妄語に墮せざるや。

答へて曰く、一切の衆生は、無量世の中において、父母・兄弟・姉妹・親親に非る者なし。　復次に、實法の相中には父母兄弟なし。人、吾我の顚倒の計に著するが故に名けて父母兄弟と爲す。今、善心の力を以ての故に、相視ること父の如く母の如くするも、妄語に非るなり。　復次に、人は義を以て相親しめば、父に非れども、之に事へて父と爲し、母に非れども、之に事へて母と爲すが如し。兄弟兒子も亦復是の如く、人は子に、惡を行ずるものあれば黜けて之を棄て、他姓の善く行ふものを養つて以て子と爲すが如し。是の如く、相視るを則ち等心と爲す。偈に說くが如し。

『他の婦を視ること母の如く、他の財を見ること火の如く、一切は親親の如し、是の如きを等見と名く。』

得せしめたまふ。

「形殘者は具足することを得」とは、云何なるを形殘と名くるや。若し人ありて、先世に他の身を破り、其の頭を截り、其の手足を斬り、種種の身分を破り、或は佛像を破壞し、佛像の鼻及び諸の賢聖の形像を毀ち、或は父母の形像を破れば、是の罪を以ての故に、形を受くるに多くは具足せず。

復次に、不善法の報は身を受くること醜陋なり、若しくは今世に賊を被り、或は刑戮を被り、種種の因緣以て殘毀を致す、或は風・寒・熱病にして、身に惡瘡を生じて、體分爛壞す、是を形殘と名く。佛の大恩を蒙れば、皆具足することを得。譬へば祇洹の中の奴の如し。[三]犍堆と字す、是れ波斯匿王の兄の子なり。端正勇健にして、心性和善なり。王の大夫人これを見て、心著し、卽ち微(ひそ)かに之を呼んで已に從はしめんと欲す。犍堆從はず、夫人大に怒り王に向つてこれを讒し、反つて其の罪を被る。王聞いて卽ち節節に之を解き、塚の間に棄つ。命未だ絕えざる頃、其の夜、虎狼羅刹來つて之を食はんとす。時に佛その邊に到り、光明之を照せば、身卽ち平復し、其の心大に喜ぶ。佛爲に法を說きたまへば卽ち三道を得たり。佛其の手を牽いて、將いて祇洹に至らんとす。是人の言く、「我が身は已に破られ已に棄てられたるに、佛、我が身を續ぎたまへり。今當に此の形壽を盡すまで、身を以て佛及び比丘僧に布施すべし」と。明日波斯匿王は、是の如きの事を聞き、來つて祇洹に至りて、犍抵に語つて言く、「汝に向つて過を悔ゆ。汝は實に罪なし、枉げて相刑害せり。今當に汝に與ふるに國の半を分ちて治せしむべし」と。犍抵の言く、「我已に厭へり、王も亦罪なし。我が宿世の殃咎の罪報、應に爾るべし。我いま身を以て、佛及び僧に施したてまつる、復還らざるなり」と。是の如く、若し衆生の形殘にして、具足せざる者ありて、佛の光明を蒙れば、卽時に平復す。是の故に「乃至形殘も皆具足することを得」と言ふ。佛の光明を蒙つて、卽時に平復するなり。

【經】一切の衆生、皆な等心を得て相視ること父の如く、母の如く、兄の如く、弟の如く、姉の如く、妹の如く、

【三】犍抵（Granthi）。割註ありて「犍抵、秦に續と言ふ。」とあり。

結堅・宿疹なり。二には外病。奔車し逸馬して墮壓墜落し、兵刄・刀仗などの種種の諸病なり。
問うて曰く、何の因緣を以て病を得るや。
答へて曰く、先世に好んで鞭杖・拷掠・閉繫を行ひ、種種に惱ますが故に今世に病を得。現世の病は身を將ゆることを知らずして飮食を節せず、臥起常無く、是の事を以ての故に種種の諸病を得。是の如くして四百四病あり。佛の神力を以ての故に、病者をして愈ゆることを得せしめたまふ。說くが如くんば、佛、舍婆提國に在すとき、一居士あり、佛及び僧を請じて、舍に於て飯食せしむ。佛、精舍に住して食を迎へたまふに、五の因緣あり。一には定に入らんと欲す。二には諸天の爲に法を說かんと欲す。三には遊行して諸の比丘の房を觀んと欲す。四には諸の病める比丘を看る。五には若し未だ結戒せざれば諸の比丘の爲に結戒せんと欲す。是の時に佛は手づから戶を持して排き、諸の比丘の房に入りて見るに、一の比丘病み苦めども、人の瞻視するものなく、臥して大小便し、起居すること能はず。佛、比丘に問ひたまはく、「汝何ぞ、苦しむ所あるに、獨にして、人の看ること無きや」と。比丘答へて言く、「大德よ、我が性嬾にして、他人の病あるも初め看視せず、是の故に我病むも他亦看ざるなり」と。佛の言はく、「善男子、我當に汝を看るべし」と。時に釋提婆那民は水を盥にし、佛は手を以て其の身を摩でたまふ。其の身を摩づる時、一切の苦痛は卽ち皆除き愈え、身心安隱なり。是時に世尊は安徐として、此病比丘を扶け起し、將ゐて、房より出し、澡洗し、衣を著せしめ、安徐として將き入れ、更に敷褥を與へて坐せしめたまふ。佛、病比丘に語りたまはく、「汝久しきより來た勤求して、未だ得ざる事を得せしめ、未だ到らざる事に到らしめ、未だ識らざる事を識らしめず、諸の苦患を受くること是の如し。方當に更に大なる苦あるべし」と。比丘聞き已りて、心に自ら思念すらく、「佛恩は無量にして、神力は無數なり、手を以て我を摩でたまへば、苦痛は卽ち除き、身心は快樂なり」と。是を以ての故に佛は神力を以て、病者をして愈ゆることを

抱いて臥し。阿羅漢人あり、食を乞うて得ざるが如し。又迦葉佛の時の如きは、兄弟二人あり。出家し道を求む、一人は持戒し、誦經し坐禪し、一人は廣く檀越を求めて、諸の福業を修す。釋迦文佛世に出でたまふに至りて、一人は長者の家に生れ、一人は大白象と作つて力能く賊を破る。長者の子は出家し道を學んで、六神通の阿羅漢を得たり。而も薄福なるを以て、食を乞へども、得ること難し。他日鉢を持して城に入り、食を乞ふこと遍ねきも得ること能はず、白象の厩の中に到りて、王が象に供する、種種なるもの豐足するを見る。此の象に語つて言はく、「我と汝と俱に罪過あり」と。象即ち感結して三日食はず。象を守る人は怖れて道人を求覓め、見て問うて言く、「汝は何の呪を作して、王の白象をして、病んで食すること能はざらしむるや」と。答へて言く、「此の象は是れ我が先身の時の弟なり、共に迦葉佛の時に於て、出家し道を學べり。我は但だ戒を持し、經を誦し、坐禪のみして、布施を行ぜず。弟は但だ廣く檀越を求め、諸の布施を作せども、戒を持せず、學問せざりき。其の持戒・誦經・坐禪せざるを以ての故にいま此の象と作れり。大に布施を修するが故に飲食備具し、種種豐足せり。我は但だ道を行じて布施を修せざるが故に、今道を得と雖も、食を乞うて得ること能はず」と。是の事を以ての故に因緣同じからず、佛の世に値ふと雖も猶ほ故らに飢渇す。

問うて曰く、此の諸の衆生は、云何に飽滿するや。

答へて曰く、有人は言ふ、佛は神力を以て食を變作して、飽滿することを得せしむと。復た有人は言ふ、佛光、身に觸れば、飢渴せざらしむ、譬へば如意摩尼珠の如し。人心に念ずることあらば則ち飢渴せず、何に況んや佛に値へるをやと。

「病者は癒ゆるを得」とは、病に二種あり。(一には)先世の行業の報ひの故に種種の病を得、(二には)今世に冷熱の風發るが故に亦種種の病を得。今世の病に二種あり。一には內病。五臟調はず、

らざるなり」と。汝等は灰を以て身に塗り、裸形にして耻なく、人の髑髏を以て糞を盛りて食し、頭髪を抜き、刺上に臥し、倒まに懸り、鼻を熏じ、冬は則ち水に入り、夏は則ち火に炙る、是の如きの種種の所行は、道に非ず、皆是れ狂相なり。』　復次に、汝等が法にては肉を賣り鹽を賣れば、卽時に婆羅門の法を失するを以て、天祠の中に於て牛の布施を得れば、卽時に之を賣つて自ら法を得たりと言ふ。牛は則ち是れ肉なり、是れ人を誑惑す、豈に失に非ずや、又言く、[三]吉河の水中に入れば、罪垢みな除くと、是は罪福の爲には因もなく、緣も無し。肉を賣り、鹽を賣つて、此に何の罪かある。吉河の水中に入れば、能く罪を除くと言ふも、若し能く罪を除かば、亦能く福をも除かん。誰か吉なる者かある。是の如きの此の諸事には、因なく緣なきに、强いて因緣と爲す、是を則ち狂と爲す。是の如きの種種の狂相は、皆是れ汝等にあり。法師は汝を護らんとするが故に、指して而も說かず」と。是を名けて裸形の狂と爲す。　復次に、人有り貧窮にして衣なく、或は弊衣、繿縷なるも、佛力を以ての故に、其をして衣を得せしむ。

問うて曰く、「飢者は飽くことを得、渴者は飲むことを得」と、云何なれば飢渴するや。

答へて曰く、福德薄きが故に、先世に因なく、今世に緣なし、是の故に飢渴す。　復次に、是の人は先世に佛・阿羅漢・辟支佛の食及び父母・所親の食を奪ひ、佛世に値ふと雖も、猶故さらに飢渴す、罪重きを以ての故なり。

問うて曰く、いま惡世に生ぜる人にして、好き飲食を得るものあり。佛に値ふ世に生れて而も更に飢渴するあり。若し罪人ならば佛に値ふ世に生るべからず、若し福人ならば惡世に生るべからず、何を以ての故に爾るや。

答へて曰く、業報の因緣、各各同じからず、或は人有り佛を見たてまつるの因緣あるも、飲食の因緣なく、或は飲食の因緣あるも、佛を見たてまつるの因緣なし。譬へば黑蛇にして而も摩尼珠を

【三】吉河。恒河である。百論疏に「外道は恒河は是れ吉河なり。中に入つて洗ふ者は便ち罪滅するを得と謂ひ……朝、晡、及び日中の三時に就て洗ふ」。とめる。

答へて曰く、人、狂せざれども、而も心多く散亂し、志は獮猴の如くにして、專ら住すること能はざる有り、是を亂心と名く。復た遽務忩忩として、心衆事に著して則ち心力を失し、道を受くるに堪へざる有り。

問うて曰く、亂心は何の因緣あるや。

答へて曰く、善心轉た薄くして、不善に隨逐す、是を心亂ると名く。　復次に、是の人は無常を觀ぜず、死相を觀ぜず、世の空を觀ぜず、壽命に愛著し、事務に計念し、種種に馳散す、是の故に心亂る。　復次に、佛法の中に內樂を得ず、外に樂事を求めて、樂の因に隨逐す、是の故に心亂る。是の如きの亂人は、佛を見たてまつるを得たるが故に、其の心定まるを得るなり。

問うて曰く、先に「狂者は正なることを得」と言ひ、いま裸者は衣を得と言ふ。狂を除いて、云何にして、更に裸あるや。

答へて曰く、狂に二種あり。一は人皆狂なるを知り、二は惡邪の故に自ら裸なるも、人その狂なるを知らず、說くが如くんば、南天竺國の中に法師あり、高座にて五戒の義を說く。是の衆中に多くの外道あつて來聽せり。是の時、國王難じて曰く、「若し所說の如く、人有り、酒を施し及び自ら酒を飲まば、狂愚の報を得とせば、當今の世人は應に狂者多く、正者は少かるべし。而るに今狂者は更に少く、狂せざる者は多し。何を以ての故に爾るや」と。是時に諸の外道の輩の言く、「善い哉、斯の難や甚だ深し、是の禿高座は必ず答ふること能はざらん、王は利智なるを以ての故に」と。是の時法師は指を以て諸の外道を指し、而して更に餘事を說けり。王は時に卽ち解す。諸の外道、王に語つて言く、「王の難は甚だ深し。是(法師)は答ふることを知らず、知らざる所を耻ぢて、但だ指を擧げて更に餘事を說くのみ」と。王は外道に語るらく、「高座の法師は、指して答へて已に訖れり、汝を護らんとするが故に言を以て說かず、向きに汝を指して言く、「汝等は是れ狂なり、狂少か

問うて曰く、何の因緣を以ての故に聾なるや。
答へて曰く、聾は是れ先世の因緣にして、師父の教訓を受けず、行ぜずして、反つて瞋恚す、是の罪を以ての故に聾なり。　從次に、衆生の耳を截り、若くは衆生の耳を破り、若くは佛塔・僧塔・諸の善人の福田の中の揵稚・鈴・貝及び鼓を盗むが故に此の罪を得。是の如き等の種種は先世の業因緣なり。今世の因緣は若くは病、若くは打。是の如き等は、是れ今世の因緣にして聾を得るなり。
問うて曰く、「啞者は能く言ふ」と。何等の罪を作すが故に啞なるや。
答へて曰く、先世に他の舌を截り、或は其の口を塞ぎ、或は惡藥を與へて語ることを得ざらしめ、或は師の教、父母の教勅を聞いて、其の語を斷じ其の教を非とし、或は惡邪の人と作つて罪福を信ぜず、正語を破れば、地獄の罪を受け、世に出生して人と爲りては、啞して言ふこと能はず、是の如きの種種の因緣の故に、啞するなり。
問うて曰く、「狂者は正なることを得」と、云何なるを狂と爲すや。
答へて曰く、先世に罪を作り、他の坐禪を破り、坐禪の舍を破り、諸の呪術を以て人を呪ひ、瞋・鬪諍・婬欲ならしめ、今世には諸の結使厚重なり、婆羅門の其の福田を失ひ、其の婦復た死すれば、卽時に狂發し、裸形にして走るが如し。又翅舍伽憍曇[一]比丘尼の本と白衣たりし時、七子皆死し、大に憂愁するが故に、心を失つて發狂せるが如し。人有り大に瞋りて、自ら制することは能はずして、大癡狂と成り、愚癡の人有り、惡邪の故に、灰を以て身に塗り、髮を拔き、裸形となり狂癡にして糞を食す。人あり、若くは風病、若くは熱病の病重くして狂と成る。人有り、惡鬼に著かれ、或は人有り癡にして雨水を飲んで狂す。是の如くして心を失ふ。是の如きの種種を名けて狂と爲す。佛を見たてまつることを得るが故に、狂は卽ち正を得ることを得たり。
問うて曰く、「亂は定まることを得」と、(云ふも) 狂は卽ち是れ亂なり、何の事を以て別つや。

【一】翅舍伽憍曇(Kṛśāgautamī)。舍衞城の貧家に生れし故に、「痩せたるゴータミ」の意なり。

【經】爾の時に三千大千世界の衆の生盲の者は視ることを得、聾者は聽くことを得、瘂者は能く言ひ、狂者は正しき事を得、亂者は定まることを得、裸者は衣を得、飢渴者は飽滿することを得、病者は愈ゆることを得、形殘者は具足することを得たり。

【論】問うて曰く、衆生の苦患に百千種あり。若し佛に神力あらば、何を以てか遍ねく解脫することを得せしめざるや。

答へて曰く、一切皆救ふ。今は但だ略して、麁なるものを說くのみ、種種の結使を略說して三毒と爲すが如し。

問うて曰く、但だ盲者は視ることを得と言へば則ち足れり、何を以ての故に生盲と言ふや。

答へて曰く、生盲の者は先世の重罪の故なり。重罪の者すら猶尙能く視ることを得せしむ、何に況んや輕き者をや。

問うて曰く、如何なる先世の重罪が生盲とならしむるや。

答へて曰く、若くは衆生の眼を破り、若くは衆生の眼を出し、若くは正見の眼を破つて罪福は無しと言ふ。是の人は死して地獄に墮ち、罪畢つて人と爲れば、生るるより盲なり。若くは復た佛塔の中の火珠及び諸の燈明、若くは阿羅漢辟支佛塔の珠及び燈明を盜み、若くは餘の福田の中より光明を奪取す。是の如き等の種種の先世の業因緣の故に、眼を失し、今世には若くは病、若くは打たるるが故に眼を失す、是れ今世の因緣なり。　復次に九十六種の眼病あり。闍耶迦藥王も治すること能はざる所の者なり。唯佛世尊のみ能く視ることを得せしめたまふ。　復次に、先づ視ることを得せしめて後、智慧の眼を得せしむ。聾者の聽くことを得るも亦た是の如し。

問うて曰く、若し生盲あらば、何を以てか生聾を說かざるや。

答へて曰く、多く生盲の者はあれども、生聾の者は少し、是の故に說かず。

り、若くは胎、若くは化生なり。人道と畜生には四種の生あり、卵生と濕生と化生と胎生となり。卵生とは〔七〕毗舍佉彌伽羅母の三十二子の如し、是の如き等を卵生の人と名く。濕生とは〔八〕捺羅婆利婬女、〔九〕頂生轉輪聖王の如し、是の如き等を濕生と名く。化生とは、佛四衆と遊行したまふに、比丘尼衆の中に比丘尼あつて〔一〇〕阿羅婆と名け、地中より化生するが如し。及び劫の初に生ずる時には人は皆な化生なり。是の如き等を名けて化生と爲す。胎生とは常人の生るるが如し。化生の人は即時に長大して、能く佛の所に到る。人に報得の神通あるが故に能く佛の所に到る。

復次に、佛の神力を借るが故に能く佛の所に到る。

【經】是の如く、十方の恒河沙等の如き世界の地は皆六種に震動し、一切の地獄餓鬼畜生及び餘の八難處は即時に解脱し、天上に生ずることを得て、第六天に齊（のぼ）る。

【論】問うて曰く、三千大千世界には無量無數の衆生甚だ多し、何を以てか復た十方の恒河沙等の如き世界の衆生に及ぼすや。

答へて曰く、佛力は無量にして、三千大千世界の衆生を度すと雖も、猶以て少しと爲す。是を以ての故に復た十方に及ぼすなり。

問うて曰く、若し釋迦文尼佛、大神力を以て廣く十方を度したまはば、復た何ぞ餘の佛を須（ま）たんや。

答へて曰く、衆生は無量にして一時に熟せざるが故なり、又衆生の因緣は各各同じからず。聲聞法の中に說くが如し。「舍利弗に因緣ある弟子は、舍利弗を除いては諸佛すら尙ほ度すること能はず、何に況んや餘人をや」と。　復次に、今は但だ東方の一恒河沙等のみを說いて、若しは二・三・四乃至千萬億恒河沙等の諸の世界を說かず。又世界は無量無邊なるを以て、有邊有量の衆生の若きは盡すべし。是を以ての故に十方の無量の世界の諸佛も應に度すべきなり。

【七】　毘舍佉彌伽羅母(Viśākhā-Migāramātṛ)。本論に割註あり、「毘舍佉母、三十二卵を生む。卵割れて三十二男を生ず。皆な力士と爲る。彌伽羅は大兒の字なり。此母人、三道果を得。」と

【八】　捺羅婆利(Āmra; āli)。菴羅婆利(論七既註)と同じ。捺女祇域因緣經によると、毘舍離國の梵志の捺樹の肉瘤より生るとせられる。論本に「捺鳥甘反」と割註がある。

【九】　頂生轉輪聖王。昔、王あり、布殺陀王と云ふ。王の頂上に皰を生じ、皰の中より一子生る。頂生王と稱す。遂に四天下を征服し、更に忉利天に上りて帝釋を害せんとして、果さず、地上に還りて困病して死す。

【一〇】　阿羅婆(Ālavikā)。曠野と譯す。正しくは「世羅Śailā であつて石室と譯す。

「佛法の相は空なりと雖も、亦復た斷滅せず。生ずと雖も、亦た常には非ず。諸の行業は失はれず。
諸法は芭蕉の如し、一切は心に從て生ず。若し法の實なきことを知らば、是の心も亦復た空なり。
若し人あり空を念ぜば、是れは卽ち道行に非ず。諸法は生滅せず、念あるが故に相を失す。
念有れば魔網に墮し、念無くんば則ち出づることを得、心動くが故に道に非ず、動かさるは是れ法印なり。」

【經】是の諸の天人は、自ら宿命を識りて、皆大に歡喜し、佛の所に來詣して、頭面に佛の足を禮し、却いて一面に住す。

【論】問うて曰く、諸の「天」が生ずる時には三事を自ら知るあり。從り來れる處を知り、修するところの福田の處を知り、本作る所の福德を知る。是の「人」の生ずる時には此の三事なし、云何にして宿命を識るや。

答へて曰く、人道は不定なり、或は識る者あり、識らざる者あり。　復次に、佛の神力を假りて則ち宿命を識る。

問うて曰く、諸の天の報として五神通あり、自ら宿命を識りて、能く佛の所に到る。人は佛の神力を蒙りて、宿命を知ることを得と雖も、住する處遠ければ、云何にして能く佛の所に至らんや。

答へて曰く、或は人、生報に神通を得るものあり、轉輪王・聖人等の如し。或は人、佛の神力を假りるものあり。

問うて曰く、人は十月にして生れ、三年乳哺し、十歲の後能く自ら出づ。いま佛の威神を蒙れば、三惡[六]八難皆解脫することを得、天人の中に生じて卽ち佛の所に至ると。天は則ち爾るべし、人の法は未だ成せず、云何んぞ來ることを得んや。

答へて曰く、五道の生法は、各各同じからず、諸天と地獄とは皆化生なり。餓鬼には二種の生あ

【六】八難。見佛聞法に八種の障難ある處を云ふ、地獄、餓鬼、畜生、鬱單越、長壽天、聾盲瘖啞、世智辯聰、佛前佛後。

是の如く、先づ光明を放ちたまふに、福熟し智利きものは、先づ解脫するを得、其の福未だ熟せざず、智心利からざれば、是の故に未だ(解脫を)得ず。佛の大慈悲は等しく一切を度して憎愛なきなり。亦た樹果の、人其樹を動かせば、熟する者先づ墮つるが如く、佛も亦是の如し。是の三千大千世界は樹の如く、之を動かすものは佛なり。先きに度する者は、果の熟せるにて、未だ度せざる者は果の生なるなり。

問うて曰く、何を以ての故に善心の因緣は欲界の天に生じ、色界及び無色界に生ぜざるや。

答へて曰く、佛は此衆生を度し、道證を得せしめんと欲したまふ。無色界の中には身なきを以ての故に、說法を爲す可らず、色界の中には則ち厭心なく道を得べきこと難く禪樂多きが故に、慧心則ち鈍し。復次に、佛は神通を以て感動し、此の三千大千世界の地をして、皆柔輭ならしめたまふ。衆生は、心信にして歡喜を得るが故に欲界の天に生じ、四禪及び四空定を行ぜざるが故に色・無色界に生ずることを得ず。

問うて曰く、五衆は無常・空・無我なり。云何にして天人の中に生れ、誰か死し、誰か生ずる者あるぞ。

答へて曰く、是の事は讚菩薩品の中に已に廣く說けり。今當に略して答ふべし。汝は「五衆は無常・空・無我なり」と言ふも、是の般若波羅蜜の中には、五衆の常・無常、有空・無空、有我・無我あること無し。若し外道の如く實我を求め索むるも、是れ不可得にして但だ假名あるのみ。種種の因緣和合して有り、此の名字有り。譬へば幻人相殺せば、人其死せるを見るも幻術(これを)起たしむれば、人其生を見るが如し。生死は名字のみ有つて而も實無し。世界法の中には實に生死あれども、實相の法の中には生死あること無し。復次に、生死の人には生死あり、不生死の人には生死なし。何となれば不生死の人は、大智慧を以て能く生の相を破るを以てなり。說くが如し。

【經】地は皆柔輭にして、衆生をして和悅せしむ。

【論】問うて曰く、地動いて、云何にして能く衆生の心をして、和悅するを得せしむるや。

答へて曰く、心は身に隨ふが故に、身樂しむ事を得れば、心則ち欣悅す。悅ぶとは共に住む人、及び便身の具、能く心をして悅ばしむるなり。今是の三千大千世界の雜惡の衆生は、其の處、麁獷にして、善事あること無し。是の故に世尊は此の大地を動かして、皆柔輭ならしめ心に利益を得せしめたまふ。譬へば三十三天王の歡樂園の中の如し。諸天の入る者は、心皆柔輭にして歡樂し和悅して麁心生ぜず。若し阿脩羅、兵を起して來る時も都て鬪心なし。是の時に、[五]釋提婆那民、諸の天衆を將ゐて麁澀園の中に入れば、此園の中の樹木華實は、氣、和悅せず、麁澀にして惡なるを以ての故に、諸の天人衆に鬪心即ち生ず。佛も亦是の如く、此の大地は麁澀・弊惡なるを以ての故に、變じて柔輭ならしめ、一切衆生の心をして喜悅を得せしめたまふ。又呪術藥草を人の鼻に熏ずる時は、恚る心便ち生じ、即時に鬪諍するが如し。復た呪術藥草の人心をして和悅し、歡喜し敬心に相向はしむるものあり。呪術草藥すら尙ほ能く此の如し、何に況んや三千大千世界の地、皆柔輭なるをや。

【經】是の三千大千世界の中の、地獄・餓鬼・畜生及び八難處は、即時に解脫して天上に生ずること得、四天王天處より乃ち他化自在天に至る。

【論】問うて曰く、若し佛、師子遊戲三昧に入つて、能く地獄・餓鬼・畜生及び餘の八難をして、皆解脫することを得て、四天處乃至他化自在天に生れしめたまふとせば、復た何ぞ福を修し、善を行じて乃ち果報を得ることを用ゐんや。

答へて曰く、此の上に說くが如し。福德多き者は光を見て得度し、罪垢深き者は地動じて乃ち悟る。譬へば日出でて蓮華の池を照すに、熟せる者先づ開き、生の者は未だ敷(ひら)かざるが如し。佛も亦た

【五】釋提婆那民。釋提桓因と同じ、既註。

一たび周繞す。若し月、昴宿・張宿・氐宿・婁宿・室宿・胃宿、是の六種の宿の中に至れば、爾の時に地動き若くは崩る。是の動は火神に屬す。是の時は雨なくして江河枯竭し、年は麥に宜しからず、天子に凶あり、大臣は殃を受く。若し柳宿・尾宿・箕宿・壁宿・奎宿・危宿、是の六種の宿の中なれば、爾の時は地動きて若しくは崩る。是の動は龍神に屬す。是の時は雨なくして江河枯竭し、年は麥に宜しからず、天子に凶あり、大臣は殃を受く。若し參宿・鬼宿・星宿・軫宿・亢宿・翼宿、是の六種の宿の中なれば、爾の時は、若しくは地動き、若しくは崩る。是の動は、金翅鳥に屬す。是の時は雨無くして、江河枯竭し、年は麥に宜しからず、天子に凶あり、大臣は殃を受く。若し心宿、角宿・房宿・女宿・虛宿・井宿・畢宿・觜宿・斗宿、是の九種の宿の中なれば、爾の時は地動き若しくは崩る。是の動は天帝に屬す。是の時は安隱にして、豐雨五穀に宜しく、天子に吉あり、大臣は福を受け、萬民は安隱なり。　復次に地の動く因緣に小あり大あり。一閻浮提を動かすあり、四天下、一千・二千・三千大千大千世界を動かすあり、小しく動くは小因緣を以ての故なり。若し福德の人、若しくは生れ、若しくは死すれば、一國の地動く、是を小動と爲す。大動は大因緣の故なり。佛初めて生れたまふ時、初めて佛と成りたまふ時、將に滅度せんとしたまふ時の如きは、三千大千世界皆震動を爲せり、是を大動と爲す。今、佛は大に衆生を集めんと欲したまふが故に、此の地をして六種に震動せしたまふ。

復次に、般若波羅蜜の中に、諸の菩薩に記を授けて「當に佛と作ることを得べし」と。佛は天地に大主たり。是の時に地神大に喜びて「我今主を得たり」と。是の故に地動く。譬へば國主初めて立ては臣民喜慶し、皆萬歲を稱して、踊躍し歌舞するが如し。　復次に、三千大千世界の衆生の福德の因緣の故に、此の大地・山河・樹木一切の衆物あり。而も衆生は無常を知らず、是の故に佛は福德智慧大力を以て、此の世界を動かし、衆生の福德は微薄にして、一切磨滅し、皆無常に歸することを知らしめたまふ。

以て喜んで皆な苦を離るゝことを得ん。

問うて曰く、諸の阿羅漢及び諸天も、亦た能く地を動かすことあり。何を以てか獨り是を佛の神力なりと言ふや。

答へて曰く、諸の阿羅漢及び諸天は動を具足すること能はず。唯だ佛世尊のみ能く大地をして、六種に震動せしめたまふ。

問うて曰く、佛は何を以ての故に、三千大千世界を震動せしめたまふや。

答へて曰く、衆生をして、一切は皆空にして無常なるを知らしめんと欲するが故なり。諸人あり言く、「大地及び日月・須彌・大海は、是れ皆な有常なり」と。是を以て世尊は、六種に地を動かして、此の因緣を示し、無常なることを知らしめたまふ。　復次に、人の衣を染めんとするに、先づ塵土を去るが如し。佛も亦た是の如く、先づ三千世界の衆生をして、佛の神力を見せしめて、敬心柔軟ならしめ、然して後、法を說きたまふ。是の故に六種に地を動かし給ふ。云何に六種に動かすや。

【經】東に涌き西に沒し、西に涌き東に沒し、南に涌き北に沒し、北に涌き南に沒し、邊に涌き中に沒し、中に涌き邊に沒す。

【論】問うて曰く、何を以ての故に、正しく六種の動あるや。

答へて曰はく、地の動くに、上・中・下あり、下には二種の動あり。或は東に涌き西に沒し、或は南に涌きて北に沒す。或は邊中なり。中には四あり。或は東西南北、或は東西邊中、或は南北邊中なり。上には六種の動あり。種種の因緣ありて地をして大に動かしむ。佛、阿難に告げたまふ如く、八因八緣あつて地をして震動せしむ。別に說くが如し。

復次に、有人の言く、四種の地動あり。火動・龍動・金翅鳥動・天王動なり。二十八宿に月は月に

かず知らず、諸佛の光明を見ず。何に況んや道を得るをや。譬へば、日出づれども盲人には見えず、便ち世間に日月あること無しと謂ふが如し、日に何の咎が有らん。又雷電の地を震へども、聾人は聲を聞かざるが如し。聾に何の過かあらん。いま十方の諸佛は、常に經法を說き。常に化佛を遣はして十方世界に至り、六波羅蜜を說きたまへども、罪業の盲聾の故に、法の聲を聞かず。是を以ての故に盡く聞見せず、復た聖人は大慈心ありと雖も、皆聞き、皆見せしむること能はず。若し罪滅びんとし、福將に生ぜんとすれば、是の時乃ち、佛を見、法を聞くことを得ん。

【經】爾の時に、世尊は故らに師子座に在りて、師子遊戲三昧に入り、神通力を以て、三千大千世界を感動し、六種に震動す。

【論】問うて曰く、此三昧は何を以てか師子遊戲と名くるや。

答へて曰く、譬へば師子の鹿を搏て、自在に戲れ遊ぶが如し。佛も亦た是の如く、此の三昧に入つて、能く種種に此の地を回轉し、六反震動せしめ給ふ。復次に、師子遊戲とは、譬へば師子戲るゝ日は、諸獸安隱なるが如し。佛も亦是の如く、是の三昧に入る時は、三千大千世界を震動し、能く三惡の衆生をして、一時に息ふことを得て、皆安隱なることを得せしめ給ふ。復次に、佛を人の師子と名く。師子遊戲三昧は、是れ佛戲三昧なり。此三昧に入る時は、此大地をして六種に震動せしめ、一切の地獄惡道の衆生は皆解脫を蒙り、天上に生ずることを得、是を名けて戲と爲す。

問うて曰く、佛は何を以てか此三昧に入りたまふや。

答へて曰く、三千大千世界を動かし、三惡道の衆生を出して、二道の中に著けんと欲するが故なり。

復次に、上の三種の變化は佛身より出づ。人或は信心深からず。いま大地を動かすは、衆生をして佛の神力の無量なることを知らしめんと欲するなり、能く外物をして皆な動ぜしめば、信淨の心を

中に没在す。或は阿羅漢・辟支佛道の般涅槃するを得るもの、若し般若波羅蜜を得れば、共に合して是れを波羅蜜と名け、能く佛道に至る。是を以ての故に般若波羅蜜は、六波羅蜜と一法にして異なることなし。般若波羅蜜は二種あり。一には莊嚴、二には未莊嚴なり。人の好き瓔珞を著けて、共の身を莊嚴するが如し。人あり、著けざれば未莊嚴と名く。亦た國王の諸の官從を將ゆれば、是を「王來る」と名け、若し官從なければ是を獨身と名くるが如し。是の如く東方の恒河沙の如き等の世界、乃至十方も亦た爾なり。

問うて曰く、若し佛に是の如き大神力あり、無數千萬億の化佛、乃至十方に六波羅蜜を說いて一切を度脫せば、應に盡く度することを得べく、殘あるべからざるや。

答へて曰く、三障あり、三惡道の中の衆生は解し知ること能はず。人中・天上の、若くは大いに小きもの、若くは大いに老いたるもの、若くは大病なるもの、及び上の無色無想天は、皆聞くこと能はず、知ること能はざるなり。

問うて曰く、諸の能く聞き、能く知る者は、何を以てか皆な得道せざるや。

答へて曰く、是れも亦た盡く道を得べからず、何となれば、結使の業障の故なり。人、結使に於て重きあり、常に結使の爲に心を覆はる。是を以ての故に盡く道を得ず。

問うて曰く、當今十方の諸佛は、亦應に化を遣はして六波羅蜜を說けるなるべし。我等は亦た三障無し、何を以てか聞かざるや。

答へて曰く當今の衆生は、生れて惡世に在り、卽ち三障の中に入る。佛の後に生れて在るは不善業の報なり。或は世界に惡罪業障あり、或は厚重の結使の障あり。佛の後に墮在して、人は多く厚重の結使の爲に障へらる。或は婬欲薄くして瞋恚厚く、瞋恚薄くして婬欲厚く、婬欲薄くして愚癡厚く、愚癡薄くして瞋恚厚し、是の如き等、展轉して互に厚薄あり。是の結使の障の故に、化佛の說法を聞

如し。華の中に人あつて結跏趺坐す、此の人は復た無量の光明あり、名けて梵天王と曰ふ。此の梵天王の心(むね)より八子を生じ、八子は天地、人民を生む。是の梵天王は、諸の婬と瞋とに於て、已に盡して餘すことなし。是の故に言く、「若し人ありて、禪の淨行を修し、婬欲を斷除せば、名けて梵道を行ずと爲し、佛の法輪を轉ずるを、或は法輪と名け、或は梵輪と名く」と。是の梵天王は蓮華の上に坐せり。是の故に諸佛は世俗に隨ふが故に、寶華の上に於いて結跏趺坐して、六波羅蜜を說きたまふ。此の法を聞く者は畢に阿耨多羅三藐三菩提に至る。

問うて曰く、釋迦文尼佛は無量千萬億の諸佛を化作したまふ。云何にして一時に能く法を說きたまふや。阿毘曇に說くが如くんば、一時に二心なし。若し化佛の語りたまふ時には化主は默すべし。化主の語りたまふ時は、化は亦默すべし。云何んぞ一時に皆六波羅蜜を說きたまはんや。

答へて曰く、此の如く說く者は外道及び聲聞の變化の法のみ。佛の變化無量の三昧力の如きは思議すべからず。此の故に、佛自ら語りたまふ時は、無量千萬億の化佛も、亦一時に皆語りたまふ。又諸の外道及び聲聞が化したるものは、化を作すこと能はず。佛世尊の如きは、化したるものも復た化を作す。諸の外道及び聲聞は、滅後に化を留むること能はず、佛世尊の如きは、自身滅度したる後にも、復た能く化を留め、佛の如くして異なること無し。　復次に、阿毘曇の中には、「一時に二心なし」と。今佛も亦た是の如く、當に化したるもの語らんとする時には、亦た心は有らざれども、佛、心に化を念じて、化をして語らしめんと欲すれば、卽便ち皆語るなり。

問うて曰く、佛は今般若波羅蜜を說かんと欲したまふ。何を以てか、化佛をして六波羅蜜を說かしむるや。

答へて曰く、是の六波羅蜜及び般若波羅蜜は、一法にして異なること無し。是の五波羅蜜は、般若波羅蜜を得ざれば、波羅蜜と名けず、檀波羅蜜の如きは、般若波羅蜜を得ざれば、世界の有盡法の

阿難の言さく、「唯だ願くは、見たてまつらんと欲す」と。佛、時に卽ち一切の衆會をして、皆な無量壽佛世界の嚴淨を見せしめたまふ。佛の舌相を見ることも亦復た是の如し。佛は廣長の舌相を以て、遍ねく三千大千世界を覆ひ已り、然して後便ち笑ひたまへり。笑ふの因緣は上に說くが如し。

問うて曰く、前に已に舌相より光明を出せり。今何を以ての故に、舌根より復た光明を放つや。

答へて曰く、一切をして重信を得せしめんと欲するが故に、又舌相の色は、珊瑚の如く、金光明淨にして、共に相發起するを以ての故に、復た光を放ちたまふ。　復次に、是の諸の光明は、變じて千葉の金色寶華と成り、舌相より此の千葉の金色寶華を出し、光明徹照して、日の初めて出づるが如し。

問うて曰く、何を以ての故に光明の中より、變化して此の寶華を作すや。

答へて曰く、佛、坐せんと欲したまふが故なり。

問うて曰く、諸の床に坐すべし、何ぞ必ずしも蓮華なるや。

答へて曰く、床は世界の白衣の坐法と爲す。又蓮華は軟かく淨きを以て、神力を現さんと欲して、能く其の上に坐して、花をして壞れざらしむるが故なり。又妙法の座を莊嚴するを以ての故なり。又諸の華は、皆小なるを以て、此の華の香淨くして大なるに、如くもの無し。人中の蓮華は、大なること尺に過ぎず。漫陀耆尼池、及び、阿那婆達多池の中の蓮華は、大さ車蓋の如し。天上の寶蓮華は、復た此よりも大なり。是れ則ち、結跏趺坐を容るべし。佛の坐したまふ所の華は、復た此に勝れたること百千萬倍せり。又此の蓮華の臺の如きは、嚴淨香妙にして坐すべし。

復次に、劫盡き燒る時は、一切皆空なり。衆生の福德の因緣力の故に、十方より風至り、相對し、相觸れて能く大水を持す。水上に一千頭の人にして二千の手足なるあり。名けて[四]韋紐と爲す。是の人は臍の中より、千葉の金色の妙寶蓮花を出す、其の光の大に明かなること、萬日の俱に照すが

【四】韋紐（Viṣṇu）。

淨信の心にて佛に施しての大果報を得るを見るも、亦た此の樹の因は少にして、報多きが如し。又是れ、如來の福田の良美の致す所なり」と。婆羅門は心開け意解し、五體を地に投し過を悔いて佛に向ひ、「我が心無狀に愚にして、佛を信ぜざりき」と。佛、爲に種種に說法したまへば[二]初道果を得たり。卽時に手を擧げて、大に聲を發して言く、「一切の衆人よ、甘露の門は開けたり、如何なれば出でざる」と。一切の諸の婆羅門は、皆五百の金錢を送つて王に與へ、佛を迎へて供養し、皆言く、「甘露味を得るに、誰か當に此の五百の金錢を惜むべき」と。衆人みな去りて、制限の法は破れたり。是の婆羅門の王も亦た臣民と共に佛法に歸命し、城中の人は一切皆な淨信を得たり。是の如く佛、廣長の舌相を出したまふは、信ぜざる者の爲の故なり。

問うて曰く、婆羅門の爲の如きは、舌相を出して面を覆ふも、今ま舌相の光明は、何を以てか乃ち三千大千世界に至るや。

答へて曰く、面の髮際を覆ふは小信の爲の故なり。今は般若波羅蜜の大事を興すが爲の故なれば、廣長の舌相は三千大千世界を覆ふなり。

問うて曰く、是の一城の中の人、盡く此の面を覆ふの舌相を見るを得ることすら猶尙難しと爲す。何に況んや、今摩訶般若波羅蜜を說くに、一切の大會に、此及び他方の無量の衆集りて、而も盡く見ることを得るをや。又人の目に觀る所は數里に過ぎざるを以て、今三千大千世界に遍しと言ふは、むしろ大にすぎて信じ難し。

答へて曰く、佛は方便を以て其の神力を借り、能く一切をして皆な舌相の此の三千大千世界を覆ふことを見せしめ給ふ。若し神力を加へずんば、復た十住[三]と雖も亦た佛心を知らず。若し神力を加ふれば、乃ち畜生に至るも、能く佛心を知る。般若波羅蜜の後品の中に說くが如し。一切の衆人皆な阿閦佛會を見ること、眼と對を作す。亦た佛、阿彌陀佛の世界の種種の嚴淨を說きたまふときの如し、

【二】初道果。聲聞四果の初の須陀洹、卽ち預流果。

【三】十住。菩薩の階位に本論には十住、十行、十迴向、十地、妙覺、等覺の四十二位を說く。十位とは、發心、治地、修行、生貴、方便具足、正心、不退、童眞、法王子、灌頂の十である。

欲すれども、更に得ること能はず。今此の弊食を、佛須ゐたまはゞ取りたまふ可し」と。佛は其の心の信敬にして清淨なることを知り、手を申べ鉢を以て其の施食を受けたまふ。佛、時に卽ち笑ひたまひ、五色の光を出して、普ねく天地を照らし、還つて眉間の相より入る。阿難合掌して、長跪し、佛に白さく、「唯だ然なり、世尊よ、今笑ひたまふ因緣の其の意を聞かんことを願ひたてまつる」と。佛、阿難に告げたまはく、「汝、老女人の信心にして、佛に食を施すを見るや不や」と。阿難言さく、「見る」と。佛の言はく、「是老女人は、佛に食を施すが故に、十五劫の中に天上の人の間に、福を受け快樂にして惡道に墮せず、後、男子の身を得て、出家し道を學んで辟支佛と成り、無餘涅槃に入らん」と。爾の時に、佛の邊に一の婆羅門あり、立ちながら偈を說いて言く、

『汝は是れ日種刹利の姓にして、淨飯國王の太子なり。而るに食を以ての故に大妄語せり、此の
　如きの臭食の報何ぞ重からんや。』

是の時に、佛は廣長舌を出し、面上を覆ふて髮の際に至れり。婆羅門に語つて言はく、「汝、經書を見るに、頗し此の如きの舌ある人にして、而も妄語を作すや不や」と。婆羅門言く、「若し人の舌能く鼻を覆へば言に虛妄なし、何に況んや。乃ち髮の際に至るをや。我は心に佛の必ず妄語したまはざるを信ずれども、小施にして報多きこと是の如くなるを解せず」と。佛、婆羅門に告げたまはく、「汝、頗し曾つて世に希有にして見難きところの事を見しや不や」と。婆羅門の言く、「見たり。我曾て婆羅門と共に道中を行くに尼拘盧陀樹の蔭、賈客の五百乘の車を覆へども、蔭は猶盡きさるを見たり。是れ謂ゆる希有にして見難き事なり」と。佛の言はく、「此の樹の種子其形大なりや小なりや」と。答へて言く、「大さ芥子の三分の一の如し」と。佛の言はく、「誰か當に汝が言を信ずべき者ぞや。樹は大なること乃ち爾く、而して種子は甚だ小なるを」と。婆羅門の言はく、「實に爾なり。世尊よ、我は眼を以て之を見たり、虛妄に非るなり」と。佛の言はく、「我も亦た此の如し。老女人が

心に歡喜せざれども、佛の常光を見れば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に至る。

【經】爾の時に、世尊は廣長舌相を出だし、遍ねく三千大千世界を覆ひ、熙怡して笑ひて、其の舌根より、無量千萬億の光を出したまふ。是の一一の光は、化して千葉の金色の寶華と成り、是の諸の華の上に皆化佛あつて、結跏趺坐し、六波羅蜜を說きたまふ、衆生の聞く者、必ず阿耨多羅三藐三菩提を得。復た十方の恒河の沙の如きの等諸佛の世界に至るも、皆亦是の如し。

【論】問うて曰く、佛世尊の如きは、大德にして尊重なり、何を以ての故に廣長の舌を出して、輕相の如くに似たるや。

答へて曰く、上の三種の放光は、十方の衆生を照して、度脫することを得せしむ。今口ずから摩訶般若波羅蜜を說きたまはんと欲す。摩訶般若波羅蜜は、甚深にして、解し難く、知り難く、信受すべきこと難し。是の故に、廣長の舌を出して證と爲す。舌相是の如くなれば、語は必ず眞實なり。昔一時、佛は舍婆提國に於いて、受歲し竟りたまふ。阿難は佛に從つて諸國に遊行し、婆羅門城に到らんと欲する時の如し。婆羅門城の王、佛の神德、能く衆生を化し、群心を感動したまふを知り、「今此に來り到らば、誰か復た我を樂はん」と、便ち制限を作して、「若し佛に食を與へ、佛語を聽く者あらば、五百の金錢を輸せん」と。制限を作して後、佛、其の國に到り、阿難を將ゐて鉢を持し、城に入つて乞食したまふに、城中の衆人、門を閉ぢて應ぜず、佛は空鉢にして出でたまひき。是時に一家に一の老いたる使人あり。破れたる瓦器を持し、臭き糯淀を盛り、門を出でゝ之を棄つ。佛世尊の空鉢にして來たまふを見て、老いたる使人は、佛の相好の金色の白毫・肉髻・丈光あつて、鉢空しく食なきを見、見已つて思惟すらく、「此の如きの神人は、應に天厨を食すべし。今自ら身を降し、鉢を持して行乞したまふは、必ず是れ慈にして一切を愍みたまふが故ならん」と。信心淸淨にして、好き供養せんと欲すれども、願の如くする由なし。慚愧して佛に白さく、「供を設けんと思

卷の第八

初品第十四……「放光」釋論の餘

【經】爾の時に、世尊は常光明を以て、遍ねく三千大千世界を照し、亦東方の恒河の沙の如き等の諸佛の世界に至る。乃至十方も亦復是の如し、若し衆生あつて斯の光に遇ふ者は必ず阿耨多羅三藐三菩提を得ん。

【論】問うて曰く、上に已に擧身微笑し、毛孔より光明を放ちたまへり。今何を以てか復たび常光を放つて、十方を照すと云ふや。

答へて曰く、人あり、異なれる光明を見れば佛の光に非ずと謂ひ、佛の常光の轉た大なるを見ては心則ち歡喜し、「此れ實の佛の光なり」と(謂ひ)。便ち必ず阿耨多羅三藐三菩提に至ればなり。

問うて曰く、云何なるを常光と爲すや。

答へて曰く、佛身の四邊に各一丈の光明あり。菩薩生ずれば便ち此あり。是れ三十二相の一なり名けて丈光の相と爲す。

問うて曰く、佛は何を以ての故に、光常に一丈にして多からざるや。

答へて曰く、一切の諸佛の常光は無量にして、常に十方世界を照す。釋迦牟尼佛の神通身の光も無量なり。或は一丈・百丈・千・萬・億乃至三千大千世界乃至十方に滿つこと、諸佛の常法の如し。但だ[一]五濁世に於ては、衆生の少德・少智の爲の故に、一丈の光明を受く。若し多光を受くれば、今の衆生は薄福・鈍根にして、目、其の明に堪へず。人、天の身を見れば、眼則ち明を失するが如し。光盛にして、眼微かなるを以ての故なり。若し衆生利根にして福重ければ、佛は則ち之が爲に無量の光明を現じたまふ。　復次に人あり、佛の常光を見て、歡喜して得度す。譬へば國王、常食の餘を以て諸の群下に賜ふに、得るもの大に喜ぶが如し。佛も亦た是の如く、人あり、佛の種種の餘光を見ては、

【一】五濁。劫、見、煩惱、衆生、命、の五。

【論】問うて曰く、上に已に擧身微笑すと云ふ。今何を以ての故に、復た一切の毛孔、皆な笑ふや。答へて曰く、擧身微笑するは、是れ麁分なり。今一切の毛孔皆笑ふは、是れ細分なり。復次に、先の擧身微笑するの光明は有數なり。今一切の毛孔皆笑ふは、光明あつて而も無數なり。復次に、先の擧身の光明に、未だ度せざる所の者は、今毛孔の光明に値うて、即便ち度することを得。譬へば樹を搖がして菓を取るに、熟する者は前に墮ち、若し未だ熟せざる者は、更に復た後に搖がすを須ふるが如し。又魚を捕ふるに、前の網に盡さゞれば、後の網にて乃ち得るが如し。笑ふの因緣は上に説くが如し。

ての故に、恒河の沙を以て喩と爲して餘の河を取らず。

問うて曰く、恒河の中の沙は幾許ありと爲すや。

答へて曰く、一切の算數の知る能はざる所なり、唯だ佛及び法身の菩薩のみ有つて能く其の數を知る。佛及び法身の菩薩は、一切の閻浮提の中の微塵の生滅の多少すら皆能く數へ知れり。何に況んや恒河の沙をや、佛、祇桓の外の林中の樹下に在して、坐したまひし時の如し。一婆羅門あり、來つて佛の所に到り、佛に問ひたてまつる、「此の樹林に、幾葉ありや」と。佛、卽時に便ち答へたまはく、「若干の數あり」と。婆羅門は心に疑ふらく、「誰か證知する者あらんや」と。婆羅門去つて一樹の邊に至り、一樹の上の少しばかりの葉を取つて藏し、還つて佛に問ひたてまつる、「此の樹林には、定んで幾葉ありや」と。卽ち答へて「今や若干の葉を少く」と、其の取る所の如く之を語りたまふ。婆羅門知り已つて、心に大に敬ひ信じ、佛に求めて出家して、後、阿羅漢道を得たり。是を以ての故に、佛は能く恒河の沙の數を知りたまふことを知る。

問うて曰く、幾許の人あつてか、佛の光明に値うて、必ず阿耨多羅三藐三菩提を得るや。若し光明に値へば便ち道を得るとせば、佛には大慈あり、何を以てか常に光明を放つて、一切をして道を得せしめざるや。何ぞ持戒・禪定・智慧を須つて、然して後に道を得んや。

答へて曰く、衆生は種種の因緣あれば、度を得ること同じからず。禪定して度を得る者あり、持戒・說法して度を得る者あり、光明、身に觸れて度を得る者あり。譬へば城に多くの門ありて、入る處は各各なれども、至る處は異ならざるが如し。人、光明の身に觸れて度を得る者あり、若しくは光明を見、若しくは身に觸るも度を得ざる者あり。

【經】爾の時に、世尊の擧身の毛孔は、皆亦微笑して、諸の光明を放ち、遍ねく三千大千世界を照し、復十方の恒河の沙の如き等の世界に至る。若し衆生あつて、斯の光に遇ふ者は、必ず阿耨多羅三藐三菩提を得ん。

り、乃至大梵天は皆七寶の地にして皆風の上に在り、此の三千大千世界に光明遍ねく照し、照し竟つて餘光過ぎて出でて、東方の恒河沙等の如き諸の世界を照す。南西北方四維上下も亦復た是の如し。

問うて曰く、是の光は遠く照すに、云何なれば滅せざるや。

答へて曰く、光明は、佛の神力を以て本と爲す、本在るが故に滅せず。譬へば龍泉の如し、龍の力の故に水は竭きず。是の諸の光明は佛の心力を以ての故に、遍ねく十方を照し、中間にして滅せざるなり。

問うて曰く、閻浮提の中の種種の大河の如きは、亦た恒河に過ぐる者あり。何を以てか常に恒河の沙等と言ふや。

答へて曰く、[三四]恒河は沙多し、餘の河は爾らず。　復次に、是の恒河は是れ佛の生れたまふ處、遊行したまふ處にして、弟子は眼に見るが故に、以て喩と爲したまふ。　復次に、佛は閻浮提に出でたまふ。閻浮提の四大河は北邊より出でて、四方の大海の中に入る。北邊の雪山の中に阿那婆達多池あり。是の池の中に金色の七寶の蓮華に大さ車蓋の如き有り。阿那婆達多龍王は、是れ七住の大菩薩なり。是の池の四邊に四の流水あり。東方は象頭、南方は牛頭、西方は馬頭、北方は師子頭なり。東方の象頭より恒河を出す、底に金沙あり。南方の牛頭は、[三五]辛頭河を出す、底に亦た金沙あり。西方の馬頭は、婆叉河を出す、底に亦た金沙あり。北方の師子頭は、[三六]私陀河を出す、底に亦た金沙あり。是の四河は、皆な北山より出づ。恒河は北山より出でて、東海に入り、辛頭河は北山より出でて南海に入り、婆叉河は北山より出でて西海に入り、私陀河は北山より出でて北海に入る、是の四河の中にて、恒河は最大なり。四の遠き(よも)の諸人の經書は、皆な恒河を以て福德の吉河と爲す。若し中に入つて洗ふ者は、諸罪垢惡、皆悉く除き盡す。人、此の河を敬事して共に識知するを以ての故に、恒河の沙を以て喩と爲す。　復次に、餘の河は名字は轉ずること有ども、此の恒河は世世に轉ぜず。是を以

【三四】恒河 (Gangā)。

【三五】辛頭河 (Sindhu)。現在のインダス河。

【三六】私陀 (Sitā)。

問うて曰く、何を以てか先きに東方を照し、南・西・北を後にするや。

答へて曰く、日の出づるは東方を上と爲すを以ての故に、佛は衆生の意に隨つて、先づ東方を照したまふ。復次に、倶に一難あり。若し先きに南方を照さば、當に「何を以てか先づ東・西・北方を照さざる」と言ふべし。若し先きに西方・北方を照すも亦た爾なり。

問うて曰く、光明は幾時にか當に滅すべきや。

答へて曰く、佛は神力を用ゐ、住せんと欲すれば便ち住したまふ。神力を捨つれば便ち滅す。佛の光は燈の如く、神力は脂の如し。若し佛、神力を捨てたまはざれば光滅せざるなり。

【經】光明出でて東方、如恒河沙等の世界を過ぐ、乃至十方も亦復た是の如し。

【論】問うて曰く、云何なるを三千大千世界と爲すや。

答へて曰く、佛、雜阿含の中に分別して說きたまへり。千の日・千の月・千の閻浮提・千の瞿陀尼・千の鬱怛羅越・千の弗婆提・千の須彌山・千の四天王天處・千の三十三天・千の夜摩天・千の兜率陀天・千の他化自在天・千の他化自在天・千の梵世天・千の大梵天・是を小千世界と名け、周利と名く。周利千世界を以て一と爲し、一より數へて千に至るを、二千中世界と名く。二千中世界を以て一と爲し、一より數へて千に至るを、三千大千世界と名く。初の千は小、二の千は中、第三を大千と名く。千と千と重ねて數ふるが故に大千と名く。二に過ぎ千に復するが故に三千と言ふ。是を合し集めて、百億の日月乃至百億の大梵天と名け、是を三千大千世界と名く。是れは一時に生じ一時に滅す。有人の言く、「住する時一劫、滅する時一劫、還た生ずる時一劫、是れ三千大千世界なり」と。大劫は亦三種に破らる。水と火と風とこれなり。小劫は亦三種に破らる。刀と病と飢とこれなり。此の三千大千世界は虛空の中に在り。風は水を上にし、水は地を上にし、地は人を上にす。須彌山に二天處あり、四天處と三十三天處となり。餘殘は夜摩天等の福德の因緣たる七寶の地なり。風は空中に擧

光明を放つ。有人の言く、一切の身分は足を立ち處と爲すが故に最大なり。餘は爾らず。是の故に佛は初めに足下より、六百萬億の光明を放ち、以て衆生に示したまふ。三十二相の中の、初種なる足下安住相の如く、一切の身分は皆神力あり。

問うて曰く、何の三昧に依り、何の神通に依り、何の禪定の中より、此の光明を放ちたまふや。

答へて曰く、三昧王三昧の中より此の光明を放ちたまふ。六通の中の如意通、四禪の中の第四禪より此の光明を放ちたまふ。第四禪の中の火勝處の火は、一切此の中に入りて光明を放つ。　復次に、佛の初めて生れたまふ時、初めて佛と成りたまふ時、初めて法輪を轉じたまふ時、皆無量の光明を放ちて十方に滿てたまふ。何に況んや、摩訶般若波羅蜜を說きたまふの時にして光を放ちたまはざらんや。譬へば轉輪聖王の珠寶は常に光明あつて、王の軍衆を照すこと、四邊各一由旬なるが如し。佛も亦是の如く、衆生緣の故に、若し三昧に入らずとも、恒に常光を放ちたまふ、何となれば佛は衆の法寶を成じたまふを以ての故なり。

【經】 是の諸の光より大光明を出し、遍ねく三千大千世界を照し、三千大千世界より遍ねく東方如恒河沙等の諸の世界を照す。南西北方四維上下も亦復た是の如し。若し衆生あつて、斯の光に遇ふ者は必ず阿耨多羅三藐三菩提を得ん。

【論】 問うて曰く、火の相は上を焰し、水の相は下を潤ほし、風の相は傍を行くが如く、是の光明の火氣は應當に上に去るべし。云何にして遍ねく三千大千世界及び十方世界に滿つるや。

答へて曰く、光明に二種あり。一には火氣、二には水氣なり。日珠は火氣にして、月珠は水氣なり、火の相は焰上すと雖も、而も人の身中の火は上下に遍ねく到る。日火も亦た爾なり。是の故に夏月には地水盡く熱す。是を以ての故に火は皆上らざることを知る。　復次に、是の光明は、佛の力なるが故に、遍ねく十方に至る。譬へば强弓の箭を遣れば、向ふ所に隨つて至るが如し。

答へて曰く、諸の天人は能く光を放つと雖も限あり量あり。日月の照す所は唯だ四天下のみ。佛光明を放ちたまへば三千大千世界に滿ち、三千大千世界の中より出でて、遍ねく下方に至る。餘人の光明は唯だ能く人をして歡喜せしむるのみ。佛光明を放ちたまへば能く一切をして、法を聞き度するを得せしむ。是を以て異れりと爲す。

問うて曰く、一身の中の如きは、頭を最上と爲す。何を以ての故に、先づ足の下より光を放つや。

答へて曰く、身の住處を得るは皆な足に由ればなり。　復次に、一身の中、頭は貴く足は賤しと雖も、佛は自ら光を貴びたまはず、利養の爲にせず、是を以ての故に賤しき處より光を放ちたまふ。復次に、諸の龍・大蛇・鬼神は口中より光を出し、前の物を毒害す。若し佛の口より光明を放ちたまはば、衆生は怖畏して、「是れ、何の光明ぞ」と。復た害を被るを恐れん。是故に足の下より光を放ちたまふ。

問うて曰く、足の下の六百萬億の光明乃至肉髻は是れ皆數ふ可くも、三千大千世界は尙ほ滿つべからず、何に況んや十方をや。

答へて曰く、此の身光は是れ諸光の本なり、本より枝流して無量無數なり。譬へば迦羅求羅蟲は其の身微細なれども、風を得れば轉た大にして、乃至能く一切を呑食するが如し。光明も亦た是の如く、度すべきの衆生を得れば、轉た增して限なし。

【經】足の十指・兩の踝・兩の蹲・兩の膝・兩の髀・腰・脊・腹・背・臍・心・胸・德・字・肩・臂・手の十指・項・口・四十の齒・鼻の兩孔・兩眼・兩耳・白毫の相・肉髻・各各六百萬億の光明を放つ。

【論】問うて曰く、足の下の光明は能く三千大千及び十方の世界を照す、何ぞ身分各各六百萬億の光明を放つことを用ふるや。

答へて曰く、我先に言へり。足の下の光明は下方を照せども餘方に滿たず、是の故に更に身分の

便・光明・神德をもて、一切衆生を敎化し、心を調柔にし、然して後、能く般若波羅蜜を信受せしめんとしたまふ。是を以ての故に、笑ひに因つて光を放ちたまふ。笑ふに種種の因緣あり。人、歡喜して笑ふあり、人、瞋恚して笑ふあり、人を輕んじて笑ふあり、異事を見て笑ふあり、羞恥すべき事を見て笑ふあり、殊方の異俗を見て笑ふあり、希有の難事を見て笑ふあり。今は是れ第一希有の難事なり。諸法の相は生ぜず滅せず、眞空にして字なく名なく、言なく說なけれども、而も名を作し字を立て、衆生の爲に說いて、解脫を得せしめんと欲す、是れ第一の難事なり。譬へば百由旬の大火聚に、人あつて乾草を負ふて火中に入り、過るも一葉をも燒かざるが如き、是を甚だ難しと爲す。佛も亦た是の如く、八萬の法の衆の名字の草を持つて、諸法實相の中に入り、染著の火の爲に燒かれずして、直に過ぎて無礙なる、是れ甚だ難しと爲す。是の難事を以ての故に笑ふ。是の如き種種の希有の難事の故に、擧身微笑したまふ。

【經】足下の千輻相輪の中より六百萬億の光明を放つ。

【論】問うて曰く、佛は何を以ての故に、先づ身光を放ちたまふや。

答へて曰く、上の笑ひの因緣の中に已に答へたり。今當に更に說くべし。人あり、佛の無量の身より大光明を放ちたまふを見て、心信に清淨にして恭敬するが故に、常人に非ざるを知る。復次に、佛は智慧の光明を現さんと欲し、初の相なるが故に、先づ身光を出したまふ。衆生は佛の身光既に現るれば、智慧の光明も亦た應に出づべきを知る。復次に、一切衆生は常に欲樂に著す、五欲の中には第一なる者は色なり。此の妙光を見れば、心必ず愛著して、本と樂ふ所を捨つ。其の心をして漸やく欲を離れしめ、然る後爲に智慧を說くなり。

問うて曰く、其の餘の天人は亦た能く光を放つ、佛の光明を放ちたまふと、何等の異なること有りや。

淨天とは佛・辟支佛・阿羅漢是なり。淨天の中の尊者は是れ佛なり。今ま天眼と言ふも亦咎なきなり。「天眼を以て世界を觀視する」とは、世界の衆生は常に安樂を求め、而も更に苦を得て心は吾我に著す。是の中に實には吾我なし、衆生は常に苦を畏れて而も苦を行ふ。盲人が好道を求めて、反つて深坑に墮するが如し。是の如き等をば、種種に觀已つて、身を擧げて微笑したまふ。

問うて曰く、笑は口より出るも、或時は眼笑ふ。今云何なれば一切の身笑ふと言ふや。

答へて曰く、佛は世界の中の尊にして自在を得、能く一切の身をして、口の如く眼の如くならしむるが故に皆能く笑ふ。　復次に、一切の毛孔皆開くが故に名けて笑ふと爲す。口笑ひ、歡喜するに由るが故に一切の毛孔皆開くなり。

問うて曰く、佛は至つて尊重なり、何を以ての故に笑ひたまふや。

答へて曰く、大地の如きは無事及び小因緣を以て動かず。佛も亦是の如く、若し無事及び小因緣なれば、則ち笑ひたまはず。今は大因緣の故に一切の身笑ひたまふ。云何なるを大と爲す、佛は摩訶般若波羅蜜を說かんと欲したまふ、無央數の衆生は當に佛種を續ぐべし。是を大因緣と爲す。

復次に、佛の言はく、「我は世世曾つて小蟲・惡人と作り、漸漸に諸の善本を集め大智慧を得て、今自ら佛と作ることを致す。神力無量にして最上最大なり。一切衆生も亦爾ることを得べし。云何んぞ空しく勤苦を受けて小處に墮するや」と。是を以ての故に笑ひたまふ。

復次に、小因にして大果、小緣にして大報あり。佛道を求むるが如きは、一偈を讃し、一たび南無佛と稱し、一捻の香を燒くも、必ず佛と作ることを得。何に況んや、諸法は實に生ぜず、滅せず、生ぜるにもあらず滅せざるにもあらざることを聞き知つて、因緣の業を行ずれば、亦(佛となるを)失することとなし。是を以ての故に笑ひたまふ。

復次に、般若波羅蜜の相は、清淨にして虛空の如し、與ふ可らず、取るべからず。佛は種種の方

【經】爾の時に世尊は三昧より、安庠として起ち、天眼を以て世界を觀視し、擧身微笑したまふ。

【論】問うて曰く、云何なれば世尊は三昧王三昧に入りて、施作する所なくして、定より起つて世界を觀視したまふや。

答へて曰く、佛は是の三昧王三昧に入りて、一切の佛法の寶藏を悉く開いて悉く看たまふ。是の三昧王三昧の中に觀已つて自ら念じたまはく、「我が此の法藏は無量無數にして思議す可らず」と。然して後、三昧より安庠として起ち、天眼を以て衆生を觀、衆生の貧苦を知りたまふ。此の寶藏は因緣に從つて得、一切衆生も皆亦た得べし。但だ癡冥に坐して、求めず索めざるのみ。是を以ての故に擧身微笑したまへり。

問うて曰く、佛には佛眼・慧眼・法眼有りて天眼よりも勝れたり、何を以てか天眼を用ゐて世界を觀視したまふや。

答へて曰く、肉眼の見る所は遍ねからざるが故なり。慧眼は諸法の實相を知り、法眼は、「是の人は何の方便を以て何の法を行じて、道を得るか」を見、佛眼は、一切の法を現前に了了と知るを名く。今天眼は、世界及び衆生を緣じて、障なく礙なし、餘眼は爾らず。慧眼・法眼・佛眼は勝れたりと雖も、衆生を見るの法には非ず。衆生を見んと欲すれば、唯だ二眼を以てす。肉眼と天眼となり。肉眼は遍ねからず。障る所あるを以ての故に、天眼を用ゐて觀ずるなり。

問うて曰く、今是の眼は佛に在り、何を以てか、名けて天眼と爲すや。

答へて曰く、此の眼は多く天の中に在り、天眼の見る所は山壁樹木を礙へず。若し人精進・持戒・禪定・行力にて得ば、是れ生分に非ず、是を以ての故に名けて天眼と爲す。　復た次に、人は多く天を貴び、天を以て主と爲す。佛は人心に隨ひたまふ。是を以ての故に名けて天眼と爲す。　復次に、天に三種あり、名天と生天と淨天となり。名天とは天王・天子是なり。生天とは釋梵の諸天是なり。

變化あるを以てなり」と、謂つて人に非ずと爲さん。此の疑を斷ぜんが故に佛は三昧王三昧に入りたまふ。

復次に、佛もし餘の三昧の中に入りたまはば、諸天・聲聞・辟支佛、或は能く測り知らん。佛の神力は大なりと言ふと雖も、猶ほ知る可くんば、敬ふ心重からず、是を以ての故に、三昧王三昧の中に入りたまふ。一切諸の衆聖乃至十住の菩薩も測り知ること能はず。佛心は何を依る所とし、何を緣ずる所とするを知らず。是を以ての故に佛は三昧王三昧に入りたまふ。

復次に、佛は時に大光明を放ち、大神力を現じたまふことあり。生れたまふ時、道を得たまふ時、初めて法輪を轉じたまふ時、諸天・聖人の大に集會する時、若くは外道を破する時の如きは、皆大光明を放ちたまふ。今其の殊特を現はさんと欲するが故に、大光明を放ち、十方の一切の天人・衆生及び諸の阿羅漢・辟支佛・菩薩をして、皆見知することを得せしむ。是を以ての故に三昧王三昧に入りたまふ。

復次に、光明神力に下・中・上あり。呪術、幻術の能く光明變化を作すは下なり。諸天龍神の報得の光明神力は中なり。諸の三昧に入り、今世の功德心力を以て大光明を放ち大神力を現ずは上なり、是を以ての故に佛は三昧王三昧に入りたまふ。

問うて曰く、諸の三昧の如きは各各相あり、云何にして一切の三昧悉く其の中に入るや。

答へて曰く、是の三昧王三昧を得る時は、一切の三昧は悉く得るが故に、悉く其の中に入ると云ふ。是の三昧力の故に、一切の諸の三昧は皆得ること無量無數にして思議す可らず、是を以ての故に名けて入ると爲す。復次に、是の三昧王三昧の中に入れば、一切の三昧は、入らんと欲すれば即ち入る。復次に、是の三昧王三昧に入れば、能く一切の三昧の相を觀ること山上より下を觀るが如し。復次に、佛は、是の三昧王三昧の中に入つて、能く一切十方の世界を觀じ、亦た能く一切の衆生を觀ず。是を以ての故に三昧王三昧に入りたまふ。

復次に、初禪は火に燒かれ、二禪は水の及ぶ所、三禪は風の至る所なるも、四禪には此の三の患なく、出入の息なく、念を捨てて淸淨なり。是を以ての故に王三昧は應に第四禪の中に在るべし。好き寶物は、之を好き藏に置くが如し。　更に有人の言く、佛の三昧は誰か能く其の相を知らんや。一切の諸佛の法は一相、無相、無量無數にして不可思議なり。諸餘の三昧すら尙ほ量るべからず、數ふ可からず、思議す可らず、何に況んや三昧王三昧をや。此の如きの三昧は唯だ佛のみ能く知りたまへり。佛の神足持戒の如きは、尙ほ知る可らず、何に況んや三昧王三昧をや。

復次に、三昧王三昧は、一切の諸の三昧皆其の中に入るが故に、三昧王三昧と名く。譬へば、閻浮提の衆川萬流は皆な大海に入るが如く、亦た一切の民人は皆國王に屬するが如し。

問うて曰く、佛は一切智にして、知らざる所なし。何を以ての故に、此の三昧王三昧に入つて、然して後に能く知りたまふや。

答へて曰く、智慧は因縁より生ずることを明にせんと欲するが故なり。外道の六師の輩の「我等が智慧は一切時に常に有り常に知る」と言ふを止めんが故なり。是を以ての故に、佛は三昧王三昧に入るが故に知り、入らざれば則ち知らずと言ふなり。

問うて曰く、若し是の如くんば、佛の力は減劣なりや。

答へて曰く、是の三昧王三昧に入るは、時に以て難しと爲さず、念に應じて卽ち得、聲聞・辟支佛・諸の小菩薩の、方便して入るを求むるが如きには非ず。

復次に、是三昧王三昧の中に入れば、六神通をして十方に通徹して限なく量なからしむ。

復次に、佛は三昧王三昧に入りて種種に變化して大神力を現はしたまふ。若し三昧王三昧に入らずして而も神力を現はさば、人あつて、心に念じて、「佛は幻力・呪術力を用ふ。或は是れ大力の龍神の力、或は是れ天にして、是れ人に非ず。何となれば、一身より無量の身を出だし、種種の光明

を求め、或は常に立ち、或は足を荷ふ、是の如き狂猾は、心は邪海に沒し、形は安隱ならず、是を以ての故に佛は弟子に敎へて結跏趺し、身を直くして坐せしむ。何となれば身を直くすれば心を正し易きが故なり。其身を直く坐すれば則ち心嬾からず、端心正意にして繫念前に在り。若し心馳散すれば、之を攝めて還らしむ。三昧に入らんと欲するが故に種種の馳念は皆亦た之を攝む。此の如く繫念して三昧王三昧に入る。

　云何なれば三昧王三昧と名くるや。是の三昧は諸の三昧の中に於て、最も第一にして、自在に能く無量の諸法を緣ず。諸人の中にては王は第一、王の中にては轉輪聖王は第一、一切の天上天下にては佛第一なるが如く、此の三昧も亦た是の如く、諸の三昧の中に於て最も第一なり。

　問うて曰く、若し佛力を以ての故に、一切の三昧は皆第一なるべくんば、何を以ての故に獨り三昧王(三昧)を稱して第一と爲すや。

　答へて曰く、佛の神力を以ての故に、佛の行じたまふ所の諸の三昧は、皆第一なるべしと雖も、然も諸法の中には應に差降あるべし。轉輪聖王の衆寶は一切諸王の寶に勝ると雖も、然も此珍寶の中にも自ら差別ありて、貴賤懸に殊なれるが如し。

　是三昧王三昧は、何の定にか攝し、何等の相あるや。有人の言く、三昧王三昧を名けて自在の相と爲す、善く五衆を攝し、第四禪の中に在り。何となれば一切の諸佛は第四禪の中に於て、見諦道を行じ阿那含を得、即時に十八心の中に佛道を得、第四禪の中に在りて壽を捨て、第四禪の中に於て起つて無餘涅槃に入ればなり。第四禪の中に〔三二〕八生住處あり。〔三三〕背捨・勝處・一切入は、多く第四禪の中に在り。第四禪を不動と名け、禪定の法を遮るものなし。欲界の中の諸の欲は禪定心を遮る、初禪の中には覺觀の心動き、二禪の中には大喜動き、三禪の中には大樂動く、四禪の中には動くこと無し。

【三二】八生住處。第四禪の中にて生ずるところ。即ち無雲、福生、廣果、無煩、無熱、善見、善現、色究竟の、八天なり。

【三三】背捨、勝處、一切入。背捨は、八背捨、八勝處、十一切入にして既註、猶ほ論二十一に說明あり。

金銀木石にて師子を作ると爲すや。又、師子は善獸に非ざるが故に、佛の須ひざる所なり。亦た因緣なきが故に來るべからず。

答へて曰く、是を號して師子と名くれども、實の師子には非ざるなり。佛は人中の師子たり。佛の坐したまふ處は、若くは床、若くは地なるも皆な師子座と名く。譬へば、今は國王の坐處をも、亦た師子座と名くるが如し。　復次に、王は健人を呼んで、亦た人師子と名け、人は國王を稱して、亦た人師子と名く。又師子の如きは、四足獸の中に、獨歩無畏にして、能く一切を伏す。佛も亦是の如く、九十六種の道の中に於て、一切を降伏して、畏るること無きが故に人師子と名く。

問うて曰く、多くの坐法あり、佛は何を以ての故に、唯だ結跏趺坐を用ゐたまふや。

答へて曰く、諸の坐法の中、結跏趺坐は最も安隱にして疲極せず。此は是れ坐禪の人の坐法なり。手足を攝持すれば心も亦た散ぜず。又た一切の四種の身儀の中に於いて、最も安隱なり。此は是れ禪坐にして、道を取る法の坐なり。魔王は之を見て其の心憂怖す。此の如きの坐は出家人の法なり。林樹の下に在りて結跏趺坐すれば、衆人は之を見て皆大に歡喜し、此の道人は必ず當に道を取るべしと知る、偈に說くが如し。

『若し結跏趺坐すれば、身安く三昧に入り、その威德を人敬仰すること。日の天下を照すが如し。

睡・嬾・覆の心を除き、身輕くして疲懈せず。覺悟も亦た輕便にして、安坐すること龍の蟠るが如し。

畫ける跏趺坐を見てすら、魔王は亦た愁ひ怖る。何に況んや入道の人の安坐して、傾き動ぜざるをや。』

是を以ての故に結跏趺坐す。

復た次に、佛は弟子に是の如く坐すべきを敎へたまふ。外道の輩あり、或は常に足を翹(つまだ)てゝ、道

薩なり。觀世音菩薩等は、他方の佛土より來れり、若し居家を說かば一切の居家の菩薩を攝す。出家と他方とも亦是の如し。

問うて曰く、善守菩薩は何の殊に勝れたること有りてか最も前に在いて說くや。若し最大なるものを前に在くならば、應に[三〇]遍吉・觀世音・[三一]得大勢菩薩等を說くべし。若し最小なるものを前に在くならば、應に肉身にして初發意なる菩薩等を說くべし。

答へて曰く、大を以てせず小を以てせず、善守菩薩は是れ王舍城の舊人、白衣の菩薩の中にて最大なるを以てなり。佛、王舍城に在して、般若波羅蜜を說きたまはんと欲す。是を以ての故に最も前に在いて說くなり。復次に、是の善守菩薩は無量の種種の功德あり、般舟三昧の中の如く、佛、自ら現前に其の功德を讚じたまへり。

問うて曰く、彌勒菩薩の若きは應に補處と稱すべし。諸餘の菩薩は、何を以てか復た尊位を紹ぐ者と言ふや。

答へて曰く、是の是の菩薩は、十方の佛土に於て皆な佛處を補せばなり。

初品第十四、……「放光」釋論

【經】爾の時に世尊は自ら師子座を敷き、結跏趺坐して身を直くし、繫念前に在つて、三昧王三昧に入りたまへば、一切の三昧は悉く其の中に入る。

【論】問うて曰く、佛には侍者及び諸の菩薩あり、何を以ての故に、自ら師子座を敷きたまふや。

答へて曰く、此は是れ佛の化して成したまふ所なり、以て大衆に適ふ可きを欲す。是を以ての故に阿難は、敷くを得る能はず。復次に、佛心の化作なるが如に「自ら敷く」と言ふなり。

問うて曰く、何を以て師子座と名くるや。佛が師子を化作すると爲すや。實の師子來ると爲すや。

【三〇】遍吉。普賢(Samantabhadra)菩薩なり。

【三一】得大勢至(Mahāsthāmaprāpta)。

戯と爲す。是の諸の菩薩は、諸の三昧に於て、自在力あつて、能く出で能く入ることも、亦復た是の如し。餘人は三昧の中に於て、能く自在に入れども、自在に住し、自在に出づること能はず。自在に住ずるもの有るも、自在に入り自在に出づること能はず。自在に出づること有るも、自在に住し自在に入ること能はず。自在に入り自在に住すること有るも、自在に出づること能はず。自在に住し自在に出づること有るも、自在に入ること能はず。是の諸の菩薩は能く三種自在なるが故に、「百千の三昧に遊戯し出生す」と言ふ。

【經】諸の菩薩は是の如き等の種種無量の功徳を成就す。

【論】是の諸の菩薩は佛と共に住し、其の功徳を讃ぜんと欲するも無量億劫にして盡すことを得べからず、是を以ての故に「無量の功徳を成就す」と言ふなり。

【經】其の名を颰陀婆羅菩薩[二五]・刺那伽羅菩薩[二六]・導師菩薩・那羅達菩薩・星得菩薩・水天菩薩・主天菩薩・大意菩薩・益意菩薩・増意菩薩・不虚見菩薩・善進菩薩・勢勝菩薩・常勤菩薩・不捨精進菩薩・日藏菩薩・不缺意菩薩・觀世音菩薩・文殊尸利菩薩[二七]・執寶印菩薩・常擧手菩薩・彌勒菩薩と曰ふ。是の如き等の、無量百千萬億那由他の諸の菩薩摩訶薩は、皆是れ補處にして尊位を紹ぐ者なり。

【論】是の如き等の諸の菩薩は、佛と共に王舍城の耆闍崛山の中に住す。

問うて曰く、是の如きの菩薩は衆多なり、何を以てか獨り二十二菩薩の名を說くや。

答へて曰く、諸の菩薩は無量千萬億にして、說いて盡くす可らず。若し都て說くも、文字の載すること能はざる所なり。　復次に、是の中に、二種の菩薩あり、居家と出家となり、善守等の十六の菩薩は、是れ居家の菩薩なり、颰陀婆羅居士菩薩は、是れ王舍城の舊人、寶積王子菩薩は、是れ毘耶離國の人、星得長者子菩薩は、是れ瞻波國の人、導師居士菩薩は、是れ舍婆提國の人、那羅達婆羅門菩薩は是れ[二八]彌梯維國の人、水天は、優婆塞の菩薩なり。[二九]慈氏・妙德菩薩等は、是れ出家の菩

【二五】颰陀婆羅菩薩。既註、割註ありて「秦に善守と言ふ」。とあり。

【二六】刺那伽羅菩薩。割註あり「秦に寶積と言ふ」。とある。

【二七】文殊尸利菩薩。割註あり「秦に妙德と言ふ」。

【二八】彌梯羅（Mithilā）。跋耆族（Vajji）の毘提波（Videha）の首都。

【二九】慈氏。彌勒（Maitreya）のこと。

とを得たり、是に因つて悟れり。一切諸法も皆是の如きや」と。是に於て[二二]颰陀婆羅菩薩の所に往き到り、是の事を問ふ。颰陀婆羅答へて言く、「諸法は實に爾なり、皆な念從り生ず」と、是の如く種種に此の三人の爲に方便して巧に諸法の空なるを說くに、是の時三人は卽ち阿鞞跋致を得たり。是の諸の菩薩も亦復た是の如く、諸の衆生の爲に種種に巧に法を說き、諸の見と纏と煩惱とを斷ず。是を「能く種種の見・纏及び諸の煩惱を斷ず」と名く。

【經】 百千三昧に遊戲し出生す。

【論】 諸の菩薩は禪定の心調ひ、淸淨の智慧・方便力の故に能く種種の諸の三昧を生ず。何等をか三昧と爲すや。善心一處に住して動ぜざる、是を三昧と名く。復た三種の三昧あり、[二三]有覺有觀と無覺有觀と無覺無觀三昧となり。復た四種の三昧あり、[二四]欲界繫三昧と色界繫三昧と無色界繫三昧と不繫三昧となり。是の中、用ふる所の菩薩の三昧は先に說くが如し。佛の三昧の中に於ては、未だ滿ぜず、勤行勤修するが故に「能く出生す」と言ふ。

問うて曰く、諸の菩薩は、何を以ての故に、是の百千種の三昧を出生し遊戲するや。

答へて曰く、衆生無量なれば、心行同じからず。利あり鈍あり、諸の結使に於て、厚きあり薄きあり、是の故に菩薩は百千種の三昧を行じ、其の塵勞を斷ず。譬へば諸の貧人の爲に大富ならしめんと欲せば、當に種種の財物を備へ、一切を備具して、然る後乃ち能く諸の貧者を濟ふべきが如し。又復た人の廣く諸病を治せんと欲せば、當に種種の衆藥を備へて、然る後に能く治するが如し。菩薩も亦是の如く、廣く衆生を度せんと欲するが故に種種百千の三昧を行ず。

問うて曰く、但だ當に此の三昧を出生すべし、何を以ての故に復た其の中に遊戲するや。

答へて曰く、菩薩、心に諸の三昧を生じ、欣樂して出入自在なるを、之を名けて戲と爲す、結愛の戲には非るなり。戲を自在と名く、師子は鹿の中に在つて、自在に畏なきが如し。故に名けて

【一九】 菴羅婆利（Āmrapālī）。賤族にして菴婆林に捨てられ、その番人に育てられる。よりて「菴婆林の番人の子」の意味なり。娼婦となり。美貌を以て鳴り、後に歸佛して、菴婆林を獻じ、比丘尼となる。

【二〇】 須蔓那（Sumanā）。

【二一】 優鉢羅槃那（Utpalavarṇā）。蓮華色。ベナレスの長者の女。數奇なる運命に戰ひ敗れて王舍城の娼女となり、美貌を以て鳴る。後に歸佛して比丘尼となる。

【二二】 颰陀婆羅（Bhadrapāla）。善守、賢護、妙護などゝ譯す。

【二三】 有覺有觀。新譯では有尋有伺、對象を觀ずるに麁想を覺または尋と云ひ、細想を觀または伺と云ふ。一、の有覺有觀は定に覺と觀と共に存するもの、初禪の根本定及び未到定、二の無覺有觀は觀のみあり初禪と二禪との中間、三、無覺無觀は覺觀ともになき至妙なる定、二禪より非想處に至る。

【二四】 欲界繫。「欲界に結びつける」と云ふ意味。以下色界繫等も同斷。

復[一一]三種の見あり、一切法忍と、一切法不忍と、一切法亦忍亦不忍となり。復た[一二]四種の見あり、世間常と、世間無常と、世間亦常亦無常と、世間亦非常亦非無常となり。我及び世間の有邊無邊も亦是の如し。[一三]死後如去あり、死後不如去あり、死後如去不如去あり、死後亦不如去亦不不如去あり。復た[一四]五種の見あり、身見と、邊見と、邪見と、見取と、戒取となり。是の如き等の種種の諸の見、乃至六十二見を斷ず。是の如き諸の見は種種の因緣より生じ、種種の智門より觀ぜられ、種種の師の邊に聞かる。是の如きの種種の相は能く種種の[一五]結使と爲り、因と作つて、衆生に種種の苦を與ふ。是を種種の見と名く。見の義は後に當に廣く說くべし。

[一六]纏とは十纏あり、瞋纏・覆罪纏・睡纏・眠纏・戲纏・掉纏・無慚纏・無愧纏・慳纏・嫉纏なり。

復次に、一切の煩惱は心を結繞するが故に、盡く名けて纏と爲す。煩惱とは能く心を煩はし、能く惱を作さしむるが故に名けて煩惱と爲す。煩惱に二種あり、內著と外著となり。內著とは五見と癡と慢等なり。外著とは婬・瞋等なり。無明は內外共なり。復た二種の結あり。一は愛に屬し、二は見に屬す。　復た三種あり、婬に屬し、瞋に屬し、癡に屬す。是を煩惱と名く。纏とは有人の言く、十纏ありと。有人の言く、五百の纏ありと。煩惱を一切結使と名く、結に九あり、使に七あり、合して九十八結と爲す。迦旃延子の阿毘曇の義の中に說くが如し。十纏と九十八結とを百八の煩惱と爲す。[一七]犢子兒の阿毘曇の中には、結使は亦た同じく、纏に五百ありと。是の如くの諸の煩惱を、菩薩は能く種種に方便して自ら斷じ、亦た能く巧に方便を以て他人の煩惱を斷ぜしむ。佛在す時の三人の如きは、[一八]伯、仲、季たり。聞くならく、「毘耶離國に婬女人あり、[一九]菴羅婆利と名く。舍婆提に婬女人あり、[二〇]須蔓那と名く。王舍城に婬女人あり、[二一]優鉢羅槃那と名くと。三人各各、人の「三女人は端正無比なり」と讚ずるを聞く有り、晝夜に專念し、心著して捨てず、便ち夢中に於て與に事に從ふを夢む。覺め已つて心に念ずらく、「彼の女も來らず、我も亦た往かず、而も婬事を辦ずるこ

【一一】三種の見。更に解いて書くならば「一切の法を許すこと」「許さゞること」「許しもし、許さずにもある」の三種の態度。

【一二】四種の見。「世間は常性なり」「無常なり」「常でもあり無常でもある」「その兩方でない」。

【一三】「死後何れへか行く」「行かぬ」「行きもし行きもせず」「その兩方でない」。

【一四】五種見。五見と名けられる。身見。自己及び對象が實存せりと迷斷す。邊見。斷、常等の二極端に僻執す。邪見。因果の理を無視す。見取（見）自己の誤見を固執す。戒（禁）取（見）律又は術など特殊なる方法によりて解脫し得と信ず。

【一五】結・使。いづれも煩惱の異名。衆生の身心を繫縛する故に結と云ひ、衆生を驅使するより使と云ふ。

【一六】纏。煩惱の異名。

【一七】犢子兒。犢子部、小乘二十部の一、非卽非離蘊の我を主張す。

【一八】伯仲季。長兄、次兄、末子。

『諸佛の說は何れが實、何れが是れ不實なるや。實と不實との、二事は不可得なり。是の如きは眞實の相にして、諸法に戲れず、衆生を憐愍するが故に、方便して法輪を轉ず。』

復次に、佛にして、若し請はるること無くして而も自ら法を說くとせば、是れ自顯、自執の法と爲す。應に必ず十四の難を答ふべきなり。今、諸天が佛の說法を請へるは、但だ老病死を斷ずるが爲にして戲論する處なし。是の故に十四の難を答へざれども咎なし。是の因緣を以ての故に、請を須つて法輪を轉じたまふ。

復次に、佛は人中に在つて生れ、大人の法を用ふるが故に、大慈ありと雖も、請はずんば說きたまはず。若し請はざるに而も說かば、外道に譏られん。是を以ての故に初は要ず請を須つなり。又復た外道は梵天に宗事す、梵天自ら(佛に)請ふときは、則ち外道の心伏す。

復次に、菩薩の法は、晝に三時、夜に三時、常に三事を行ず。一には[七]淸旦に偏へに右の肩を袒ぬぎ、合掌して十方の佛を禮して言さく、『我、某甲、若くは今世、若くは過世、無量劫の身・口・意に惡業の罪を、十方現在の佛前に於て懺悔したてまつる。願くは滅除して、復た更に作らざらしめんことを』と。中・暮・夜の三も亦是の如し。二には十方三世の諸佛の行じたまふ所の功德、及び弟子衆の有する所の功德を念じ、隨喜し勸助す。三には現在の十方の諸佛の初めて法輪を轉じたまはんことを勸請し、及び、諸佛が久しく世間に住して、無量劫に一切を度脫したまはんことを請ふ。菩薩は此の三事を行ずれば、功德無量にして、轉た佛を得るに近づくなり。是を以ての故に請を須ふ。

【經】能く種種の見・纏及び諸の煩惱を斷ず。

【論】[八]見に二種あり、一には[九]常、二には[一〇]斷なり。常見とは五衆の常を見て常に心に忍樂す。斷見とは五衆の滅を見て心に忍樂す。一切の衆生は多く此の二見の中に墮す。菩薩は自ら此の二を斷じ、亦能く一切衆生の二見を除いて、中道に處らしむ。復た二種の見あり、有見と、無見となり。

【七】淸旦。早朝。

【八】見(Darśana)。判斷決定。

【九】常。實在的見解。

【一〇】斷。否定的懷疑的見解。

せされば、便ち捨てて涅槃に入り、化佛を留むること一劫、以て衆生を度したまへり。今是の釋迦文尼佛は、道を得たるの後、五十七日、寂として說法せず、自ら言はく、「我が法は甚深にして、解し難く知り難し。一切衆生は世法に縛著して、能く解する者なし。如かず、默然として涅槃の樂に入らんには」と。是の時に諸の菩薩及び釋提桓因・梵天王・諸天は、合掌敬禮して、佛に諸の衆生の爲に初めて法輪を轉じたまはんことを請へり。佛、時に默然として請を受け、後、波羅棕の鹿林の中に到り、法輪を轉じたまへり。是の如くんば云何んぞ請して益する所なしと言はん。

　復次に、佛法は等しく衆生を視て、貴ぶこと無く、賤むこと無く、輕んずること無く、重んずること無く、人の請ふ者あれば、其の請の爲の故に、便ち爲めに法を說く。衆生は面り佛に請はずと雖も、佛は常に其の心を見て、亦た彼の請を聞きたまふ。假令諸佛は聞かず見ずとも、佛に請へば亦た福德あり。何に況んや、佛悉く聞見したまふに、而も益する所なからんや。

　問うて曰く、既に佛に請へば益あることを知る。何を以てか正しく二事を以て請ふや。

　答へて曰く、餘は請ふを須ひず、此の二事は必ず請ふを要す。若し請はざるに而も說かば、外道の輩あつて言はん、「體道常に定れり、何を以てか法に著して多言多事なる」と。是を以ての故に請を須つて而して說く。若しくは人あつて言はん、「若し諸法の相を知らば、壽を貪り久しく世間に住すべからざるを、而も（何故に）早く涅槃に入らざる。」と。是を以ての故に請を須つべし。若し請はざるに而も說かば、人は當に謂ふべし、「佛は法に愛著して人に知らしめんと欲す」と。是を以ての故に要ず人の請ふを待つて法輪を轉ずるなり。諸の外道の輩は自ら法に著し、若くは請ひ若くは請はざるに、而も自ら人の爲に說く。佛は諸法に於て著せず愛せず（たゞ）、衆生を憐愍する爲の故に、佛說を請ふ者あれば、佛は便ち爲に說きたまふ。諸佛は請無きを以て、而も初めて法輪を轉じたまはず。偈に說くが如し。

復次に、先に空と無相と無作の三昧を說くと雖も、未だ念佛三昧を說かず、是の故に、今說くなり。

【經】善く無量の諸佛を請ず。

【論】請ずるに二種あり。一には佛初めて道を成じたまふとき、菩薩は、夜に三たび晝に三たび、六時に禮請し、偏へに右の肩を袒ぬぎ合掌して言さく、「十方佛土の無量の諸佛、初めて道を成じたまふ時、未だ法輪を轉じたまはず、我某甲、一切諸佛が衆生の爲に、法輪を轉じて一切を度脫したまはんことを請ふ」と。二には諸佛が無量の壽命を捨てて、涅槃に入らんと欲したまふ時、菩薩は亦た夜に三時、晝に三時に偏へに右の肩を袒ぬぎ、合掌して言さく、「十力佛土の無量の諸佛よ、我某甲、久しく世間に住したまひて、無央數劫に一切を度脫し、衆生を利益したまはんことを請ふ」と。是を能く「無量の諸佛を請す」と名く。

問うて曰く、諸佛の法は、必ず應に說法して、廣く衆生を度すべし。請ふと請はざるとにせよ、法として自ら應に爾るべし。何を以てか請ふを須たんや。若し目前に於いて、面たり諸佛に請ふは則ち可なり。いま十方無量の佛土の諸佛は亦た目に見ず、云何んぞ請ふ可けんや。

答へて曰く、諸佛は必ず說法し、人の請を待たずと雖も、請ふ者は亦た應に福を得べし。大國王には、美膳多しと雖も、人の請する者あらば、必ず恩福を得るが如し。其の心を錄するが故なり。又慈心にして諸の衆生をして快樂を得せしめんと念ずるが如きは、衆生は得る所なしと雖も、念ずる者は大に其の福を得。佛の說法を請ふも、亦復た是の如し。

復次に、諸佛は人の請ふ者無ければ、便ち涅槃に入つて法を說かざること有り。法華經の中の多寶世尊の如きは、人の請ふこと無きが故に、便ち涅槃に入り。後に化佛身及び七寶の塔が法華經を說くことを證するが故に、一時に出現したまへり。亦た[六]須扇多佛の如きは弟子の本行未だ熟

【六】修扇多 (Susîmta)。甚淨と譯す。

はざるもの有り。是の念佛の三昧は、能く種種の煩惱と種種の罪とを除く。

復次に、念佛三昧には大福德ありて、能く衆生を度す。是の諸の菩薩は衆生を度せんと欲す、諸の餘の三昧は、此の念佛三昧の福德、能く速に諸罪を滅するが如き者なし。說くが如くんば昔五百の估客あり、海に入つて寶を採る。[五]摩伽羅魚王に値ふ。(魚王)口を開くに海水中に入り、船去ること駛疾なり。船師、樓上の人に問ふ、「汝、何等をか見る」と。答へて言く、「三の日出で、白き山羅列し、水流れて奔り趣くこと、大なる坑に入るが如くなるを見る」と。船師の言く、「是れ摩伽羅魚王の口を開くなり。一は是れ實の日、兩の日は是れ魚の眼、白き山は是れ魚の齒、水の流れて奔り趣くは、是れ其の口に入るなり。我曹了りなん。各各諸の天神を求めて以て自ら救濟せよ」と、是の時、諸人は各各其の事ふる所を求むれども、都て益する所なし。中に五戒の優婆塞あり。衆人に語つて言く、「吾等當に共に南無佛と稱すべし。佛は無上たり、能く苦厄を救ひたまふ」と。衆人一心に同聲に、「南無佛」と稱す。是の魚は先世是の佛の破戒の弟子にして、宿命智を得たり。佛を稱ふる聲を聞いて、心自ら悔悟し、即便ち口を合し、船人脫することを得たり。念佛を以ての故に能く重罪を除き、諸の苦厄を濟ふ、何に況んや、念佛三昧をや。

復次に、佛は法王たり、菩薩は法將たり。尊ばれ、重んぜらるる所は、唯だ佛世尊のみなり。是の故に應に常に佛を念ずべし。

復次に、常に念佛すれば、種種の功德の利を得。譬へば大臣の特に恩寵を蒙つて、常に其の主を念ずるが如し。菩薩も亦た是の如く、種種の功德、無量の智慧は、皆佛より得ると知つて、恩の重きことを知るが故に、常に念佛す。汝は云何なれば常に念佛して餘の三昧を行ぜざるやと言ふも、今「常に念ず」と言ふも、亦た餘の三昧は行ぜずとは言はず。念佛三昧を行ずること多きが故に、「常に念ず」と言ふなり。

【五】摩伽羅(Makara)。摩竭とも云ふ。

梨の中に至る。何を以てか最大の罪は、地獄の中に一劫の報を受くと言ふや。

答へて曰く、佛法には衆生の爲の故に二道の教化あり。一には佛道、二には聲聞道なり。聲聞道の中にては五逆罪を作る人は、佛は「地獄を受くること一劫なり」と說き、菩薩道の中にては、佛法を破する人は、「此の間の劫盡くるも、復た他方に至つて無量の罪を受く」と說きたまふ。聲聞法の最も第一の福は、八萬劫に受け、菩薩道の中の大福は、無量阿僧祇劫に受く。是を以ての故に福德は要らず願を須ふ。是を「無量の諸佛の世界を受けんことを願ふ」と名く。

【經】無量の佛土、諸佛の三昧を念じ、常に現じて前に在り。

【論】無量の佛土とは十方の諸の佛土を名く。念佛三昧とは十方三世の諸佛を常に心眼を以て見ること前に在つて現ずるが如きを名く。

問うて曰く、云何なるを念佛三昧と爲すや。

答へて曰く、念佛三昧に二種あり。一には聲聞法の中にて、一佛身に於て、心眼に滿十方を見る。二には菩薩道にして、無量の佛土の中に於て、三世十方の諸佛を念ず。是を以ての故に「無量の佛土、諸佛の三昧を念じ、常に現じて前に在り」と言ふ。

問うて曰く、菩薩の三昧の如きは種種無量なり。何を以ての故に、但だ是の菩薩、念佛三昧して、常に現じて前に在るをのみ讃ずるや。

答へて曰く、是の菩薩は佛を念ずるが故に、佛道の中に入ることを得。是を以ての故に念佛三昧し常に現じて前に在るなり。

復次に、念佛三昧は、能く種種の煩惱及び先世の罪を除く。餘の諸の三昧には、能く婬を除けども、瞋を除くこと能はざるもの有り。能く瞋を除けども、婬を除くこと能はざるもの有り。能く癡を除けども、婬と恚とを除くこと能はざるもの有り。能く三毒を除けども、先世の業を除くこと能

所の如く、人あつて少なる施福を修し、少なる戒福を修して禪法を知らず、人中に富樂の人あるを聞いて、心に常に念着し、願樂して捨てざれば、命終の後、富樂の人の中に生ず。復人あり、少なる施福を修し、少なる戒福を修して、禪法を知らず、四天王天處、三十三天、夜摩天、兜率陀天、[二]化樂天、他化[三]自在天あるを聞いて、心に常に願樂すれば命終の後各々其中に生ず。此れみな願力の所得なり。菩薩も亦是の如く、淨世界の願を修して、然して後之を得。是を以ての故に願に因つて勝果を受くることを知る。

復次に、佛の世界を莊嚴するは事、大にして、獨り行じて功德を成すこと能はざるが故に、要らず願力を須ゆ。譬へば牛力は能く車を挽くと雖も、要らず御者を須つて、能く至る所あるが如し。淨世界の願も亦復た是の如し。福德は牛の如く、願は御者の如し。

問うて曰く、若し願を作さざれば福を得ざるや。

答へて曰く、得ると雖も、願あるには如かず。願は能く福を助け、常に行ふ所を念ずれば福德增長す。

問うて曰く、若し願を作して報を得ば、人が十惡を作して、地獄を願はざるが如きも、亦應に地獄の報を得べからざるか。

答へて曰く、罪福には定報ありと雖、但だ願を作す者は少福を修するも、願力あるが故に大なる果報を得るなり。先に罪中の報苦を說くが如し。一切衆生皆な樂を得んことを願ひ、苦を願ふ者なし、是故に地獄を願はず。是を以ての故に福には無量の報あれども、罪の報には量有り。有人の言く、「最大の罪は阿鼻地獄に在つて、一劫の報を受く。最大の福は非有想非無想處に在りて、八萬大劫の報を受く。諸の菩薩の淨世界の願も、亦無量劫にして道に入り、涅槃を得、是を常樂と爲す」と。

問うて曰く、泥犁品の中の般若波羅蜜を謗る罪の如きは、此の間の劫盡くれば、復た他方の[四]泥

【二】割註あり「專ら色欲を念ずれば、化し來つて已れに從ふ」とある。

【三】他化自在天。割註ありて「此天は、他に、色欲を化して、之れと欲を行じ、展轉すること是の如くなる故に他化自在と名く」とある。猶論九參照。

【四】泥犁(Niraya)。地獄と譯す。

卷の第七

初品第十三、……「佛土願」釋論

【經】　無量の諸佛の世界を受けんことを願ふ。

【論】　諸の菩薩は、諸佛の世界の無量に嚴淨なるを見て、種種の願を發せり。有る佛の世界には都て衆苦なく、乃至[一]三惡の名すらなし。菩薩は見已つて自ら願を發して言く、「我、佛と作る時、世界に衆苦なく、乃至三惡の名なきこと、亦た當に是の如くなるべし」と。有る佛の世界は七寶もて莊嚴し、晝夜に常に淸淨の光明あつて日月あること無し。便ち願を發して言く、「我、佛と作るの時、世界に常に嚴淨の光明あること、亦た當に是の如くなるべし」と。有る佛の世界にては、一切衆生みな十善を行じ、大智慧あつて、衣被・飮食は念に應じて至る。便ち願を發して言く、「我、佛と作るの時、世界の中の衆生の衣被・飮食亦た當に是の如くなるべし」と。有る佛の世界は純ら諸の菩薩のみにして、佛の色身の如く、三十二相あつて、光明徹照し、乃至聲聞・辟支佛の名あること無し。亦た女人もなく一切みな深妙の佛道を行じ、十方に遊至し、一切を敎化す。便ち願を發して言く、「我、佛と作る時、世界の中の衆生亦當に是の如くなるべし」と。是の如き等の無量の佛の世界の種種の嚴淨、皆之を得んことを願ふ。是を以ての故に「無量の諸佛の世界を受けんことを願ふ」と名く。

問うて曰く、諸の菩薩は行業淸淨にして、自ら淨報を得。何を以てか要らず願を立てて、然る後に之を得ることを須ゐんや。譬へば田家の穀を得るが如し、豈に復た願を待たんや。

答へて曰く、福を作ることは、願なければ標とする所なし。願を立てゝ導御と爲せば、能く成す所あり。譬へば金を銷すには、師に隨ひ、作る所の金には定まること無きが如し。佛の說きたまふ

【一】三惡。貪、瞋、癡。

若し人あり婬と恚と癡と及び道とを分別せば、是の人は佛を去ること遠し、譬へば天と地との如し。

道と及び婬と恚と癡とは、是れ一法にして平等なり。若し人聞いて怖畏せば、佛道を去ること甚だ遠し。

婬法は不生滅なり、心をして惱ましむること能はず。若し人、吾我を計すれば、婬は(その人を)将ひて惡道に入るべし。

有無の法の異なるを見れば、是れ有無を離れず。若し有無等しきことを知らば、超勝して佛道を成ぜん。』

是の如き等の七十餘の偈を説く時、三萬の諸天子は無生法忍を得、萬八千の聲聞の人は、一切の法に著せざるが故に皆解脱を得たり。是の時、勝意菩薩の身は卽ち地獄に陷入して、無量千萬歳の苦を受け、出でて人中に生れ、七十四萬世、常に誹謗せられ、無量劫の中に佛の名を聞かず。是の罪漸く薄くなりて、佛法を聞くことを得、出家して道を爲し、而して復た戒を捨つ。是の如く六萬三千世、常に戒を捨て、無量世の中に沙門と作り、戒を捨てずと雖も、諸根闇鈍なり。是の喜根菩薩は、いま東方に於て、十萬億の佛土を過ぎて佛と作る、其の土を寶嚴と號し、佛を光踰日明王と號す」と。文殊師利言く、「爾の時の勝意比丘は我が身、是なり。我れ爾の時是の無量の苦を受くるを觀る」と。文殊師利復た佛に白さく、「若し人あり、三乘の道を求め、諸苦を受くることを欲せざれば、應に諸法の相を破り、而して瞋恚を懷くべからず」と。佛、文殊師利に問ひたまはく、「汝、諸の偈を聞いて、何等の利を得たるや」と。答へて言く、「我、此の偈を聞いて、衆苦を畢るを得、世世に利根の智慧を得、能く深法を解し、巧に深義を説くこと、諸の菩薩の中に於て最も第一たり」と。是の如き等を、巧に諸法の相を説くと名け、是を「實の如く巧に度す」と名く。

根にして多く分別を求めて、是は淨、是は不淨とし、心即ち動轉せり。勝意は異時に聚落の中に入りて、喜根の弟子の家に至り、坐處に於て坐し、持戒・少欲・知足行・頭陀行・閑處・禪寂を讃說し、喜根を呰毀して言く、「是の人は說法して、人を敎へて邪見の中に入らしむ。是れは婬欲・瞋恚・愚癡の罣礙する所なきの相を說く。是れ雜行にして、純淸淨に非らず」と。是の弟子は利根にして法忍を得たり。勝意に問うて言く、「大德、是の婬欲の法は何等の相と名くるや」と。答へて言く、『婬欲は是れ煩惱の相なり」と。問うて言く、「是の婬欲の煩惱は內に在りや、外に在りや」と。答へて言く、「是の婬欲の煩惱は內に在らず外に在らず。若し內に在りとせば、應に外の因緣を待つて生ずべからず。若し外に在りとせば、我に於て事なくんば、我を惱すべからず」と。[一八]居士言く、「若し婬欲の煩惱內に非らず外に非ず、東西南北四維上下より來るに非ずとせば、遍ねく實相を求むるも得べからず。是の法は即ち不生不滅ならん。若し生滅の相無くんば、空にして所有なし。云何にして能く煩惱を作さんや」と。勝意は是語を聞き已つて、其の心悅ばず、答を加ふること能はず、座より起つて是の如く說いて言く、「喜根は多く衆人を誑はし、邪道の中に著く」と。是の勝意菩薩は未だ[一九]音聲陀羅尼を悅ばず、佛の所說を聞いては便ち觀喜し、外道の語を聞いては便ち瞋恚す。[二〇]三不善を聞けば則ち歡悅せず、三善を聞けば則ち大に歡喜す。生死を說くことを聞けば則ち憂ひ、涅槃を聞けば則ち喜べり。居士の家より林樹の間に至り、精舍の中に入り、諸の比丘に語るらく、「當に知るべし、喜根菩薩、是の人は虛誑にして、多く人をして惡邪の中に入らしむ。何となれば其れ婬・恚・癡の相、及び一切の諸法は、皆な無礙の相なりと言ふを以てなり」と。是の時喜根は是の念を作さく、「此の人は大に瞋つて惡業の爲に覆はる、當に大罪に墮つべし。我今當に爲に甚深の法を說くべし。今に所得無しと雖も、後世の佛道の因緣と作さんが爲に」と。是の時に喜根は僧を集めて一心に偈を說かく、

『婬欲は即ち是れ道なり、恚と癡とも亦是の如し。此の如き三事の中に、無量の諸佛の道あり。

【一八】 居士。喜根の弟子を意味す。

【一九】 音聲陀羅尼。佛菩薩の所說に祕密の深義あるを理解すること。

【二〇】 三不善。三善。貪、瞋、癡と施、慈、慧。

名くるが如きは、病人眼に見れば衆の疾みな愈ゆ。病を除くことは同じと雖も、優劣の法異なれり。聲聞と菩薩の敎化して人を度するも、亦復是の如し。苦行頭陀の初・中・後夜に、勤心に坐禪し、苦を觀じて道を得るは聲聞の敎なり。諸法の相の縛する無く、解く無きを觀じて、心に清淨を得るは菩薩の敎なり。文殊師利の本緣の如し。

文殊師利、佛に白さく、「大德よ、昔、我先世に無量阿僧祇劫を過ぐ。爾の時に佛有り、師子音王と名く。佛及び衆生の壽は十萬億那由他歲なり。佛は三乘を以て衆生を度したまふ。國を千光明と名く、其國の諸樹は七寶もて成る。樹は無量の清淨の法音、空・無相・無作・不生・不滅・無所有の音を出す。衆生之を聞き心に解して道を得たり。時に師子音王佛の初會の說法に、九十九億の人阿羅漢道を得、菩薩衆も亦復是の如し。是の諸の菩薩は、一切皆な無生法忍を得て種種の法門に入り、無量の諸佛を見たてまつりて恭敬供養し、能く無量無數の衆生を度し、無量の陀羅尼門を得、能く無量の種種の三昧を得、初めて發心して、新に道門に入る菩薩は數を稱ふ可らず。是の佛土の無量の莊嚴は說いて盡す可らず。時に佛は敎化已に訖り、無餘涅槃に入りたまふ。法の住すること六萬歲、諸樹の法音は亦た復たび出でざりき。爾の時、二の菩薩の比丘あり。一を喜根と名け、二を勝意と名く。是の喜根法師は容儀質直にして、世法を捨てず亦善惡を分別せず。喜根の聰明にして、法を樂しみ好んで深義を聞く。其の師は少欲知足を讃せず、戒行頭陀を讃せず、但だ諸法の實相清淨なるのみを說けり。諸の弟子に語るらく、「一切の諸法は婬欲の相、瞋恚の相、愚癡の相なり。此の諸法の相は、卽ち是れ諸法の實相にして、罣礙する所なし」と。是の方便を以て、諸の弟子に敎へ、一相智に入らしむ。時に諸の弟子は、諸人の中に於て、瞋ること無く、悔ゆること無し。心に悔いざるが故に生忍を得、[一六]生忍を得るが故に則ち[一七]法忍を得、實法の中に於て、動ぜざること山の如し。勝意法師は持戒淸淨にして、十二頭陀を行じ、四禪と四無色定とを得たり。勝意の諸の弟子は、鈍

【一六】生忍。衆生忍、諸の衆生が種種の危害を加ふるも忍んで瞋らざる忍耐。

【一七】法忍。風雨寒暑飢渴等の外の非情物より來る苦難を忍ぶを云ふ。

二邊に墮せず、安隱の道を用ゐて衆生を觀じ邪見を生ぜず、是を生忍と名け、甚深の法の中に心に罣礙なきを、是を法忍と名く。

問うて曰く、何等か甚深の法なるや。

答へて曰く、先に甚深の法忍の中に說くが如し。　復次に甚深の法とは、十二因緣の中に於て、展轉して果を生ずれども、因の中に果あるに非ず、亦た果なきに非ず、是の中より出づるを、是を甚深の法と名く。　復次に、三解脫門なる空と無相と無作とに入れば、則ち涅槃の常樂を得るが故に是を甚深の法と名く。　復次に、一切の法は空に非ず、不空に非ず、有相に非ず、無相に非ず、有作に非ず、無作に非ずと觀じ、是の如く觀ずる中に心亦著せず、是を甚深の法と名く。偈に說くが如し。

[一四]『因緣生の法、是を空相と名け、亦た假名と名け、亦中道と名く。

若し法、實有ならば、應に還つて無となるべからず、今に無にして先に有なる、是を名けて斷と爲す。

常ならず、斷ならず、亦有無ならず、心識の處滅して、言說も亦た盡く。』

此の深き法に於て信心無礙にして、悔いず沒せざるを、是を、「大忍を成就す」と名く。

【經】 實の如く巧に度す。

【論】 外道の法あり、衆生を度すと雖も實の如く度するにあらず。何となれば種種の邪見と結使殘るが故なり。二乘は度する所ありと雖も、所應の如く度せず。何となれば一切智なく、方便心薄きが故なり。唯だ菩薩のみ有つて、能く實の如く巧に度す。譬へば渡師の、一人は浮囊・草筏を以て之を渡し、一人は舫舟を以て渡し、二渡の中に、相降ること懸(はるか)に殊なるが如く、菩薩が巧に衆生を度することも亦是の如し。

復次に、譬へば病を治するが如し。苦藥と針灸とは痛んで差すことを得。妙藥あり、[一五]蘇陀扇陀と

【一四】 天台の三諦の所依。

【一五】 蘇陀扇陀 (Sudhasyandā)。

諸の天人及び聲聞・辟支佛の所に於いては、量ること能はざれば、名けて無量の智と爲す。菩薩は無生の道を得る時、諸の結使を斷ずるが故に清淨の智を得るなり。

問うて曰く、若し爾の時、已に諸の結を斷ぜば、佛と成る時、復た何をか斷ずる所となすや。

答へて曰く、是の清淨に二種あり、一には佛を得るの時、餘結は都く盡くして實の清淨を得、二には菩薩の肉身を捨てて法身を得る時、諸の結を斷じて清淨なり。譬へば一燈の能く闇を除いて、所作あることを得れども、更に大燈あれば倍復た明了なるが如し。佛及び菩薩が諸の結使を斷ずるも亦復是の如く、菩薩の斷ずべき所は、已に斷ずと曰ふと雖も、佛の斷ずべき所に於ては未だ盡くさずと爲す。是を「無量の清淨智を得るが故に諸法の中に於て意に罣礙なし」と名く。

【經】 大忍を成就す。

【論】 問うて曰く、先に已に等忍と法忍とを說けり、今何を以ての故に、復た「大忍を成就す」と說くや。

答へて曰く、此の二忍を增長するを名けて大忍と爲す。 復次に等忍は衆生の中に在つて、一切能く忍じて柔順なり。法忍は深法の中に於て忍ず。此の二忍增長すれば、無生忍を證し得と作す。最後の肉身に悉く十方の諸佛が化現して前に在り、空中に於て坐するを見る。是を大忍を成就すと名く。譬へば聲聞法の中に、煖法の增長せるを名けて頂法と爲し、頂法の增長せるを名けて忍法と爲し、更に異法無く、增長を異と爲すが如し。等忍と大忍とも亦復是の如し。 復次に、二種の忍あり、生忍と法忍となり。生忍は衆生の中の忍を名く。恒河沙劫等の如き衆生種種に惡心を加ふれども瞋恚せず、種種に恭敬し供養するも心に歡喜せざるなり。 復次に衆生を觀ずるに初なし。若し初あれば則ち因緣なし。若し因緣あれば則ち初なし。若し初なければ亦後も無かるべし。何となれば初と後とは相待せるが故なり。若し初と後なければ中も亦無かるべし。是の如く觀ずる時には常・斷の

復次に、一切世界の衆生の中にて、若くは來つて侵害すれども心に恚り恨まず、若くは種種に恭敬すれども亦た喜悦せず、偈に說くが如し。

『諸佛菩薩をも、心に愛著せず、外道惡人をも、心に憎恚せず。』

是の如きの淸淨なるを名けて、「意に罣礙なし」と爲す。

復次に、諸法の中に於て、心、無礙なり。

問うて曰く、是の菩薩は未だ佛道を得ず、未だ一切智を得ず、云何ぞ諸法の中に於て、心無礙なるや

答へて曰く、是の菩薩は無量の淸淨の智慧を得るが故に、諸法の中に於て、心無礙なり。

問うて曰く、諸の菩薩は、未だ佛道を得ざるが故に無量の智あるべからず。殘結あるが故に淸淨の智あるべからず。

答へて曰く、是の諸の菩薩は、三界の中に業を結べる肉身には非ず、皆な法身の自在を得、老病死を過ぐれども、衆生を憐愍するが故に、世界の中に在つて行じて佛土を莊嚴し、衆生を敎化することを爲す。已に自在を得たり、佛と成らんと欲すれば能く成る。

問うて曰く、法身の菩薩の如きは則ち佛と異なること無し。何を以てか名けて菩薩と爲し、何を以てか佛を禮し法を聽くや。若し佛と異ならば云何んぞ無量の淸淨智あらん。

答へて曰く、是の菩薩は法身と爲りて、老病死なしと雖も、佛と小しく異なること、譬へば月の十四日の如し。衆人は「若しくは滿月か、若くは滿月ならざるか」との疑ひを生ず。菩薩も亦是の如く、能く佛と作り、能く法を說くべしと雖も、然も未だ實には成佛せず。佛は月の十五日を滿足して疑ひ無きが如し。復次に、無量の淸淨に二種あり。一には實に量あるも、量る能はざる者に於いて之を無量と謂ふ。譬へば海水の如く、恒河の沙等の如き、人の量ること能はざるを名けて無量と爲せども、諸佛菩薩に於いては無量と爲すに非ざるなり。菩薩の無量の淸淨智も、亦復た是の如く、

害して拘制する所なきが如くんば、誰か汝を調ふる者ならん。若し善く調ふることを得ば、則ち世の患を離れん。當に知るべし、胎に處つては不淨にして、苦厄なること猶ほ地獄の如く、既に生れて世に在れば老病・憂悲萬端なり。若し天上に生ぜば當に復た三界に墮落して安きこと無かるべし。汝何を以てか樂に著するやと。是の如く種種に其の心を呵責して誓つて汝に隨はずと。是を菩薩の衆生の心行を知ると爲す。

問うて曰く、云何なるを「微妙の慧を以て之を度脫す」と名くるや。是の中に云何なるを微妙の慧と名け、云何なるを麁なる智慧と名くるや。

答へて曰く、世界の巧慧は、是を麁なる智慧と名け、施と戒と定とを行ずるを、是を微妙の慧と名く。復次に、布施の智は是を麁なる慧と爲し、戒定の智は是を微妙の慧と名く。復次に、[三]施・戒の智は是を麁慧と爲し、禪定の智は是を微妙の慧と名く。復次に、禪定の智は是を麁慧と爲し、無猗の禪定は是を微妙の慧と名く。復次に、諸法の相を取るは是を麁慧と爲し、諸法の相に於て取らず捨てざるは、是を微妙の慧と名く。復次に、無明等の諸の煩惱を破つて、諸法の相を得るは是を麁慧と名け、如法の相に入る者は、譬へば眞金の損ぜず失せざるが如く、亦た金剛の破れず壞せざるが如く、又虛空の染むること無く、著すること無きが如し、是を微妙の慧と名く。是の如き等の無量の微妙の慧は、菩薩は自ら得て復た衆生に敎ゆ。是を以ての故に、「諸の菩薩は、悉く衆生の心行の趣く所を知り、微妙の慧を以て之を度脫す」と說く。

初品第十二、……「意無礙」釋論

【經】意に罣礙なし。

【論】云何なるを意に罣礙なしと名くるや。菩薩は一切の怨親・非怨・非親の人の中に於て、等うして心に凝ゆるところ有ることなし。

【三】本によりて「施・戒」が「戒定」となれり。

ること無きかを知らず。是を以ての故に、更に「畏るる所なき」は、「礙ることなき」力を得るが故なることを說くなり。

問うて曰く、若し諸の菩薩に亦「礙ることなく」「畏るる所なき」こと有らば、佛と菩薩と何等の異なり有りや。

答へて曰く、我先に說くが如く、諸の菩薩は自ら無所畏の力あるが故に、諸法の中に於て畏るる所なし。佛の無所畏にはあらず。復次に、無礙の法に二種あり、一には一切處、二には非一切處なり。非一切處とは、人、一の經書乃至百千の經書の中において、礙ること無ければ、若しは一衆に入り、若しは百千衆の中に入るも畏るる所なきが如く、諸の菩薩も亦た是の如し。自らの智慧の中において礙ることなきなり、佛の智慧においてには非ず。佛が鉢を放ちたまふ時、五百の阿羅漢及び彌勒等の諸の菩薩も皆取ること能はざるが如し。諸の菩薩も亦是の如く、自力の中にては無礙なるも、佛の智慧力の中には礙ることあり。是を以ての故に「諸の菩薩は礙ることなく、畏るる所なきことを得」と說く。

【經】悉く衆生の心行の趣く所を知り、微妙の慧を以て之を度脫す。

【論】問うて曰く、云何にして悉く衆生の心行を知るや。

答へて曰く、衆生の心が種種なる法の中に處處に行ずるを知ること、日光の遍ねく照すが如し。菩薩は悉く衆生の心行の趣向する所あるを知つて、而も之に敎へて言く、「一切衆生の趣くに二種あり。一には心、常に樂を求め、二には智慧分別して能く好惡を知る。汝、著心に隨ふこと莫く、當に智慧に隨ふべく、當に自ら心を責むべし。汝、無數劫より來た諸の雜業を集めて而も厭足すること無く、但だ世樂を馳せ逐ふて、苦を爲すのみなることを覺らず。汝、見ずや、世間は樂を貪れば患を致す。五道に生を受くるは、皆心の爲す所なり、誰か爾らしむる者ならんや。汝、狂象の蹈藉殘

答へて曰く、是の十事は久しく住せずして、生じ易く滅し易きが故なり。是を以ての故に是れ心の著せざる處なり。　復次に、人あり十喩は耳目を誑惑する法なるを知るも、諸法の空なることを知らざるが故に、此を以て諸法に喩ふ。若し人ありて、十譬喩の中に於て心著して解せず、種種に難論して、此を以て有と爲さば、是の十譬喩は其の用を爲さず、更に爲に餘の法門を說くべし。

問うて曰く、若し諸法は都て空にして不生不滅ならば、是の十の譬喩等の種種の譬喩、種種の因緣の論議も、我已に悉く空たるを知る。若し諸法は都て空ならば是の喩をも說くべからず。若し是の喩を說かば是は不空と爲すなり。

答へて曰く、我は空を說いて、諸法の有を破す。今說く所のものは、若し有と說かば、先に已に破せり、若し無と說かば難ずべからず。譬へば執事の比丘が高聲に、手を擧げて唱言すれば、衆皆寂靜となるが如し。是れは聲を以て聲を遮らんが爲にして、聲を求むるには非ざるなり。是を以ての故に、諸法を說くと雖も、空にして不生不滅なり。衆生を愍念するが故に說くと雖も、有には非ざるなり。是を以ての故に、「諸法は化の如し」と說く。

【經】無礙にして無所畏を得。

【論】種種の衆の界・入の因緣の中に、心無礙にして、盡くること無く、滅すること無し、是を「礙(さや)ることなく(無礙)、畏るる所なし(無所畏)」と爲す。

問うて曰く、先に說くが如くんば、「諸の菩薩は、無量の衆の中に於て畏るる所なし」と。今何を以てか更に「礙ることなく、畏るる所なし」と說くや。

答へて曰く、先には無所畏の因を說けり、今は無所畏の果を說く。諸の大衆乃至菩薩衆の中に於て、法を說いて盡くること無く、論議して滅することなく、心に疑難なし。已に無礙・無所畏を得るが故なり。　復次に、先に無量の衆の中に於て無所畏を說くが如きは、何等の力を以ての故に畏

問うて曰く、變化の事は空なりと言ふべからず。何となれば變化の心も亦た定を修するより得、此の心より種種の變化を作せばなり。若しくは人、若しくは法なるも、是の化には因あり果あり、云何んぞ空ならんや。

答へて曰く、「影の如し」の中に已に答へたるも、今當に更に答ふべし。此の因緣は有なりと雖も、變化の果は空なり。口言の所有なきが如し。心は口言を生ずと雖も、心口を以て有とす可らざるが故なり。言ふ所は所有なけれども便ちこれ有なり。若し「第二頭・第三手有りと言ふに、心口より生ずと雖も、頭あり手ありとは言ふ可らず。佛の說きたまふが如く、「無生を觀ずれば有生より脫することを得、無爲に依つて有爲より脫することを得。無生の法は無なりと觀ずと雖も、而も因緣を作るべし。無爲も亦た爾なり」。變化は空なりと雖も、亦た能く心の因緣より生ず。譬へば幻・焰等の九の譬喩の如く、無なりと雖も能く種種の心を生ず。

復次に、是の化事は六因四緣の中に於いて、求むるに得べからず、是の中に六因・四緣相應せざるが故に空なり。

復次に、空は見えざるを以て空と爲さず、其の實用なきを以ての故に空と言ふ。是を以ての故に「諸法は化の如し」と言ふ。

問うて曰く、若し諸法の十の譬喩は、皆空にして異なる無しとせば、何を以てか但だ十事を以て喩と爲し、山河石壁等を以て喩と爲さざるや。

答へて曰く、諸法は空なりと雖も、而も(その中に)分別あり。(乃ち)解し難きの空あり、解し易きの空あり。今は解し易きの空を以て、解し難きの空に喩ふるなり。復次に、諸法に二種あり。心の著する處あり。心の著せざる處あり。心の著せざる處を以て、心の著する處を解するなり。

問うて曰く、此の十の譬喩は何を以てか是れ心の著せざる處なるや。

り。五には能く主力あり。[三] 六には能く遠きに到る。七には能く地を動かす。八には意の欲する所に隨つて盡く能く得。(卽ち)一身を能く多身と作し、多身を能く一と作し、石壁をも皆過ぎ、水を履み、虛を踏み、手に日月を捫り、能く四大を轉じ、地を水と作し、水を地と作し、火を風と作し、風を火と作し、石を金と作し、金を石と作す。是の變化に復た四種あり。欲界の藥草・寶物・幻術は能く諸物を變化す。諸の神通ある人は神力の故に能く諸物を變化す。天・龍・鬼神の輩は生報の力を得るが故に能く諸物を變化す。色界の生報は定力を修するが故に能く諸物を變化す、化人の如きは。生老病死なく、苦なく樂なく、人の生と異る。是を以ての故に、空にして實なし。一切諸法も亦是の如く、皆生・住・滅なし。是を以ての故に、「諸法は化の如し」と說く。

復次に、化生は定まれる物なく、但だ心生ずるを以て便ち所作あり、皆實あることなし。人身も亦是の如く、本より因とする所なし。但だ先世の心に從つて今世の身を生ず、皆實あること無し。是を以ての故に、「諸法は化の如し」と說く。變化の心滅すれば則ち化も滅するが如く、諸法も亦是の如し。因緣滅すれば、果も亦滅し、自ら在るにあらず。化事の如きは、實には空なりと雖も、能く衆生をして、憂・苦・瞋恚・喜・樂・癡・惑を生ぜしむ。諸法も亦是の如く、空にして實なしと雖も、能く衆生をして歡喜・瞋恚・憂怖等を起さしむ。是を以ての故に、「諸法は化の如し」と說く。

復次に、變化生の法は初なく、中なく、後なきが如く、諸法も亦是の如し。變化は生ずる時、從り來る所なく、滅するも亦所去なきが如く、諸法も亦是の如し。

復次に、變化の如きは、(その)相の清淨なること、虛空の如く、染著する所なく、罪福の爲に汚されず。諸法も亦是の如し。法性の如如なるが如く、眞際の自然に常に淨なるが如く、譬へば閻浮提の四大河は一河に五百の小河の屬する有り、是の水は種種に不淨なれども、大海水の中に入れば、皆清淨なるが如し。

【三】 割註「大力あり、人下すところ無きが故に主力ありと言ふ」。とあり。

より生ずべからず。何となれば、若し因縁の中に、先より有らば、因縁は則ち用ふる所なけん。若し因縁の中に先に無ければ、因縁は亦た用ふる所なきを以ての故なり。譬へば乳の中に若し先より酪有らば、是の乳は酪の因に非ざるが如し、酪は先より有るが故なり。若し先に酪無ければ水の中に酪無きが如く、是の乳も亦た因に非ず。若し因無くして而も酪有らば、水中に何を以てか酪を生ぜざるや。若し乳は是れ酪の因縁なりとせば、乳も亦自ら在らず。乳も亦た因縁より生ず。乳は牛に從つて有り、牛は水草に從つて生ず。是の如く無邊に皆因縁あり、是を以ての故に因縁の中に果は有りと言ふことを得ず、無しと言ふことを得ず、有り、かつ無しと言ふことを得ず、有るにも非ず無きにも非ずと言ふことを得ず。諸法は因縁より生じて自性なきこと、鏡中の像の如し。偈に說くが如し。

『若し法は因縁より生ずるならば、是の法の性は實には空なり。若し此の法、空ならずんば、因縁によつて有ることなけん。

譬へば鏡中の像の如し、鏡に非ず亦た面にも非ず、亦た鏡を持つ人にも非ず、自(因)に非ず無因に非ず。

有に非ず亦無にも非ず、亦復た有無にも非ず、此の語も亦受けず、是の如きを中道と名く。』

是を以ての故に、諸法は「鏡中の像の如し」と說く。

「化の如し」とは、十四の變化心あり。初禪に二つ、欲界と初禪となり。二禪に三つ、欲界と初禪と二禪となり。三禪に四つ、欲界と初禪と二禪と三禪となり。四禪に五つ、欲界と初禪と二禪と三禪と四禪となり。是の十四の變化心は八種の變化を作す。一には能く小と作つて、乃ち微塵に至る。二には能く大と作つて、乃ち虛空に滿つるに至る。三には能く輕と作つて、乃ち鴻毛の如きに至る。四には能く自在と作つて、能く大を以て小と爲し、長を以て短と爲し、是の如く種種あ

諸法は因緣に屬するが故に、是を以て自作に非ず。亦た他作に非ずとは、自らが無なるが故に、他も亦た無なり。若し他作ならば則ち罪福の力を失はん。他作に二種あり。若しくは善、若しくは不善これなり。若し善ならば應に一切に樂を與ふべく、若し不善ならば應に一切に苦を與ふべし。若し苦樂雜らば、何の因緣を以ての故に樂を與へ、何の因緣を以ての故に苦を與ふるや。若し共ならば二の過あり、卽ち自過と他過となり。若し因緣無くして樂を生ずとせば、人は應に常に樂にして、一切の苦を離るべし。若し因緣なしとせば、人は應に樂の因を作り、苦の因を除くべからず。一切の諸法には必ず因緣あり、愚癡の故に知らざるなり。譬へば人の木より火を求め、地より水を求め、扇より風を求むるが如し。是の如き等の種種、各の因緣あり。[一]是の苦樂和合の因緣は、先世の業因と、今世の若しくは好行、若しくは邪行の緣とより生ず。是より苦樂を得、是の苦樂種種の因緣は、實を以て之を求むるに、人の作るものも無く、人の受くるものも無し。空の五衆の作なり、空の五衆の受なり。無智の人は樂を得れば婬心、愛著し、苦を得れば瞋恚を生ず。是の樂滅する時には、更に求めて得んと欲す。小兒の鏡中の像を見て、心に樂しみ愛著し、愛著（せるもの）を失ひ已れば鏡を破つて求め索すが如し。智人は之を笑ふ。樂を失つて更に求むるも、亦復た是の如く、亦道を得たる聖人の爲に笑はる。是を以ての故に、「諸法は鏡中の像の如し」と說く。

　復次に、鏡像の如きは、實には空にして、不生不滅なれども、凡人の眼を誑惑す。一切諸法も亦復た是の如く、空にして實ならず、生ぜず滅せざれども、凡夫人の眼を誑惑す。

　問うて曰く、鏡中の像は因緣より生ず。面あり、鏡あり、鏡を持つの人あり、明あり、是の事和合するが故に像生ず。是の像に因つて憂と喜とを生じ、亦は因とも作り、亦は果とも作る。云何なれば實には空にして、生ぜず滅せずと言ふや。

　答へて曰く、因緣より生じて、自ら在らざるが故に空なり。若し法が實有ならば、是は亦た因緣

【一】「是苦樂和合因緣」は一本にては重複せり。ここには削除す。

と爲す」と。また言く、「諸の有爲の法は、新新に生滅して住せず。若し爾れば是れ則ち斷滅の相を爲す。何となれば先には有にして、今は無なるを以ての故に」と。是の如き等の種種の異說は佛語に違背す、此を以て證と爲す可からず。影はいま色法に異なる、色法、生ずれば、必ず香・味・觸等あり。影は則ち爾らず、是れ有に非ざるが爲めなり。瓶の如きは二根(卽ち)眼根と身根とが(これを)知る。影もし有ならば亦た應に二根(これを)知るべし。而も是の事なし。是を以ての故に影は實物あるに非ず。但だ此れ眼を誑かす法のみ。(たとへば)[九]火熖を捉うるが如し。疾く轉ずれば輪を成せども實に非ず。[一〇]影は有る物に非ず、若し影是れ有る物ならば、應に破すべく滅すべし。若し形滅せざれば、影は終に壞せず、是を以ての故に空なり。復次に、影は形に屬して、自ら在るにあらざるが故に空なり、空なりと雖も而も心に生じて眼に見る。是を以ての故に「諸法は影の如し」と說く。

「鏡中の像の如し」とは、鏡中の像の如きは鏡の作れるにも非ず、面の作れるにも非ず、鏡を執る者の作れるにも非ず、亦た自然の作れるにも非ず、亦た因緣なきにも非ざるなり。何を以てか鏡の作れるにも非ざるや。若し面が未だ鏡に到らざれば則ち像なし、是を以ての故に鏡の作れるには非ず。何を以てか面の作れるに非ざるや。鏡なければ則ち像なし。何を以てか鏡を執る者の作れるに非ざるや。鏡なく面なければ則ち像なし。何を以てか自然の作れるに非ざるや。若し未だ鏡あらず、未だ面あらざれば則ち像なし。像は鏡を待ち面を待つて然る後に有るなり、是を以ての故に自然の作れるに非ず。何を以てか因緣無きに非ざるや、若し因緣無ければ、應に常有なるべし。若し常有ならば、若し鏡を除き面を除くとも、亦た應に自ら出づべし、是を以ての故に因緣なきに非ざるなり。諸法も亦た是の如く、自作に非ず、彼作に非ず、共作にも非ず、因緣なきにも非ざるなり。云何なれば自作に非ざるや。我は不可得なるが故に、一切の因より生ぜる法は自在ならざるが故に、

【九】火熖。旋火輪。
【一〇】「影は有る物に非ず」を別本は缺く。

の光を遮れば、則ち我相・法相の影あり。
復次に、影の如きは、人去れば則ち去り、人動けば則ち動き、人住まれば則ち住まる。善惡業の影も亦是の如く、後世に去る時は亦た去り、今世に住する時は亦た住し、報は斷ぜざるが故に、罪福熟する時には則ち出づ。偈に說くが如し。

『空中にも亦逐ひ去り、山石の中にも亦た逐ひ、地底にも亦た隨ひ去り、海水の中にも亦た入る、處處に常に隨ひ逐うて、業の影は相離れず。』

是を以ての故に「諸法は影の如し」と說く。

復次に、影の空無にして、實を求むるに得べからざるが如く、一切の法も亦た是の如く、空にして實あること無し。

問うて曰く、影は空にして、實あること無しとするも、是の事は然らず、何となれば、阿毘曇に「云何なるを色入と名くや、青・黄・赤・白・黑・縹・紫・光明・影等及び身業の三種の作色、是を可見の色入と名く」と說くを以ての故なり。汝云何なれば無なりと言ふや。復次に、實に影有り、因緣あるが故なり。因を樹と爲し、緣を明と爲せば、是の二事合して影の生ずる有り。云何なれば無しと言ふや。若し影無くんば、餘の法の因緣有る者も亦た皆應に無かるべし。復次に、是の影の色は見るべし。長短・大小・麁細・曲直の形動けば影も亦た動く、是の事は皆見るべし。是を以ての故に應に有るべし。

答へて曰く、影は實に空無なり。汝は阿毘曇の中の說を言ふも、是れ阿毘曇の義を釋する人の作す所の說なり。一種の法門の人が、其の意を體せずして執して以て實と爲すなり。鞞婆娑の中に說くが如きは、「微塵は至細にして破す可からず、燒く可からず、是れ則ち常有なり」と。復た、「三世の中に法有り、未來の中より出でて、現在に至り、現在より過去に入つて失ふ所なし。是を則ち常

るのみ。實に虛空あり、亦實に飛ぶ者もあり、心惑ふを以ての故に自ら身飛ぶと見るのみ、實なきには非ざるなり。

答へて曰く、實に人に頭ありと雖も、實に角ありと雖も、但だ人の頭に角を生ずとするは、是れ妄見なり。

問うて曰く、世界は廣大なり、先世の因緣も種種同じからず。或は餘國には人頭に角を生ずる有らん、或は一手一足、一尺の人有らん、九頭の人あらん。人に角あるに何の怪しむ所ぞ。

答へて曰く、若し餘國の人に角あるは爾るべし、但だ夢に此の國の識る所の人にして、角ありと見るは則ち得べからざるなり。

復次に、若し人夢に虛空の[七]邊と方の邊と時の邊とを見るとせば、是の事云何にして實あらんや。何の處にか虛空なく方なく時なけん。是れを以ての故に夢中には、無を而も有と見る。汝は先に「緣なければ、云何にして識を生ぜん」と言へり。五塵の緣なしと雖も、自ら思惟する念の力轉ずるが故に[八]法の緣生ず。若し、人、二頭ありと言はゞ、語に因つて想を生ず。夢中に無を而も有と見るも、亦復是の如し。諸法も亦爾なり。諸法は無なりと雖も、而も見るべく、聞くべく、知るべし。偈に說くが如し。

『夢の如く幻の如く、揵闥婆の如く、一切の諸法も、亦復是の如し。』

是を以ての故に諸の菩薩は、諸法を「夢の如し」と知ると說く。

「影の如し」とは、影は但だ見る可くして捉ふ可からず。諸法も亦た是の如く、眼情等の見聞覺知は實に不可得なり、偈に說くが如し。

『是の實智慧は、四邊捉へ叵し、大火聚の如く、亦觸る可からず。法は受く可からず。亦受くるに應ぜず。』

復次に、影の如きは、光映ずるときは則ち現じ、映ぜざるときは則ち無し。諸の結、煩惱、正見

【七】邊。限界。

【八】法。この場合も「もの」である。

「夢の如し」とは、夢中の如きは、實事なきに之を實ありと謂ひ、覺め已つて無なるを知り、還つて自ら笑ふなり。人も亦是の如く、諸の結使の眠の中には、實は無なれども而も著す、道を得て覺むる時は、乃ち實なしと知つて亦復自ら笑ふ。是を以ての故に「夢の如し」と言ふ。

復次に、夢は眠力の故に法無きを而も見る。人も亦是の如く、無明の眠力の故に、種種の無きものを而も有りと見る。謂ゆる我・我所・男・女等なり。

復次に、夢中の如きは、喜ぶ事なきに而も喜び、瞋る事なきに而も瞋り、怖るゝ事なきに而も怖るゝなり、三界の衆生も亦是の如く、無明の眠の故に、瞋るべからざるに而も瞋り、喜ぶべからざるに而も喜び、怖るべからざるに而も怖るゝなり。

復次に、夢に五種あり、若しくは身中調はず、若しくは熱氣多ければ、則ち多く夢に火を見、黃を見、赤を見る。若し冷氣多ければ、則ち多く水を見、白を見る、若し風氣多ければ、則ち多く飛ぶを見、黑を見る。又た復た聞見する所の事は多く思惟し念ふが故に則ち夢を見る。或は天が夢を與へて未來の事を知らしめんと欲するが故に(夢を見る)。是の五種の夢は、皆實事なくして而も妄見するなり。人も亦是の如く、五道の中の衆生は、身見の力の因緣の故に四種の我を見る。(謂く)色陰は是れ我、色は是れ我所、我中の色、色中の我なり、色の如く受想行識も亦た是の如し。四五の二十あり。道を得たる實智慧もて覺め已れば實なきことを知る。

問うて曰く、夢は實なしと言ふべからず、何となれば識心は因緣を得れば便ち夢中の識を生ず、種種の緣はあり。若し是の緣なくんば云何にして識を生ぜんや。

答へて曰く、無なり。見るべからざるを而も見る。夢中に人の頭に角あるを見、或は夢に身の虛空を飛ぶを見るも、人は實には角なく、身も亦飛ばず。是の故に實なし。

問うて曰く、實に人頭あり、餘處にも亦實に角あり。心惑ふを以ての故に、人の頭に角あるを見

して之に趣くに、轉た近づけば轉た失し、日高ければ轉た滅す。飢渴し悶極つて熱氣の野馬の如くなるを見て、之を謂つて水と爲し、疾く走り之に趣くに、轉た近づけば轉た滅す、疲極まり困厄し、窮山狹谷の中に至り、大に喚き啼哭す。聞くに響の應ずる有り、居民ありと謂ひ、之を求むるに疲極りて見る所なし。思惟して自ら悟り、渴を願ふの心息む。無智の人も亦是の如く、空なる陰・界・入の中に、吾我及び諸法を見、婬瞋の心に著して、四方に狂走し、樂を自ら滿すを求め、顚倒し欺誑して、窮極懊惱す。若し智慧を以て我なく實法なしと知らば、此の時は顚倒の願息む。

復次に、揵闥婆城は、城に非ず、人の心に想うて城と爲すのみ。凡夫も亦是の如く、身に非ざるを想うて身と爲し、心に非ざるを想うて心と爲すなり。

問うて曰く、一事もて知るべし、何ぞ多くの喩を以てするや。

答へて曰く、我先に已に答ふ、是の摩訶衍は大海の水の如く、一切の法を盡く攝す。摩訶衍には、因緣多きが故に譬喩多きも咎なし。復次に、是の菩薩は甚深なる利智の故に、種種の法門、種種の因緣、種種の喩もて諸法を壞す。人の解の爲の故に、應に多くの喩を引くべし。

復次に、一切の聲聞法の中には揵闥婆城の喩なく、種種の餘の無常の喩あり。色は聚沫の如く、受は泡の如く、想は野馬の如く、行は芭蕉の如く、識は幻及び幻網の如しとす。經の中の空の譬喩に、是の揵闥婆城を以てするは喩異なるが故に此の中に說くなり。

問うて曰く、聲聞法の中には城を以て身に喩ふ。此の中には何を以てか、揵闥婆城の喩を說くや。

答へて曰く、聲聞法の中の、城は、衆緣は實有にして但だ城のみ是れ假名なるに喩ふ。揵闥婆城は衆緣も亦無にして、旋火輪の如く、但だ人の目を惑はすのみ。聲聞法の中には、吾我を破せんが爲の故に城を以て喩と爲す。此の中にては、菩薩は利根にして、深く諸法の空の中に入るが故に、揵闥婆城を以て喩と爲す。是を以ての故に「揵闥婆城の如し」と說く。

若し色無き處なければ、卽ち虛空の相なし。若し相なければ卽ち法なし。是を以ての故に虛空は但だ名のみ有つて實なし。虛空の如く諸法も亦是の如し。但だ假名のみ有つて而も實なし。是を以ての故に諸の菩薩は諸法は虛空の如しと知る。

「響の如し」とは、若しは深山狹谷の中、若しは深き絕澗の中、若しは空なる大舍の中に於いて、若しくは語聲、若しくは打聲の、聲に從つて聲あると名けて響と爲す。無智の人は謂つて、「人の語聲有り」と爲す。智者は心に念ずらく、「是聲は人の作すこと無し、但だ聲の觸るゝを以ての故に、更に聲有り名けて響を爲す」と。響事は空にして能く耳根を誑かす。人の語らんと欲する時の如きは、口中の風を[五]優檀那と名く。還り入つて、臍に至り、臍に觸れて響出づ。響出づる時七處に觸れて退く、是を語言と名く。偈に說くが如し。

『風を憂檀那と名く。臍に觸れて上り去る、是の風七處卽ち項及び齗と齒と脣と、舌と咽と及以び胸とに觸る。是の中より語言生ず。

愚人は此を解せず、惑著して瞋癡を起し、中人は智慧あつて、瞋らず亦た著せず、亦復た愚癡ならず、但だ諸法の相の、曲・直及び屈・申、去・來に隨つて語言を現はす、都て作者あること無し。是の事は是れ幻なりとせん、機關木人とせん、是れ夢中の事とせん、我れ熱氣に悶ゆとせん、是れ有りとせん、是れ無しとせん。是の事誰か能く知る。是の骨人筋纏して、能く是の語聲を作すは、融せる金を水に投ずるが如し。』

是を以ての故に言ふ。「諸の菩薩は、諸法は響の如しと知る」と。

[六]「揵闥婆城の如し」とは、日の初めて出づる時、城門・樓櫓・宮殿に行人の出入するを見たるに、日轉た高ければ轉た滅す。此の城は但だ眼に見るべくして、而も實あること無し、是を揵闥婆城と名く。人あり、初より揵闥婆城を見ず。晨朝に東に向つて之を見るや、意に實と謂ひ、樂しんで疾行

【五】憂陀那（Udāna）。

【六】揵闥婆（Gandharva）。樂人揵闥婆の化作せる空中樓閣。

の如し」」と說く。

問うて曰く、虛空は實有の法なり。何となれば若し虛空に實法なしとせば、若しくは擧、若しくは下、若しくは來、若しくは往、若しくは屈、若しくは申*、若しくは出、若しくは入等の所作あるも、應に有ること無かるべし。動く處なきを以ての故なり。

答へて曰く、若し虛空の法にして實有ならば、虛空には應に（虛空の）住する處あるべし。何となれば住する處なければ則ちその法無きを以ての故なり。若し虛空は孔穴の中に在つて住すとせば是れは虛空は虛空の中に在つて住すと僞すなり、是を以ての故に孔中に住すべからず。若し實中に在つて住すとせば是の實は、空にあらず。則ち住することを得ず、受くる所なきが故なり。

復次に、汝は住處は是れ虛空なり、石壁は實中に住處あること無きが如しと言ふとも、若し住處なければ則ち虛空なし。虛空に住處なきを以ての故に虛空なし。

復次に、相無きが故に虛空なし。諸法には各各相あり、相あるが故に法有るを知る。地の堅相、水の濕相、火の熱相、風の動相、識の識相、慧の解相、世間の生滅の相、涅槃の永滅の相の如し、是の虛空には相なきが故に無なり。

問うて曰く、虛空には相あり、汝知らざるが故に無しと言ふ。色無き處、是れ虛空の相なり。

答へて曰く、爾らず、色無きは是を破色と名く、更に異法なきこと燈の滅すれば更に法無きが如し。是を以ての故に虛空の相は有ること無し。

復次に、是の虛空の法は無なり、何となれば汝は色に因るの故に、色無き處を以て、是れ虛空の相なりとす。若し爾らば色の未だ生ぜざる時には、則ち虛空の相無ければなり。

復次に汝は、「色は是れ無常の法、虛空は是れ有常の法なり。色の未だ有らざる時は、先きに虛空の法あるべし、虛空は有常なるを以ての故に」と謂ふ。色未だ有らずんば則ち色無き處なし。

*申は伸の意なり。

結使の影を見ず。是を以ての故に「諸の菩薩は諸法は水中の月の如しと知る」と說く。
「虛空の如し」とは、但だ名のみ有つて而も實の法なし、虛空は可見の法に非ざるも、遠く視るが故に眼光轉じて[四]縹色を見る。諸法も亦是の如し、空にして所有なきも、人の無漏の實智慧に遠ざかるが故に實相を棄てゝ、彼我・男女・屋舍・城郭等の種種の雜物を見て心著すること、小兒の靑天を仰ぎ視て實色ありと謂ふが如し。人あつて飛上して、遠きを極むとも而も見る所なし。遠く視るを以ての故に、靑色を爲すと謂ふのみ。諸法も亦是の如し。是を以ての故に「虛空の如し」と說く。
復次に、虛空の性は常に淸淨なるも、人は謂つて陰曀にして、不淨なりと爲すが如く、諸法も亦た是の如し。性は常に淸淨なれども、婬欲・瞋恚等の曀するが故に、人は謂つて不淨と爲す。偈に說くが如し。
『夏月の天は雷電して雨り、陰雲覆曀して淸淨ならざるが如く、凡夫の無智も亦是の如く、種種の煩惱常に心を覆ふ。
冬天の日は時に一たび出づるも、常に昏氣にして雲蔭、曀を爲すが如く、初果と第二道とを得と雖も、猶ほ欲染の爲に蔽はる。
若しくは春天の日は出でんと欲する時、陰雲の爲に覆曀せらるゝが如く、欲染を離れたる第三果と雖も、餘殘の癡慢は猶ほ心を覆ふ。
若しくは、秋日の雲曀なきが如く、亦たは大海水の淸淨なるが如く、所作已に辦ぜる無漏心の羅漢は、是の如く淸淨なることを得。』
復次に、虛空には初なく、中なく、後なし。諸法も亦是の如し。
復次に、摩訶衍の中に、佛、須菩提に語りたまふが如く、「虛空には前世なく、亦た中世なく、亦た後世もなし。諸法も亦是の如し」と。彼の經は此の中に應に廣く說くべし。是の故に「諸法は虛空

【四】縹色。淺靑色、空の色。

の小兒を欺誑するが如く、因緣に屬して自ら在らず、久しく住せずと說くが如し。是の故に諸の菩薩は諸法は幻の如くなるを知ると說く。

[二]「焰の如し」とは、炎は日光と風とが塵を動かすを以ての故に、曠野の中に野馬の如く見ゆ、無智の人は初めて見て之を謂つて水と爲す。男相・女相も亦是の如し、結使・煩惱の日光と熱せる諸行の塵と、邪憶念の風とが生死曠野の中に轉ずるに、智慧なき者は一相と爲し、男たり女たりと謂ふ。是を焰の如しと名く。

復次に、若し遠く焰を見れば水たりと想へども、近づけば則ち水相なし。無智の人も亦是の如し。若し聖法に遠ざかれば無我を知らず、諸法の空なるを知らず、陰・界・入の性の空なる法の中に於て、人相・男相・女相を生ずれども、聖法に近づけば、則ち諸法の實相を知り、是の時、虛誑の種種の妄想盡く除く。是れを以ての故に說けり。諸の菩薩は、「諸法は焰の如しと知る」と。

「水中の月の如し」とは、月は實には虛空の中に在り、影を水に於て現ず。實法相の月は如・法性・實際の虛空の中に在れども、而も凡夫人の心水中には我・我所の相を現ずるあり。是を以ての故に「水中の月の如し」と名く。

復次に、小兒が水中の月を見て、歡喜して取らんと欲するが如し、大人・之を見て則ち笑ふ、無智の人も亦是の如し。[三]身見の故に吾我ありと見、實智なきが故に種種の法を見、見已つて歡喜して、諸相・男相・女相等を取らんと欲す。諸の道を得たる聖人は之を笑ふ。偈に說くが如し。

『水中の月と炎中の水との如し。夢中に財を得んとし死して生を求むるは。人あり此に於て實に
　得んと欲せば、是の人は癡惑にして聖の笑ふ所なり。』

復次に、譬へば靜水の中には月の影を見れども、水を攪けば則ち見えざるが如く、無明の心の靜水の中には吾我・憍慢・諸の結使の影を見れども、實智慧の杖もて心水を攪けば、則ち吾我等の諸の

【二】焰。陽炎なり。炎とも書く。

【三】身見。因緣の假に和合せるのみなる自己を實在と信ずる考へ方。

法の定まれる實性ありて、是を無明と名づくるや不や。」佛の言はく、「不な」と。爾の時に、德女復た佛に白して言さく「若し無明は內に無く、外に無く、亦內と外とに無く、先世より今世に至り、今世より後世に至ることなく、亦眞實の性なしとせば、云何んぞ無明より行を緣じ、乃至衆苦集まるや。世尊よ、譬へば樹あるが如し。若し根なしとせば、云何んぞ莖節・枝葉・華果を生ずるを得んや」と。佛の言はく、「諸法の相は空なりと雖も、凡失は無聞無智なるが故に、而も中に於て種種の煩惱を生じ、煩惱の因緣は身口意の業を作り、業の因緣は後身を作り、身の因緣は苦を受け樂を受くるなり。是の中に實に煩惱を作ること有ること無く、亦身口意の業なく、亦苦樂を受くる者あること無し。譬へば幻師の種種の事を幻作するが如し。汝が意に於て云何。是の幻の所作は內に有りや不や。」答へて言く、「不な。」外に有りや不や。」答へて言く、「不な。」「內と外とに有りや不や。」答へて言く、「不な。」「先世より今世に至り、今生より後世に至るや不や。」答へて言く、「不な。」「幻の所作に生ずる者と滅する者とありや不や。」答へて言く、「不な。」「實に一法の、是の幻の作るところのものなるや不や。」答へて言く、「不な。」と。佛の言はく、「汝、幻の作るところの伎樂を頗見頗聞けるや不や」と。答へて言く、「我は亦聞き亦見たり」と。佛、德女に問ひたまはく、「若し幻は空にして欺誑無實ならば、云何んぞ幻より能く伎樂を作すや」と。德女、佛に白して言さく、「世尊よ、是れ幻相の法なれば爾なり、根本なしと雖も而も聞見すべし」と。佛の言はく、「無明も亦是の如し。內に有らず、外に有らず、內外に有らず、先世より今世に至り、今世より後世に至ることなく、亦た實性なく、生ずる者、滅する者あること無しと雖も、而も無明の因緣は諸行を生じ、乃至衆苦陰集れり。幻息めば幻の所作も亦息むが如く、無明も亦爾なり。無明盡くれば行も亦盡き、乃至衆苦の集みた盡く」と。

復た次に、是の幻の譬喩は、衆生に一切有爲法は空にして堅固ならざるを示す。一切の諸行は幻

卷の第六

初品第十一、……「十喩」釋論

【經】諸法は幻の如く、焔の如く、水中の月の如く、虛空の如く、響の如く、犍達婆城の如く、夢の如く、影の如く、鏡中の像の如く、化の如しと解了す。

【論】是の十喩は、空法を解せんが爲の故なり。

問うて曰く、若し一切諸法は空にして幻の如くならば、何を以ての故に、諸法に見るべく、聞くべく、嗅ぐべく、嘗むべく、觸るべく、識るべき者ありや。若し實に所有無くんば、應に見るべき、聞くべき、乃至、識るべきもの有るべからず。復次に、若し無なるを妄見するとせば、何ぞ以て聲を見、色を聞かざるや。若し皆一等に空にして所有なくんば、何ぞ以て「見るべきもの」と、「見るべからざるもの」とありや。諸法空なるを以ての故なり。一指の第一の[一]甲なければ、第二の甲も亦無きが如し。何を以てか第二の甲を見ずして、獨り第一の甲のみを見るや。是を以ての故に知る。第一の甲は實有なるが故に見るべく、第二の甲は實無なるが故に見るべからざることを。

答へて曰く、諸法の相は空なりと雖も亦「見るべき」と「見るべからざる」とを分別することあり、譬へば幻化の象・馬及び種種の諸物の如し。實無しと知ると雖も、然も色は見る可く、聲は聞く可く、六情と相對して相錯亂せず。諸法も亦是の如く、空なりと雖も、而も見る可く、聞く可く、相錯亂せず。德女經に說くが如し。德女、佛に白して言さく、「世尊よ、無明の如きは內に有りや不や。」佛の言はく、「不な。」「外に有りや不や。」佛の言はく、「不な。」「內と外とに有りや不や。」佛の言はく、「不な。」「世尊よ、是の無明は、先世より來るや不や。」佛の言はく、「不な。」「此世より後世に至るや不や。」佛の言はく、「不な。」「此の無明に生ずる者と、滅する者とありや不や。」佛の言はく、「不な。」「一

【一】甲。爪なり。

問うて曰く、應に「無數億劫に巧に法を說く」と言ふべし、復た何を以てか「出だす」と言ふや。
答へて曰く、無智の人の中、及び弟子の中に於ては、法を說くこと易し、若し多聞、利智にして、善く論議する人の中なれば、法を說くこと難し、若し小智の法師ならば是の中に退縮せん。若し大學・多聞ならば、問難の中に大膽にして欣豫し、一切衆の中に於いて大威德あらん。天會經の中の偈に說くが如し。

『面・目・齒の光明は、普く大會を照らし、諸天の光を映じ奪つて、種種皆現ぜず。』

是を以ての故に名けて「無數億劫に巧に法を說く中に、能く出すことを得」と爲す。

するが如し。』

無量無邊の智慧福德の力集まるが故に畏るゝ所なし。偈に說くが如し。

『若し人、衆の惡を滅し、乃至小罪も無ければ、是の如き大德の人は、願ふて而も滿たさる無し。是の人は大智慧にして、世界の中に惱なし。是の故に、此の如きの人には、生死と涅槃とは一なり。』

復次に、獨り菩薩のみ無所畏を得るが故なり。毘那婆那王經の中に說くが如く、「菩薩のみ獨り四無所畏を得」先に說くが如し。

【經】無數億劫に、說法を巧に出す。

【論】不放逸等の諸の善根を、自身に好く修する是の諸の菩薩は、一世二三四世のみに非ず、乃至無量阿僧祇劫に、功德智慧を集む、偈に說くが如し。

『衆生の爲の故に大心を發す。若し敬はずして慢を生ずる者あらば、其の罪の甚だ大なること、說くべからず、何に況んや復た惡心を加ふるをや。』

復次に、是の菩薩は無數無量劫の中に、身を修め戒を修め、心を修め慧を修め、生滅の縛を解き、逆順の中にありて自ら了了たり。諸法の實相を知るに三種の解あり、聞解と義解を得解となり。種種の說法門の中に罣礙せらるゝなく、皆な說法方便・智慧波羅蜜を得。是の諸の菩薩の說くところは、聖人の說の如く、皆な應に信受すべし。偈に說くが如し。

『慧あるも多聞無ければ、是は實相を知らず。譬へば大闇の中にて、目あるも見る所なきが如し。多聞なれど智慧無きは、亦た實義を知らず。譬へば大明の中にて、燈あるも而も目なきが如し。多聞にして利き智慧あらば、是れの說く所は應に受くべし。聞無く亦智なければ、是を人身の牛と名く。』

【經】顏色和悦して、常に先づ問訊し語るところ麁ならず。

【論】瞋恚の本を拔くが故に、嫉妬を除くが故に、常に大慈・大悲・大喜・大捨を修するが故に、四種の邪見を斷ずるが故に、顏色和悦なることを得るなり。偈に說くが如し。

『若し乞道人を見ば、能く四種を以て待てよ、初めに見て好く眼視し、迎逆して敬つて問訊し、
床座を好くして供養し、充ち滿して欲する所を施せ。
布施の心、是の如くなれば、佛道は掌に在るが如し。若し能く、四種の口の過(卽ち)妄語の毒、
兩舌・惡(口)・綺語を除かば、大美の果報を得ん。
善軟の人は道を求め、諸の衆生を度せんと欲して、四の邪なる口業を除くは、譬へば馬に轡あるが如し。』

【經】大衆の中に於て、無所畏を得。

【論】大德なるが故に、堅實なる功德・智慧の故に、最上辯陀羅尼を得るが故に、大衆の中に於て畏るゝ所なきことを得。偈に說くが如し。

『內心に智德薄く、外善く美言を以てするは、譬へば竹の內なく、但だ其の外あることを示すが如し。內心に智德厚く、外善く法言を以てするは、譬へば妙なる金剛の、中と外との力具足するが如し。』

復次に、無畏の法を成就するが故に、端正なる貴族にして大力なり。持戒・禪定・智慧・語義等皆成就す。是の故に畏るゝ所なし。是を以ての故に大衆の中に於ても畏るゝ所なし。偈に說くが如し。

『少德にして智慧なければ、應に高座に處るべからず。豺が師子を見れば、竄伏して敢へて出でざるが如し。
大智にして畏るゝ所なくんば、應に師子の座に處るべし。譬へば師子吼ゆれば、衆獸みな怖畏

は共に無色の四陰及び是れの住する所の色を生ず。是を名色と名く。是の名色の中に眼等の六情を生ず、是を六入と名く。情と塵と識と合すれば、是を名けて觸と爲す。觸に從て受を生ず。受の中に心著する、是を渴愛と名く、渴愛は因緣を求む。是を取と名く、取に從ふ後世の因緣業。是を有と名く。有に從て還た後世の五衆を受く、是を生と名く。生に從ふて五衆熟し壞る、是を老死と名く。老死は憂悲哭泣種種の愁惱を生ず。衆苦の和合の集なり。若し一心に諸法の實相を觀じて清淨なれば、則ち無明盡く。無明盡くるが故に行も盡き、乃至衆苦の和合の集、皆盡く。是れ十二因緣の相なり。是の如く能く方便して邪見に著せず、人の爲に演說する、是を名けて「巧に」と爲す。

復た次に、是の十二因緣觀の中に法愛を斷じて心著せず實相を知る、是を名けて「巧に」と爲す。彼の般若波羅蜜不可盡品の中に說くが如し。佛、須菩提に告げたまはく、「癡は虛空の如し、盡すべからず、行は虛空の如し、盡すべからず、乃至衆苦の和合集は、虛空の如し、盡すべからず、菩薩は當に是の知を作すべし。是の知を作す者は、癡際を捨てゝ應に入るべき所無かるべしと爲す」と。是の十二因緣起を觀ずることを作す者は、則ち道場に坐して[三]薩婆若を得ると爲す。

【經】阿僧祇劫より已來大誓願を發す。

【論】阿僧祇の義は菩薩義の品の中に已に說けり。劫の義は、佛、譬喩して說きたまふ、「四千里の石山に長壽の人あり。百歲を過ぐれば細軟の衣を持つて、一たび來つて拂拭し、是の大石山をして盡さしむるとも、劫は故らに未だ盡きざるなり。四千里の大城に、中に芥子を滿し概して平かならしめず。長壽の人あり、百歲を過ぐれば一たび來つて一の芥子を取りて去らんに、芥子は盡くとも、劫は故らに盡きず。菩薩は是の如き無數劫に大正願を發して、衆生を度脫す。願を大心要誓と名く。必ず一切衆生を度し、諸の結使を斷じ、阿耨多羅三藐三菩提を成ぜん、是を名けて「願」と爲す。

【三】薩婆若(Sarvajna)。一切智。

し。

是の諸業の果報は、能く轉ずる者有ること無く、また逃避するの處もなく、哀を求むるも免るべきに非ず。

三界の中の衆生は、之を追うて暫くも離れざること、珂梨羅刹の如し、是の業は佛の說きたまふ所なり。

風は實に入らず、水流は仰行せず、虚空は害を受けざるが如く、業なきも亦是の如し。

諸業の無量の力も、造らざる者は逐はず。果報の時節來るまでは、亡びず亦た失せざるなり。

地より飛んで天に上り、天より雪山に入り、雪山より海に入るも、一切處に(業は)離れず。

常恒に我に隨逐し、一時も相捨つること無く、直ちに至つて失する時なきこと、星の流れ月に趣くが如し。』

是を以ての故に「一切の諸の業障悉く解脫することを得」と說くなり。

【經】 巧に因緣の法を說く。

【論】 十二因緣生の法は、種種の法門能く巧に說けり。煩惱と業と事との法は次第に展轉し相續して生ず。是を十二因緣と名く。是中の無明と愛と取の三事を煩惱と名け、行と有との二事を名けて業と爲し、餘の七分を名けて體事と爲す。是十二因緣の初の二は過去世に攝し、後の二は未來世に攝し、中の八は現前世に攝す。是を略して三事(卽ち)煩惱・業・苦を說くとなす。是の三事は展轉して、更に互に因緣と爲る。是の煩惱は業の因緣、業は苦の因緣、苦は苦の因緣、苦は煩惱の因緣、煩惱は業の因緣、業は苦の因緣、苦は苦の因緣なり。是れを展轉して更に互に因緣と爲ると名く。過去世の一切の煩惱は是を無明と名く。無明より業を生ず、能く世界の果を作るが故に名けて行と爲す。行より垢心を生ず、初身の因は犢子の母を識るが如く、自ら相識るが故に名けて識と爲す。是の識

を諸佛の怨讎、一切聖人の賊と名づく。一切の流に逆ふ人の事を破り、涅槃を喜ばざる、是を魔と名く。是の魔に三事あり。戲笑・語言・歌舞・邪視、是の如き等は愛より生ず。縛打・鞭拷・刺割・斫截、是の如き等は瞋より生ず。身に炙し、自ら凍え、髮を拔き、自ら饑え、火に入り、淵に赴き、巖に投ず、是の如き等は愚癡より生ず。又大過失と、不淨と世間に染著すると、皆是れ魔事なり。利益を憎惡し、涅槃及び涅槃の道を用ひざるも亦是れ魔事にして。大苦海に沒して自ら覺知せず、是の如き等の無量は皆是れ魔事なり。已に棄て已に捨つ、是を諸の魔事を過ぐと爲す。

【經】一切の業障悉く解脫することを得。

【論】一切の惡業を解脫するを得る、是を「業障解脫することを得」と名く。

問うて曰く、若し三種の障(卽ち)煩惱障・業障・報障あらば何を以てか二障を捨てゝ但だ業障のみを說くや。

答へて曰く、三障の中、業力は最大なるが故なり。諸の業を積集して、乃至百千萬劫の中にも失せず燒せず、壞せず、果報を與ふるの時亡びず。是の諸の業は能く久しく住し、和合して果報を與ふ。穀草の(種)子が地中に在りて、時節を得て生じ、失せず壞せざるが如し。是れ諸佛の一切智の第一に尊重なるところにして須彌山王の如きすら、尙ほ是の諸の業を轉ずる能はず、何に況んや凡人をや。偈に說くが如し。

『生死の輪は人を載せ、諸の煩惱・結使は、大力にして自在に轉じ、人能く禁止すること無し。
先世の業は自作にして、轉じて種種の形と爲る、業力を最も大と爲す、世間の中に比なし。
先世の業は自在に、人を將いて果報を受けしむ、業力の故に輪轉して、生死海中を廻る。
大海水、乾き竭き、須彌山の地、盡くるとも、先世の因緣業は、燒けずまた盡きず。
諸業久しく和集すれば、造者自らを逐ひ去る、譬へば債物の主の、人を追逐して置かざるが如

我は智慧の箭を以てし、智慧力を修定して、汝が魔軍を摧破すること、坏瓶を水に沒するが如し。
一心に智慧を修し、以て一切を度せよ。我が弟子よ精進して、常に念じて智慧を修し、如法の行に隨順せば、必ず涅槃に至ることを得ん。汝は放たんと欲せずと雖も、汝の不到の處に到らん。
是の時魔王は聞いて、愁憂して卽ち滅し去り、是の魔惡の部黨も、亦復沒して現はれず。』

是を諸の結使の魔と名く。

問うて曰く、五衆・十八界・十二入は、何の處に是れ魔なりと說くや。

答へて曰く、莫拘羅山の中に、佛、弟子の羅陀に敎へたまふ、「色衆は是れ魔、受・想・行・識も亦是の如し」と。

復次に、若し未來世に色身を作らんと欲すれば、是を動處と爲す。若し無色身を作らんと欲すれば、是も亦動處と爲す。若し有想・無想・非有想・非無想身を作らんと欲すれば、是を一切動處と爲す。動は是れ魔の縛なり、不動は則ち不縛にして惡より脫することを得。此の中に衆・界・入は是れ魔なりと說く。自在天子魔・魔民・魔人は則ち是れ魔なることは說くことを須ゐず。

問うて曰く、何を以てか魔と名くるや。

答へて曰く、慧命を奪ひ、道法・功德善本を壞す。是の故に名けて魔と爲す。諸の外道人の輩の言く、是を欲主と名け、亦た華箭と名け、亦た[三二]五箭名く、種種の善事を破るが故なり」と。佛法の中にては名けて[三一]魔羅と爲し、是の業と是の事を名けて、魔事と爲す。是れ何等の魔事なるや。覺魔品の中に說くが如し。

復次に、人の展轉して世間に苦樂を受くるは、結使の因緣にして、亦魔王力の因緣なり。是の魔

【三一】魔羅(Māra)。
【三二】「丹本の註に、五欲箭と云ふなり」と割註あり。

利鈍とを知り、其の應ずる所に隨つて爲に法を說くが故に、菩薩は大衆の中に在つて法を說くに畏るゝ所なし。三には若し東方南西北方、四維上下より來つて難問すること有るも、我をして法の如く答ふること能はざらしむる者あるを見ず。是の如きの少許の相をも見ざるが故に、衆中に於いて法を說くに畏るゝ所なし。四には一切衆生の問難を聽受するに意に隨つて法の如く答へ、能く巧に一切衆生の疑ひを斷ずるが故に、菩薩は大衆の中に在りて、法を說いて畏るゝ所なきなり。

【經】諸の魔事を過ごす。

【論】魔に四種あり、一には煩惱魔、二には陰魔、三には死魔、四には他化自在天子魔なり。是の諸の菩薩は菩薩の道を得るが故に煩惱の魔を破し、法身を得るが故に陰魔を破し、道を得て法性身を得るが故に死魔を破し、常に一心なるが故に、一切處に心著せざるが故に、不動三昧に入るが故に、他化自在天子魔を破す。是を以ての故に「諸の魔事を過ぐ」と說く。

復次に、是の般若波羅蜜覺魔品の中に、佛自ら魔業と魔事とを說きたまふ。是の魔業魔事盡く已に過すが故に、是を「已に魔事を過ぐ」と名く。

復次に、諸法の實相を除いて、餘殘の一切の法を盡く名けて魔と爲す。諸の煩惱・結使・欲・縛・取・纏・陰・界・入・魔王・魔民・魔人の如し。是の如き等を盡く名けて魔と爲す。

問うて曰く、何の處にか欲縛等の諸の結使を說いて名けて魔と爲すや。

答へて曰く、雜法藏經の中に佛偈を說いて魔王に語りたまふ。

『欲は是れ汝が初軍、憂愁の軍は第二、飢渴軍は第三にして、愛軍を第四と爲す。

第五は眠睡軍、怖畏軍は第六、疑を第七軍と爲す、含毒軍は第八なり。

第九軍は利養にして、虛妄の名聞に著す。第十軍は自ら高うして、他人を輕慢す。

汝が軍等は是の如し。一切世間の人、及び諸の一切の天、能く之を破る者なし。

復次に、三解脫門、これを甚深の法と名く。佛が般若波羅蜜を說きたまふ中に、諸天の讃して言ふが如し。「世尊よ、是の法は甚深なり」佛の言はく、「甚深の法とは、空則ち是の義なり。無作無相則ち是の義なり」と。

復次に、一切諸法の相は實には破すべからず、動ずべからずと解す。是を甚深の法と名く。

復次に、內の心想智力を除いて、但だ定心して諸法の清淨實相の中に住するなり。譬へば熱氣盛なれば、黃に非るを黃と見るが如く、心想智力の故に諸法に於いて轉じて觀る、是を淺法と名く。譬へば人の眼の清淨にして熱氣無ければ、實の如く黃は是れ黃と見るが如く。是の如く內の心想智力を除いて、慧眼清淨なれば諸法の實相を見る。譬へば眞の水精の如し、中に著けば、則ち隨つて黃色を作し、青黃赤白色みな色に隨つて變ずるが如く。心も亦是の如し、凡夫人の內の心想智力の故に諸法の異相を見る。諸法の實相は、空に非ず不空に非ず、有に非ず不有に非ずと觀ずれば、是の法の中に深く入つて、轉ぜず罣礙する所なし。是を「深き法忍を度る」と名く。「度る」とは甚深の法を得るを名く、具足し滿ちて、礙る所なく、彼岸に度ることを得る、是を名けて「度る」と爲す。

【經】無畏の力を得。

【論】諸の菩薩は四無所畏の力を成就す。

問うて曰く、菩薩の如きは所作未だ辦ぜず、未だ一切智を得ざるに、何を以ての故に四無所畏を得と說くや。

答へて曰く、無所畏に二種あり。菩薩の無所畏と、佛の無所畏となり。是の諸の菩薩は未だ佛の無所畏を得ずと雖も、菩薩の無所畏を得、是の故に名けて「無畏の力を得」と爲す。

問うて曰く、何等をか菩薩の四無所畏と爲すや。

答へて曰く、一には一切を聞いて能く持するが故に、諸の陀羅尼を得るが故に、常に憶念して忘れざるが故に、衆中に法を說いて畏るゝ所なし。二には一切衆生の解脫を欲するの因緣と、諸根の

悲の故なり。心清淨なるが故なり。無生法忍を得るが故なり。偈に說くが如し。

『多聞辯慧にして巧に言語し、美はしく諸法を說いて人心を轉ずるも、自ら如法ならず行ひ正しからざれば、譬へば雲雷して而も雨らざるが如し。

博學多聞にして智慧あるも、訥口拙言にして巧便なければ、法寶藏を顯發すること能はず、譬へば雷無くして、而も小雨なるが如し。

廣く學問せず智慧なく、法を說くこと能はず行を好くすること無き、是の弊法師には慚愧なし。譬へば小雲にして雷雨なきが如し。

多聞廣智にして美はしく言語し、巧に諸法を說いて人心を轉じ、法を行じて心正しく、畏るる所無ければ、大雲雷の洪雨を澍ぐが如し。

法の大將の法鏡を持して、佛法の智慧藏を照明し、持誦し廣宣して法鈴を振ふこと、海中の船の一切を渡すが如く、

亦た蜂王の諸味を集むるが如し。說くこと佛言の如く佛意に隨ひ、佛を助け法を明にして衆生を度す、是の如きの法師は甚だ値ひ難し。』

【經】甚深の法忍を度る。

【論】云何なるが甚深の法なるや。十二因緣、是を甚深の法と名く。佛の阿難に告げたまへるが如く、「是の十二因緣の法は甚深にして、解し難く、知り難し。」

復次に、[三〇]過去未來世に依りて六十二の邪見の網を生ずるを永く離る。是を甚深の法と名く。佛の比丘に語げたまへるが如く、「凡夫は聞くこと無ければ、若し佛を讚ぜんと欲するも讚ずる所甚だ少し。謂ゆる若しくは戒の清淨を讚じ、若しくは諸欲を離れたることを讚じ、若しくは能く、是の甚深にして解し難く知り難き法を讚ず、是を實に佛を讚ずと爲す。」是の中梵網經に應に廣く說くべし。

【三〇】「過去未來世……永く離る」は別本には「法を說いて過去未來世の六十二の邪見の網を破る」とあり。

【經】復た懈怠すること無し。

【論】懈怠の法は在家の人の財利と福利とを破り、出家の人の生天の樂と涅槃の樂とを生ずるを破り、在家も出家も名聲倶に滅す。大失・大賊にして、懈怠に過ぎたるは無し。偈に說くが如し。

『懈怠は善心を沒し、癡闇は智明を破り、妙願皆滅せられ、大業も亦已に失す。』

是を以ての故に「復た懈怠すること無し」と說くなり。

【經】已に利養・名聞を捨つ。

【論】是の利養の法は賊の如く功德の本を壞る。譬へば天雹が五穀を傷害するが如し。利養名聞も亦復是の如く、功德の苗を壞りて增長せざらしむ。佛の譬喩を說きたまふが如し。『毛繩が人を縛して、膚を斷り骨を截るが如く、利養を貪るの人が功德の本を斷ずることも、亦復是の如し』と。偈に說くが如し。

『栴檀林に入ることを得ても、而も但だ其の葉のみを取り、既に七寶の山に入りて、而も更に水精のみを取る。

人あり、佛法に入つて涅槃の樂を求めずして、反つて利供養を求む、是の輩は自ら欺くことを爲す。

是の故に佛弟子よ、甘露味を得んと欲せば、當に雜毒を棄捨し、涅槃の樂を勤求すべし。

譬へば惡雹の雨れば、五穀を傷害するが如く、若し利供養に著せば、慚愧・頭陀を破り、今世には善根を燒き、後世には地獄に墮せん。提婆達多の如く利養の爲に自ら沒せん。』

是を以ての故に「已に利養名聞を捨つ」と云ふ。

【經】說法して悕望する所なし。

【論】大慈憐愍して、衆の爲に法を說くは、衣食と名聲と勢力との爲の故に說くにあらず、大慈

亦得ざる所なり。何となれば小阿羅漢の小用の心は一千世界を見、大用の心は二千世界を見、大阿羅漢の小用の心は二千世界を見、大用の心は三千大千世界を見る。辟支佛も亦爾なるを以てなり。是を天眼通と名く。

云何なるを天耳通と名くるや。耳に於いて色界の四大の造れる淸淨色を得、能く一切の聲と、天の聲と、人の聲と、三惡道の聲とを聞くなり。云何にして天耳通を得るや。修得して、常に種種の聲を憶念す。是を天耳通と名く。

云何なるが識宿命通なるや。本事を常に憶念すること、日月年歲より胎中に至り、乃至過去世の中の一世、十世、百世、千萬億世なり。乃至大阿羅漢・辟支佛は八萬大劫を知り。諸の大菩薩及び佛は無量劫を知る。是を識宿命通と名く。

云何なるを知他心通と名くるや。他心の若しくは有垢、若しくは無垢なるを知り。自ら心の生住。を觀ずる時、常に憶念するが故に(これを)得るなり。

復次に、他人の喜相・瞋相・怖相・畏相を觀じ、此の相を見已つて、然る後(その人の)心を知る。是を他心智の初門と爲す。是の五通を略說し竟んぬ。

【經】　言必ず信受す。

【論】　天・人・龍・阿修羅等及び一切の大人は、皆其の語を信受す。是れ不綺語の報なるが故なり。諸の綺語の報は實語ありと雖も、一切の人は皆信受せず。偈に說くが如し。

『餓鬼の中に墮すること有らば、火炎口より出で、四に向つて大聲を發す、是を口過の報と爲す。
復た多く聞見し、大衆に在て法を說くと雖も、不誠信の業を以ては人皆信受せず。
若し廣く多聞にして、人の爲に信受せられんと欲せば、是の故に當に至誠にして、綺語を作すべからず。』

身能く飛行して鳥の如く無礙なり。二には遠きを移して近からしめ、往かずして而も到る。三には此に沒して彼に出づ。四には一念能く到る。轉變とは、大を能く小と作し、小を能く大と作し、一を能く多と作し、多を能く一と作し、種種の諸物を能く轉變す。外道の輩の轉變は極めて久しきも七日に過ぎず、諸佛及び弟子は轉變自在にして久近あること無し。聖如意とは、外の六塵中の愛すべからざる不淨物を能く觀じて淨ならしめ、愛すべきの淨物を能く觀じて不淨ならしむ、是の聖如意法は、唯佛のみ獨り有り。是の如意通は四如意足を修するに從て生ず。是の如意足通等は色緣の故に次第に生ず、一時には得べからず。

天眼通とは、眼に於いて色界の四大の造れる清淨色を得る、是を天眼と名く。天眼の見る所、自らの地及び下地の六道中の衆生、諸物、若しくは近き、若しくは遠き、若しくは麁なる、若しくは細なる諸色にして能く照さざる無し。是の天眼に二種あり。一には報に從つて得、二には修に從つて得。是の五通の中の天眼は修に從つて得、報より得るに非ず。何となれば常に種種の光明を憶念して得るが故なり。復次に有人の言く、是の諸の菩薩の輩は、無生法忍の力を得るが故に六道の中に攝せず、但衆生を教化する爲の故に法身を以て十力に現ず。三界の中に未だ法身を得ざる菩薩は、或は修得、或は報得なり。

問うて曰く、是の諸の菩薩の功德は阿羅漢・辟支佛に勝れたり。何を以ての故に凡夫も共にする所の小功德たる天眼を讃じて、諸の菩薩の慧眼・法眼・佛眼を讃せざるや。

答へて曰く、三種の天あり。一には假號天、二には生天、三には清淨天なり。轉輪聖王と諸の餘の大王等は是を假號天と名け、四天王天より、乃至有頂の生處は、是を生天と名け。諸佛・法身の菩薩・辟支佛・阿羅漢は是を清淨天と名く。是の清淨天の修得の天眼は是を天眼通と謂ふ。佛と法身の菩薩の清淨の天眼は、一切の欲を離れたる、五通の凡夫も得ること能はざる所、聲聞・辟支佛も

『諸法は生ぜず滅せず、生ぜざるに非ず滅せざるに非ず、亦生滅もせず生滅せざるにも非ず、亦生滅せざるにも非ず、生滅せざるに非ざるにも非ず。』

已に[一七]解脫を得て、空と[一八]非空と、是等悉く諸の戲論を捨滅し、言語の道斷え、深く佛法に入り、心通じて礙なく、動かず退かざるを無生忍と名く。是れ佛道を助くるの初門なり。是を以ての故に已に等忍を得たりと說く。

【經】 無礙陀羅尼を得たり。

【論】 問うて曰く、前に已に諸の菩薩は陀羅尼を得と說けり。今何を以てか復た無礙陀羅尼を得と說くや。

答へて曰く、無礙陀羅尼は最大なるが故なり。一切の三昧の中、三昧王三昧は最大なるが如く、人中の王の如く、諸の解脫の中に無礙解脫の[一九]大なるが如く、是の如く、一切の諸陀羅尼の中にて無礙陀羅尼は大なり。是を以ての故に重ねて說くなり。

復次に、先に諸の菩薩は、陀羅尼を得と說けども、是れ何等の陀羅尼なるかを知らず。小陀羅尼あり、轉輪聖王仙人等の得る所の聞持陀羅尼、分別衆生陀羅尼、歸命救護不捨陀羅尼の如し。是の如き等の小陀羅尼は餘人にも亦有り。是の無礙陀羅尼は、外道・聲聞・辟支佛・新學の菩薩皆悉く得ず。唯だ無量の福德・智慧・大力の諸の菩薩のみ獨り是の陀羅尼あり、是を以ての故に別して說けり。

復次に、是の菩薩の輩は、自利は已に具足せり、但だ彼を益せんと欲して、說法教化盡くること無く無礙陀羅尼を以て根本と爲す。是を以ての故に諸の菩薩は常に無礙陀羅尼を行ず。

【經】 悉く是れ五通。

【論】 (五通とは)如意と天眼と天耳と他心智と自識宿命となり。

云何なるが如意なるや。如意に三種あり、能到と轉變と聖如意となり。能到に四種あり。一には

【一七】「丹註に云く、邪見に於て離るるを得るが故に解脫と云ふ也」と割書あり。

【一八】「丹註に云ふ。空に於て取らざる故に非と云ふ也」と割註あり。

【一九】「丹註に云ふ。佛を得、道を得る時に得るところなり」と割註あり。

善人・不善人・大人・小人・人及び畜生に於て、一等に觀ずるや。不善人の中には實に不善の相あり、善人の中には實に善相あり、大人・小人・人及び畜生も亦爾なり。牛相は牛の中に住し、馬相は馬の中に住し、牛相は馬の中に非ず、馬相は牛の中に非ず、馬は牛と作らざるが如きが故なり。衆生は各各の相あり、云何にして一等に觀じて、而も顚倒に墮せざるや。

答へて曰く、若し善相・不善相、是れ實ならば、菩薩は應に顚倒に墮すべし。何となれば諸法の相を破るが故なり。諸法は實に非ざるを以て、善相は實に非ず、不善相は多相に非ず、少相に非ず、人に非ず、畜生に非ず、一に非ず、異に非ず。是を以ての故に汝が難は非なり、諸の法相を說く偈の如し。

『[二六]生ぜず滅せず、斷ならず常ならず、一にあらず異にあらず、去にあらず來にあらず、因緣生の法は、諸の戲論を滅す。佛能く是を說きたまふ、我今當に說くべし。』

復次に、一切衆生の中に、種種の相に著せず、衆生の相・空相は一等にして異なる無しと。是の如く觀ずる、是を衆生等と名く。若し人是の中に心等しくして無礙ならば直に不退に入る、是を等と忍とを得と名く。等と忍とを得たる菩薩は一切衆生に於て、瞋らず惱まず、慈母の子を愛するが如し、偈に說くが如し。

『聲は呼響の如く、身行は鏡像の如しと觀ず。此の如く觀ずるを得たる人は、云何んぞ而も忍ならざらん。』

是を衆生等忍と名く。

云何なるを法等忍と名くるや。善法・不善法・有漏・無漏・有爲・無爲等の法、是の如きの諸法において不二法門に入り、實の法相の門に入る。是の如く入り竟つて、是の中に深く諸法の實相に入る時、心忍にして直に無諍無礙に入る。是を法等忍と名く。偈に說くが如し。

【二六】中論第一偈。

畏莊嚴力嚬呻三昧、法性門旋藏三昧、一切世界無礙莊嚴遍月三昧、遍莊嚴法雲光三昧なり。菩薩は是の如き等の無量の諸三昧を得。

復次に、般若波羅蜜摩訶衍義品の中に略說するに、則ち一百八の三昧あり。初めを首楞嚴三昧と名け、乃ち虛空不著不染三昧に至る、廣く說けば則ち無量の三昧あり。是を以ての故に諸の菩薩は諸の三昧を得と說く。

「空・無相・無作を行ず」とは、

問うて曰く、前に菩薩に諸の三昧を得と言へり、何を以ての故に復た空・無相・無作を行ずと言ふや。

答へて曰く、前には三昧の名を說いて、未だ相を說かず、今は相を說かんと欲す、是の故に空・無作・無相を行ずと言ふ。若し人ありて、空・無相・無作を行ぜば、是を實相の三昧を得と名く。偈に說くが如し。

『若し戒を持して清淨なれば、是を實の比丘と名け、若し能く空を觀ずること有れば、是を三昧を得と名く。若し能く精進すること有らば、是を道を行ずる人と名け、若し涅槃を得ること有れば、是を名けて實樂と爲す。』

「已に等と忍とを得」とは、

問うて曰く、云何なるが等にして、云何なるが忍なるや。

答へて曰く、二種の等あり、衆生等と法等となり。忍に亦二種あり、衆生忍と法忍となり。

云何なるが衆生等なるや。一切衆生の中において等心・等念・等愛・等利なる、是を衆生等と名く。

問うて曰く、慈悲の力の故に、一切衆生の中に於て、應に等念なるべきも、應に等觀なるべからず。何となれば菩薩は實道を行じて顚倒せざること、法相の如くなるを以ての故なり。云何にして

四、空無邊處解脫
五、識無邊處解脫
六、無所有處解脫
七、非想非非想處解脫
八、滅受想定身作證具住

【一三】 八勝處。勝知勝見を起し貪愛を捨つる八種の禪定。
一、內有色想觀外色少勝處
二、內有色想觀外多勝處
三、內無色想觀外色少勝處
四、內無色想觀外色多勝處
五、青勝處
六、黃勝處
七、赤勝處
八、白勝處

【一四】 九次第定。四禪・四無色及び滅受想定を他心を交えず次第に入る定なり。

【一五】 十一切處。十遍處とも云ふ。青・黃・赤・白・地・水・火・風・空・識の十法を觀じて、その一々に於て一切處に周遍せしむるなり。

以上の三を以て三法と名く。三界の貪愛を遠離する一具の出世間禪なり。

り已れば無作なり。云何なるが無作なるや。諸法の若しくは空、若しくは不空、若しくは有、若しくは無なる等を觀ぜざるなり。佛、法句の中の偈に說きたまふ如し。

『有を見ては則ち恐怖し、無を見ては亦恐怖す。是の故に有に著せず、亦復た無に著せず。』

是を無作三昧と名く。云何なるが無作三昧なるや。一切の法は相あること無し、一切の法は相あること無し、一切の法を受けず、著せず、是を無相三昧と名く。偈に說くが如し。

『言語已に息み、心行も亦滅す。不生不滅なること、涅槃の相の如し。』

復次に、十八の空、是を空三昧と名く、[七]種種の有の中に心に求めざる、是を無作三昧と名く、一切の諸相を破壞して、憶念せざる、是を無相三昧と名く。

問うて曰く、種種の禪定の法あり、何を以ての故に獨り此の三の三昧を稱するや。

答へて曰く、三の三昧の中の思惟は涅槃に近きが故なり。人心をして高からず下からず、平等にして動ぜざらしむ、餘處は爾らず。是を以ての故に獨り是の三の三昧を稱す。餘の定の中には或は愛多く、或は慢多く、或は見多し。是の三の三昧の中の第一實義は、實に利にして能く涅槃門を得。是を以ての故に諸の禪定法の中にて、是の三の定法を以て三の解脫門と爲し、亦名けて三の三昧と爲す。是の三の三昧は實の三昧なるが故に、餘の定も亦定と名くることを得るなり。

復次に、四の[八]根本禪を除き、[九]未到地より乃至[一〇]有頂地を名けて定と爲し、また三昧と名く。禪に非ざる四禪も亦定と名け、亦禪と名け、また三昧と名く。諸餘の定もまた定と名け、また三昧と名く。四無量・[一一]四辯・六通・[一二]八背捨・[一三]八勝處・[一四]九次第定・[一五]十一切處等の諸定の法の如し。

復た有人の言く、一切の三昧の法に二十三種ありと。有は言ふ、六十五種ありと。有は言く、五百種ありと。摩訶衍は最大なるが故に、無量の三昧あり。謂ゆる遍法性莊嚴三昧、能照一切三世法三昧、不分別知觀法性底三昧、入無底佛法三昧、如虛空無底無邊照三昧、如來力行觀三昧、佛無

【七】種種の有。「丹註に五道の生有と本有と死有と中有の業を云ふ」と註記す。

【八】四根本禪。「四靜慮とも云ふ。これを修して色界の四禪天に生ず。こは佛教のみに限らず外道も修す。初禪の前行に粗住・細住・欲界定・未到定あり。その正禪に八觸・十功德を具す。十八支の中、覺・觀・喜・樂・一心の五支。二禪は初禪の覺觀を捨てて得、十八支の中にて、內淨・喜・樂・一心の四支あり。三禪は二禪の喜樂を捨てて得、捨・念・慧・樂・一心の五支あり。四禪は前の樂受を捨つ、不苦・不樂・捨・念・一心の四支あり。

【九】未到地。初禪の前行の最後、茲に至りて身心空寂、內に身を見ず、外に物を見ず。かくして一日乃至一月一歲なれば、初禪に入りて八觸生ず。

【一〇】有頂地。四禪の最後に達する色界の第四處、色究竟天を指す。

【一一】四辯。詳しくは四無礙辨、また辯を解或は智として呼ぶ。法・義・辭・樂說の四無礙辯なり。

【一二】八背捨。八解脫とも云ふ。

一、內有㆓色想㆒觀㆓外色㆒解脫

二、內無㆓色想㆒觀㆓外色㆒解脫

三、淨解脫身作證具足住

供養すとも、後ち更に異なる因緣あれば、則ち瞋恚し、若しくは打ち、若しくは殺さん。是の故に喜ばざるなり。

復次に、菩薩は是の念を作す、「我に功德・智慧あるを以ての故に、來つて讚歎し供養す。是れ功德を讚歎するが爲にして、我を讚ずるには非ざるなり。我何を以てか喜ばんや」と。

復次に、是の人は自ら果報を求むるが故に、我が作すところの因緣に於いて、我が作せる功德を供養す。譬へば人の穀を種うるに、溉灌修理すれども、地は亦た喜ばざるが如し。

復次に、若し人我を供養せんに、我若し喜んで受くれば、我が福德は則ち薄れ、他人が福を得るも亦少し、是の故に喜ばず。

復次に、菩薩は一切の法は夢の如く響の如しと觀ず。誰か讚じ誰か喜ばん。我は三界の中に於いて、未だ脫することを得ず、諸漏未だ盡さず、未だ佛道を得ず。云何なれば讚を得て而も喜ばんや。若し喜ぶべき者あらば唯佛一人のみなり。何となれば一切の功德都て已に滿すを以ての故なり。是の故に菩薩は種種の讚歎供養供給を得れども心に喜を生ぜず、是の如き等の相を名けて、入音聲陀羅尼と爲す。復た、寂滅陀羅尼、無邊旋陀羅尼、隨地觀陀羅尼、威德陀羅尼、華嚴陀羅尼、音淨陀羅尼、虛空藏陀羅尼、海藏陀羅尼、分別諸法地陀羅尼、明諸法義陀羅尼と名くるあり。是の如き等、略說して五百の陀羅尼門あり、若し廣く說けば則ち無量なり。是を以ての故に諸の菩薩は皆陀羅尼を得と言ふ。

諸の三昧とは、三の三昧にして、空と無作と無相となり。有人の言く、「五陰に我なく、我所なきを觀ず、是を名けて空と爲す。是の空三昧に住して、後世の爲の故に三毒を起さず、是を無作と名く。十相の法(卽ち)五塵と男女と生住と滅とを離れて緣ずるが故、是を無相と名く。有人の言く、是の三昧の中に住すれば一切諸法の實相を知る。所謂、畢竟空なり。是を空三昧と名く。是の空を知

問うて曰く、菩薩は諸漏未だ盡さず、云何にして能く恒河沙等の如き劫に、此の諸の惡を忍ぶや。

答へて曰く、我先に言へり、「此の陀羅尼の力を得るが故に能く爾なり」と。

復次に、是の菩薩は未だ漏を盡さずと雖も、大智利根にして能く思惟し、瞋心を除き遣りて、是の念を作す、「若し耳根、聲の邊に到らざれば惡聲誰にか著かん。又罵る聲の如きは聞いて便ち直に過ぐ。若し分別せずんば、誰か當に瞋るべき者ぞ」と。凡人は心、吾我に著し、是非を分別して而して恚恨を生ずるなり。

復次に、若し人能く、語言は隨つて生じ隨つて滅し、前後俱ならざるものなるを知れば則ち瞋恚無けん。亦諸法は內に主あること無しと知れば、誰か罵り誰か瞋らん。若し人ありて、殊方の異語を聞くに、此の言を好と爲し、彼を以て惡と爲す、好惡、定まること無ければ罵ると雖も瞋らず。若し人ありて、語聲の定まること無きを知れば、則ち瞋り喜ぶこと無し。親愛の之を罵るが如きは、罵ると雖も恨まず、親しからざるものゝ惡言は聞いて則ち恚を生ず。風雨に遭へば、則ち舍に入り、蓋を持するが如く、地に刺あれば則ち鞾鞋を著くるが如く、大寒には火を然し、熱時には水を求む。是の如く諸の患は、但だ遮るの法のみを求めて之を瞋らず。罵詈・諸惡も、亦復た是の如く、但だ慈悲を以て、是の諸の惡を息め瞋の心を生ぜざるなり。

復次に、菩薩は諸法の不生不滅にして、其の性皆空なることを知る。若し人瞋恚し、罵詈し、若しくは打ち、若しくは殺すも、夢の如く、化の如く、誰か瞋り、誰か罵らん。

復次に、若し人あり、恒河沙等の如き劫に、衆生讚歎し、衣食・臥具・醫藥・華香・瓔珞を供養すとも、忍を得たる菩薩は其の心動かず、喜ばず、著せざるなり。

問うて曰く、已に菩薩の種種の瞋らざるの因緣を知るも、未だ實に功德を讚ずるも、而も亦喜ばざる(因緣)を知らず。

答へて曰く、種種の供養恭敬は、是れ皆な無常なることを知る。いま因緣あるが故に來つて讚歎

ちて散ぜず失せざらしむるなり。譬へば完き器に水を盛るに、水は漏れ散ぜざるが如し。能遮とは不善根の心生ずるを惡み、能く遮ぎつて生ぜざらしめ。若し惡罪を作さんと欲すれば持して作さゞらしむ。是を陀羅尼と名く。是の陀羅尼は、或は心相應し、或は心相應せず。或は有漏、或は無漏、無色不可見、無對、一持、一入、一陰攝、[五]九智知、[六]一識識、阿毘曇法なり。陀羅尼の義は是の如し。

復次に、陀羅尼を得たる菩薩は、一切の聞く所の法を、念力を以ての故に、能く持して失せず。

復次に、是の陀羅尼の法は常に菩薩を逐ふこと、譬へば日を間つる瘧病の如く。是の陀羅尼の菩薩を離れざること、譬へば鬼の著けるが如く。是の陀羅尼の常に菩薩に隨ふことは、善・不善の律儀の如し。

復次に、是の陀羅尼が菩薩を持ちて、二地の坑に墮さしめざること、譬へば慈父の子を愛して子の坑に墮ちんとするに、持して墮ちさらしむるが如し。

復次に、菩薩は陀羅尼力を得るが故に、一切の魔王・魔民・魔人も動かすこと能はず、能く破ること無く、能く勝つこと無し。譬へば須彌山は凡人が口もて吹けども、動かさしむること能はざるが如し。

問うて曰く、是の陀羅尼は幾種ありや。

答へて曰く、是の陀羅尼には多種あり、一を聞持陀羅尼と名く。是の陀羅尼を得る者は、一切の語言の諸法の、耳に聞く所のものは皆忘失せず。是を聞持陀羅尼と名く。復た分別知陀羅尼あり。是の陀羅尼を得る者は、諸の衆生、諸の法の大小・好醜を分別して悉く知る。偈に説くが如し。

『諸の象・馬・金・木・石・諸の衣・男女・及び水は、種種にして同じからず、諸物の名は一にして、貴賤の理は殊なるも、此の總持を得れば、悉く能く分別す。』

復た、入音聲陀羅尼あり。菩薩の此の陀羅尼を得る者は、一切語言の音を聞いて喜ばず瞋らず、若し一切衆生、恒河沙等の如き劫において、惡言し罵詈すとも心に憎み恨まず。

【五】九智知。「丹註に云ふ。盡智を除く。」と註記す。即ち十智（世俗・法・類・苦・集・滅・道・他心・盡・無生）の中の餘の九智にて知る。

【六】一識識。「丹註に一意識と云ふ。」と註記す。

菩薩は日の如く、能く一切の暗を除く。諸の菩薩は地の如く、能く一切の衆生を含受す。諸の菩薩は風の如く、能く一切の衆生を益す。諸の菩薩は火の如く、能く一切の外道（及び）諸の煩惱を燒く。諸の菩薩は雲の如く、能く法水を雨らす。諸の菩薩は月の如く、福德の光明、能く一切を照す。諸の菩薩は釋提桓因の如く、一切の衆生を守護す。是の菩薩の道法は甚だ深し、我云何んぞ能く盡く知らん」と。是を以て諸の菩薩は大願を生じ、大事を得んと欲し、大處に至らんと欲するが故に摩訶薩埵と名く。

復次に、是の般若波羅蜜經の中に、摩訶薩埵の相は、佛自から說きたまふこと是の如し。是の如きの相は、是れ摩訶薩埵の相なり。舍利弗・須菩提・富樓那等の諸の大弟子、各各彼の品を說けり。此の中に應に廣く說くべし。

初品第十……「菩薩功德」釋論

【經】皆な陀羅尼及び諸の三昧を得、空・無根・無作を行じて、已に等と忍とを得たり。

【論】問うて曰く、何を以ての故に此の三事を以て、次第に菩薩摩訶薩を讚するや。

答へて曰く、諸の菩薩の實の功德を出さんと欲するが故に、讚すべきを則ち讚じ、信ずべきを則ち信ず、一切衆生の信ずる能はざる所の、甚深なる清淨の法を以て菩薩を讚す。

復次に、先きに菩薩摩訶薩の名字を說きるも、未だ菩薩摩訶薩たる所以を說かず。諸の陀羅尼・三昧・及び忍等の諸の功德を得るを以ての故に、名けて菩薩摩訶薩と爲す。

問うて曰く、已に次第の義を知れり。何を以ての故に「陀羅尼」と名くや、云何なるが陀羅尼なるや。

答へて曰く、[四]陀羅尼は、秦に能持と言ひ、或は能遮と言ふ。能持とは種種の善法を集め、能く持

【四】陀羅尼(Dhāraṇi)。呪又は明の意味に解せらるる場合と、觀又は智の意味の場合とあり、今は後者の意味なり。

も非ず。一佛土を莊嚴するが爲の故に發心するにも非ず。乃至不可說不可說の三千大千世界の微塵等の佛土を莊嚴せんが爲の故に發心するにも非ず。一佛會の弟子衆を分別して知るが爲の故に發心するにも非ず。乃至不可說不可說の三千大千世界の微塵等の佛會の弟子衆を分別して知るが爲の故に發心するにも非ず。一佛の法輪を持せんが爲の故に發心するにも非ず。乃至不可說不可說の三千大千世界の微塵等の佛の法輪を持せんが爲の故に發心するにも非ず。一人の諸心を知らんが爲の故にも非ず。一人の諸根を知るが爲の故にも非ず。一の三千大千世界の中の諸の劫の次第に相續するを知るが爲の故にも非ず。一人の諸の煩惱を分別して斷ぜんが爲の故に發心するにも非ず。乃至不可說不可說の三千大千世界の微塵等の人の諸の煩惱を分別して斷ぜんが爲の故に發心するにも非ず。是の諸の菩薩摩訶薩は願つて言く、「盡く一切十方の衆生を教化し、盡く一切十方の諸佛に供養し供給せん。願くは一切十方の諸佛の土をして清淨ならしめ、心に堅く一切十方諸佛の法を受持せん」と。分別して一切の諸佛の土を知るが故に、盡く一切諸佛の弟子衆を知るが故に、一切衆生の諸の心を分別して知るが故に、一切衆生の諸の煩惱を斷ずることを知るが故に、盡く一切衆生の諸の根を知るが故に、諸の菩薩は發心し、阿耨多羅三藐三菩提に住す。是の如き等の十門を首となし、乃至百千萬億阿僧祇の門、是を道法の門と爲す。菩薩は應に知るべく、應に入るべし。略說すること是の如し。諸の菩薩の實道は、一切の諸法皆入り皆知るなり。智慧知るが故に、また一切の佛土は、菩薩道の中に莊嚴するが故なればなり。漚舍那言く、「善男子よ、我願はくは是の如く世界を有してより已來、一切の衆生を盡く清淨にし、一切の煩惱を悉く斷ぜん」と、須達耶の言く、「是れ何の解脫ぞや」と。漚舍那答へて言く、「是を無憂安隱幢と名く。我は此の一解脫門を知つて。諸の菩薩の大心は、大海の水の如く、一切諸佛の法を能く持し、能く受くることを知らず。諸の菩薩の心は、動かざること須彌山の如し。諸の菩薩は、藥王の如く、能く一切の諸の煩惱を除く。諸の

婆婆羅に非ず、迷羅浮羅に非ず、摩遮羅に非ず、陀摩羅に非ず、波摩陀に非ず、尼伽摩に非ず、阿跋多に非ず、泥提舍に非ず、阿叉夜に非ず、三浮陀に非ず、婆摩摩に非ず、阿婆陀に非ず、漚波羅に非ず、波頭摩に非ず、僧佉に非ず、伽提に非ず、漚波伽摩に非ず、阿僧祇に非ず、阿僧祇阿僧祇に非ず、無量に非ず、無量無量に非ず、無邊に非ず、無邊無邊に非ず、無等に非ず、無等無等に非ず、無數に非ず、無數無數に非ず、不可計に非ず、不可計不可計に非ず、不可思議に非ず、不可思議不可思議に非ず、不可說に非ず、不可說不可說に非ず、一國土の微塵等の衆生の爲の故に發心するに非ず。二三より十百千萬億千萬億阿由他那由他に至る、乃至、不可說不可說の國土の微塵等の衆生の爲の故に發心するにも非ず。一閻浮提の微塵等の衆生の爲の故に、發心するにも非ず。拘陀尼、鬱怛羅、曰弗婆提、微塵等の、衆生の爲の故に發心するにも非ず。小千世界・中千世界・大千世界の微塵等の衆生の爲の故に發心するにも非ず。二三より十百千萬億阿由他那由陀に至り、乃至不可說不可說の三千大千世界の微塵等の衆生の爲の故に發心するにも非ず。一佛に供養し供給する爲の故に發心するにも非ず。乃至不可說不可說の諸佛に供養し供給せんが故に發心するにも非ず。一國土の微塵等の諸佛に供養し供給せんが爲の故に發心するにも非ず。乃至不可說不可說の三千大千世界の微塵等の諸佛に供養し供給せんが爲の故に發心するにも非ず。一佛土を淨めんが爲の故に發心するにも非ず。乃至不可說不可說の三千大千世界の微塵等の佛土を淨めんが爲の故に發心するにも非ず。一佛の法を受持するが爲の故に發心するにも非ず。乃至不可說不可說の三千大千世界の微塵等の佛の法を受持せんが爲の故に發心するにも非ず。一の三千大千世界の佛種を斷ぜざらしめんが爲の故に發心するにも非ず。乃至不可說不可說の三千大千世界、微塵等の三千大千世界の中の佛種を斷ぜざらしめんが爲の故に發心するにも非ず。分別して一佛の願を知るが爲の故に發心するにも非ず。乃至分別して不可說不可說の三千大千世界の微塵等の佛の願を知るが爲の故に發心するに

に無央數の衆生あつて前の如く、共に一髮を持して一渧を取つて去り、是の如くして彼の大水をして悉く盡して餘ること無からしむるも、衆生は故らに盡きざるが如し。是を以て衆生等は無邊無量にして數ふべからず、思議す可からざるも、盡く能く救濟して苦惱を離れ、無爲安隱の樂の中に著かしむ」と。此大心あつて多くの衆生を度せんと欲するが故に摩訶薩埵と名く。不可思議經の中に、漚舍那優婆夷、[三]須達那菩薩に語つて言ふが如し、「諸の菩薩摩訶薩の輩は、一人を度せんが爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發すにあらず。亦二三、乃至十人の爲の故に非ず、百に非ず、千に非ず、萬に非ず、十萬に非ず、百萬に非ず、一億十百千萬乃至億億に非ず。阿由他億の衆生の爲の故に發心するに非ず。那由他億に非ず、阿耶陀の衆生の故に非ず、頻婆羅に非ず、歌歌羅に非ず、阿歌羅に非ず、簸婆羅に非ず、摩婆羅に非ず、波陀に非ず、多婆に非ず、鞞婆呵に非ず、怖摩に非ず、念摩に非ず、阿婆迦に非ず、摩伽婆に非ず、毘羅伽に非ず、僧伽摩に非ず、毘薩羅に非ず、謂閻婆に非ず、鞞闍迦に非ず、鞞盧呵に非ず、鞞跋帝に非ず、鞞伽多に非ず、兜羅に非ず、阿婆羅那に非ず、他婆羅に非ず、鞞婆耶婆に非ず、藐寫に非ず、鈍那耶寫に非ず、醯婆羅に非ず、鞞婆羅に非ず、菩遮多に非ず、阿跋伽陀に非ず、鞞施陀に非ず、泥婆羅に非ず、醯梨浮陀に非ず、婆摩陀夜に非ず、比初婆に非ず、阿梨浮陀に非ず、阿犁薩寫に非ず、醯云迦に非ず、度于多に非ず、呵樓那に非ず、摩樓陀に非ず、叉夜に非ず、烏羅多に非ず、末殊夜摩に非ず、三摩陀に非ず、毘摩陀に非ず、波摩陀に非ず、阿滿陀羅に非ず、婆滿多羅に非ず、摩多羅に難ず、醯兜末多羅に非ず、鞞摩多羅に非ず、波羅多羅に非ず、尸婆多羅に非ず、醯羅に非ず、爲羅に非ず、提羅に非ず、枝羅に非ず、翅羅に非ず、尼羅に非ず、斯羅に非ず、波羅に非ず、彌羅に非ず、婆羅羅に非ず、迷樓に非ず、企盧に非ず、摩屠羅に非ず、三牟羅に非ず、阿夜婆に非ず、劍摩羅に非ず、摩摩羅に非ず、阿達多に非ず、醯樓に非ず、鞞樓婆に非ず、迦羅跋に非ず、呵婆跋に非ず、鞞婆跋に非ず、婆婆に非ず、阿羅婆に非ず、

【三】須達那(Sudāna)。

卷の第五

初品第九……「摩訶薩埵」釋論

【經】 摩訶薩埵[1]。

【論】 問うて曰く、云何なるを摩訶薩埵と名くるや。

答へて曰く、摩訶を大、薩埵を衆生と名け、或は勇心と名く。此の人は心に能く大事を爲し、退かず還らず、大勇心なるが故に名けて摩訶薩埵と爲す。

復次に、摩訶薩埵は、多くの衆生の中に於て、最も上首たるが故に、名けて摩訶薩埵と爲す。

復次に、多くの衆生の中に大慈大悲を起し、大乘を成立し、能く大道を行じ、最も大處を得るが故に摩訶薩埵と名く。

復次に大人の相を成就するが故に摩訶薩埵と名く。摩訶薩埵の相とは讃佛の偈の中に說くが如し。

『唯だ佛一人のみ獨り第一なり、三界の父母にして一切智たり。一切等に於いて與等なし。世尊の比ぶるもの有る希きを稽首したてまつる。

凡人は惠を行ずるに己利の爲にし、報を求むるに財を以てして而して給施す、佛は大慈仁にして此の事なく、怨親憎愛に等しき利を以てす。』

復次に、必ず能く法を說いて、一切衆生及び、己身の大邪見・大愛慢・大我心等の諸の煩惱を破するが故に、名けて摩訶薩埵と爲す。

復次に、衆生は、大海の初なく中なく後なきが如く、明知の算師あつて、無量歲に於て計算すとも、盡し竟ること能はず。佛が無盡意菩薩[2]に語りたまふ如く、「譬へば十方一切世界、乃至虛空の邊際を合して一の水と爲し、無數無量の衆生をして共に一髮を持つて、一渧を取つて去らしめ。更

【一】 摩訶薩埵(Mahāsatva)。

【二】 無盡意(Akṣayamati)。佛、大集經を說く時、方不眴國の普賢如來の許より來りて八十無盡の法門を說き、又法華經の會座に對揚衆となりて瓔珞を觀音に與ふ。

大德の諸の聖人は、心また分別なく、慈悲もて一切の人を、一時に度せんと欲す。衆生福德熟し、智慧ありて根また利なれば、若しくは爲に度ふの緣を現じ、卽時に解脫することを得せしむ。譬へば大龍王が願に隨つて、衆雨を雨らすが如し。罪福は本行に隨ふ、各各受くる所の如し。』

問うて曰く、若し自ら福德あり、自から智慧あらば、是の如きの人は佛能く度したまひ、若し福德智慧なくんば佛は度したまはずと。若し爾らば自ら福德智慧あらば、佛の度したまふを待たざらん。

答へて曰く、此福德智慧は、佛の因緣より出づ、若し佛世に出でたまはずんば、諸の菩薩は、[四七]十善の因緣、[四八]四無量意、後世の罪福の報と、種種の因緣を以て敎導す。若し菩薩なくんば種種の經中に說くことあり、人此の法を得て福德の因緣を行ぜん。　復次に、人に福德智慧ありと雖も、若し佛世に出でたまはずんば、是の世界の中に報を受けて、道を得ること能はず。若し佛、世に出でたまはば、乃ち能く道を得、是を大益となす。譬へば人の目ありと雖も、日の出でざる時は見る所あること能はず、要らず日の明を須つて見る所あることを得るが如し。「我は眼あり、何ぞ日を用ゐて爲さんや。」と言ふことを得ず。佛の說きたまふが如くんば、二因二緣は能く正見を生ず。一には他に從つて法を聞く。二には內に自ら法の如く福德の事を思惟するが故に、能く善心・利根・智慧を生ずるが故に能く法の如く思惟す。是を以ての故に、佛に從つて度を得ることを知る。是の如き等の種種多くの違錯あれども、(今は)般若波羅蜜の論議を作さんと欲するが故に、復た廣く餘事を論ずること能はず。

【四七】十善。不殺生等、十惡の否定。

【四八】四無量意、慈悲喜捨の四無量心。四等とも四梵行ともいふ。

亦た二佛の出でたまふこと無し。佛及び轉輪聖王は、經に一種と說く。汝何を以てか、餘の四天下に更に輪轉聖王ありと信じ、而も餘の三千大千世界の中に、更に佛あることを信ぜざるや。　復次に、一佛は能く一切衆生を度することを得ること能はず。若し一佛にして能く一切衆生を度せば、餘佛を須ゐざる可し。唯だ一佛のみ出で、諸佛の法の如く、度す可き衆生を度し已つて而して滅すること燭盡きて火滅するが如くならん。有爲の法は無常にして性空なるを以てなり。是を以ての故に現在に應に更に餘佛あるべし。　復次に、衆生無量なれば、苦も亦た無量なり。是の故に應に大心の菩薩の出づるあるべし。亦た無量の佛世に出で、諸の衆生を度したまふこと有るべし。

問うて曰く、經の中に說くが如く、無量歲の中に佛の時時に出でたまふこと、譬へば[四六]漚曇婆羅樹の華の時時に一たび出づるが如し。若し佛十方に充滿せば、佛は便ち出で易く得易くして、名けて値ひ難しと爲さず。

答へて曰く、爾らず、一の大千世界の中において、佛無量歲に時時に出でたまふと爲すにして、一切の十方世界において難しとは言はず。亦罪人は恭敬するを知らざるが爲に、勤めて精進して道を求めず。是を以ての故に語りて、佛は無量歲に、時時に一たび出でたまふと言ふ。　又此の衆生は衆の罪報の故に惡道の中に墮ち、無量劫に尙ほ佛の名を聞かず、何に況んや佛を見たてまつらんや。是の人を以ての故に佛は世に出でたまふこと難しと言ふ。

問うて曰く、若し現在十方に多くの諸佛菩薩あらば、今一切衆生は罪惡にして苦惱せり、何を以てか來つて之を度せざるや。

答へて曰く、衆生は無量劫阿僧祇劫の罪垢深厚なり、種種の餘福ありと雖も、佛を見たてまつるの功德なきが故に、佛を見たてまつらざるなり。偈に說くが如し。

『好福の報未だ近からず、衰罪未だ除却せされば、現前に大德有力の人を見ること能はず。

【四六】漚曇婆羅樹(Udumbara)略して優曇とも云ふ瑞應と譯す。

て福德なり、福德にして利根なるが故に、應に易く道を得べし。復次に、師子鼓音王佛の時は人壽十萬歲、明王佛の時は人壽七百阿僧祇劫、阿彌陀佛の國は人壽無量阿僧祇劫なり。汝は云何ぞ、八萬歲を過ぐれば、佛は出世したまはずと言ふや。

問うて曰く、摩訶衍經には此事あれども、我が法の中には十方の佛なし、唯だ過去には釋迦文尼、拘陣若等の一百の佛、未來には彌勒等の五百の佛のみなり。

答へて曰く、摩訶衍論の中の種種の因緣は、三世十方の佛を說く、何となれば十方世界には老・病・死・婬・怒・癡等あり、是を以ての故に佛は其國に出でたまふべし。經の中に說くが如し。老・病・死・煩惱なければ諸佛は則ち世に出でたまはず。　復次に、病人多ければ應に多くの藥師あるべし。汝等の聲聞法なる長阿含の中に、毘沙門王偈を以て佛に白さく、「(過)去・(未)來・現在の諸佛に稽首したてまつり、亦復釋迦文佛に歸命したてまつる」と。汝が經には說いて、過去・未來・現在の諸佛を說いて稽首すと言ひ、釋迦文尼佛に歸命すと言ふ。此を以ての故に知る、現在にも餘の佛あることを。若し餘國の佛なくんば、何を以ての故に前には三世の佛を稽首し、後には別して釋迦文尼佛に歸命するや。此の王は未だ離欲せず、釋迦文尼佛の所に在りて道を得て、敬愛する心重きが故に歸命し、餘佛の所に於いて直に稽首するなり。

問うて曰く、佛は口づから說きたまふ、「一世間に一時に二佛出づること無く、亦た一時に二の轉輪王出づることを得ず」と。是を以ての故に現在に餘佛あるべからず。

答へて曰く、此の言ありと雖も汝は其の義を解せず。佛の說は一の三千大千世界の中に一時に二佛出でたまふこと無しとなり。十方世界に現在の佛なしと謂ふには非ざるなり。四天下の世界の中に一時に二の轉輪聖王出づることなときが如し。此の大福德の人は、怨敵と世を共にすること無きが故なり。是を以ての故に四天下に一の轉輪聖王あり。佛も亦た是の如く、三千大千世界の中に於いて、

大地・城郭・聚落を分別して七分と爲す、是を般若波羅蜜を滿ずと爲す。是の般若波羅蜜は無量無邊にして大海の水の如く、諸天・聖人・阿羅漢・辟支佛・乃至初行の菩薩も尙其の邊涯を知ること能はず、十地に住する菩薩のみ、乃ち能く知る。云何んぞ汝は「能く大地・城郭・聚落を分ちて七分と爲す、是を般若波羅蜜を滿ずと名く」と言ふや。是の事は是れ、算數の法も能く地を分つ、是れ世俗の般若波羅蜜の中の少許の分なり。譬へば大海水の中の一滴・兩滴の如し。實の般若波羅蜜は三世諸佛の母と名け、能く一切の法の實相を示す。是の般若波羅蜜は來處もなく、去處も無く、一切處に求めて得べからず。幻の如く、響の如く、水中の月の見れば便ち失するが如し。諸の聖人は憐愍したまふが故に一相なりと雖も、種種の名字を以て是の般若波羅蜜、諸佛の智慧の寶藏を說きたまふ。汝が言は大なる失なり。　汝は四種の觀を言へり。「時を觀、土地を觀、種族を觀、生處を觀る。人壽八萬歲にして、佛出世したまひ、七・六・五・四・三・二萬歲の中に、佛出世したまひ、人壽百歲は是れ佛の出世したまふ時なり」と。諸佛の若きは常に衆生を憐愍したまふに、何を以てか止だ八種の時の中にのみ世に出でたまひ、餘の時には出でたまはざるや。佛法は時を待たず、好き藥を服する時、便ち病愈ゆるが如し。佛法も亦た是の如く時を待たず。

問うて曰く、菩薩は衆生を憐愍し、諸佛は時を待たずと雖も、八萬歲を過ぎては、人は長壽にして樂多く、染愛等の結使厚く、根は鈍にして化すべき時に非ず。百歲の後の若きは、時人、短壽にして苦多く、瞋恚等の諸の結使更に厚し。此の樂時と苦時とは、道を得るの時に非ず。是を以ての故に佛は出世したまはず。

答へて曰く、諸天の壽は千萬歲に出でたり。先世の因緣あれば、樂多く染愛厚しと雖も能く道を得、何に況んや人の中は大樂にあらず、三十六種の不淨ありて、易く教化すべし。是を以ての故に人壽八萬歲を過ぎても佛は出でたまふべし。是の中の人は病なく、心樂しきが故に、人皆利根にし

是を百福相と名く。一思に一相を種ゆべからず。餘事すら尙ほ一思に一事を種ゆることを得ず、何に況んや百福相をや。　何を以ての故に、釋迦文尼菩薩の心は未だ純淑せざるに、弟子の心は純淑し彌勒菩薩の心は純淑するに、弟子の心は未だ純淑せずと言ふや。是の語は何處にか說くや。三藏の中にも摩訶衍の中にも是の事なし。此の言は自ら汝が心より出づ。汝は但だ釋迦文尼菩薩、寶窟の中に於いて、弗沙佛を見たてまつり、七日七夜、一偈を以て讃じたまふを見るのみ。彌勒菩薩も亦た種種に弗沙佛を讃ず。但し、阿波陀那經の中には說かず、汝が知らざる所は因緣なきが故なり。汝は便ち彌勒の弟子は心未だ純淑せずと謂ふ、是の如きは皆違失と爲す。　汝は、菩薩は一切の物を能く施して愛惜する所なしと言ふ。尸毘王が鴿の爲めの故に、肉を割いて鷹に與へ。心に悔恨せざるが如し。財寶を以て布施するが如きは是を下の布施と名け、身を以て布施する是を中の布施と名け、種種の施の中にて、心著せざる、是を上の布施と爲す。汝は何を以てか中の布施を讃じて、檀波羅蜜を滿ずと爲すや。此の施は心大に慈悲多しと雖も、智慧を知る有り、智慧を知らざるあり。人の父母親屬の爲に身を惜まざる、或は主の爲に身を惜まざるが如し。是を以ての故に知りぬ、鴿の爲に身を惜まざるは、是れ中の布施なることを。

問うて曰く、菩薩が一切衆生の爲に、父母と爲り主と爲るは、一切の人の爲の故なり。是を以ての故に直ちに身を惜まざるを檀波羅蜜を滿ずると爲すに非ず。

答へて曰く、一切衆生の爲めなりと雖も、是心は淸淨ならず、已の身に吾我なしと知らず。取る者も無人・無主なるを知らず。施すところの物の實性は、一なりと說くべからず異なりとも說くべからざることを知らず。是の三事に於て心著するを、是れを不淸淨と爲す。世界の中に於いて福德の報を得るも、直ちに佛道に至ること能はず。般若波羅蜜の中に「三事は不可得にして亦た著せず、是れを檀(那)波羅蜜を具足し滿すと爲す」と說くが如し。　是の如くして、乃至、般若波羅蜜は、能く

而も自ら稱說せずと言ふや。　復次に、佛は「無量阿僧祇劫に功德を作し、衆生を度はんと欲す」と言ふ。何を以ての故に三阿僧祇劫と言ふや。三阿僧祇劫は量あり限あり。

問うて曰く、摩訶衍の中に此の語ありと雖も、我は亦た都て信ずる能はず。

答へて曰く、是を大なる失と爲す。是は佛の眞法にして、佛の口づから說きたまふ所なり、汝反むくこと無れ。復た汝は摩訶衍の中より出生せり。云何んぞ我都て信ずる能はずと言ふや。　復次に摩訶衍の論議は、此の中に應に廣く說くべし。　復次に、是の三十二相の業因緣は、欲界の中に種ゑ、色・無色界の中に種ゆるに非ず」と說く。無色界には身なく、色なきを以て、是の三十二相は是れ身の莊嚴なるが故に、無色界の中に種ゆるを得ざることは爾るべし。色界の中に何を以てか種ゆることを得ざるや。色界の中には大に諸の梵王ありて、常に佛の初轉法輪を請へり。是は智慧淸淨にして能く佛道を求む。何を以てか三十二相の因緣を種ゆることを得ずと言ふや。　又「人中には種ゆることを得れども、餘道には非ず」と言ふも、娑伽度龍王の如きは、十住の菩薩なり。[四三]阿那婆達龍王は七住の菩薩なり。[四四]羅睺阿脩羅王も亦た是れ大菩薩なり。復た何を以てか餘道に三十二相の因緣を種ゆることを得ずと言ふや。汝は人中にて閻浮提には種ゆと言つて、鬱怛羅には種ゆ可らずと曰ふ。有義によれば、彼の中の人は吾我なく、樂に著し、利根ならずとするが故ならんも、劬陀尼、弗婆提の二處は、福德も智慧も壽命も、閻浮提に勝れり。何を以て種ゆることを得ざる。復次に、汝は一思に一相を種ゆと言へども、是の心は、[四五]彈指の頃に、六十の生滅あり、一心の中は住らず。分別すること能はず。云何にしてか能く大人の相を種ゑんや。此の大人の相は、心を了せずんば種ゆることを得べからず。是を以ての故に多くの思、和合して能く一相を種ゆ。重き物は一人にして擔ふこと能はず、必ず多人の力を須ゆるが如し。是の如く相を種ゆることも、要らず大心と多思との和合を得て、爾して乃ち種ゆることを得るなり。是を以ての故に百福相と名く、百の大心と思とが福德を種ゆ、

【四三】阿那婆達(Anavatapta)。無熱池に住す。八大龍王の一、因に八大龍王の名は法華經序品に出づ。卽ち、難陀、跋難陀、娑伽羅和修吉、德叉迦、阿那婆達多、摩那斯、優鉢羅の八なり。

【四四】羅睺阿脩羅(Rāhusura)羅睺羅阿修羅、四種阿脩羅の一、帝釋と戰ふ時には其手を以て日月を蔽ふ。

【四五】彈指、指端を彈く間、一刹那。

天・魔王も亦た能く此の相を化作す。難陀・提婆達等は皆三十相あり、婆跋隷婆羅門には三相あり、摩訶迦葉の婦には金色の相あり。乃至今世の人も亦た各一相二相あり。若し青眼・長臂・上身の師子の如き、是の如き等種種に、或は多く或は少し、汝は何を以てか此の相を重んずるや。何れの經に、「三阿僧祇劫の中に菩薩は相の因緣を種ゑず」と言ふや。難陀の鞞婆尸佛を澡浴して、清淨端正なるを得んことを願ひ。(また)一辟支佛の塔に於て、青黛を壁に塗り、辟支佛の像を作り、因て願を作して、「願くは我恒に金色の身相を得ん」と。また迦葉佛塔の中の級を作る。此の三福の因緣を以て世世に樂を受け、處處に生ずる所に恒に端嚴なることを得たり。是の福の餘り、迦毘羅婆の釋種の中に生れて佛弟子と爲り、三十の大人の相を得。清淨端正にして、出家して阿羅漢道を得たり。佛説きたまはく、「五百の弟子中に於て、難陀比丘は端正なること第一なり」と。此の相は得易し。云何んぞ九十一大劫の中に於て種ゑ、餘の一生の中に得ると言ふや。是を大失と爲す。汝は言ふ、「初阿僧祇劫の中には當に佛と作るべきか、佛と作らざるかを知らず、二阿僧祇劫の中に當に佛と作るべしと知れども、自ら稱説せず、三阿僧祇劫の中に佛と作り得と知り、能く人の爲に説く」と。佛は何處に是語を説き、何經の中に是語あるや。若しくは聲聞法の三藏の中に説くや、若しくは摩訶衍の中に説くや。迦旃延尼子の弟子の輩が言く、「佛は口から三藏の中に説きたまはずと雖も、義理應に爾るべし。阿毘曇鞞婆娑の菩薩品の中に是の如く説けり」と。答へて曰く、摩訶衍の中に、初發心を説く。是の時に我當に佛と作るべしと知る。[四二]阿遮羅菩薩の如きは、長手佛の邊に於いて初めて發心せし時、乃ち金剛座處に至りて佛道を成じ、其の中間に於いて顚倒の不淨心を生ぜざりき。[四三]首楞嚴三昧の中の四種の菩薩の如きは四種に記を受く。未だ發心せざるに授記することあり。適ま發心して授記することあり。前に授記したるを他人は盡く知りて、已身は知らざることあり。前に授記したるを他人も已身も盡く知ることあり。汝云何なれば二阿僧祇劫に於いて、記を受けたるを知れども、

【四二】阿遮羅(Ācala)。第八住の菩薩、不動と名く。
【四三】首楞嚴三昧。第三卷既註。

四〇 摩訶衍の人の言く、「是の迦旃延尼子の弟子の輩は是れ生死の人なり、摩訶衍經を誦せず讀まざれば大菩薩に非ず、諸法の實相を知らず、自ら利根の智慧を以て、佛法の中に於いて論議を作し、諸の結使と智と定と根等の中に於て、義を作すに尙ほ處處に失あり、何に況んや菩薩の論議を作さんと欲するをや。譬へば少力の人の小渠を跳ぶが如し、尙ほ過ぐること能はず、何に況んや大河をや。大河の中に於ては、卽ち沒失することを知る」と。

問うて曰く、云何に失あるや。

答へて曰く、上に言ふが如し。三阿僧祇劫を過ぐるを名けて菩薩と爲す。三阿僧祇の中に、頭目・髓腦を布施すれども心に悔ゆること有ること無し。是れ阿羅漢・辟支佛の及ぶこと能はざる所なり。昔、菩薩の大薩陀婆と爲れるが如し、大海水を渡るに、悪風、船を壞れり。衆(もろく)の賈人に語るらく、「我が頭髮・手足を捉へよ、當に汝等を渡すべし」と。衆人捉へ已れば刀を以て自殺す。大海水の法は死尸を停めず、卽時に疾風吹いて岸邊に至れり。大慈是の如し。而も非なりと言ふ者は誰ぞ。是の菩薩第二阿僧祇劫の行滿ちて、未だ第三阿僧祇に入らず、時に燃燈佛の所に於いて記を受く、「佛と爲らん」と。卽時に虛空に上昇し、十方の佛を見、虛空の中に立ちて燃燈佛を讃ず。燃燈佛の言く、「汝は一阿僧祇劫を過ぎて當に佛と作ることを得て、釋迦牟尼と名くべし」と。記を得ること是の如し。而るに爾の時は未だ是れ菩薩にあらずと言ふは、豈大なる失に非ずや。迦旃延尼子の弟子の輩は言く、「三阿僧祇劫の中には、未だ佛の相あらず、亦た佛相の因緣を種うること無し。云何んぞ當に知るべき是れ菩薩なりと。一切の法は先づ相有りて、然して後に其の實を知るべし。若し相無くんば、則ち知らず」と。摩訶衍の人は言く、「記を受けて佛と爲り、虛空に上昇して、十方の佛を見るは、此れ大なる相に非ずや。佛の爲に記せられて、『當に佛と作ることを得べし』と。佛と作ることを得ば、此は是れ大相なり。此の大相を捨てて而も三十二相を取る。三十二相は轉輪聖王にも亦たあり、諸

【四〇】これより本論の立場よりの批評に入る。

の所に到つて言く、「若し我を得んと欲せば、先づ相好を修め、以て自ら莊嚴せよ。然る後我當に汝が身中に住すべし。若し身を莊嚴せずんば我は住せざるなり」と。是を以ての故に菩薩は三十二相を修して自ら身を莊嚴す。(これ)阿耨多羅三藐三菩提を得んが爲の故なり。

是の時に菩薩は漸漸に長大し、老病死の苦を見て、厭患の心生じ、夜半に家を出でて、六年苦行し、難陀婆羅門女の身を益する十六の功徳ある石蜜、乳糜を食し竟りて、菩提樹下において、萬八千億の鬼兵・魔衆を破り已つて、阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり。

問うて曰く、何の功徳を得るが故に名けて佛と爲すや。

答へて曰く、盡智・無生智を得るが故に名けて佛と爲す。　復た有人の言く、「佛は十力と四無所畏と十八不共法と三達無礙と三意止とを得たまふ。(三意止とは)、一には教を受けて敬重すれども、佛に喜び無し。二には教を受けず敬重せざれども、佛に憂ひなし。三には敬重するも、敬重せざるも、心に異なり無し。大慈大悲にして三十七の道品、一切諸法の總相と別相とを悉く知りたまふが故に、故に名けて佛と爲す」と。

問うて曰く、何を以ての故に未だ佛道を得ざるを名けて菩薩と爲し、佛道を得たるを名けて菩薩と爲さざるや。

答へて曰く、未だ佛道を得ざれば心愛著し、求めて阿耨多羅三藐三菩提を取らんと欲す、是を以ての故に菩薩と名く。已に佛道を成ずれば、更に佛の種種の異なれる大なる功徳を得るが故に、更に異名ありて、名けて佛と爲す。譬へば王子の未だ王と作らざれば、名けて王子と爲し、已に王と作れば復た王子と名けず。既に王となれば、是れ王子なりと雖も王子と名けざるが如し。菩薩も亦是の如く、未だ佛道を得ざれば名けて菩薩と爲し、已に佛道を得れば名けて佛と爲す。

聲聞法の中の迦旃延尼子の輩、菩薩の相義を説くこと是の如し。

問うて曰く、轉輪聖王に三十二相あり、菩薩にも亦た三十二相あり、何の差別ありや。

答へて曰く、菩薩の相には七事あつて、轉輪聖王の相に勝れたり。菩薩の相は、一には淨好なり。二には分明なり。三には處を失せず。四には具足す。五には深く入る。六には智慧の行に隨ひて、世間に隨はず。七には遠離に隨ふ。轉輪聖王の相は爾らず。

問うて曰く、云何なれば相と名づくるや。

答へて曰く、知り易きが故に相と名く、水の火に異るが如きは、相を以ての故に知るなり。

問うて曰く、菩薩は何を以ての故に、三十二相にして多からず少からざるや。

答へて曰く、有人は言ふ「佛が三十二相を以て、身を莊嚴したまふは、端正にして亂れざるが故なり。若し少ければ身端正ならず、若し多ければ佛身の相は亂れん。是の三十二相は端正にして亂れず、益すべからず、減ずべからざるは、猶ほ佛法の増すべからず、減ずべからざるが如し。身相も亦た是の如し」と。

問うて曰く、菩薩は何を以ての故に相を以て身を嚴(かざ)るや。

答へて曰く、人、佛の身相を見たてまつらば、心に淨信を得る有り、是を以ての故に相を以て身を嚴りたまふ。　復次に、諸佛は一切の事勝るるを以ての故に、身色・威力・種姓・家屬・智慧・禪定・解脱の衆の事みな勝れたり。若し佛、身相を莊嚴したまはずんば、是の事便ち少し。　復次に、有人は言ふ阿耨多羅三藐三菩提は是の身の中に住す。若し身相、嚴ならざれば、阿耨多羅三藐三菩提は此の身中に住せずと。譬へば人の豪貴の家の女を娶らんと欲するが如し。其の女使を遣はして、彼の人に語げて言く、「若し我を娶らんと欲せば、當に先つ房室を莊嚴し、汚穢を除却し、香薫を塗治し、床榻を安施し、被褥・綩綖・幃帳・幄幔・幡蓋・華香をもて必ず嚴飾せしむべし。然る後我當に汝が舍に到るべし」と。阿耨多羅三藐三菩提も亦復是の如し、智慧の使を遣はして、未來世の中の菩薩

齒密なる相なれば、人の知らざる者は、謂つて一齒と爲す、齒の間には一毫を容れず。

二十四には牙の白き相なり。乃至雪山王の光に勝れたり。

二十五には師子の頰の相なり。師子は獸中の王として、平なる廣き頰なるが如し。

二十六には味の中にて上味を得るの相なり。有人の言く、「佛、食を以て口の中に著けたまへば、一切の食は皆最上の味を作る。何となれば是れ一切の食の中には、最上の味の因あるが故なり。是の相なき人は、其因を發すこと能はざるが故に、最上の味を得ず」と。復た有人の言く、「若し菩薩食を擧げ口中に著くれば、是の時咽喉の邊の兩處より甘露を流し注ぎ、諸味を和合す。是の味は清淨なるが故に、味中の上味を得と名く。

二十七には大舌の相なり。是れ菩薩の大舌は、口中より出でゝ一切の面の分を覆ひ、乃ち髮の際に至る。若し還たび口に入れば口も亦た滿たさず。

二十八には梵聲の相なり。梵天王の五種の聲の口より出づる如し。一には深きこと雷の如し。二には清く徹して遠く聞え、聞く者は悅樂す。三には心に入りて敬愛す。四には諦了にして解し易し。五には聽くもの厭ふこと無し。菩薩の音聲も亦た是の如く、五種の聲、口より出づ。[三九]迦陵毘伽の聲の相あり。迦陵毘伽鳥の聲の愛す可きが如し、鼓聲の相あり、大鼓の音の深遠なるが如し。

二十九には眞靑の眼の相なり。好き靑蓮華の如し。

三十には牛の眼睫の相なり。牛王の眼睫の長好にして亂れざるが如し。

三十一には頂髻の相なり。菩薩には骨の髻ありて、拳等の頂上に在るが如し。

三十二には白毛の相なり。白毛眉間より生じ、高からず下からず、白く淨くして、右に旋りて舒び、長さ五尺なり。相師の言く、「地の天太子の三十二の大人の相は是の如し。菩薩に具さに此の相あり」と。

【三九】迦陵毘伽(Kalavinka)。好聲の鳥。

れば則ち現はれず。須彌山の金を三十三の諸の天の瓔珞の金に比すれば則ち現れず。三十三の諸天の瓔珞の金を焰摩天の金に比すれば則ち現れず。焰摩天の金を兜率陀天の金に比すれば則ち現はれず。兜率陀天の金を化自在天の金に比すれば、則ち現はれず。化自在天の金を、他化自在天の金に比すれば則ち現れず。他化自在天の金を菩薩の身色に比すれば則ち現はれず。是の如きの色、是を金色の相と名く。

十五には丈光の相なり。四邊に皆一丈の光あり、佛は是の光の中に在して、端嚴第一なること、諸天諸王の寶光の明淨なるが如し。

十六には細薄皮の相なり、塵土の身に著かざること、蓮華の葉の塵水を受けざるが如し。若し菩薩、乾土の山の中に在りて經行すれば、土は足に著かず、藍風來るに隨つて、土山を吹き破り、散じて塵と爲らしむるに、乃至一塵も佛身に著かず。

十七には七處の隆滿の相なり、兩手・兩足・兩肩・項・中の七處は、皆な隆滿端正にして、色の淨きこと餘の身體に勝れり。

十八には兩腋の下平滿なるの相なり。高からず深からず。

十九には上身師子の如きの相なり。

二十には大直身の相なり。一切の人の中に於いて、身、最大にして而も直し。

二十一には肩の圓好なる相なり。一切の治肩の是の如き者なし。

二十二には四十の齒の相なり。多からず少からず、餘人は三十二の齒にして、身には三百餘の骨あり、頭骨は九あり。菩薩は四十の齒にして、頭に一骨あり、菩薩は齒骨多くして、頭骨は少く。餘人は齒骨は少くして、頭骨多し、是を以ての故に餘人の身に異なれり。

二十三には齒の齊しき相なり。諸の齒は等しうして、麁なる無く、細なる無く、出でず入らず、

足の指の間の網及び足の邊の色は、眞の珊瑚の如く、指の爪は淨き赤銅の如く、足趺の上は眞金の色にして、足趺の上の毛の靑きことは毘瑠璃の色の如く、其の足の嚴好なることは、譬へば雜寶嚴の種種に莊飾せるが如し。

八には、[三八]伊泥延腨の相なり。伊泥延鹿の腨が次に隨て臑纖なるが如し。

九には、正しく立てば、手膝を摩するの相にして、俯せず仰がずして、掌を以て膝を摩するなり。

十には陰藏の相なり。譬へば調善き象寶・馬寶の如し。

問うて曰く、若し菩薩の阿耨多羅三藐三菩提を得たる時、諸の弟子は何の因緣を以てか陰藏の相を見しや。

答へて曰く、衆人を度し、衆の疑を決せんが爲の故に陰藏の相を示せしなり。復た有人の言く、「佛は馬寶・象寶を化作して、諸の弟子に示して我が陰藏の相も亦た是の如しと言へり」と。

十一には身の廣長等しき相なり。尼拘盧陀樹の如く、菩薩の身は齊うして中と四邊との量は等しと爲す。

十二には毛の上に向へるも相なり。身に諸の毛の生ずるに、皆上に向いて靡く。

十三には一一の孔に一毛生ずるの相なり。毛は亂れずして靑琉璃色なり、毛は右に靡きて上に向ふ。

十四には金色の相なり。

問うて曰く、何等の金色なるや。

答へて曰く、若し鐵を金の邊に在けば則ち現れず。今の現在の金を佛の在す時の金に比すれば則ち現れず。佛在す時の金を閻浮那の金に比すれば則ち現はれず。閻浮那の金を大海の中の轉輪聖王道の中の金沙に比すれば則ち現れず。金沙を金山に比すれば則ち現れず。金山を須彌山の金に比す

【三八】伊泥延（Ainoya）。鹿の梵名。佛の膝が鹿王の膝に似たること。

提を得ん」と。是の淨心にして父母を念じ、相續して胎に入れり。是を正慧にして母胎に入ると名く。是の菩薩は滿十月を滿ちて、正慧として念を失せずして出胎し、行くこと七歩し、口に言を發す、「是れ我が末後の身なり」と。乃至將いて相師に示して、「汝、我が子を觀よ、實に三十二の大人の相ありや不や。若し三十二相具足するあらば、是れ應に二法あるべし。若し在家ならば當に轉輪聖王と爲るべく、若し出家ならば當に成佛すべし」と。諸の相師の言く、「地の天太子には實に三十二相の大人の相あり、若し在家ならば當に轉輪王と作るべく、若し出家せば當に成佛すべし」と。王言く、「何等か三十二相なる」と。師答へて言く、「一には足下安平にして立つの相なり、足下の一切は地に著きて間に受くるの所なく一針も容れず。

二には足下の二輪の相と、千輻と輞轂となり。この三事具足して自然に成就して人工を待たず、諸の天の工師、毘首羯磨も是の如きの妙相を化作すること能はず。

問うて曰く、何を以ての故に能はざるや。

答へて曰く、是の毘首羯磨諸の天の工師は隱沒せざる智慧なるに、是の輪相は善業の報ひなり。天工師は生報にて得たる智慧なるに、是の輪相は善根を行じたる智慧の得るところなり。是の毘首羯磨は一世に是の智慧を得るも、是の輪相は無量劫の智慧より生ず。是を以ての故に毘首羯磨も化作すること能はず、何に況んや餘の工師をや。

三には長指の相なり。指纖くして長く端直にして、次第に傭好に指節參差す。

四には足の跟廣く平かなるの相なり。

五には手足指の縵網の相なり。鴈王の指を張れば則ち現はれ、張らざれば卽ち現はれざるが如し。

六には手足柔軟の相なり。細なること劫波毳の如く、餘の身分に勝る。

七には、足趺高滿の相なり、足を以て地を蹈むに廣からず狹からず、足の下の色は赤蓮華の如く

に於て生じたまふ。云何に生處を觀ずるや。「何等の母人か能く[三三]那羅延力の菩薩を懷き亦た能く自ら淨戒を護らん」と。是の如く觀じ竟りて、「唯、中國の迦毘羅婆の淨飯王の后こそ、能く菩薩を懷まん」と。是の如く思惟し已りて、兜率天より下り、正襟を失はずして母胎に入る。

問うて曰く、何を以ての故に一切の菩薩の末後身は天上より來り、人中より來らざるや。

答へて曰く、上道に乘ずるが故なり、六道の中にて天道は最上なればなり。復次に、天上より下る時は、種種の瑞應は未だ曾て所有せず。若し人道に從はゞ、人道は此を有する能はず。復次に人は天を微重するが故なり。

問うて曰く、一切の人は垢心あつて相續し、母胎に入るを以て一切の邪慧と相應す。云何なれば菩薩は正慧にして母胎に入ると名くるや。

答へて曰く、有人は言ふ、「相續の時に一切の衆生は、邪慧の心ありて母胎に入り、菩薩は憶念して失せざるが故に正慧にして母胎に入ると名く。中陰の中に住すれば則ち中陰に住するを知り、入胎の時には入胎を知り、[三四]歌羅羅〔受胎七日にして、赤白の精和合の時なり。〕の時には歌羅羅に住することを知り、[三五]頞浮陀〔二七日の時に於ける瘡の胞の如き狀なり。〕の時は頞浮陀に住することを知り、[三六]伽那〔三七日の時に於ける凝酪の如きものなり。〕の時は伽那に住することを知り、[三七]五皰の時は五皰に住することを知り、出生の時は出生を知り、是の中憶念して失せず、是を正慧にして母胎に入ると名く」と。

復次に、餘人は中陰に在つて住する時、若し男なれば母に於て、欲染の心を生じ、此女人は我と事に從ふと、父に於て瞋恚を生ず。若し女なれば父に於て、欲染の心を生じ、此の男子は我と事に從ふと、母に於て瞋恚を生ず。是の如き瞋恚の心、染欲の心は菩薩には此なし。菩薩は先より已に了知す、「是は父是は母、是の父、母能く我が身を長養す、我は父母に依りて身を生じ、阿耨多羅三藐三菩

【三三】那羅延（Nārāyaṇa）天上の力士の名。
【三四】歌羅羅（Kalala）。
【三五】頞浮陀（Anbuda）。
【三六】伽那（Ghana）。
【三七】五皰（Praśākhā）。

上に生ぜり。

問うて曰く、菩薩は何を以てか兜率天上に生じて、上生に在らず、下生に在らざるや。是れ大に福德あれば、應に自在に生ずべし。

答へて曰く、有人は言ふ、「因緣業熟す、應に是の中に在りて生ずべし」と。　復次に下地の中にては結使は厚濁なり、上地の中にては結使は利なり、兜率天上にては結使は厚からず利ならず、智慧安隱なるが故なり。　復次に、佛の出世の時を過すを欲せざるが故なり。若し下地に於て生ぜば、命短かくして、壽終るの時にも、佛未だ世に出でず。若し上地に於て生ぜば、命長くして、壽未だ盡きざるに、復た佛の出づる時を過さん。兜率天の壽と、佛の出づる時とは會ふが故なり。

復次に、佛は常に中道に居たまふが故なり。兜率天は六天及び梵の中に於いて、上に三、下に三あり。彼の天より下れば必ず中國に生じ、中夜に神を降し、中夜に迦毘羅婆國を出で、中道を行じ、阿耨多羅三藐三菩提を得て、中道をもて人の爲に說法し、中夜に無餘涅槃に入り、中法を好むが故に中天に上生するなり。

是の如く菩薩は兜率天上に生れ竟り、四種を以て人間を觀ず。一には時を觀じ、二には土地を觀じ、三には種姓を觀じ、四には生處を觀ず。云何に時を觀ずるや。時に八種あり、佛は其の中に出でたまふ。第一には人の長壽なること八萬四千歲の時なり。第二には人壽七萬歲、第三は人壽六萬歲、第四は人壽五萬歲、第五は人壽四萬歲、第六は人壽三萬歲、第七は人壽二萬歲、第八は人壽一百餘歲なり。菩薩は是の如く念ず、「人壽百歲にして、佛、出づるの時到れり」と。是を時を觀ずと名く。云何に土地を觀ずるや。諸佛は常に中國に在つて生ず。金銀寶物多く、飮食豐美に、其の土清淨なり。云何に種姓を觀ずるや。佛は二種姓の中に生ず、若くは刹(帝)利、若くは婆羅門なり。刹(帝)利種は勢力大なるが故に、婆羅門種は智慧大なるが故に、時の貴ぶ所の者に隨つて、佛は中

「汝は是れ實語の人なり、信要を失はず。一切の人皆身命を惜む、汝は死より脫することを得たるに、還つて來て信に赴く、汝は是れ大人なり」と。爾の時に須陀須摩王は實語を讃ずらく、「實語することとこれを人と爲す、非實語は人に非ず」と。是の如く種種に實語を讃して妄語を呵す。鹿足は是を聞いて、信心清淨なり。須陀須摩王に語げて言く、「汝、好く此を說く、今相放捨せん、汝は旣に脫するを得たり、九十九王も亦た汝に佈施せん。意に隨つて各本國に還れ」と。是の如く語り已りて、百王各還り去ることを得たり。是の如き等の種種の相、是を尸羅波羅蜜を滿すと爲す。

問うて曰く、羼提波羅蜜は云何に滿すや。

答へて曰く、若し人來りて罵り、撾捶し、割剝し、支解し、命を奪ふとも、心に瞋を起さざること、[二七]羼提比丘の[二八]迦梨王の爲に、其手足耳鼻を截れても、心堅くして動ぜざりしが如し。

問うて曰く、毘梨耶波羅蜜は云何に滿すや。

答へて曰く、若し大心にして勤むる力あること[二九]大施菩薩の一切の爲の故に、此の一身を以て誓つて大海を抒み、其をして乾き盡さしめ、心を定めて懈らざりしが如し。亦た弗沙佛を讃すること七日七夜、一脚を翹て目を眴かさゞりしが如し。

問うて曰く、禪波羅蜜は云何に滿すや。

答へて曰く、一切の外道の禪定の中に自在を得るが如く、又尙ほ[三〇]闍梨仙人は坐禪の時出入の息なく、鳥がその螺髻の中に於て子を生めども動かず搖れず、乃至鳥の子の飛び去る(に至る)が如し。

問うて曰く、般若波羅蜜は云何に滿すや。

答へて曰く、菩薩は大心に思惟し分別す。[三一]劬嬪陀婆羅門大臣が、閻浮提の大地を分つて七分と作し、若干の大城・小城・聚落・村民も盡く七分と作せしが如く、般若波羅蜜も是の如し。

是の菩薩は六波羅蜜を滿し、迦葉佛の所に在りて弟子と作り、淨戒を持し、功徳を行じ、[三二]兜率天

【二七】羼提(Kṣānti)。

【二八】迦梨(Kali)六度集經には、釋尊の前生、羼提和仙人、忍辱を行ぜるに、女色の事により、伽利王に手足を切斷さる。

【二九】大施(Mahājanaka)。殺されたる父の王國を取り返さんとし、海にて難破するや、海と戰ふ、海を守る天女之に感じて助く。

【三〇】闍利(Jaliya)。

【三一】劬嬪陀(Govinda)。典藏官の意味。

【三二】兜率天、第一卷註、六欲天參照。二つに分れて、內院は彌勒菩薩の淨土、外院は天衆の欲樂地。

我が出で還らんを須て」と。此の語を作し已つて、園に入りて澡浴し嬉戲せり。時に兩翅王あり、名を鹿足と曰ふ。空中より飛び來つて婇女の中に於て、王を捉へて將ち去ること、譬へば金翅鳥が海中に龍を取るが如し。諸の女は啼哭號慟し、一園驚き、城の內外は搔擾悲惶す。鹿足は王を負うて、虛空に騰躍し、住止する所に至り、九十九の諸王の中に置く。須陀須摩王は淚零るゝこと雨の如し。鹿足王、語つて言く、「大刹利王よ、汝何を以てか啼くこと小兒の如くなる。人生るれば死あり、合會すれば離るゝこと有り」と。須陀須摩王答へて言く、「我は死を畏れざれども、甚しく信を失せんことを畏る。我は生れてより已來、初より妄語せざりき。今日晨朝に門を出づる時、一婆羅門あり、來つて我に從つて乞ふ。我時に許して、「還つて當に布施すべし」と言へり。無常を慮らずして、彼が心に辜負して、自ら欺の罪を招く。是の故に啼くのみ」と。鹿足王の言く、「汝意に爾かく此の妄語を畏るゝことを欲せば、汝が還り去ることを聽さん。七日、婆羅門に布施し訖らば、便ち來り還れ。若し七日を過ぎて還らずんば、我に兩翅の力あり、汝を取るに難からず」と。須陀須摩王は本國に還ることを得て、意を恣まゝにして布施し、太子を立てゝ王と爲す。大會せる人民に之を懺謝して言く、「我が智、物に周からず、治むるに法の如くならず、當に忠恕せらるべし、我の今日の如きは身は己が有に非ず、正に爾かく還り去らん」と。國を擧げて人民及び諸の親戚は、頭を叩きて之を留む。「願くは王よ、意を留めて此の國を慈蔭したまへ。鹿足鬼王を以て慮と爲したまふこと勿れ、當に鐵舍奇兵を設くべし。鹿足は神なりと雖も之を畏れざるなり」と。王の言く、「爾ることを得ざるなり」と。而して偈を說いて言く、

『實語は第一の戒なり、實語は天に昇るの梯なり。實語は小にして大なり、妄語は地獄に入る。

我今實語を守るに、寧ろ身の壽命を棄つとも、心に悔恨あること無けん。」

是の如く思惟し已つて、王は卽ち發し去り、鹿足王の所に到る。鹿足は遙に見て歡喜して言く、

「必ず佛と成ることを得ん」と讃ず。是の時に、四方の神仙は皆來り讃じて言く、「是れ眞の菩薩なり。必ず早く成佛せん」と。鷹鴿に語つて言く、「來く試むるに此の如し、身命を惜まず、是れ眞の菩薩なり」と。卽ち偈を說いて曰く、

『慈悲の地中より、一切智の樹芽を生ず。我曹當に供養すべし、應に憂惱を施すべからず。』

毘首羯磨、釋提桓因に言げて言く、「天主よ、汝は神力あり、此の王の身をして平復するを得せしむべし」と。釋提桓因の言く、「我を須たざるなり、此の王は自ら誓願を作し、大心歡喜して、身命を惜まず、一切(のもの)を感發して、佛道を求めしむ」と。帝釋、人王に語げて言く、「汝、肉を割いて辛苦す、心は惱沒せざるや」と。王の言く、「我は心に歡喜して惱まず沒せず」と。帝釋の言く、「誰か當に汝が心の沒せざるを信ずべき者あらんや」と。是の時に菩薩は實に誓願を作さく、「我、肉を割き、血を流すとも、瞋らず惱まず。一心に悶えずして、以て佛道を求めたりとせば、我が身當に卽ち平復して故の如くならん」と。卽ち語を出すの時、身復して本の如し。人天之を見て、皆大に悲喜し、未曾有なるを歎じて、「此大菩薩は必ず當に佛と作るべし、我曹は應當に一心を盡して供養すべし、願くは早く佛道を成ぜしめ、當に我等を念ぜしむべし」と。是の時に釋提桓因・毘首羯磨は各天上に還れり。是の如き等の種種の相は、是れ檀波羅蜜を滿すなり。

問うて曰く、尸羅波羅蜜は云何に滿すや。

答へて曰く、身命を惜まずして、淨戒を護持すること、[二五]須陀須摩王の[二六]劫磨沙波陀大王を以ての故に、乃ち命を捨つるに至るも禁戒を犯さざるが如し。昔、須陀須摩王あり、是王は精進し持戒して常に實語に依れり。晨朝に車に乘り、諸の婇女を將ゐて、園に入つて遊戲す。城門を出づる時、一婆羅門ありて來り乞ふ。王に語げて言く、「王は是れ大福德の人なり。我が身は貧窮なり、當に愍念せられ、少多を賜(たま)ふべし」と。王語つて言く、「諾し、徹ふて來り告ぐる如く當に相布施すべし、

【二五】須陀須摩(Srutasoma)。
【二六】劫磨沙波陀(Kalmāṣapada)鹿足と譯す。

り、王の肉は轉た輕くなれり。王は人をして二の股を割かしむるに、亦た輕くして足らず。次に兩の踹と、兩の腕と、兩の乳と頸と背とを割き、身を擧げて肉を盡せども、鴿の身は猶ほ重く、王の肉は故らに輕し。是時に、近臣・內戚は、帳幔を安施して、諸の看る人を却けて、「王は今此の如し、觀る可きにあらざるなり」と。尸毘王言く、「諸人を遮ること勿れ」と。聽して入つて看せしめ、而も偈を說いて言く、

『天人・阿修羅、一切來つて我を觀よ。大心、無上の志にして、以て佛道を成ぜんことを求む。
若し佛道を求むるもの有らば、當に此の大苦を忍ぶべし。心を堅固にすること能はずんば、則ち當に其の意を息むべし。』

是時に、菩薩は血を以て手に塗り、稱に攀ぢて上らんと欲し、心を定め、以て身を盡して、以て鴿に對せんとす。鷹言く、「大王よ、此の事は辦じ難し、何を用つてか此の如くなる。鴿を以て我に還せ」と。王言く、「鴿來つて我に歸せり、終に汝には與へず、我れ身を喪ふこと無量なりとも、物に於いて益なし。今身を以て佛道を求め易へんと欲す」と。手を以て稱に攀づ。爾の時に菩薩は肉盡き、筋斷えて自ら制すること能はず、上らんと欲して而して墮つ。自ら心を責めて言く、「汝當に自ら堅くすべし、迷悶することを得ること勿れ、一切衆生は憂苦の大海に墮す。汝一人誓を立て丶、一切を度はんと欲す、何を以てか怠り悶ゆるや。此の苦は甚だ少く、地獄の苦は多し。此を以て相比するに十六分に於て猶ほ一にだも及ばず。我今、智慧・精進・持戒・禪定ありて、猶ほ此の苦を患ふ。何に況んや地獄の中の人の智慧なき者をや」と。是の時に、菩薩は一心に上らんと欲して、復た更に稱を攀ぢて人に我を扶けよと語る。是の時に、菩薩は心定まり悔なし。諸天・龍王・阿修羅・鬼神・人民は、皆大に讃して言く、「一小鳥の爲にも乃ち爾なり、是の事希有なり」と。即時に大地は六種の震動を爲し、大海の波は揚り、枯樹に華を生じ、天は香雨を降らし、及び名華を散じ、天女は歌ひて

れるや不やを知るのみ。』

此の偈を說き竟るや、毘首羯磨は卽ち自ら身を變じて、一の赤眼赤足の鴿と作り、釋提桓因は自ら身を變じて一の鷹と作り、急に飛んで鴿を逐ふ。鴿は直に來つて王の掖の底に入り、身を擧げて戰き怖れ、眼を動かし、聲を促がす。

『是時に衆多の人、相與に語つて曰く、「是の王は大慈仁にして、一切を宜しく保信す。是の如き鴿の小鳥も、之に歸すること舍に入るが如し。菩薩の相、是の如くんば、佛と作ること必ず久しからず」と。』

是の時に鷹は近き樹上に在りて尸毘王に語るらく、「我に鴿を還し與へよ、此は我が受くる所なり」と。王時に鷹に語るらく、「我は前に此を受く、是は汝の受けしものに非ず、我初めて發意せる時、此の一切衆生を受けて皆之を度せんと欲す」と。鷹言く、「王は一切衆生を度せんと欲す。我も(その)一切に非ざるか、何を以てか獨り愍を見さずして、而も我が今日の食を奪ひたまふや」と。王答へて言く、「汝は何の食を須ゐるや。我は誓願を作せり、「其れ衆生あり、來つて我に歸する者は必ず之を救護せん」と。汝何の食をか須ふるや、亦當に相給すべし」と。鷹の言く、「我は新しく殺せる熱肉を須ふ」と。王念言すらく、「此の如きは得難し、自ら生を殺すに非ずんば得るに由無きなり。我當に云何んぞ一を殺して、一に與ふべけんや」と。思惟して心を定めて卽ち自ら偈を說く、

『是の我が此の身肉は、恒に老病死に屬し、久しからずして當に臭爛すべし、彼、我を須ふ、當に與ふべし。』

是の如く思惟し已つて、人を呼んで刀を持ち、自ら股の肉を割いて鷹に與ふ。鷹、王に語つて言く、「王は熱肉を以て我に與ふと雖も、當に道理を用ひて、肉の輕重をして、鴿と等しきを得て、欺かるゝこと勿らしめよ」と。王言く、「稱を持ち來れ」と。肉を以て鴿に對するに、鴿の身は轉た重くな

て、六波羅蜜を滿せり。何等か六なるや。[17]檀波羅蜜[18]尸羅波羅蜜[19]羼提波羅蜜[20]毘梨耶波羅蜜[21]禪波羅蜜[22]般若波羅蜜なり。

問うて曰く、檀波羅蜜は云何に滿すや。

答へて曰く、一切能く施して遮礙する所なく、乃至、身を以て施す時にも、心に惜む所なし。譬へば尸毘王が身を以て鴿に施すが如し。釋迦牟尼佛の本身は王と作り、[23]尸毘と名く。是の王は救護陀羅尼に歸命することを得て、大に精進にして慈悲心あり、一切衆生を視ること、母の子を愛するが如し。時に世に佛なし。釋提桓因、命盡きて墮せんとす。自ら念じて言はく、何處に佛一切智人あるやと。處處に問難すれども疑を斷ずること能はず。盡く佛に非ざるを知り、卽ち天上に還り愁憂して坐せり。巧なる變化師、[24]毘首羯磨天問ふて曰く、「天主よ、何を以てか愁憂せるや」と。答へて曰く、「我一切智人を求めたるに得べからず。是を以ての故に愁憂す」と。毘首羯磨言はく、「大菩薩あり、布施・持戒・禪定・智慧を具足せり。久しからずして當に佛と作るべし」と。帝釋、偈を以て答へて曰く、

『菩薩の大心を發すと、魚の子と、菴樹の華と、(この)三事は因の時は多けれども、果を成ずの
時は甚だ少し。』

毘首羯磨答へて曰く、「是の優尸那種の尸毘王は持戒・精進・大慈・大悲・禪定・智慧あり。久しからずして佛と作るべし」と。釋提桓因、毘首羯磨に語つて、「當に往いて之を試み、菩薩の相ありや不やを知るべし。汝は鴿と作れ、我は鷹と作らん。汝は便ち佯り怖れて、王の腋下に入れ、我は當に汝に逐ふべし」。毘首羯磨言く、「此の大菩薩は云何にして此事を以て惱むや」と。釋提桓因偈を說いて言く、

『我も亦た惡心に非ず、眞金は試みるべきものなるが如く、此を以て菩薩を試み、其の心の定ま

【一七】 檀波羅蜜 (Dānapāramita)。
【一八】 尸羅波羅蜜(Śīlapāramita)。
【一九】 羼提波羅蜜(Kṣāntipāramita)。
【二〇】 毘梨耶波羅蜜(Vīryapāramita)。
【二一】 禪波羅蜜(Dhyānapāramita)。
【二二】 般若波羅蜜(Prajñāpāramita)。
【二三】 毘首羯磨天(Viśvakarman)帝釋の臣にして種種の工藝物を化作し、また建築を司る神。
【二四】 尸毘王(Sivi)。

淑せるを知りたまふ。又彌勒菩薩は心已に純淑せるも、而も（その）弟子は未だ純淑せず。是の時弗沙佛は是の如く思惟したまふ、「一人の心は速かに化す可きこと易く、衆人の心は疾かに治すべきこと難し」と。是の如く思惟し竟つて、弗沙佛は釋迦牟尼菩薩をして、疾かに成佛することを得せしめんと欲し、雪山の上に上り、寶窟の中に於いて火定に入りたまへり。是の時に釋迦牟尼菩薩は外道の仙人と作りて山に上り、藥を採りたまふに、弗沙佛が寶窟の中に坐し、火定に入りて、光明を放ちたまふを見、見已つて、心に歡喜信敬し、一脚を翹だてゝ立ち、叉手して佛に向ひたてまつりて、一心に觀じ、目未だ曾て眴きせざること七日七夜、一偈を以て佛を讚ず。

『天上、天下に、佛に如くもの無し、十方世界にも亦比なし。世界の有ゆるものは、我盡く見たるも、一切佛に如く者あること無し。』

七日七夜、諦に世尊を觀、目未だ曾て眴かず、九劫を超越して九十一劫の中に於て、阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり。

問うて曰く、釋迦牟尼菩薩の若きは聰明多識にして、能く種種の好偈を作りたまへり。何を以ての故に七日七夜に一偈のみを以て佛を讚じたまひしや。

答へて曰く、釋迦牟尼菩薩は其の心思を貴びて、多言を貴びたまはず。若し更に餘偈を以て佛を讚せば、心或は散亂せん。是の故に七日七夜に一偈を以て佛を讚じたまへり。

問うて曰く、釋迦牟尼菩薩は、何を以てか心未だ純淑せざるに、而も弟子は純淑し。彌勒菩薩は自ら心純淑するに、而も弟子は未だ純淑せざるや。

答へて曰く、釋迦牟尼菩薩は衆生を饒益する心多く、自ら身の爲にすること少きが故なり。彌勒菩薩は已が身の爲にすること多く、衆生の爲にすること少きが故なり。

鞞婆尸佛より迦葉佛に至る、其の中間、九十一大劫に於いて、三十二相の業因緣を種ゑ集め竟つ

答へて曰く、三十二思が三十二相を種ゆ。一一の思は一一の相を種ゑ、一一の相には百の福德莊嚴せり。

問うて曰く、幾許を一の福德と名くるや。

答へて曰く、有人の言く、「業報あり、轉輪聖王の四天下に於いて福樂を受け自在を得る、是を一福德と名け、是の如き百の福が一相を成す」と。復た有人の言く、「釋提桓因と作りて、二天の中に於て自在を得る、是を一福德と名く」と。復有人の言く、「他化自在天王と作りて、欲界の中に於いて自在を得る、是を一福と名く」と。復有人の言く、「補處の菩薩を除いて、餘の一切衆生の得る所の福報、是を一福と名く」と。復有人の言く、「天地劫盡するに一切衆生は福德を共にするが故に三千大千世界の報は立つ。是を一福と名く」と。復有人の言く、「是の福は量る可からず、譬喩を以ても知るべからず。三千大千世界の一切衆生の皆盲にして目無きを、一人ありて能く治して差えしむるが如き、是を一福と爲す。一切の人の皆毒藥を被るに、一人ありて、能く治して差えしめ、一切の人の應に死せんとするを、一人ありて能く之を救うて脫せしめ、一切の人の戒を破り正見を破るに、一人ありて能く教へて淨戒・正見を得せしむ、是の如き等を一福と爲す」と。復有人の言く、「是の福は量る可からず、譬喩す可からず。是の菩薩は第三阿僧祇の中に入り、心思に大行して、是の三十二相の因緣を種う、是を以ての故に是の福は能く量ること無し。唯佛のみ能く知りたまふ」と。

問うて曰く、菩薩は幾ばく時にして能く三十二相を種うるや。

答へて曰く、極めて遲きは百劫、極めて疾きは九十一劫なり。釋迦牟尼菩薩は九十一大劫、行じて三十二相を辨じたまへり。經の中に言ふが如し。過去久遠に佛あり、[一六]弗沙と名く。時に二の菩薩あり、一を釋迦牟尼と名け、一を彌勒と名く。弗沙佛は、釋迦牟尼菩薩の心、純淑せるか、未だせざるかを觀んと欲して、即ち之を觀見したまふに、其の心未だ純淑せず。而も(その)諸の弟子は心皆純

【一六】 弗沙 (Pusya)。

供養し、鹿皮の衣を敷き、髮を布き、泥を掩ふ。是の時に燃燈佛は便ち共に記を授けたまふ、「汝は當に來世に佛と作りて、釋迦牟尼と名くべし」と。燃燈佛より[一〇]毘婆尸佛に至るまでを第三の阿僧祇と爲す。若し三阿僧祇劫を過ぐれば、是の時菩薩は三十二相の業因緣を種う。

問うて曰く、三十二相の業は何の處に種う可きや。

答へて曰く、欲界の中にして、色(界)無色界に非ず。欲界の五道に於いては人道の中に在つて種ゑ、四天下に於いては閻浮提の中に種ゆ、[一一、一二](拘耶尼[一三]欝單羅[一四]越弗婆提には非ず、[一五]唯閻浮提に在り。)男子身に於て種ゑて、女人には非ず。佛の出世の時に種ゑ、佛の出世したまはざれば種ゆるを得ず。佛身に緣じて種ゑ、餘に緣じて種うることを得ず。

問うて曰く、是の三十二相の業の因緣は、身業と口業と意業とに於て、何れの業の種なりや。

答へて曰く、意業の種にして、身・口業に非ず。何となれば是の意業は利なるを以ての故なり。

問うて曰く、意業に六識あり、是の三十二相の業は、是れ意識の種と爲すや、是れ(餘の)五識の種なるや。

答へて曰く、是は意識にして、五識に非ず。何となれば五識は分別すること能はず、是を以ての故に意識の種なり。

問うて曰く、何れの相を初めに種うるや。

答へて曰く、有人は言ふ、「足の安立の相を先づ種う。何となれば先づ安立して、然る後に能く餘の相を種ゑればなり」と。有人の言く、「紺青の眼の相を初めに種う、此の眼の相を得れば大慈にして衆生を觀る」と。是の語ありと雖も必ずしも爾らず。若し相の因緣和合する時は、便ち是れ初めて種うるなり。何ぞ必ずしも、安立の足(相)を初めと爲さんや。

問うて曰く、一思が種うるや、多思が種ふると爲すや。

【一〇】毘婆尸佛 (Vipaśyin)。過去七佛の一。後に鞞婆尸とあるも同じ。ここに過去七佛をあげておく。毘婆尸佛 (Vipaśyn)。尸棄佛 (Śikhin)。毘舍浮佛 (Viśvabhu)。拘留孫佛 (Krakucchanda)。拘那含牟尼佛(Kanakamuni)。迦葉佛(Kāśyapa)。釋迦牟尼佛(Śākyamuni)。
【一一】劉内は別本になし。
【一二】拘耶尼 (Godānīya)須彌山の四方による四大洲の一にして西方大洲。
【一三】欝單羅 (Uttara-Kuru)北拘留、北方大洲。
【一四】越弗婆提(Pūrvavideha)東方大洲。
【一五】閻浮提 Jambudvīpa南方、即ち印度を現す。以上四洲にて當時の世界圖成る。轉輪聖王の四天下もまたこれなり。

の法を離れて、五の法を得れば是を菩薩と名く。何をか五の法と謂ふや。三惡道を離れて、常に天上人の間に生じ、貧窮下賤を離れて常に尊貴を得、非男の法を離れて、常に男子の身を得、諸の形殘缺陋を離れて、諸根具足し、憙と忘とを離捨し、常に宿命を憶うて、是の宿命の智慧を得、常に一切の惡法を離れ、遠く惡人を捨て、常に道法を求め、弟子を攝取す。是の如きを名けて菩薩と爲す」と。又言く、「三十二相の業を種ゑてより已來、是を菩薩と名く」と。

問うて曰く、何れの時か三十二相の業因緣を種ゆるや。

答へて曰く、三阿僧祇劫を過ぎて、然して後三十二相の業因緣を種ゆ。

問うて曰く、幾ばくの時をか阿僧祇と名くや。

答へて曰く、天人の中にて能く算數を知るも、極數は復た知ること能はず、是を一阿僧祇と名く。一と一とを二と名け、二の二つを四と名け、三三を九と名け、十十を百と名け、十百を千と名け、十千を萬と名け、千萬を億と名け、千萬億を[六]那由他と名け、千萬那由他を[七]頻婆と名け、千萬の頻婆を迦他と名け、迦他を過ぐるを[八]阿僧祇と名く。是の如く數へて三阿僧祇なり。若し一阿僧祇を行じて滿つれば、第二の阿僧祇を行じ、第二の阿僧祇滿つれば、第三の阿僧祇を行ず。譬へば算數の法の如し、一を算へ乃至百を算へ、百を算へ竟れば、還つて一に至る。是の如く菩薩も一阿僧祇を過ぎて、還つて一より起る。初の阿僧祇の中にては、心は自ら我當に佛と作るべきか、佛と作らざるかを知らず。二阿僧祇の中にては、心は能く我必ず佛と作ることを知ると雖も、口に「我當に佛と作るべし」と稱せず。三阿僧祇の中にては心は、了了と自ら佛と作るを得ると知り、口に自ら發言して畏れ難かる所なく「我は來世に於いて、當に佛と作るべし」と云ふ。釋迦文佛は、過去の釋迦文佛より那戸棄佛に到るまでを初の阿僧祇と爲す。是の中において菩薩は、永く女人の身を離る。那戸棄佛より[九]燃燈佛に至るまでを、（第）二阿僧祇と爲す。是の中に菩薩は七枚の靑蓮華を燃燈佛に

【六】那由他（Nayuta）。
【七】頻婆（Bimba）。
【八】阿僧祇（Asaṃkhya）。
【九】燃燈佛（Dīpaṃkara）。錠火佛と譯す。

ことを得るが如し。

問うて曰く、云何にして是の菩薩は鞞跋致なるや、阿鞞跋致なるやを知るや。

答へて曰く、般若波羅蜜の阿鞞跋致品の中に、佛自ら阿鞞跋致の相を說きたまふ。「是の如きの相は是れ退轉なり、是の如きの相は是れ不退轉なり」と。

復次に、若し菩薩にして一法を好修し、好念することを得ば、是を阿鞞跋致菩薩と名く。何等の一法なるや。常に一心に諸の善法を集むることなり。「諸佛は一心に諸の善法を集むるが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得」と說くが如し。

復次に、菩薩、一法を得るあらば、是れ阿鞞跋致の相なり。何等の一法なるや。正直に精進することなり、佛の阿難に問ひたまへるが如し。「阿難よ、汝は精進を說くこと是の世尊の如くせよ。阿難よ、汝は精進を讃ふること。是の善逝の如くせよ。阿難よ、常に行じ、常に修し、常に念じ、精進して、乃至人をして阿耨多羅三藐三菩提を得せしめよ」と、經に廣く說くが如し。

復次に、若し二法を得ば、是時は是れ阿鞞跋致の相なり。何等の二法なるや、一切の法は實に空なりと知り、亦念じて一切の衆生を捨てず。是の如きの人を名けて阿鞞跋致の菩薩と爲す。

復次に、三法を得。一には若し一心に願を作して佛道を成ぜんと欲せば、金剛の如く動かす可からず、破る可からず。二には一切衆生に於て、悲心骨に徹し髓に入る。三には[三]般舟三昧を得て、能く現在の諸佛を見たてまつる。是の時、阿鞞跋致と名く。

[五]復た次に、阿毘曇の中に[四]迦旃延尼子の弟子の輩の言く、「何をか菩薩と名く。自ら覺り、復能く他を覺らしむ、是を菩薩と名く。必ず當に佛と作るべきもの、是を菩薩と名く。菩提とは漏を盡くせる人の智慧を名く。是の人は智慧より生れ、智慧の人に護られ、智慧の人に養はるゝが故に、是を菩薩と名く」と。又言く、「阿鞞跋致の心を發せば、是より已後を菩薩と名く」と。又言く、「若し五

【三】般舟三昧。佛立三昧と譯す、この三昧を行ずれば諸佛現前す。
【四】迦旃延尼子。Kaccāyanīputta 紀元前一世紀末葉の人、說一切有部の人、發智論を作り大いに、有部の教義を整ふ。本論、第二、迦旃延婆羅門として出で、又、第二十六にも出づ。
【五】これより以下、一一四頁末の、「聲聞法の中迦旃延尼子の弟子の輩、菩薩の相義を說くこと是の如し」。に至るまでは、對破するために引用したる迦旃延の弟子說なり。

復次に、好法を稱讃するを名けて薩と爲し、好法の體相を名けて埵と爲す。菩薩の心は自らを利し他を利するが故に、一切衆生を度するが故に、一切の法の實性を知るが故に、阿耨多羅三藐三菩提の道を行ずるが故に、一切賢聖の爲に稱讃せらるゝが故に、是れを菩提薩埵と名く。何となれば佛法は、一切諸法の中において最も第一なり。是の人は是の法を取らんと欲するが故に、賢聖の爲に讃歎せらるるが故なり。

復次に、是の如きの人は、一切衆生の爲に、生老死を脫するが故に佛道を索む、是を菩提薩埵と名づく。

復次に、三種の道は、皆是れ菩提なり。一には佛道、二には聲聞道、三には辟支佛道なり。辟支佛道と聲聞道とは菩提を得と雖も、而も稱して菩提と爲さず。佛の功德の中の菩提を稱して菩提と爲す、是を菩提薩埵と名く。

問うて曰く、何に齋りて菩提薩埵と名くるや。

答へて曰く、大誓願あり、心動かす可からず、精進して退かず、是の三事を以て、名けて菩提薩埵と爲す。

復次に、有人の言く、『初發心に、「我當に佛と作りて一切衆生を度すべし」と願を作せば、是より已來、菩提薩埵と名く』と。偈に說くが如し。

『若し初發心の時、佛と作るべしと誓願せば、已に諸の世間を過ぎ、應に世の供養を受くべし。』

初發心より第九無礙に到り、金剛三昧の中に入る。是の中間を名けて、菩提薩埵と爲す。是の菩提薩埵に兩種あり。鞞跋致と、阿鞞跋致となり、退法と不退法の阿羅漢の如し。阿鞞跋菩提薩埵は是を實の菩薩と名く。是の實の菩薩を以ての故に、諸の餘の退轉の菩薩をも皆な菩薩と名く。譬へば四道を得たる人は是を實の僧と名け、實僧を以ての故に、諸の未だ道を得ざる者も、皆な僧と名くる

者の如し。

此の大乘を得たる人は、廣く無量の定を修し、神通聖道の力、清淨にして自在を得。

此の大乘を得たる人は、諸の法相を分別し、實の智慧を壞すること無く、是の中に已に不可思議の智と、無量の悲心の力とを具足し、二法の中に入らずして、等しく一切の法を觀ず。

驢馬も駝象も乘りものたるは同じと雖も相比せず、菩薩と及び聲聞との大小も亦た是の如し。

大慈悲を軸と爲し、智慧を兩輪と爲し、精進を駛馬と爲し、戒定を以て銜と爲し、忍辱心を鎧と爲し、總持を轡勒と爲し、摩訶衍の人、乘りて、能く一切を度す。』

問うて曰く、聲聞經の如きは初に但だ比丘衆のみを說く、摩訶衍經の初には、何を以てか但だ菩薩衆のみを說かざるや。

答へて曰く、摩訶衍は廣大なり。諸乘、諸道は皆摩訶衍に入る。聲聞乘は陜小にして摩訶衍を受けず。譬へば恒河の大海を受けざるが如し、其の陜小なるを以ての故なり。大海は能く衆流を受く其の廣大なるを以ての故なり。摩訶衍の法も亦た是の如し。偈に說くが如し。

『摩訶衍は海の如く、小乘は牛跡の水なり。小なるが故に大を受けず、其の喩も亦是の如し。』

是を以ての故に小乘の衆は菩薩を受けず。

問うて曰く、何等をか菩提と名け、何等をか薩埵と名くるや。

答へて曰く、菩提を諸佛の道と名け、薩埵を或は衆生、或は大心と名く。是の人は諸の佛道の功德を盡く其の心に得んと欲し、斷ずべからず。破すべからざること、金剛山の如し。是を大心と名く。偈に說くが如し。

『一切の諸佛の法たる、智慧及び戒と定とは、能く一切を利益す、是を名けて菩提と爲す。
其の心は動かす可らず、能く成道の事を忍び、斷ぜず、亦た破らず、是の心を薩埵と名く。』

『已に滅せば處無し、更に出づるや不や。若し已に永く滅せば出でざるや不や。既に涅槃に入らば常住なりや不や。惟願はくは、大智よ、其の實を說きたまへ。』

佛、答へたまはく、

『滅は卽ち是れ量るべからず、因緣及び名相を破壞し、一切言語の道已に過ぎ、一時に都て盡くること火の滅するが如し。』

阿羅漢の如きは、一切の名字すら尙斷ぜり、何に況んや菩薩は能く一切諸法を破し、實相を知り法身を得て、而も斷ぜざらんや。是を以ての故に摩訶衍には四衆の中、別に菩薩を說く。

問うて曰く、何を以ての故に大乘經の初には、菩薩衆聲聞衆を兩ながら說き、聲聞經の初には、獨り比丘衆を說いて菩薩衆を說かざるや。

答へて曰く、二乘の義を辨ぜんと欲するが故なり。(そは)佛乘及び聲聞乘なり。聲聞乘は陜小にして、佛乘は廣大なり、聲聞乘は自らを利し、自らの爲にし。佛乘は一切を益す。復次に、聲聞乘は多く衆生の空を說き、佛乘は衆生の空と法の空とを說く。是の如き等の種種に分別して、是の二道を說くが故に、摩訶衍經には、聲聞衆と菩薩衆と兩ながら說く、摩訶衍を讃ずる偈の中に說くが如し。

『此の大乘を得たる人は、能く一切と樂み、利益するに實法を以てし、無上道を得せしむ。此の大乘を得たる人は、一切を慈悲するが故に、頭・目を以て布施するに、之を捨つること草木の如し。

此の大乘を得たる人は、淸淨の戒を護持し、犛牛の尾を愛して身の壽命を惜まざるが如し。

此の大乘を得たる人は、能く無上忍を得、若し身を割截すること有るも、之を視ること草を斷つが如し。

此の大乘を得たる人は、精進して厭き惓むこと無く、力め行じて休息せざること、大海を抒む

り。此の諸の菩薩も亦是の如し、學人三衆の上に在るべしと雖も、便ならざるを以ての故に後に在いて說くなり。　復次に、有人の言く、「菩薩の功德智慧は、阿羅漢・辟支佛に超殊す。是の故に別に說く」と。

問うて曰く聲聞、經の中には但だ四衆のみを說く。此(經)の中には何を以てか別に菩薩衆を說くや。

答へて曰く、二種の道あり、一には聲聞の道、二には[一]*[二]菩提薩埵道なり。比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の四衆は、是れ聲聞の道なり。菩薩摩訶薩衆は、是れ菩提薩埵の道なり。是を以ての故に聲聞法の中の經の初には、「佛某處に在り、某處に住して、爾所の菩薩と倶なりき」とは無く、但だ「佛某處某處に住し爾所の比丘と倶なりき」と言ふのみ。「佛、波羅奈に在して、五比丘と倶なりき」。「佛、伽耶國の中に在して、千の比丘と倶なりき。」「佛、舍婆提に在して五百の比丘と倶なりき」。と說くが如し。

問うて曰く、諸の菩薩に二種あり、若くは出家、若くは在家なり。在家の菩薩は、總じて說けば優婆塞・優婆夷の中に在り、出家の菩薩は、總じては、比丘・比丘尼の中に在り。今何を以ての故に別に說くや。

答へて曰く、總じては四衆の中に在りと雖も、應さに別に說くべし。何となれば是の菩薩は必ず四衆の中に墮するも、四衆にして菩薩の中に墮せざるもの有るを以てなり。何者か是なるや。聲聞の人と辟支佛の人あり、*天に生ずるを求むる人あり、自活を樂むを求むる人あり、此四種の人は菩薩の中に墮せず。何となれば是の人は發心して、「我は當に佛と作るべし」と言はざるを以てなり。

復た次に、菩薩は無生法忍を得るが故に、一切の名字・生死の相を斷じて三界を出で、衆生の數の中に墮せず。何となれば聲聞の人は阿羅漢道を得て、滅度し已つて、尙ほ衆生の數の中に墮せず、何に況んや菩薩をや。波羅延經の優波尸の難の中の偈に說くが如し。

【一】別本には*……*間は次の如し「佛道なり。若し四衆を說かば、當に、是れ聲聞道を求むる者なりと知るべし。若し、別に菩薩摩訶薩を說かば、當に是れ佛道を求むる者なりと知るべし。復次に、諸菩薩に二種有り、出家と在家となり。在家の菩薩は、已に惣じて、優婆塞・優婆夷の中に在り。出家の菩薩は已に惣じて比丘・比丘尼の中に在り。復た次に、菩薩有れば必ず四衆の中に在れども、四衆は必ずしも菩薩の中に在らず。何となれば、是れの求むる如くんば」

【二】菩提薩埵 Bodhisattva 菩薩。

卷の第四

初品第八……「菩薩」釋論

【經】復た菩薩・摩訶薩あり。

【論】*問うて曰く、若し上數に從はゞ、應に菩薩を先にして、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷と次第すべし。菩薩は佛に次ぐが故なり。若し下數に從はゞ、應に先づ優婆夷を先にして、優婆塞、比丘尼、比丘、菩薩と次等すべし。今何を以てか先に比丘を說き、次に三衆、後に菩薩を說くや。答へて曰く、菩薩は佛に次ぐべしと雖も、諸の煩惱いまだ盡きざるを以ての故に、先に阿羅漢を說く。諸の阿羅漢は智慧少なしと雖も、而も已に成熟せり。諸の菩薩は智慧多しと雖も、而し煩惱いまだ盡きず、是の故に先に阿羅漢を說く。佛法に二種あり、一には秘密、二には現示なり。現示の中の佛と辟支佛と阿羅漢とは皆是れ福田なり。其の煩惱盡きて、餘すこと無きを以ての故なり。秘密の中に說く諸の菩薩は、無生法忍を得、煩惱已に斷じ、六神通を具へ、衆生を利益す。現示の法を以ての故に、前に阿羅漢を說き、後に菩薩を說くなり。　復次に、菩薩は方便力を以て現に五道に入りて、五欲を受け、衆生を引導す。若し阿羅漢の上に在かば、諸天も世人も當に疑怪を生ずべし、是の故に後に說けり。

問うて曰く、阿羅漢の後に在くことは爾る可し。何を以てか乃ち優婆塞優婆夷の後に在くや。

答へて曰く、四衆は漏未だ盡きずと雖も、盡ること久しからざるに在るが故に、通じて聲聞衆と名く。若し四衆の中間に於て菩薩を說かば、則ち便ならず。比丘尼の如きは無量の律儀を得るが故に、應に比丘の後に次ぎ、沙彌の前に在くべし。佛は儀法便ならざるを以ての故に沙彌の後に在け

※聖語藏本にてはこの邊の章句前後交錯せり。

せる智人と共に論じて、諸の餘の小臣は則ち入ることを得ざるが如し。復次に、是の六千五百人は盡く道を得たり。盡く甚深の般若波羅蜜を解せずと雖も、皆能く信じて無漏の四信を得たるが故なり。餘經の聲聞衆は大に多しと雖も、雜にして盡く道を得ず。復次に、是の中に先に千萬の阿羅漢を讃じたる中に、最も勝れたる五千人を擇び取れり、比丘尼・優婆塞・優婆夷も亦た爾なり。勝れたる者は得難きが故に多からず。

緣起の法は、第一甚深にして得難く、一切の煩惱を盡して欲を離れ涅槃を得ることは、倍す復た見難し、是を以ての故に女人は多く得ること能はず、比丘に如かざるなり。優婆塞・優婆夷は居家に有るが故に、心不淨にして、漏を盡して正しく四聖諦を得て、學人と作る可きこと能はず。偈に說くが如し。

『孔雀は色もて、身を嚴ること有りと雖も、鴻鴈の能く遠く飛ぶに如かず。白衣は富貴の力ありと雖も、出家の功德の勝れたるに如かず。』

是を以ての故に、諸の比丘尼は、出家して世業を棄つと雖も智慧短し、是の故に五百の阿羅漢の比丘尼あり。[九〇]白衣の二衆は家に居りて、事遽きが故に、道を得る者、亦た各五百のみ。

問うて曰く、五千の阿羅漢の如きは皆讚す、三衆は何を以てか讚ぜざるや。

答へて曰く、大衆を已に讚ずれば、則ち餘も亦讚ずることを知る。復次に、若し別して讚ずれば、外道の輩は當に呵して、「何を以てか比丘尼を讚ずるや」と言ふべく、(この)誹謗を生ずるが故なり。若し白衣を讚ぜば、當に「供養の爲めの故に」と云ふべし。是を以ての故に讚ぜず。

問うて曰く、諸の餘の摩訶衍經にては佛と大比丘衆と俱なること、或は八千人、或は六萬、十萬人と俱なりき。是の摩訶般若波羅蜜經は諸經の中の第一なり、大なること囑累品の中に說くが如し。餘經を悉く忘失するも其の罪は小少なれども、般若波羅蜜の一句を失すれば其の罪は大多なり。是を以ての故に般若波羅蜜經は第一にして大なることを知る。是の第一なる經の中には當に第一の大會あるべし。何を以ての故に、聲聞衆の數少なく、止だ比丘は五千、比丘尼・優婆塞・優婆夷は各五百あるのみなるや。

答へて曰く、是の大經は甚深にして解し難きを以てなり。聲聞衆少し。譬へば王が眞寶を有すれども、凡人には示さずして、大人・信愛者にのみ示すが如し。王の謀議する時には、諸の大臣・信愛

【九〇】白衣二衆。優婆塞・優婆夷。

時、斛飯王家の使來つて、淨飯王に白して言く、「貴弟は男を生めり」と。王心に歡喜して言く、「今日は大吉にして、是れ歡喜の日なり」と。來使に語つて言く、「是の兒は當に字けて阿難（歡喜）と爲すべし」と。是を父母、字を作ると爲す。

如何なる因緣に依つて名を立つるや。阿難は端正淸淨にして好き明鏡の如し。老少・好醜の容貌・顏狀、皆身な中より現はれ、其の身は明淨にして、女人之を見れば欲心郎ち動く、是の故に佛は、阿難に肩を覆ふの衣を著するを聽したまへり。是く阿難は、能く他人の見る者の心眼を歡喜せしむるが故に阿難と名く。是に於て造論者讃じて言く、

『面は淨き滿月の如く、眼は靑蓮華の若し。佛法の大海水は阿難の心に流れ入りて、能く人の心眼もて見る者をして大に歡喜せしむ。諸の來つて佛を見んことを求むるものに、通現して宜しきを失はず。』

是の如く、阿難は能く阿羅漢道を得と雖も、佛を供給し供養するを以ての故に、自ら漏を盡さず。此の大功德を以ての故に無學に非ずと雖も、無學の數の中に在り、未だ欲を離れずと雖も、欲を離れしものゝ數の中に在り。是を以ての故に共數五千の中に、實には未だ是れは阿羅漢にあらさるを以ての故に、唯だ阿難を除くと言ふ。

初品第七、……「四衆」釋論

【經】 復た、五百の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷あり、皆聖諦を見たり。

【論】 問うて曰く、何を以てか諸の比丘は五千にして、餘の三衆は各五百なるや。

答へて曰く、女人は多くは智慧短しく、煩惱の垢重く、但だ喜樂愛行のみを求むること多きが故なり。能く結使を斷じ、解脫して證することを得るものは少し。佛の說きたまふが如く、是の因

念し、憂惱の海に沒す。「我子、既に轉輪王と作らず、又、佛と作ることを得ず、一に何ぞ衰苦し、所得なくして死するや」と。是の如く憂惱して荒迷・憒塞せり。是の時に、菩薩は苦行の處を棄て、百味の乳糜を食して身體充滿し、尼連禪の水中に於て洗浴し已つて、菩提樹下に至り金剛處に坐して、自ら誓つて言く、「要(かな)らず此の結跏趺坐を破らずして、一切智を成ぜん。一切智を得ずんば終に起たざるなり」と。是の時、魔王は十八億の衆を將ゐて菩薩の所に到り、敢て菩薩と其の得失を決す。菩薩は智慧力の故に大に魔軍を破る。魔は如(し)かずして退き、自ら念ずらく、「菩薩には勝ち叵(かた)し、當に其の父を惱ますべし」と。淨飯王の所に至り詭はつて言く、「汝が子は今日の後夜、已に死し了れり」と。王は此の語を聞いて、驚怖して床より墮ち、熱沙の中の魚の如し。王、時に悲哭して偈を說いて言く、

『阿夷陀[八八]は虛言せり、瑞應も亦た驗なし、利を得るの吉名も一切獲る所なし。』

是時、菩提樹の神は大に歡喜し、天の[八九]曼陀羅華を持ち、淨飯王の所に至りて、偈を說いて言く、

『汝が子は已に道を得たり。魔衆は已に破散し、光明は日の出づるが如く、普く十方の土を照せり。*歡喜して大利を得、一切の苦を解脫し、今、法輪を轉ずることを得て、清淨ならざる所なし。』

王言く、「前に天ありて、來つて、汝が子は已に了れりと言ひ。汝は今來つて、魔を壞りて、道を得たりと言ふ。二語相違せり、誰か信ずべき者ぞ」と。樹神又言はく、「實にして妄語ならず、前に來れる天は詭りて、已に了れりと言ふ。是れ魔が嫉を懷くが故に、來つて相惱ますなり。今日、諸天・龍神は華香を供養し、空中に繒を懸け、汝が子は身より光明を出し、遍ねく天地を照せり」と。王はその言を聞いて、一切苦惱の心より解脫するを得たり。王言く、「我が子は轉輪聖王を捨つと雖も、今、法の轉輪王を得たり。定んで大利を得て失ふ所なきなり」と、王、心に大に歡喜す。是

【八八】阿夷陀(Asita)。師子頰王の輔師なりしが、淨飯王の時出家して五通を得。悉達太子の誕生に瑞相を見て來り拜し、その前途を豫言す。
【八九】曼陀羅華(Mandarava)。
※「歡喜して」より「所なし」までは一本にのみあり。

答へて曰く、是は先世の因緣と、亦た父母が名を作ると、亦た因緣に依つて字を立つ。

問うて曰く、云何なるが先世の因緣なるや。

答へて曰く、釋迦文佛は先世に瓦師と作り大光明と名く。爾の時に佛あり、釋迦文と名け、弟子を舍利弗、目乾連、阿難と名けたり。佛、弟子と倶に瓦師の舍に到つて一宿す。爾の時に瓦師は草坐・燈明・石蜜漿の三事を布施し、佛及び比丘僧を供養し、便ち願を發して言く、「我當來、老病死惱五惡の世に於て佛と作り、今の佛の如く釋迦文と名け、我が佛弟子の名字も亦今の佛弟子の如くせん」と。佛の願を以ての故に阿難と字くることを得たり。復次に、阿難は、世世、願を立て、「我、釋迦文佛の弟子の多聞なる衆中に在つて、願はくは最第一にして阿難と字けん」と。復次に、阿難は、世世、忍辱にして瞋を除く、是の因緣を以ての故に、生れて便ち端正なり。父母は其の端正にして見る者皆歡喜するを以ての故に、阿難と字けたり。[七七]〔阿難とは秦に歡喜と言ふ〕是を先世の因緣の字とす。

云何にして父母、字を作るや。昔、日種の王あり、[七八]師子頰と名く。其王に四子あり、第一を[七九]淨飯と名け、二を[八〇]白飯と名け、[八一]三を斛飯と名け、四を[八二]甘露飯と名く。一女あり、[八三]甘露味と名く。淨飯王に二子あり、悉達陀と難陀となり。白飯王に二子あり、[八四]跋提と、[八五]提沙となり。斛飯王に二子あり、提婆達多と、阿難となり。甘露飯王に二子有り、[八六]摩訶男と、[八七]阿泥盧豆となり。甘露味女に一子あり、施婆羅と名く。是の中、悉達陀菩薩は、漸漸に長大し、轉輪聖王の位を棄てて夜半に家を出で、漚樓鞞羅國中の尼連禪河の邊に往き、六年苦行す。是の時、淨飯王は子を愛念するが故に常に使を遣はして問訊し、消息を知らんと欲す。「我が子、道を得るや不や、若くは病なるか、若くは死せるか」と。使者來つて王に白す、「菩薩は唯だ皮と骨と筋とのみ有つて相連りて持するのみ、命は甚だ微弱にして若くは今日、若くは明日にして、復久しからざるなり」と。王は其の言を聞き甚だ大に愁

【七七】阿難陀(Ānanda)は慶喜と意味すればなり。
【七八】師子頰(Siṃhahanu)。
【七九】淨飯(Śuddodana)。
【八〇】白飯(Śukladana)。
【八一】斛飯(Droṇodana)。
【八二】甘露飯(Amṛtodana)。
【八三】甘露味(Amṛta)。
【八四】跋提(Bhadrika)。
【八五】提沙(Tirṇa-Bhaṣya)。
【八六】摩訶男(Mahānāman)。
【八七】阿泥盧豆(Anuruddha)。

問うて曰く、大德阿難は第三の師にして、大衆の法將なり。涅槃の種を種うること、已に無量劫、常に佛に近づきて、法藏を持し、大德にして利根なり。何を以てか今に至るまで、未だ欲を離れずして學人と作れるや。

答へて曰く、大德、阿難の本願は是の如し。「我、多聞に於て衆中、最第一ならん」と。亦諸佛の法によれば阿羅漢は所作已に辦ずるを以て、供給供養の人と作るべからず、其の佛法の中に於いて能く大事を辦じて、煩惱の賊を破るを以て佛と共に解脱の床の上に在つて坐するが故なり。復次に、長老阿難は、種種の諸經を聽き、持誦し、利觀するが故に智慧多くして攝心少なし。この二つの功德、等しき者は漏盡道を得べし。是を以ての故に長老阿難は是れ學人にして須陀洹なり。復次に、世尊に供給せんことを貪ぼるが故なり。是の阿難は佛の爲に供給の人と作り、是の如く念ず、「若し我早く漏盡道を取らば、便ち世尊より遠ざかりて、供給の人と作ることを得ず」と。是を以ての故に阿難は能く阿羅漢道を得と雖も、自ら制して取らざるなり。復次に、處と時と人と未だ合せざるが故なり。何等の處にてか能く法を集めん、千の阿羅漢は未だ耆闍崛山に在らず、是を處と爲す。世尊の過去したまふの時未だ到らず、長老[七六]婆耆子在らず、是を以ての故に長老阿難は漏を盡さず、世尊の過去したまふことと、集法の衆と婆耆子の説法勸諫とを合することあるを要す。この三事合するが故に漏盡道を得たり。復次に、大德阿難は、世法を厭ふこと少くして、餘人に如かず。是の阿難は、世世、王者の種にして、端正無比にして福德無量なり。世尊の近親にして、常に侍して佛に從ひ、必ず此の念を有す、「我、佛に近侍して法寶藏を知る、漏盡道の法を我失するを畏れず」と。是の事を以ての故に大に慇懃に漏を盡さず。

問うて曰く、大德阿難の名は何の因緣を以てするや。是れ先世の因緣なりや。是れ父母が字を作れるなりや、是れは因緣に依つて名を立つるなりや。

【七六】婆耆子（Vrjiputra）。金剛子と譯す。佛涅槃の時、阿難が猶ほ學位にありながら他の爲に説法せるを叱責し、阿難をして悟を得せしむ。

け。智慧を以て無生法を得るが故に數法人と名く。是の經は是の中に應に廣く說くべし。　復次に、若くは有漏、若くは無漏の、諸の禪定を未だ得ざるが故に得んと欲し、已に得たるをば堅く深からしめんと欲するが故に、諸の阿羅漢は佛の邊に法を聽く。　復次に、現前の樂の故なり。難陀迦經中に說くが如し。今世の樂を以ての故に法を聽く。　復次に、諸の阿羅漢は佛の邊に在つて法を聽き、心に厭き足ることなし。　蜫盧提迦經中に說くが如し。舍利弗、[七四]蜫盧提迦に語るらく、「我は法の中に法を聽いて厭くこと無し」と。　復次に、佛大師の如きは自ら一心に、弟子の邊に從つて法を聽きたまふ。難じて、「阿羅漢は所作已に辦ず、何を以てか法を聽く」と言ふべからず。譬へば飽滿せる人すら好食を得ば、猶尙更に食するが如し。云何ぞ飢渴せる人にして而も食すべからずと言んや。是を以ての故に諸の阿羅漢は所作已に辦ずと雖も、常に佛の邊に在て法を聽く。　復次に、佛は觧脫法の中に住し、諸の阿羅漢も亦た觧脫法の中に住す。住と法と相應せる眷屬もて莊嚴せること栴檀譬喩經の中に說くが如し。栴檀の林あり、伊蘭之を圍み。伊蘭の林あり、栴檀これを圍む。栴檀あり、栴檀を以て叢林と爲し。伊蘭あり、伊蘭自ら相圍遶す。佛も諸の阿羅漢も亦復是の如し。佛は善法觧脫の中に住し、諸の阿羅漢も亦善法觧脫の中に住し、住と法と相應せる眷屬もて莊嚴せり。佛を大衆を以て圍遶すること、須彌山王を[七五]十寶山の圍遶せるが如く、白香象の王を白香象の圍遶せるが如く、師子王を師子衆の圍遶せるが如し。佛も亦是の如し。佛は世間無上の福田たり、諸の弟子の與めに圍遶せられて共に住す。

【經】　唯だ阿難の學地に在つて、須陀洹を得たるを除く。

【論】　問うて曰く、何を以てか「唯だ阿難を除く」と言ふや。

答へて曰く、上に讃ずる所は、諸の阿羅漢には阿難は其中の數に在らず。何となれば學地に在つて、未だ欲を離れざるを以てなり。

【七四】　蜫盧提迦(Pilotika)。

【七五】　十寶山。雪山・香山・鞞陀梨山・神仙山・由乾陀山・馬耳山・尼氏陀羅山・斫迦羅山・計度末底山・須彌盧山。

眼に見て淨を求むるに是の事無し。
是を以ての故に「正智にして解脱を得」と言ふ。

問うて曰く、諸の阿羅漢は所作已に辦ず、更に進むことを求めず、何を以ての故に常に佛の邊に在りて餘處に衆生を度せざるや。

答へて曰く、一切十方の衆生は盡く佛を供養すべしと雖も、阿羅漢は恩を受くること重きが故に、應に倍供養したてまつるべし。何となれば此の阿羅漢は、佛に從つて無量の功德を成受することを得たるを以てなり。結使斷ゆるを知つて信心轉た多し。是の故に諸の大德阿羅漢は佛の邊に功德の樂味を受け、供養恭敬して佛恩を報ずるが故に、佛の邊に在つて住するなり。諸の阿羅漢が佛を圍遶したてまつるが故に佛德は益尊し。梵天の人の梵天王を遶るが如く、[七二]三十三天の釋提桓因を遶るが如く、諸の鬼人の[七三]毘沙門王を遶るが如く、諸の小王の轉輪聖王を遶るが如く、病人の病愈えて大醫の邊に住するが如し。是の如く諸の阿羅漢は、佛の邊に在つて住す。諸の阿羅漢の圍遶し供養するが故に佛德は益尊し。

問うて曰く、若し諸の阿羅漢は所作已に辦じて已利を逮得せば、法を聽くを須ゐず。何を以ての故に般若波羅蜜を說く時、五千の阿羅漢と共なるや。

答へて曰く、諸の阿羅漢は所作已に辦ずと雖も、佛は甚深の智慧の法を以て試みんと欲す。佛の舍利弗に問ひたまふが如し。波羅延經の阿耆陀難の中の偈に說くが如し。

『種種諸の學人及び諸の數法人、是の人の行ずる所の法を、願くは爲に實の如く說くべし。』

是の中に云何なるが學人、云何なるが數法人なるや。爾の時に舍利弗默然たり。是の如く三たび問ひたまふに三たび默せり。佛は義端を示して、舍利弗に告げたまはく、「生ありや不や」と。舍利弗答ふらく、「世尊よ、生あり」と。生有る者は滅を爲さんと欲す。有爲の生法なるが故に學人と名

【七二】三十三天。既註第一卷六欲天參照。
【七三】毘沙門王(Vaiśravaṇa)。多聞天、四天王の一、第一卷註四天王參照。

有成就せるが故なり。

答へて曰く、妨ぐる所無し。是れは果の中に因を說くなり。佛の檀越について語るが如し。食を施す時は五事を與ふ。命・色・力・樂・膳これなり。食は人をして必ずしも五事を得せしむること能はず。*人の大に飲食を得て而も死するものあり、人の少許の食を得て活くるものあり。(されど)食は五事の因となる。是の故に佛は食を施して、五事を得と言ふ。偈に說くが如し。

『食を斷てば死すること疑なし、食ふ者の死は未だ定まらず、是を以ての故に佛は說きたまふ。
食を施せば五事を得』と。

亦人の百斤の金を食するが如し、金は食すべからざるも、金は是れ食の因なるが故に金を食すと言ふなり。佛は「女人を戒垢と爲す」と言ふ。女人は戒垢に非ざるも、是れ戒垢の因なるが故に女人を戒垢と爲すと言ふ。人の高處より墮るに、未だ地に至らざるも、此の人死すと言ふが如し。未だ死せずと雖も、必ず死せんことを知るが故に、此の人死すと言ふ。是の如く諸の阿羅漢は結使已に盡きたれば、有も必ず當に盡くべきを知るが故に、「有・結を盡す」と言ふ。

【經】 正智にして已に解脫を得。

【論】[七二] 摩犍提梵志の如きは、弟子其屍を擧げて床上に著け、輿して城市の中の多人の處に行き、唱へて言く、「若し眼に摩犍提の屍を見る者あらば、是の人は皆清淨の道を得ん。何に況んや、禮拜供養する者をや」と。多く人有つて其の言を信ず。諸の比丘、是の語を聞き佛に白して言さく、「世尊、是の事は云何」と。佛、偈を說きて言はく。

『小人は眼に見て清淨を求む、是の如きは智無く實道無し。諸の結と煩惱、心中に滿ちて、云何にして眼に見て淨道を得んや。
若し眼に見て清淨を得ることあらば、何ぞ智慧功德の寶を用ゐん。智慧功德を乃ち淨と爲す、

※異本には「有人は食過ぎて自ら傷み、有人は食を節して而して壽あり」とある。

【七二】 摩犍提(Makandi)。

の阿羅漢を「能く擔ふ」と名ふ。

【經】 己利を逮得す。

【論】 云何なるを己利と名け、云何なるが己利に非ざる。諸の善法を行ずる、是を己利と名け、諸餘の非法は是を己利に非ざるものと名ふ。

復次に、信・戒・捨・定・慧等の諸の功德は一切財寶に勝るが故に、今世後世常に樂を得るが故に、能く甘露城に到るが故に、是の三の因緣の故に是を己利と名く。信品中の偈に說くが如し。

『若し人、信慧を得ば、是の寶は最も第一なり。諸餘の世の財利は、是の法寶に及ばず。』

復次に、若し人、今世に樂を得、後世に樂及び涅槃常樂を得れば、是を己利と名く。餘は己利に非ざるものなり。偈に說くが如し。

『世に知れる種種なる無道の法は、諸の禽獸と等うして異なることなし、當に正智の要道法を求め、老死を脫することを得て涅槃に入るべし。』

復次に、八正道及び沙門果は是を諸の阿羅漢の己利と名く。是の五千の阿羅漢は得道及び果の二事を俱に得るが故に己利と名く、是を以ての故に「己利を逮得」すと言ふ。

【經】 諸の有・結を盡す。

【論】 三種の有あり、欲有と色有と無色有となり。云何なるが欲なるや。欲界に繫がる業は因緣を取りて、後世にも能く亦是の業報を生ず、是を欲有と名く。色有と無色有も亦是の如し、是を名けて「有」と爲す。「結」を盡すとは、結に九結あり。愛結・恚結・慢結・癡結・疑結・見結・取結・慳結・嫉結なり。是の結使を盡くせば有に及び、是の有を盡せば結使に及ぶ。是の故に「有・結を盡す」と名く。

問うて曰く、諸の阿羅漢は結使は應に永く盡すべし、一切の煩惱を離ることを得たるが故なり、有は盡すべからず。何となれば阿羅漢の未だ滅度せざる時は、眼根等の五衆・十二入・十八界の諸の

辦ず」と名く。　復次に、諸の煩惱に二種あり。一種は愛に屬し、一種は見に屬す。愛に屬する煩惱を斷ずるが故に「所作」と名け、見に屬する煩惱を斷ずるが故に、「已に辦ず」と名く。　復次に、色法を善く見るが故に所作と名け、無色法を善く見るが故に「已に辦ず」と名く。可見・不可見・有對・無對等の二法も亦是の如し。　復次に不善と無記法とを斷ずるが故に「所作」と名け、善法を思惟するが故に「已に辦ず」と名く。聞思の慧、成就するが故に「所作」と名け、修の慧成就するが故に已に辦ずと名く。種種の三法も亦是の如し。　復次に、[六九]煖法・頂法・忍法・世間第一法を得るが故に「所作」と名け、苦法忍等の諸の無漏の善根を得るが故に已に辦ずと名く。見諦道を得るが故に「所作」と名け、思惟道を得るが故に「已に辦ず」と名く。學道を成ずるが故に「所作」と名け。無學道を得るが故に「已に辦ず」と名く、心の解脱を得るが故に「所作」と名け、慧の解脱を得るが故に「已に辦ず」と名く。漏盡くるが故に「所作」と名け、共解脱を得るが故に「已に辦ず」と名く。一切の結使除くが故に「所作」と名け、[七〇]非時解脱を得るが故に「已に辦ず」と名く。自ら利益し竟るが故に「所作」と名け、他人を利益するが故に「已に辦ず」と名く。是の如き等、所作已に辦ずるの義は、自在に說けり。

【經】　擔を棄て能く擔ふ。

【論】　五衆の麁重、常に惱ますが故に名けて擔と爲す。佛の說きたまふ所の如し。

何をか擔と謂ふや。五衆是れ擔なり。諸の阿羅漢は此の擔を已に除く、是を以ての故に「擔を棄つ」と言ふ。「能く擔ふ」とは是れ佛法の中に二種あり、功德擔と應擔となり。一種は自ら益利し、二種は他を益利す。一切諸の漏盡き、不悔解脱等の諸の功德、是を自ら利益すと名け、信・戒・捨・定・慧等の諸の功德、能く他人に與ふ。是を他を利益すと名く。是の諸の阿羅漢は自擔・他擔・能く擔ふが故に「能く擔ふ」と名く。　復次に、譬へば大牛の壯力にして能く、重載に服するが如く、此の諸の阿羅漢も亦た是の如し。無漏の根力、覺道を得て能く佛法の大事の擔を擔ふ。是を以ての故に諸

【六九】　煖・頂・忍・世間第一法。四道の初の加行道にこの四善根あり。唯識宗では五位の第二たる十廻向の終において之を得。

【七〇】　非時解脱。二種羅漢の一、利根にして好き時縁をまたず、隨意に定に入りて解脱を得、また不時解脱と云ふ。既註、時解脱參照。

は、欲染の處に染まず、瞋の處に應じて瞋らず、癡の處に應じて癡ならず、[六七]六情を守護す。是を以ての故に、「心調ひ柔輭なり」と名ふ。偈に說くが如し。

『人の六情を守護すること、好馬の善く調ふが如く、是の如きの實智の人は、諸天に敬視せらる。』

諸の餘の凡人の輩は、六情を守護すること能はず。欲と瞋と慢と癡と疑見とを斷ぜざるが故に、調柔ならざること惡弊馬の如し。是を以ての故に諸の阿羅漢を「心調ひ柔輭なり」と名ふ。

【經】 摩訶那伽。

【論】[六八]摩訶を大と言ひ、那を不と名け、伽を罪と名く。阿羅漢は諸の煩惱を斷ず、是を以ての故に大不罪と名く。 復次に、那伽は或は龍と名け、或は象と名く、是の五千の阿羅漢は諸の無數の阿羅漢の中にて最大力なり。是を以ての故に、龍の如く象の如しと云ふ。水行の中にては龍の力大に、陸行の中にては象の力大なればなり。 復次に、善く調へる象王は能く大軍を破り、直入して廻らず、刀杖を畏れず、水火を難からず、走らず退かず、死至れども避けざるが如く、諸の阿羅漢も亦復た是の如し。禪定・智慧を修するが故に、能く魔軍及び諸の結使の賊を破り。罵詈撾打すれども悔いず恚らす、老死の水火も畏れず、難からざるなり。 復次に、大龍王の大海より出でて大雲を起し、遍ねく虛空を覆ひ、大電光を放ちて天地を明照し、大洪雨を注いで萬物を潤澤するが如く、諸の阿羅漢も亦た復た是の如し。禪定智慧の大海水の中より出でて、慈悲の雲を起し、潤を度す可き者に及ぼし、大光明種種の變化を現じて、實相の法を說き、弟子の心に雨らして善根を生ぜしむ。

【經】 所作已に辦ず。

【論】 問うて曰く、云何なるを「所作」と名け、云何なるを「已に辦ず」と名くるや。

答へて曰く、信・戒・定・捨等の諸の善法を得るが故に、名けて所作と爲す。智惠・精進・解脫等の諸の善法を得るが故に、是を「已に辦ず」と名く。(この)二法、具足し、滿(足)するが故に「所作已に

【六七】 六情。六根即ち五感と意識の機關。

【六八】 摩訶那伽(Mahānāga)。

以て身中より火を出だし、身を燒いて而して滅度を取る。是を以ての故に、佛の言はく、「無功德、少功德は、是れ助道の法滿たず、皆得度せず。佛說は一切功德を具足するが故に、能く弟子を度す。譬へば小藥師は一種の藥、二種の藥を以てし、（衆藥を）具足せざるが故に重病を差すこと能はず。大藥師の輩は衆藥を具足して能く諸病を差すが如し」と。

問うて曰く、若し一切三界の煩惱の離るるが故に、心に解脫を得るとせば、何を以ての故に佛は、「染愛の心を離るれば解脫を得」と言ふや。

答へて曰く、愛は能く心を繫閉するの大力あり、是を以ての故に說いて餘の煩惱を說かず、愛を斷ずれば餘は則ち斷ず。　復次に、若し人、「王來る」と言はば必ず將の從ふ有るを知る、染愛も亦是の如し。又巾の一頭を捉ふれば餘は則ち盡く隨ふが如し。愛染も亦是の如く、愛、斷ずれば則ち知る餘の煩惱皆已に斷ずることを。　復次に諸の結使は、皆愛と見とに屬す。愛に屬する煩惱は心を覆ひ見に屬する煩惱は慧を覆ふ。是の如く愛を離るゝが故に、愛に屬する結使も亦離れて、心解脫を得、是の如く無明を離るるが故に、見に屬する結使も亦た離れて慧解脫を得るなり。

復次に、是の五千の阿羅漢は、[六四]不退法に應じて無生智を得たり。是の故に心好く解脫を得、慧好く解脫を得と言ふ。不退なるが故なり。[六五]退法の阿羅漢は、[六六]時解脫を得ること、劬提迦等の如きも解脫を得と雖も、好解脫には非ず、退法を以ての故なり。

【經】　其の心調ひ柔軟なり。

【論】　若しくは、恭敬し供養するもの、或は瞋恚し、罵詈し、撾打する者あるも、心等しうして異なることなし。若し珍寶と瓦石を得るも、之を視ること一等なり。若し刀を持して手足を斫截するあり、或は栴檀を持して身々塗るあるも、亦た等しうして異なること無し。　復次に、婬欲・瞋恚・憍慢・疑見の根本已に斷ずるが故に、是を「心調ひ柔軟なり」と謂ふ。

【六四】不退羅漢。七種羅漢の最後位。

【六五】退法羅漢。六種（又は七種）羅漢の初位にして、一旦羅漢を得れども、惡緣に遭へば忽ち退轉するもの。

【六六】時解脫。二種羅漢の一にして、鈍根にして好時好緣見足するによりて證悟するもの。

爾るや。我が命盡きなんと欲するや、若くは、天地の主、墮ちんとするや」と。猶豫して自ら了ずること能はず、此の惡夢あるを以ての故に。先世に善知識有る天あり。上より來下して、須跋陀に語つて言く、「汝恐怖すること莫れ、一切智人あり、佛と名く。後夜の半に當に無餘涅槃に入るべし。是故に汝は夢む。汝が身の爲にはあらず」と。是時須跋陀は、明日、拘夷那竭國の樹林の中に到り、阿難の經行するを見て、阿難に語つて言く、「我聞く汝が師は更に新たに涅槃の道を說き、今日夜半、當に滅度を取るべしと。我れ心に疑ひ有り、請ふ佛に見えて、我が疑ふ所を決せんと欲す」と。阿難答へて言く、「世尊の身極れり、汝若し難問せば世尊を勞擾すべし」と。須跋陀、是の如く重ねて請ひて三たびに至る。阿難答ふること初の如し。佛遙に之を聞き阿難に勅語したまはく、「須跋陀梵志に前に來つて自在に難問することを聽るせ、是れ吾が末後の共談にして最後の得道の弟子なり」と。是の時に須跋陀は前んで佛に見ゆることを得、世尊を問訊し已つて、一面に於て坐し、是の如く念ず、「諸の外道の輩は、恩愛財寶を捨てゝ出家すれども、皆道を得ず、獨り瞿曇沙門のみ道を得」と。是の如く念じ竟つて、卽ち佛に問うて言く、「是の閻浮提の地の六師の輩は、各自ら稱して我は是れ一切智人なりと言ふ。是の語は實なりや不や」と。爾の時に、世尊偈を以て答へ曰はく、

『我年一十九にして出家し佛道を學ぶ。我出家してより已來、已に五十歲を過ぎ、淨戒・禪・智慧あり。外道は一分も無く、少分すら尙有ること無し、何に況んや一切智をや。』

若し八正道無ければ、是の中に第一果第二果第三果第四果なし。若し八正道あれば、是の中に第一果第二第三第四果あり。須跋陀よ、是の我が法の中に八正道あり、是の中に第一道果第二第三第四の道果あり。餘の外道の法は、皆空しくして道無く、果無く、沙門無く、婆羅門無し。是の如く、我は大衆の中に、實に師子吼を作すと。須跋陀梵志は是の法を聞き阿羅漢道を得、思惟して言く、「我は佛の後に般涅槃すべからず」と。是の如く思惟し竟り、佛前に在つて結跏趺坐し、自ら神力を

答へて曰く、外道の離欲の人は、一處一道に心解脫を得るも、一切障法に於て解脫を得るに非ず。是を以ての故に阿羅漢を「心好く解脫を得、慧好く解を得」と名く。

復次に、諸の阿羅漢は二道に(於いて)心の解脫を得、見諦道と思惟道とこれなり。是を以ての故に「心好く解脫を得」と名く。學人は心に解脫を得と雖も、好く解脫せるに非ず、何となれば殘れる結使あるが故なり。

復次に、諸の外道等は、助道の法を滿せず、若くは一功德を行じ、若くは二功德を行じ、道を求むるも得ること能はず。人の但だ布施のみして清淨ならんことを求むるが如く、人の天を祀りて、「能く憂衰を脫し、能く常樂國の中に生ることを得ん」と言ふが如し。亦更に言ふもの有り、「八の清淨道あり、一には自覺、二には聞、三には讀經、四には內苦を畏るゝこと、五には大衆生の苦を畏ること、六には天の苦を畏るゝこと、七には好師を得ること、八には大布施なり。但だ第八のみを說いて清淨の道と名く」と。

復次に、外道にして、但だ布施持戒のみを清淨なりと說く有り、但だ布施禪定のみを清淨なりと說く有り、但だ布施して智慧を求むるのみを清淨なりと說く有り。是の如き等の種種の道は具足せず、若しは無功德、若しは少功德なるを清淨と說く。是の人は、一處には心解脫を得と雖も「好く解脫せり」と名けず、涅槃の道、滿足せざるが故なり。偈に說くが如し。

『無功德の人は、生老病死の大海を渡ること能はず、少功德の人も亦渡らず、善き行道の法は、
佛の說き給ふ所なり。』

是の中に應に須跋陀梵志經を說くべし。[六二]須跋陀梵志は、年百二十歲、五神通を得て、[六三]阿那跋達多池の邊に住す。夜、夢に一切の人眼を失し、裸形にして冥中に立ち、日墮ち、地破れ、大海は水竭き、大風起り吹いて須彌山は破散するを見る。覺め已つて恐怖し、思惟して言く、「何を以ての故に

【六二】須跋陀(Subhadra)。
【六三】阿那跋達多(Anavadatta)。

を啞羊僧と名く。云何なるを實僧と名くるや。若くは學人、若くは無學人にして四果の中に住し、[五六]四向道を行ずるもの、是を實僧と名く。是の中の二種の僧は共に[五七]百一羯磨・[五八]說戒・[五九]受歲、種種作すを得べし。是の中に實の聲聞僧は六千五百あり。菩薩僧に二種あり、有羞僧と實僧となり。[六〇]聲聞に一種あり）謂く實僧なり、是の實僧を以ての故に餘は皆僧と名くることを得、是を以ての故に比丘僧と名く。

【經】大數五千分。

【論】云何なるを大數と名くるや。過ぐること少く減ずること少きを、是を名けて大數と爲す。云何なるを分と名くるや。多衆の邊より一分を取るを是を分と名く。是の諸の比丘千萬衆の中、一分を取つて五千人とす。是を以ての故に五千分と名く。

【經】皆是れ阿羅漢。

【論】云何なるを阿羅漢と名くるや。阿羅をば賊と名け、漢をば破と名く、一切煩惱の賊を破る、是を羅漢と名く。

復次に、阿羅漢は一切の漏盡くる故に、一切世間諸の天人の供養を得べし。

復次に、阿を不と名け、羅漢を生と名く、後生の中に更に生ぜず、是を阿羅漢と名く。

【經】諸漏已に盡く。

【論】三界の中に[六一]三種の漏已に盡きて、餘すこと無し、故に漏盡くと言ふなり。

【經】復た煩惱無し。

【論】一切結使の流、受扼、縛蓋、見纒等を斷除するが故に「煩惱無し」と名くるなり。

【經】心、好く解脫を得、慧、好く解脫を得。

【論】問うて曰く、何を以てか心好く解脫を得、慧好く解脫を得と說くや。

【五六】四向道。聲聞の四果に向ふ因位。

【五七】百一羯磨。羯磨（Karma）は授戒懺悔等僧中に事をなすに宣告して衆の同意を得て事を成就する法である。百一とは、百とは法を意味し、多くの法にそれ〴〵一の羯磨あれば、百一羯磨と云ふ。

【五八】說戒。律法によるに毎半月の終の日に大衆を集めて戒經を讀き聽かせ、その半月間の犯罪を憶ひ出さしめて懺悔せしむ。布薩（Upavasatha）と云ふ。

【五九】受歲。比丘、夏安居を竟へて一法﨟を增すを受歲と云ふ。

【六一】三種漏。欲漏・有漏・無明漏。

と名く。姉よ、我は是の四不淨食の中に墮せず、我は清淨なる乞食を用ひて活命す」と。是の時淨目は、清淨の法食を說くを聞いて歡喜信解す。舍利弗、因て爲に法を說き、須陀洹の道を得せしむ。是の如く清淨に乞食して活命するが故に乞士と名く。

復次に、比を破と名け、丘を煩惱と名け。能く煩惱を破るが故に比丘と名く。

復次に、出家の人を比丘と名くるは、譬へば胡漢羌虜の各名字あるが如し。

復次に、戒を受くるの時、自ら「我れ某甲比丘、形壽を盡すまで、戒を持たん」と言ふが故に、比丘と名く。

復次に、比を怖と名け、丘を能と名く。能く魔王及び魔の人民を怖るれば、當に出家して頭を剃り、染衣を著けて戒を受くべし。是の時に魔は怖る。何を以ての故に怖るるや。魔王言く、「是の人は必ず涅槃に入ることを得ん」と。佛の說くが如く、人有り、能く頭を剃り、染衣を著け一心に受戒せば、是の人は漸漸に結を斷し、苦を離れ、涅槃に入らん。

云何なるを僧伽と名くるや。[五五]僧伽は、秦に衆と言ふ。多くの比丘一處に和合す、是を僧伽と名く。譬へば大樹の叢聚せる是を名けて林と爲し、一一の樹を名けて林と爲さず、一一の樹を除いても亦林無きが如し。是の如く一一の比丘を名けて僧と爲さず、一一の比丘を除いても亦僧なし。諸の比丘、和合するが故に僧の名を生ず。　是の僧に四種あり。有羞僧、無羞僧、啞羊僧、實僧なり。云何なるを有羞僧と名くるや。戒を持して破らず、身口清淨にして、能く好醜を別つも、未だ道を得ざる是を有羞僧と名く。云何なるを無羞僧と名くるや。戒を破り身口不淨にして惡として作さざること無き、是を無羞僧と名く。云何なるを啞羊僧と名くるや。戒を破らずと雖も鈍根にして慧無く、好醜を別たず、輕重を知らず、有罪と無罪とを知らず、若し僧事有らば二人共に諍ふて斷決すること能はず、默然として言無きこと、譬へば白羊が乃ち人の殺すに至るも聲を作す能はざるが如し、是

【五五】 僧伽(Saṅgha)。

を（その）最大と爲す、今說かんと欲したまふ故に、云何にしてか耆闍崛山に住さざらん。略して「耆闍崛山に住す」の因緣を說き竟んぬ。

初品第六……「共摩訶比丘僧」釋論

【經】摩訶比丘僧と共に。

【論】共とは一處、一時、一心、一戒、一見、一道、一解脫を名づく。是を名けて「共」と爲す。

[五三]摩訶とは秦に大、或は多、或は勝と言ふ。云何なれば大なるや。一切衆の中の最上なるが故に、一切の障礙は斷ずるが故に、天王等の大人、恭敬するが故に是を名けて大と爲す。云何なれば多なるや。數五千に至るが故に多と名く。云何なれば勝なるや。一切の九十六種の外道の論議を能く破するが故に勝と名く。

云何なれば比丘[五四]と名くるや。比丘は乞士と名く。清淨に活命するが故に名けて乞士と爲す。經中に說くが如し。舍利弗、城に入つて乞食し、得已つて壁に向ひ坐して食す。是の時に梵志の女あり、淨目と名く。來つて舍利弗を見て、舍利弗に問うて言く、「沙門よ、汝食するや。」答へて言く、「食す。」淨目言く、「汝、沙門は下口食なりや。」答へて曰く、「不(いな)なり姉よ。」「仰口食なりや。」「不なり。」「方口食なりや。」「不なり。」「四維口食なりや。」「不なり。」淨目言く、「食法に四種あり。我、汝に問ふに、汝不と言ふ。我解せず、汝當に說くべし」と。舍利弗言く、「出家の人にして藥を合せ、穀を種ゑ、樹を植うる等、不淨に活命する者あり、是を下口食と名く。出家の人にして、星宿・日月・風雨・雷電・霹靂を觀視して不淨に活命する者あり、是を仰口食と名く、出家の人にして、豪勢に曲媚し、四方に通使し、巧言して、多く求め不淨に活命する者あり、是を方口食と名く。出家の人にして、種種の呪術・卜算・吉凶を學び、是の如き等の種種なる不淨に活命する者あり、是を四維口食

【五三】摩訶(Mahā)。

【五四】比丘(Bhikṣu)。

る（もの）少く滅ずるもの多し、是の小身を以て能く是の如く大事を辦ず。汝等は大身にして利根なり、云何にして是の如きの功德を作さざる」と。是の時諸の弟子皆慚愧し、大厭心を發す。彌勒佛衆の心に隨つて、爲に種種の法を說く。人の[四八]阿羅漢・阿那含・斯陀含・須陀洹を得たる有り。辟支佛の善根を種ゆるもの有り。[四九]無生法忍を得たる不退の菩薩あり。天人中に生るることを得て、種種の福樂を受くるあり。是を以ての故に知りぬ、是の耆闍崛山は福德の吉處にして、諸の聖人の喜んで住する處、佛は諸聖人の主たり、是の故に佛は多く耆闍崛山に住しまへり。と。

復次に、耆闍崛山は、是れ過去・未來・現在の諸佛の住處なり。富樓那隷耶尼子經の中に說くが如し。佛、富樓那に語げたまはく「若し三千大千世界をして劫燒せしめ、若くは更に生ぜしむとも、我は常に此の山中に在りて住す。一切衆生は結使の纒縛を以て、見佛の功德を作さず。是を以つての故に我を見ず」と。

復次に、耆闍崛山は淸淨鮮潔にして三世の佛、及び諸の菩薩を受くるに、更に是の如きの處なし。是故に多く耆闍崛山に住したまへり。

復次に、諸の[五〇]摩訶衍經は多く耆闍崛山中に在りて說けり、餘處の說は少し。何となれば是の中は淨潔にして福德有り、閑靜なるを以てなり。一切三世諸佛の住處にして、十方諸菩薩も亦是の處を讃歎し恭敬し、諸の天・龍・夜叉・[五一]阿修羅・[五二]迦留羅・乾闥婆・甄陀羅・摩睺羅迦等の大力の衆神も、是の處を守護し、供養し、恭敬す。偈に說くが如し。

『是の耆闍崛山は、諸佛の住せらるゝ處、聖人の止息したまふ所、一切を覆陰するが故に、衆苦解脫すること得、唯だ眞法の存する有るのみ。』

復次に、是の中には十方の無量智慧福德大力の菩薩、常に來つて釋迦牟尼佛に見へ、禮拜恭敬して法を聽く。故に佛は諸の摩訶衍經を說きたまふに、多く耆闍崛山に在せり。諸の摩訶衍經は般若

【四八】聲聞の四果として一、須陀洹果―預流、凡夫初めて聖流に入る。二、斯陀含果―一來、欲界思惑前六品を斷ず。三、阿那含果―不還、同後三品を斷ず。四、阿羅漢果―羅漢、極果。

【四九】無生法忍。略して無生忍とも云ふ。眞如實相の理に安住して動かざるを云ふ。初地或は七八九地に於て得。

【五〇】摩訶衍經（Mahāyāna-sūtra）、大乘經典。

【五一】阿修羅（Asura）。常に帝釋と戰ふ。八部衆の一。二卷註參照。

【五二】伽留羅（Garuḍa）。伽樓羅とも書く。金翅鳥。八部衆の一、第二卷註參照。

無常なるが故に苦なり、苦なるが故に無我なり。無我なるが故に智有る者は我と我所とに著すべからず。若し我と我所とに著せば、無量の憂愁・苦惱を得ん。一切世間の中に心に厭うて離欲を求むべし」と。是の如く種種に世界の中の苦を說いて、其心を開導し、涅槃に入らしむ。此語を說き竟つて、卽ち佛より得る所の[四五]僧伽梨を著け、衣鉢を持し、杖を捉り、金翅鳥の如く、現に虛空に上昇し、四種の身儀、坐臥行住にて、一身に無量の身を現じて、東方世界に滿ち、無量身より還つて一身と爲り、身の上より火を出だし、身の下より水を出だし、身の上より水を出だし、身の下より火を出だせり。南西北方も亦是の如し。衆、心に世を厭ひ、皆歡喜し已る。耆闍崛山の頭に於て、衣鉢を俱にし是の願を作して言く、「我が身をして壞せざらしむ。彌勒成佛せば、我が是の骨身還たび出で、此の因緣を以て衆生を度せん」と。是の如く思惟し已つて、直に山頭の石中に入ること、軟泥に入るが如し。入り已れば山還たび合せり。後、人壽、八萬四千歲、身の長八十尺となるの時に、彌勒佛出でたまふ。佛身の長百六十尺、佛面二十四尺、圓光十里なり。是の時衆生、彌勒佛の世に出でたまふことを聞き、無量の人、佛を逐うて出家す。佛は大衆の中に在つて、始めて說法する時、九十九億の人阿羅漢道を得て、六通を具足す。第二の大會には九十六億の人阿羅漢道を得、第三の大會に九十三億の人阿羅漢道を得、是より已後、無數の人を度す。爾の時、人民、久しくして後厭ふを懈る。彌勒佛衆人の是の如くなるを見て、足指を以て、耆闍崛山を扣開す。是の時、長老摩訶迦葉の骨身、僧伽梨を著して、出でゝ彌勒の足を禮し、虛空に上昇して、變を現ずること前の如し。卽ち空中に於て身を滅して般涅槃す。爾の時に彌勒佛の諸の弟子怪んで問うて言く、「此は是れ何人ぞ、人に似て而も小身なり。法衣を著けて、能く變化を作す」と。彌勒佛の言く、「此の人は是れ過去の釋迦文尼佛の弟子にして、摩訶迦葉と名く。[四六]阿蘭若を行じて少欲知足、[四七]頭陀を行じて、比丘中第一、六神通を得たる共解脫の大阿羅漢なり。彼の時人の壽は百年にして、（それより）出

【四五】僧伽梨(Saṃghāṭi)。三衣の一、大衣と云ふ。「王宮・聚落に入る時の衣」と云ふ。

【四六】阿蘭若を行ず。阿蘭若(Araṇya) 卽ち寺院に住して外住せざること、十二頭陀の一。

【四七】頭陀(Dhūta)。衣食住の三の貪着をはらふ行法。この行者の守るべき事項十二あり十二頭陀と云ふ。納衣・三衣・乞食・不作餘食・一坐食・一揣食・阿蘭若處・塚間座・樹下座・露地座・隨座・常座不臥。

復次に、王舍城は山中に在つて閑靜なり。餘國の精舍は平地の故に、多くの雜人、入出・來往し易きが故に、閑靜ならず。又此の山中に精舍多し、諸の坐禪の人、諸の聖人は、皆閑靜を樂み、多く中に住することを得。佛は是の聖人・坐禪人の主なり。是故に多く王舍城に住せり。

問うて曰く、若し王舍城に住すること爾なるべくんば、何を以てか多く竹園に住せずして、多く耆闍崛山に住せしや。

答へて曰く、我已に答へたり。聖人・坐禪の人は閑靜の處を樂むと。

問うて曰く、餘に更に四山あり、鞞婆羅跋恕等なり。何を以てか多く住さずして、多く耆闍崛山に在せしや。

答へて曰く、耆闍崛山は五山の中に於て最勝なるが故なり。云何に勝れたるか。耆闍崛山の精舍は、城に近くして而も山は上り難し、是を以ての故に雜人來らず。城に近きが故に乞食して疲れず、是の故に佛は多く耆闍崛山中に在して餘處に在さず。

復次に、長老摩訶迦葉は耆闍崛山に於いて三法藏を集め、度すべき衆生を度し竟つて、佛に隨つて涅槃に入らんと欲し、淸朝に衣を著け、鉢を持し、王舍城に入つて乞食し、已つて耆闍崛山に上り、諸の弟子に語るらく、「我れ今日、無餘涅槃に入らんとす」と。是の如く語り已つて、房に入り、結跏趺坐す。諸の無漏の禪定、自ら身に熏ぜり。摩訶迦葉の諸の弟子、王舍城に入り、諸の貴人に語るらく、「知るや不や、尊者摩訶迦葉は、今日無餘涅槃に入る」と。諸の貴人は是の語を聞いて、皆大に愁憂して言く、「佛、已に滅度したまひ、摩訶迦葉は佛法を持護せり、今日復た無餘涅槃に入らんと欲す」と。諸の貴人と諸の比丘、晡時に皆共に耆闍崛山に集まる。長老摩訶迦葉は[四四]晡時に禪定より起つて、衆中に入つて坐し、無常を讚說せり。「諸の一切の有爲法は因緣の生なるが故に無常なり、本と無くして今有り、已に有れども還た無きが故に無常なり。因緣生なるが故に無常なり。

【四四】晡時。申刻、今の午後四時。

てて、其邊に更に一小城を作る、廣長一由旬。[四〇]波羅利弗多羅と名く。猶ほ諸城の中に於て最大なり、何に況んや本の王舍城をや。

復次に、是の中の人は、多く聰明にして、皆廣學多識なり、餘國には此れ無し。

復次に、人の應に得道すべき者あれば、時を待ち、處を待ち、人を待つ。佛は釋提桓因及び八萬諸天の應に摩伽陀の石室中に在りて道を得べきことを豫知したまふ。是の故に佛は多く王舍城に住し給へり。

復次に、其の國は豐樂にして乞食して得易し、餘國は如かず。又た三の因緣を以ての故なり。一には頻婆娑羅王は約勅して宮中に常に千の比丘の食を作る。二には[四一]樹提伽は、人中に生ずと雖も、常に天の富樂を受く。又多くの富貴なる諸の優婆塞あり。三には[四二]阿波羅邏龍王は善心にして化を受けて、佛弟子と作り、世の饑饉を除かんが故に常に好雨を降す。是の故に國豐なり。佛涅槃の後の如きは、長老摩訶迦葉、法を集めんと欲して思惟すらく。「何の國か豐樂にして食を乞うて得易く、疾く法を集むるを得ん」と。是の如く思惟し已つて、王舍城中の頻婆娑羅王が、約勅して常に千の比丘の食を設けしことを憶ひ、頻婆娑羅王死すと雖も、此の法は斷ぜず。是の中は食は得易く、法を集むべきこと易し。餘所には是の如き常供なし。若し乞食を行ずる時、諸の外道來つて共に論議せんに、若し共に論議せば集法の事廢れん。若し共に論ぜずんば便ち言はん、「諸の沙門は我に如かず」と。是の如く思惟して、最上の千の阿羅漢を擇び取り、將に耆闍崛山に就て、經藏を集結せんとせり。是三の因緣を以ての故に、摩伽陀國は乞食して得易きを知る。阿含及び毘尼の中に說くが如くんば、毘耶離國には時時、飢饉あり。[四三]降難陀婆難陀龍王經の中に說くが如し。舍婆提國も飢餓あり。餘の諸國も亦時時飢餓あり、摩伽陀國中には是の事無し。是の故に知りぬ、摩伽陀國は豐樂にして、食を乞うて得易きことを。

【四〇】 波羅利弗多羅（Pātaliputra）。華子城。

【四一】 樹提伽（Jyotika）。王舍城の家主にして、其子病む時、佛を請して法を聽かしむ。

【四二】 阿波羅邏龍王（Apalāla）。西域記によると初め人に生れて咒術して惡龍を拒いだが、時人、課を怠つたので怒つて自ら龍となり、大いに水害をなした、佛に化されて歸依して治まる。

【四三】 難陀婆難陀龍王（Nanda）。目連に伏せられし龍。

名く。[二九]毘耶離には二處あり、一を[三〇]摩訶槃と名け、二を[三一]彌猴池岸精舍と名く。[三二]鳩睒彌には一處あり、[三三]劬師羅園と名く。是の如く、諸國には或は一處に精舍あり、或は空樹林あり。王舍城には多くの精舍あり。坐禪の人に宜しき所にして其處安隱なるを以ての故に、多く此に住したまへり。

復次に、是の(王舍城)中に[三四]富那羅等の六師あり。自ら言く、「我は是れ一切智人なり、佛と對せん」と。及び長爪梵志・[三五]婆蹉を姓とするもの、[三六]拘迦那大等、皆外道の大論議師なり、及び長者[三七]尸利毱多、提婆達多、阿闍世等。是れ佛を害せんと欲して、佛法を信ぜず、各妬嫉を懷く。是の人輩あるが故に、佛多くは此に住したまへり。譬へば毒草生ずる處には、近邊に必ず良藥あるが如し。又偈に說くが如し。

『譬へば師子は百獸の王なり、小蟲の爲に吼ゆれば、衆の爲に笑はる。若し虎・狼・猛獸の中に在つて、奮迅して大吼すれば、智人の可とする所となるが如し。

諸の論議師は猛虎の如し。此る衆中に在りて、畏るる所なし。大智惠の人と見聞多きものと。

此る衆の中に在つて最も第一なり。』

是の大智多聞の人、皆王舍城に在るを以ての故に、佛多くは王舍城に住したまへり。

復次に、瓶婆娑羅王は[三八]伽耶祀舍の中に到り、佛及び餘の結髮の千の阿羅漢を迎ふ。是時、佛、王の爲に說法したまひして[三九]須陀洹道を得き。即ち佛を請して言く、「願はくは佛及び僧、我が王舍城に就て、形壽を盡すまで、衣被、飯食、臥具、醫藥を受けたまはば、給所は當に得たまふべし」と。佛即ち請を受けたまふ。是の故に多く王舍城に住せり。

復次に、閻浮提の四方の中、東方を始と爲す。日の初めて出づるが故なり。(それより)南方、西方、北方と次第す。東方の中にて、摩伽陀國は最勝なり。摩伽陀國の中にては、王舍城最勝なり。是中に十二億の家あり。佛涅槃の後、阿闍世王、人民轉た少くなれるを以ての故に、王舍大城を捨

【二九】毘耶離(Vaiśālī)。毘舍離のこと。
【三〇】摩訶槃(Mahāvana)。毘舍離郊外の林にして、大林と云ふ。ここに重閣講堂あり。
【三一】彌猴池(Markaṭa hrada)。
【三二】鳩睒彌。前註、拘睒彌と同じ。
【三三】劬師羅園(Ghoṣitārāma)。美音精舍と譯す。
【三四】富那羅(Pūraṇa-kassapa)。富蘭那迦葉、六師外道の一。
【三五】婆蹉(Vaccha-gotta)。婆蹉衢多羅。既註。
【三六】拘迦那大(Kokanada)。
【三七】尸利毱多(Śrigupta)。王舍城の人、佛を火坑に入れんとして果さず、後、罪を謝して佛弟子となる。
【三八】伽耶祀舍(Gayāśīrṣa)。象頭山といふ。
【三九】須陀洹(Srota-āpanna)。預流、聲聞四果の中の初果。三界の見惑を斷じて此位を得。

し、藥を與へて去り、癰未だ熟せざれば、則ち久しく住して塗熨するが如し。佛も亦是の如く、若し弟子善根熟すれば、敎化し已つて更に餘處に至り、若し度すべき弟子の善根未だ熟せざれば、則ち久住したまふべし。佛の世間に出でたまへるは、正しく衆生を度して、涅槃の境界、安隱の樂處に著けんと欲するが爲めなるが故なり。是の故に多く舍婆提に住し、多く迦毘羅婆に住さず。佛、摩伽陀國尼連禪河の側、[二〇]漚樓頻螺聚落に於て、阿耨多羅三藐三菩提を得、法身を成就するが故に、多く王舍城に住したまへり。

問うて曰く、已に多く王舍城と舍婆提に住したまふ因緣を知る。此の二城に於て、何を以てか多くは王舍城に住したまふや。

答へて曰く、生れし地の恩を報ずるを以ての故に、多く舍婆提に住したまふ。一切衆生、皆生れし番地を念ふ。偈に說くが如し。

『一切の論議師、自ら知れる所の法を愛すること、人の生地を念ふが如く、出家すと雖も猶ほ諍ふ。』

法身の地恩を報ずるを以ての故に、多く王舍城に住したまふ。諸佛は、皆法身を愛するが故なり。偈に說くが如し。

『過去・未來・現在の諸佛は、皆法を供養して、師敬し尊重したまふ。』

法身は生身より勝るゝが故に、二城の中に多く王舍城に住したまへり。

復次に(王舍城は)坐禪の精舍多きを以ての故なり。餘處には有ること無し。[二一]竹園と、[二二]鞞婆羅跋恕と、[二三]薩多般那求呵と、[二四]因陀世羅求呵と、[二五]薩簸恕魂直迦鉢婆羅の如き、王舍城には五精舍あり。竹園は平地に在り、餘國には此く多くの精舍なし。舍婆提には一處に[二六]祇洹精舍あり、更に一處ありて[二七]摩伽羅母堂あれども更に第三處なし。波羅奈斯國には一處あり、鹿林中の精舍にして[二八]梨師槃陀那と

【二〇】 漚樓頻螺(Uruvilvā)。
【二一】 竹園(Veḷuvana-kalandakanivāpa)。王舍城により頻婆娑羅王の献ずるところ。
【二二】 鞞婆羅跋恕(Vaibhāra)王舍城の東都の山。
【二三】 薩多般那求呵(Sattapaṇṇaguhā)。七葉窟、王舍城に近き洞窟。
【二四】 因陀世羅求呵(Indrasālaguha)。帝釋窟、王舍城の東、Vediya 山にあり。
【二五】 薩簸恕魂直伽鉢婆羅(Sarpasauṇḍikaprāgbhāra)。蛇鬚洞、王舍城に近き洞窟。
【二六】 祇洹精舍(Jetavana Anāthapiṇḍadasyārāma)。祇園精舍或は給孤獨園として知らる。
【二七】 摩伽羅母堂(Pūrvārāma-Mṛgāramātṛ-Prāsāda)。鹿子母堂と云ふ。舍衞城の東にあり。鹿子母毘舍佉、晴衣を賣りて造り、僧伽に献ぜるもの。
【二八】 梨師槃陀那(Ṛṣipatana Mṛgadāva)。鹿を放飼せる故に鹿野苑と云ふ。

答へて曰く、佛は諸の結盡きて復た餘習なし、諸の親屬に近づくとも亦た異想無し。然るに釋種の弟子多く未だ欲を離れず、若し親屬に近ずけば則ち染著の心を生ず。

問うて曰く、何を以てか舍婆提の弟子を護らずして、而も多く舍婆提に住せしや。

答へて曰く、迦毘羅婆には弟子多し。佛、初て國に還りたまふに、迦葉の兄弟、千の比丘は、本と婆羅門の法を修し、山間に苦行し、形容憔悴せり。父王之を見たまふに、此の諸の比丘は、世尊を光飾するに足らざるを以て、卽ち諸の釋氏の貴人の子弟にして、兼て人の少壯なるを選んで、戸より一人を遣はし、強いて出家せしむ。其中に善心にして、道を樂しむもの有り、樂しまざる者有り。されば此の諸の比丘は、本と生れし處に還らしむべからず。舍婆提の弟子輩は爾らず。是を以ての故に、佛、多く舍婆提に住して、多く迦毘羅婆に住したまはず。

復次に、出家の法は應に親屬に近づかざるべきなり。親屬は心著すること、火の如く、蛇の如し。居家の婆羅門の子すら、學問の爲の故に、尙生れし處に在るべからず、何に況んや出家の沙門においてをや。

復次に、舍婆提城の如きは大なれども、迦毘羅婆は爾らず。舍婆提城には九億の家あり。是の中に若し少時のみ住し給はば多人を度すことを得ず。是を以ての故に多く住したまへり。

復次に、迦毘羅婆城の中は佛の生ぜし處なり。是中の人は、已に久しく習行して、善根熟し、利くして智慧あり。是の中には佛少時のみ住して說法して、久しく住することを須ゐずして度し已りて而して去りたまひしなり。舍婆提の人は、或は始めて習行し、或は久しく習行し、或は善根熟し、或は善根未だ熟せず、或は利根、或は利根ならず、多く種種の經書を學ぶが故に、心を硏きて利ならしめ、種種の邪見の網の中に入り、種種の師に事へ、種種の天に屬し、雜行の人多し。是を以ての故に、佛は此に住したまふこと久し。癰を治するの師は、癰の已に熟するを知れば、破つて膿を出だ

云何にして多く二處に住したまふことを知れるや。(と云ふに)。佛の諸經を見るに、多く二城に在つて說き、少しく餘城に在ればなり。

答へて曰く、佛の大慈は等しく及ぶと雖も、漚祇尼等の諸の大城は、是れ邊國なるを以ての故に住せず。又[一七]彌離車の地は弊惡の人多し、善根未だ熟せざるが故なり。偈に說くが如し。

『日光等しく照せども、華熟すれば卽ち(その)時に開き、若し華未だ應に敷くべからずんば、卽ち亦强いて開くべかざるが如し。

佛も亦復是の如く、等しき心もて說法したまへども、善根熟すれば則ち敷き、未熟なれば則ち開かず。

是を以ての故に世尊は、三種の人の中に、しすなわち、利智なるものと善根の熟せるものと結使煩惱の薄きものと(の中)に住したまふ。』

復次に、恩を知るが故に多く王舍城と舍婆提城とに住せり。

問うて曰く、云何なれば恩を知るが故に多く二城に住せしや。

答へて曰く、[一八]憍薩羅國は是れ佛の生れし地なり。佛、頻婆娑羅王に答へ給へる偈に說くが如し。

『妙好の國土有り、雪山の邊に存り、豐樂にして異寶多し、名づけて憍薩羅と曰ふ。

日種たる諸の釋子あり。我是の中に在りて生れ、心に老病死を厭ひ、出家して佛道を求む。』

又是の憍薩羅國の主、[一九]波斯匿王は舍婆提大城の中に住し。佛は法王と爲りて、亦此の城に住せり。

この二主は應に一處に住すべきが故に多く舍婆提に住したまへり。

復次に、是の憍薩羅國は、佛の身を生ぜるの地なり。恩を知るが故に多く舍婆提に住せり。

問うて曰く、若し恩を知るが故に、多く舍婆提に住せりとせば、迦毘羅婆城は佛の生處に近し、何んぞ多く住せざるや。

【一七】彌離車(Mleccha)。胡種の名、垢濁種と譯す。

【一八】憍薩羅(Kośala)。釋迦族に隷せる大國、釋迦族は後にこの國のために亡さる。

【一九】波斯匿(Prasenajit)。

其地平正、生草細軟にして好華地に遍ねく、種種の林木華果茂盛し、溫泉浴地皆悉く清淨なり。其地莊嚴にして、處處に天華天香を散し、天の妓樂を聞くこと有り。此の時に乾闥婆伎、適ま王の來るを見て、各自ら還り去る。「是處は希有にして未だ曾つて見る所にあらず。今我正に是の中に在つて舍を作りて住すべし」と。是の如く思惟し已るに、群臣百官跡を尋ねて到る。王諸臣に告ぐ、『我が前に聞く所の空中の聲に言く、「汝行いて若し希有にして値ひ難きの處を見ば、汝應に是の中に舍を作り住すべし」と。我今此の希有の處を見る。我應に是の中に舍を作り住すべし』と。卽ち本城を捨てて此山中に於て住す。是王初始て是中に在つて住し、是れより已後次第に止住せり。是の王先づ起つて宮舍を造立するが故に、王舍城と名く。略して王舍城の本起を說き竟んぬ。

【經】[9]耆闍崛山の中に。

【論】　耆闍をば鷲と名け、崛をば頭と名く。

問うて曰く、何を以てか鷲頭山と名づくるや。

答へて曰く、是の山の頂、鷲に似たり。王舍城の人、其の鷲に似たるを見るが故に、共に傳へて鷲頭山と言ふ。因つて之を名けて鷲頭山と爲す。　復次に、王舍城の南[10]屍陀林の中に諸の死人多し。諸鷲常に來つて之を噉ひ、還つて山頭に在り、時人遂に鷲頭山と名づく。是の山は五山の中に於て、最も高大にして、好き林水多くして聖人の住處なり。

問うて曰く、已に耆闍崛山の義を知る。佛は何を以ての故に王舍城に住したまひしや。諸佛の法は普く一切を慈むこと、日の萬物を照らして、明を蒙らざる無きが如し。[11]漚祇尼大城・[12]富樓那跋檀大城・阿藍車多羅大城・弗迦羅婆多大城の如き、是の如き等の大城も人多く、豐樂すれども、而も住したまはず、何が故ぞ、多く王舍城・舍婆提大城に住し、少しく波羅奈・迦毘羅婆・[13]瞻婆・[14]婆翅多・[15]拘睒鞞・[16]鳩樓城等に於ても住する時有りと雖も、而も多くは王舍城と舍婆提とに住したまふや。

【九】　耆闍崛山。既註「五山」の中の靈鷲山。梵にては Gṛdhrakūṭa。

【一〇】　屍陀林(Sītavana)。尸多婆那、譯して寒林と云ふ。音、死屍を捨てしところ。

【一一】　漚祇尼(Ujjayani)。南印度にあり。

【一二】　富樓那跋檀(Pūrṇavardhana)。

【一三】　瞻婆(Campā)。中印にあり、佛時代の六大都市の一。

【一四】　婆翅多(Sāketa?)南印より舍衞城への通路に當る。

【一五】　拘睒鞞(Kauśāmbī)。跋蹉國の首都。

【一六】　鳩樓(Kuru)。國名。

諸の出家の仙人の言く、「汝が實心に於て云何。生を殺し肉を噉ふべきや不や」。婆藪仙人の言く、「天祀の爲めの故に、生を殺し、肉を噉ふべし。此の生は天祀の中に在て死するが故に、天上に生ずることを得」と。諸の出家の仙人の言く、「汝は大に是ならず。汝は大妄語せり」と。即ち之に唾して言く、「罪人よ滅し去れ」と。是時に婆藪仙人、尋いで地に陷入し踝を沒す。是れ初めて大罪門を開くが故なり。諸の出家の仙人の言く、「汝應に實語すべし。若し故らに妄語せば、汝が身當に地中に陷入すべし」と。婆藪仙人の言く、「我、天の爲の故に、羊を殺し肉を噉ふて罪無きを知る」と。即ち復た地に陷入して膝に至る。是の如く漸漸に稍沒して、腰に至り頸に至る。諸の出家の仙人の言はく、「汝今妄語して現世の報を得たり。更に實語を以てせば、地中に入ると雖も、我能く汝を出し、罪を免るることを得せしめん」と。爾の時に婆藪仙人自ら思惟して言く、「我は貴重の人なり、兩種に語るべからず。又婆羅門の四圍陀法中の種種の因緣もて天を祀るの法を讃ふ。我一人の死もて、何ぞ計るに足るべけんや」と。心を一にして言く、「天祀の中に生を殺し、肉を噉ふも罪無かるべし」と。諸の出家の仙人の言く、「汝は重罪の人なり、去るを催す、汝を見ることを用ゐず」と。是に於て擧身地中に沒す。是より以來乃至今日まで、常に婆藪仙人王の法を用ふ。天祀の中に於て羊を殺すに、刀を下だす時に當つて、「婆藪汝を殺す」と言ふ。婆藪の子を名けて廣車と曰ふ。位を嗣いで王と爲り、後亦世法を厭ふ。而れども復た出家すること能はず、是の如く思惟すらく、「我が父、先王出家して生きながら地中に入る。若し天下を治めば復た大罪を作さん。我いま當に何を以てか自ら處るべき」と、是の如く思惟す。時に空中に聲を聞く。言く、「汝若し行いて、値ひ難き希有の處を見ば、汝は是の中に舍を作つて住すべし」と。是の語を作し已つて、便ち復た聲を聞かず。未だ幾時を經ずして、王出でて田獵す。一鹿の走りて、疾きこと風の如き有るを見る。王便ち之を逐へども、及ぶべからず。遂に逐ふて止まず。百官侍從、能く及ぶ者無し。轉た前むに、五山の周帀峻固なる有るを見る。

問うて曰く、[三]舍婆提・[四]迦毘羅婆・[五]波羅奈大城の如き、皆な諸の王舍有り。何を以ての故に、獨り此の城を名けて王舍と爲すや。

答へて曰く、有人は言ふ「是の摩迦陀國王に子あり、一頭兩面にして四臂なり、時人以て不祥と爲す。王卽ち其の身首を裂いて之を曠野に棄つ。[六]羅刹女鬼あり、梨羅と名く。還たび其身を合せ而して之を乳養す。後大にして人と成り、力能く諸國王を幷せ兼ね、天下を有ち、諸國の王、萬八千人を取つて此を五山の中に置き、大力勢を以て、閻浮提を治む。閻浮提の人、因て此の山を名けて王舍城と爲す」と。

復次に、有人は言ふ、「摩迦陀王の先に住する所の城あり。城中火を失し、一たび燒くれば一たび作り、是の如くして七たびに至り。國人疲役す。王大に憂怖し、諸の智人を集め、其意の故を問ふ。有が言く、宜しく應に處を易ゆべしと。王卽ち更に住處を求む。此の[七]五山を見るに、周帀して城の如し。卽ち宮殿を作りて中に於て止住す。是を以ての故に王舍城と名く」と。

復次に、往古の世の時、此の國に王あり、[八]婆藪と名く。心に世法を厭ひ、出家して仙人と作る。是の時、居家の婆羅門、諸の出家の仙人と共に論議す。居家の婆羅門の言く、「經書に云ふ、天祀の中に、應に生を殺し、肉を噉ふべし」と。諸の出家の仙人の言く、「天祀の中に、生を殺し、肉を噉ふべからず」と。共に諍うて云云す。諸の出家の婆羅門の言く、「此に大王の出家して仙人と作る有り、汝等信ずるや不や」と。諸の居家の婆羅門の言く、「信ぜん」と。諸の出家の仙人の言く、「我は此の人を以て證と爲す、後日當に問ふべし」と。諸の居家の婆羅門、卽ち其夜を以て先づ婆藪仙人の所に到り、種種に問ひ已つて婆藪仙人に語るらく、「明日論議す、汝當に我を助くべし」と。是の如くして明旦に論ずる時、諸の出家の仙人、婆藪仙人に問ふ。「天祀の中に應に生を殺し、肉を噉ふべきや不や」と。婆藪仙人の言く、「婆羅門の法は天祀の中に、生を殺し、肉を噉ふべし」と。

【三】舍婆提(Srāvasti)。憍薩羅國の首都、舍衞城とも云ふ。
【四】迦毘羅婆(Kapilavastu)。釋尊の生所。いはゆる迦毘羅衞城。
【五】波羅奈。既註。
【六】梨羅。別本には闍羅とあり。
【七】五山。王舍城の周圍にある五山。左の如し、
白善山 Paṇḍava
靈鷲山 Gijjhakuṭa
負重山 Vebhāra
仙人掘山 Isigiri
廣普山 Vepulla
【八】婆藪(Vasu)。

卷の第三

初品第五……「住王舍城」釋論

【經】王舍城に住したまへり。[一]

【論】今當に說くべし。問うて曰く、何を以てか直に般若波羅蜜の法を說かずして、而して佛は王舍城に住したまへりと說くや。

答へて曰く、方と時と人とを說き、人の心をして信を生ぜしむるが故なり。

云何なるを住と名くるや。四種の身儀あり。坐と臥と行と住となり。是を住と名く。又以て魔軍の衆を恐れしめ、自ら弟子をして歡喜して、種種の諸の禪定に入らしむるが故に、是の中に在て住したまふ。

復次に、三種の住あり。天住・梵住・聖住なり。六種の欲天の住法、是を天住と爲す。梵天等・乃至非有想・非無想天の住法、是を梵住と名く。諸佛・辟支佛・阿羅漢の住法、是を聖住と名く。是の三住法の中に於て、聖住法に住して、衆生を憐愍するが故に王舍城に住したまふ。

復次に、布施と持戒と善心と三事の故に天住と名く。慈と悲と喜と捨と四無量心の故に梵住と名く。空と無相と無作と、是の三の三昧を聖住と名く。聖住の法に、佛、中に於て住したまふ。

復次に、四種の住あり。天住と梵住と聖住と佛住となり。三住は前に說くが如し。佛住とは、[二]首楞嚴等の諸佛無量の三昧・十力・四無所畏・十八不共法・一切智等の種種の諸慧、及び八萬四千の法藏にして、人を度するの門なり。是の如きの種種の諸佛の功德は、是れ諸佛の住するの處なり。佛は中に於て住し給ふ。略して住を說き竟んぬ。

王舍城とは、

【一】王舍城(Rājagṛha)。摩迦陀國都。

【二】首楞嚴(Sūraṅga)。健相と譯す。佛の得る三昧の名なり、論四十七參照。五名あり、首楞嚴三昧、般若波羅蜜、金剛三昧、師子吼三昧、佛性、これである。

成佛して妙法を說き、大音に法鼓を振ひ、此を以て衆生・世間の無明の睡を覺む。是の如き等の種種の希有の事已に現はれ、諸天及び世人は、之を見て皆歡喜す。
佛相は莊嚴の身にして、大光滿月の面なり。一切の諸の男女は、之を視て厭足すること無し。
生身の乳餔の力は、萬億の香象に勝れ、神足の力は無上に、智慧の力は無量なり。
佛身の大光明は佛身の表を照耀す。佛、光明の中に在すことは、月の光裏に在るが如し。
種種に佛を惡毀すれども、佛には亦た惡むの想なし。種種に佛を稱譽すれども佛には亦た喜ぶの想なし。
大慈にして、一切を視るに、怨親等くして異なること無し。一切の識あるの類は、咸く皆此の事を知る。
忍辱慈悲力の故に能く一切に勝れたり。衆生を度せんが爲の故に、世世勤苦を受くるも、其の心は常に一定して、衆の爲に利益を作す。[八五]智慧力に十あり、[八六]無畏力に四あり、[八七]不共(法)に十八ありて、無量の功德藏なり。是の如き等の無數の希有の功德力あり。
師子の畏るゝこと無きが如く、諸の外道の法を破り、無上の梵輪を轉じて、諸の三界を度脫したまふ。」
是を名けて婆伽婆と爲す。婆伽婆の義は無量なり。若し廣く說かば、則ち餘事を廢せん。是を以ての故に略說せり。

【八五】十力。論卷二十四參照。
【八六】四無畏。論二十五參照。
【八七】不共法十八。佛に限る十八の功德。論二十六參照。

諸行を說く」と。

復次に、十四難の中に、若し答ふれば過罪あり。若し人、「[八二]石女と[八三]黃門の兒の長短・好醜は、何の類ぞ」と問はゞ、此は答ふべからず、兒なきを以ての故に。

復次に、此の十四の難は、是れ邪見にして其實に非ず、佛は常に眞實を以てす。是の故に、置て答へたまはざるなり。

復次に、置いて答へざる、是を答と爲す。四種の答あり、一には決定答、「佛は第一涅槃安穩なり」の如し。二には解義答、三には反問答、四には[八四]置答なり。此の中佛は置答を以てしたまふ。汝は一切智人なしと言ふも、是れ言あつて義なし、是れ大妄語なり。實には一切智人有り、何となれば、十力を得るが故に。處と非處とを知るが故に、因緣業報を知るが故に。諸の禪定解脫を知るが故に衆生の根の善惡を知るが故に。種種の欲解を知るが故に。種種の世間の無量の性を知るが故に。一切の至る處の道を知るが故に。先世の行處を憶念して知るが故に。天眼を分明に得るが故に。一切の漏の盡きたるを知るが故に。淨不淨を分明に知るが故に。一切世界の中の上法を說くが故に。甘露味を得るが故に。中道を得るが故に。一切の法の若しくは有爲、若しくは無爲の實相を知るが故に。永く三界の欲を離るゝが故に、是の如き種種の因緣の故に、佛を一切智人と爲す。

問うて曰く、一切智人あらば、何等の人か是なるや。

答へて曰く、是れ第一の大人にして、三界の尊なり、名けて佛と曰ふ。讃佛の偈に說くが如し。

『頂生轉輪王は、日・月・燈明の如く、釋迦の貴族種たる淨飯王の太子は、生るゝ時、三千の須彌山の海水を動かす。

老病死を破る爲に、哀愍するが爲の故に世に生る。生るゝの時行くこと七步、光明は十方に滿ち、四(方)を觀て大音を發して、「我は生胎の分盡きたり」と。

【八二】石女、不產女。
【八三】黃門。五種の不男。
【八四】置答。置いて答へず。

亦無邊なるや。亦た有邊にも非ず、亦た無邊にも非ざるか。死後に、神は後世に去ることあるや。神は後世に去ること無きや。亦た神去ることも有り、亦た神去ることも無きや、死後、亦た神去ること有るにも非ず、亦た神の後世に去ること無きにも非ざるか。是の身は是れ神なるや。身、異なり神、異なるや。（これなり）。若し佛、一切智人ならば、此の十四の難に、何を以てか答へざるや。

答へて曰く、此の事は實なきが故に答へず。諸法の有常は此の理なし、諸法の斷も亦此の理なし、是を以ての故に佛は答へたまはず。譬へば人の牛の角を搆れば、幾升の乳をか得るやと問ふが如し。是を問に非ずと爲す。答ふべからず。

復次に、世界の無窮にして、車輪の如し。初も無く、後も無し。

復次に、此に答ふれば利無くして失あり、惡邪の中に墮す。佛は十四の難は常に四諦、諸法實相を覆ふことを知りたまふ。渡る處に惡蟲あるの水には、人を將ゐて度るべからず。安隱にして患處なくんば、人に示して度らしむ可きが如し。

復次に、有る人言く、「是の事は一切智人に非ずんば解すること能はず。人知ること能はざるを以ての故に、佛は答へたまはず」と。

復次に、若し人無を有と言ひ、有を無と言はゞ、是を一切智人に非ずと名く。一切智人は、有を有と言ひ、無を無と言ふ。佛は有を無と言ひたまはず、無を有と言ひたまはず、但だ諸法實相をのみ說きたまふ。云何ぞ一切智人と名けざらんや。譬へば日の高下を作さず、平地を作さず、等一にして照すが如し。佛も亦是の如し。有を無と作さしむるに非ず、無を有と作さしむるに非ず、常に說くに、實智慧の光の諸法を照すこと、一道の如し。　人、佛に問うて言はく、「大德、十二因緣は佛の作なりや、他の作なりや」と。佛の言はく、「我は十二因緣を作らず、餘人も亦た作らず。佛あるも佛なきも、生の因緣老死あり、是の法は常に定住す。佛は能く是の生の因緣老死乃至無明の因緣

答へて曰く、爾らず、見ざるに二種あり、見ざるを以ての故に便に無しと言ふ可らず。一には事實に有れども、因緣の覆ふを以ての故に見ず、譬へば人の姓族の初、及び雪山の斤兩、恒水の邊の沙の數の如し。有れども知るべからず。二には實に無きが故に見ず、譬へば第二頭、第三手の如し。因緣覆ふこと無けれど而も見ず。是の如く一切智人は、因緣の覆ふが故に汝は見ざるなり、一切智人無きには非ず。何等か是れ、覆へる因緣なるや。未だ[八一]四信を得ずして、心惡邪に著することなり。汝には是の因緣覆ふを以ての故に一切智人を見ざるなり。

問うて曰く、所知の處、無量なるが故に一切智人なし。諸法は無量無邊なり、多人和合するも尚知ること能はず、何に況んや一人をや。是を以ての故に一切智人なし。

答へて曰く、諸法無量なるが如く、智慧も亦た無量・無數・無邊なり、函大なれば蓋も亦大に、函小なれば蓋も亦小なるが如し。

問うて曰く、佛は自ら佛法を說きたまふも、餘經、若くは藥方・星宿・算經・世典を說きたまはず。是の如き等の法を、若し是れ一切智人ならば、何を以てか說きたまはざる。是を以ての故に知る、一切智人に非ざることを。

答へて曰く、一切の法を知ると雖も、用あるが故に說き、不用なるが故に說かず、人ありて問ふが故に說き、問はざるが故に說きたまはず。

復次に、一切の法を略說するに三種あり、一には有爲法、二には無爲法、三には不可說の法なり。此れに已に一切の法を攝す。

問うて曰く、(佛は)十四の難に答へたまはず、故に知る、一切智人に非ることを。何等か十四の難なる。世界及び我は常なるや。世界及び我は無常なるや。世界及び我は亦有常にして亦無常なるや。世界及び我は亦有常にも非ず亦無常も非ざるか。世界及び我は有邊なるや。無邊なるや。亦有邊にして

【八一】四信。不明なれども起信論には、信根本・信佛・信法・信僧の四種信心をあぐ。

說法の烟を以て衆生を引き無我・實相・空の舍中に入る。云何に道を知るや。牛は行き來り去る所の好惡の道を知る。比丘も亦是の如く、八聖道を知りて、能く涅槃に至り、斷常の惡道を離る。云何に牛の所宜の處を知るや。能く牛をして蕃息し、病を少なからしむ。比丘も亦是の如く、佛法を說く時、清淨の法喜を得て、諸の善根增盛す。云何に度濟することを知るや。易く入り、渡り易く、波浪・惡蟲なき處を知る。比丘も亦是の如く、能く多聞の比丘の所に至りて法を問ふ。說法する者は前人の心の利鈍・煩惱の輕重を知り、人をして好く濟ひて、安隱に度を得せしむ。云何に安隱の處を知るや。所住の處に、虎・狼・師子・惡蟲・毒獸なきを知る。比丘も亦是の如く、四念處の安隱にして、煩惱の惡魔毒獸なしと知る。比丘は此に入れば則ち安隱にして患無し。云何に乳を留むるや。犢母は犢子を愛念するが故に乳を與ふ。以て殘乳を留むるが故に、犢母歡喜して、則ち犢子竭きず。牛主及び放牛の人は日日益有り。比丘も亦是の如く、居士・白衣の衣食を給施するに、當に節量を知るべし。都べて竭さしめざれば、則ち檀越歡喜して、信心絕えず、受くる者も乏しきこと無かるべし。云何に牛主を養ふことを知るや。諸の大犢牛は、能く牛群を守るが故に應に養護して羸瘦せしめず、飲ましむるに麻油を以てし、飾るに瓔珞を以てし、標するに鐵角を以てし、摩刷し讃し譽稱する等すべし。比丘も亦是の如く、衆僧の中に威德の大人あり、佛法を護益し、外道を摧伏し、能く八衆をして、諸の善根を種ゑ、其の宜しき所に隨つて、恭敬供養等を得せしむ。放牛の人は、此の語を聞き已つて是の如く思惟すらく、「我等放牛人の知る所は、三四事に過ぎず。放牛師の輩も遠く五六事に過ぎず。今此の說を聞いて、未曾有なるを嘆ず。若し此の事を知らば、餘も亦皆な爾らん。實に是れ一切智人なり。復た疑ふこと無きなり」と。此の經は、此の中に應に廣く說くべし。是を以ての故に一切智人有ることを知る。

問うて曰く、世間に、一切智人有るべからず。何となれば一切智人を見し者なければなり。

相相皆な分明にして、威神も亦滿足し、福德自ら纏絡して、見る者愛せずといふこと無く、圓光身處の中、觀る者厭足なし。
若し一切智あらば、必ず是の功德あり。一切の諸の彩畫・寶飾・莊嚴の像を此の妙身に比せんと欲すれども、以て喩と爲すべからず。能く諸の觀る者を滿〔足〕せしめ、第一の樂を得せしむ。之を見れば淨信を發す。必ず是れ一切智ならん。』

是の如く思惟し已つて佛を禮して坐す。佛に問うて言はく、「放牛の人は幾(いくばく)の法あつて、成就して能く牛群をして蕃息せしめ、幾の法あつて、成就せずして、牛群をして增さず、安隱なることを得ざらしむるや」と。佛、答へて言はく、「十一の法ありて、放牛の人は、よく牛群をして蕃息せしむ。何等か十一なる。色を知り、相を知り、刮刷を知り、瘡を覆ふを知り、烟を作るを知り、好道を知り、牛の所宜の處を知り、好く度(わた)濟ることを知り、安隱の處を知り、乳を留むることを知り、牛主を養ふを知る。若し放牛の人、此の十一の法を知らば、能く牛群をして蕃息せしめん。比丘も亦是の如く十一の法を知らば能く善法を增長せん。云何に色を知るや。黑と白と雜色とを知る。比丘も亦是の如く、一切の色は皆是れ四大にして、四大の造なりと知る。云何に相を知るや。牛の吉・不吉の相を知つて、他の群と合するも、相に因つて則ち識る。比丘も亦是の如く、善業の相を見ては、是を智人なりと知り、惡業の相を見ては、是を愚人なりと知る。云何に刮刷するや。諸蟲の爲に血を飲まるれば、則ち諸瘡を增長す。刮刷して則ち害を除く。比丘も亦是の如く、惡邪なる覺觀の蟲、善根の血を飲めば、心瘡を增長し、除けば則ち安隱なり。云何に瘡を覆ふや。若くは衣、若くは草葉を以て蚊虻の惡刺を防ぐ。比丘も亦た是の如く、正觀の法を念じて、六情の瘡を覆ひ、煩惱・貪欲・瞋恚の惡蟲の刺棘の傷つくる所ならしめず。云何に烟を作るを知りて、諸の蚊虻を除くや。牛は遙に烟を見れば則ち來りて屋舍に趣向す。比丘も亦是の如く、聞く所の如く說いて、諸の結使の蚊虻を除き、

て、一切智と云ふも、一切智人は無きなり。

答へて曰く、爾らず、汝惡邪の故に佛を妬み瞋り、妄語を作せども、實に一切智の人有り。何となれば佛は一切衆生の中にて、身色顏貌の端正なること比なく、相德明具して一切の人に勝れたり。小人も佛身の相を見れば亦是れ一切智の人なりと知る、何に況んや大人をや。

放牛譬喩經の中に說くが如し。摩伽陀國の王、頻婆娑羅、佛及び五百の弟子を請すること三ヶ月、王は新しき乳・酪・酥を須ゐて、佛及び比丘僧に供養せんとし、諸の放牛人に語ぐ、「近處に來つて住し、日日、新しき乳・酪・酥を送れ」と。三ヶ月を竟り。王は此の放牛の人を憐愍し語つて言はく、「汝往いて佛を見たてまつり、還り出で放牛せよ」と。諸の放牛の人は、佛所に往詣し、道中に於て、自ら共に論じて言はく、「我等人の說を聞くに、佛は是れ一切智人なりと。我等は下劣の小人なり、何ぞ能く實に一切智人ありと別ち知らん。諸の婆羅門は酥酪を喜び好むが故に常に諸の放牛の人の所に來往して親厚を作す。放牛の人は是に由つて、婆羅門の種種の經書・名字を聞く故に四章陀經の中の治病の法、鬪戰の法、星宿の法、祠天の法、歌舞・論議・難問の法、是の如き等の六十四種の世間の技藝を言る。淨飯王の子は廣學多聞なり。若し是の事を知るも、難を爲すに足らず。其れ生れてより已來放牛せず、我等は放牛の秘法を以て之に問はん。若し能く解せば實に是れ一切智人なり」と。是の論を作し已つて、前んで竹園に入り、佛の光明林間を照すを見て、進前して佛を覓めて、樹下に坐したもふを見る。その狀は金山に似たり。酥を火に投じて、其炎の大に明かなるが如く、或は融かせる金を竹林の間の上に散ぜる紫金の光色に似たる有り。之を視て厭ふ心なし。大に歡喜して、自ら相謂つて言はく、

『今此の釋師子は、一切智無きこと有らんや。之を見て喜ばざるもの無し、此の事は亦已に足れり。光明第一の照にして、顏貌は甚だ貴重に、身相に威德備はり、佛の名と相稱へり。

ざるも、現世に富樂を受くるを妨げず。

當に知るべし、虛誑にして實事なきことを。是の故に智人は天に屬せず。若し世間の中の諸の衆生は、業因緣の故に循環するが如し。福德の緣の故に天上に生じ、雜業の因緣の故に人中に(生ず)。世間の行業は因緣に屬す、是の故に智者は天に依らず。』

復次に、是の三天は、之を愛すれば則ち(その人の)一切の願を得せしめんと欲し、之を惡めば則ち(その人の)七世をして滅せしめんと欲す。佛は爾らず、菩薩たりし時、若し怨家の賊來つて殺さんと欲するも、尙ほ自ら身肉・頭目・髓腦を以て之を供養す。何に況んや佛を得たるをや。身を惜しむの時なし。是を以ての故に獨り佛のみ應當に佛の名號を受くべし。應當に佛に歸命すべし。佛を以て師となし、應に天に事ふべからず。

復次に、佛に二事あり、一には大功德神通力、二には第一淨心にして諸の結使を滅せり。諸天は福德神力ありと雖も、諸の結使滅せざるが故に心清淨ならず、心清淨ならざるが故に神力も亦少し。聲聞辟支佛は結使滅して心淸淨なりと雖も、福德薄きが故に力勢少し。佛は二法を滿足するが故に、一切の人に稱勝す。餘人は一切の人に勝(まさ)らず。

婆伽婆を有德と名く。先に已に說けり。

復た[七三]阿婆磨と名く。〔秦に無等と言ふ〕復た[七四]阿婆摩婆摩と名く。〔秦に無等等と言ふ〕。復た[七五]路迦那他と名く。〔秦には世尊と言ふ〕。復た[七六]波羅伽と名く。〔秦に度彼岸と言ふ〕。復た[七七]婆檀陀と名く。〔秦には大德と言ふ〕。復た[七八]尸梨伽那と名く。〔秦に厚德と言ふ〕。是の如き等の無量の名號あり。父母の名字は[七九]悉達多、〔秦には成利と言ふ〕得道の時一切の諸法を知る、是を名けて佛と爲す。應に諸天世人の供食を受くべし。是の如く名を得るの大德厚德あり、是の如き種種に德に隨つて名を立つるなり。

問うて曰く、汝は[八〇]刹利種を愛す。淨飯王の子は悉達多と字く。是を以ての故に而も大に稱讚し

【七三】阿婆磨(Asama)。
【七四】阿婆摩婆摩(Asamasama)。
【七五】路迦那他(Lokajyeṣṭha又はLokanātha)。
【七六】波羅伽(Pārga)。
【七七】婆檀陀(Bhadanta)。
【七八】尸梨伽那(Śrīguṇa)。
【七九】悉達多(Siddhārta)。
【八〇】刹利種(Kṣatriya)。印度四族の一、武人、釋尊はこの中に出づ。

く攝し、人と說けば則ち地上を盡く攝す。 復次に、人の中にては戒律儀を受け、見諦道、思惟道、及び諸の道果を得。或は有人の言く、餘道の中には得ず。或は有人の言く、多くは得ること少し。天と人との中にては得ること易くして多く得と。是を以ての故に佛を天人の師と爲す。 復次に、人の中の行には、樂の因を行ずるもの多く、天の中には樂の報多し。善法は是れ樂の因、樂は是れ善法の報なり。餘道の中の善の因報少し、是の故に佛を天人の師と爲す。

復た[69]佛陀と名く。〔秦には知者と言ふ〕何等の法を知るや。過去未來現在の衆生の數、非衆生の數、(及び)有常無常等の一切の諸法を知る。菩提樹下において、了了に覺知せるが故に名けて佛陀と爲す。

問うて曰く、餘人も亦一切諸法を知る。[70]摩醯首羅天の如きは、〔秦には大自在と言ふ〕八臂、三眼にして、白牛に騎れり。[71]韋紐天の如きは、〔秦には遍悶と言ふ〕四臂にして貝を捉り、輪を持し、金翅鳥に騎る。[72]鳩摩羅天の如きは、〔秦には童子と言ふ〕是の天は鷄を擎げ、鈴を持し、赤幡を捉り、孔雀に騎る。皆是れ諸天の大將なり。是の如き等の諸天は、各大と言ひ、皆一切智と稱す。人あつて弟子と作り、其の經書を學び、亦其の法を受け、是を一切智と言ふ。

答へて曰く、此は一切智なるべからず、何を以ての故に、瞋恚憍慢にして心著するが故なり。偈に說くが如し。

『若しくは彩畫の像及び泥像、聞經中の天及び讃天、是の如きの四種の諸天等は、各各手に諸の兵仗を執り。若しくは力如かずして他を怖畏し、若しくは心不善にして他を怖畏す。

此の天は定んで必らず若しくは他を怖れ、若しくは少力の故に他を畏怖す。是の天は一切常に怖畏し、諸の衰苦を除却すること能はず。

人あつて奉事恭敬する者あらば、現世に憂海に沒することを免れず。人あつて敬せず供養せ

【六九】 佛陀(Buddha)。

【七〇】 摩醯首羅天(Maheśvara)。

【七一】 韋紐天(Viṣṇu)。

【七二】 鳩摩羅天(Kumāra)。

乃ち滅に至るが如く、佛の人をして善法を得せしむるも亦た是の如く、死に至るまで捨てず。是を以ての故に佛を「丈夫を化すべき調御師」と名く。

問うて曰く、女人をも佛は亦た化して道を得せしむ。何を以て獨り丈夫と言ふや。

答へて曰く、男は尊く女は卑しきが故に。女は男に從ふが故に。男は事業の主たるが故なり。

復次に、女人に、五つの礙ありて、轉輪王と釋天王と魔天王と梵天王と佛とに作ることを得ず。是を以ての故に說かず。　復次に、若し佛は女人の調御師なりと言はゞ、尊重せられず。若し丈夫と說かば、一切都て攝す。譬へば王の來るに、獨り來るべからず、必ず侍從あるが如し。是の如く丈夫と說けば、二根無根及び女を盡く攝す、是を以ての故に丈夫と說く。是の因緣を用ふるが故に、佛を「丈夫を化すべき調御の師」と名く。

復た[六八]舍多提婆魔㝹舍喃と名く。舍多は秦に敎師と言ひ、提婆は天と言ひ、魔㝹舍喃は人と言ひ、是に「天人の敎師」と名く。云何なれば天人の敎師と名くるや。佛は、是れは作すべし。是れは作すべからず。是れ善、是れ不善なりと示導したまふ。是の人は敎に隨つて行じ、道法を捨てず、煩惱解脫の報を得、是を天人の師と名く。

問うて曰く、佛は能く龍・鬼神等の餘道の中に墮して生るゝ者を度したまふ。何を以てか獨り天人の師と言ふや。

答へて曰く、餘道の中に生ずる者を度することは少く、天人の中に生ずる者を度することは多し。白色の人に黑黶子ありと雖も黑人と名けざるが如し。黑少なきが故なり。　復次に人の中にては結使薄く、厭心得易く、天の中は智慧利し。是を以ての故に(この)二處は道を得易し、餘道の中は爾らず。

復次に、天と言へば則ち一切の天を攝し、人と言へば則ち一切地上の生者を攝す。何となれば天上にては則ち天は大なり、地上にては則ち人は大なるを以てなり。是の故に天と說けば則ち天上を盡

【六八】舍多提婆魔㝹舍喃(Śāstādevamanusyānaṁ)。

問うて曰く、云何に無上なる。

答へて曰く、涅槃の法は無上なり。佛、自ら是の涅槃を知り、他從り聞かず、亦た將に衆生を導いて、涅槃に至らしめんとす。諸法の中に涅槃の無上なるが如く、衆生の中に佛も亦無上なり。

復次に、持戒・禪定・智慧もて衆生を敎化するに、一切與ひ等しき者あること無し、何に況んや能く過ぐるものあらんや。故に無上と言ふ。

復次に、阿を無と名け、耨多羅を答と名く。一切の外道の法は答ふべく破るべし、實に非ず、淸淨に非ざるが故なり。佛法は答ふ可からず、破す可からず、一切語言の道を出づ。亦た實に淸淨なるが故なり。是を以ての故に無上と名く。

復た[六六]富樓沙曇藐婆羅提と名く。富樓沙を秦には「丈夫」と言ひ、曇藐を秦には「化す可し」と言ひ、婆羅提を調御師と言ひ、是に「丈夫を化すべき調御の師」と名く。佛は大慈大悲大智を以ての故に、有る時は軟美の語、有る時は苦切の語、有る時は雜語、此れを以て調御して道を失はさらしむ。偈に說くが如し。

『佛法を車とせば、弟子は馬なり、實の法寶の主たる佛は調御なり。若し馬、道を出でて、正轍を
　失せば、是の如きは當に治め調伏せしむべし。
　若し小しく調せざるものは輕法もて治す。善を好んで成立せば、上道と爲す。若し治むべからざ
　れば便ち棄て捨る。是を以て調御、無上と爲すなり。』

復次に、調御の師に五種あり。初には父母兄姉親里、中は官法、下は師法なり。今世には(この)三種の法の治あり、後世には[六七]閻羅王の治あり。佛は、今世の樂、後世の樂、及び涅槃の樂を以て利益するが故に師上と名く。四種法にて治むるは、久しからずして畢に壞れ、常に實に成就すること能はず。佛は人を成ずるに、三種の道を以てし、常に道に隨つて失せず。火の自相を捨てずして

【六六】富樓沙曇、藐婆羅提(Puruṣadamyasārathi)。

【六七】閻羅王(Yama)。閻魔羅、

復た[六二]修伽陀と名く。修は秦に好と言ひ、伽陀は、或は去と言ひ、或は説と言ひ、是に『好く去り好く説く』と名く。「好く去る」とは、種種の諸の深き[六三]三摩提、無量の諸の大智慧の中に於て去るなり。偈に説くが如し。

『佛は一切智を大車と爲し、八正道を行いて、涅槃に入りたまふ。』

是を好く去ると名く。「好く説く」とは、諸法實相の如く説き、法愛に著せずして説くなり。弟子の智慧力を觀て、是の人は正しく一切の方便・神通・智力をもて、之を化すれども亦之を如何ともする無し。是の人は度す可し。是れは疾し、是れは遲し。是の人は是の處にて度すべし。是の人には布施を説き、或は持戒を説き、或は涅槃を説くべし。是の人には五衆・十二因緣・四諦等の諸法を説かば、則ち能く道に入るべし。是の如き等種種に、弟子の智力を知つて、而して爲に法を説く。是を「好く説く」と名く。

復た[六四]路迦憊と名く。路迦は秦には世と言ひ、憊は知と名く、是を「世間を知る」と名く。

問うて曰く、云何に世間を知るや。

答へて曰く、二種の世間を知る。一には衆生、二には非衆生なり。及び實相の如く、世間と世間の因を知り、世間の滅と出世間の道を知る。

復次に世間を知るとは、世俗知の如きには非ず。亦た外道の知にも非ず。世間は無常なるが故に苦、苦なるが故に無我なりと知るなり。

復次に、世間の相は、有常に非ず、無常に非ず、有邊に非ず、無邊に非ず、去に非ず、不去に非ず、是の如きの相にも亦著せず、清淨にして常に不壞の相なること虛空の如しと知る。是を世間を知ると名く。

復た[六五]阿耨多羅と名く。秦には無上と言ふ。

【六二】修伽陀(Sugata)。善逝。

【六三】三摩提 (Samādhi)三昧、譯して定といふ。

【六四】路迦憊(Lokavit)。

【六五】阿耨多羅(Anuttara)。

悉く知る、是を三藐三佛陀と名く。

復た[60]婢侈遮羅那三般那と名け、秦には明行具足と言ふ。云何なれば明行具足と名くるや。宿命、天眼、漏盡を名けて三明と爲す。

問うて曰く、神通と明とは、何等の異なり有りや。

答へて曰く、直に過去の宿命の事を知る、是を通と名け、過去の因緣行業とを知る、是を明と名く。直に此に死して、彼に生ずることを知る、是を通と名け、行の因緣の際會を知つて失せざる、是を明と名く。直に結使を盡して、更に生不生を知らざる、是を通と名け、若し漏盡きて更に復生ぜざるを知る、是を明と名く。是の三明は大阿羅漢、大辟支佛の得る所なり。

問うて曰く、若し爾りとせば佛と何等の異なること有りや。

答へて曰く、彼は三明を得と雖も、明を滿足せず、佛は悉く滿足す、是を異なれりと爲す。

問うて曰く、云何に滿足せず、云何に滿足するや。

答へて曰く、諸の阿羅漢、辟支佛の宿命智は自身及び他人を知れども亦能く遍ねからず。阿羅漢は、一世、或は二世、三世、十百千萬劫乃至八萬劫を知ること有れども、是を過ぎて以往は復た知ること能はず。是の故に天眼明を滿ぜず。未來世も亦た是の如し。佛は一念の中に、生・住・滅の時、諸の結使の分が生ずるの時、(諸の結使の)是の如く住するの時、是の如く滅するの時、是の如きの[61]苦法忍、苦法智の中に斷ずる所の結使を悉く覺了し。是の如きの結使解脫に、爾所の有爲法解脫を得、爾所の無爲法解脫を得ることを知り、乃至道比忍に至る。(これ)見諦道十五心の中の、諸の聲聞、辟支佛の覺知せざる所なり、時少しく疾きが故なり。是の如く、過去の衆生の因緣と漏盡とを知る。未來、現在も亦是の如し。是故に佛を明行具足と名く。行は身口業に名く。唯だ佛のみ身口業を具足し、餘は皆失あり。是の故に明行足と名く。

【六〇】婢侈遮羅那三般那(Vidyācaraṇasampanna)。

【六一】苦法智。苦法忍。以下の諸項をも說明するため、ここに見道十六心をあげておく、行位の三道たる、見道、修道、無學道の中、見道は無漏智を生じて眞諦の理を照見する道、これに八智、八忍の十六心がある。

一、苦法智忍、　欲界苦諦下の見惑を斷ず、
二、苦法智、　苦惑を斷ず、
三、集法智忍、　欲界集諦下の見惑を斷ず、
四、集法智、　集惑を斷ず、
五、滅法智忍、　欲界滅諦下の見惑を斷ず、
六、滅法智、　滅惑を斷ず、
七、道法智忍、　欲界道諦下の見惑を斷ず、
八、道法智、　道諦を斷ず、
九、苦類智忍（上二界の惑を斷ず、それそれ前の八に相應す）。
十、苦類智、
十一、集類智忍、
十二、集類智、
十三、滅類智忍、
十四、滅類智、
十五、道類智忍、(道比忍)
十六、道類智。

復た、阿羅訶[五八]と名く。云何なれば阿羅訶と名くるや。阿羅を賊と名け、訶は殺と名く。是を殺賊と名く。偈に說くが如し。

『佛は忍を以て鎧と爲し、精進を鋼甲と爲し、持戒を大馬と爲し、禪定を良弓と爲し、智慧を好箭と爲し、外に魔王の軍を破り、內に煩惱の賊を滅ぼす、是を阿羅訶と名く。』

復次に、阿を不と名け、羅訶を生と名け、是を不生と名く。佛の心種子は後世の田中に生ぜず、無明の糠を脫するが故なり。

復次に、阿羅訶を「供養を受くべきもの」と名く。佛は諸の結使を除き盡して、一切の智慧を得たるが故に、一切の天地の衆生の供養を受くべし。是を以ての故に佛を阿羅訶と名く。

復た三藐三佛陀と名く。云何なれば[五九]三藐三佛陀と名くるや。三藐を正と名け、三を遍と名け、佛を知と名け、是を「正遍知一切法」と言ふ。

問うて曰く、云何に「正遍知」なる。

答へて曰く、

『苦を知ること苦相の如く、集を知ること集相の如く、滅を知ること滅相の如く、道を知ること道相の如し。』

是を三藐三佛陀と名く。

復次に、一切の諸法の實不壞の相、不增、不減なりと知る。云何なるを不壞の相と名くるや。心の行はるゝ處滅し、言語の道斷え、諸法を過ぎて涅槃の相の動ぜざるが如し。是を以ての故に三藐三佛陀と名く。

復次に、一切の十方の諸の世界の名號、六道に攝する所の衆生の名號、衆生の先世の因緣、未來世の生處、一切の十方の衆生の心相、諸の結使、諸の善根、諸の出要、是の如き等の一切の諸法を

【五八】阿羅訶(Arhat)阿羅漢。

【五九】三藐三佛陀(Samyaksambuddha)。

や不や。懺謝して慢ること無くして而も此の言あり。當に知るべし惡に非ずと。此の人は五百世來、常に婆羅門の家に生れ、常に自ら憍り貴ぶりて、餘人を輕賤す。本來習ふ所の口言にして而するのみ。心に憍ることは無きなり」と。是の如く諸の阿羅漢は、結使を斷ずと雖も猶殘氣あり。諸の佛世尊の如きは、若し人、刀を以て一臂を割り、若し人、栴檀香を以て一臂に泥らんに、左右の眼の如くにして心に憎愛なし。是を以て永く殘氣なし。[五六]旃闍婆羅門女は、盆を帶して佛を、大衆の中に於いて謗つて言く、「汝、我をして娠ましむ。何ぞ以て憂ひて我に衣食を與へざる。爾は羞なくして餘人を誑惑することを爲すか」と。是の時に五百の婆羅門師等は手を舉げて唱へて言く、「是なり、是なり。我曹、此の事を知れり」と。是の時に佛は異色なく、亦た慚色なし。此の事卽時に彰露るや、地は爲に大に動き、諸天は供養して衆の名華を散じ、佛德を讃嘆すれども、佛には喜色なかりき。

復次に佛は馬麥を食すれども、亦た憂慼すること無く、天王、食を獻じて百味を具足すれども、以て悅を爲したまはず、一心にして二無し。是の如き等の種種なる飲食・衣服・臥具と、讃呵・輕敬等種種の事あるも、中心異なること無きなり。譬へば眞金は燒き、鍛ひ、打ち、磨すれども、都て增損すること無きが如し。是を以ての故に阿羅漢は結を斷じて道を得と雖も、猶ほ殘氣あれば、婆伽婆と稱することを得ず。

問うて曰く、婆伽婆は止だ此の一名のみ有りや、更に餘名有りや。

答へて曰く、佛の功德は無量なれば、名號も亦た無量なり。此の名は其の大なる者を取る、人、多く識るを以ての故に。

復た異名あり、多陀阿伽陀等と名くること有り。云何なれば[五七]多陀阿伽陀と名くるや。法相の如くに解し、法相の如くに說き。諸佛の如きは、安隱の道を來る。佛も亦た是の如く來り、更に後有の中に去らず、是の故に多陀阿伽陀と名く。

【五六】旃闍(Ciñca)。

【五七】多陀阿伽陀(Tathāgata)。如來と記す。

なり」と。佛言はく、「舍利弗は不淨食を食す」と。爾の時に舍利弗は是の語を轉聞し、即時に食を吐いて、自ら誓言を作して言く。「今日より復た人の請を受けず」と。是の時に波斯匿王、長者須達多等、舍利弗の所に來詣し、舍利弗に語るらく、「佛は無事を以て人の請を受けたまはず、大德舍利弗も復た請を受けざれば、我等白衣は、云何にして當に大信淸淨なるを得べきや」と。舍利弗言く、「我が大師たる佛は、舍利弗は不淨食を食すと言へり。今は人の請を受くることを得ず」と。是に於て波斯匿等は佛の所に至り、佛に白して言く、「佛は常に人の請を受けたまはず、舍利弗復た請を受けずんば、我等は云何にして心に大信を得ん。願くは佛、舍利弗に勅して、還た人の請を受けしめたまへ」と。佛の言はく、「此の人の心は堅くして移轉すべからず」と。佛、爾の時に本生の因緣を引きたまふ。昔、一の國王あり、毒蛇の爲に齧まる。王、時に死せんと欲して、諸の良醫を呼んで蛇毒を治せしむ。時に諸醫の言く、「還たび蛇をして毒氣を嗽はしめば、乃ち盡きん」と。是の時、諸醫、各呪術を設けたれば、王を齧める所の蛇、即ち王の所に來る。諸醫薪を積んで火を然し、蛇に勅して、「還たび汝の毒を嗽へ、若し爾らずんば當に此の火に入るべし」と。毒蛇思惟すらく、「我既に毒を吐けり、云何んぞ還たび嗽はん、此の事は死よりも劇し」と、思惟して心を定め、即時に火に入りぬ。爾の時の毒蛇は、舍利弗是なり。世世心堅くして動すべからず。復次に、長老必陵伽婆蹉は常に眼病を患ふ。是の人は乞食して常に恒水を渡るに、恒水の邊に到りて彈指して言く、「小婢よ、住つて流るゝこと莫れ」と。水即ち兩に斷れて乞食に過ることを得せしむ。是の*恒神、佛の所に到り、佛に白さく、「佛弟子必陵伽婆蹉は常に我を罵つて、小婢よ、住つて水を流すこと莫れと言ふ」と。佛、必陵伽婆蹉に告げたまはく、「恒神に懺謝せよ」と。必陵伽婆蹉は即時に手を合せ、恒神に語つて言く、「小婢よ、瞋ること莫れ、今汝に懺謝す」と。是の時に大衆笑ふ、「云何なれば懺謝して而も復た罵るや」と。佛、恒神に語げたまはく、「汝、必陵伽婆蹉の手を合せて懺謝せるを見し

所以いかんとなれば、轉輪聖王は結と相應すれども、佛は已に結を離る。轉輪聖王は生老病死の泥中に沒在すれども、佛は已に渡ることを得たり。轉輪聖王は恩愛の奴僕と爲れども、佛は已に永く離る。轉輪聖王は世間曠野の災患に處在すれども、佛は已に離るゝことを得たり。轉輪聖王は無明の暗中に處在すれども、佛は第一明中に處したまふ。轉輪聖王は若し極めて多くとも四天下を領するなれども、佛は無量の諸の世界を領す。轉輪聖王は財自在なれども、佛は心自在なり。轉輪聖王は天の樂を貪り求むれども、佛は乃至有頂の樂も亦貪著したまはず。轉輪聖王は他に隨つて樂を求むれども、佛は內心自ら樂しむ。是の因緣を以て佛は轉輪聖王に勝れたり。諸餘の釋梵護世者も亦復た是の如し。但だ轉輪聖王より小しく勝れるのみ。

復次に婆伽を破と名け、婆を能と名く。是人は能く婬と怒と癡とを破るが故に稱して婆伽婆と爲す

問うて曰く、阿羅漢・辟支佛の如きも亦た婬と怒と癡とを破る、佛と何ぞ異ならんや。

答へて曰く、阿羅漢・辟支佛は三毒を破ると雖も氣分を盡さず。譬へば香を器中に在くに香は出すと雖も、餘氣は故在するが如し。又草木の薪の火燒し烟出するも、炭灰は盡さゞるが如し。火力薄きが故なり。佛は三毒永く盡して餘すこと無きこと、譬へば劫盡の火の、須彌山一切の地を燒くに、都く盡して烟なく、炭なきが如し。舍利弗の如きは、瞋恚の氣殘り、難陀は婬欲の氣殘り、必陵伽婆蹉は慢の氣殘れり、譬へば人の鎖を被るに、初めて脫るゝ時、行くに猶ほ便ならざるが如し。時に佛、禪より起ちて經行したまふ、羅睺羅佛に從つて經行するに、佛、羅睺羅に問ひたまはく、「何を以てか羸瘦する」と。羅睺羅、偈を說いて佛に答ふ。

『若し人油を食へば則ち力を得、若し酥を食ふ者は好色を得、麻と滓菜とを食へば色・力なし、大
　德世尊、自ら當に知りたまふべし。』

佛、羅睺羅に問ひたまはく、「是の衆の中、誰をか上座と爲す」と。羅睺羅答ふらく、「和上舍利弗

幾か無色、幾か可見、幾か不可見、幾か有對、幾か無對、幾か有漏、幾か無漏、幾か有爲。幾か無爲、幾か有報、幾か無報、幾か善、幾か不善、幾か有記、幾か無記なる」と說くが如し。是の如き等は是れを阿毘曇と名く。復次に七使とは欲染使、瞋恚使、有愛使、憍慢使、無明使、見使、疑使なり。是の七使は、幾か欲界繫、幾か色界繫、幾か無色界繫、幾か見諦斷、幾か思惟斷、幾か見苦斷、幾か見集斷、幾か見盡斷、幾か見道斷、幾か遍使、幾か不遍使なる。十智とは、法智、比智、世智、他心智、苦智、集智、滅智、盡智、無生智なり。是の十智は、幾か有漏、幾か無漏、幾か有爲、幾か無爲、幾か有漏緣、幾か無漏緣、幾か有爲緣、幾か無爲緣、幾か欲界緣、幾か色界緣、幾か無色界緣、幾か不繫緣、幾か無礙道の中に修し、幾か解脫道の中に修する、四果を得るの時は、幾か得、幾か失なる。是の如き等の一切の法を分別するをも、亦た阿毘曇と名く。阿毘曇を三種と爲す。一には阿毘曇の身及び義。略して三十二萬言を說く。二には六分。略して三十二萬言を說く。三には蜫勒。略して三十二萬言を說く。蜫勒は廣く諸事を比べて、類を以て相從ふ。阿毘曇には非ず。略して「是の如く我聞けり、一時」の總義を說き竟んぬ。

初品第四……「婆伽婆」釋論

【經】 婆伽婆

【論】 今當に說くべし。釋して曰はく、云何なるを[五三]婆伽婆と名くるや。

婆伽婆とは婆伽を德と言ひ、婆を有と言ふ、是を有德と名く。

復次に、婆伽を分別と名け、婆を巧と名く。巧に諸法の總相別相を分別するが故に婆伽婆と名く。

復次に、婆伽を名聲と名け、婆を有と名く、是を有名聲と名く。名聲を得ることは、佛に如く者あること無し。[五四]轉輪聖王、[五五]釋梵護世者も佛に及ぶこと有ること無し、何に況んや諸餘の凡庶をや。

【五三】 婆伽婆(Bhagavat)。

【五四】 轉輪聖王(Cakravarti-rāja)。三十二相を具し、天より輪寶を受けて四天下を領す。

【五五】 釋梵護世者、帝釋と梵天、世の佛法を護持する者なるが故に。

に佛、諸の比丘に告げたまはく、諸有の五怖・五罪・五怨を除かず滅せざれば、是の因緣の故に此の生の中に、身心は無量の苦を受け、復た後世には惡道の中に墮す。諸有の此の五怖・五罪・五怨なくんば、是の因緣の故に、今生に於て、種種身心に樂を受け、後世には天上の樂處に生ず。何等の五怖にして應に遠ざかるべきや。一には殺、二には盜、三には邪婬、四には妄語、五には飲酒なり」と。是の如き等を名けて、阿毘曇藏と爲す。三法藏を集め竟れり。諸天・鬼神・諸龍・天女、種種に供養し、天の華香・幢蓋・天衣を雨らす。法に供養するが故なり。是に於いて偈を説かく、

『世界を憐愍するが故に、三藏を集結し畢る。十力の一切智にして、説くところの智は無明の燈なり。』

問うて曰く [四五]八犍度阿毘曇、[四六]六分阿毘曇等は、何處より出づるや。

答へて曰く、佛、世に在す時は法に違錯なし。佛滅度の後、初めて法を集むる時も亦た佛在すときの如し。佛後百年にして、[四七]阿輸迦王は、[四八]般闍于瑟大會を作す、諸の大法師の論議異るが故に別部の名字あり。是より以來展轉して、姓を迦旃延とする婆羅門道人に至る、智慧利根にして、盡く三藏内外の經書を讀み、佛法を解せんと欲するが故に發智經八犍度を作る、初品は是れ世間第一の法なり。後諸の弟子等、後人の盡く八犍度を解すること能はざるが爲の故に [四九]鞞婆沙を作る。有人の言く、「六分阿毘曇の中第三分八品の分別世處分と名くるは、〔此れは是れ樓炭經。六分中の第三分を作す。〕是れ目揵連の作、六分の中の初分の八品四品は是れ [五〇]婆須蜜菩薩の作、四品は是れ [五一]罽賓阿羅漢の作、餘の五分は是れ諸の論議師の作る所なり」と。有人の言く、「佛の在す時は舍利弗、佛語を解するが故に阿毘曇を作り、後に犢子道人等讀誦せり。乃ち今に至るまで、名けて舍利弗阿毘曇と爲す。摩訶迦旃延は、佛の在す時、佛語を解して [五二]蜫勒〔蜫勒、秦に篋藏と云ふ。〕を作れり、乃ち今に至るまで南天竺に行はる。皆是れ廣く佛語を解するが故なり、(たとへば)五戒は幾か有色、

【四五】 八犍度阿毘曇、犍度(Skandha) 聚と譯す。論・律中の篇章の名である。雜、結使、智、行、大、根、定、見の八犍度に分れたる論。
【四六】 六分阿毘曇。六足論の意なり。
【四七】 阿輸迦王 (Asoka)。孔雀王朝の黃金時代を現出せる護法の王。阿育王である。
【四八】 般闍于瑟大會(Pañcavarsika)。無遮會と譯す。五年毎に設むる大齋會にして、何人をも拒まざる故に無遮と云ふ。
【四九】 鞞婆沙(Vibhāṣā)。經論の義を廣解廣說せるもの、阿毘曇大毘婆沙論、鞞婆沙論、五事毘婆沙論等の如し。
【五〇】 婆須蜜(Vasumitra)。世友尊者。
【五一】 罽賓(Kasmira)。北印度の地名。
【五二】 蜫勒。現存せず。此論によりて存在を知る。「廣く諸事を比べて類を知る。一廣く名目集論のと云ふから、其、名目集論のやうなものであつたことが知られる。天台の四教四門には藏教四門の中、第三に當り、亦有亦空を說くと云つてゐる。

是の故に當に方便して、三界を出づるを求むべし。諸の善根を勤集するに、涅槃は最も樂となす。』

爾の時に、長老阿泥盧豆は偈を說いて言く、

『咄、世間は無常なり、水月芭蕉の如し。功德は三界に滿つるも、無常の風に壞せらる。』

爾の時に、大迦葉は復た此の偈を說く、

『無常の力は甚だ大なり。愚・智・貧・富・貴、道を得たるものも、及び未だ得ざるものも、一切能く免るること無し。巧言・妙寶にあらず、欺誑・力諍にあらず、火の萬物を燒くが如し、無常の相は法爾なり。』

大迦葉、阿難に語るらく、「轉法輪經より大般涅槃に至るまで、集めて四阿含と作し、增一阿含、中阿含、長阿含、相應阿含、是を修妬路(しゆどら)法藏と名く」と。諸の阿羅漢、更に問ふ、「誰か能く明了に毘尼法藏を集めん」と。皆言く、「長老憂婆離は五百の阿羅漢の中に於て、持律第一なり。我等いま請せん」と。卽ち請して言く、「起つて師子座に就て處坐して說けよ。佛何處に在して、初めて毘尼結戒を說きたまひしや」と。憂婆離は僧の教を受けて、師子座に處坐して說けり、「是の如く我聞けり。一時、佛、毘舍離に在しき。爾の時に[四二]須提那迦蘭陀長者の子、初めて婬欲を作す。是の因縁を以ての故に、初めて大罪を結び二百五十戒の義を議して、三部と七法と八法と比丘尼の毘尼增一とを作りたまへり」と。憂婆離は雜部・善部を問ひ、是の如き等の[四三]八十部の毘尼藏を作れり。諸の阿羅漢等、復た更に思惟すらく、「誰か能く明了に阿毘曇藏を集めん」と。念言すらく、「長老阿難は五百の阿羅漢の中に於て、修妬路の義を解すること第一なり、我等いま請せん」と。卽ち請して言く、「起つて師子座に就て處坐せよ、佛何の處に在してか初めて阿毘曇を說きたまひしや」と。阿難は僧の教を受け、師子座に處坐して說かく、「是の如く我聞けり。一時、佛、[四四]舍婆提城に在しき。爾の時

【四二】 須提那迦蘭陀。Sudinna-Kalandaputra 毘舍離郊外の迦蘭陀村の人、佛の說法を聽いて出家せんとす、父母許さず、斷食して之を求めしより逆に之を許す。後、父母種々に方便して還俗せしめんとすれども果さず。遂に妻を伴いて教團に至り、家のために子を殘さんことを求む。之に隨いて Bijaka と云ふ子を作す。佛之を知りて大いに叱しはじめて婬戒を制す。

【四三】 八十部毘尼藏、憂波利が八十番にわたりて誦出したる根本律藏、八十誦律とも云ふ。四分律五分律はこれより分立したるものなり、現存せず。

【四四】 舍婆提城 (Śrāvastī) 憍梵羅國の首都にして舍衞城のこと。

汝の本座に復せよ。」と。　是の時に僧復た議して言く、「憍梵鉢提は已に滅度を取れり。更に誰あつてか能く經藏を結集せん」と。長老阿泥盧豆言く、「是の長老阿難は佛弟子に於いて、常に佛に侍近し、經を聞いて能く持ち、佛、常に嘆譽したまへり。是の阿難は能く經藏を結集せん」と。是の時長老大迦葉阿難の頭を摩でゝ言く、「佛、汝に囑累して法藏を持たしむ。汝應に佛恩を報ずべし。佛は何れの處に在して、最初に法を說きたまひしや。佛の諸の大弟子の能く法藏を守護せん者は皆以て滅度せり。唯、汝一人在り、汝、今應に佛の心に隨つて衆生を憐愍するが故に佛の法藏を集むべし」と。是の時阿難は僧を禮し已つて師子床に坐す。時に大迦葉は此の偈を說いて言く、

『佛は聖師子王なり、阿難は是れ佛子なり、師子座に處坐せり、衆を觀るに佛あること無し。是の如きの大德衆も佛なければ威神を失す。空に月なき時の如し、[四〇]宿有つて而も嚴ならず。汝の大智人の說を、汝、佛子よ。當に演ぶべし。何の處にてか佛は初めて說きたまひしや、今汝、當に布現すべし。』

是の時に、長老阿難は一心に合手し、佛涅槃の方に向つて、是の如く說いて言く、

『佛初めて法を說きたまひし時、爾の時に我は見ず、是の如く展轉して聞けり。

佛は、波羅奈に在して、佛は五比丘の爲に、初めて甘露門を開き、四眞諦の法なる、苦集滅道諦を說きたまへり。

阿若憍陳如は、最初に見道を得、八萬の諸天衆は、皆亦た道跡に入れり。』

是の千の阿羅漢は是の語を聞き已りて、虛空に上昇すること高さ七[四一]多羅樹、皆な言く、「咄。無常の力は大なり。我等が如きは、眼のあたり佛の說法を見たるも、今は乃ち我聞けりと言ふ」と。便ち偈を說いて言く、

『我は佛の身相を見たり、猶ほ紫金山の如くなりき。妙相・衆德滅し、唯だ名のみ獨り存する有り。

【四〇】宿。星座。この「宿有つて而も嚴ならず」は異本には、「虛空、明淨ならず」とあり。

【四一】多羅樹。Tala 高竦樹、西域記によれば、極高なるもの七八十尺、果は大石榴の如し。

相を觀ず」と。憍梵鉢提言く、「斷じ難きの愛を已に斷じて、憂愁なし」と。憍梵鉢提言く、「我、離欲の大師を失ふ。是の尸利沙樹園の中に於いて住して亦た何の爲す所ぞ。我が和上・大師は、皆已に滅度せり。我、今復た閻浮提に下ること能はず、此に住して般涅槃せん」と。是の言を說き已つて禪定の中に入り、踊つて虛空に在りて、身に光明を放ち、又水火を出し、手をもて日月を摩で、種種の神變を現はし、心より火を出して身を燒き、身中より水を出して四道に流下して、大迦葉の所に至る。水中に聲あり、此の偈を說いて言く、

『憍梵鉢提、妙衆第一の大德僧に稽首して禮したてまつる。佛の滅度を聞いて我は隨つて去る。
大象去つて象子の隨ふが如し。』

爾の時に下座の比丘は衣鉢を持して僧に還る。　是の時の中間に、阿難は諸法を思惟し、殘漏を盡さんことを求む。其の夜、坐禪經行して、慇懃に道を求む。是の阿難は智慧多くして定力少し、是の故に卽ち道を得ず。定と智と等しき者は乃ち速かに得べし。後夜過ぎんとして、疲極まりて偃息し、却き臥して枕に就く。頭未だ枕に至らずして廓然として得悟す。電光出で、闇者の道を見るが如し。阿難は是の如くして、金剛定に入り、一切諸の煩惱の山を破り、三明・六通・共解脫を得、大力の阿羅漢と作る。卽夜に僧堂の門に到り、門を敲いて而して喚ぶ。大迦葉問うて言く「門を敲く者は誰ぞ。」答へて言く、「我は是れ阿難。」大迦葉言く、「汝、何を以てか來る。」阿難言く、「我、今夜諸の漏を盡すことを得たり。」大迦葉言く、「汝が與に門を開かず、汝門の鑰孔の中より來れ。」阿難答へて言く、「爾すべし」と。卽ち神力を以て門の鑰孔の中より入りて、僧の足を禮拜して懺悔す。「大迦葉よ復た責めらるゝこと莫れ。」大迦葉は手づから阿難の頭を摩でゝ言く、「我故らに汝が爲にし、汝をして道を得せしむ。汝嫌ひ恨むること無れ。我も亦た是の如し。汝が自證を以て譬ふるに、手づから虛空に畫いて染著する所なきが如し。阿羅漢の心も亦た是の如く一切の法中に著する所なきことを得、

く語り竟つて、便ち自ら門を閉づ。爾の時に諸の阿羅漢は議して言く、「誰か能く毘尼法藏を結集する者ぞ」と。長老阿泥盧豆言く、「舍利弗は是れ第二の佛にして、好き弟子あり、*憍梵波提と字く。柔軟和雅にして常に閑居に處り、心は寂宴に住し、能く毘尼法藏を知れり。今天上の[三九]尸利沙樹園の中に在つて住す、使を遣はして請し來らん」と。大迦葉は下座の比丘に語るらく、「汝次で僧使たるべし。」下坐の比丘言く、「僧に何の使かある。」大迦葉言く、「僧使として、汝、天上の尸利沙樹園の中、憍梵鉢提阿羅漢の住處に至れ」と。是の比丘は歡喜し踊躍して僧の勅命を受け、大迦葉に白して言く、「我、憍梵鉢提阿羅漢の所に到り何事をか陳說せん」と。大迦葉言く、「到り已つて憍梵鉢提に語れ、大迦葉等の漏盡の阿羅漢、皆な閻浮提に會し、僧に大法事あり、汝、疾に是に來る可し」と。下座の比丘は頭面に僧を禮し、右に遶ること三匝し、金翅鳥の如く虚空に飛騰し、憍梵鉢提の所に往き到り頭面に禮を作し、憍梵鉢提に語つて言く、「軟善の大德、少欲知足にして常に禪定に在り、大迦葉、問訊して語あり、今、僧に大法事あり、疾く下り來りて衆寶の聚れるを觀る可し」と。是の時に憍梵鉢提は心覺に疑ひを生じ、是の比丘に語つて言く、「僧は鬪諍の事なきに我を喚んで來らしめんとするか。破僧の者有ること無きや不や。佛日の滅度せるや。」と。是の比丘の言く、「實に言ふ所の如し、大師、佛は已に滅度したまへり」と。憍梵鉢提言く、「佛の滅度太だ疾かなり。世間の眼は滅せり。能く佛を逐ふ轉法輪の將たる我が和上、舍利弗は今何所にか在る」と。答へて曰く、「先に涅槃に入れり。」憍梵鉢提言く、「大師、法將、各自に別離せり、當に奈何かすべき。摩訶目迦連は今何所に在りや。」是の比丘の言く、「是も亦た滅度せり。」憍梵鉢提言く、「佛法散ぜんとす。大人過ぎ去る。衆生愍むべし。」問ふ、「長老阿難は今何の作す所かある。」此の比丘の言く、「長老阿難は、佛の滅度の後、憂愁啼哭迷悶して自ら喩ふること能はず。」憍梵鉢提言はく、「阿難の懊惱は愛結あるに由る、別離して苦を生ず、羅睺羅は復た云何」と。答へて言はく、「羅睺羅は阿羅漢を得るが故に、憂なく愁なく但諸法無常の

※割註あり。「秦に牛呞と言ふ」と。

【三九】尸利沙樹園(Śimśapā-vana)。

く、我、水を須ゐんと。汝は供給せず、是れ汝が突吉羅罪なり」と。阿難答へて言く、「是の時に五百乘の車、流を截つて渡り、水をして渾濁ならしむ、是れを以ての故に取らざりき」と。大迦葉復た言く、「正に水をして濁らしむとも、佛には大神力あり、能く大海の濁水をして淸淨ならしめたまふ。汝、何を以てか與へざりしか、是れ汝が罪なり。汝去つて突吉羅の懺悔を作せ」と。大迦葉復た言はく、「佛汝に問ひたまはく、若し人ありて、[三七]四神足を好修せば、壽住すること一劫なるべく、若くは減ずること一劫なる可し」と。佛は四神足を好修したまひ、壽住すること一劫、若くは減ずること一劫ならんことを欲したまふに、汝は默然として答へず。汝に問ひたまふこと三たびに至るも汝は故らに默然たりき。汝、若し佛に答へなば、佛は四神足を好修して、應に住すること一劫、若くは減ずること一劫なるべし。汝に由るが故に佛世尊をして、早く涅槃に入らしむ。是れ汝が突吉羅罪なり」と。阿難言く、「魔、我が心を蔽ふ、是の故に言無かりき。我、惡心にして、佛に答へざるに非ず」と。大迦葉、復た言く、「汝、佛の與めに僧伽梨衣を疊むに、足を以つて上を蹈めり。是れ汝が突吉羅罪なり」と。阿難言く、「爾時に大風の起るあつて、人の助なし、我衣を捉ふる時、風吹き來つて我が脚下に墮つ、恭敬せざるが故に佛衣を蹈むには非ず」と。大迦葉復た言く、「[三八]佛の陰藏の相を般涅槃の後、以つて女人に示す、是れ何れも耻づべきなり。是れ汝が突吉羅罪なり」と。阿難言く、「爾の時に我思惟す、若し諸の女人、佛の陰藏の相を見ば、便ち自ら女人の形を羞耻して、男子の身を得んと欲し、佛相を修行し、福德の根を種ゑんと。是を以ての故に我れ女人に示せり、耻無くして故らに破戒を爲さず」と。大迦葉言く、「汝に六種の突吉羅罪あり。盡く應に僧中にて悔過すべし」と。阿難言く、「諾。長老大迦葉及び僧の敎ふる所に隨はん」と。是の時、阿難、長跪合手し、偏へに右の肩を袒ぬぎ、革屣を脫ぎ、六種の突吉羅罪を懺悔す。大迦葉は僧中に於て、手づから阿難を牽きて出し、阿難に語つて言く、「汝、漏を斷じ盡し、然る後、來入せよ、殘結いまだ盡さずんば、汝來ること勿れ」と。是の如

くは Mahāprajāpati)。摩訶波闍波提、と云ふ。佛母摩耶夫人の妹にして、夫人死後、その跡に嫁りて淨飯王の妃となり、幼き釋尊を我子の如く養育す、卽ち釋尊の叔母なると共に養母なり　後に至りて出家して佛陀敎團に入らん事を求む。釋尊その恩愛を想ふて遂に之を許す、比丘尼敎團の初めなり。此際釋尊の從弟たる阿難も同じく懇請せるよりこの批難あり。

【三五】四部衆。佛弟子に出家の男女として比丘、比丘尼、在家の男女として優婆塞、優婆夷あるを指す。

【三六】溫多羅僧（Uttarāsanga）。七條の袈裟。上衣と譯す。

【三七】四神足。四如意足のこと、三十七品の修行の中四正勤に次て修するもの、欲、精進、心・思惟の四なり。

【三八】陰藏。陰部の意味、佛陀のは腹中に藏まりて現はれざること馬の陰部の如く、故に馬陰藏と云ふ。三十二大人相の一である。

答へて曰く、[二九]頻婆娑羅王は道を得、八萬四千の官屬も亦た各道を得たり。是の時に王は宮中に敎勅し、常に飯食を設けて千人を供食す。[三〇]阿闍世王も是の法を斷ぜず。爾の時に大迦葉は思惟して言く、「若し我等常に乞食せば、當に外道有りて、强來し、難問して、法事を廢闕すべし。今、王舍城は常に飯食を設けて千人を供給す。是の中に住して經藏を結集すべし」と。是を以ての故に千人を選み取り、多く取ることを得ず。

是の時に大迦葉は千人と倶に、王舍城の[三一]耆闍崛山の中に到り、阿闍世王に告げて語らく、「我等の食を給し、日日に送り來たせよ。今我等經藏を結集せんとして他行することを得ず」と。是の中に[三二]夏安居すること三月、初の十五日說戒の時に和合僧を集む。大迦葉、禪定に入り、天眼を以て今是の衆中、誰か未だ煩惱を盡さずして、應に逐ひ出さるべき者あるかを觀るに、唯だ阿難一人あつて盡さず。餘の九百九十九人は諸漏已に盡して淸淨無垢なり。大迦葉は、禪定より起つて衆の中より手づから阿難を牽き、出して言く、「今、淸淨衆の中にて經藏を結集す。汝は結未だ盡きず。此に住すべからず」と。是の時に、阿難は慚恥し悲泣して、自ら念言すらく、「我は二十五年、世尊に隨侍し、左右に供給せしも、未だ曾て是の如きの苦惱を得ず。佛は實に大德、慈悲にして含忍したまへり」と。念じ已つて大迦葉に白して言さく、「我は能く力あり、久しく道を得べかりき。但だ、諸佛の法に、阿羅漢なる者は左右に供給して使令することを得ず、是を以ての故に我は殘結を留めて盡く斷ぜざるのみ」と。大迦葉の言く、「汝は更に罪あり。佛は意に、女人の出家を聽すことを欲したまはざりき。汝殷勤に勸請せしかば、佛、聽して道と爲せり。是を以ての故に佛の正法は五百歲にして衰微せん、是れ汝が[三三]突吉羅罪なり」と。阿難言く「我は[三四]瞿曇彌を憐愍せり。又三世の諸佛の法には、皆[三五]四部の衆あり。我が釋迦文佛のみ、云何んぞ獨り無らんや」と。大迦葉は復た言く、「佛、涅槃せんと欲する時、倶夷那竭城に近づきて背痛み[三六]漚多羅僧を四つに疊みて敷いて臥したまひ、汝に語つて言は

【二九】頻婆娑羅王(Bimbisāra)。佛在世の摩竭陀國王、王子阿闍世による悲劇の主として有名。

【三〇】阿闍世王(Ajātasatru)。この時は既に王となりて歸佛せる時代なり。

【三一】耆闍崛山(Gṛdhrakūṭa)。摩竭陀の首都王舍城外の小山、佛陀屢ここに止住す。

【三二】夏安居(Varṣa)雨期三ヶ月、比丘等は一所に止住して、禪定修學に務む。

【三三】突吉羅罪(Duṣkṛta)。犯戒の罪名。四分律には、惡作惡說と譯す。二百五十戒中百を占むる少罪。

【三四】瞿曇彌(Gautami)害し

く、「我今、云何にしてか、是の三阿僧祇劫に得難き佛法をして、而も久しく住することを得せしめん」と。是の如く思惟し竟つて「我、是の法の久しく住せしむべきを知る。當さに修妬路[二三]・阿毘曇[二四]・毘尼[二五]を結集し三の法藏を作るべし。是の如くせば佛法は久しく住することを得べく、未來世の人、受行することを得べし。所以いかんとなれば、佛は世世に勤苦して、衆生を慈愍したまふが故に、是の法を學得し、人の爲に演說したまふを以てなり。我曹も亦た應に佛の教を承け用ひ、宣揚し、開化すべし」と。是の時に大迦葉は是の語を作し竟つて、須彌山の頂に住し、銅の犍稚[二六]を撾ち、此の偈を說いて言く、

『佛の諸の弟子、若し佛を念はば、當に佛恩を報ずべし、涅槃に入ることなかれ。』

是の犍稚の音と大迦葉の語聲とは、遍ねく三千大千世界に至り、皆悉く聞き知り、諸有ゆる弟子の神力を得たる者は、皆來つて大迦葉の所に集會せり。爾時に大迦葉は、諸の會者に告げて、「佛法滅せんとす、佛は三阿僧祇劫より種種に勤苦し、衆生を慈愍して、是の法を學得したまへり。佛、般涅槃し已るや。諸の弟子にして法を知り、法を持し、法を誦する者も、皆亦た佛に隨つて滅度せり。法は今や滅せんとす。未來の衆生は、甚だ憐愍すべし。智慧の眼を失ひ、愚癡盲冥ならん。佛は大慈悲を以て、衆生を愍み傷みたまへり。我曹は當さに佛の教を承け用ひ、須らく經藏を結集し竟るを待つて、意に隨つて滅度すべし」と。諸の來れる衆會は、皆な教を受けて住す。爾の時に大迦葉は、千人を選び得て、阿難を除去せり。盡く皆な阿羅漢にして、六神通を得、共解脫・無礙解脫[二七]を得、悉く三明[二八]を得、禪定は自在にして、能く逆順に諸の三昧を行じて皆な悉く無礙なり、三藏を誦讀し、內外の經書を知り、諸の外道家の十八種の大經は、盡く亦た讀み知り、皆な能く論議して異學を降伏せり。

問うて曰く、是時に是の如き等の無數の阿羅漢あるに、何を以てか正に千人のみを選取して、多く取らざるや。

【二三】修妬路、Sūtra 修多羅とも書く、經典。佛說を結集したる書。

【二四】阿毘曇 Abhidharma 論。佛弟子等の著作。

【二五】毘尼 (Vinaya)。佛の說ける戒律の經典。

【二六】犍稚 (Ghaṇṭā)。衆人を集めるために、叩きて知らす器。

【二七】共解脫・無礙解脫。羅漢の階位に三あり。三種の四念處を修するによりて分る。性念處を修して、慧解脫。共念處を修して共解脫。緣念處を修して無礙解脫を得。

【二八】三明。羅漢となりて獲得するもの、宿命明、天眼明、漏盡明、されば六通の中の三である。

無餘滅の涅槃に入らん。』

諸の大阿羅漢は各各意に隨つて、諸の山林・流泉・谿谷の處處に於て、身を捨てて般涅槃す。更に諸の阿羅漢あつて、虛空の中に於て飛騰して去ること、譬へば鴈王の如く、種種の神力を現じ、衆の人心をして信淸淨ならしめ、然して後般涅槃す。[三〇]六欲天、乃至、[三一]遍淨天等は諸の阿羅漢の皆滅度を取るを見て、各心に念言すらく、「佛日既に沒し、種種の禪定・解脫・智慧ある弟子の光も、亦滅せり。是の諸の衆生には、種種の婬・怒・癡の病あり。是の法藥師の輩は今疾かに滅度せり、誰か當に治せんとする者ぞ。無量の智慧の大海の中に生じたる弟子の蓮華は今已に乾き枯れ、法樹は摧折し、法雲は散滅し、大智の象王は既に逝き、象子も亦隨つて去り、法の商人は過ぎ去れり、誰に從つてか法寶を求めん」と。偈に說くが如し。

『佛、已に永寂して涅槃に入りたまひ、諸の結を滅せるの衆も亦た過ぎ去れり。世界は是の如く
　空うして智なく、癡冥は遂増して、智燈は滅せり。』

爾時に、諸天は摩訶迦葉の足を禮し、偈を說いて言く、

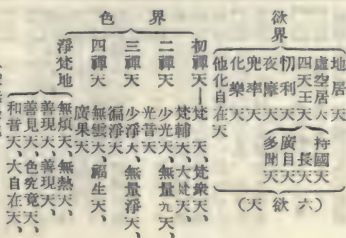
『[三二]耆年は欲と恚と慢とを已に除き、其形は譬へば紫金の柱の如し。
　上下端嚴、妙にして比なく、目は明にして淸淨なること蓮華の如し。』

是の如く讃じ已つて、大迦葉に白して言く「大德迦葉よ、仁者知らずや、法船は破れんとし、法城は頽れんとし、法海は竭きんとし、法幢は倒れんとし、法燈は滅せんとし、說法の人は去らんとす。行道の人は漸やく少なく、惡人の力は轉た盛なり。當に大慈を以て佛法を建立すべし」と。爾時に大迦葉は、心、大海の澄靜にして動かざるが如く、良久うして答ふ「汝等善く說けり、實に言ふ所の如し。世間は久しからずして、無智盲冥ならん」と。是に於て大迦葉は默然として請を受く。爾時に諸天は大迦葉の足を禮し、忽然として現ぜず、各自ら還去せり。是の時に大迦葉は思惟すら

【三〇】六欲天。欲界にある六重の天を指すのである。この種の三界の層位は後にも屢〻出てくるから、ここで圖示しておく。

三界の略解は卷一註を參照、

【三一】遍淨天。色界第三禪天の一、前註參照。

【三二】耆年、長老の意。

般涅槃の時にも、亦た敎へて是の語を稱せしむるを以ての故なり。今我が般涅槃の後にも、經の初に亦た應に「是の如く我聞けり、一時」と稱すべし』と。是の故に當に知るべし、是れ佛の敎ふる所にして、佛自ら是の如く我聞けり」と言ふには非ず。佛は一切智人、自然無師なるが故に、我聞けりと言ふべからず。若し佛自ら「是の如く我聞けり」と說きて、知らざる所ありとせば此の難あるべし。阿難、佛に問ひたてまつるに、佛、是の語を敎へたまふ。是れ弟子の言ふ所にして、「是の如く我聞けり」に答あることなし。

復た次に、佛法をして久しく世間に住せしめんと欲するが故に、長老摩訶迦葉等の諸の阿羅漢、阿難に問ふ、「佛は初めに何れの處にて說法し、何等の法をか說きたまひしや」と。阿難答ふ、「是の如く我聞けり。一時、佛、[一一]波羅奈國の[一二]仙人鹿林の中に在して、五比丘の爲に、是の苦聖諦を說きたまふ。我は本より他從り聞かず、法中に正憶念して、眼智明覺を得たり」と。是の經は是の中に應に廣說すべし。集法經の中に廣說するが如くんば、佛涅槃に入りたまふ時、地は六種に動き、諸河反流し、疾風暴發し、黑雲四もに起り、惡雷・掣電・雹雨驟りに墮ち、處處に星流れ、師子惡獸、哮吼喚呼し、諸天世人、皆大に號咷し、諸天人等、皆是の言を發す。「佛、涅槃を取りたまふこと、何ぞ一に疾なるや。世間の眼滅せり」と。是の時間に當つて、一切の草木・藥樹・華葉は、一時に剖裂し、諸の須彌山王は盡く皆傾搖し、海水に波揚り、地は大に震動し、山崖は崩落し、諸樹は摧折し、四面に烟起つて甚大だ畏る可く、陂池・江河は盡く皆嬈れ濁り、慧星晝出で、諸人啼哭し、諸天憂愁し、諸の天女等は郁咿哽咽して涕涙交も流れ、諸の學人等は默然として樂まず、諸の無學の人は有爲の諸法は一切無常なるを念ず、是の如く、[一三]天・人・[一四]夜叉・[一五]羅刹・[一六]揵闥婆・[一七]甄陀羅・[一八]摩睺羅伽及び、[一九]諸龍等皆大に憂愁せり。諸の阿羅漢は、老病死海を度りて、心に念じて言く、

『已に凡夫の恩愛の河を渡り、老病死の劵は已に裂破せり。身を見るに、篋中の四大蛇なり、今、

【一一】波羅奈。市名(Bārāṇasī)、Gaṅgā 河の北岸、Barāṇa 河と Asi 河とに挾まる地域。

【一二】仙人鹿林(Mṛgadāva)。鹿野苑といふ。佛の初轉法輪の地。

【一三】天 (Deva)。提婆、六趣の一にして、人間以上の勝妙の果報を受けたるもの、須彌山上と虛空の中に住む。

【一四】夜叉 (Yakṣa)。空中に飛騰し、地行の諸羅刹を擁め、人を傷害し、時に噉ふ。

【一五】羅刹(Rākṣasa)。惡鬼。

【一六】揵闥婆(Gandharva)。香陰と譯す。樂神にして帝釋に侍して俗樂をなす。

【一七】甄陀羅(Kiṃnara)、緊那羅とも書く。樂神にして帝釋に侍して法樂をなす。

【一八】摩睺羅伽 (Mahoraga)。地龍である。

【一九】龍 Nāga 水屬の王。以上七種の異類の中、羅刹を除き、これに阿修羅、迦樓羅の二を加えて、八部衆と云ふ。

を出すことなし。是の如く、佛を除いては實語を出すこと無し。』

復次に「是の如く我聞けり」とは、是れ阿難等の佛の大弟子の輩の說なり。佛の法相に入るが故に名けて佛法と爲す。佛、般涅槃の時の如きは[五]倶夷那竭國、薩羅雙樹の間に於て、北首にして臥し、將に涅槃に入らんとす。爾の時に阿難は、親屬の愛未だ除かず、未だ欲を離れざるが故に、心憂海に沒して、自ら出ること能はず。爾の時に長老、[六]阿尼盧豆は阿難に語るらく「汝は佛の法藏を守る人なり。凡人の如く自ら憂海に沒すべからず。一切有爲の法は、是れ無常の相なり。汝、愁憂すること莫れ。又、佛は手づから汝に法を付したまふ。汝今愁悶せば、受くる所の事を失はん。汝當に佛に問ひたてまつるべし。佛の般涅槃の後、我曹は云何にしてか道を行ぜん。誰をか當に師と作すべき。惡口の車匿[七]と云何が共に住せん。佛經の初首には何等の語をか作さん、是の如き種種の未來の事を應に佛に問ひたてまつるべし」と。阿難は是の事を聞いて、悶心少しく醒め、道力の助を念ずることを得て、佛の末後の臥床の邊に於いて、此の事を以て佛に問ひたてまつれり。佛、阿難に告げたまはく、『若くは今現前に、若くは我が過去の後には、自らに依止し、法に依止して、餘に依止せざれ、云何に比丘は自らに依止し。法に依止して、餘に依止せざるや。是に於いて比丘は內身を觀じ、常に一心に智慧もて勤修精進して、世間の貪愛を除くべし。外身內外身の觀も亦是の如く、[八]受・心・法念處も亦復た是の如し。是を比丘の自に依止し、法に依止して、餘に依止せずと名く。今日より解脫戒經は、卽ち是れ大師なり。解脫戒經に說くが如く、身業、口業は應に是の如く行ずべし。車匿比丘は我が涅槃の後には、[九]梵法の如く治せよ。若し心濡伏せば、應に刪陀迦旃延經を敎ふべし。卽ち得道すべし。復た次に我れ[一〇]三阿僧祇劫に集むる所の法藏は、是の藏の初に應に是の說を作すべし。「是の如く我聞けり。一時、佛、某方、某國土、某處の林中に在して」と。何となれば過去の諸佛の經の初に、皆な是の語を稱したまひ、未來の諸佛の經の初にも亦た是の語を稱すべく、現在の諸佛の末後、

【五】 倶尸那竭國(Kuśinagara)。

【六】 阿尼盧豆(Aniruddha)。伽濉羅衞城の刹帝利種、甘露飯王の子。釋尊の從弟にして弟子天眼第一。阿那律などとも書く。

【七】 車匿(Chandaka)。もと釋迦族の奴隷の子。佛初めて歸城の時出家す、其故を以て高慢に流れて比丘等を輕侮す、佛涅槃の時、悉檀罪に處せらる。

【八】 この身、受、心、法は既註の四念處を云ふ。

【九】 梵法(Brahmadaṇḍa)。梵壇と云ひ、默擯と譯す。教團の中で誰も相手となつて話をしてやらぬ罰である。

【一〇】 阿僧祇劫(Asaṁkhyeya-kalpa)。無數長時と譯す。三阿僧祇劫は菩薩が成佛するまでの修行年時を示す。菩薩の階位し五十位あり、初四十位は第一阿僧祇劫。初地より七地まで第二、八地より十地まで第三十地を終えて佛となる。

卷の第二

初品第三……總說「如是我聞」

「是の如く我聞けり一時」を、今當に總說すべし。

問うて曰く、若し諸佛は[一]一切智人、自然無師にして、他の教に隨はず、他の法を受けず、他の道を用ゐず、他從り聞いて而して法を說かずんば何を以てか「是の如く我聞けり」と言ふや。

答へて曰く、汝が言ふ所の如く、佛は一切智人、自然無師にして、他從り法を聞いて而して說くべからず。佛法は但だに佛口の說なるのみに非ず。是れ一切世間の眞實の善語にして、微妙の好語は、皆佛法の中より出づ、佛の毘尼の中に說きたまふが如し。「何者か是れ佛法なるや。佛法に五種人の說あり。一には佛自らの口說、二には佛弟子の說、三には仙人の說、四には諸天の說、五には化人の說なり」と。

復次に釋提桓因得道經の如し。「佛、憍尸迦に告げたまはく、世間の眞實の善語、微妙の好語は、皆我が法より出づ」と。讃佛偈の中に說くが如し。

『諸の世の善語は、皆佛法より出づ。善く說いて失なく過なきは佛語なり。餘處に善にして過なきの語ありと雖も、一切皆是れ佛法の餘なり。諸の外道の中に、設ひ好語あるも蟲の木を食つて、偶ゝ字を成すを得たるが如く、初中下の法、自ら共に相破る。鐵より金を出すが如し、誰か當に信ずべき。

[二]伊蘭の中の[三]牛頭栴檀の如く、苦種の中の甘善なる美果の如く、設ひ能く信ずとも、是の人は則ち信ぜん。「外の經書の中より、自ら好語を出せるのみ」と。

諸の好き實語は、皆な佛より出づ。[四]栴檀香の摩梨山より出づるが如し。摩梨山を除いては栴檀

【一】一切智人(Sarvajña)。薩婆若。

【二】伊蘭(Erāvaṇa)樹名。花美しけれど、惡臭甚しく四十里に及ぶ。

【三】牛頭栴檀(Gośirṣaka-Candana)香樹の名。牛頭山より出づる栴檀。

【四】摩梨山(Malaya)。南印にありて、白檀香樹、栴檀樹を產す。

問うて曰く、過去時と未來時とは現在相の中の行に非ず。過去時は過去世の中の行、未來世は未來時の中の行なり。是を以ての故に各各の法の相に時あり。

答へて曰く、若し過去、復た過去せば則ち過去の相を破す。若し過去、過去せずんば、則ち過去の相無し。何を以ての故に、自相、捨するが故なり。未來世も亦是の如し。是を以ての故に時法は實ならず。云何んぞ能く天地好醜、及び華果等の諸物を生ぜんや。是の如き等の種種に邪見を除くが故に、迦羅の時を說かずして、三摩耶を說く。陰・界・入の生滅を見て、假名して時と爲す、別の時あることなし。所謂、方時・離合・一異・長短等の名字の出でて、凡人は心に著して、是を實有の法と謂ふ、是を以ての故に世界の名字・語言の法を除棄す。

問うて曰く、若し時無くんば、云何なれば時食を聽し、非時食を遮して是れ戒なりとするや。

答へて曰く、我先に已に世界の名字の法には「時」有るも、實法に非ざることを說けり、汝難ずべからず。亦た是の毘尼の中に戒法を結ぶは、是れ世界の中の實にして、第一實法の相に非ず。吾我の法相は實に不可得なるが故に。亦た衆人嗔呵の爲めの故に、亦た佛法を護りて久しく存せしめんと欲して、弟子の禮法を定むるが故に、三界の世尊は諸戒を結びたまふ。是の中に、「何の實か有る。何の名字等か有る。何者か相應し。何者か相應せざる。何者か是法にして、如是の相なる。何者か是法にして、如是の相ならざるや。」と。求むべからず。是を以ての故に、是の事は難ずべからず。

問うて曰く、[七〇] 若し時食・時藥・時衣も皆是れ柯邏に非ずとせば、何を以てか三摩耶を說かざるや。

答へて曰く、此は毘尼の中に說にして、白衣は聞くことを得ず。外道は何に由て聞くことを得て、而も邪見を生ぜんや。餘經は通じて皆聞くことを得、是の故に三摩耶と說いて、其をして邪見を生ぜざらしむ。三摩耶は詭名なり、時も亦是れ假名の稱なり。又佛法の中には多く三摩耶を說きて、少しく柯邏を說く、少きが故に難ずべからず。「如是我聞一時」の五語の各各の義略して說き竟んぬ。

【七〇】時食等は律では迦羅（柯邏も同じ）を用ひてゐるから、此問がある。

は下る。』

更に人有りて言く、「天地の好醜一切の物は、時の所作に非ずと雖も、然も時は是れ變ぜず。因は是れ實有なれども時法は細なるが故に、見るべからず、知るべからず。華實等の果を以ての故に、時あるを知るべし。往年・今年・久・近・遲・疾、この相を見れば、時を見ずと雖も、時あることを知るべし。何となれば、果を見て因あるを知るを以ての故なり。是を以ての故に、時法あり、時法は壞せざるが故に常なり」と。

答へて曰く、泥丸の如きは是れ現在時、土塵は是れ過去時、瓶は是れ未來時なり。時相は常なるが故に、過去時は、未來時と作らず。汝の經書法にては、時は是一物なり。是を以ての故に過去世は未來世と作らず、亦た現在世と作らず、雜の過となるが故に、過去世の中に亦未來世無し。是を以ての故に未來世無し。現在世も亦是の如し。

問うて曰く、汝、過去の土塵を受くるの時、若し過去時有りとせば、必ず應に未來時有るべし。是を以ての故に實に時法有り。

答へて曰く、汝は我が先に說くを聞かず、未來世は瓶、過去世は塵土なり。未來世は過去世と作らず、未來世の相の中に墮せば、是れ未來世の相の時なり、云何んぞ過去時と名けん。是を以ての故に過去時も亦無し。

問うて曰く、何を以ての故に時無きや、必ず時有るべし。現在には現在の相有り、過去には過去の相有り、未來には未來の相有り。

答へて曰く、若し一切三世の時に自相あらしむれば、盡く是れ現在世にして、過去未來の時無かるべし。若し今未來有りとすれば、未來と名けず。應に現在と名くべし、是を以ての故に是の語は然らず。

非ず。若し瓶と一と合して瓶を一と名づくるとせば、今一と瓶とは合す。何を以てか一と名づけて瓶と爲さざるや。是の故に瓶は一と異なると言ふを得ず。

問ふ。一の數合するが故に瓶を一と爲すと雖も、然も一は瓶と作らず。

答へて曰く、諸數の初は一なり。一と瓶とは異なれり。是れを以ての故に瓶は一と作らず。一無きが故に多も亦無し。何となれば先は一にして後は多なるを以ての故なり。是の如く、異の中の一も亦た不可得なり。是を以ての故に二門の中に、一法を求むるも不可得なり。不可得の故に、云何んぞ陰・界・入に攝せん。但だ佛弟子は、俗に隨つて語言して、名けて一心と爲せども、實には著せずして數法、名字有るを知るなり。是を以ての故に佛法の中に一人・一師・一時と言ふも、邪見の咎に墮せず。略して「一」を說き竟んぬ。

「時」とは今當に說くべし。

問うて曰く、天竺に時の名を說くに二種あり。一には[六八]迦羅と名け、二には[六九]三摩耶と名く。佛は何を以てか迦羅と言はずして、而も三摩耶と言ひしや。

答へて曰く、若し迦羅と言はば倶に亦た疑あり。

問うて曰く、經は說き易きが故に應に迦羅と言ふべし。迦羅は二字にして、三摩耶は三字なり、重語は難なるが故なり。

答へて曰く、邪見を除くが故に三摩耶と說いて、迦羅と言はず。

復次に、人有りて言く、「一切天地の好醜、皆時を以て因と爲す」と。時經の中の偈に說くが如し。

『時來れば衆生熟し、時至れば則ち催促す。時は能く人を覺悟せしむ、是の故に時を因と爲す。
世界は車輪の如く、時の變ずることは輪の轉ずるが如し。人も亦車輪の如く、或は上り而も或

【六八】迦羅(Kāla)。實時と譯す、律に說く時食、時藥、時衣等は實に其時があるとす。
【六九】三摩耶(Samaya)。假時と譯す、經中に說く一時とか一日乃至一劫とかは假に云ふ時故に三摩耶である。

名を一と爲す。若し實に一法無くんば、何を以ての故に一物の中には、一心を生じて、二に非ず三に非ざるや。二物の中には二心を生じて、一に非ず三に非ざるや。三物の中には三心を生じて、二に非ず一に非ざるや。若し實に諸の數無くんば、一物の中に應に二心を生ずべく、二物の中に應に一心を生ずべし。是の如き等、三四五六も皆爾なり。是を以ての故に定んで知りぬ、「一物の中には一法あり、是の法和合するが故に、一物の中には一心を生ず」と。

答へて曰く、若くは一と物とは一なりとし、若くは一と物とは異なるとせば、この二は倶に過あり。

問うて曰く、若し一ならば、何の過ありや。

答へて曰く、若し一瓶は、是れ一の義ならば、[六七]因提梨釋迦の如きも亦是れ一の義なり。若し爾りとせば、在在に一あれば、處處皆是れ瓶なるべし。譬へば在在に因提梨あれば、亦處處に釋迦ある(べき)が如し。今(然りとせば)衣等の諸物も、皆應に是れ瓶と一なるべし、瓶と一なるが故に。是の如くんば、處處の一は皆是れ瓶なるべし。瓶衣等の如きも、悉く是れ一物にして分別有ること無ければなり。

復次に、一は是れ數法なれば、瓶も亦應に是れ數法なるべし。瓶の體に五法あれば一も亦五法あるべし。瓶は有色有體ならば、一も亦有色有體なるべし。若し在在の一を名けて瓶と爲さずんば、今瓶は一なるべからず。若し一を說かば瓶を攝せず。若し瓶を說かば亦一を攝せず。瓶と一と異ならざるが故に、又復た一を說かんと欲せば、瓶を說くべく、瓶を說かんと欲せば、一を說くべし。是の如ければ則ち錯亂せん。

問うて曰く、一(とすること)の中の過是の如しとせば、異(とすること)の中に何の咎かある。

答へて曰く、若し一と瓶と異ならば、瓶は則ち一に非ず。若し瓶と一と異ならば、一は則ち瓶に

【六七】因提梨釋迦。帝釋のこと、既註、釋提桓因參照。

ことを得ず。何を以ての故に、耳根には覺無きが故に、聲を聞くべからず。識は亦た無色・無對・無處なるが故に亦た聲を聞くべからず。聲には覺無く亦根無きが故に聲を知ること能はず。爾時(そのとき)に耳根破れず、[六三]聲は可聞の處に至り、意は聞かんと欲し、情と塵と意と和合するが故に耳識生ず。耳識に隨つて卽ち意識生じて、能く種種の因緣を分別し、聲を聞くことを得るなり。是を以ての故に是の難を作すべからず。[六四]聲を聞くと雖も、佛法の中には亦た一法として、能作・能見・能知あること無し。偈に說くが如し。

『業あり亦た果あるも、業果を作す者無し、此れ第一甚深なり、是の法は佛能く見たまふ。空なりと雖も亦た斷ならず、相續すれども亦た常ならず、罪福も亦た失せず、是の如きの法は佛說なり』。

略して「聞」を說き竟んぬ。

「一」とは今當に說くべし。

問うて曰く、佛法の中に數時等の法は實無なり。[六五]陰・入・界の攝せざる所なるが故なり、何を以てか一時と言ふや。

答へて曰く、世俗に隨ふが故に一時ありと(いふ)も咎あること無し。畫・泥・木等もて、天像を作るが如し。天を念ずるが故に、禮拜して咎なし。一時と說くも亦是の如し。實には一時無しと雖も、俗に隨つて一時と說くに咎なし。

問うて曰く、一時無かるべからず。佛、自ら說て言く、「一人世間を出づれば、多人樂を得。是者は何人ぞや。佛世尊なり」と。亦偈に說くが如し。

『我が行は師保無く　志一にして等侶無し、一行を積んで佛を得、自然に聖道に通ず。』

是の如き等、佛は處處に一を說きたまふ。應に一有るべし。　復次に[六六]一法和合する故に、物の

【六三】別本には「聲は可聞の處に在り、聞かんと欲して、是の事を憶も情と塵と憶と和合する故に耳識生ず。」とあり。

【六四】大正藏本に「誰か聲を聞くと」あり。別本にはこの一句を缺く。別本また「持」となす。

【六五】陰・入・界。五陰(衆)十二入、(處)十八界の略、既詑。

【六六】法。「もの」の意味。

に隨ふが故に我を說いて、咎有ること無し。

復次に、若し人無吾我の相に著して、「是は實にして餘は妄語なり」と言はゞ、是の人應に難ずべし。「汝が一切の法の實相は無我なり、云何なれば是の如く我聞けり」と言ふや」と。（然し）今諸の佛弟子は、一切法は空にして所有なければ、是の中に心著せず、亦た諸法の實相に著すとも言はず、何に況んや無我の法の中に心著せんや。是を以ての故に應に難じて、「何を以てか我を說く」と言ふべからず。中論の中の偈に說くが如し。

※『若し空ぜざる所あらば、應當に空ずる所あるべし。不空尙ほ得ず、何に況んや空を得んや。

凡人は不空を見、亦復た空をも見る、見と無見とを見ずんば、是を實に涅槃と名く。不二安穩の門なり。

能く諸の邪見を破り、諸佛の所行の處なり、是を無我の法と名く。』

略して我の義を說き竟んぬ。

「聞く」とは今當に說くべし。

問うて曰く、聞くとは云何、聞くは耳根を用ゐて聞くや。耳識を用ゐて聞くや。意識を用ゐて聞くや。若し耳根もて聞くとせば、耳根は覺知無きが故に聞くべからず。若し耳識もて聞くとせば、耳識は一念の故に分別すること能はず、亦た聞くべからず。若し意識もて聞くとせば、意識も亦た聞くこと能はず、何となれば、先づ五識が[六〇]五塵を[六一]識りて、然して後に意識は識るを以てなり。意識は現在の五塵を識る能はず、唯だ過去未來の五塵をのみ識る。若し意識能く現在の五塵を識るとせば、盲聾の人も亦た應に聲色を識るべし。何となれば意識破れざるを以ての故なり。

答へて曰く、[六二]耳根能く聲を聞くに非ず、亦た耳識にも非ず、亦た意識にも非ず。能く聲を聞き得るの事は、多くの因緣和合するに從るが故に、聲を聞くことを得るなり。一法の能く聲を聞くと言ふ

※觀行品、第八偈に相應す。

【六〇】五識。眼、耳、鼻、舌、身の五感意識。
【六一】五塵。五識の對象、色、聲、香、味、觸。
【六二】根。感覺機關。

復次に、我が法は眞實にして、餘法は妄語なり、我が法は第一にして、餘法は不實なりとする、是を鬪諍の本と爲す。今「是の如く」の義は、人に無諍の法を示す。他の所說を聞くに、說人に咎無し、是を以ての故に、諸の佛經の初に「是の如く」と稱ふ。略して「是の如く」の義を說き竟んぬ。

「我」とは今當に說くべし。

問うて曰く、若し佛法の中に、「一切法は空なり、一切は吾我あること無し」と言はゞ、云何なれば佛經の初頭に「是の如く我聞く」と言ふや。

答へて曰く、佛弟子の輩は、無我を知ると雖も、俗法に隨つて我を說く、實我には非ざるなり。譬へば金錢を以て銅錢を買ふも、人の笑ふ者なきが如し。何となれば賣買の法は、應に爾るべきを以ての故なり。我と言ふも亦た是の如し、無我の法中に於て而も我を說くは、世俗に隨ふが故なり、難ずべからず。天問經の中の偈に說くが如し。

『羅漢比丘ありて、諸漏已に永く盡くに、最後邊の身に於て、能く吾我を言ふや不や。』

佛、答へて曰はく、

『羅漢比丘ありて、諸漏已に永く盡くに、最後邊の身に於て、能く吾我ありと言ふ。』

世界法の中に我を說くは第一實義の中にて說くには非ず、是を以ての故に、諸法は空にして無我なれども、世界法の故に我を說くと雖も咎無し。

復次に、世界の語言に三の根本あり。一には、邪見、二には慢、三には名字なり。是の中二種は不淨にして、一種は淨なり。一切の凡人には三種の語あり、邪と慢と名字となり。[五九]見道の學人には二種の語あり、慢と名字となり。諸の聖人は、一種の語あるのみ、名字なり。內心は實法に違はずと雖も、而も世界の人に隨ふが故に、共に是の語を傳ふ。世界の邪見を除くが故に、俗に隨ふて諍無し。是を以ての故に二種の不淨の語本を除き、世に隨ふが故に、一種の語を用ふ。佛弟子は、俗

【五九】見道學人。三道の一、初めて無漏智を生じて眞諦を照見する位。

信を大力と爲す。

復次に、一切の諸の外道の出家は心に念へり、「我が法は微妙第一淸淨なり」と。是の如きの人は自ら所行の法を歎じ、他人の法を毀呰す。是の故に現世には相打ち鬪諍し、後世には地獄に墮して、種種無量の苦を受く。偈に說くが如し。

『自法の愛染の故に、他人の法を呰毀せば、持戒の行人と雖も、地獄の苦を脫せず。』

是の佛法の中には、一切の愛、一切の見、一切の吾我の憍慢を棄捨し、悉く斷じて著せず。栰喩經に言ふが如し。「汝曹若し我が栰喩の法を解せば、是時は善法をも應に棄捨すべし、何に況んや不善の法をや」と。佛は自ら般若波羅蜜に於て、念ぜず猗らず、何に況んや餘法に猗著することあらんや。是を以ての故に佛法の初頭に、「是の如く」と稱ふ。佛意是の如し。吾が弟子は法を愛する無く、法に染する無く、朋黨無く、但だ離苦解脫のみを求めて、諸法の相を戯論せず。」と。阿他婆耆經に說くが如し。摩犍提の難偈に言はく、

『決定の諸法の中に、橫まゝに種種の想を生じ、悉く內外を捨つるが故に、云何にしてか當に道を得べき。』

佛、答へて曰く。

「見聞知覺に非ず、持戒の所得にも非ず、亦た不見聞にも非ず、不持戒の得にも非ず。是の如きの論は悉く捨て、亦た我と我所とをも捨て、諸法の相を取らず、是の如くんば道を得べし。』

摩犍提、問うて曰く、

『若し見聞等ならず、持戒の所得にも非ず、亦た不見聞等に非ず、不持戒の得にも非ずとせば、
我が心の觀察する如くんば、啞法を持つてこそ道を得ん。』

佛、答へて曰はく、

『汝は邪見の門に依る、我は汝が癡道を知る。汝妄想を見ざれば、爾時に自ら當に啞すべし。』

『我今甘露味の門を開く、若し信有る者は歡喜を得ん。諸人の中に於て妙法を說くは、他を惱ますが故に而も說くには非ず。』

佛は此の偈の中に、布施する人は歡喜を得と說かず。亦た多聞、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の人は歡喜することを得と說かず、「獨り信ずる人は」と說きたまふ。佛意是の如し。我が第一甚深の法は微妙・無量・無數・不可思議・不動・不猗・不著・無所得の法にして、一切智人に非ずんば則ち解すること能はず。是故に佛法の中には信力を初と爲す。信力は能く入る。布施・持戒・禪定・智慧等の能く初めて佛法に入るに非ず。偈を說いて言ふが如し。

『世間の人は心動じて、福の果報を愛好し、而も福の因を好まず、有を求めて滅を求めず。先きに邪見の法を聞きて、心著して而も深く入れり。我が此の甚深の法は、信なくして云何んぞ解せん。』

提婆達の大弟子、[五八]倶迦離等の如きは、法を信ずること無きが故に惡道の中に墮す。是の人は佛法に於いて信無くして、自ら智慧を以て求むれども得ること能はざりき。何となれば佛法は甚深なるを以ての故なり。梵天王の、倶迦離を敎へて偈を說けるが如し。

『無量の法を量(はか)らんと欲すれども、智者も量らざる所なり。無量の法を量らんと欲せば、此の人は自ら覆沒せん。』

復次に、「是の如く」の義とは、若し人、心善にして直信ならば、是の人は法を聽くべし。若し是の相無くんば則ち解せず。說く所の偈の如し。

『聽く者、端視して渴するものの飲むが如く、一心に語義の中に入り、踊躍して法を聞きて心悲喜す、是の如きの人には應に爲に說くべし。』

復次に、「是の如く」の義は佛法の初に在り。現世の利と後世の利と、涅槃の利と、諸利の根本は、

【五八】倶迦離(Kokālika)。論十三に、舍利弗目連を誣告するの記事あり。提婆達と共に釋尊敎團を去る。墮獄すと傳へらる。

所あり。信無きは手無きが如し。手無き人は寶山中に入るに、則ち所取あること能はず。信無きも亦是の如し。佛法の寶山に入つて、都て所得無し。佛言はく、「若し人信あれば、是人は能く我が大法海の中に入り、能く沙門の果を得て、空しからず。頭を剃り、袈裟を染むるも、若し信無くんば、是の人は我が法海の中に入ること能はず。枯樹が華實を生ぜざるが如く、沙門の果を得ず。頭を剃り、衣を染め、種種の經を讀み、能く難じ、能く答ふと雖も、佛法の中に於て、空うして所得なけん」と。是を以ての故に「是の如く」の義は佛法の初に在り、善く信ずるの相なるが故なり。

復次に、佛法は深遠なり。更に佛ありて乃ち能く知りたまふのみ。人に信ある者は未だ作佛せずと雖も、信力を以ての故に能く佛法に入る。梵天王の佛の初めて法輪を轉ずるを請ふが如し。偈を以て請うて曰く、

『閻浮提は、先に多く諸の不淨の法を出せり、願はくは甘露の門を開いて、當に淸淨の道を說きたまへ。』

佛、偈を以て答へたまはく、

『我が法は甚だ得難し、能く諸の結使と[五七]三有に愛著する心を斷ずれども、是の人は解すること能はず。』

梵天王、佛に白さく、「大德、世界の中の智に上中下あり、善濡直心の者は得度すべきこと易し。是の人若し法を聞かざれば、諸の惡難の中に退墮せん。譬へば水中の蓮華に生あり、熟あり、水中より未だ出でざる者あるに、若し日光を得ずんば、則ち開くこと能はざるが如し。佛も亦た是の如し、佛は大慈悲を以て、衆生を憐愍するが故に偈に法を說きたまふ」と。佛、過去未來現在を念ふに、「三世諸佛の法、皆衆生を度し、偈に法を說く。我も亦應に爾るべし」と。是の如く思惟し竟つて、梵天王等の諸天を請を受け、法を說きたまふ。爾の時、世尊偈を以て答へて曰はく。

【五七】三有。欲界、色界、無色界。凡夫の存在を受ける世界はこの三で總括される。一、欲界は、食・婬の二欲を有するものの住所で、上は六欲天から中は人間、下は地獄に及ぶ。二、色界、二欲を離れたものの住所で、物的に更に勝れている。三、無色界、ここには物的なもの（色）は無く、ただ心識によつて深き禪定を味ひつつあるものである。この各界には諸種の層位がある。第二卷註參照。

復次に、餘經の中に、佛は五衆の無常、苦、空、無我の相を說きたまふ。今この五衆に於て異なる法門を說かんと欲するが故に、般若波羅蜜經を說きたまふ。[五六] 佛、須菩提に告げたまふが如く、菩薩若し色は是れ常なりと觀じて行ずれば、般若波羅蜜を行ぜず、受想行識は是れ常として行ずれば般若波羅蜜を行ぜず、色は無常として行ずれば般若波羅蜜を行ぜず、受想行識は無常として行ずれば、般若波羅蜜を行ぜず。五受衆、五道、是の如き等の種種の五法門も亦是の如く、餘の六七八等、乃至無量の法門も亦是の如し。摩訶般若波羅蜜は無量無邊なるが如く、般若波羅蜜の因緣を說くことも、亦無量無邊なり。是の事廣きが故に、今は略して摩訶般若波羅蜜の因緣起法を說き竟んぬ。

初品第二……「如是我聞一時」

【經】 是の如く我聞けり、一時。

【論】 問うて曰く、諸の佛經は何を以ての故に、初に「是の如く」の語を稱ふるや。

答へて曰く、佛法の大海は信を能入と爲し、智を能度と爲す。「是の如く」の義は、即ち是れ信なり。若し人心中に信の清淨なる有らば、是の人は能く佛法に入る。若し信無くんば、是の人は佛法に入ること能はず。不信とは、是の事は是の如くならずと言ふ、是れ不信の相なり。信とは是の事是の如しと言ふ。譬へば牛皮の未だ柔らかならざれば、屈折すべからざるが如く、信無きの人も亦是の如し。譬へば牛皮の已に柔らかなれば、用に隨つて作るべきが如く、信有るの人も亦た是の如し。

復次に、經中に、信を說いて手の如しとなす。人は手有れば、寶山の中に入りて、自在に寶を取るが如し。信有るも亦是の如し。佛法の無漏の根力、覺道、禪定の寶山の中に入りて、自在に取る

【五六】 經の行相品參照。

今無諍處を明さんと欲するが故に、般若波羅蜜經を說きたまふ。有相・無相、有物・無物、有依・無依、有對・無對、有上・無上、世界・非世界、(是の如き等の二種の法門)亦是の如し。

問うて曰く、佛は大慈悲心なり、但應に無諍の法のみを說くべし、何を以てか諍法を說きたまふや。

答へて曰く、無諍の法は皆是無相、常寂滅にして說くべからず。今布施等及び無常・苦・空等の諸法を說くは、皆寂滅無戲論の爲の故に說く。利根の者は佛意を知つて諍を起さず。鈍根の者は、佛意を知らずして、相を取り、心に著するが故に、諍を起す。此の般若波羅蜜は、諸法畢竟空なるが故に諍處無し。若し畢竟空にして、得べく諍ふべくんば、畢竟空と名けず。[51]畢竟空とは有無の二事皆滅するが故なり。是の故に般若波羅蜜經を無諍處と名く。

復次に、餘經の中には多く三種の門を以て諸法を說けり。所謂、善門、不善門、無記門なり。今非善門、非不善門、非無記門の諸の法相を說かんと欲するが故に、摩訶般若波羅蜜經を說きたまふ。學法と無學法と非學非無學法、見諦斷法と思惟斷法と無斷法、可見有對と不可見有對と不可見無對、上と中と下の法、小と大と無量の法、是の如き等の三法門も亦是の如し。

復次に、餘經の中には、[52]四念處を說くに聲聞法に隨ふ。是に於て比丘內身の三十六物を觀じ、欲貪の病を除く。是の如く外身を觀じ、內外身を觀ず。今、四念處に於て異なる門を以て、般若波羅蜜經を說かんと欲す。所說の如く、菩薩は內身を觀ずるに、身に於て覺觀を生ぜず身を得せず。無所得なるを以ての故なればなり。是の如く外身を觀じ、內外身を觀ずるに、身に於て覺觀を生ぜず、身を得せず、無所得なるを以ての故なればなり。身念處の中に於て、身を觀じて而も身の覺觀を生ぜざるは、是の事甚だ難し。三念處も亦是の如し。[53]四正勤、[54]四如意足、[55]四禪、四諦等の種種の四法門も亦是の如し。

【五一】大正藏には「畢竟空とは……が故なり」を脫し、「……無諍處と名く」の次に「有無の二事皆寂滅する故に」とあり。別本によりて是を譯す。

【五二】四念處。新譯に四念住と云ふ。小乘にては五停心觀の後に四念處觀を修す。身念處、受命處、心念處、法念處、これである。即ち、身を不淨と、受を苦と、心を無常と、諸法を無常と觀ずるのである。

【五三】四正勤。四念處に次て修するもの、一に已生の惡を、二に未生の惡を除斷するため、に、三に未生の善を生ぜしめ、四に已生の善を增長せしむるためのそれぞれの精進。

【五四】四如意足。四神足とも云ふ。四正勤に次く行法で四種の禪定である論十九に、欲、精進、心、思惟を擧げてゐる、參照。

【五五】四禪。初禪より第四禪に至る、これを修して色界の四禪天に生る。

受けずと言ひて、今是の見を受くと言ふや、此れは是れ現前の妄語なり。是の麁なる負處門は多くの人の知る所なり。第二の負處門は細なり、我之を受けんと欲す、そは多くの人の知らざるを以ての故に』と。是の念を作し已つて、佛に答へて言さく、「瞿曇よ、〔我〕一切法を受けず、(といふ)是の見も亦受けず」と。佛、梵志に語りたまはく、「汝一切の法を受けず、(といふ)是の見も亦受けずんば、則ち受くる所なく、衆人と異ること無し。何ぞ貢高を用ゐて、而して憍慢を生ずること是の如くなる」と。長爪梵志答ふることを得ること能はず、自ら負處に墮すと知つて、卽ち佛の一切智の中に於て、恭敬を起し、信心を生じ、自ら思惟すらく、「我負處に墮せども、世尊は我が負を彰はさず、是非を言はず、以て意と爲したまはず。佛心は柔輭なり、第一清淨にして一切語論の處滅して、大甚深の法を得。是れ恭敬すべき處、心淨第一なり。佛は法を說き、其の邪見を斷ずるが故に」と。卽ち坐處に於て、塵を遠ざけ垢を離るゝことを得、諸法の中に法眼淨を得たり。時に舍利弗は、是の語を聞いて、阿羅漢を得。是の長爪梵志は出家して沙門と作り、大力の阿羅漢を得たり。若し長爪梵志、般若波羅蜜の氣分の四句を離れたる、第一義相應の法を聞かずんば小信すら尙得ず、何に況んや出家の道果を得んや。佛は是の如き等の大論議師利根の人を導引せんと欲するが故に、是の般若波羅蜜經を說きたまへり。

復次に、諸佛の二種の說法あり。一には人心の隨つて度す可きものを觀、二には諸法の相を觀る。今、佛は諸法實相を說かんと欲するが故に、是の摩訶般若波羅蜜經を說きたまふ。相不相品の中に說くが如し。諸天子、佛に問ふ、「是の般若波羅蜜は甚深なり、云何なる相を作すや」と。佛、諸天子に告げたまはく、「空則ち是れ相なり。無相無作の相、無生滅の相、無行の相、常不生如性の相、寂滅の相等なり」と。

復次に、二種の說法あり。一には諍處、二には不諍處なり。諍處は、餘經の中に已に說くが如し。

す。是の人は種種の經書の智慧力を以て、種種に、是は法、是は非法、是は應、是は不應、是は實、是は不實、是は有、是は無なりと譏刺して、他の論議を破すること、譬へば大力の狂象の搪揬蹴蹋して、能く制する者無きが如し。是の如く長爪梵志は論議の力を以て、諸論師を摧伏し已りて、還つて摩伽陀國の、王舍城の那羅聚落に至り、本生處に至つて、人に問うて曰く、「我が姉の生める子は、今何の處に在るや」と。人有り語つて言く、「汝が姉の子は、適ま生れて八歲にして、一切の經書を讀み盡し、年十六に至つて、論議一切の人に勝る。釋種の道人にして、姓は瞿曇なるものあるに、與へて弟子と作す」と。長爪之を聞き、卽ち憍慢を起し、不信の心を生じ、而して是の言を作さく、「我が姉の子の如きは、聰明なること是の如し。彼何の術を以てか誘誑して、頭を剃つて弟子と作す」と。是の語を說き已つて直に佛所に向ふ。爾時に舍利弗初めて受戒して半月なりしが、佛邊に侍立して、扇を以て佛を扇げり。長爪梵志、佛を見て、問訊し訖つて、一面に坐し、是念を作さく、「一切の論は破すべく、一切の語は壞すべく、一切の執は轉ずべし。是中に何者か是れ諸法の實相、何者か是れ第一義なる。何れの性か、何れの相にして顚倒せざる。是の如く思惟すること、譬へば大海水の中に、其の涯底を盡くさんと欲するが如く。之を求むると既に久しけれども、一法も實に以て心に入るべきものを得ず。彼何なる論議の道を以てか、而も我が姉の子を得たる」と。是の思惟を作し已つて、而して佛に語つて言く、「瞿曇よ、我は一切の法は受けず」と。佛、長爪に問ふ、『汝は「一切法は受けず」とゆふ。是の見をば受くるや不や。佛の質す所の義は、汝已に邪見の毒を飲み。今是の毒氣を出して、一切法は受けずと言ふ。是の見を汝受くるや不やと(云ふことなり)』と。爾時に長爪梵志は、好馬の鞭影を見て卽ち覺り。便ち正道に著くが如く、長爪梵志も亦是の如く、佛語の鞭影心に入るを得て、卽ち貢高を棄捐し、慚愧低頭して、是の如く思惟す。『佛、我を置いて[五〇]二處負門の中に著く、若し我是の見を我受くと說かば、是の負處門は麁なるが故に多くの人知らん、「云何なれば自ら一切法は

【五〇】二處負門。所謂、ディレンマである。

し。

「語言盡く竟り、心行亦訖む、不生不滅にして、法は涅槃の如し。

諸の行處を說くを、世界法と名け、不行處を說くを、第一義と名く。

一切は實、一切は非實、及び、一切は實にして亦非實、一切は非實にして非不實なり、是を諸法

實相と名く。』

是の如き等は處處に經の中に說く、第一義悉檀は是の義甚深にして、見難く解し難し。佛は是の義を說かんと欲するが故に、摩訶般若波羅蜜經を說きたまふ。

復次に、長爪梵志等の大論議師をして、佛法の中に於て、信を生ぜしめんと欲するが故に、是の摩訶般若波羅蜜經を說きたまふ。梵志あり、號して長爪と名く。更に[四三]先尼、[四四]婆蹉衢多羅と名づくる有り。更に[四五]薩遮迦、[四六]摩犍提等と名づくるあり。是れ等[四七]閻浮提の大論議師の輩言はく、「一切の論は破すべく、一切の語は壞すべし、一切の執は轉ずべし。故に、實法の信ず可く、恭敬すべきもの有ること無し」と。舍利弗本末經中に說くが如し。舍利弗の舅[四八]摩訶俱絺羅は、姊の舍利と論議して如かず。俱絺羅思惟して念言すらく、「姊の力に非ざるなり。必ず智人を懷み、言を母の口に寄するなり。未だ生ぜざるに乃ち爾なり。生じて長大に及ばゞ、當に如何にしてか之に如かん」と。思惟し已つて、憍慢の心に生じ、廣く論議せんが爲めの故に、出家して梵志と作り、南天竺國に入り、始めて經書を讀む。諸人問うて言く、「汝の志、何を求め、何の經をか學習する」と。長爪答へて言はく、「[四九]十八種の大經、盡く之を讀まんと欲す」と。諸人語つて言く、「汝の壽命を盡すとも、猶ほ一をも知る能はず、何に況んや能く盡さんや」と。長爪自ら念ずらく、「昔は憍慢を作して姊の爲に勝たれ、今此の諸人復た輕辱せらる」と。是の二事の爲の故に、自ら誓を作して言く、「我、爪を翦らずして、要らず十八種の經を讀み盡さん」と。人、爪の長きを見て、因て號して長爪梵志と爲

【四三】　先尼（Seniya）。勝軍梵志と云ふ。初め、犬戒行者にて、後に佛弟子となる。

【四四】　婆蹉衢多羅（Vaccha-gotta）。論三十七に婆蹉梵士として出づ、また犢子梵志とも書かる。王舍城附近の外道の大論師。

【四五】　薩遮加（Saccaka-Nigaṇṭhaputta）。論二十六に出づる薩遮祇尼乾子。論九十に出づる薩遮尼乾は何れも同一人なり。毘舍離に住せる高名な尼乾子外道。

【四六】　摩犍提子（Māgandiya）。論三に出づる摩犍提梵士は同一人である。初め遊行者にて拘留にて釋尊を聳滯と罵れる事ありしが、後に比丘となり阿羅漢となる。

【四七】　閻浮提（Jambudvipa）。印度の別名。

【四八】　摩訶俱絺羅（Mahākoṭṭhila）。記して大膝と云ふ。この場合には長爪 Dīrghanakha）と同一人となつてをる。

【四九】　十八種の大經。又は十八明處とも云ふ。印度に於ける一切の重要學術書にして、四吠陀と、六論（六吠陀分）と八論（四論と四小吠陀）とである。

他法を受けず、知らず取らされば、是れ無智の人なりとせば、[三七]若し爾りとせば一切論義の人は皆無智なるべし。何となれば各各、法を相ひ受けざるを以ての故なり。所謂、人有つて自ら謂はん、「自らの法は第一義にして淨なり、餘人の法は妄語にして不淨なり」と。譬へば世間の治法の如し。刑罰殺戮種種不淨なれども、世間の人は信受して之を行じて以て眞淨と爲し、餘の出家善聖人の中に於ては、是れ最も不淨と爲す。外道の出家人の法の、五熱中に一脚にして立ち、髮を抜く等を、[三八]尼犍子の輩は以て妙慧となし、餘人は此を説いて癡法となす。是の如き等の種種の外道、出家、[三九]白衣、婆羅門の法は、各各自ら以て好と爲し、餘は皆妄語とす。是の佛法中にも亦た[四〇]犢子比丘有り、四大和合して、眼法あるが如く、是の如く五衆和合して人法ありと説く。犢子[四一]阿毘曇の中に説かく、「五衆は人を離れず、人は五衆を離れず、五衆は是れ人なりとも、五衆を離れて是れ人ありとも説くべからず。人とは是れ第五の不可説法藏中に攝する所なり」と。説一切有の道人の輩の言く、「神人は、一切種、一切時、一切法門の中に求めて得べからず。譬へば兎角・龜毛の常に無なるが如し」と。

復次に、[四二]「十八界、十二入、五衆は實に有なり。而も此の中に人無し」と。更に佛法中の方廣道人の言ふあり、「一切法は、不生不滅、空にして所有無し。譬へば兎角・龜毛の常に無なるが如し」と。是の如き等の一切の論議師の輩は、自ら其法を守りて、餘法を受けず、此は是れ實なり、餘は妄語なりとす。若し自ら其法は受け、自法は供養し、自法は修行して、他法は受けず、供養せずんば。爲めに過失を作す。若し是を以て淸淨と爲し、第一義の利を得とせば、則ち一切は淸淨に非ざるなし。何となれば彼の一切は皆な自ら愛する法なるを以ての故なり。

問うて曰く、若し諸見は皆過失あらば、是の第一義悉檀は何なれば是なるや。

答へて曰く、一切語言の道を過ぎ、心行の處滅して、遍ねく所依無く、諸法を示さず、諸法實相は、初なく中なく後なく盡きず壞れず、是を第一義悉檀と名く。摩訶衍の義の偈の中に説くが如

【三七】若し爾りと……無智なるべし」は別本には「是の如くんば則ち諸有の戲論者は皆是れ無智人なるべし。」又は「諸の自執者は皆亦た是の如き無智人なるべし」とあり。

【三八】尼犍子（Nigaṇṭha Nātaputta）若しくは尼犍陀若提子とも書く。佛陀當時の新社會思想たる六師外道の隨一。後世佛教と相對せる强大なる教團となる。佛教より更に苦行的なるを以て知らるる所謂ヂヤイナ教祖。

【三九】白衣。在家の意味、俗人は白衣を着る故に。

【四〇】犢子（Vajjiputtiyā）。小乘の分派たる二十部の一である。上座部より分派したもの如くである。龍樹は舍利弗阿毘曇論がこの部の用ゆる論書としている。

【四一】阿毘曇（Abhidharma）。論書。

【四二】十八界、十二入、五衆。新譯では、五蘊、十二處十八界と云ふ。總じて三科と云ふ。凡夫の實我の迷執を打破せんために施設した有情の構成要素、十八界は、六根、六境六識十二入は六根六境、五衆は色受想行識。

等の相を名けて、對治悉檀と爲す。

云何なるを第一義悉檀と名くるや。一切の法性、一切の論議・語言、一切の是法・非法は、一一に分別し破散すべし。諸佛、辟支佛、阿羅漢の行ずる所の眞實の法は破ずべからず散ずべからす。上の三悉檀の中に於て通ぜざる所のものは、此中に皆通ず。

問うて曰く、云何に通ずる。

答へて曰く、謂ふところの通ずとは、一切の過失を離れ、變易すべからず、勝つべからざることなり。何となれば第一義悉檀を除いては、諸餘の論義、諸餘の悉檀は皆な破す可きを以ての故なり。衆義經の中に說く所の偈の如し。

『[三六]各各自ら見に依つて、戯論して諍競を起す。若し能く彼の非を知れば、是れ正見を知ると爲す。

他の法を受くるを肯ぜざるもの、是を愚癡の人と名く。是の論議を作す者は、眞に是れ愚癡の人なり。

若し自ら是とする法に依つて、而して諸の戯論を生じ、若し此は是れ淨智なりとせば、淨智に非ざる者なけん』。

此の三偈の中に於て、佛は第一義悉檀の相を說きたまふ。所謂世間の衆生は、自ら見に依り、自ら法に依り、自ら論議に依りて諍競を生ず。戯論は卽ち諍競の本なり。戯論は諸の見に依りて生ず。偈を說いて言ふが如し。

『受法あるが故に諸論あり、若し受あること無くんば、何の論ずる所かあらん。有受・無受の諸見等、是の人は此に於て悉く已に除けり』。

行者にして能く實の如く此を知る者は、一切の法と、一切の戯論に於て、受せず著せず見せず。是く實に諍競に共ぜざれば、能く佛法の甘露味を知らん。若し爾らざる者は、則ち法を謗ず。若し

【三六】別本には「各各自ら法に依て、戯論して諍競を起し、此を知るを實を知ると爲す、謗法を爲すを知らず、是れ則ち無智の人なり。諸有の戯論者は、悉く皆是れ無智なり」。として本文「是の論議を爲す者は」に續く。兩文對照して其意を知るべし。また別本に依れば此偈の中の「見」は悉く「法」となつてをる。印ち「各各自ら法に依て……是を正法を知ると爲す……若し自見の法に依つて……」。

是を名けて善對治の法と爲す。若し瞋恚貪欲を行ずる人の若きは、樂を求めんと欲し、他々惱まさんと欲す。此の人の中に於いては(因緣觀)は善に非ず、對治の法に非ず。不淨と慈心との思惟は、是の二人の中には、是れ善なり、是れ對治の法なり。何となれば是の二觀は、能く瞋恚と貪欲の毒刺を拔くが故を以てなり。　復次に、常に著する顚倒の衆生は、諸法の相似相續を知らず、是の如きの人、無常を觀ずること有るは是れ對治悉檀にして、第一義に非ず。何となれば一切諸法は、自性空なるが故なり。偈々說いて言ふが如し。

『無常を有常と見る、是を名けて顚倒と爲す。空の中には無常なし、何の處にか有常を見ん。』

問うて曰く、一切の有爲法は、皆な無常相なることは、應に是れ第一義なるべし。云何なれば無常は實に非ずと言ふや。所以いかんとなれば一切の有爲法は、生住滅の相にして、前は生、次は住、後は滅なるが故なり。云何なれば無常は實に非ずと言ふや。

答へて曰く、有爲法には三相あるべからず。何となれば三相は實ならざるを以ての故なり。若し諸法の生住滅、是れ有爲の相ならば、今の生の中にも、亦た三相あるべし、生は是れ有爲法なるが故なり。是の如く一一の處に亦た應に三相あるべしとせば、是れ則ち窮まることなかるべし。住と滅とも亦た是の如し。若し諸の生住滅、各更に生住滅有ること無くんば、有爲法と名づくべからず。何となれば有爲法の相は無となるを以てなり。是を以ての故に諸法無常は第一義〔悉檀〕に非ず。

復た次に、若し一切の實性無常ならば、則ち行業の報無けん。何となれば無常を生滅と名づくるの失あるを以ての故なり。譬へば腐れたる種子の果を生ぜざるが如し。是の如くんば則ち行業無し、行業無ければ、云何んぞ果報あらん。今一切賢聖の法に、果報あるは、善智の人の信受すべき所なり。無と云ふべからず。是を以ての故に諸法は無常性に非ず。是の如き等の無量の因緣あり、說いて諸法は無常性なりと言ふを得ず。「一切の有爲法は無常なり、苦・無我等も亦是の如し。」是の如き

觸者有りと說かず。是の如き等の相、是を各各爲人悉檀と名く。

云何なるを對治悉檀と名くるや。有法は對治する時には則ち有るも、實性は則ち無し。譬へば重熱せる膩・酢・鹹の藥草、飮食等の如きは、風病の中に於ては名けて藥と爲せども、餘病に於ては藥に非ず。輕冷なる甘・苦・澁の藥草・飮食等の若きは、熱病に於ては名けて藥となせども、餘病に於ては藥に非ず。輕き辛・苦・澁熱の藥草飮食等の若きは、冷病の中に於ては名けて藥と爲せども、餘病に於ては藥に非ず。佛法中の心病を治するも亦是の如し、不淨觀の思惟は、貪欲病の中に於ては、名けて善き對治の法と爲せども、瞋恚病の中に於ては、名けて善と爲さず、對治の法に非ず。所以いかんとなれば身の過失を觀ずるを不淨觀と名く、若し瞋恚の人、過失を觀れば、則ち瞋恚の火を增益する故を以てなり。慈心を思惟するは、瞋恚病の中に於ては名けて善き對治の法と爲せども、貪欲病の中に於ては名けて善と爲さず、對治の法に非ず。所以いかんとなれば慈心は衆生の中に於て好事を求め功德を觀ず、若し貪欲の人、好事を求め功德を觀ずれば、則ち貪欲を增益する故を以てなり。因緣觀の法は、愚癡病の中に於ては名けて善き對治の法と爲せども、貪欲瞋恚病の中に於ては、名けて善と爲さず、對治の法に非ず。所以いかんとなれば先に邪觀するの故に邪見を生ず、邪見は卽ち是れ愚癡なる故を以てなり。

問うて曰く、佛法中に十二因緣を說くこと甚深なり。佛、阿難に告げたまふが如し。「是の因緣の法は、甚深にして見難く、解し難く、覺り難く、觀じ難し。細心巧慧の人は乃ち能く解し。愚癡の人は、淺近の法に於ても猶尙解し難し、何に況んや、甚深の因緣をや」と。いま云何なれば愚癡の人は因緣の法を觀ずべしと言ふや。

答へて曰く、愚癡の人とは、牛羊等の如き愚癡を謂ふに非ず。是の人は實道を求めんと欲すれども、邪心觀の故に、種種の邪見を生ずるなれば、是の如き愚癡の人は、當に因緣を觀ずべきなり。

是の二夜の中間に說く所の經教は、一切皆實にして、顚倒にあらず」と。若し實に人無くんば、佛は云何ぞ「我れ天眼にして衆生を見る」と云ひたまふや。是の故に當に知るべし、人有りとは世界悉檀の故にして、是れ第一義悉檀に非ず。

問ふて曰く、第一義悉檀は是れ眞實なり。實なるが故に第一と名く、餘の者は應に實なるべからず。

答へて曰く、是の四悉檀は各々實有なり。如如、法性、實際は世界悉壇の故に無く、第一義悉檀の故に有り。人等も亦是の如し、世界悉檀の故にあり。第一義悉檀の故に無し。所以いかんとなれば、人は五衆の因緣有るが故に、是人等有り。譬へば乳の如し、色香味觸の因緣有るが故に是乳有り。若し乳にして實に無くんば、乳の因緣も亦た應に無かるべし。いま乳の因緣は實に有るが故に、乳も亦た應に有るべし。一人の第二頭、第三手の、因緣無くして假名ある如くなるには非ず。是の如き等の相を名けて、世界悉檀の相と爲す。

云何なるを各各爲人悉檀と名くるや。人の心行を觀じて、而して爲めに法を說くに、一事の中に於て、或は聽し、或は聽さず。經の中に說く所の如くんば。「雜報業の故に、世間に雜生し、雜觸、雜受を得」とあり。更に破群那經の中には「人觸を得ること無く、人受を得ること無し」と。說く有り。

問うて曰く、此の二經は云何に通ぜん。

答へて曰く、人有り、後世を疑ひ罪福を信ぜず、不善の行を作し、[三四]斷滅の見に墮するを以て、彼の疑ひを斷じて、彼が惡行を捨てしめんと欲し、彼が斷見を拔かんと欲す。是の故に、世間に雜生して、雜觸、雜受を得と說くなり。是の破群那は我有り、神有りと計し、[三五]計常の中に墮せり。破群那、佛に問うて言く、「大德よ、誰か受くる」と。若し佛にして、「某甲、某甲を受く」と說きたまはゞ、便ち計常の中に墮して、其の人は、我見、倍復す牢固にして、移轉すべからず。是を以ての故に受者・

【三四】斷滅の見。消極的否定的見解、即ち虛無主義。

【三五】計常。存在の常恒を信ずること。

般若波羅蜜は當に南方に至り、南方より西方に至るべく、後の五百歲中には、當に北方に至るべし。是の中に多く法を信ずる善男子善女人ありて、種種の華香、瓔珞、幢幡、伎樂、燈明、珍寶、財物を以て供養し、若くは自ら書き、若くは人に書くを教へ、若くは讀誦し、聽說し、正憶念し、修行して、法を以て供養せん。是の人は是の因緣を以ての故に、種種の世間の樂を受け、末後に三乘を得て、無餘涅槃に入らん」と。是の如き等、諸品の中の、因緣事を觀ずるが故に、般若波羅蜜經を說きたまへり。

復次に、佛は第一義[三一]悉檀の相を說かんと欲するが故に、是の般若波羅蜜經を說きたまふ。四種の悉檀あり、一には世界悉檀、二には各各爲人悉檀、三には對治悉檀、四には第一義悉檀なり。四悉檀の中に、總べて一切の[三二]十二部經、八萬四千の法藏を攝す。皆是れ實にして相違背すること無し。佛法の中の有は、世界悉檀を以ての故に實有なり。各各爲人悉檀を以ての故に實有なり、對治悉檀を以ての故に實有なり、第一義悉檀を以ての故に實有なり。

云何なるを世界悉檀と名くるや。有法は、因緣和合に從るが故に有にして、別の性無し。譬へば車の轅輻軸輞等は、和合の故に有りて、別に車なきが如し。人も亦た是の如し、[三三]五衆和合の故に有りて、別に人無し。若し世界悉檀無しとせば、佛は是れ實語の人なるに、云何なれば云ふや。「我淸淨の天眼を以て諸の衆生の善惡の業に隨つて此に死し彼に生じて果報を受くるを見るに、善業の者は天人の中に生じ、惡業の者は三惡道に墮す」と。

復次に、經に言はく、「一人出世すれば、多人慶を蒙り、福樂饒益す、佛は世尊なり」と。法句の中に說きたまふ如くんば、「神は自ら能く神を救ふ。他人安んぞ能く*神を救はんや。自ら善を行ずるの智は是最も能く自らを救ふ」と。瓶沙王迎經の中に、佛、說きたまふ如く、「凡人は法を聞かず、凡人は我に著す」と。又、佛二夜經の中に說きたまはく、「佛が得道の夜從り、般涅槃の夜に至るまで、

【三一】悉壇（Siddhānta）。成就、宗、理等に譯せられる。「範疇」または「論の立場」といふ意味である。この四悉壇は、智度論が、全佛敎に對して下せる、一の敎相判釋的整理であつて、重要である。

【三二】十二部經。一切經を十二に分てるもの、論三十三參照。

【三三】五衆。此論では、五衆は二樣の意味に用ひられる、此場合は新譯の五蘊で、即ち、色受想行識、即ち有爲法の構成要素。

※神。—靈魂。

が及ぶ所に非ず。何となれば我等生死の肉身は、結使の業の爲に牽かれて、自在なることを得ざればなり。此の如きの深法は誰か能く之に及ばん」と。此を以て自絶して賢聖の法器と成ることを得ず。是の人の爲の故に[二三]嵐毘尼園中に於て生れ、即ち能く菩提樹下に至つて成佛すと雖も、方便力を以ての故に、孩童・幼小・年少・成人を作すことを現じ、諸の時の中に於て、次第に嬉戲、術藝、服御、[二四]五欲を受け、人法を具足し、後漸く老病死苦を見て厭患の心を生じ、夜の中半に於て、城を踰えて出家し、[二五]欝特伽と阿羅羅仙人の所に到りて、弟子と作るを現じて、而も其法を行ぜず。常に神通を用ひて、自ら宿命を念ずるに、迦葉佛の時、戒を持し道を行ずと雖も、而も今苦行を修することを現じ、六年道を求む。菩薩は[二六]三千大千世界に主たりと雖も、而も魔軍を破するを現じて、無上道を成ず、世法に隨順するが故に、是の衆の變を現じたまふ。今般若波羅蜜の中に於て、大神通智慧力を現ずるが故に、諸人當に知るべし、佛身は無數にして諸の世間に過ぎたりと。

復次に、人の、應に度すべき者有るも、或は[二七]二邊に墮し、或は無智なるを以ての故に、但だ身の樂を求め、或は有爲道の故に苦行に修著す。是の如きの人等は、第一義の中に於て、涅槃の正道を失せり。佛は此の二邊を拔きて、中道に入らしめんと欲するが故に、摩訶般若波羅蜜經を說きたまへり。

復次に、生身、法身の供養の果報を分別するが故に、摩訶般若波羅蜜經を說きたまへり。舍利塔品の中に說くが如し。

復次に、[二八]阿鞞跋致と、阿鞞跋致の相とを說かんと欲するが故に說きたまふ。

復次に、魔幻、魔事の爲の故に說きたまふ。

復次に、當來世の人の、般若波羅蜜を供養する因緣の爲の故に、又[二九]三乘の記別を授けんと欲するが故に、是の般若波羅蜜經を說きたまへり。佛阿難に告げたまふが如し。[三〇]我れ般涅槃の後、此の

【二三】 嵐毘尼園（Lumbini）。花香と譯す。摩耶夫人この園の無憂樹の下に釋尊を生む。

【二四】 五欲。五感（根）の對象、即ち、色、聲、香、味、觸の五境。

【二五】 欝特羅・阿羅羅。欝特羅は（Udraka-Rāmaputra）。欝陀羅羅摩子の略稱。六種外道の一人にして、決定的判斷を差控ふるによりその滑脫の點より水獺と云はる。阿羅羅は（Ālāra-kālāma）阿羅羅伽羅摩の略稱。佛陀は出家後、先づ後者に就て空無邊處、次で前者に就て、非想非非想處を學び、何れも證得して、未だ眞道に非ざるを知つて、この兩師を捨てた。

【二六】 三千大千世界。須彌山を中心とする、小・中・大の各千世界の總和、この全世界の意味。

【二七】 二邊。相對的判斷の兩極、たとへば、有・無・斷・常の如き二極端。

【二八】 阿鞞跋致（Avaivarti）。また阿惟越致と書す。不退轉と譯す。菩薩の階位名。

【二九】 三乘。聲聞、辟支佛、菩薩。記別は豫言。

【三〇】 般若思想發達に關して、其地理的歷史的徑路に暗示を與ふる豫言。

此法は甚だ深妙にして、能く測量する者無し、佛出でて悉く開解したまふに、其の明かなることと日の照らすが如し』。

又佛初めて法輪を轉じたまふ時の如きは、時に應じて菩薩他方より來り、佛身を量らんと欲するに、上は虛空無量の佛刹を過ぎて華上佛の世界に至るも、佛身を見ること故の如くなりき。菩薩、偈を說いて言く、

『虛空は邊あること無し、佛の功德も亦爾なり。設ひ佛身を量らんと欲するも、唐に勞して盡すこと能はず。

上は虛空界、無量の諸佛の土を過ぐるも、釋師子の身を見ること、故の如くにして異ならず。

佛身は金山の如く、大光明を演出し、相好自ら莊嚴せること、猶ほ春華の敷くが如し』。

佛身の無量なるが如く、光明・音響も亦復た無量なり、戒・定・慧等の諸佛の功德も皆悉く無量なり。密迹經の中の三蜜の如し。此中に應に廣く說くべし。

復次に、佛は初めて生れたまひし時、地に墮ちて、行くこと七步にして、口自ら言を發し、言竟りて便ち默し、諸の嬰孩の如く行かず、語らず、乳哺すること三歲、諸母養育し、漸次に長大したまへり。然るに佛身は無數にして、諸の世間に過ぎたり。衆生の爲の故に現ずること、凡人の如し。凡人の生るる時は、身分、諸根及び其意識、未だ成就せざる故に、身の四威儀たる、坐臥行住、言談語默、種種の人法、皆悉く未だ了ぜず。日月歲過ぎ、漸漸に習學して、能く人法を具ふ。いま佛は、云何なれば生れて、便ち能く語り、能く行きて、後更に能くせざる、此れを以て怪みを致す。但し此を爲すの故は方便力を以て、人法を現行して、人の威儀の如くにして、諸の衆生をして深法を信ぜしむるなり。若し菩薩生るゝの時便ち能く行き能く語れば、世人は當に是の念を作すべし、「いま此の人を見るに、世に未だ曾て有らず。必ず是れ天龍鬼人ならん。其の所學の法も、必らず我等

て世を惑はす」と。彼の貢高邪慢の意を斷ぜんが故に、無量の神力、無量の智慧力を現じ、般若波羅蜜の中に於て自ら說きたまはく、「我は神德無量にして、三界の特尊なり。一切の覆護を爲す。若し一たび惡念を發さば、罪を獲ること無量なり。一たび淨信を發さば、人天の樂を受け、必ず涅槃の果を得ん」と。

復次に、人をして法を信受せしめんと欲するが故に、言はく、「我は是れ大師なり。十力[一九]四無所畏[二〇]有り、聖主の住處に安立して、心に自在を得、能く師子吼して、妙法輪を轉じ、一切世界に於て最尊最上なり」と。

復次に、佛世尊は、衆生をして歡喜せしめんと欲するが故に、是の般若波羅波蜜經を說いて宣はく、「汝等應に大喜を生ずべし。何となれば一切衆生は邪見の網に入り、異學惡師の爲めに惑はさるれども、我は一切の惡師邪網の中に於て、出づることを得たる十力の大師にして、値見す可きこと難ければなり。汝今已に遇ひ、我れ時に隨つて三十七品[二一]等の諸の深法藏を開發し、汝の採取に恣す」と。

復次に、一切衆生は、結・使[二二]の病の爲めに煩惱せられ、無始の生死より已來、人の能く此病を治する者無く、常に外道惡師の爲に誤らる。我いま出世して大醫王となり、諸の法藥を集む、汝等當に服すべし。是の故に佛は摩訶般若波羅蜜經を說きたまへり。

復次に、人有り念言すらく、「佛は人と同じく亦た生死あり。實に飢渴寒熱老病の苦を受く」と。佛、彼の意を斷ぜんと欲するが故に、是の摩訶般若波羅蜜經を說き、示して言はく、「我が身は思議すべからず。梵天王等諸天祖父、恒河の沙等の劫中に於て、我が身を思慮し、我が聲を尋究せんと欲すれども、能く測度すること能はず、況んや我が智慧三昧をや」と。偈に說くが如し。

『諸法實相の中に、諸の梵天王等、一切の天地の主は、迷ひ惑ふて了ずること能はず。

【一九】十力。この論の卷二十四參照。
【二〇】四無所畏。論卷二十五參照。
【二一】三十七品。涅槃に至る道の資糧、四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺支、八正道。
【二二】結・使。煩惱の異名、結に九、使に十あり。

一麻を食し、或は一米を食す等なり。而して自ら念言すらく、是處は道に非ずと。爾の時、菩薩、苦行の處を捨て、菩薩樹下に到り、金剛處に坐したまふ。魔王十八億萬の衆を將ゐ、來つて菩薩を壞らんとす。菩薩は智慧功德力を以ての故に、魔衆を降し已て、卽ち[13]阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり。是時に三千大千世界の主、梵天王の[14]式棄と名くるもの、及び[15]色界の諸天等、[16]釋提桓因、及び欲界の諸天等、幷びに[17]四天王、皆佛所に詣りて世尊に初めて法輪を轉じたまはんことを勸請す。亦是れ菩薩の念ずる本よりの願ふ所にして、及び大慈大悲の故に、請を受けて說法したまふ。諸法の甚深なるものは、般若波羅蜜是なり。是を以ての故に佛は摩訶般若波羅蜜經を說きたまへり。

復次に、人有り、佛は一切智を得ずと疑ふ。所以は何となれば、諸法は無量無數なり。云何んぞ一人にして能く一切の法を知らんと。然るに佛は般若波羅蜜の實相淸淨にして虛空の如きに住したまひ、無量無數の法の中に、自ら誠言を發したまはく、「我は是れ一切智人なり、一切衆生の疑ひを斷ぜんと欲す」と。是れを以ての故に摩訶般若波羅蜜經を說きたまへり。

復次に、衆生の應に得度せんとする者あり。佛の大功德智慧は、無量にして知り難く、解し難きを以ての故に、惡師の爲に惑はされ、心、邪法に沒して、正道に入らず、是輩の人の爲に大慈心を起し、大悲の手を以て之に授けて佛道に入らしむ。是故に自ら最妙の功德を現じ、大神力を出し給ふ。般若波羅蜜初品の中に說くが如し。佛は[18]三昧王三昧に入り、三昧より起ち、天眼を以て十方世界を觀たまふに、擧身の毛孔皆笑ひ、其の足下の千輻輪相より、六百千萬億の種種色の光明を放ち、足の指より、上は肉髻に至り、處處に各六百千萬億の、種種なる色の光明を放ち、普く十方無量無數の恒河沙等の如き、諸佛の世界を照して、皆大に明かならしむ。佛は三昧從り起て一切諸法の實相を宣示し、一切衆生の疑結を斷ぜんと欲するが故に、般若波羅蜜經を說きたまへり。

復次に、惡邪の人あり。嫉妬の意を懷き、誹謗して言く、「佛の智慧は人を出です、但だ幻術を以

【一三】阿耨多羅三藐三菩提(Anuttara-Samyak-Sambodhi)。舊譯では、無上正遍知、新譯では、無上正等正覺。

【一四】式棄(Sikhi)。頂髻または火と譯す。

【一五】色界・欲界。色界は物質的世界。欲界は欲望の世界。これに無色界が加はつて三界。

【一六】釋提桓因(Sakra-devanam-indra)。後に論中に出で來る「釋提婆那民」「釋迦因陀羅」は何れも、この音譯である。「帝釋」または「帝釋天」と譯す。三十三天の主であつて佛法護持の善神とせらる。

【一七】四天王。帝釋の外持、東は持國天、南は增長天、西は廣目天、北は多聞天。

【一八】三昧王三昧。諸三昧中最上の三昧。第四禪の中にあり。論卷七の初品第十四放光釋論の內に說明す。

事及び小因緣を以て自ら發言せざること、譬へば須彌山王の、無事及び小因緣を以て動かざるが如し。今何等の大因緣あるが故に、佛は摩訶般若波羅蜜經を說きたまひしや。

答へて曰く、佛は三藏の中に於て、廣く種種の諸の喩を引いて、聲聞の爲めに法を說きたまへども、菩薩の道は說きたまはず。唯だ中阿含本末經の中に「佛は彌勒菩薩よ、汝は當來世に當に佛と作ることを得て、號して彌勒と字くべし」と記したまひしが、亦た種種の菩薩の行は說きたまはざりき。佛は今彌勒等の爲めに、廣く諸の菩薩の行を說かんと欲す、是の故に摩訶般若波羅蜜經を說きたまふ。

復次に、菩薩が念佛三昧を修するあり。佛は彼等の爲めに、此の三昧に於て、增益を得せしめんと欲するが故に、般若波羅蜜經を說きたまふ。般若波羅蜜經初品の中に說くが如し。佛は神足を現じて金色の光明を放ち、遍く十方恒河沙等の世界を照し、大身を示現し、淸淨の光明と、種種の妙色とをもて、虛空の中を滿たせり。佛の衆中に在すや、端正殊妙にして、能く及ぶ者なく、譬へば須彌山王の、大海に處るが如し。諸の菩薩は、佛の神變を見たてまつりて、念佛三昧に於て倍復す增益す。是の事を以ての故に、摩訶般若波羅蜜經を說きたまへり。

復次に、菩薩が初めて生れたまひし時、大光明を放ちて、普く十方に遍じ、行くこと七步に至つて、四顧觀察し、師子吼を作して、偈を說いて言はく、

『我、生胎の分、盡く、是れ最末後の身なり、我已に解脫を得たり、當に復た衆生を度すべし。』と。

是の誓を作し已り、身漸く長大にして、親屬を捨て、出家して無上道を修せんと欲す。中夜に起て、諸の伎直、妃后、婇女を觀見したまふに、狀臭屍の若し。卽ち[八]車匿に命じて、白馬に鞁せしめ、夜半に城を踰え、行くこと十二[九]由旬にして、[一〇]跋伽婆仙人の住するところの林中に到り、刀を以て髮を剃り、上妙の寶衣を以て、麁布の[一一]僧伽梨に貿へ、[一二]泥連禪河の側に於て六年苦行し、日に

【七】舍利弗。須菩提。を擧げたのはあたかも此二人が經において對話の對手となつてゐるからである。且つこの二人は小乘人とせられてをるが、實は過去の佛であつて法の爲に假りに釋尊の弟子と化現してゐるに過ぎぬ。この意を示すために二人を擧げたのだと慧影は述べてゐる。

【八】車匿（Chandaka）。

【九】由旬（Yojana）。約四哩。

【一〇】跋伽婆（Bhaggava）。

【一一】僧伽梨(Saṅghāti)。比丘三衣中最大なるもの。

【一二】泥連禪河(Nairañjanā)。

大智度論

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏法師鳩摩羅什奉詔譯

卷の第一

初品序……緣起

『智度の[一]大道に、佛從つて來り、智度の大海を、佛、窮盡す。智度の相と義とに、佛無礙なり。〔この〕智度に等しきもの無き佛に稽首したてまつる。

有無の二見、滅して餘すこと無き、諸法の實相は佛の說き給ふところ、常住不壞にして煩惱を淨む。〔この〕佛の尊重したまふ所の法に稽首したてまつる。

[二]聖衆の大海は福田を行じ、[三]學無學の人を以て莊嚴す。[四]後有の愛種、永く已に盡き、[五]我所既に滅して根も亦除く。已に世間の諸の事業を捨てて、種種の功德の住する處たり、一切の衆の中、最上と僞す。〔この〕眞淨の大德僧に稽首したてまつる。

一心に三寶に恭敬し已りて、及び諸の救世の[六]彌勒等と、智慧第一の舍利弗と、無諍空行の須菩提とに『恭敬す』。我今力に如つて、大智の彼岸の實相の義を演說せんと欲す。願くは諸の大德、聖智の人、一心に善く順つて、我が說を聽きたまへ。』

問うて曰く、佛は何の因緣を以ての故に、摩訶般若波羅蜜經を說きたまひしや。諸の佛法は、無

【一】智度(Prajñā-Pāramitā)。般若波羅蜜の譯語、卽ち本論の釋する摩訶般若波羅蜜經の主題とするところ、やがて本論全篇を擧げて其說明を試みんとする根本主題である。

【二】これより以下の歸敬偈全部には本論唯一の註疏として殘存せる慧影疏の斷簡が存する。以上、下〔三〕より〔七〕までの註は其意に依る。

【三】學・無學。學人とは苦忍以上、羅漢に至る三果四向の七種の學人でまだ進習の時期にあるもの、無學人は羅漢果に到達し、所作已に辨じて更に學ぶべきものなきもの。學人に十八無學に九あつて、合して二十七聖となる。菩薩の法では、未だ無生法忍を得ず。功用道にあるものが學。無生法忍を得て無功用道にあるものが無學。

【四】後有の愛種。死後更に三界の存在を受くべき愛分の煩惱。

【五】我所。見分の煩惱。

【六】彌勒等。當來成佛すべき彌勒を擧げたのは、衆生が濟はるゝは、三世諸佛の慈悲本願力に依てのみであるから、十方三方諸佛を歸敬するため其代表として彌勒を擧げ「等」としたのである。

も言相ひ喩せずんば、則ち情、由て比することなし。不比の情は則ち以て悟懐を文表に託すべからず。不喩の言は亦た何ぞ殊塗を一致に委ぬるを得んや、理固より然り。進んで筆を停めて是を爭はんと欲すれば則ち交ごも競ふて日を総へ卒に成す所無し。退て簡にして之を便せんと欲すれば傷を穿鑿の譏に負はん。二三を以て唯だ案譯して而して書す。都て備飾せず。幸に明悟の賢、其の文を略して、其の玄を摠んことを冀ふものなり。

則ち萬里に亢標し、言發すれば則ち英翳榮枯す、常に茲の論を杖ふ。淵鏡高きに憑て、以て宗を明らかにするを致す。秦の弘始三年次星紀十二月二十日を以て、姑藏より長安に至る。秦王襟を虚して既に昔見の心を蘊在せり、豈に徒らに則ち悦ぶのみならんや。晤言相對して則ち淹留終日、研微造盡、則ち窮年、倦を忘る。又以らく、晤言の功、深しと雖も、而も獨り得るの心曠からざるを恨む。造盡の要、玄なりと雖、而も津梁の勢未だ普ねからざるを惜む。遂に莫逆の懐を以て、相與に兼忘の慧を弘めんと、乃ち、京師の義業沙門を集め、公卿賞契の士を命じて五百餘人、渭濱逍遙園堂に集む。鑾輿、駕を洪渓に佇め、禁禦、警を林間に息む。躬ら玄章を覽て、正名を梵本に考へ、津要を諸通して夷路を來踐に坦ぐ、經本既に定り、乃ち此の釋を出す。論の略本十萬偈有り、偈に三十二字あり、并せて三百二十萬言なり。梵夏既に乖き、また煩簡の異あり、三分して二を除き此の百巻を得。大智三十萬言に於て玄章婉旨、朗然として見る可し。歸途直達して復た趣に惑ふの疑無く、文を以て之を求むるに間然すること無し。故に天竺の傳に云ふ。像正の末に、馬鳴・龍樹微りせば道學の門、それ論胥溺喪すと。其故何んぞや、寔に二、未だ契微せずんば、邪法用ひらること盛んに、虚言は實數と竝び興り、嶮徑は夷路と轍を爭ひ、始めて進む者は之に化して而して流離し、道に向ふ者は之に惑ふて而して播越するに由る。二匠に非ずんば、それ孰れか之を正さん。是を以て天竺の諸國は、之が爲に廟を立て、之を宗めて佛の若くす。又稱して之を詠して曰く、

　智慧の日已に頽く、斯の人再び曜かしむ、世の昏寢已に久し、斯の人悟て覺らしむ。

若し然らば、眞に功は十地に格り、道は補處に侔しき者と謂つ可し。傳えて之を稱するに亦た宜べならすや。幸なる哉、この中鄙の外、忽ち、全有の此論を得たり。梵文の委曲は皆な初品の如し、法師、秦人簡を好むの故を以て、裁して之を略す、若し備さに其文を譯せば、將さに千有餘巻に近からんとす。法師は秦語の大格に於て、唯だ一往を譯せり。方言殊巧、猶ほ隔てて通せざるが如し。苟

大智度論序

長安　釋僧叡述

夫れ、萬有は本と生生より而て生じ、生は無生なり。變化の兆は物始より而て始り、始は無始なり。然れば則ち無生無始は物の性なり。生・始は性を動かさず。而るに萬有は外に陳り、悔吝内に生ずるは、其れたゞ邪思か。

正覺は、以らく、邪思の自ら起るを見るが故に、阿含これが爲に作し、滯有の惑に由るを知るが故に、般若これが爲に照したまふ。然るに照は本と希夷にして津涯浩汗なり。理は文表を超え、趣は思境を絶す、言を以て之を求むれば則ち其の深に乖き、智を以て之を測れば則ち其旨を失す。二乘ゆえに三藏に轉沛し、雜學ゆえに鱗を龍門に曝すもの、其れ然らさらんや。是を以て、馬鳴は正法の餘に起り、龍樹は像法の末に生ず、正餘は弘め易し、故に直に其道風を振て塋拂するのみ。像末は多端なり、故に乃ち跡を凡夫に寄せ、物を示悟するに漸を以てす。又た照を龍宮に假り、以て搜玄の慧を朗かにし、聞を幽祕に託して以て微言の妙を窮む、爾して乃ち智典を憲章して、茲の釋論を作り、其の夷路を開くや、則ち大乘の駕をして方軌として直入せしめ、其の實相を辯ずるや、則ち妄見の惑をして遠ざけて自ら復せしめず、其の論を僞るや、初めには辭これに擬するに必ず衆異を標して以て美を盡し、卒に成るの終には、則ち無執を擧げて以て善を盡す。釋して盡さゞる所は則ち論を立てゝ之を明にし、論じて其の未だ辨ぜざるは則ち折中に寄せて以て之を定む。靈篇をして難喩の章無く千載作者の旨を悟らしむ。信に若の人の功なり。

鳩摩羅耆婆法師なるもの有り。少くして聰慧の聞を播し、長じては奇拔の譽を集む。才擧りては

凡例

一、本譯の「底本」には大體、大正藏本を用ひたが、必ずしも其れにのみ依らず、文旨、論意に依つて譯者の見解に隨つて諸異本を照合取捨し、ほゞ論旨の脈絡を通ぜんと努力した。

二、「卷章の區分」は大正藏本に基いたが、それ〴〵の標目を其の儘譯出せず、簡單に書き改めて其の內容を明示する事にした。舊來諸本に用ひられたる標目は一々其の下に註記しないで解題の中に纒めて擧げておいたから、參照せられたい。

三、卷首「解題」は出版社の希望を容れ、極めて簡單な手引き的なものに止めた。然しながらせめて「索引」だけは、本論の性質に鑑み、出來得るかぎり詳細なるものを作製して卷末に附し、聊か學徒の便宜に資したいと念願してゐる。

五、「目次」は數卷に涉る性質上、その頁を表示し得るために、やはり卷末に附する事にした。

六、猶、本譯文中に挿入された〔……〕印は原本に存する割註を現し、（……）印は文意の理解を容易くせんため、譯者が挿入した文字である。

譯者記

の要旨は採用し得られるだけ註記しておくつもりである。

其他の現存せるものはむしろ雜本に屬するが本邦書籍としては

大智度論類聚標目三卷、日本大藏經
　掌珍智度宗輪論章疏
大智度論條箇　三冊
大智度論要義條目集　三卷
大智度論略頌　十卷　義觀撰　（寛永五刊）
大智度論略抄　二卷　證眞
大智度論私記　二卷　（――文治頃）
大智度論捷徑　一卷　堯恕
　（寛永一七――元祿八）

あるのみである。

亡失したもので記錄に名を止めてゐるものを記しておくと、

大智度論疏　十五卷（十四卷）僧侃。同疏二十卷。同記、一卷、長法師。同鈔、十卷、靈見。同疏、十五卷、曇影。同抄、八卷、僧肇。同釋、十卷、行賀。音義、三卷、信行。章門、五卷、休。等がある。

概して甚だ貧しいものであるが、その事は論の浩瀚なると内容の豐富なることより蓋し止むを得なかつた事であらう。

昭和九年十二月二十五日

譯者　眞野正順　識

て開悟せりと傳說せられ（卷二十七に三智を論ぜるもの丶取意か。）南岳慧思はまた「釋論玄」を著すと傳えられる。か丶る傳說の確不はともかく、智顗の思想に於ける、本論思想の影響は餘りにも顯著である。また「華嚴」の法界緣起說は、從來傳流として直接の關係に認められなかつたが、本論が主張する不共般若が、華嚴入法界品の思想に基くものである事より、むしろ論の核心的なるものを展開したものと見る事が出來る。更に「淨土敎」との關係に就ては本論最初の抄本を作つたところの慧遠が淨土信仰と深き關係に立ちしは、むしろ後來この流と支那淨土敎と不可離の關係を豫示したものであつた。支那に於ける淨土敎の主要なる人物はほとんど四論の系統より出てゐるは奇とすべきである。卽ち曇鸞は四論宗に關係深きのみならず、其創始者なりと迄傳說せらる丶が、其著、淨土論註は中道思想を基礎として淨土思想を解釋したものであつて「智論の往生淨土を以て觀無量壽經に合し、四論の中に於て淨土一門を成立す。故に大師は論註及び奉讃略論等を造れるなり。」（宜然房、三論玄義玄讃）とまで解せられるに至つてゐる。道綽は之を嗣ぐものに外ならないが、他面善導は明勝の系統によれる四論學徒であるのみならず、其六時禮讃の無常偈、中夜偈には、卷十七の文が引用せられ、その傾投深かつた跡を示してゐる。最後に「禪」は、むしろ三論の發展と目せらる丶が、本論中、禪波羅蜜によつて眞に實相に入るを得るしと、更に衆生の爲に倦くなく敎化し遊化する生活を讃えたるは、正に禪の主張に外ならぬ事であり、菩薩の精進無限にして極まるところ無きを力說せるは、やがて修證一如の禪風の基礎をなすものと見られる。

か丶うにごく概觀しても、本論の後世佛敎に對する普ねく影響の跡を察する事が出來るであらう。是等の系統を引くと廣汎なるところの我國佛敎に對する影響はまた詳しく論ずる必要はないであらう。既に「我國の敎主」聖德太子の維摩經義疏の中に「釋論」として引用せらる丶に初まつて、後代所依もしくは引用せらる丶ところ寧ろその煩に堪えない。

七、註釋

註釋として現存するものは極めて少い擧ぐべきはたゞ次の一書である。

大智度論疏　北周慧影撰

卍續藏一・七四・三、一・八七・三に藏められてゐる。それも殘缺でたゞ一、六、一四、一五、一七、二一、二四、だけであり、新らしく、正倉院聖語藏の中から第四が發見せられたと報ぜられるのみである。恐らく、慧影が其師道安の說を抄したものでないかと思はれる。北周時代から可成有名であつた。本國譯には、そ

想に依る者は龍樹の形式的正統者たる名を爭はんよりは、むしろ其豐富なる內容を更に發展せしむる事に力を注いで行つたので、次第に外觀上は、龍樹學派から離れて行く結果を來したのではないかと推せられる。兎にも角にも、龍樹の正統とせらるゝ中觀派には本論の影響は現はれてゐない。むしろ、後世それと對立せる諸思想の中に却て認められるのである。

先づ、さきにも述べた如く、本論の認識論は、素より認識の主・客相依の關係を基とし、相依緣起に依てこれを說明するは前後一貫しておる處であるが、然も、その緣起の當體に直入し、主客一如となりて生動するところに其眞實の實相を見るを主張することに於て「一切は心より生ず。」(八)なる唯心的傾向をすら產み來つたのであるが、此傾向を繼承して、一切空なる實相の上に諸現象の宛然として展開せらるゝ過程を唯心論的に說明せんと企てたのが、かの瑜伽派の唯識思想であつたのである。此派は云はゞ舊佛敎に對抗して大乘敎の新形而上學を建立すべき要求に押されて現はれた哲學的一展開であるが、其源基をたづぬれば、この本論に還り來るべきものと考へられる。またかの「起信論」は眞如を中心して現象の展開を論ずる形而上學的外觀を呈するが、その眞如の本質をたづぬれば、また絕對空と中道實相とを相卽せしめたるものであつて、またこの影響下に立つものとせねばならぬ。

また、この本論に說かるる佛の二身說に於て「法身の佛は常に光明を放つて常に說法す。」(九)などゝ主張せらるゝ、法身の具體性・能動性は、やがて、法身說法をその中核とする「密敎」の先驅となすものであり、更に卷四十八、四念處品に於て解說する四十二字觀は其一字々々を通してたゞちに實相の本不生に渉り行く道を明して、眞言陀羅尼の胚種をこゝに示しておる。密敎の傳承としては龍樹を其祖と仰ぎその弟子と傳へらるゝ――疑はしいが――龍智より金剛智へと直接傳持せられたと云ふ傳說が立てられてすらおるのである。

更にまた、淨土敎に對する直接の影響は、是を龍樹の他の著述、十住毘婆沙論易行品に讓るとしても、猶、本論の隨處には、阿彌陀佛國土の稱讚が點在し、後世龍樹が淨土七祖の隨一として崇めらるる所以の偶然ならざるを示しておる。

支那に於ては、傳譯者羅什の門下に於て僧肇・道融等の系統は、やがて江北に「四論學派」を引起し、この論を重視する傾向を取つたが、この系統が後に「天台宗」を產む素地となつたものと目せられる。その始祖とせらるゝ慧文は四論宗に屬し、大論の「三智一心中得」の文によつ

なり切ることに依てのみ、それが知らるゝのである。されば、眞實相を知るところの般若は「無相」であり、行者そのものゝ生活を離れて別に存しないと言はるゝのである。かく、實相を知るとは、流動せる緣起の實相そのものに成り切る事であるから、實相を知らんとする行者の道は、かの緣起の無限なるが如く、それに應じて果てしなく精進してゆく事の外に存する筈がない。然らずんば眞に實相に順應するものとする事は出來ないのであらう。從て佛悟はかゝる永劫の精進に即してのみ顯現し來るものとせられ、生死を厭はず、涅槃に住せざる、活動的佛道がこゝに基礎づけられるのを見るのである。されば理想たる佛陀に就ても論には法身・生身の二身に分て論ぜられてゐるが、結局、一方は積劫累德の報身として他方は異類にまで身を現じて衆生を救濟してやまぬ處に力が込められ、何れも倦くなき大悲の精進の理想としてのみ佛陀が眺められてゐる　この事は後來、大乘佛教の中にかの豐麗なる信仰的佛陀を展開し出すところの基礎となるものである。

また、他方、この樣に萬有の實相は、こゝに精進してゐる我れの生活を離れて存しないと云ふ事は、やがて實相そのものが、わが內容の展開と一如である事を語るものであるから「三界の所有は皆な心の所作なり」（三十九）と云ふ唯心的見地に導かるゝこととなり、これがまた後世雄渾なるかの大乘唯心論の躍出しきたるところの素地をこゝに築くのである。

六、後世への影響

本論に內包する思想はすこぶる複雜廣汎であつて、後世龍樹が「八宗の祖」と呼ばれ、殆んど總ゆる大乘諸佛教が其淵源を彼に求めるのに實に本論の故である。從て、本論の後世佛教に與えた影響はそれだけ多岐複雜を極める。然し乍ら、かゝる廣汎なる學說と全體的に繼承したものは現はれず、たゞその部分の主旨をそれ〳〵繼承發達せしめて行つたのである そしてこの事はやがてこゝに興起したる大乘佛教の下に、再び以前小乘佛教に於て見られしが如き諸派を分出せしむる所以ともなるのである。

印度に於ては、龍樹の學說は直接にはかの「中論」を中心とせる中觀派を引起した。提婆より清辨に至るその傳統は、空の否定的一面の高揚であつて、むしろ其點に於て龍樹の價値が喧傳せられたものゝ如くである。此事は恐らく、龍樹の思想を受くる者の中に、自ら其初期思想を重ずる者と、後期思想に注目する者との對立が現はれ、其中、初期思想は兎にも角にも龍樹の全體に一貫するものであるから其本旨と目せられ勝を制し。後期思

ゞ存在を否定してそれで滿足してゐるかの虛無主義ではない。かゝる虛無主義はかの實在觀と互に對照となるところの誤れる見解であつて、かゝる意味の空ならば、それはまた否定されねばならぬ。俗見の上における有も空も共に斷乎として否定されねばならぬ。「諸法有、これ一邊。諸法無、これ一邊。この二邊を離れて中道を行ず。」(四十三)それが眞實の道である。

この樣に、俗見による虛無主義を否定し、有・無を離れることはやがて有・無の立場を止揚して、より高き眞實の見地に入つてくることであつて、この高次的な立場に於て一切諸法が改めて肯定せられて來るのである。卽ち、低き實在の見地に滯留せる凡夫に於いて現ずる一切諸法は虛誑であるが、然し緣起の原理を體認しその上に立てる聖人に於ては虛誑ではない。一切に歷々として流動せるまゝ眞實である。「凡夫人の五衆は虛誑にして實ならざること夢の如し。聖人の五衆は虛誑に非ず」である。かく有に非ざると共に、また無にも非ず、かゝる對立を跳躍して一切存在の實相に入る。これを諸法實相、如、法性、眞實際と名ける。「一切法の實相は名けて法性と爲り。是故に一切法は皆な法性の中に入る。」(八十九)のである。されば、これを世俗の意味に於てすれば(世俗諦)一切存在は空であるが眞實の立場よりすれば(第一義諦)有無を超えたる「不可說」なる具體的實相である。

かゝる立場よりすれば、佛は我等より隔歷せる彼所に輝くところのものではない。この生そのまゝの眞實相に徹するものに外ならぬ。かくして、生死は卽ち涅槃であり、煩惱は卽ち菩提である。そして其故にこそ、まことに成佛することが可能となるのである。

つまりこゝに般若の空思想が徹底せられる事に依て一轉して、諸法實相の積極的肯定へと止揚せられてゐる。論には、これを共般若、不共般若に分て區別してゐる。卽ち、前者は般若經の思想であつて、三乘凡てに通じて解せらるゝもの、後者は、法華經・華嚴經等の思想であつて秘奧甚深の最上義とせらる。

然しながら、かゝる境地は決して單なる理知判斷の範圍內だけでは現前しないなぜなれば、我々の理知の判斷はどこ迄も相對的な世界に止まつてゐるから「有に非ず」と云へば「無」としか考へられず「無に非ず」と云へば、また「有」に還つてくる外はないからである。かゝる對立の理知から躍出しなければ眞實相に入ることは出來ない。表皮的な理知の立場を一擲して現前に流動せる緣起の實相其物の中に身を任ね、體認の世界に入らねばならぬ。卽ち、緣起の實相そのものに自ら

て見れば、かの高邁雄渾なる積極的大乘諸思想が躍出し來る所の搖籃をなす。この事はかゝる諸思想の悉くには、般若空が常にその最後の原基となつてゐることに依て首肯さるゝであらう。事情斯くの如くであるから、この論の內容も、見方に依てそれだけ豐富となるのであつて、後世、これを見る者の立場の相異るにつれて、それだけ種々な意味をこの中に探ねることが出來る。――事實またそうであつたのであつて、其故にこそまた龍樹は各宗に依て競ふて、其傳承祖師の中に取入れられたのであつた。

　されば、かゝる意味よりすれば、本論は、一方過去を批判することに依て、他方將來を暗示することに依て、云はゞ全佛教がこゝに映出されてゐる鏡であつて佛教の總持と呼ばれそれだけ內容は豐富であるが、今はその一々に就て分析する紙數を許されぬ。ごく簡單にその根本思想だけを述べておく。

　龍樹の主張する空觀は、あらゆる存在に自立的實在性を――その具體的たると觀念的たるとを問はず――悉く否定するのであるが、然し、かゝる存在を存在たらしめてゐる緣起そのものゝ原理は、之を否定するのではない。緣起の理法は實に生滅を超えたるものとして肯認せられる。然し緣起を認めると云つても、或は存在を緣起しきたるところの原因や條件が實存すると說くのではない。かゝる原因や條件もそのものとして見れば、また悉く空である。たゞ、かゝる原因や條件を成立せしむる原理としての緣起を不生不滅として肯認するのである。

　かゝる緣起の原理に依て一切の存在は悉く相依相關の關係の上に於てのみ成立してゐる。隨つて一切存在には夫れ自らとしての自性はない。自性は空である。龍樹はこの自性空の理說をどこ迄も徹底してゆく。それは一切の存在のみならず、佛教の究竟理想とせらるゝ佛、涅槃ですら、そのものとしては、相依的存在たるを免れず、從てまた空であるとする。なぜなれば、今我々に理想として思ひ浮べらるゝ佛陀は、そは理想としてこの現實に對比されて描き出されたものであつて云はゞ、相對關係の上に於て存するところの佛であるからである。されば「我は說く、佛及び涅槃は正に幻の如く夢の如し。」(論五十五)と云はねばならぬ。然しながら、かく一切を否定するは、決してたゞ否定の爲にのみ否定してゐるのではない。たゞ事實としての實相を顯はしてゐるに過ぎない。自性空なることはあらゆる存在の實相であるから、その實相に隨順してその儘に云ひ現はしてゐるに過ぎぬ。かく實相を露はにすることはやがて實相に隨順したる眞實の生を營まんが爲である。されば、龍樹の空は決してた

第八一―照明品(成就衆生品。具足品)
第八二┬淨佛國土品(淨土品)
　　　└同
第八三┬畢定品
　　　└同
第八四―四諦品(差別品)
第八五―七喩品(法性無作品)
第八六―平等品(見實品)

猶この區分も異本によりて互に相異つてゐる。聖本・宮本・石本は初品五十二の區分を四十二に分つており、また宋本は同じく四十二に分つて、復た其區分の仕方を異にしておる。是を全九十卷に見ても卷首の置きどころに異つたものがありその數に於ても聖。石は八十九に分つてゐると云ふ風である。上記の區分は大正藏に依つたものである。本譯もそれに從ふ。

第九一卷　第八七―涅槃如化品(如化品)　}第九六卷
第九二卷　第八八┬薩陀波崙品
}第九三卷　　　├同　第九七卷
　　　　　　　└同　第九八卷
}第九四卷　第八九┬曇無竭品
　　　　　　　└同　第九八卷
}第九五卷　第九〇―囑累品(后囑累)　}第一〇〇卷

五、內　容

初めに述べた如く、本論は「大品般若」の註釋であるが、著者龍樹としては、その「中論」に於いて、在來佛教に對して根本的批判を與へ大乘の新たなる基礎を形づくつたが、然し未だ、云はゞ消極的部面のみで、その思想の積極的內容は開展されなかつた。これを發展し補充したものは正に本論に於て覗はれるのであつて龍樹晩年の圓熟せる思想が、茲に現はれてゐる。即ち般若の立場を守りながら、その展開し得らるゝ限りの積極的部面への口を開いたものであつて、龍樹の思想の立場より、成し能ふ限りの積極性をこゝに開示したと見られる。後來の佛敎は、こゝに一段落せる開展を、その新たな出發點として、それ／＼更に新たなる積極道を勇敢に創めて行くのであつて、云はゞ、佛敎開展史上の一屈折點をなすものである。されば、これを後來の佛敎とし

第五四—大如品　第七二卷
第五五—阿毘跋致品(不退品)
第五六—轉不轉品(轉不退輪品。不退輪品。堅固品)　第七三卷
同
第五七—燈炷品。(深奧品燈炷深奧品)
同　第七四卷
第五八—夢中入三昧品(夢行品。夢入三昧品)
第五九—恒伽提婆品(河天品)　第七五卷
第六〇—學空不記品(空中不證品)
第六一—夢中不證品(夢誓品)　第七六卷
同
第六二—同學品(慶愁品)
第六三—等學品
第六四—願樂品(淨願品。願樂隨喜品。願行品)　第七七卷
第六五—稱揚品(度空品)
同　第七八卷
第六六—囑累品(累教品)　第七九卷
第六七—無盡方便品(無盡品。不可盡品)　第八〇卷

第六八—六度相攝品(攝五品)　第八〇卷
同　(六度品)　第八一卷
第六九—大方便品(方便品)　第八二卷
同
第七〇—三慧品　第八三卷
同　第八四卷
第七一—道樹品
第七二—菩薩行品(道行品)
第七三—種善根品(三善根品。善根方便品)　第八五卷
第七四—遍學品
第七五—次第學品(三次品。三次第行品)　第八六卷
同
第七六—一心具萬行品。(一念品。一行萬囑品)　第八七卷
第七七—六喩品
第七八—四攝品　第八八卷
同
第七九—善達品　第八九卷
第八〇—實際品　第九〇卷

品	卷
第二四—會宗品	第五二卷
第二五—十無品	
第二六—無生品(無生三觀品)	第五三卷
第二七—天主品(問住品)	第五四卷
第二八—幻人聽法品(幻聽品。如幻品)	第五五卷
第二九—散華品	
第三〇—顧視品(三反稱讚品。三歎品)	第五六卷
第三一—滅諍亂品(滅諍品)	
第三二—寶塔校量品(大明品。寶塔大明品)	第五七卷
第三三—述誠品(述成品)	
第三四—勸受持品	第五八卷
第三五—梵志品(遣異品)	
第三六—阿難稱譽品(尊導品。稱譽品)	
第三七—校量舍利品(舍利品)	第五九卷
第三八—校量法施品(法施品。十善品)	第六〇卷
第三九—隨喜廻向品(隨喜品)	第六一卷
第四〇—照明品	第六二卷
第四一—信謗品(信毀品。泥犂品)	
同	第六三卷
第四二—歎淨品(嘆淨品)	
同	第六四卷
第四三—無作實相品(無作品。無作行品)	
同	第六五卷
第四四—諸波羅蜜品(遍歎品。百波羅蜜品。百波羅蜜遍歎品)	
第四五—歎信行品(聞持品)	第六六卷
同	第六七卷
第四六—魔事品(覺魔品)	第六八卷
第四七—兩不和合品(兩過品。不和合品)	
同	第六九卷
第四八—佛母品(報恩品)	
同	第七〇卷
第四九—問相品	
第五〇—大事起品(成辦品。大事品)	第七一卷
第五一—譬喩品	
第五二—善知識品(善智識教發心品)	
第五三—趣一切智品(驗知品。驗智品趣一切智)	

四七　諸佛稱讚其命(—釋論)
四八　十八空　……第三一卷
四九　四緣(—義)　……第三二卷
五〇　到彼岸(—義。—等)
五一　見一切佛世界(—義)　……第三三卷
同
五二　信持無三毒(—義)　……第三四卷
第二—報應品(奉鉢品)
第三—習相應品(習應品)　……第三五卷
同　……第三六卷
同　……第三七卷
第四—往生品上　……第三八卷
同　中　……第三九卷
同　下
第五—歎度品
第六—舌相品　……第四〇卷
第七—三假品
第八—勸學品　……第四一卷

第九—集散品　……第四二卷
同
第一〇—行相品　……第四三卷
第一一—幻人無作品(幻學品。作幻入品。幻人行作品)
第一二—句義品(句義無礙品)　……第四四卷
第一三—摩訶薩品(金剛品)
第一四—斷見品(斷諸見品。樂說品)
第一五—大莊嚴品(富樓那品。辯才品 大誓莊嚴品)　……第四五卷
第一六—乘乘品(乘大乘品)
第一七—無縛無脫品(莊嚴品)
第一八—摩訶衍品(問乘品)　……第四六卷
同　……第四七卷
第一九—四念處品(廣乘品)　……第四八卷
第二〇—發趣品　……第四九卷
同
第二一—出到品　……第五〇卷
第二二—勝出品
第二三—含受品(等空品)　……第五一卷

	同	第一〇卷
一六	舍利弗因緣	第一一卷
一七	檀波羅蜜	
一八	讃檀波羅蜜(一義 一品)	
一九	檀　相(一義 義品)	
二〇	檀波羅蜜法施(一義)	
	同	第一二卷
二一	尸羅波羅蜜(一義)	第一三卷
二二	戒　相(一義)	
二三	讃尸羅波羅蜜(一義 讃尸波羅蜜義)	
	同	第一四卷
二四	羼提波羅蜜(一義)	
二五	羼提婆羅蜜法忍(一義)	第一五卷
二六	毘梨耶波羅蜜(一義)	
二七	同	第一六卷
二八	禪波羅蜜	第一七卷
二九	般若波羅蜜	第一八卷
三〇	般若相	
三一	三十七品(一義)	第一九卷
三二	三三昧(一義。三三昧、四禪 四無量心、四無色定)	第二〇卷
三三	四無量(一義)	
三四	八背捨(八背捨、十八勝處、九次第定、十一切處)	第二一卷
三五	九　相(一義 九想義)	
三六	八　念(一義)	
	同	第二二卷
三七	十　想(十想釋論)	第二三卷
三八	十一智(十一智釋論)	
三九	十　力(十力釋論。釋菩薩欲遍佛十力)	第二四卷
四〇	四無畏(一義。釋菩薩四無所畏。四無礙智)	第二五卷
四一	十八不共法	第二六卷
四二	大慈大悲(大慈大悲當習 行般若波羅蜜)	第二七卷
四三	欲住六神通(六神通)	第二八卷
四四	布施隨喜心過上(隨喜廻向等 釋菩薩隨喜)	
	同	第二九卷
四五	廻　向(廻向等。廻向釋論)	
四六	善根供養	第三〇卷

然し「大智度論」なる題目は必ずしも唯一の名ではない。本に依て種々なる異名が附せられてある。「大智度論」、「大智經」、「大智度經論說」、「大智度」、「摩訶衍經」、「摩訶般若波羅蜜經釋論」、「摩訶般若波羅蜜多經釋論」、「摩訶般若波羅蜜優婆提舍」等これである。略稱としては、「大智論」、「摩訶般若釋論」、「大智釋論」等があり、更に略しては「大論」、「智論」「釋論」など呼ばれる。

四、構成

本論は大品般若經の註釋であるから、從て論の叙述も、先づ其釋するところの經文を順々に羅列し、それに添ふて註釋を加える方法を取り、別段、本論獨自の綱格に依るものではない。從て其思想も亦一の體系を形づくりつゝ說かれてゐるのではない。機會に應じて散說せられてゐる。但しその主要なる思想は、初品を釋する第三十四卷までの間に總論的にほゞ現はされ、以下はそれを補充するものである。たゞ其爲に、第二品以下に說明せられる名目なぞが、そのまゝ初品の中に縱橫に用ひられてゐるから、かゝる點は後に還つて參照せらるべきである。

いま、其全內容を目次すると次の如くになる。

僧叡序

初品

	(經)	(論に用ひし異題)	(論)
一	序……緣起	(緣起義釋、緣起論、緣起品)	第一卷
二	如是我聞一時	(如是我聞一時釋論)	
三	總說如是我聞	(釋如是我聞品、總說心如是我聞釋論)	第二卷
四	婆伽婆		
五	住王舍城	(釋王舍城品、住王舍城釋論)	第三卷
六	共摩訶比丘僧	(共摩訶比丘僧品)	
七	四衆	(四衆義釋論、四衆品、三衆品、三衆義、優婆塞・優婆夷)	
八	菩薩	(菩薩品、菩薩釋論)	第四卷
九	摩訶薩埵	(摩訶薩埵釋論、摩訶薩埵義品)	第五卷
一〇	菩薩功德	(菩薩功德釋論、菩薩功德品)	
一一	十喩	(十喩釋論、如幻等義)	第六卷
一二	意無礙	(意無礙釋論、意無礙品)	
一三	佛土願	(佛土願釋論、佛世界願、佛國願品)	第七卷
一四	放光	(放光釋論、放光品)	
	同		第八卷
	同		第九卷
一五	十方諸菩薩來	(十方諸菩薩來釋論、十方諸菩薩來品)	

その圓熟せる思想を表示するものである事が覗はれる。

　譯者、鳩摩羅什が、後秦に迎へられて長安に入つたのは弘始三年であつた。三寶興隆の念篤い興は彼を優待して僧叡、僧肇、僧契等の英才を彼の門下に集めて逍遙園及び西明閣に於て、專ら經論の翻譯に努めしめた。弘始六年四月大品般若四十卷の譯成るや、この釋論の譯出に努め、弘始七年十二月二十七日遂に完成した。實に西紀四〇五年であつた。僧叡の序文に依ると『經本既に定まり、乃ち此の釋論を出す。論の略本十萬偈あり、偈三十二字ありて、並びに三百二十萬言なり。梵夏既に乖き、また煩簡の異あり。三分して二を除いて、此の百卷を得。大智三十萬言に於て、玄章婉旨、朗然として見るべし』とある。また論後の附記によると『論の初品三十四卷は一品を解釋す。是れ全論の具本なり。二品已下は、法師之を略して其の要を取る。以て文意を開釋するに足るのみ。復た其の廣釋を備へずして此の百卷を得。若し盡く之を出さば、將に此れに十倍すべし』とある。卽ち、龍樹の原釋その儘を譯出せるは、經の初品を釋する第三十四卷迄であつて、以下は「秦人簡を好むが故に」羅什が自ら之を抄譯したものである。「三分して二を除いて」と云ふはその意であらう。從つて、龍樹の原論は約十分の一に短縮せられてゐる譯である。されば是を論に就て見ても、初めの三十四卷までは叙述は委曲を盡し、引例も豐富であつて、その思想的價値も甚だ重大である。

　但し、現存本には章句錯雜するところ多いのは遺憾とする處である。これは論本浩瀚なる故に流傳の間恐らく筆寫に錯誤を生ずるところあつたにも依るであらうが、現存せる諸異本の問に章句の餘りにも相違せる部分があり、更に、古く他に引用せられた章句などでこれを現存本に見出されざるものあるなどより推せば或は譯場より未定稿が、その儘散亂せしめられた事もあつたのではないかと思はれる。字句の異同は最近發掘せられた燉煌本に照しても重加するのみである。本國譯は諸本を參照しつゝ注意を加えたつもりであるが、猶將來補正をまたねばならぬ處少くないであらう。

三、題　目

　「大智度論」とは、摩訶般若波羅蜜多經 Mahāprajñāpāramitā Sūtra 釋論の意味であつて、摩訶 Mahā は大。般若 Prajña は智。波羅蜜 Pāramitā は「到彼岸」卽ち「度る」を意味する。されば梵名に作れば Mahāprajñāpāramitā(-Sūtra)-Śāstra となる譯である。卽ち、譯者、鳩摩羅什が、此論に先つて翻譯したところの摩訶般若波羅蜜多經を龍樹が親しく註釋したものである。

が、それに依つて打開せられ來つた新たなる立場は、やがて新たなる天地を佛教の上に拓くものでなければならぬ。事實後來の佛教一切は悉くその原基を茲に置いたものである、これを原基として所謂大乘諸思想は躍出して來るのであるが、この論はあたかも、はじめてその般若空の積極的部面を表示した事に依つて、後來一切の大乘佛教の直接の母胎となつたのである。龍樹は後世屢々「八宗の祖師」の名を以て呼ばれておるが、その原因は正に後世佛教諸思想が多く其の源をこの論の中に置くからである。此の點は後に至つて更に論ずるが、兎に角、かゝる事情に依つて、本論は佛教發展史上の一大屈折點をなしておる。一方過去の小乘諸思想は新らしき立場より改めて鳥瞰せられ、批判せられ、綜合せられ、他方、これを基點として新たに開展の途に上るべき大乘諸思想は、おの〳〵勇健なる其の萠芽をこゝに準備しておる。此の意味に於て本論はまた全佛教の總持とも呼ばれる。

のみならず、此の大冊に盛られたる豊麗なる註釋に於て龍樹は、甚だ多くの佛教語彙を盛り一々それに說明を加へておるから、宛然たる佛教の一大エンサイクロペヂアの役目をも遂げておる。然も、上記の如く本論が佛教發展史上に於ける一大分岐嶺をなす性質から、やがてここに夥しく擧げられたる多くの思想や經論に就ての研究に、所謂三角標的な確實なる基點を與へるのであつて、本論に依つて如何ばかり佛教思想史、經典史等の研究上に光明が齎らされてゐるか分らない。

この事は更に傳說、歷史、地理等の諸事項においても同樣であるが、龍樹の博大なる知識は、勝論其他の外敎の思想にまで及んでゐるから、本論は宛然として、また全印度思想史の中央に突起した三角標でもある。

二、傳　譯

この論は梵文原典を缺いておる。また龍樹の傳を檢しても是に當るものを確め得ない。たゞ傳に「廣く摩訶延を明かにして優婆提舍十萬偈を作り……」とあるのが、本論の僧叡序文に「論の略本十萬偈有り」とあるに相應し、また、本論を「摩訶衍經」とも譯するから、此等を綜合して、恐らく此の論を意味するのであらうと推定せらるゝが確かではない。この事と並んで他方般若經典が支那に傳譯せらるゝ度毎に增廣せられて行つた跡を顧み、大品の般若經を註せる此の論は、或は龍樹の眞作に非ざるべしと疑ふ者もあるが、論の壯嚴なる內容は是の疑を斷乎として拒んでゐる。從つて古來、これを眞作とするは一般の通說である。

たゞ此の論の中には、龍樹の他の著作「中論」を自ら引用しておるところがあるから、著作はむしろ龍樹の後期に屬し、

大智度論解題

一、佛教史上の地位

本論は摩訶般若波羅蜜經を龍樹が親しく自ら註釋せるものとして傳へらるゝものである。今これを佛教發展史上に於て眺めて見るに、もと釋尊の根本佛教はやがて時代を經過し、敎團として固定すると共に一方內に對しては敎團をよりよく統制するため、他方外に對しては其の主張を護正するため、漸次敎理體系の具備する必要に迫られて來たが、そこに現はれたものは、後世「有部哲學」の名を以て呼ばるゝものであつて、それはひたすら現象を巨細に分析し縱橫に配列することに依つて、その內に動ける因果關係を明かにし、併せて涅槃の常住を示すに努めたものであつたが、結局、多元論的實在論に傾向してしまひ。それは宇宙の諸現象を說明するには成功したが、その固定的配列のために現象の眞の流動性を顯はすを妨げ、猶且つ涅槃の境地を超世界所に置くことに依つてそれを消極虛無的に導き、遂に佛陀八十年の活潑なる實動の根據を見失ふに至つた。これに對する反動として、原始佛陀の精神的態度の徹底を以て立つて來たのが、所謂大乘の運動であるが、それの尖端をなすものは般若諸經典である。それは佛陀の根本主張たる無常・無我の思想を「空」なる主張に於て尖端化し、有部哲學の實在觀を縱橫に批判し碎破することに依つて、流動的生命を佛敎の上に回復し來らんとするものであつた。かゝる運動の中にその中樞をなすものは卽ち龍樹であつた。

龍樹の主著「中論」はひたすらかゝる般若空を徹底したものに外ならない。從つて、その思想の根元をなすところの般若經に向つて親しく註釋を加へたところのこの「大智度論」は、素より甚だ重要視せらるべきものであるが、更に龍樹は、かの「中論」に於ては、むしろ其の思想の消極的否定的部面のみを強く現はしたるに、この論に到つては更に進んで、かゝる消極的批判的部面より一歩を進めて批判の後に來るところの積極的肯定的部面を展開し出し來つたことに於て佛教史上甚だ重要な地位に立つものである。卽ち、中論が專ら般若經思想を中心とせるに對し、この論は、それ自ら般若經の註釋でありながら、更に進んで、法華經等の思想を包含し、それに依つて般若空を解してゐる。般若空は素より佛陀の無我思想を徹底することに依つて、後來敎團に生じ來たれる實在觀を打破し、その無礙なる流動性を回復するものであつた

目次

釋經論部 一

眞野正順譯

國譯一切經